KAIZO

改造

十一月號

1927

好辯偶感

雄辯家に哲人の少く、能辯家に僞善者の多いのは事實であらう。我々は我國でこれまで政治家の最大の資格として雄辯、能辯を是認し來れるのは時代錯誤の甚しきものと思ふ。そして雄辯政治家の母國であり、僞善紳士の祖國であると稱せらるる英國議會政治家に對しても此意味に於て少からず不滿の意を表するものである。天を向いて說教するものに眞の革新家なく、唇のうすいものの存在が社會の公益と並行した例が少い。雄辯、能辯の徒は大抵は二枚役者以下の徒として知られ、一日に五回も八回も蓄音器代用として活辯はだしの徒がどれほど鬻を嗄らし、幾百回喋舌らうがそれは畢竟お喋舌漢にすぎぬであらう。我國の雄辯家として指摘さるるものに一人として國家を背負うて立つ氣概あるものはないではないか、そして眞に腹の底から國家民人を深憂する經綸ある人もないではないか。ドコでも彼處でもベラ〳〵饒舌をふるひ、やたらな空手形を濫發するにとどまる。神經の總てが利にのみ敏く、そして宰相たるものも、總裁たるものも大丈夫の器宇氣概なく、下に弱く、上に弱し。自己の大信念なく、浮萍のごとく南へ北へいひなりはうだいである。今度の選擧に對する我大衆のあやまれる態度を見よ、その人や、その黨の平生を見ず、識見を見ず膽略を試さずして輕薄にもごまかし辯舌を信じ、ごまかしの空手形に眩惑す。瞬間の能辯が何だ。底しれぬ渦卷さの堤頭に立ち、すべてのめまぐるしい轉換機に立つて舊式の雄辯、能辯が何の役割を果しえよう。才人の三百的小理窟や、神經衰弱的智慧の小出し、わけても手振り首振りの能達辯はこの能達辯にこの深刻な時代の歩きに不釣合のものであることは我々を俟たずして明かだ。下つ腹の力と度胸のあるものでなくてはこの時局がどうして擔當されようか、我々は勿論演說文化の總てを抹殺し、雄能辯の總てを否定するものではないが、蘇張の辯力があまりに偏重さるるの弊を厭ふものだ。好辯の宰相は言を左右にして憲政會内閣をつぶした。肥料分配の詭辯は政友會内閣の信用をいやが上に輕くした。我々は今後多難の時局を擔當し大業を遂げねばならぬ身だ。上つすべり、現代的、さうした浮薄な潮流を冷かに、そして敢然と乘り切つて深沈大度の渕を涵ひ、鍛ひ、湛へて偉大なる役割に應じ得なければならぬ。好辯、多辯、能辯の徒をおきざりにして我々はグン〳〵深く強く這入つて行かねばならぬ。

教育の政治化

森戸辰男

一　政治闘爭と教化闘爭

府縣會選擧における無產諸黨の成果は、大規模な政治闘爭における初陣の戰績としては、決して報ひられざるものでも悲觀すべきものでもない。否、無產諸黨が赤手空拳で、おまけに社會的經濟的政治的に幾多のハンヂキアップを付けられながら、支配的勢力を代表し積年の地盤の上に立つ有產諸黨と戰うて、あれだけの成績を勝ち得たといふとは、最少限度の顯現によつてやがて表面に出ようとする巨大なる潛勢力を暗示する所のむしろ誇るべき勝利であり、而も小成の陶醉に浸るを許さず、來るべき政治闘爭への倍舊の戰意と努力とを刺戟する所の健實なる勝利である。且つ政治的効果から言つても、政綱政策の積極的實現よりも、其爲にするアヂテイションを强調すべき現勢の下にある無產黨にとつては、當選者の頭數のみが問題ではないのである。

だが、同時にこの成績は無產政黨の新興勢力の現勢について漫然たる自己陶醉に陥つたり、とてつもない恐怖を感じてゐたところの、數多の敵味方の豫想を裏切つたことも亦疑のない事實だ。物事を單純に考へれば、或は次のやうな結論を引き出し得られるかも知れぬ。我國民の最大多數を形造るものは、たとへ純然たるプロレタリアでないとしても、無產にして勞働する民衆と並に之と境を接する小市民層とである。從來政治の圈外に置かれてゐたこれらの下層乃至中層に屬する國民大衆に對して、普選は曲りなりにも一應の政治的發言權を與へたのだ。さうしてこの新なる有權者の多くは恐らく自分だちの現實なる生活利益に從うてこの新なる政治的權利を行使するであらう。ところでこの下層乃至中層に屬する國民大衆の現實なる生活利益を代表することをその本來の使命としてゐる政黨はと云へば、もちろん無產政黨

をおいてはほかにあり得ない。すべてこれらの歸着するところは疑ふべくもない次の一事――即ち有産階級を代表する既成政黨が非常な打撃を被り、無産勤勞階級を代表する無産政黨の目ざましい擡頭を見るに至るといふことだ。發展傾向の表示としてはたしかに間違つてゐないところの此の政治的豫測を以て、彼等は直ちに過般の府縣會選擧を測定しようとしたのである。

然るに現實はどうであつたか。大勢から云へば、資本家（と地主）階級の政黨である二大有産政黨の牙城は依然として崩れなかつた。兩政黨所屬者の多數潜在してゐると推定される中立者を全然除外しても當選議員の約九割は政友、民政の二大政黨のものであつたではないか。ただ僅かに二分餘のみが無産政黨のかち得たところであつた。（大毎社の調査による九月廿九日夜半までに知られた全國二府廿九縣の選擧結果に從へば、當選議員總數一一九〇名中、政友は五五〇名で約四割六分、民政は四八三名で約四割、無産諸黨は二十七名で約二分二厘である。）のみならず當選率から云うても、二大有産黨のそれは六割以上であるのに、無産諸黨のそれは一割を越ゆる僅かばかりの程度にしか達してゐないのである。（同じ大毎社の調査に從へば、政友の當選率は六割四分弱民政のそれは六割二分強であるに對し、無産黨のそれは一割三分強である。）國民の最大多數である無産にして勞働する大衆は府縣會において極めて僅かなる少數者としてしか代表されず、之に反して國民中の極めて僅かなる少數者である資本家及び地主の階級は府縣會においては依然として壓倒的多數を以て代表されたのだ。府縣會選擧の結果はたしかに既成政黨の將來に對する粗朴な悲觀と共に、無産政黨の生長に對する粗朴な樂觀を一掃し、同時に普選の獲得は被壓階級の解放闘爭における勝利の一大記念塔ではあるが、階級闘爭の無用化でも終結でもなく、却つて不撓の努力によつて戰ひ取らるべきその新局面の展開であるといふ正しい認識を確立するの効果があつたと思はれる。

では、國民の最大多數たる被壓被搾取民衆の利益を代表することを其本來の使命とする無産政黨が普選にも拘らず現社會の客觀的構成に適應する成績を擧げ得なかつたのは何が故か。その理由としては色々な事柄をあげ得よう。無産諸黨には傳來の地方的地盤のないのは勿論、大規模な選擧戰は今回が初めての經驗だ。從つてそれに免れ難い樣々な準備の不定や見込違ひがあつたに相違ない。また、無産政黨の不幸なる分裂とその同志打ちとが無産階級代表者の當選率を著しく低めたとも周知の事實だ。（例へば關西二府十八縣において無産諸黨は――大毎社の調査に從へば――當選者總數中僅かに三分弱の當選者をしか出してゐないにも拘らず、得票の割合においては投ぜられた總票數の五分三厘弱を獲て居る。從つて、無産諸黨の各自において候補の濫立なく、且つ諸黨の間に共同戰線が布かれてゐたなら、無産黨はその當選者を約倍加し得る可能性を持つてゐたのである。なほ普選法の不徹底が無産政黨を不利に導いたことも疑ひなからう。例へば、二年の居住條件は就中移動常ない都市の無産者から少からぬ選擧權を剝奪する結果となつた

らうし、また比較的高い制限年齢（二十五歳）の結果無産政黨の黨員及び同情者——かくの如き者に青年者が多いのはもちろんだ——の多くは單に選擧權を持ち得なかつたばかりか、選擧事務に與かることさへもできなかつた。選擧日公休制が認められゐないことも亦同樣な結果に導いたに違ひない。これら及其他數々の事情が過般の選擧において無産政黨の戰績に不利な影響を及ぼしたであらうことは恐らく何人も首肯する所であらう。併し、假りに無産諸黨の選擧準備に遺漏なく、その運動方針に過誤がなく、彼等の間に協同戰線が成立したものと想像し、更に選擧人の居住制限が短く、年齢制限が低く、選擧日が公休であつた等、等と假定して、斯樣な事情の下に今回の選擧が行はれたとしたらば、果して選擧成績は逆轉して無産諸黨が、よし壓倒的と行かぬまでも、相當な多數を占めることができたらうか。否、私の見る所を以てすればそれは、到底不可能なことであつたのである。

選擧戰はすべての他の領域における階級鬪爭と同じく現實の歷史的舞臺の上で、權力的、經濟的、思想的背景の下に行はれるもので、白紙の上に勝手に線を引くやうなわけに行くものではない。權力と財力とは普選法による選擧戰においても亦依然として直接間接に重大な役割を演じる。而もこの金力と權力との分配は普選の實施によつて何等重要な變更を受けることなく、依然として有産諸黨の側に著しく有利であるのは自明のことである。官權が治維法其他の暴壓法制によつて絶えず無産政黨の言論行動を脅威し、、、、、多數な警官隊を繰出して演說會を威嚇し、種々ポスタアや印刷物を沒收し、種々の名義の下に黨の活動分子に拘束を加へたこと等、等は、支配的地位にある有産階級がその權力を、、して無産政黨に加へた不當な彈壓であり、これが選擧の成績の上に少からず作用したであらうことは想像するに難くない。加ふるに、多くの無産黨の候補者にあつては保證金の調達がやつとのことで、もちろん潤澤なる運動資金のありよう筈がない。例へば、一枚のポスターや宣傳ビラも印刷できず、有權者への一回の立候補挨拶狀も送ることのできなかつた候補者すら少からずあつたくらゐだ。これらの財力上の不如意によつて無産黨の活動と發展とが宿命的な掣肘を被つたことも亦明白である。かやうに無産諸黨は有産諸黨に比し權力と金力において格段に不利益な地位に立たされて居り、さうしてこの事實はてき面に選擧の成績に反映せざるを得ないのである。

けれどもまた他面から考へて見れば、被壓被搾取民衆を代表する現在の無産政黨はその本質上權力と金力とからは最も緣の遠い政黨である。むしろそれは權力と金力との、、、支配に對して、權力と金力とを持たざる者、即ち被壓無産大衆の政治的勢力をその根據とするものだ。從つて、無産政黨は權力と金力との點においては、有産政黨と有効に競爭し得べき見込もないし、又左樣な領域で彼等と競爭すべきものでもない。（尤もこのことが無産政黨の生長繁榮のために政治的自由の最少限と政治資金の最少限とを必要とすると、いふ明瞭なる道理を否定するものでないのはいふまでもないが）。無産政黨はそれが被壓被

搾取民衆の生活利益を代表する政黨である限り、その政治闘爭において權力の干渉と金力のハンヂキャップとは豫めしつかりと覺悟し十分に勘定に入れてかからなければならぬ筈である。だから、若し無産政黨が彼等の當選歩合が豫期の如く實現されなかつた主要原因を官權の選擧干渉と運動資金の不足に歸したとすれば、それは聊かをかしなものではないかと私は思ふ。もちろん若し無産諸黨の選擧運動にヨリ廣汎な政治的自由が許され、彼等にヨリ潤澤な資金が與へられたならばそれが選擧の結果を無産黨にとつて有利に展開したであらうことは何人も拒み得まい。しかし、私はこの有利なる影響ですらもなほ過般の選擧の成果を根本から顚倒させる程度のものではなかつたらうと考へる。何故であるか。

なるほど、選擧競爭に於ても亦經濟的特權と政治的權力とがその勝敗を決する主要な力である。けれどもそれは消極的に考へてさう言へるのみで、直接に選擧干渉と運動資金の豐富とだけが選擧戰の成敗を定める決定的因素だといふとはできない。金力と權力とは絶えず社會生活の諸々のカラクリを通して有意識又は無意識の裡に民衆の心意に作用し、彼等の感じ方考へ方を有産階級に都合よく形造りつつある。換言すれば一定社會の物質的生活の世界における支配階級はまた同時にその精神生活の世界をも支配するのである。だから、斯樣な社會に生ひ立つた民衆は屢々彼等の敵對者であるところの支配階級の心を以て心として、他人の強制を待たずとも、自らの自由意志に從つて支配階級に忠誠を拔んでることになる。一般に、支配秩序は直接に强力によつて維持されてゐるといふよりはむしろ、斯の如き民衆の心意によつて維持されてゐる。さうして過般の選擧に方つても亦この同じ民衆の心意が作用したのである。

今日のやうな階級社會では被壓被搾取大衆は屢々自階級の現實的生活利益の何者なるかを知らず、その卑賤と貧困との悲慘なる經驗の唯中にありながら、而も往々自ら被壓被搾取階級であることをさへ明白に意識することのできないものすらもある。彼等の多くは肉體においては被壓被搾取的階級の生活をしながら、精神においては支配、搾取階級の考へ方感じ方に生きてゐるとも云はれよう。從つて、いくら無産政黨が被壓大衆の現實的生活利益を標榜して立つても、被壓大衆其者が自分自らの生活利益に目醒めてゐない限り、もちろん前者が後者からの後援を得られよう筈はない。嘗て豫言者が嘆じたやうに、吾等笛吹けども汝等踊らずの嘆を繰返すのみだ。それのみか、支配階級の利益を以て自らの利益と錯覺する彼等の中には、この支配階級と支配秩序に肉薄する無産政黨をば自分たちの仇敵と取違え、鋒を逆にして眞實の味方に打擊を加へることが自己の良心の命令であると考へるやうなむしろ憐むべき階級反逆者さへも少からずあるのだ。大衆が自らの現實的利益、階級意識に目ざめないところには、いくら多くの被壓被搾取大衆がゐても、其處では無産政黨は決してその領土を開拓することはできないであらう。此度の選擧において無産政黨の當選者が割合に少

なかつた主要原因は實に茲にあつたのだと私は思ふ。即ち、國民の大多數をなすところの被壓被搾取大衆が未だ自らの現實なる生活利益に目ざめず、はつきりした階級意識が彼等の間に未だ十分に滲透してゐなかつたからである。

政治闘爭における無産階級の、從つてまた無産政黨の勝利の一主要條件は、被壓階級の「意識の改革」が如何に進展し、彼等の間に「階級意識」が如何に滲透したかといふことである。それ故にまた有産階級の從つて有産政黨の勢力維持の一主要條件は、社會的迷信が如何に被壓階級を支配し、現實的生活利益が如何に彼等の目から隱蔽され、階級意識の覺醒が如何に阻止せられてゐるかといふことである。かくて普選の土臺の上に行はれる政治闘爭の發程と共に、國民大衆の精神に對する闘爭が特別の重要を持つて來、從つてこの領域における有産階級と無産階級との闘爭も亦愈々激烈を加へ來るであらう。

今日無産政黨の或者はその民衆の心意に對する闘爭を「曝露」と呼んでゐるが、それは誠にふさはしい名稱だ。それは嘗て革命的ブルジヨアが自らの人心教化の運動を「啓蒙」と名づけたのに照應する。支配的イデオロギイがかぶせてゐる虛僞の表皮を剝ぎ、眞理の白光に曝らしてその眞相を露呈し、これによつて支配階級的教化の呪縛をぶち破ることだ。支配階級にとつては民衆の前に自分自身とその立つてゐる社會的カラクリとの赤裸々な正體を曝露されることほど恐ろしいとはない。そこで彼等は或は强力によつて、或は宗教道徳の力を假つて或は深遠に見えるスコラ的術學によつて事物の眞相を國民大衆から「隱蔽」し、自階級に都合のよい迷信、錯覺、虛妄等々を以て彼等の心意を充塡しようと努めるのである。

個々人の心意に働きかけて之を特定の意識にまで形づける有意的作用を廣く教育又は教化と呼ぶならば、國民大衆の精神に對する闘爭は之を教育＝又は教化闘爭と名づけることができる。この教育又は教化闘爭は政治闘爭及經濟闘爭と列ぶ階級闘爭の重要なる部面であり、そしてこれら兩者、特に政治闘爭、わけても普選を背景とする政戰と密接な關係に立つものである。教育が斯樣に階級闘爭の見地から見られ、その有力なる一部面一手段であると考へられ、さうしてさやうに取扱はれるやうになるといふことは、教育が政治闘爭の圈内に引き入れられること、他の語を以て云へば、「教育の政治化」を意味するのである。それ故に階級闘爭の政治的發展と共に教育の政治化は愈々顯著となり益々激化し行く運命にあると考へられる。

二　府縣會選擧と教育問題

以上述べ來つたやうな時勢の趨向の下に、我國における公的教育の政治化は如何に進展しつつあるか。

過般の府縣會の選擧において、民政黨が「義務教育費中教員俸給全額の國庫負擔」を一枚看板にして、政友會の「地租委讓」の向ふを張つたことは人の知るところだ。もちろん、これは地方負擔の輕減を餌

にして地方の選擧民を釣る手段として、云はば裏道から教育が政治の圏内に引き摺り込まれたのであつて、教育其者が眞正面から問題とされたのではない。けれども、濱口總裁の演說によれば「此主張の根據はその經費の性質上國民教育といふ國家當然の實務遂行に伴ふものであるといふ點にあり」そしてその實行は「小學校教員の品位と志操とを高め教育の効果に貢獻するところまた少くない」のであるから、俸給全額國庫負擔の主張は全然財政的意味のみを持つてゐるのではなく、附けたり的にではあるが、それに關聯して國民教育自身も亦問題にされてゐるのである。

この民政黨の提唱に對して政友會はもちろん默つてはゐない。早速「聲明書」なるものを發表して、民政黨の主張は「確實なる財源をあげてゐない」といふ理由からそれを以て選擧に臨んで國民を欺く「空論」と罵り、例の地租委讓の自畫自讚した上、なほお手盛りの「實業補習教育費の國庫補助の新計畫」を披露してゐる。この財政的見地からする反對に加へて、總裁田中首相は更に國民教育の本義から民政黨の主張を反駁して云ふ「そもそも國家の義務教育なるものは國家の事業であるとともに、また市町村の事業である。その精神が實に國民自由の源泉でありまた國民發展の根幹である。小學校教育をして各地方の實狀に適應せしむべき理由もここに存する。即ち(?)民政黨の所論は義務教育の根本精神を破壞するもので、我々の絕對に反對するところである」と。(政友會愛知支部大會における田中首相の演說)田中總裁の口吻に從ふと民政黨の全額國庫負擔の提唱によつて「義務教育の根本精神」の存亡が政爭の渦中に投ぜられた、といふたいしたことにもなるわけである。

教員俸給の全額負擔の問題が二大有產政黨の政爭の中心問題となつた次第はほぼかくの如くであるが、このほか現政府は過般の政治季節において教育制度の改革に關する盛り澤山な手形——不良手形や空手形をも混へて——を頻々として發行した。曰はく入學試驗制度改正要綱曰はく夜間中學及高女の許可、曰はく卒業特權の廢止、等々……。尤もこれらの教育上の諸問題は直接に府縣會選擧における政戰の目標とはならなかつた。けれどもこれらの提唱は教育革新の問題を政治圏內に投じたことを意味する。さうして教育はその範圍において既に可能的に政治化されたとも云へるであらう。

三　有產政黨の教育綱領

かやうに教育に關する色々な問題が突然に市民的政治の表面に頭を出して來たのは、單に政黨者流の選擧戰における驅引から出た偶然の現象ではない。その由來するところは遙かに深い。

民衆の現實的な生活要求の代りに、時代遲れの封建的精神によつて指導せられて來た我國の官僚的專制的な教育は必然に形式主義劃一主義に流れざるを得なかつた。かくして民衆の實生活から乖離した教育は、一般民衆の現實的生活要求に應ずるものでないのは、もちろん、貧

本家的能率の見地から見てさへもやがて時代遅れなものとならずにはゐない。我國の教育は現に此の如き段階に到達してゐるのである。かやうな事態の下に我國の有産諸政黨は社會と教育との乖離に基づく國民大衆の不滿を政治的に把握し、各黨それぞれの教育綱領を編んで、その旗印の下に教育の刷新を實現すべく着手するに至つたのである。

既に一昨年七月、政友會の政務調査委員會は教育革新の大綱を發表して、(第一)國民教育の革新、(第二)政治並に産業教育の普及徹底、(第三)青年訓練所、(第四)學校卒業者の特權廢止、(第五)文部省官制の改革、(第六)教育制度の法律化の諸項を擧げ、就中、第一項については義務教育年限の延長、學校の經濟的經營、試驗制度の改廢、卒業者の進路指導、貧困兒童の救濟、師範教育の改善、義務教育の部分的國庫負擔と共に國民教育の「內容の改善」をその冒頭に掲げ、「(一)劃一の弊を打破し都市農村等の環境に應じ適切なる教育をなすこと(二)多岐形式の學弊を廢し國民の實生活に適したる教育を行はしむること(三)精神教育に重きを置き人格品性の向上をはかり、特に皇室國家に對する觀念を涵養するがため一層の力を盡すこと(四)憲政自治に對する教養を深くし、公民的訓練に留意すること、即ち高等小學校中學校の上級において公民科を特設すること(五)産業における理解を進め之を尊重力行する風尚を養ふこと」を主張してゐる。本年五月田中首相が教育聯合會において演說して「六十年間この傳統を踏襲し來りたる間に、我國教育の內容は自ら劃一に失し、形式に流れ、つひに國民生活の實際に迂なるの弊に陷り、その根柢また淺からざるやに認めらる。したがつてこの現狀を改め、努めて教育の地方化、實際化を計り、また形式劃一の弊を矯め教育をして大に生氣あらしめ、ますますその效果を增大ならしむることは正に現代に順應すべき教育改善の基調となるべきものと信ず。政治は民意にもとづきて行ふべきものである。教育においても當局の獨斷專行を深く戒しむべきことと信ずると共に、教育者諸君も亦常に廣く社會一般の要望を省察せられ、社會一般も亦教育者にのみ委ねて顧みざるがごときことなく、教育界と一般社會とが相ともに協力して我國教育改善の大業を遂行せんことを切望してやまざる次第である」と言うてゐるのは全然上揭の教育革新大綱の精神においてであり、更に首相は語をついで「現內閣は教育改善をもつて內政上の重要政策となし、前陣の方針にもとづき漸次教育革新の方策を斷行致したい考である」旨を闡明してゐるのである。

他方民政黨はと見るに、同黨はその五項の政綱の中の第四に教育問題を掲げて、「品性を陶冶し獨創自發の個性を啓き、學習の機會を均等にして、進んで教育の實際化を期すべし」と言うてゐる。更に同黨の創立「宣言」に從へば、「立憲民政黨は時代の趨勢を察して教育を刷新し、日新の社會に處し、品性あり實力ある國民を養成せんことを要求する、夙に眞理を熱愛するの精神を鼓舞し、一面固陋なる思想の拘束を除き、他面輕薄なる妄斷の習弊を去るはいはゆる思想善導の眼目である。就學上の機會を均等にするは國民教育の要諦であり、模倣、詰

込の弊を排し、獨創、自發の力を養ふは踏達有爲の個性を長ずる所以である。立憲民政黨は斯くの如くにして教育制度を改善すると共に、社會を學園と化し、經驗を師友となさんがため、社會と學校との連絡を緊密ならしめんことを主張する」のである。

最近に至り、無産政黨はともあれ、有産諸政黨が揃も揃つて教育革新——どれだけ眞面目にその實現を努力するかは別として——を大聲疾呼するに至つたことはまことに注意すべき現象であり、それは先きに述べたやうに今日の公民教育が既に、一般民衆の現實的生活要求の見地からは勿論のこと、資本家的立場よりするもなほ「國民生活の實際に迂なるの弊に陷り」時代の要求に背馳したものとなつてゐることを表章するものにほかならぬ。そこで有産諸黨は之を「内政上の重要政策」として自己の政治圏内にひき入れ、以て上記の意味における教育の根本的改革を斷行せんことを期するのである。茲に政治の教育化の一面がある。

四　自由主義化としての教育の政治化

有産政黨によつて企てられたこの教育の政治化は社會的に何を言ひ表はしてゐるか。

教育の政治化は讀んで字の如く、教育が超政治の神聖區域から政治的闘爭の俗世界に引き卸されることを意味する。有産諸政黨が我國の政治において重要なる勢力を持つに至つてからも、久しい間それによつて侵入される程度の少なかつた國政の一定分野がある。軍事及び司法と列んで文政がそれだ。その理由を尋ねて見るに、私の考ふるところでは、一つには恐らくこれらの國政の分野が大藏、農林、商工、鐵道、遞信等の如く手頃な利權の數々がぶら下つても居ず、內務の如く黨勢擴張に直接役立つ手頃な權力手段を包容してもゐないことに依る利權漁りと黨勢の擴張とを以て最强の動機とするが既成政黨が比較的それに緣遠いこれらの諸分野に目をつけることの少なかつたといふことは容易に想像し得られるところである。

だが、このほかにヨリ重要な第二の理由がある。それはほかでもない、陸海軍と司法と文教とは依つて以て支配秩序が維持されてゐる物理的並に精神的前提である。それは有産階級を代表する既成諸政黨の共通事項であるのみならず、其他の點においては必ずしも利害がすつかり一致してゐるわけではないところの封建的官僚軍閥との共通事項でもある。從つて既成政黨は黨勢擴張とも利權獲得とも比較的緣遠いこれらの諸分野をば政治的中立地帶として官僚軍閥の手に委ね、彼等をしてこれらの支配秩序の共同的前提を共同的利益のために管理し支配せしめることに强いて反對すべき理由を持たなかつた。さうしてこれはまた未だ侮り難い政治的勢力を持つてゐたところの軍閥官僚に對する彼等の妥協條件の一つでもあつたと考へられる。

然るに、今や有産諸黨は一齊に教育の革新を叫び、それが自分たちの政治の繩張りの中に入り來つたことを宣言するに至つたのである。從

つてこの宣言は自己の勢力に自信を加へた資本家階級が少くとも文教のことを超政黨的官僚の手に放置せず、之を彼等から奪うて直接自己の掌中に收めようとする希望乃至決意を表白したものと見なければならぬ。それは資本家（地主）階級と封建的官僚閥との間の勢力均衡の上に起りつつある形勢推移の反映である。

有産政黨は教育を市民的政治の圏内に引き入れることによつて、先づ、教育の事項を封建的官僚から奪うて自階級の掌中に收めようと意圖するものであることは前段の如くであるが、彼等はかくして自分達の繩張の中に落ち來るべき教育をどう形づけようとするのであるか。換言すれば、有産政黨は教育のこの政治化によつて如何なる教育上の革新を實現しようとするのであるか。この點において特に注意すべきことは、二大有産政黨の教育革新の主張が多少の色合や枝葉の點の差異はともかく、その根本趣旨と重要對策とについては殆んど相合致してゐるといふ事實である。即ち兩政黨の教育革新の要旨はいづれも、一方では、從來の教育制度における特權的差別的缺陷を矯めて、「教育上の機會均等」を確立し、他方では或は「劃一主義形式主義」のために、或は「模倣詰込」のために累されて生活の實際からかけ離れた「教育の實際化」を期するにある。この要求は他の形で言ひ表はせば、現代教育の制度及精神の中に未だ過分に殘存してゐるところの封建的、專制的要素を取除くことによつて教育の資本主義化の完成を期せんとするものと言ふことができる。

明治維新に際しては革命的であつた我國の教育は、田中首相でさへも承認してゐるやうに、其後退嬰的な官僚閥の手中において次第に硬化し、駸々たる社會の進運に順應することができずに却つてそれからすつかり取殘されて了つてゐる。我國における資本主義の進展は、民衆の間に力強い民主的欲求を喚起し、あらゆる方面における特權の撤廢を要望してゐるに拘らず、封建的臭味の強い我國の官僚は教育に關聯して存在する色々の特權を撤廢することを中々承知せず、教育上における國民の機會均等の實現は依然として停頓してゐる。有産諸政黨は先づこの方面において封建制度の政治的原理である特權の代りに、資本主義の政治的原理であるところのデモクラシイ、即ち所謂機會均等の原則を確立しようとするのである。他面において、我國の在來の教育は官僚の手にあつて動ともすれば官吏學者其他云はば非生産的遊民を養成するやうに作用し、被教育者の勞働意志を弱めて彼等を生産階級から奪ひ去るといふ甚だ忌むべき傾向を示した。換言すれば、「産業における理解を深め之を尊重力行する風尚を養ふこと」を怠つてゐたのである。と同時に、斯くの如く教育によつて不自然な「向上心」を刺戟されなかつた殘りの者に對しては、我國の官僚的教育は之を命[illegible]從ふ「、、、、、」に育て上げることに餘りに熱心にして、彼等を「獨創自發の個性」を持つた能率ある勞働者に仕立て上げることを多かれ少かれなほざりにして來た。此の如き教育は資本家國家に對する「、、、、、」一般を造るであらうか、今日の資本社會の要求する資本

的政治に貢献すべき有能なる勞働力を養成する所以ではない。それ故に、此の如く非實際化した教育は「實際化」されねばならぬ。換言すれば、國民の教育は實社會の要求に應じて、勞働意志の盛であり、且つ合理的な勞働知識及訓練を備へた多數の勞働する人間を仕立て上げることを使命としなければならぬといふのである。

要するに、教育の政治化は吾々の目前に展開された形において見れば、有産階級が教育の決定權を自己の手中に握り、之をヨリ資本主義化しようとするところの政治現象である。詳く云へば教育における特權的差別を撤廢して其處に資本主義の政治原理である形式的デモクラシイを確立すると共に、遊民教育、惰民教育のそしりを免れ得ない非實際的教育を改めて、資本家社會の要求に應ずるところの生産的教育たらしめんとするのだ。この意味における資本主義化を自由主義化と呼ぶことを許さるるならば、有産政黨の標榜しつつある教育の政治化はまさに教育の自由主義化である。さうしてその限りにおいては教育の政治化は一つの進歩である。

五　現代教育の政治的特質

教育の自由主義化はたしかに進歩的である。資本主義はそれが自由主義的である限り、一方にたとへ形式的のものとは云へ、ともかくデモクラシイを制度化し、他方に生産力を刺戟してそのすばらしい増大に貢したる點において、封建制度に比べて遙かに進歩的である。さうして有産階級は彼等の標榜する教育の政治化によつて資本主義のこれらの二大長所を教育の範圍に實現せんことを期するのである。資本主義が封建制度に對して一般の文化的發展であるやうに自由主義的資本主義教育は封建的色彩の濃い官僚主義的教育に對して一般の文化的發展を示すものといふことができる。有産政黨が教育の政治化に當つて標榜し力説するところはまさに資本主義化のこの進歩的側面である。だが、餘事に關しては沈默こそ彼等にとつての黄金である。

では有産諸黨による教育の政治化の社會的含蓄は果してこれを以て盡きてゐるか。教育の資本主義化はこの自由主義的側面以外にわざと沈默され隱蔽された他の側面を持たぬであらうか。教育の政治化を通して實現さるる其資本主義化が進歩的であるといふのは、官僚主義的教育に對してであることは繰返し述べ來つた通りである。しかし今日資本家階級にとつて最も恐ろしい眞實の競爭者は最早官僚軍閥――ありし日の御威光の手前もよそに膝を屈して資本家階級の御願を乞ふことを辭しないほど落ちぶれかけた官僚軍閥ではなくて、階級鬪爭の旗の下に潮のやうに押寄せて來る新興の無産階級である。さうしてこの無産階級は彼等自身の教育革新の綱領を持つてゐる。しかもそれは有産諸黨がやつと自らの手で完成しつつあるところの教育の資本主義化の反動的特質を指摘し、その克服を眼目となすものだ。有産政黨の側における教育の政治化はこの無産階級の政治的進出並にその教育上の要求に對して何を意味するか。此の側面の檢討によつて吾々は有産政

黨による教育の政治化の裏にかくされたる第二の、ヨリ根本的な「教育の政治化」に出喰はすのである。

私は先きに教育の政治化を說明して、教育が超政治的な神聖地帶から市民的政治の俗世界に引き卸されることを意味すると書いた。それは均しく有產階級を代表する有產諸黨間の相互關係においてはまさにその通りかも知れぬ。がしかし無產階級の見地から見て果して同じことが云へるかどうか。教育はそれが有產諸黨によつて政治の下界に卸されない以前、即ちそれが所謂神聖地帶に留まつてゐた時に、既に政治的ではなかつたか。もちろんこの場合に政治的といふのは有產諸政黨間の政治鬪爭の對象であると言ふ意味においてではなく、ヨリ根本的に、支配秩序維持の重要手段としての機能を果してゐるといふ意味においてだ。私の見るところを以てすれば、教育は有產諸黨の共同利益として彼等相互の政爭を超えてまだ官僚の掌中に留まつてゐる時において既に過分に政治的特質を帶びてゐたのであつた。換言すれば、教育は夙くの昔から現存階級秩序を維持する精神的手段として作用しつつあるのである。

現代の教育がかく統治手段として作用する態樣に二通りある。その一は、教育教化の分配を主として所有の多寡に從つて決定させることによつて、所有の特權を教養の特權と結び付け、從つて有產階級即ち有識階級、無產階級即ち無識階級たらしめることによつてであり、その二は、被支配階級に對して、この階級自身の利益に適應したものでも又全社會の要求にふさはしいものでもない、何よりも先きに支配階級に都合のよい教育を施して被壓階級の心意を腐にし、そして敵對的利害關係にある支配階級に對する任意的奉仕者たらしめることによつてである。

所謂機會均等に近い教育制度にも拘らず、現代における教育が實上甚だ不合理な標準によつて分配され、それが結局所有の特權に表裏する教養の特權となり、それこのことが更に現在支配秩序の改革化に貢獻しつつあることは改めて書き立てるには餘りに顯著な事實である。之に反して現代教育の支配階級的特質については、そんな言草はツムジの曲つた被壓階級の敵本的な誣說だくらゐに考へて居る連中が今日なほかなりに多いらしい。それ故に、私はこれまで機會ある度にこの種の蒙を啓くことに努め來つたのではあるが、更に讀者の許を得て嘗て私が他の場合に論じたところを繰返しつつこの點を強調して置く必要を感ずる者である。

現代の教育、就中、小學校教育を通じて國民に確保せられる教育はその分量において支配階級本位であるだけではない。進んで無產大衆に惠與されるこの貧弱な最少限の性質を調べて見ると、吾々はその支配階級的色調の更に濃厚なのを見出すのである。總じて支配階級の支配下にある國民教育は何處でも二つの役割を演じさせられてゐる。即ち政治的支配の手段として玆に經濟的搾取を維持促進する手段としての役割だ。從つて小學校で施される教育も亦この兩役割によつて特徵

づけられる。先づ第一は政治的支配手段としての役割だが、この場合學校では現存する資本主義的社會及國家秩序は自然的な不變な、實現し得べきあらゆる社會秩序の中最善のものであること、それを代表する支配階級は慈愛と正義と叡智と威力とを持つところの眞正なる優者天賦の指導者であること、從つて國民大衆の義務はこの現存秩序を神聖なるものとして尊重し擁護し、支配階級をば彼等の師友として慈父として敬慕推戴することに存することが教へられると同時に、之に反する一切の思想學說は異端邪說、虛僞迷妄として排撃され校門の彼方へ追出される。第二は經濟的搾取を維持促進する手段としての小學校教育の役割であつて、歸するところそれは無產大衆を能率高く而も從順なる賃銀奴隷として馴致することである。それがためには民衆は何を措いても勤勉努力の美風と節約質素の良俗とに躾けられねばならぬ。つまり、民衆はできるだけ長く、できるだけ懸命に働き、自分ではその所產のできるだけ僅少な部分を費すこと、換言すれば、低い生活程度で、結局できるだけ廉い賃銀で、滿足し、できるだけ澤山な餘剩を搾取階級のために殘すことが必要だ。かくの如き意味での「勤勉力行」は小學校教育の特に反覆力說する所である。次に、賃銀奴隷はその主人に對して從順であり、その命令の默從者でなければならぬ。これがために學校教育は彼等に「恭順」「信實」を教へ、「規則ヲ守リ協同ヲ尙ブノ習慣」を涵養することに努力するのである。

かく小學校の社會的任務は無產階級の子弟を馴致して從順にして能率ある產業上並に文字通りの下士卒を育成することに存するが、之に對して高級諸學校における教育の社會的役割は大體次の三點に歸着するが如くに思はれる。

（一）支配階級に忠順なる中間階級を養成すること。即ち、堅實なる思想と一定の專門知識を備へた官公吏（國家及公共機關における奉仕者）職員（資本家的經營における奉仕者）及び獨立經營者（自作農、小商人、手工業者の上層及自由職業者等）の種々の階層が此處で教育せられる。さうしてこれらは直接の奉仕者として、間接の支持者として資本主義社會及國家の存立維持にとつて絕對に不可缺の要素である。

（二）支配階級者をその地位にふさはしく育て上げること。即ち支配階級は支配階級として力強い存在を主張するためには、彼等の立場から見た支配及搾取の諸條件に關する基本的知識を持つと共に、自分らが自然的又は社會的優者であり、自分らの代表する秩序が自然的な又は可及最善な秩序であると云ふ途方もない確信を獲る必要に當面するのであるが、今日の高級諸學校特に大學は彼等にこれらの必要な知識と確信とを供給することによつて、先づ彼等の此の注文に應ずるのである。次に、高級なる諸學校特に大學は支配階級者に對して人間的教養を與へる。原則として支配階級者にのみ許される此人間的教養は思ふままに現代文化の成果を享樂鑑賞する特權を彼等に確保すると共に副作用として支配階級者に文化のコケラと教養の後光をつけることによつて、無產階級の目に彼等がいかにも貴く高雅な優者であり、自分

がいかにも卑くてつまらぬ者であり、從つて自分が彼等に心服奉仕するのがいかにもあたり前な天理であるかの如く映せしめる効果を持つのである。

(三)支配階級的秩序の維持發展に須要なる學術技藝の研究を促進すること。資本主義はその生存條件をなすところの增大された生産力を維持し、更に之を發展させるためには、自然と自然力とのヨリ多くの、そしてヨリ確實なる支配を必要とする。從つてそれは今日まで自然科學の研究の奬勵には非常に力瘤をいれて來た。その結果この範圍においては資本主義は新なる理論と技術との發見と應用とによつて、人類幸福の物的可能性を未曾有の豐富さにおいて準備するといふ大なる功績を示したものである。だが、社會科學においてはさうではない。もちろん現代の支配階級は自らが革命階級であつた時代には、封建的な思想と傳統とを擊破するために、そして自らの支配權を確立し支配組織を充實するために、自然科學と同樣に社會科學の研究を奬勵したものだ。ところがこれらの必要が一應充され、のみならず學問的研究が今度は彼等によつて立つところの資本主義自身を對象とするに至つて以來は、支配階級は支配階級的利益をその理論的限界と認めないやうな批評的社會科學の研究を好まず、啻に之を奬勵しないのみならず、積極的に彈壓するに至つた。それ故に、今日の高等諸學校における學術の研究については、社會科學の關係する限り、原則としては支配階級的立場に立つ學問、即ち直接間接に支配階級的利益の維持促進に資すると考へられる學問の研究のみが奬勵されるといふ有樣にあるのである。

六　反動化としての教育の政治化

かやうに教育はそれが支配階級の共同事項として官僚の手において管理せられてゐたとき既に被壓階級の覺醒を妨げ、現存支配秩序を維持鞏化する精神的手段としての重要なる機能を果してゐたのであつてこの意味においてそれは夙に過分なる政治的特質を具へてゐたのである。しかしながら、教育の此の如き政治的特質は未だなほ被壓階級の側においても十分に認識せられず、支配階級の側においても亦明瞭なる意識を以て把握されることがなかつた。教育の全作用は過分な政治的特質を持つてゐたにも拘らず、未だ教育は政治化しなかつたといふことができる。

然るに此のやうな狀態はやがて一變せられた。それは無產階級運動の勃興によつてである。無產階級は自階級解放の條件として支配的階級秩序の合理的改造を企てるものである。從つて現存階級秩序の土臺を擁護する主要勢力であるところの軍隊、裁判制度、教育、宗教等に對して根本的な批評的態度を採らざるを得ない。我國のブルジョアジイも亦嘗て軍閥と軍國主義に對して闘爭したことがないではない。併しそれは理論的徹底においても社會的團結においても、今日無產階級が階級的軍隊に對して戰ひ始めたヨリ深刻な闘爭とくらべものにはな

らない。又、我國の資本家階級も亦司法閥を云々し、裁判手續の繁雜を非難し、裁判の個々の結果に反抗したことはある。けれども今日無產階級が「階級裁判」のスローガンの下に提唱しつつあるやうに、現存裁判制度の根本精神を問題としたことは曾てなかつた。教育の部面においてもそれと同じだ。無產階級はまつしぐらに現代教育を支配しつつある根本精神に肉薄し、その階級性を曝露し、その反動的魔力を粉碎すべく、政治闘爭の舞臺に乘り出して來た。さうして此の無產階級の政治的進出の結果として教育上の個々の問題だけではなく、教育の全作用が政爭の圏内に引入れられざるを得なくなるのである。有產政黨によつて教育の政治化が行はれたのは丁度斯様な時期であつた。從つてまた、有產階級は官僚の手から奪うた教育の反動的な政治的特質をはつきりと認識しつつ、之を恰好なる自己の統治手段として十分な意識を以て把握したのである。かやうにして第一の教育の政治化に隨伴し第二の教育の政治化が行はれたのである。自由主義化の意味における第一の政治化は教育を市民政治の對象とすることを意味するのであるが、第二の政治化はそれに加へて教育を階級闘爭の重要手段として意識的に把握することを意味する。初の政治化が教育の資本主義化の進歩的半面を示すに對して、後の政治化は教育の資本主義化の反動的半面を表はすものといふことができる。

七　標榜されたる政治化と隱蔽されたる政治化

有產政黨は第一の意味における教育の政治化を聲高らかに宣言した。然るに第二の意味における教育の政治化については彼等は殆んど之をおくびにも出さない。しかし彼等が之を忘れたのではもちろんない。否、階級闘爭が漸次激化し行き階級秩序の基礎工事に、、が這入つて來た今日、有產階級にとつては第二の意味における教育の政治化こそ此上もなく重要な闘爭武器である筈だ。さうして彼等はこのことを十分よく承知してゐる。論より證據、彼等はその實踐においては計畫的に教育を階級闘爭の手段として運用しつつある。國民の間に進歩革新を要求する思潮が漸次勢力を加へて時代遲れの舊秩序と舊勢力との地位が、、、に感ぜられるや、犬猿も啻ならぬ仲の二大有產政黨が一致協力して、一方では諸學校並に一般青少年に對する軍事教育を斷行して反動思想を靈化し、他方では青年學徒の間に勃興した社會科學の研究に彈壓を加へて進歩的思想を教育と學校とから追放しようとしたことは未だ讀者の記憶に新なるところであると思ふ。更に最近頻々として加へられる無產階級的教化機關（言論、出版、上演、上映等）に加へられる亂暴な彈壓を想ひ見よ。にも拘らず有產諸政黨にこの第二の政治化については何事も語るところがないのである。この沈默には何らかの理由がなければならぬ。

理由は極めて簡單だ。ここでも亦資本家階級は自らの反動的階級支配のカラクリを、從つてまた階級支配其者のあらわな姿を、民衆の直視から蔽ひ匿すのである。資本家階級は其の存在のためにいつもイデ

オロギイ的隱蔽を必要とする。彼等は階級支配を行ふといふ代りに、「國民の總意によつて責任政治」を行ふといひ、利潤率の維持增大といふ代りに「國運の進步國威の發揚」と云ひ、、、、、、、、、といふ代りに、「社會公共の安寧秩序」といひ、資本階級の保護助成といふ代りに、「產業立國」といふ丁度そのやうに教育の政治的反動化も亦別の名を以つて呼ばれねばならぬ。何となれば、教育を支配的階級秩序維持の手段として意識的に把握すると云ふことは、一方においては現今の教育教養の分配が所有によつて決定せられゐるといふ事態を是認し、他方においては現代の教育が被壓階級の生活利益によつてでなく支配階級の側よりする階級支配の見地から決定されてゐるといふ事實を承認することを意味するから。然るに被壓民衆は教育教化の分配が財產所有によつて決定せられて有產階級に教化を累積し、無產階級を無知と無教養との裡に委棄するが如き不合理の撤廢を熱求して居り又、國民に與へられる教育が少數特權階級の利益にではなく、眞に彼等の現實的生活要求に應ずるものであるべきことを要望してゐる。此の如き民衆の前に上記のやうな教育の正體を直截に言明することは、有產階級自身がその階級支配の秘術を曝露して、自分の手で自分の墓穴を掘ることにほかならないであらう。

そこで有產階級は例のイデオロギイ的隱蔽を用ゐ、顧みて他を言ふことによつて民衆を欺瞞するのである。教育の政治化とは彼等の標榜するところに從へば、「學習の機會均等」であり、「教育の地方化」「教育の實際化」であり。社會教育を強調し「社會を學園と化し」「社會と學校とを連絡する」ことである。そこで吾々は調べて見ねばならぬ、それらの尤も過ぎる提唱の背後に何らのカラクリがありはせぬかを。先づ「學習の機會均等」即ち教育上のデモクラシイの確立は何を意味するか。卒爾として之を聞く者には、それが恰も教育制度における現在の不合理なる階級的差別狀態に對して根本的な改革を企てるものの如くにも響く。かくて民衆は目つぶしを喰はせられる。物事を根本にまで押しつめて考へることに習慣づけられてゐない民衆は、その言葉に誘はれて之れこそ自分たちの全要求を代表する改革ではないかといふ風に早合點する。そこが狙ひ處なのだ。けれども實のところ、茲に機會均等といふのは所謂形式上の差別撤廢、即ち所有による教育機會の差別以外の一切の差別特權の撤廢を意味するに過ぎない。之を逆さまから明らさまに云ふと、所有に基づく教育機會不平等の狀態をば合理的制度として、少くとも止むを得ない制度として承認し擁護することにほかならぬのである。此の場合に方つて「入學試驗制度の改廢」や「卒業生の特權廢止」をいふのは文字通り、顧みて他を言ふことだ。吾々の中心問題は上級の學校に進み得ない從つて、全然入學試驗の圏外にある無產大衆に關するのであり、彼等が中等乃至高等の學校に進み得ない理由が彼等の無產狀態にあるといふ不合理に關するのである。入學試驗の改廢や卒業生の特權廢止は何等この根本的な社會的弊態に觸れるものではない。或は得々として「貧困兒童救濟」（政友）貧困なる

優良兒童に國又は公共團體より補助金を交附す（民政）の項目を指摘するかも知れない。併し非道な金貸が毎日僅ばかりのおこぼれを乞食共に惠んでやつたからといつて、そのことによつて彼の、、、、、は聊かも正當化されはしない。有産諸黨が貧困兒童云々を持出すことは、不合理なる現制度の革新の要求ではなくて、却つてその原則的承認であり、高利貸の施物のやうな僅ばかりの涙金で全制度が不合理だといふ認識と之れを根本的に革新しようとする要望とをゴマ化し去らうとするものにほかならない。

次には、教育の內容の改善に關する一聯の要求がある。曰はく「劃一主義形式主義の打破」、曰はく「教育の地方化」、曰はく「教育の實際化」、曰はく「詰込模倣の弊を排し」「獨創自發の個性を養ふ」等、等。一々御尤千萬である。これらは誰人も否むことのできぬ現代教育の缺陷であり、國民はたしかにその刷新を熱望してゐる。だが待ち給へ、有產政黨と無產大衆とは屢々この同じ要求によつて別々のことを意味してはゐないか。さうしてそのことのために民衆の眞實の要求が却つて誑らかされるといふことはないか。

たとへば政友會の從つてまた現政府の教育革新のスローガンたる「劃一主義の打破」「教育の地方化」を例に取つて見よう。劃一主義の打破はたしかに大衆の欲求である。だが、このことから直ちに教育の地方化を結論し、これを以て教育革新の眼目とするのは、田舍議員の劃一主義觀たるを失はぬ。都會には都會らしい教育を、田舍には田舍にふさはしい教育を。事柄自身として何人がこれに反對し得よう。併し今日の教育の根本弊害は果して都會と田舍との地方的對立差別を無視したことに存するか。「地方」なる語に即していふならば、社會には地理的「地方」の外に社會的「地方」とも呼ばるべきものがある。而もこの社會的「地方」間の對立差別は資本主義の進展につれて愈々大きく益々深くなつて行き、新なる地方は自らにふさはしく地方化された教育を熱求しつつある。それにも拘らず現代の教育はこの要求に背いてこれらの社會的諸「地方」の差別を無視した劃一なる教育をしか與へてゐない。現代教育の病は地理的劃一主義であるよりは、むしろこの社會的劃一主義であり、さうして前者は後者の避け難い歸結であると考へられる。だのに有產政黨は彼等の根本的革新において地理的劃一主義の弊を絕叫はするが、社會的劃一主義については一言半句も觸れるところがないのである。茲に私が社會的「地方」差別といふたのは、現に讀者の想像せらるるが如く、社會における階級對立のことであり、社會的劃一主義といふたのは教育上における支配階級的利益の獨裁に基づく劃一主義を指すのはもちろんである。

國民の大多數をなす無產大衆の現實的生活要求に應ずるものではなしに、少數なる有產階級の支配慾から割り出された教育は必然に劃一に流れ、形式に墮し、詰込模倣となり、「國民生活の實際に迂なる」ものたらざるを得ない。其處に病弊の根源がある。にも拘らず、現代教育のこれらの二次的弊害を數へ上げることに熱衷な有產政黨はたつた一

つ、これら諸弊の病根である現代教育の支配階級的特質のことを許き落してゐる。もちろんうつかりとではなく、十分な意識を以て。何となれば、「劃一主義の打破」をさけび、「獨創と自發」を強調する資本階級はその實、無產大衆が現代教育の反動政治的特質を認識し、この劃一主義を破り、自階級の現實的生活要求に適應する無產階級的教育を樹立し、無產階級の「獨創と自發」に基づく解放運動に突進することを何よりも恐れてゐるから。「教育の實際化」は他の何者であつてもよいが、唯無產大衆の生活要求に即した無產階級的教育でだけはあつてならない。然り、教育の內容的刷新は「都市化」「農村化」であり、「公民」「教育」、產業」教育の重視であり、「人格品性」の向上「國家」、、の強調であり、品性あり實力ある「國民」の養成であり、獨創自發の「個性」を啓くこと等、等、である。都會、農村、產業、公民、國家、國民、人格、さうして個性。唯、これら諸事象の土臺をなす、都鄙を通じ個人と國民の間に介在してそれらの上に決定的影響を及ぼしてゐる最も重要なる社會的事實、即ち階級對立と之に基づく教育の「階級化」については何事も云はれてはならぬのだ。支配階級的意味における教育の階級化は隱蔽されねばならず、無產階級的意味における教育の階級化は彈壓されねばならないのである。

最後に、社會化されねばならぬ。即ち教育を學校の中にのみ閉ぢ込めないで、「學校と社會とを連絡」し「社會を學園」となさねばならぬ。社會教育の振興これがまた有產政黨の重要なる提案である。教育を教家の四壁の中に閉ぢこめる代りに、之を一般公衆の前に展開して彼等に新たなる教化の機會を得させるといふことは、これまた時代の切なる要求だ。殊に、社會教育といふ言葉は社會思想社會政策、社會主義などを聯想せしめて、何となく時代の流れに沿うた進步的の響をさへ持つてゐるではないか。

ところが、今日實際に社會教育の名の下で何事が行はれてゐるか。社會教育は屢々社會的教育學の實踐であると云はれてゐる。そこで先づこの社會的教育學について一瞥を與へて置かねばならぬが、この教育學說は歐米においては、もちろん市民的偏執から解放されてゐないとはいへ、しかし少からぬ進步的要素をも含んで居る。その著名なる提唱者の中には、現今の公的教育の資本主義的、、、主義的弊害をかなり手ひどく攻擊し、教育學をば社會主義――その理想主義的傾向における――やデモクラシイの主張と密に關聯せしめてゐる者もある。この社會的教育學が一時盛に我國の教育界に攝取されたのであるが、其際注意すべき變質が行はれた。といふのは、この教育學の理想主義的一派は「格鬪せる人類の惱ましき生活の唯中」を後にして哲學の上天へ逃避し、これに對する實證的學派は國民の教育理想とは沒交涉な單なる教授法の問題――例へばダルトンプラン――に跼蹐してデモクラシーも社會主義もどこにか行つて了ひ、教育上の實踐を決定する公的勢力としては、、、、、、、、的、國粹主義的教育又は帝國主義的教育とすりかへられた社會的教育學が獨りその威を擅にする

といふ結果に立ち至つてゐるからである。人々が社會教育といふ進歩的な名前を以て呼びなしてゐるところの教育運動は、この反動化されたる社會的教育學の實踐であるにほかならない。「樹はその實によりて知らるべし」。現に我國支配階級の運用しつつある社會教育機關の主要なるものが青年團、女子青年團、青年訓練所、少年團等であることは何よりもよい證據だ。それを支配してゐる指導精神が何者であるかはここに私の說明を要しないほど明白である。それ故に、我國における社會教育は既に學校教育を支配してゐる支配階級的教育を、即ち資本主義的、、、、教化を、校門の彼方にある國民大衆の中にヨリ緊密に植ゑ付けることをその重要任務となすものであるといふことができよう。嘗て內務省に「地方改良」といふ一課があつたが、この名稱は社會改良から採られたのだといふことを聞き及んでゐる。それは單に社會といふ文字でもが人々を戰慄させてゐた當時、少壯の役人が頑固な大官の反對を囘避するために「社會」改良を「地方」改良と書き改めて進步的行政の實質を採り容れようとしたのだといふ。「私は典據に基づいてその眞實を主張するのではない。」然るに、此度は全く逆さまに、進步的思潮が漸次力を加へ、「社會」といふ文字が何となく大衆を惹きつける響を持つた時、狡猾な支配階級は社會といふ新しみのある包裝をかけることによつて進步的大衆を欺瞞し、其實、根本において何等の新味も珍味もない反動教育を密輸入しつつあるのである。此の意味において嘗て私が書いたやうに「所謂社會教育は社會的教育學の實踐界に産み落した畸形兒である」。而も油斷のならぬ畸形兒である。

標榜されたる「教育の政治化」と隱蔽されたる「教育の政治化」。ここに資本家階級の民心把握に對する鬪爭の秘術が匿されてある。それ故にまた之を曝露することこそは無產階級的教化鬪爭の第一歩でなければならぬ。

全被壓民衆解放戰線の一進展

勞働農民黨の自由獲得鬪爭の歴史的意義は如何に府縣議戰を通じて發揚せられたか？

大山郁夫

一 無産諸政黨の列中に於ける勞働農民黨の勝利

今や明かに一大轉廻期の前に立てる現政局への自己の歴史的使命を明確に意識する日本の無産階級の、今次の府縣會議員選擧戰への直接參加は、それをして眞に劃時代的意義を帶び來らしめたものである。――といふことは、我々が既に早くから、衷心の確信を以て主張して來たことであつた。

その選擧戰は、月餘に亘つて、全國の各地方の民衆の公生活の上に時ならぬ嵐をまき起してゐたが、今や、それも漸くその結末に近づいた。少くとも、その大勢は既に決した。で、我々がこの際、靜かにその成り行きを振り返つて見るとき、我々はまづ、その結果が決して我々の期待を裏切つたものでないことを見出すのである。――特にわが勞働農民黨が、そこで無産諸政黨の列中にあつて、最も見事な勝利を收めたといふ一點の上に於て。

『何故さういふことが言へるのであるか？ そこでは、既成諸政黨が依然として壓倒的多數の當選者を出してゐるではないか？ そして、無産諸政黨側の成績は、よし一般世人の――少くとも内務當局の――豫想を遙かに拔いてゐるにもせよ、しかも今のところ、皆で僅かに二十六名の當選者を出してゐるに過ぎないではないか？ かゝる慘じめな成績が、どうして君たちの期待を裏切つてゐないのか？ 若しそれでも君たちの期待に副うてゐるものだとすると、それは君たちの當初の期待が餘りにも小さすぎたためではないか？ いづれにせよ、君たちはさういふ成績を得意がつてゐるよりは、寧ろそれに關して嚴肅なる自己批判を行つた上で、堂々と君たち自身の敗北を強調すべきではないか？……』等、等、等。

我々は、我々が府縣議戰に於ける我々の勝利を見て本能的に敵壘をあげてゐるとき、恰度今いつたやうな種類の詰問が、さながら我々の隙を狙つてかのやうに、各方面から我々に向つて投げかけられるであらうことを豫期してゐる。否、それは既に早くも、幾分か我々に投げかけられ始めてゐる。しかもそれは單に我々に對して抑へがたき敵意を懷く反動主義者たちの側からだけでなく、屢々我々に多少の好意らしきものを示して來た一部の小ブルジョア的諸分子の側からもまた、殆んど同等に發射されてゐるのだ。

かゝる陰氣くさい小姑的偏見は、萬事につけてケチケチしてゐる日本の反動主義者たちや、一部の小ブルジョア的諸分子の間に於て、日頃から可成り榮えてゐるやうに見られて來てゐるものであるから、この際その尖端が我々の方へ向けられて來るのは、寧ろ當然すぎる當然と見做されるべきものであり、從つて本來ならば、我々がムキになつてそれに拘はり合つてゐるべき筋合ひのものではない。だが、今若し假りに、我々が聊かでもそれを取り上げることが、我々自身の立場を幾らかでも、よりはツきりさせる手蔓となるべき見込みがあるものとするならば、我々は、さうしたものとの應酬をも、一概に無用の暇つぶしとして避けるべきではない。そして、我々に取つては、今が丁度その場合に該當するのだ。

そこで、我々が我々の詰問者たちに向つて言はうとしてゐることは、大體次の諸點に要約され得る。——

即ちまづ第一に、我々は當選者數の價値を過重に評價する點に於て我々とは到底相容れない立場にある。といふ心は、無論、當選者數の價値といふやうなことが全然我々の考慮のうちに入り來らないといふ譯ではない。我々といへども、特に府縣議戰に於けるわが勞働農民黨の成績の判定に際しては、後にも幾分か詳說するであらう通りに、我々の獨自の立場から、當選者數や總得票數やの意義を、相當の程度に評價しはする。だが、その場合に於ても、我々は斷じて、それをすべての考察點の主位におくものではない。我々はそれの上に、一定の嚴重なる限界をおいてゐる。かくて、我々の立場からは、當選者數といふが如きものは、單に府縣議戰に於ける勞働農民黨の成績を價値づけるための唯一の要素だといへないばかりではなく、そのための中心的要素だとさへもいへないのである。

だが、假りに當選者數だけに就いて言ふ必要のある場合を想定するにしても。勞働農民黨が今次の府縣議戰に於て克ち取つたそれは、それ自身單獨で、世間から相當の注意を以て見られるべきことを要請する權利をもつものである。そして實際上に於ても、それに關して下された一般の世評は、今次の府縣議戰に於ける無產諸政黨側の成績は豫想以上だつたと言つてゐるのである。

もとより、一トロに無產諸政黨側と言つても、それらの中には、立場の非常に異かつてゐる幾多の政黨が含まれてゐる。殊にわが勞働農民黨の如きは、當初から純正の無產階級的立場を嚴守して來た點に、

て、絶對的に他の無產諸政黨とその性質を異にしてゐるものである。で、この立場から、勞働農民黨は、他の無產諸政黨――日本農民黨、社會民衆黨、日本勞農黨の如きはもとより、同時に他の三四の地方無產諸政黨までを含めての――の各個を、正當にエセ無產政黨と呼び習はしてゐるのだ。とにかく、一樣に無產政黨を名乘つてゐる諸政黨のうちにも、全然立黨の精神を異にしてゐるものがかくも多數並立してゐるのだが、それにも拘はらず、それらの間の差別を一切無視して、たゞ一律に無產諸政黨側の成績について總括的に語るやうなことは、我々から見れば、いかにも無意義千萬のことである。

そこで、例の一般の世評に於て、『今次の府縣議戰に於ける無產諸政黨側の成績は豫想以上だつた』などといふやうなことが言はれてゐるとき、我々がそこから一歩突き進んで、その所謂『豫想以上の成績』なるものの內容に立ち入つて檢べてみると、それは畢竟するに、單に勞働農民黨のみの成績が拔群だつたことを示すにすぎないものであることが容易に知られるのだ。即ち現在(十月七日)までに知られてゐるところに據ると、無產諸政黨側の當選者總數二十六名のうち、恰度その半數に當る十三名が勞働農民黨の一手に占められてゐて、殘りの半數の十三名が、同じ府縣議戰に參加したすべてのエセ無產政黨の間に分配されてゐるだけである。かくて、今次の府縣議戰に際して一齊に初陣の名乘りをあげた無產諸政黨の列中にあつて、唯ひとりわが勞働農民黨のみが、その火の出るやうな戰ひによつて赫々たる勝利を克ち得たといふことは、如何なる詭辯を以てしても打消すことが出來ないものとして現はれたのである。

二　既成諸政黨との比較に於ける勞働農民黨の戰績

さらにまた、勞働農民黨は、單に無產諸政黨の列中にあつて拔群の成績を收めたといふだけでなく、それと同時に、一擧にして既成諸政黨中の或るものをも遙に駈け拔けたやうな結果をもあげたのである。即ち今までに知られてゐる當選者數(十月七日現在)からいつても、無論政友會の六百四十六名、民政黨の五百四十七名、および中立の百十三名は暫らく別として、實業同志會の五名、および革新黨の七名に對して、勞働農民黨は十三名――他の無產諸政黨は總掛りで同數の十三名――を算へてゐるのである。實業同志會および革新黨は、その政界での閱歷に於て勞働農民黨よりは遙かに舊く、且つまた、札附きの貧乏世帶の勞働農民黨などには到底想像だも及ばないほど潤澤な選擧資金を使ひ得る地位におかれてあるのだ。それにも拘はらず、勞働農民黨は既にその初陣の首途に於て、一足飛びにそれらの兩黨を追ひ越して、確實にその先きに廻はつたのである

同樣の事は、各派の總得票數の上からも大體に於て言ひ得られる。即ち、九月廿九日までに既開票の二府廿七縣について判明したところに據ると、この場合でも矢張り、政友の二百四萬二千三百十六、民政

の百九十二萬四千五百六十一、および中立の五十一萬二千七百五十は暫らく別として、實同の一萬九千百七十一、および革新の三萬六千七百二十七に對して、勞働農民黨は實に十萬三千二百三十六――それに對して他の無產諸政黨の側では、日農が三萬二千百九十六、日勞が三萬七千五百八十八、社民が二萬八千二百三十六――の總得票數を獲得したのである。純正の無產階級的立場を嚴守するこの新興政黨の伸びて行く力の逞ざましさを見よ！

だが、我々は今までは所屬未定の中立と共に、旣成諸政黨中の兩雄ともいふべき政友會および民政黨を別問題として取扱つて來た。我々はしかし、いつまでもさうしつづけて行く譯に行かない。玆に來て我々は態々、少くとも政友會と民政黨とを計算のうちに取り込めた上で我々の論步を進めなければならなくなつた。

して見ると、今次の府縣議戰に於て壓倒的多數の總得票數を收め、且つ壓倒的多數の當選者を出したこれらの兩黨の成績に比べると、わが勞働農民黨の成績の如きは、一見して直ちに、その餘りにも貧弱なことが看取される。それだのに、我々が尙ほ且つわが勞働農民黨の光輝ある勝利を高揚することをやめないのは、一體如何なる根據から來てゐるものであるか？

三　勞働農民黨の勝利の歷史的意義

我々は、自己批判の價値の認識に於て、決して人後に落ちるものではない。一體わが勞働農民黨ほど、自己の過失を勇敢に正視する政黨は、外に求められないのだ。從つてその黨旗の下に立つことを誇りとして居る我々は、我々自身の敗北を勝利に取繕つて喜ぶといふが如き自己瞞着的態度を恥とするものである。それにも拘はらず、我々は、今次の府縣議戰に於けるわが黨の成績を、わが黨の――從つて日本の無產階級の――見事な勝利を指標するものとして見る事を躊躇しないものである。しかも我々は、單にわが黨以外の無產諸政黨や實業同志會・革新黨の如きものに對してのみならず、政友會や民政黨の如き大物に對してもまた、同樣に明白にそれを主張することを憚らないものである。

この點に關しては、わが黨が、單に當選といふことを目安にしての立場からは、如何に自動的並びに他動的に極端に不利な狀勢の下に戰つたかを一應明らかにした上でなければ、その全幅の意義を言ひつくすことは出來ないのだ。だが我々は、そのことを玆で企てるよりは、そのためには後にもつと適當な場處があるべきことを期待してゐるから、今しばらくその問題を保留しておくことにして、玆では寧ろ唯だそれより數層も上位の大所高所から、わが黨の勝利が當然のこととして主張され得る所以を語らうと思ふ。

言ふまでもなく、政友會や民政黨は、それぞれに、ブルジョア諸政黨中の重鎭として立つてゐるものであつて、その確固堅牢なものに見える地盤の基底には、相當に時代のついた傳統的勢力を藏してゐる。

である。殊に彼等は、その成立の起源に溯れば、曾て或る時期に於て飛ぶ鳥を落すほどの威勢を政界に揮つたことのあつた自由黨や改進黨を母胎としてゐるものである。從つて、かうした見地から見れば、彼等は各々半世紀の歴史を負うて政界を睥睨してゐる老雄たともいへるのである。かくて彼等は、よし今や如何に時勢に取り殘されようとする危險に瀕してゐるとはいへ、現在の瞬間に於ては、まだまだ、多年の不斷の奔走によつて培はれた無數の根を全國の選擧界の上に亘つて、網目のやうに縱横に張り廻はしてゐるのである。

彼等はしかし、單にかうした時功を重ねた傳統的勢力の上に立つてゐるだけでなく、更らにまた、今日に於ては、その背後から、金融資本と絶對的、、勢力との全力的支持擁護を受けてゐて、そしてその關係に於て、それらを綜合的に現實政治の上に代表して立ち、全民衆をして彼等の一令の下に慴伏せしめようとする態度を以て、傲然とその上に臨んでゐるのである。

わが勞働農民黨は、實にかうした強敵に直面しつつ、果敢なる鬪爭をつゞけて來たのだ。しかも當初から純正の無産階級的立場を嚴守して來たわが黨は、徹頭徹尾非妥協的態度を以て、正面から堂々と彼等に向つて抗爭して來たのだ。だから、彼等の死力をつくしての攻撃が、從來一にわが黨の上にのみ集中されて來たのも、決して偶然だとはいへない。そして今次の府縣議戰に際しても、かうした狀態が少しも變はつて來なかつたばかりでなく、却て益々その強度を加へて來たことは、無論のことであつた。從つて、現政局に於けるわが黨の出現および存立の必然性に對する明敏なる洞察を缺く人々は、初めから頻りとわが黨の慘敗を豫言してゐたものでさへあつた。

我々はもとより、決して當選本位の策戰に出たものではなかつたが、それにも拘らず、わが黨が當選者數の上から見ても尚ほ且つ相當の成果を擧げるであらうとの自信を、曾つて失はなかつた。それは主として、我々が現政局に於けるわが勞働農民黨の出現および存立の必然性に對して毛頭の疑念を挾まなかつたばかりでなく、更らにまた、わが黨が現在必死に戰ひ進めてゐる政治的自由獲得鬪爭こそ、全被壓民衆のための解放戰の現段階に於ける寸分狂ひなき鬪爭目標とされなければならないことが、我々が接觸する限りの大衆によつて段々と理解されて來るであらうことをも確信してゐたためであつた。

現政局に於けるわが黨の出現および存立の必然性。──それは今更ら特說するまでもないことだが、一言でつくせば、かうだ。現在の政治問題の重心點は、世界經濟の進行の途上に於ける生産力の異常なる發達と、今尚ほ大部分國民、、の桎梏の下に限局されたままで固定しかかつてゐる生産關係との間に於て刻々激化されてゆく深刻なる矛盾の解決といふことの上に繋がつてゐる。既成諸政黨は無論、この絶大なる仕事の前には、疾くより全然の無能力を暴露してゐた。かくてその使命の完全なる遂行は、唯々、自己の歴史的使命を明確に意識する無産階級の政治行動に待つより外はなくなつて來てゐた。純正なる

無產階級的立場から政治的に行動することを目的とするわが勞働農民黨は、かゝる事態の下に於て出現したものである。

從つて、何物も——如何なる地上の力も——わが勞働農民黨の時を得た出生を阻止することは出來なかつた。また、支配階級の全力をつくしての彈壓も、その旺盛なる成長を抑制することは出來なかつた。かくてそれは、今次の府縣議戰に於て、現實政治的諸關係の中に勇敢に突進して行つた。そしてそれは、エセ無產諸政黨と既成諸政黨とを一束にして向ふに廻はして戰つた。小さき羊飼ひのダビテは、巨人ゴリアテを目がけて鐵腕を揮つた。手應へはあつた。彼は一般人の豫想以上の成績を收めた。

今若し何人かあつて、今回はじめて政治上の實戰に打つて出た勞働農民黨が、一擧にして既成諸政黨中の大物を屠るであらうことを期待したとするならば、彼は必然に、過去の歷史を無視する放縱なる妄想家だとの譏りを免れなかつたであらう。と同時に、勞働農民黨がその政戰に於て克ち得た勝利を通じて日本の無產階級の政治行動の多望なる前途を展望することを拒否するものは、歷史の將來への進展の方向に對して無知なるものとの批評を甘受しなければならないであらう。いづれにせよ、從來全然一の未知數と見做されてゐたわが勞働農民黨が、今や政治上の實戰場裡に或る重要なる陣地を確實に占領したことによつて、一の既知數——しかも日本の無產階級の存續する限り發展轉化してやまない政治的未來をもつところの一の最も多望なる既知數——として取扱はれなければならないものとなつて來たことだけは、爭ふべからざる事實である。

勞働農民黨は、克ち得べき全世界を持ち、そして鎖のほか失ふべき何物をも持たない新興階級を日本の現政局の上に代表する唯一の政黨として始めて政治上の實戰場裡に登場して、その血管に漲るやうな活勢力を試めしたものである。それ故に、それがそこで戰ひ取つた一つ一つの陣地は、既成諸政黨に取つては、失はれたる一つ一つの陣地を意味するものなのだ。我々が既成諸政黨の成績と比較されての勞働農民黨のそれに就いても、尙ほ後者の勝利を云爲することが出來るのは、畢竟するに、一切がそこに歸着するのである。しかもこのことは、單に得票數とか、當選者數とか、地盤とかの如き有形的諸事象について言ひ得られるだけでなく、同時にそれらと聯關して、一般大衆への說得力・誘導力・感化力・組織力・宣傳力・煽揚力等々の如き無形的諸事象についてもまた等しく言ひ得られるのだ。我々が今次の府縣議戰に於ける勞働農民黨の勝利について語るときは、無論これらのすべての諸點をも我々の念頭におかなければならないものである。

だが、かゝる意味に於て今回の勞働農民黨の勝利を認める場合でも尙ほ、若し我々の觀點が唯それの眼前の効果を見得るだけの限界內に止まるものならば、それの意義が甚だ小さなものにしか見えないのは當然のことである。我々はしかし、辯證法的唯物論に立脚する無產階級的社會觀の上に立つ限りは、それの全意義をその將來への發展轉化

の見通しの上に於て敏活に把握しなければならぬ。かくしてこそ始めて、我々は、それの意外に含蓄の深い歷史的重要性を、――それの無產階級の歷史的使命に聯關しての全意義を、――寸毫も餘すところなく領得することが出來るのである。

我々が、かゝる態度に於て今回の勞働農民黨の勝利の性質を討究するとき、我々は必然的に次の結論に導かれる。曰く、それは、日本の無產階級が大きな足取りで歷史の舞臺の上に登場した最も大切なる瞬間をしるしづけた出來事として、その未來へのあらゆる希望を約束されてゐるものだ、と。そしてこの短き言葉のうちに含まれてゐる複雜多樣なる內容は、我々が既に述べて來たことと、まだこれから述べようとしてゐることとが、全體的に綜合されて考慮されるとき、誰れにも容易に知り悉くされ得るであらう。

四　當選本位の策戰の否定

我々は上來、今次の府縣議戰に於けるわが勞働農民黨の勝利の重要性を、大局の上から達觀された形のまゝに述べて來た。我々は、だが、尚ほその上に、そこではわが黨が個々の具體的場合に於て、如何に自動的並びに他動的に、少くとも當選といふ一點の上からは、あらゆる不利の狀勢の下に戰つて來たかを略述なりとすることによつて、その說明を補足しなければならぬ。といふのは、かくすることによつて始めて、わが黨の勝利の意義の全體が、より具體的に、より確實に、把握され得るものであることを、我々が確信してゐるからである。

この方面に於て先づ第一に擧げられねばならないことは、わが黨がそれ自身の立黨の精神の上から、全選擧期間を通じて、如何な場合にも決して當選第一主義の策戰に出なかつたといふ一事である。この點からいへば、わが黨は自動的に、當選のためには非常に不利な狀勢を自黨の上に招來したかのやうな結果に陷つたものだともいへる。だが、それはもとより、わが黨が意識的に態々自黨の當選者數を切り詰めようと企圖したがためではない。否、それは實は、わが黨が單なる當選者數の獲得といふことのために、それ以上に一層根本的な性質をもつ重要目的を犧牲に供するが如き短見に囚はれることを肯んじなかつたためなのだ。

では、謂ふところの、その一層根本的な性質をもつ重要目的とは、何を指してゐるものであるか？　それは言ふまでもなく、黨の指導下に於ける大衆の階級的結成の全國的規模に於ける促進といふことである。

わが黨は、この目的の達成の上に、全選擧期間に於ける最大の努力を集中したものであつた。わが黨が政治的自由獲得の大旆を振りかざしてそこにすばらしき宣傳戰を堂々と展開せしめたのも、一部分はそのためでもあつた。もとより、政治的自由獲得鬪爭そのものは、まづ第一段には、無產階級運動の現段階に於けるそれの重要性のために行はれて來たものであり、また現に行はれてゐるものでもあるが、しか

し同時に我々は、それの重要性の確認のためには、それが大衆の獲得およびその階級的結成のための集合點となるものであり、またさうであらしめられなければならないといふ一事も相當に考慮されたものだといふことを、充分に記憶しなければならないのである。

だが、何故に勞働農民黨は、かくまでも、大衆の獲得およびその階級的結成といふことを主要視するのであるか？ それは何よりも殊に、我々が度々の機會に於て聲明して來た通りに、勞働農民黨が決して既成諸政黨の慣用の意味での議會中心主義の政黨ではなく、特に現政局の上に於ては、日常政治闘爭およびそれに聯關しての大衆運動の指導および遂行を以て、それ自身の本領としてゐるからだ。

この點に關しては、私は本誌の前號に載せられた私の論文および私のパンフレット『大衆に呼びかける』に於て比較的詳細に解説しておいたから、今は再びそれを繰り返さないであらう。だが、唯一つ玆で序ながらに言つておきたいことは、この頃になつてから急に、日本勞農黨の陣營内などでも、日常政治闘爭の必要が頻りと高唱されて來だしたといふ一事——たとへば十月五日發行の同黨の機關紙『日本勞農新聞』第十九號參照——についてゞある。

日勞黨の指導者たちが、今更らのことのやうに、日常政治闘爭の必要などゝ言つて騒ぎだしてゐるのは、豫てから『人眞似小眞似』の名手との評判を取つて來た彼等が、またしてもその痼疾の日和見主義・追隨主義を恥かしげもなく曬らけだしてゐるものと見られて、笑止でもあり、見苦るしくもある。のみならず、彼等が今次の府縣議選に於ける日勞黨の敗因の少くとも一つが同黨の日常闘爭の缺乏にあつたことを認めてゐるのは、無論そのこと自身としては當然のことだが、しかしそれは同時に、彼等が選擧對策の決定に際して、意識的にか、無意識的にか、當選第一主義を取つてゐたといふ——誰れもが知つてゐる通りの——事實を、彼等の口によつて自白したことに當るものだといふことを、彼等は充分に知つておかなければならないのだ。日ごろ無産諸政黨の列中に立つてゐることを自信してゐたやうに見える彼等が、從來、主義もしくは原則上の問題としても取り扱はれるべき日常政治闘爭に於て、さまでの怠慢に陷つてゐたのは、一體彼等がその間に如何なる種類の活動もしくは不活動に耽つてゐたためであるか？ 我々はそこに、從來執拗に折衷主義・組合主義の殼の中に立て籠もつて來た彼等の政治的無能無爲ぶりの醜態の種々相を、まざまざと我々の眼前に描き出すことが出來るのである。

彼等は尚ほ、日勞黨の存立期間が一個年にも滿たないことを取り立てて、暗にわが勞働農民黨のそれとの間に横はる約半個年の差異を強調するかの如く見られることを言ひ、且つ間接的にそのことを日勞黨の敗因の他の一つとしても算へてゐるやうな口吻を弄してゐる。だが、さういふことは、畢竟ただその場限りの苦しき逃げ口上としか聞かれないものである。彼等のさうした辯解を聞くとき、我々は寧ろ坐ろに、彼等が昨秋わが勞働農民黨を裏切つて脫け出し、別に一黨を樹てて

傲然として黨員十萬と號し、わが黨を尻眼にかけて左翼小兒病患者として嘲笑してゐた時の彼等の空景氣を回想せずには居られない。昨是今非といふが、それにしても今日の彼等の地位の變はり方はどうだ！我々は、無産階級を裏切るものに大衆の批判の責罰が下る日のかくも敏速に到來する實例をそこに見て、覺えず肅然として自ら深く戒めるものである。

今いつたことは、無論他のエセ無産諸政黨である日本農民黨や社會民衆黨やの上にも完全に適用が出來るものであるが、しかしこの方面では、これらの兩黨となると、それこそ全く追究にも値ひしないものなのだから、我々は今、精力節約の必要上、それらを一切問題外におくことにする。

で、再び日勞黨の問題に立ち歸る。同黨の指導者たちは、ともかく今日に至つて始めて日常政治鬪爭の必要に氣づいて來たやうであるがしかしこの分野の上に於て、彼等に果して今後如何なる活動が期待され得るであらうか？

我々をして暫らく、この點を既成諸政黨の類例について考察せしめよ。

既成諸政黨は、如何に痛切に日常政治鬪爭の必要を意識してゐても最早それを實踐に移すことが出來ない地位におかれてある。彼等は現代のあらゆる政治的經濟的社會的害毒の根源となつてゐるところの、金融資本の支配下の獨占の促進に直接に干與し、かつその間に於て利權漁りを中心とする各種各樣の政治的罪惡を重ねて來たものである。で、我々の日常政治鬪爭は、いつも決まつて彼等の政治的罪惡の暴露に終まつてゐるのだ。この意味に於て、既成諸政黨は、大抵の場合たゞ日常政治鬪爭の客體とされるだけで、自らその主體となることは出來ないのである。立憲民政黨の如きは、仰々しくも『國民の總意を議會に反映せしめる』といふ趣旨を宣言してゐるが、さういふことが縱し實現可能なものとしても、それは、たゞ日常不斷の政治鬪爭によるより外に手段のないものであることは、少し物事を眞面目に考へるやうに習慣づけられてゐる人々には、容易に理解し得られることである。だが、既成諸政黨の巨魁の一つである民政黨に、その實行が可能な譯はない。それどころか、同黨の前身であつた憲政會を與黨に持つてゐた若槻内閣は、合法的に行はれてゐたわが黨の日常政治鬪爭の上にさへ、血の滲じみ出るやうな彈壓を加へつづけた經歷の持主であつた。それは、田中、、内閣が現にやつてゐることとは、少しも異つたものではなかつた。若しそれらの間に假りに幾らかでもの相異があるものとしても、それは單に程度の相異にすぎないのだ。で、『國民の總意を議會に反映せしめる』といふやうな、今日では内容の空虛な一片の獸辭にすぎないものとなつて來てゐる表現に、よし多少の意味を無理押しに認めるにしても、そのことの實現のために必要な日常政治鬪爭が出來ない以上は、それを言ふものは徒らに欺瞞を重ねてゐるものだ、といふより外はない。果然立憲民政黨は、他方に於てまた『議會

中心主義」を強調することによつて、『闘ふに落ちず語るに落つ』る民に引ッかゝつてゐる。即ち、彼等が、、議會に據つて、そこでの形式上の多數決を楯に飽くまで全被壓迫民衆の上に壓制を加へつづけて行かうとする意圖が、そこに不用意の間に示唆されてゐるのだ。

日勞黨の指導者たちが、これから大に日常政治闘爭をやらうと力味返つてゐるのは、民政黨の轍をふむ結果に終るやうなことにならないであらうか？

假りに、さうはならないものと想定しても、まだ問題は殘る。それは即ち、彼等が向後如何に彼等のその日常政治闘爭を指導してゆくであらうか？　といふそれである。

彼等は或ひは、刻々に大衆の間に發生して來る經濟的社會的政治的諸要求を取り上げて、あれもこれもと、多岐萬端の日常闘爭――必ずしも日常政治闘爭といはない――を指導し遂行してゆくことになるかも知れない。だが彼等は、さうした多岐多端の日常闘爭を、如何なる中心的政治闘爭目標の下に統一しようとするであらうか？

若し彼等が多岐多端の日常闘爭を唯さうしたものとして行ふだけでそれらを一定の中心的政治闘爭目標の下に統一することを拒否したとするならば、彼等のさうした闘爭は、大衆の自然生長的諸要求への隨たゞしき追隨以上に、一歩も出ることは出來ないであらう。彼等がこれから大にやらうと力味返つてゐる日常政治闘爭が、さうしたものを指すものとすれば、それは今日に於ては、大した政治的意義の伴はないものだとしなければならぬ。のみならず、それは、既成諸政黨による選擧民への社會政策的立法の約束――いかに空手形の濫發にすぎないものにしても――などによつて、手もなく吹き飛ばされる見込の多いものでさへある。といふのは、兩者は畢竟同種類の原始的諸要求に呼びかけるものだが、若しさうだとすると、既成諸政黨の方が、より多くの實行力を持つてゐるものと、一般大衆によつて思惟されがちのものだからである。

わが勞働農民黨が行つてゐる多岐多端の日常闘爭が、すべてみな究極に於て、政治的自由の獲得といふ中心的政治闘爭目標に集中合流せしめられてゐることは、玆に改めて特說するまでもあるまい。だが、かくすることによつて始めて、わが黨が行ふところのあらゆる日常闘爭が日常政治闘爭としての性質を帶びて來るものであり、またかくすることによつて始めてわが黨は、大衆の自然生長的諸要求に根ざすあらゆる闘爭を、一定の指導原理の下に意識的に統制されてゐるところの政治行動にまで高まらしめることが出來るのだ。

更らにまた、わが黨が、かくの如く政治的自由の獲得を中心的政治闘爭目標として掲げてゐるのは、わが黨が、その運動の現段階に於て眞の敵の所在を正確に認識してゐるところから來てゐるものである。わが黨は今や、唯一眞正の無產階級黨としてのその立場の故にこそ、現在の金融寡頭政治の支配下に於ては、全被壓迫民衆の強固なる同盟の基礎の上に立つ大衆的共同戰線黨として、果敢にその解放戰を展開

せしめてゐるものである。そしてこの戰鬪に於てわが黨は、全被壓民衆の共同の敵が金融資本と絕對專制勢力との抱合の上にあるものと見て取つて、それに向つて假借なき突擊を加へてゐるのだ。かかる狀態の下に於て、わが黨が、黨の指導下に行はれる一切の鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に集中合流せしめてゐるのは、政治的自由こそ、全被壓迫民衆の解放戰を次の段階にまで進展せしめる前に必ず戰ひ取らなければならない第一の關門であるとの認識のためである。わが黨の立場からは、かかる見解こそ、當面の政治鬪爭の中心目標を正當に且つ正確に指示するものとされるのだ。

日勞黨の指導者たちは、彼等がこれから盛に行はうとしてゐることを闡明してゐるところの、彼等の所謂日常政治鬪爭を、何等かの中心目標の下に統一しようとしてゐるのであらうか？　若しさうだとするならば、その中心目標は何であらうか？　それはもとより我々の關知しないことだ。だが、いづれにしても、それは政治的自由の獲得に關聯したものではあるまい。といふのは、彼等はいつも、わが勞働農民黨から屢々彼等に向つてなされて來たところの、政治的自由獲得鬪爭の下に包括され得る諸般の運動に關する共同戰線の提議を種々の口實の下に拒絕して來たからである。偶々或る場合——たとへば對支非干涉運動の場合の如き——に彼等が一時それに應ずることはあつたにしても、彼等は幾ばくもなくしてそれに關する協定を破棄するに至るを習はしとして來たのだ。かういふことからして、我々は、無產階級運動の現段階に於ける政治的自由獲得鬪爭の眞意義に關する彼等の理解の皆無もしくは不徹底を、我々にとつて充分以上の程度に學び取つたのである。

だが、假りに若し彼等が向後遂に節を屈して、政治的自由の獲得を彼等の日常鬪爭の中心的政治鬪爭目標として採用するやうになるものとするならば、その結果はどういふことになるであらうか？　その場合には、彼等が彼等自身の見解の誤謬を正した點だけは大に嘉みすべきものとされることが出來ようが、しかし若しその際彼等が虛心坦懷に降をわが黨の軍門に乞ふことなくして、尙ほあくまで頑強に彼等の頹勢をも固守しつづけて行かうとするならば、彼等は彼等のさゝやかなる感情のために、無用に無產階級の戰線の統一を破るものとして、單に一般の無產大衆からだけでなく、同時に彼等自身が率ゐる黨員大衆中の意識の高められた側からさへも、不滿もしくは憤激を向けられる隱れの絕對になかるべきことを期待する譯にはゆかないであらう。かくて、彼等が究竟、進退兩難の境地に追ひやられてゆくやうなことが起らないだらうか？　我々は徐ろに、それを彼等の今後の成り行きに徵しよう。

我々が日勞黨の指導者たちのお手前ものの追隨主義の新たなる發現を批判してゐた間に、大分時が移つた。今や我々は我々の議論をその本筋に引戾して、本節の初めに提出しておいた問題に對して、極めて簡單ながらにもせよ、一應の解答を與へておかなければならぬ。

我々は既に、わが勞働農民黨の當選本位の策戰の否定の態度について語つた。我々はしかし、玆ではそれに附帶して、わが黨が、そのために當選の意義を過少に評價してゐるものでもないといふことの理由を、一言附け足しておかなければならぬ。

わが黨は、言葉の慣用的意味に於ける『議會中心主義』を採用してゐるものではないから、議會内の多數を制する目的を以て當選者を出すことに努力するが如きことは、斷じてしない。だが、我々はわが黨の日常政治闘爭を益々効果あらしめるために必要な範圍内に於て、わが黨所屬の闘士たちの相當數を議會に送ることに努力するのは、無論のことである。我々は、何よりも殊に、わが黨所屬の闘士たちによる議會の演壇に於ける政治的暴露戰が、議會外の大衆運動に如何に力強き生命力を注入すべきかを知つてゐる。我々はそれ故に、むやみに多數の議員を選出する必要をこそは認めないといふものの、少數でも精鋭なる闘士をそこに送ることを心懸ける。この意味に於て我々は、當選の意義を過當に輕視しないで、寧ろそれを實價相當に見積もるものである。で、今次の府縣議戰に際しても、我々は當選の問題に對しては、さうした態度に終始したのであつた。

だが、前に言つた通りに、究極に於て我々の選擧對策の上に核心的地位を占めてゐるものは、當然のこととして、決して當選に對する考慮ではなくて、どこまでも黨の指導下に於ける大衆の階級的結成への用意であつた。今次の府縣議戰に於て、わが黨が或る數地方に於て、同一選擧區内に二名の候補者を立てたやうなことは、單に當選といふことだけを目的とする立場からならば、初めから不利であつたことが判明してゐたものであつたが、しかしそれは各場合に於て、正當なる宣傳のために小學校の建物を遺漏なく使用するが如き目的などの上から見て、實際必要だつたのだ。ブルジョア諸新聞の或るものが、さうしたことのために、勞働農民黨の選擧の建て前の拙劣さ加減などといふことを得々と述べ立ててゐたのは、一に當選第一主義に對する彼等の濟度しがたき盲信から來たものである。更らにまた、わが黨が開票後の或る期間に於ける活動を、即ち我々の所謂第四期戰の活動——我々が如何なる觀點から全選擧戰の期間を區劃したかについては、わが黨の府縣會議員選擧對策第五項『全選擧戰の見通し』を參照せよ。序に私のパンフレット『大衆に呼びかける』に就いていへば、その項は第九六—九八ページに出てゐる——を、相當の程度に重要視したのは、矢張り同樣に、黨の指導下に於ける大衆の階級結成の問題に對する我々の一般態度を反映したものに外ならないのだ。

この主要目的のためには、わが勞働農民黨は、完全に豫定の効果を收めた。その點からいへば、我々はたとへ一名の當選者を出さなかつたとしても、毫も悔いる理由を見出さなかつたであらう。だが、實際上からいへば、我々が克ち得た當選者數は、甚だ朧ろ氣ながらにもせよ、我々が宣傳の方面に於て得た効果を指標してゐるものとして見ることも出來るのだ。この意味に於て我々は、我々が今次の府縣議戰に

際して擧げた成績について、二重の歡びを感じてゐるものである。そして、その歡びは、今後必然的に我々の上に來るべき、より大なる試錬に對して今我々が固めて居る覺悟によつて相殺されるものではない。我々は寧ろ、ただ我々の心裡に於て、その歡びがその覺悟と融合渾一してゐるのを覺えるのみだ。

五　烈しき選擧干渉の下に立たされた勞働農民黨の戰ひ

我々は更らにまた、わが勞働農民黨が如何に他動的原因から來たところの、あらゆる不利な情勢の下にも戰はねばならなかつたかについても、短き記述を挿んでおかなければならない。

わが黨が指導もしくは遂行するすべての運動が、それらの完全なる合法性にも拘はらず、常に官憲の不當な彈壓の對象とされて來たことは世間周知の事實である。これは決してこの儘に放置されるべきものではないが、しかし我々は茲では、さういふ政治的不公正に對抗する論策を掲げるよりは、寧ろそれに關する事實を生地のままに擧げることを目的としてゐるものである。ただ、さうした事實の普遍的存在そのものが、如何に我々の政治的自由獲得鬪爭の合目的性を實證してゐるものであるかは、茲で正當に示唆されるべきものであらう。

わが勞働農民黨への官憲の不當なる彈壓の慣行は、決してわが黨の合法的な選擧運動をも除外例とはしなかつた。この點に關して私は、私自身の全國遊説中の經驗からだけからでも、何人の期待にも副ひ得るほど多量の材料を、必要の場合には供給することが出來る。だが私は、かうした割り切つた問題に對しては、今はその煩累に手を染めるほどの必要はあるまいと考へるから、茲では一切それを省くことにして、ただ一言、さうした不當な彈壓は、明かに普選の精神への反逆であるといふことを言ひ添へておくだけに止める。

だが、問題は單に當局による普選の精神への反逆の上に存してゐるだけでなく、本來無産政黨の擡頭を防遏する目的の下に細心の用意を以て作られた普選法そのものの上にも無數に存してゐる。例の供託金の義務とか、選擧權および被選擧權の行使に關する年齡の不當なる制限とか、一定の地域内に於ける住居年限に關する不當なる制限とか、婦人參政權の一般的拒否とかの如きは、今日では誰れもに熟知されてゐる通りに、名のみの普選法中のあらゆる惡條項中の最も顯著なるものの數例である。わが勞働農民黨は、政治的自由獲得鬪爭への首途の發端から、普選法の徹底的改正の要求を絶叫して來たが、我々は今次の府縣議戰の嵐の中を潛り抜けて來た今日に於て、その要求を具體化する運動を提起する必要を、層一層と痛切に意識してゐるものである。

それからまた、外見上一小問題のやうに見えながら、實は選擧の結果の上に無視すべからざる大影響を與へたものを茲に一つ例示すればそれは、投票日を公休日とし、賃銀・日當・俸給を公費負擔に移せといふが如き、わが黨が無産階級的立場から正當に掲げて來た要求が、現

行の選擧法の上には全然顧みられてゐる痕跡がないといふ一事である。そのために、當然わが黨に與へられるべくして全然わが黨から失はれて行つた勞働者の投票は、意外の多數に上ぼつたに相違ないのである。と同時に、このことはまた、大都市に於て棄權者が最も多く出たといふ事實の一原因としても、相當細心に究明されなければならないものである。

次に今次の府縣議戰に際して、普選法中の罰則がまた、言語道斷のものであつたことが證明された。その罰則の無類の煩雜さの前には、さすがに官憲や既成諸政黨さへも徹底的に手古摺つたものだが、殊にわが勞働農民黨の立場から見ると、それは單に煩雜極まるものだと言ひ得られる以外に、更らに一層不都合なことには、それには解釋の餘地が非常に廣く殘されてゐるところから、特に官憲に最も烈しく煙たがられてゐるわが黨に對しては、暴虐極まる方法に於て適用されることも出來るし、また實際適用されもした點に於て、到底我慢のできないものである。しかもわが黨は、まだその上に、その罰則の、、、曲解のためにも、屢々いひつくしがたき苦痛を受けさへもしたのであるだが、それすら、官憲にはまだ不充分だつたと見えて、治安警察法および出版法以下の、言論・集會・結社等々の自由に多大の交渉のある諸法規が敏活に發動されて、特にわが黨の上に加へられた選擧干渉を、一層堪へがたきものとならしめたのであつた。

かういふ事實に關して各地から送られて來た報道は、わが黨の本部の卓上に山積してゐて、それらを一々點檢するさへも可なりの骨折りであるが、しかしわが黨の上に加へられた選擧干渉が如何に微細の點にまで及んだかを髣髴せしめるために、次にそれらのうちから抽出された數例を示すことにする。

（一）これは福井縣での出來事。——わが黨支部の書記長は、わが黨公認候補に對して隷屬關係(？)にあるといふやうな奇怪な根據から（そんなことを規定してゐる法律は何處にもない）、候補者と同一會場で演說することが、違法だといつて禁止されたので、同書記長はその場合餘儀なく別の會場で演說しなければならなかつた。しかも、さういふ法律上の制限は何處にもなく、選擧法第九十六條によれば、何人も演說ができるし、かつ會場の同一か異るかは、全然問題でない。

（二）矢張り同じ地方でのこと。——演說會出演の辯士たちが夕食の辨當を買はうとしてゐると、警官は、それは選擧費用の支出だから、選擧事務長のみがなし得ることだと言つて、それを制止した。かくてそれらの辯士たちは、辨當も買へず、剩さへ同樣の理由で汽車にも乘れず、深夜の二時頃、とある峠を越して、ヘトヘトになつて歸宅した。これは明かに警察側の曲解が原因となつたもので、選擧法第百一條に『但し演說または推薦狀による選擧運動の費用はこの限りにあらず』とある明文が無視された。

（三）大阪市でのこと。——わが黨の候補者のすべては、一齊に弥

務所を臨檢され、ビラ、ポスター、立候補宣言、黨の推薦狀、等々の全部を沒收された。

(四)ポスターに關して。——黨本部で内務省檢閲濟になつてゐたポスターが、殆んど各地方に於て沒收された。わが黨の運動の上に如何に治安警察法や出版法などの不當な適用による彈壓が加へられて來たかの一適例。

(五)言論の上に加へられる抑壓。——演說會に於ける中止、注意檢束に數限りなくあつたが、次の一例は、おそらく最も極端なものに屬するものとして、誰れもの驚異に値ひするであらう。福島縣石城郡の山代吉宗候補の如きは、二十七回の演說で、十八回の中止と九十七回の注意と、一名の檢束とを見た。等、等、等。

『もう澤山?』——かういふ際が、そこここから聞かれさうになつて來た。だが、上に舉げたものは、無限に豐富な類例の中から手當り次第に舉げられた數例にすぎない。それらは、たとへていへば、大海から汲みあげられた一杯の水ほどにしか當らないものだ。かういふ譯で金融寡頭政治の支配下に蹂躙されてゐる全被壓民衆は、正當に生活上の苦痛を叫ぶ口をさへ抑さへられてゐるのだ。この際、政治的自由獲得鬪爭が資本主義發達の現段階の誤認から來てゐるものだといふやうなことを、誰が今一度言ひ直すことが出來るか? 政治的自由獲得鬪爭を府縣議戰の熱火の下に戰ひ終つた我々は、それによつて層一層明確にその鬪爭を現實に戰ひ進めるべき必要を意識せしめられて來た。かくして、ここにもまた、理論と實踐との完全なる統一が示された。

六 ブルヂヨア新聞の論調と、小市民層の偏見

官憲側からの酷烈を極めた選擧干渉と關聯して、我々はまた、既成諸政黨側からの逆宣傳と、エセ無產政黨側からの誹謗中傷とをも、無制限に受けなければならなかつた。我々はもとより、我々の理論的根據から、既成諸政黨やエセ無產政黨を、極力暴露し排擊した。だがそれとこれとは、一つにされるべきものではない。何等の事實的根據も理論的根據もなき單なる排擠のための排擠と、確實なる事實に立脚する確實なる理論を根據とする政治的暴露との間には、不測無限の距離が横はつてゐるのだ。そして、正しき判斷力と素直な感情とを具へてゐるものに取つては、その事理を看取することは、決して困難ではないのだ。

それもそれだが、殊に我々にとつて、既成諸政黨の放縱不羈的なる逆宣傳以上に我慢のならないのは、エセ無產諸政黨の唾棄すべき誹謗中傷である。我々のかうした憤激的態度は、畢竟するに、彼等の恥づべきユダ的裏切りに對する無產階級的理論および正義感の假借なき制裁を反映するものだ。しかも、それを尋常一樣の『賣り言葉に買ひ言葉』として解釋するのは、味も素ツ氣も深みも生氣もない凡俗的な小市民的常識がさせる業である。だが、常にかうした小市民的常識——我々の側から見れば偏見——に油をさして來たことに關しては、ブル

ジョア的宣傳機關中の最も効果的のものであるブルジョア諸新聞紙中の一部のものが最大の責任を負はなければならないものだといふこともまた、茲で挿註的に言及されなければならない。

たとへば、わが勞働農民黨を包含する左翼側が常に理論鬪爭に於て最も凄まじき氣勢をあげてゐるのを見て、ブルジョア諸新聞紙は、早合點にも程こそあれ、左翼側が――從つて勞働農民黨もが――常に無產階級陣營內を引ッ掻き廻はし、かつその戰線の統一を攪亂してゐるものと思ひ込んで、さうした印象を大衆にも頒ち與へることを企圖してゐるやうに見える記事を、時に觸れ機に臨んで、紙面にバラ播いてゐる。

だが、實際上に於て、無產階級陣營內を引ッ掻き廻はし、かつその戰線の統一を攪亂する擧に出てゐるものは、エセ無產諸政黨およびそれらを繞ぐる右翼並びに中間諸派である。このことは、初めから單一無產政黨主義を唱へて今日に及んでゐる勞働農民黨の列中から、昨秋すべてのエセ無產諸政黨が、主として卑劣な、もしくは臆病な動機から、相前後して裏切り的態度で脫け出して行つたばかりでなく、彼等が一旦そこから脫け出して行つた後には、必ず決まつて勞働農民黨を振り返つて見て、考へ及ぶ限りのデマゴーグ的言辭を逞ましうして、それに向つて蹟づくことを習はしとして來たといつたやうな、一の間近かな歷史的事實によつても證明されてゐる。ところが、一方の勞働農民黨は、それにも拘はらず、刻々起つて來る個々の共通利害の問題に關しては、曾て同黨を裏切つて脫退したエセ無產諸政黨に對しても、屢々共同戰線を提議して、屢々彼等からそれを拒絕されて來たのだ。[illegible]は、勞働農民黨が、階級的根本原理上の一般問題に關して、彼等に向つて假借なき理論鬪爭を不斷に挑んで來たのは、一體何のためであるか? それは、勞働農民黨が、その單一無產政黨主義に反逆するところの彼等(エセ無產諸政黨)の非階級的『指導原理』――若しさう呼ばれ得るならば――を餘すところなく克服して行かうとする企圖から來てゐるものである。それは畢竟、かくすることによつて、その究極に實現されるであらうことが期待され得る無產階級戰線の統一こそ、眞の搖るぎなき統一でなければならないからだ。

更らにまた、一部の典型的な『進步的』ブルジョア諸新聞紙の論調の上に、餘りにも屢々出て來るものは、例によつて例の如き、無產諸政黨に對する無條件的合同の勸告である。かうした議論が理論的に支持できないものであることは、今いつたばかりの趣旨によつて明かであらう。だが、實際上に於て『進步』型のブルジョア諸新聞紙の無條件合同の勸告の論據は、一個の淺薄極まる便宜主義にすぎないものである。即ち彼等によれば、無產諸政黨はその分裂によつて無力にされたものだが、その再合同によつて有力にされるであらうといふのである。

だが、さういふ議論には、果して幾らかでもの事實的基礎があるものとされるべきであらうか? 我々は、少くともわが勞働農民黨の立

場からは、斷然『否！』と答へる。わが黨は、曾てそれの上に起つた分裂のために、すべての不純分子を淘汰し得たことによつて、純粹の無產階級黨となり、そしてそのために一層強くなることを得た。今次の府縣議戰に於てわが黨が見事な勝利を收め得た原因は、遠くそこに伏在してゐたものだをいふことすら出來る。それだのに、若し我々がこの際輕卒にも一部のブルジョア諸新聞紙の口車に乘つて、一旦我々と袂を別つて以來まだ少しもその形質を變へてゐない不純な諸分子と再び手を握るやうな擧に出るならば、それから豫想し得られる結果は、果してどういふものであらうか？　少くとも、わが勞働農民黨がそのために一層有力な政黨となるであらうといふやうな突拍子もないロジックには、我々は斷じて耳を借すことが出來ないのである。

七　小市民層の偏見は如何に克服されたか？

我々は今次の府縣議戰に出陣して、官憲から加へられた酷烈なる選擧干渉や、既成諸政黨の惡意に充ちた逆宣傳や、エセ無產政黨の根も葉もない誹謗中傷やに直面した以外に、尙ほ、ブルジョア諸新聞紙の故意もしくは偶然の無理解なる論調や、それに密接に聯關するに市民層の各種各樣の偏見や影響やの下にも立たなければならなかつた。さういふことのすべてが、少くとも一應は、どれほど我々の形勢を不利にしたかは、容易に測り知られないものがある。

それさへあるに、わが黨に附き物になつてゐる例の物質的資力の極端なる缺乏は、わが黨を一層甚だしき苦戰の境地に突き落した。私は選擧戰後に京都に立ち寄つたとき、同地の兩選擧區で各々第二位に當選したわが黨候補者奥村甚之助君および神田兵三君に關して、前者は百六十五圓の、後者は二百五十圓の、選擧費用を使つた切りだといふことを聞かされた。これらの僅か二つの例を他の個々の場合の指標とすることは無論出來ないであらうが、しかし全般の上から見ても、わが黨が如何に驚くほど少い資金を持つて善戰したかは、さういふことによりても幾らかは示唆されてゐると思ふ。

だが、私が初め本節に於て觸れようと企ててゐたことは、さういふことよりも、寧ろわが黨に對する小市民層の偏見と、小市民層へのわが黨の働き掛けとの間に現はれた一種の微妙な交互作用であつた。

私は既に、ブルジョア諸新聞紙の無理解な論調や、それに密接に關聯する小市民層のわが黨に對する各種各樣の偏見やが、少くとも一應は、わが黨の形勢の上に非常に不利に反應したことを語りかけてゐた。だが、今私がいはうとしてゐることは、皮肉千萬にも、小市民層のわが黨に對する偏見については、それが如何にわが黨の選擧戰における活動を阻害したかの方面を見るよりは、寧ろわが黨が彼等に對する不斷の働き掛けによつて、如何に彼等のその偏見を徐々に――しかし確實に――克服して行つたかの過程を見ることの方が、より多く我々の深き關心に値ひするといふ一事である。

私が見た限りでは、京都や名古屋でのわが黨の勝利は、或る程度に

その過程の動き方のタイプを明示した。それらの地方に於ても、わが黨が政治運動を開始した當初に於ては、小市民層のわが黨に對する偏見は樣々の形式に於て示されなかつた譯ではなかつたが、しかし同地方に於ける黨員たちは、不斷の日常鬪爭を重ねて來たことによつて、次第にそれを克服することに成功したがために、選擧戰が愈々その高潮期に達した頃となると、彼等は最早、わが黨の立場の無產階級的色彩が鮮明であるがために、却て熱烈にわが黨の政治的自由獲得鬪爭を支持するやうになり、かくて投票日に於て彼等は、わが黨の候補者の當選を確保するために、潮の湧くが如く投票場になだれ込んで行つたのであつた。我々がかういふ情景を目擊するとき、我々はわが黨が、單に組織勞働者や組織農民の側からだけでなく、小市民層から成る大衆の側からも同樣に、かくもすばらしき支持應援を得るに至つたことを非常に心强く思ふものである。我々は、かうした視角からもまた、わが黨の立黨の精神が、今後次第に全國を風靡してゆく趨勢が必然的に踏むであらう過程を、鮮やかに展望することができるのである。

わが黨が、よし現在ではわづか數地方に限られてゐたにもせよ、今いつたやうな調子で選擧戰上に見事な成績を擧げることが出來たのは、無論第一段には全國各地の黨員たちの火の出るやうな大努力によつたものであるが、しかし同時にそれはまた、わが黨がその選擧政策の上に於て正當にも政治的自由の獲得を中心的政治鬪爭目標として示したことのためでもなければならなかつた。現政局の上に於て、純正なる無產階級的立場から、全被壓民衆解放戰線上の前衞として立つてゐるわが黨が、當面の政治的狀勢に應じて採用したその中心的政治鬪爭目標の妥當性はかくして完全に實證された。そして、それを契機として、わが黨は今や、政治的自由の獲得への努力の約束の時代から、その履行の時代へと轉入したのである。從つて、わが黨の前途は、益々多難であると同時に、また益々多望であるものとしても、我々の眼底に映じて來てゐるのである。

日本の滿蒙經濟政策

堀江歸一

對支威壓策の失敗

日本は日支經濟上の關係を律する上に於て、如何なる政策を以つて支那に臨む可きものであるか。一の政策である以上は、之を運用し、實現する政治家の何人であるかに依つて、多少の異なる所のあるのは已むを得ないかも知れないが、我國經濟の支那に對して持つ可き關係の如何なる邊に存するものであるか、將た又日本の經濟を繁榮ならしめるに就ては、支那を如何なる地位に置く可きものであるかに關して國論の一定する以上は、對支經濟政策の如きも、枝葉の點に就ては兎に角其根幹に對して、時の爲政家の甲黨に屬するとか、乙派に居るとか云ふ一時的事情に依つて、濫に變改することを許されないものと考へる。往年彼の大隈內閣は支那政府に向つて、所謂二十一個條を骨子とする日支條約の締結を强要し、其事の餘りに强く軍國主義の色彩を帶び、侵略主義の鋒鋩を示せるの故を以つて、啻に支那のみならず、世界關係諸國の感情を傷けたもの少なしとしなかつた。即ち歐洲諸國が戰爭に全力を傾倒して、支那に力を用ゆる餘裕を持たない際に、殆ど火事場泥棒式に日本自ら支那を支配しやうとして、自由勝手の要求を支那に試みたことゝ、無力の支那に向つて、軍事的行動を含める最後通牒を致し、以つて我意を遂げやうとしたことゝの二點は其後幾年の久しきを通じて、對支交渉の妨碍と爲つて居つたのであつて、後年憲政會內閣が支那關稅會議に臨んで、支那に聊か有利なる言論を爲した所で、往年の惡感情が一掃されたとは見るを得ない。

斯くて日支條約の交渉に於て、支那に對して日本が恐る可き禍心を包藏して居り、其慾望の甚だしきこと、歐洲戰前の獨逸、日露戰前の露西亞と異ならざる事實を示したのは、我國に取つて返す返すも遺憾とする所であつて、其我國に對する英米國民の感情を傷け、支那人の反感を招くに至つたもの少なしとしない。前者は或は薄らいだかも知れないが、後者は其後日を經ると共に、次第に濃厚と爲り、國恥記一として屢々排日運動の催ほされる動機と爲るが如き、吾人の常に見る所であつて、此事に徵して政治家の輕躁なる行動の國策に大なる不利を及ぼすに至る一事が明に看取されるのである。

對支借款政策と無爲政策

大隈內閣の後を承けたものは、寺內內閣であつて、此內閣の爲す所

は聊か前車の覆轍に顧みて、前內閣に於ける程露骨ではなかつたが、其主眼とする所は借款政策に依つて、支那に日本の權勢を伸張するの一事に外ならなかつたのである。即ち當時歐洲戰爭進行中の故を以つて、歐米諸國は軍需費に對する財源の調達に忙はしく、支那に對して資金を供給する餘裕を缺いて居つた際であり、支那としては日本に就て、之を求めるの外に、賴る所を知らなかつた機會に乘じて、日本は時の支那政局を擔當して居つた段祺瑞一派の軍閥政治家や、梁士詒一派の交通系政治家と固く結託し、支那に向つて、巨額の資金を融通すると共に、其擔保物として、徵收した利權や、財產を運用して、我國の對支勢力を發展せしめることを期した。當時筆者は或る用務を帶びて、北京に滯留して居つたが、寺內首相の密旨を承けたと稱する所謂有志家や、寺內將軍麾下の陸軍々人の如きが恰も對支外交を擔當したと云ふ可き風を以つて、支那要路の間に斡旋しつゝある狀を目擊し、其公私を混同するの故を以つて、苦々しく感せざるを得なかつた。而して對支外交に就て、彼等の云ふ所を聞くと、借款の行はれると共に日本の經濟的權勢の支那に發展するに乘じて、之を保護する理由の下に、支那の要地に軍隊を派遣し、日本軍隊自ら支那兵卒の訓練に當り財政、軍事の兩方面から、幾年かの間に支那に對する領土上の慾望を遂行しやうと云ふことを以つて、對支政策の根抵とするのであつて、其低調であり、幼稚であることは、今日から見て驚くの外はないが、當局者は頗る眞面目であつて、財務官と云ふが如き無用の官職すら設けられて、借款の行はれることを期したのである。

然も寺內內閣に次いで成立した原內閣は卒然對支不干涉を以つて、外交の要訣とする旨を中外に聲明して、從來の行掛りを一掃するに努めた。斯る對支政策に於ける急變は果して賢明なるものであつたか、どうかは姑く別問題とし、歐洲戰爭當時から其後幾年かの時期を通して當初の軍國主義や、侵略政策に基調を置いて居つた、我國の對支政策が漸く斯る色彩を脫し、政策を實現する當局者亦斯る主義政策の到底實行するに堪へざるものである事實を看取したものと認められる。唯此間に於て、我國の對支政策に終始一貫して居る特徵は滿蒙に於ける我國の特殊的地位を高調し、支那を始め關係諸國をして之を承認せしめると共に、日本亦此一事を立脚點に置いて、對支一切の關係を律しやうとするのである。

滿蒙の特殊的位地

然らば滿蒙地方に於ける我國の特殊的地位なるものは、如何なる理由に基いて主張されるかと云ふに、

第一、我國は日淸日露の兩戰役に臨んで、滿鮮兩地方を我國の權力下に置くに就て、數億の國帑と十數萬の人命とを犧牲に供へた。然る以上は、我國は朝鮮に對しては勿論、滿洲に對しても之を我國の勢力範圍に置く當然の理義を有する。滿洲を我國の勢力範圍とする以上は、此事に關聯して、滿洲と相接續する蒙古をも我國の權力に服せしめて、始めて我國々民生活の安全を維持するを得ること、

第二、既に完全に我國の領土と爲れる朝鮮にとつては、何等の言ふ可きものを持たない、滿洲蒙古に關しては、之を我國の產業に對しては原料品を、我國の國民に對しては、食料品を供給する地域たらし

めること、

第三、滿洲は對外的に我國が事業上の力を伸張するに適當の地であり、事業が起れば、年々歳々增殖する人口の一部に衣食の道を備へて、其安住を諒らしめるを得ること、

の數點を以つて、其重なるものとする。是等の事たる、表面から一瞥すれば、如何にも道理の動かす可からざるものがある。固より一國々土の面積が廣狹孰れであるかは、國家の經濟的盛衰に對して、直接の關係を持たないことと云ふ說は屢々一部人士に依つて、主張される所である。一國が純然たる商業國として國を樹て、外國に向つて國土の全部を開放し、外國人の居住來往を自由にし、又外國船舶の碇繫を便利にし、更に進んで外國人の來遊を勸奬するが如き政策を取る場合には、國の面積の如きは、其盛衰に何等の關係を持たないと云へるが、斯くて得られた國の繁榮と云ふが如きは、要するに外國又は外國人の活動した餘波を蒙れる受働的のものであつて、何等の根柢として依賴す可き基礎を持たない。國家をして眞實鞏固なる基礎の上に、經濟的發展を遂げしめやうとするには、一國は自國の領土として若干面積の國土を擁すること、自國の領土が本來狹隘であり、加ふるに他に之を擴張す可き方策の存せざる場合には、他國に屬する未開の領土に向つて、自國の權勢を伸張することの二點を以つて、必要の條件とするのである。固より國際經濟が絕對自由の原則を以つて律せられ、一國が他國との間に、輸出入貿易を營むに就て、何等の制限を加へられず、自國民を他國に移住せしめるに就ても、亦何等の妨碍の行はれざるときには、一國の領土の狹隘であることも、一國が未開國に其支配す可き領土を持たないことも、敢て意とするに足らないであらう。マンチスター派の經濟學者が一方に貿易自由の原則を主張し、其國際間の廣きに亙つて、實行されなければならないこと、又實行される可きことを鼓吹すると共に、他の一方に領土の擴張を輕視し、殊に其侵略的擴張を不可なりとし、植民地の母國に對する獨立を不問に付したのも、亦誠に首尾一貫した信念であるとするを得るのである。

領土の經濟的價値

然しながら今日自由貿易論の實現の如きは、一個の空想である。假令ひ過般のジユネーヴ國際經濟會議に於て、貿易の方鍼を自由にする必要が諸國代表者に依つて認められ、又其前から多少斯かる風潮の動きつゝあることなしとしないが、何時に爲つて、實際的効果の著しきを得るか、疑問とせざるを得ない。茲に於てか日本の如き領土の狹隘なる國が、單純なる一個の商業國を以つて、滿足せず、進んで一個の工業國として、國際經濟上に立たうとする以上は、如何にして原料品の供給を確實にするかと云ふことゝ、如何にして既製品の販路を安全にするかと云ふことゝの二點に就て、深く意を致さなければならない。朝鮮問題に就て、我國民が多年煩悶し、明治初年の征韓論から、日清戰爭に於ける朝鮮獨立擁護論と爲り、更に日露戰爭を經て、保護國としての取扱から、名實共に完全なる日本の新版圖に移すに至るまで、種々の曲折を經て、今日の狀態を見ることゝ爲つたのも、畢竟日本の經濟的立國の要求する所に應ずるに外ならなかつた。而して朝鮮統治の成績に就ては、今日尙ほ兎角の批評があり、鮮人中に日本の施政に服

さゞる者のあることの、掩ふ可からざる事實であるが、之を大體から云へば、(一)朝鮮に於ける農產物が次第に其產額を增加し、(二)農業に依つて鮮人自身の生活を豐にするを得ると共に、內地に對する農產物の供給を豐富にし、(三)朝鮮に於て各種工業の興起する勢を盛にし鮮人に工業に依つて、衣食するの道を授け、(四)斯る物質的方面を通じて、鮮人に滿足を與へ、又彼等を勤勉なる生活に導きつゝある諸點は經濟上の方面から見て、我國の朝鮮統治に幾分なりとも進步の跡の認められたとす可きであり、今日以上に內地の資本なり、朝鮮の資本なりが朝鮮の鑛山業、森林業に投下されて、原始的產物の內地に對する供給を豐富ならしめるを得たならば、明治初年の征韓論以來日本の朝鮮に拂つた犧牲は酬ひられるとす可きである。

滿洲蒙古の如き、經濟上の見地から云へば、我國の爲めに、原料品供給の任に就かしめる可き運命を持つのである。南滿洲中、南滿鐵道沿線に於ける大小都會の如きは今後幾許かの日本人を吸引し、彼等に安住の地を與へるかも知れないが、其數の如き固より大なるを期するを得ない。滿蒙の我國に對する經濟的價値は實に其原料產出地たることに存する。即ち我國の資本技術——時に努力を以つて、滿蒙未開の地を開發し、斯くて生じた原始的產物の供給を我國に於て潤澤に受けることが滿蒙に對する我國政策の基調と爲らなければならない。吾人が滿蒙に對して、原料品產出地として、重きを置くのは實に棉花、羊毛、鐵鑛、木材の供給の豐富なる事實に關聯する。今日朝鮮には棉花の作付段別十七萬四百三十七町、收穫高一億三千七百八十五萬斤、其輸移出高一千三百十一萬圓を數へて居るが、南滿洲の如き棉花栽培地としては、朝鮮と略ぼ等しく、關東州に至つては、朝鮮の主產地たる木浦に勝ると稱され、關東廳の奬勵に依つて、斯業に駸々たる發達を告げ、將來八萬町步の棉作地の出現する計畫であり、滿洲には現に一萬五千町步の棉作地を見るのである。羊毛に就ては、大正七年以來滿蒙に於ける緬羊の改良繁殖の計畫其緒に就き、將來有望であると稱され、鐵鑛も亦支那の供給に仰ぐ可きもの〻多々ある。森林に就ては、滿洲に鴨綠江流域、渾河流域、松花江、豆滿江、東支鐵道東部並に三姓地方等南北滿洲に亙る大森林があつて、人の斧鉞を下すを待つの趣きであるとすれば、我國の如き、此方面に向つて、製材事業を企て、內地に於ける木材供給の不足を補ふことを必要とする。滿蒙が我國經濟の存立に緊要の關係を有する一斑は右に依つて明瞭と爲るのである。

特殊的地位の解釋

以上の目的を達するに就て、論者は滿蒙に對する我國の特殊的地位と云ふことを口にし、之を以つて一切の滿蒙政策を決定しやうとする。若しも特殊地位と云ふことにして、日本の經濟生活を完成する上に於て、特殊の地位を有するものが滿蒙であり、滿蒙が日本に取つて、特に重大なる地位を占める意義に止まるとすれば、私も之を諒とする。然しながら我國に於て、殊に一部人士の間に於て用ひられる特殊的地位と云ふ言葉の內には、軍事上、政治上の意味の附合される場合が多々ある。現に日露戰前朝鮮に關する兩國の交涉に於ても、日本は露西亞をして朝鮮に於ける特殊的地位を承認せしめることが一の要目と爲つて居り、其れが後に發展して、完全なる朝鮮の領有に化し去つた來

際から云ふときに、近年日本が支那や他の諸外國をして滿蒙に於ける日本の特殊的地位を認めしめやうとすることが軈て日本をして滿蒙に對する領土上の野心を果さしめる理由と爲り、行掛りとなりはしないであらうか、と云ふ疑惑を生じ、斯くて此一事は常に米人や、滿蒙に利害關係を有する諸外國人の關心して已まない所である。而して、我國に於て、軍閥の一派や、此一派と氣脈を通ずる政治家が領土の對外的擴張を以つて、我國策の一要目と數へる以上は、如上の猜疑心を以つて、我國外交政策の[illegible]められることも、亦已むを得ざる所であるやに解される。

軍閥外交の復活

政友會は原内閣の時代に對支非干渉の方針を闡明し、又[illegible]支那に向つて、何等立入つた行動を取らなかつた結果、日支兩國の關係は比較的圓滿なるを得たのである。然るに今田中首相に依つて、率ゐられる政友會に至つては、其對支關係に於て、前日の政友會に比較して、趣きの大に異なるものを示せるやに見える。第一田中男自身が軍閥の出身であり、軍閥を背景として、其政治的威力を保つ爲めに、軍閥の言に左右されて、外交方針を決定する傾きのあること、第二支那軍閥殊に張作霖一派を援助し、彼等の勢力を通じて、日本の地歩を有利に展開しやうとすること、第三憲政會内閣の消極政策に對して、所謂積極政策を滿蒙に試みやうとすることの三點は田中内閣の對支外交に於ける方針であつて、幾多の機會に於て闡明され、又其端を發したものもあり、田中首相が外交に何等の經驗なき身を以つて、永く外相を兼攝するが如き、軍閥外交を實行する便宜に用ゐるものと解されて居るのである。然らば田中内閣は如何なる計畫の下に、滿蒙に對して、積極政策の歩を進めやうとするものであるか、此點に就ては、其具體的成案の示されたものこそないが、[illegible]ることの如き、南滿洲鐵道を根據として、[illegible]利權の獨占を謀ることの如き、要するに積極政策の片鱗の現はれたものとするを得るであらう。然も斯る積極政策は如何なる結果を生ずるかと云へば、其端緒に於て、早くも支那人の反感を招いて、日本の物貨に對するボイコットを誘發するに至れると共に、諸外國の誤解を招き、嫉視を强くし、結局日本は自繩自縛の窮地に陷りはしないかと想像されるのである。

危險なる積極政策

領土を外に擴張し、此領土に施すに一國の政治的又は軍事的統制を施さゞれば、其國は未開國に向つて、經濟上の發展を爲す能はずとするが如き、軍閥に屬する者が爲めにする一種の僻論であつて、政友會が偶々軍閥者流を首領に仰ぐの故を以つて、所謂滿蒙積極政策なる名の下に、此僻論を實現しやうとするが如き、我國の爲めに謀つて不利益の大なるものと云はざるを得ない。我國の工業が今日其必要とする原料品の多くを外國の供給に仰ぎつゝあるのは、工業存立に於ける一大缺陷である。棉花、羊毛、生護謨、石油、鐵鑛の如き、何れも工業の重要原料品であつて、工業將來の發展は一に是等物資の供給の潤澤であると否とに依つて、定まるものと見るを得る。歐米諸國が工業國として起つ上に於て、斯る原料品の供給を如何に保持するかに就て拂

ふ苦心の少なからざることは、內外人士の夙に認める所である。我國の如く國土狹隘であり、天惠亦限られて居る場合には、是等物資の國內自給を望むは至難であつて、此點は斷念しなければならない。斯くて之に代る方便として、我國と交通上便利であり、我國事業家の移住放資に自由なる未開地を開發する問題が起り、之に適する地として、滿蒙が選ばれるのである。思ふに彼の門戶開放と云ひ、機會均等と云ふ用語は英米兩國が露國の極東に對する侵略殊に偏私獨占を主眼とする政策に對抗する爲めに、發明されたものであるが、同時に我國對支經濟政策上の根柢と爲つて、年の久しきものがある。或は英米の如き資力充實し、鍛鍊の豐富なる國は斯る開放的政策を以つて、他に臨むことを得策とするが、我國の如き是等の資格に缺けて居る國は自ら事情の異なるものがあり、或る程度まで他國を排除して、自國の獨占的勢力を他國の未開地方に築かなければならないとする說は從來屢々吾人の耳にする所であつて、之を實現する手段として、最も過激なる者は未開地方に對する領土的侵略を主張し、聊か穩和なる者と雖も、尙ほ特殊的關係に基いて、日支兩國間に於ける經濟同盟の組織を必要とする。

日支經濟同盟の不可行

然しながら領土的侵略の如きは、世界諸國を通じて、平和主義の行はれる勢の頗る旺盛であり、加ふるに支那の全土を通じて、自由平等の經濟的關係を結び、自由競爭の下に、自他の長所を發揮しやうとする場合に、到底行ふ可からざる所であつて、現に田中內閣か滿蒙積極政策を唱へて以來、何等具體的方策を示さゞるに拘はらず、著しく米露諸國の感情を刺戟するに至つた一事に徵しても、關係諸國全體を敵とし、又支那全國民と爭ふ覺悟のなき限り、支那の領土に日本の野心を逞うするを得る道理はない。然らば日支兩國間に一種の經濟同盟を締結することは、如何であらうか。此事たる、田中內閣が積極政策の名に隱れて、軍事上の行動を支那に試み、軍隊を背景として、經濟の進出を謀らうとする計畫に比すれば、勝れるものありと云へるかも知れないが、私は直に此議論にも贊成するを得ない。蓋し一部の論者は滿蒙に對する我國の特殊的關係を認め、我國をして滿蒙に於ける經濟的狀勢を支配する地位に立たしめることに重きを置いて、經濟同盟の成立を主張するのである。即ち經濟同盟を以つて漠然兩締盟國の經濟的關係を密接にすると云ふに止まらず、一國は他國から優先的に天然資料の供給を受ける、他國は一國から同じく優先的に工藝製造品を買入れる、而して其賣買の行はれる間に、同盟以外の國を排除する意義の存するものでなければならないと解釋する。經濟同盟に對して斯る解釋の下される以上は、此種の同盟を日支兩國の間に組織するには、兩國相互の通商取引に特惠的待遇を與へる協定を結ぶ可きである。隨つて經濟同盟と云ふからには、第一支那に於て產出される天然資料即ち原料品の類であつて、殊に日本の資本に依つて生產されたものは、年々或る分量まで、日本が優先的に供給を受けること、第二、支那に於て、日本の資本に依つて產出される天然資料の供給を增加せしめる爲め、外國に借款を起すに當り、先づ日本に其交涉を爲すこと、第三日本は支那の天然資料を輸入する場合に、自由輸入を以つて、其本則と

し、一方に外國から輸入する同種の天然資料には相當の課稅を爲す。若しも兩者に課稅する場合には、日本の物資に對する稅率を輕くすること、第四、支那が日本から製造工業品を輸入する場合には、之に對する輸入稅は全然免除するか、少なくとも外國同種の物資に賦課するものよりも、之を輕くすることとの諸條件を包含しなければならない。

然るに現在の通商條約は其日本と諸外國との間に於けると、支那と諸外國との間に於けるとの別を問はず、如何なる主義の下に、締結されて居るであらうか。其主義の一は所謂通商の自由であつて、此自由を享受する爲め、各國は他國との通商條約に於て、或る一國に對して、外殊遇を與へることを禁止する方針を取つて居る。殊に支那の如き、外國人の指目して、所謂天然の寶庫と稱するものであつて、如何なる國も此寶庫に近づくことを希望して已まないと共に、或る一國をして之を私せしめることに、絕對の反對を表する。列國が今日支那に對して門戶開放と機會均等とを二個の主義として居ることの如き、即ち右の趣意に基くものであり、斯くて日支兩國共に他の諸國に對して、最惠國條欵の無條件適用を基礎として、通商上の關係を律する規定を通商條約に於て、認めて居る。果して然らば此規定が通商條約から、除却せられざる限り、特惠主義の下に、兩國の間に經濟同盟を成立せしめやうとした所で、事實に於て、不可能とせざるを得ない。

假に通商條約が改正されて、兩國の間に特惠主義を以つて、關稅則を制定するを得るとした所で、果して是れが兩國に有利なる結果を齎す所以と爲るであらうか。第一、日本は支那に原料品の供給を仰ぐ方針を取り、從來諸外國をして供給せしめた分まで、盡く支那をして代つて能く供給せしめるを得るであらうか、第二斯る狀態の出現するを得るまで、日本の實力を以つて、支那の富源を開發するを得るであらうか、第三日支兩國協力して、支那に於ける門戶開放、機會均等の意義を蹂躙し去ることは、諸外國をして日支兩國に對して、或る報復手段に出でしめる原因と爲りはしないであらうか、第四支那は日本の工業品に差別的待遇を與へて、其輸入を便にするとした所で、日本に果して支那の需要するだけの工業品を適當に、又低廉に供給するを得るであらうか、支那の爲めに謀れば、寧ろ日本一個國に止まらず、他の多くの國から、支那の好む所に隨つて、輸入することを以つて、便利であるとしないであらうか、第五日支經濟同盟の下に、日本は專ら支那を原料品の產出地として、一方に支那に向つて、工業品を賣却する、斯くして日本は原料品の供給に就て、安全なる地位に立つを得るとしても、一方に支那は何時まで原料品供給國として、滿足して居るであらうか。之に滿足せざるときは、即ち經濟同盟の基礎に龜裂を生ずることを免かれない。

支那に對する諸國の不公正

是等は何れも所謂日支經濟同盟の實現をして不可能のものたらしめる有力なる原因であつて、從來同盟論が一再ならず提唱されたに拘はらず、空しく消滅し去つた所以を解するに難しとしない。故に日支兩國の經濟關係を發展せしめるには、軍國主義を背景とする積極政策の不可なるが如くに、日本の要求のみに應ぜしめる經濟同盟の締結にも亦多くの瑕疵なきを得ない。結局兩國が互に自國の長所とし、又短所

とする所を明にし、一方の長を以つて、他の短を補ひ、斯くて經濟的關係の密接と爲る間に、日支兩國民をして其れ〴〵公正に利益の頒與に與らしめることを以つて、兩國經濟上の關係の進む所としなければならない。然らば經濟組織に於て、經濟的知識に於て、支那に比較して、一日の長ある日本が從來對支經濟的關係を進める上に於て、果して此事を志したであらうかどうか。由來經濟上の關係の或る二國內に生ずる場合には、之に伴ふ利益は二國の間に公正に分配されるのが普通の道理であつて、貿易の如き、此顯著なる實例であると云へる。然も國家が斯く自然の狀勢に支配されて生ず可き經濟上の關係に干涉を加へるのは、何の目的に出づるかと云へば、關係の結ばれる可き二國中の優勝國が其國に備へられる權勢を利用して、對手國を壓迫し、利益の大半を奪取し去る一事に存する。英吉利を始め、支那に經濟上の關係を結んだ諸國は大小厚薄の程度に異なるものありとしても、支那に對して、此點に於て志を一にしたと云へる。

第一、列國が支那の關稅權に大なる束縛を加へ、自國物資の支那に於ける販路を擁護すると共に、支那に競爭事業の起ることを妨害し、永く支那を農業國の狀態に置いて、先進國獨り支那市場に於ける物資販賣上の便利を占めやうとし、甚だしきに至つては支那の關稅行政權まで、外國人に於て掌握したことの如き、支那に對する諸外國の態度の最も不公正とす可き所である。

第二、近年諸外國は支那に資本を移植し、賃銀の低廉なる支那人勞働者を使役して、諸種の事業を經營するの風を生じた。然も外國の資本家は斯る經營を爲すに當つて、支那人勞働者の賃銀の低廉であつて生產費の割安に付くことに着目し、此點から利益を獲得しやうとする爲め、勢ひ支那人勞働者に對して、搾取を試みるに至るのは當然であつて、外國人の支那に於ける事業經營は必ずしも支那人の生活程度を上進する上に於て、資するもの大なるを得ず、却つて彼等の生活を酷烈のものたらしめる。勞働者の生活の比較的良好なる可き居留地に於て如上の關係から、特に勞働爭議の盛に行はれるが如き、吾人の注目に値する所である。

第三、殊に此點に於て、支那人に酷烈なる影響を及ぼすものは、日本資本家の事業經營に於ける勤勞雇傭法である。英米人の事業經營に於ては、支那人を勞働者として使役するは勿論、下級事務員中にも多少の支那人を交へ、其執務上の成績が良好であれば、漸次其地位を上進せしめる、斯くて支那人に或る程度の滿足を與へるが、日本人の對支企業に至つては、徹頭徹尾日本人を以つて事務に當らしめやうとする、斯くて支那人に與へられる利益の狹小であるの故を以つて、支那人の反感を招くこと少なしとしないのである。

第四、事業は自由競爭に依つて、他と利益を頒つよりも、獨占排他の主義に依る方が早く當業者に大なる利益を與へる道と爲る。諸外國が支那に事業を經營するや、實に此方針に據るのであつて、鐵道を敷設すれば、自國商品を運搬するに就て、特別の便宜を謀り、富源を開發すれば、專ら自國の爲めに、之を供給せしめやうとする。支那の政府や、事業家が外國に就て借款を求めるや、外國は之に乘じて、必ず或る利權の許與を受ける、利權の內に鑛山の採掘とか、鐵道の敷設とか、外國に獨占的利益を與へることが含まれ、普通の元利金の拂以

外に債權者を利益するが、一方に債務者たる支那を脅迫する趨勢を免かれないのである。

積極政策の不評なる所以

治外法權の承認、居留地制度の許與、關稅權の束縛、領土の侵略、或る一部分の領土に對する外國行動の自由、支那の意に反する領土の開放等支那並に支那人が外國に依つて、其利權を蹂躪され、其國權を侵害されつゝあるもの少なしとしない。加ふるに外國の資本は其國の企業家に依つて、支那に於て、濫用されるや、支那人勞働者を虐遇し、支那の富源を開掘し盡し、支那に向つて、一種の搾取を行ふことを辭さない。支那人が近年漸く國利國權の重大なる意義に就て、自覺するや、斯る外國の侵略に對して、反省するに至つたもの亦怪むに足らない。此際に我國に於て、突如滿蒙に對する積極政策なるものが主張される。積極政策なるものゝ意味は明なるを得ないが、要するに從來の消極政策を一掃し、(一)滿蒙に於て、我國の利權を擴張し、(二)之を基礎として、我國事業家の活躍を促し、(三)次第に依つて、軍事上の勢力に依つて、之に保護を加へることをも辭せず、(四)滿蒙に勢力を有する支那政治家の便宜を諮り、其有力者の權勢を利用しやうとするが如き、即ち積極政策の要目であるやに考へられるが、斯の如きは所謂經濟的帝國主義の變形したものに過ぎない。支那人の間に自國の利益を自國民の力に依つて、防衛しやうとする自覺のない場合には、假令ひ關係諸國の間に於ては、經濟的帝國主義の行はれる領域や、其程度に就て鬪爭の行はれる危險あるとしても、或る程度の進行を見るを得るかも知れない。然も今日の支那は何時までも外國の力に依つて、農業國たり、原料供給國たる地位に居ることを強要されて、之に安んずるものではない。植民地であつても、本國の爲めに永く農業國たる地位に居ることには、愁訴もすれば、反抗もする。隨つて植民地をして此地位に立たしめるに就ては、本國自ら或る程度の讓歩を植民地の爲めに致さなければならない。本國植民地の間であつて、既に然りとすれば、一個の獨立國をして永く他國の爲めに、天然資料の供給國たらしめるが如き、餘程の難事であつて、現に先年支那が鐵鑛の採掘に就て、外國資本の干與することを禁止し、又鐵鑛其ものゝ使用を制限する法律を制定したが如き、要するに原料産出國として居るよりも、製造工業國として立つた方が經濟上に於て、得策であると云ふ信念から出で來つたものと云へる。今や是等の點に於て、支那人の經濟的理解の進んだことの著しき以上は、日本が漫然積極政策の如きものを唱へて、滿蒙に我意を揮ふとした所で、却つて支那人の反感を買ふに止まるのである。現に積極政策の支那に傳唱されて以來、滿洲方面に劇烈なる日貨排斥の運動が起り、而して其運動の背後に支那官憲の手の動くものありと傳へられるが如き、日本人としては自業自得の感なきを得ないことゝ思はれる。

特殊的地位の意義を正す

滿蒙地方が日本の經濟的立國に對して、特殊的地位を占めることは之を諒承しなければならないが、其故を以つて、直に或る特殊の行動に出でやうとするのは、大なる僻事である。私が田中内閣の所謂積極

政策に與しない所以であるが、然らば積極政策の如きものに依らずして、何を以つて、對支經濟政策の根柢とするかと云へば、極めて平凡の事ではあるが、公正なる基礎の上に立ち、支那の富源を開發する爲めに、日本人が資本を投じ、勞力を致す以上は、之に伴ふ利益を收めるのは勿論であるが、同時に支那人にも利益の一部を頒ち、彼等をして日本の企業の盛衰に對して、直接の利害關係を有せしめる方針を以つてす可きである。日本の資本に依つて、開發される天然資源の如き若しも日本が支那に大なる債權を有する以上は、其收入を形態する形に於て、僅に日本に供給されることを難しとしない。支那に資本を融通し、事業を計畫するに就ては、內地に於ける場合よりも、危險は多いが、利子の高いと云ふ利益を以つて、償はれる。其償はれる以上は此以外に資本家として、他に何ものかを求めるのが無理であるし、資本を運用し、事業を經營することに依つて、支那人に勞働者として、事務員として其れぞれ職業を與へて、彼等の生活を豐滿ならしめることを期したならば、本性の溫順なる支那人が事を好んで、排日の擧に出づるが如き隙を生じないのである。滿蒙經濟政策の基調を軍事的から經濟的に、鬪爭的から平和的に移すのは今日の急務である。固より一の國家として、他の國家に臨む以上は、他國に於ける自國民の生命財産に關する安全は之を保障しなければならず、支那の如き時に內亂に依つて、暴動が起つたり、外國に依つて、赤化運動が誘發されたりする危險の存在する以上は、此種の危險を如何にして未然に防止するか、危險の起つた場合に、自國民をして之を避けしめるには、如何なる方法を以つてす可きかと云ふことも、重大なる問題と爲るには相違ないが、此事を理由として、直に軍隊の駐屯とか、何千の出兵とかに進むに就ては、愼重なる考慮を費さなければならないと思ふ。

殊に田中內閣の對支經濟政策に於て、不可なりとするは、一の張作霖を通じ、又張作霖に頼つて、日本の地位を有利ならしめんとする偏見に支配されて居る一事であつて、張が大元帥であり、又山東省に勢力を有する以上に、北京に於ても、滿洲に於ても、萬事に好都合であるとするものゝ如くである。如何に張が日本の軍閥に特殊の關係を有し、軍閥の庇護を受けた事實の爭ふ可からざるものにあるとしても、之に對して報恩の意味に於て、日本の利益を謀つたならば、即ち張自ら賣國奴たるものに外ならない。或は斯る極端に至らざる間に、日本の爲めにするが如き好意を寄せるかも知れないと云ふ說もあるかも知れないが、張の權力下に於て、最近日本の物資に對する排斥の起つた事實に鑑みたならば、如上の希望の一空に歸することは明瞭であつて、要するに或る一人を通じて、對支外交に利せんとするが如き、往年日本が袁世凱に試みて失敗し、段祺瑞に試みて、再度の失敗を演じた愚策中の愚策であるとするの外はない。

私は日本の對支經濟政策を論じた序を以つて、支那の對日政策に觸れたいと思ふ。支那の經濟政策として、日本に有害なる影響を及ぼす虞れあるものゝ一は、食料品や、原料品を國內に保留し、其外國に對する輸出を制限しやうとすることであり、他の一は國產獎勵の見地から、外國物資の排斥を企てることである。前者は夙に米穀に就て行はれ、鐵鑛に就て行はれ、次第に他に及ぼうとして居る。此事たる、支那人の腦裡に天性、マーカンチリズムの思想の存するものゝある以上

は、已むを得ざる所であるかも知れないが、第二の點に在つては、日本の所爲が支那を挑發し、誘導しつゝあることの爭ふ可からざるものがある。支那の外國物貨排斥の裏面に保護政策のあるは、公知の事實であるが、國産獎勵と云ひ、保護貿易と云ひ、共に日本の盛に唱道し、實行する所であつて、其感化の支那に及んで、支那をして日本と同一の所業に出でしめるものと觀測される。果して然らば支那をして日本に對して公明なる態度に出でしめんとする以上は、日本自ら顧みる所なければならない。日本の如く內に保護政策を取つて、出來得るだけ內國市場を外國に對して、閉鎖しながら、外に向つては、外國市場に於て、獨占偏私の政策を行はふとする。斯の如き不公正は到底人道上の見地に於て、認容される所ではないのである。

慘敗せる製絲工女爭議

福田徳三

(一)

大正七八年の頃であつたかと思ふ、私は數日間諏訪地方に滯在の序を以て、時の工場監督官醫學士N氏と共に、多くの製絲工場を可なり綿密に見て歩いたことがある。通例諏訪製絲工場の視察と云へば、片倉組の工場の一二、山十組の其れなどの如き比較的に設備の整つてゐるものを見せられる。殊に山十組の第何工場とかは、見學用とまで云はれる位絶へず視察の用に充てられるもので、諏訪地方では、殆んど例外的に設備の整つてゐるものとして知られてゐる。私は無論一通り其等をも見たが、同時にN氏の醜陋によつて、設備の著しく劣つてゐるものをわざと選んで貰つてこれをも見て歩いた。其時に私はN氏と物語つたことがある。此くの如き劣れる設備の根本的改善は、到底工場監督官の手の屆かざるところである。さりとて法令を以て遽かに改善を強制するといふことは殆んど不可能であらう。思ふに、眞に徹底的に工場及び寄宿舎の設備の改善せられ得るは、其處に働く工女、工男の自ら醒め來つて、其の人間的要求を心から痛切に感ずるに至るまでは、到底期し難いことであらう。さりとて、幾萬の勞働者、殊に工女が、眞の人間的要求に目ざめ來るの時は、容易に到來しないであらう。茲に唯一つの望みは、勞働組合の設立普及によつて、工女工男を眞の人間的要求に目ざむ可く教養することとこれであらう。此れを措いては、製絲工場に於ける勞働條件の向上は、迚も望み得られないことと思はれる。唯問題は、如何にして勞働組合思想を、健實に工女の間に普及せしむ可きかこれである云々と。N氏も此説には、悉く同感を表せられた。其後承るところによると、このN氏は、工場主の非道に對して、可なり突込んで、監督官たる職責を盡された爲め、其同じ年に既に轉任を命ぜられて仕舞つたと云ふことである。私は此度の爭議の際に氏の如き、眞に工場督監官の職責を理解してゐる人が、其局に在らざりしことを甚だ痛惜せざるを得なかつた。

現にも、角にも日本に於ける製絲工女の勞働及び寄宿狀態は、世人周知の如く、誂ざ的に非道いものであり、而して、其れからの救ひ出

しの唯一の道は、今の日本の狀態に於ては、勞働組合の健全なる普及發達にあることは、其時以來、私の確信して疑はざるところであつた。

其後我邦に於ける勞働組合運動は、可なり長足の進歩を遂げたにも拘らず、獨り、製絲工場に於ける其れは、殆んど見るに足るものがなかつた。然るに、たしか本年に入つて、大日本勞働總同盟は、諏訪地方に拓殖の鋤を入れて、若干組合の成立を見たと云ふことを、仄かに聞及んだ私は、可なり細心の注意を其發達に拂つてゐた。而して本年の夏に入つて、其組合の一つが、山一林組工場に於いて勞働爭議の當事者となつたことを聞いて、私は、更らに一層の注意を注いでゐたのである。果然、其爭議は規模の大なるものとなり心ある人々の耳目を聳動せしむるに至つた。蓋し、此爭議は、何十年間唯だ壓迫せられ、唯蹂躙せらるゝに任せられてあつた製絲工女の向上の上に於て、決して輕視すべからざる意義を有つたものであつて、其經過其結果は稍長い將來に亘つて、決定的の支配力を及ぼすものと考へられるから。從つて、其れは尋常一樣の勞働爭議に對すると同樣の目を以つて見られてはならぬ。否、勞働殊に婦人勞働狀態の向上進歩に志を有する者に取つては、或意味に於いては、一の劃期的重要を有つものである。

私は、此く考へて、特に、岡谷に赴き、出來る丈け、公平に爭議兩當事者の言ふところを聞き、短い時間を以て成し得られる丈けの觀察をして見た。

（二）

私が、第一に知らんことを欲したところのことは、大正七八年の頃から昨年に至る數ヶ年の間に、殆んど何等の進展を見なかつた組合運動が、諏訪地方に於いて、昨年から今年にかけて、斯くも著しい發達を遂げた其の原因は那邊に存するかこれであつた。

私の見聞は、短時間に限られたものであるから、此問題に十分に答ふ可き材料を得ることは、無論出來なかつたが、しかし、私は、一般的解答は、これを見出すことさまで困難ではないように感ずる。

其第一は、勞働者一般の覺醒である。具體的に數字的にそれを立證することは、元より不可能であるけれども、私は、昭和二年の今日に於ける製絲工女工男は、これを大正七八年の頃に比較すれば、たしかに或度までは、人間的要求に目ざめ來ることの可なり著しいものありてふ一事を否定することは出來まいと思ふ。而して、同時に、雇主が、此變化に目ざめてゐる度合の遙かに低いものであることも亦否定出來ない。一方は進み、一方は停滯してゐる。其間隔は無論未だ他の工場工業に於けるに比すべくはあるまいけれども、今より十年も前までは、殆んど、何等の距りを見ることの出來なかつたところに、兎に角、若干の間隔の—而して、其れは、徐々ながら、段々擴大して行くとこ

ろの——生じたと云ふことは、爭ふべからざることである。

私は、其一旁證として、林組の爭議總司令者とも云ふ可き地位にあつた某氏が親しく私に向つて告白せられた次の言をあげ得るかと思ふ。某氏曰く、今回の騷ぎの根本的原因の一つは、私共の違算にあつた。私共は思つてゐた。たとへ、組合幹部の後援ありとは云へ、根が年若い女工たちのことである。組合主義の何ものたるかなどは、到底分つてゐる筈はないし、又た日本の女の通性として、一時は雷同しても、二三日すれば、其熱は冷却する。面白半分にストライキはやつて見ても若干時を經れば却つて後悔するに相違ない。何處までも頑張るなどの意氣は、迚も有つてゐるものではない。だから、若干時間の經過に任せてさへ置けば、自然先方から折れて出るに相違ないと。これが、私共の態度であつて、初め數日間は其方針で處してゐた。ところが、彼等の氣勢は、一向挫けないのみならず、日を經るに從つて、益々硬化して行つた。これは實に言はう樣ない、私共の勘定違ひであつた。此の違算あつた爲めに、事態は斯く紛糾して、世間に御迷惑をかけることになつたは、甚だ恐縮してゐるところであると。此の話は、私の外にも、猶一人同席の方があつて、共に聽聞せられたところであつて、決して間違のないことである。私は、此告白は如何にも、率直佩實飾らず詐らざるものと信ずる。

雇主たちは、女工の心理の判斷を誤つた。殊に、人間的要求に若干なりとも目ざめ來つた年若い婦人たちの心理を理解することが出來なかつた。これが、雇主が、工女、工男たち一同の所謂肱鐵砲を受取つたときの狀態であつたに相違ないものと思ふ。雇主は其出立點に於いて誤つてゐた。其れは、今日の社會政策の立場から云つて然るのみならず單なる資本家根性の持主としても、甚だしい誤算であつたのである。

第二の原因として、私は、勞働總同盟並に諏訪地方の組合幹部の態度が、大體に於いて、其當を得てゐたことをあげねばならぬと思ふ。元より短日月の間に、組合が普及し、殊に爭議が起つてから、組合員數が激增したといふことには、其間に、多少の無理があつたかも知れない。しかし、私の聞いた限りに於ては、組合加入について必ずしも、强請脅迫などの事實を認めることは出來ないのである。組合は、決して爭議を目的として作られたのでなく、また強いて爭議を起すことを方針としてゐたのではない、出來るだけ、平和の方法を以つて、勞働條件の改善を圖ると云ふことを以つて、終始一貫して來たと、其幹部の某氏が揚言してゐることは、必ずしも事實に遠い言とは思はれない。

何しろ年若い婦人を組合員とする組合である、餘程愼重に、前後を考へて處置せねばならぬことは、言ふまでもなく、我邦に於て、經驗の乏しい婦人勞働運動の當事者となることであるから、組合幹部の人々も、相當に思慮しつゝ事に當つてゐたものと思はれる。少くとも、

此度の爭議の經過に於ては、私は、一も組合幹部を非とすべき處置行動を見出し得ざるものと認めてゐる。此れは此爭議の如き場合には、餘程重視せられねばならぬ點と思ふ。組合を非難する人々の言を聞いても其最も非なりとしてあげた事は、雇主を嘲つた唄歌を作成し、工女たちをして、これを事務所の周圍に於いて、高唱せしめたといふ一事にある。其れ以上に甚しい非難は、少くとも、私は聞くことが出來なかつた。

第三の原因は、諏訪地方製絲工場及び寄宿舍の狀態の非道いものである中に、取りわけ、此度爭議の起つた雇主の其れに於いては、其の非道さが甚しかつたことこれであらう。勞働者たちは他の工場に比べても、著しく劣る其の勞働條件、其生活狀態を、平生から痛感しつゝあつた。これが、組合運動によつて、改善を必期せねばならぬとの念を、人にすゝめられずして、何百の工女、工男に强からしめてゐたのである。雇主側では寄宿舍に於ける食事の費用は、一人一日二十二三錢當りであると明言してゐたが、其道の人々の云ふところでは、決して十七錢以上に出づるものではないと云ふことである。――食事の內容などについても聞くところがあつたが、煩を厭つて、今記さず――。寄宿舍に於ける寢具、部屋の設備などは、聞いたところを事實とすれば、其れは、犬小屋にも等しいものである。

兎に角に、若干にても、人間性の價値に目ざめ來つた人々に對しては、右工場に於ける勞働並に生活條件は、殆んど堪へられざるものであつたことは事實として認めねばならぬと思ふ。成程、工場法はある、施行令はある、施行規則はある。更らに又た、苦心して作り上げた工場附屬寄宿舍規則なるものもある。しかし、其等は事實上何にもなつて居らないのである。更らにまた、此等の勞働者保護設備の勵行を任とする工場監督官なるものも、長野縣には置いてあるさうであるが、前にあげたN氏でさへ如何ともすることの出來なかつた製絲工場に對して、N氏の硬骨の半分も持合さない屬吏の一人や二人居つたとて、其れは、何にもならないのである。マルクス資本論に屢引かれてゐる時の英國工場監督官レッドグリーヴ氏の樣な人は日本には無論居ない。

斯くの如き狀態に於いて、工女、工男たちが、唯一のたのみとすべきは、組合運動あるのみである。勞働總同盟の來るや、むしろ、晩かつたのである。決して、彼等を以つて、事を好んだものと評し去るべきではない。

林組の當事者は、此度の爭議の經過を、世上へ報告した一文に於いて「犬も三日飼へば」と云ふ例があるが、五年、十年と勤續した人が、こんな精神になることは想像出來なかつたことだ。こうして見ると、從業員諸君は、單なる勞働組合の勢力擴張の具に供されたにすぎない。一家の生活の主體でもなく、一生、製絲工場に働くでもない女工を、純粹の勞働者と見ることさへ、遠慮したいのに、その人に勞働組合を押賣し、その納める會費をねらつて生活を樂しまふとする勞働運動先覺者

を憎むと共に、うまく利用された從業員諸君を御氣の毒に思ふ。場工を離れて、勞働組合は、決して一厘一錢も與れるものでないことを知らなくてはならない』と言つて居る。『犬も三日飼へば』云々と言つてゐる丈けで、彼等が工女たちを、犬猫と同一視する心理を率直に曝さぬことが窺はれる。其寄宿舍を犬小屋同樣にして置いて、恬として恥ぢず、又た數百の工女を雨中の夜間に寄宿舍に入るを拒んで路傍に彷徨するに任せて憚らざる非人道行爲の依つて出づるところが、能く察知し得られる。

其は兎に角として、彼等が諏訪製絲業勞働組合幹部の人たちに對する此の暴言は、決してこれを寛假すべきではない。殊に汝等に金錢を與れるものは我々のみである、勞働組合は、汝等に一錢一厘も與れるものではないと言つて聞かせようとするなどとは、實に驚き入つた次第と言はねばならぬ。彼等は自家の心事を以て他人を推す、故に、勞働組合幹部は、其組合運動に於いて、『勞働組合を押賣して、その納める會費をねらつて生活を樂しまふとする』ものなりと誣ひ、自家の從業者に向つては、汝等勞働組合に入るとも、一錢一厘も貰へるものではないと言聞かせて、組合を離れしめようとするのである。其心事の陋劣さ加減、人間の使用者たる資格を、全然缺くものと評せられても決して、之を否むことは出來なかるべき筈である。其樣な人々には、人間的要求に、若干たりともめざめた多數工女工男の心理が分らず、更らに、勞働組合が俄然として普及するに至つた眞相が解せられ樣筈はない。それ丈け、私は、勞働組合の必要は、多數の工女工男によつて痛感せられたものと見、而してまた組合の著しい進歩の原因が諒解し得られるものと思ふ。

兎に角、私は、諏訪に於ける工女間に勞働組合の斯く普及するに至つた原因を、主として(一)工女たちの人間的要求に於ける目ざめ(二)當該工場の勞働、及寄宿狀態の特に著しく劣つたものであること、(三)組合運動者の態度の妥當の三に歸することは、誤りならざるかと思ふ。而して、他方に於いて、(一)雇主側が人間的要求の目ざめを少しも理解し能はざること(二)其設備を對犬猫的にして恬として恥ぢず改めざること(三)組合運動や其指導者の眞相を全く知らず解せざることの三つが、此れと照應してゐると云ひ得るかと思ふものである。

(三)

爭議の經過は、都下の若干新聞紙上にも略ぼ傳へられてあつたから、これを記述することは、一切省いて置く。唯爭議の對象となつた所謂嘆願書なるものを左に揭げて見よう。これは本年八月二十八日『日本勞働總同盟全日本製絲勞働組合第十五支部從業員一同』の名を以つて、林組の代表者へ提出したものである。

嘆願書に對する理由

今年三月吾岡谷に日本勞働總同盟全日本製絲勞働組合が生れた事は御承知の事と存じます。私達は今日迄該組合の主義綱領を研究しつゝありましたが我國に於ける勞働組合中最も合理合法的の組合たる事を

認め玆に加入したのであります。

抑も勞働組合は善良なる勞働者を作り正當なる權利の主張をなすと共に義務觀念を涵養し以て產業の健全なる發達を期するを目的とするものであります。

故に此事實を諒とせられ勞働組合を公認せられん事を嘆願するのであります。

賃金は私達勞働者の勞力提供に對する報酬であります、私達は賃金に依つて生活を營む者でありますから賃金の制定は極めて適法に確立せらるべきものと思ひます。

今迄の如き私達の賃金の預金がありながら急時の際に於ても拂戾し下さらず隨分悲しい事も幾多ありました。

私達は現今の經濟界不振糸價暴落の際に別項嘆願は幾度か愼重なる研究と考慮の結果にて同じ岡谷に於ける幾多の工場に就ての調査の上で玆に嘆願に及んだものにて決して不當なるものでないと思ひます。

吾國の勞働者保護法規は極めて不完全なるものであると聞いて居ます、然るに此不完全なる保護法規さへも嚴守されていない樣に見受けます、如何にも情ないと思ひます。

娛樂と修養は私達人間生活に必要なものである事は云ふ迄もありません、一日の勞働を終へ娛樂に依つて新たなる生氣を養ひ業務に携はる事は生產能率の上にも效果ある事と思ひます私達は共存共榮の社會に生存して居ります、人間としての修養を受け社會人に迷惑を及ぼす事なきを願ふものであります。

失業は私達の最も恐るゝものであります、昨年の如く出張先に於て手紙を以て解雇するが如き事は餘りにも無情の事と思ひます、可憐なる私達の爲めに純眞の御同情を仰ぎたいと思ひます、何分左の嘆願事項に對し速かに御理解あつて御承認を願ひます。

嘆願事項

一、勞働組合加入ノ自由ヲ認メテ下サイ

二、組合員ナルガ故ニ轉勤或ハ職務上ノ地位ヲ低下セザル樣願ヒマス

三、組合員ナルガ故ヲ以テ絕對解雇セザル樣願ヒマス

四、組合員ニシテ萬一不都合ノ行爲アル場合ハ組合幹部ニ申告シテ下サル樣願ヒマス（組合ハ必ズ正道ニ導クベク努力致シマス）

五、食料及衞生上ニ對シマシテ改善ヲ願ヒマス

六、私共ノ體育及娛樂修養ノ爲ニ其設備ヲシテ下サル樣願ヒマス

七、從來ノ賃金ガ一般工場ヨリ非常ニ低廉ナルガ故ニ私共ノ生活ハ實ニ困難デアリマス可憐ナ私共ノ爲ニ左ニ記シマシタ賃金ヲ與ヘテ下サル樣願ヒマス

（下略）

これに對して、雇主は、左の通りの回答を與へた。

『本日御屆け下され候嘆願書に對する理由書に嘆願事項に關する印刷物正に拜見仕候處當工場從業員と貴組合との關係に就ては全く關知せざる所に候間嘆願事項第一項より第四項に至る事項に就ては別段御回答不申上候第五項より第七項に至る事項に就ては從來より鋭意改善を圖り度考へ居候に付從業員諸君とも篤と懇談の上成る可く希望に添ふ樣取計ひ申すべく候早々』

此回答の趣意は、組合なるものを相手とせずと云ふ一點に歸着する。第二段の第五項より云々は、從來より鋭意改善を圖らうとも考へて居た、何れ組合に關係なく從業員と懇談して成る可く希望に添ふ樣取計ふと云ふ通り一遍の挨拶を陳ねたに過ぎない。言ひ換れば、實質

的には『右の嘆願書』なるものに對して、何事も答へないと同一であつたのである。

雇主は、他方に、其從業員の代表者を自社の事務所へ招致して、第一項は信教の自由と同樣の意味に於いて各人の自由意志に任せるが、第二、三、四諸項は工業主の『自主權』（!?）を侵害し、工場管理權を勞働者の手に獲得せんとする恐しい思想が其裏に潜んでゐるものと認め、絶對にそれを拒絶する。第五項以下については、從業員から申出があれば、其れについて追て考慮しよう。第七項賃銀のことは、よく調査して見て、他工場より、甚しく低率であるならば、引揚げてもやらうと回答したとは、林組當事者自らの公表してゐるところである。

茲に於いて翌廿九日、組合は、左の樣な聲明書を雇主側へ提出した。

前略

『第一項目に關しては、各自の自由なりとの回答は之を可とす。第二、三、四の三項目に關し、何等會社側に於て意見を附せす、甚諒解に苦むところである。第五、六の二項に關して、財政の許す限り、徐々として改善を行ふとの回答は、あまりにも緩漫にして、是れ又諒とするを得ず。第七項目に關しては世間一般の工場を調査したる上若し安價なれば改善すとの回答は、全くありふれたる然も誠意なき回答として受入ることを得ず。

（中略）

決　議

吾々組合員は吾々の目的を貫徹すべく來る八月三十日午前十時を期して罷業を斷行す。

かくの如くにして、罷業は始められたのである。ところが、九月七日に至り、雇主側は工場閉鎖を斷行すべく、左の聲明書を發した。

聲　明　書

一、今回當會社に突發せる事件は、前組長死去以來續く不幸及原料仕入のため、幹部不在中に計畫されたるもの丶如く、社員は八月廿七日夕刊にて「林組に勞働爭議起らん」の記事を見て急遽歸社したる如き狀態にして、それ以前に於て勞働組合若くは從業員より交渉を受けたることなく、又監督官廳より特別の注意を受けたることなきに關らず、突然八月廿八日、日本勞働總同盟全日本製絲勞働組合第十五支部より嘆願書に對す理由並嘆願事項七項の要求を提示されたり、しかも同日午後五時迄に既に設けられたる、中央通爭議團本部へ回答するやう、申添えられたり。

二、會社は文書を以てこれに回答すると共に從業員を招致し、會社の意のあるところを傳へ待遇改善については、兩者懇談して具體案作製を主張したるに、從業員もこれを諒として充分了解せるも、爭議團本部へ至れば態度一變し、極力これを排し全項目に對し即時回答を迫りたるも、事重大なるを以て若干の考慮を約せり。

三、會社は二十九日これに回答し、第一項の勞働加入の自由及第五項以下の、直接從業員の幸福に關する事項について充分希望に副ふやう容認し、第二、三、四項は勞働組合に關する要求にして、別に會社の關知すべきものにあらず、且つ團體の交渉權の確立、工業主の自主權侵害の虞あるを以て拒絶せり。

四、然るに勞働組合は全部の要求が、容れらるるにあらざれば、生活の安定を得さるに依って三十日午前十時を期して、罷業を斷行する旨の通知を受けたり。

五、會社は事件の內容及推移に就いては、深甚の考慮を拂ひ兩者の誤解なきやう、凡ゆる方法を以て理解に勉めたるも、組合員は極力これを妨害し、全從業員及家庭との連絡に對する努力は全く水泡に歸したり。而して理解に乏しき若年の女工を殆んど强制的に組合に加盟せしめ、豫定の如く罷業を斷行せり。

是の如くにして勞働組合は、最初より爭議を計畫し、これを挑みたるものにして殆んど、衣食住の全部を與へられ、且つ從業員の幸福に關する條項の認容されたるにも關らず、自主權を得るに非らざれば、生活の安定を欠くとは甚だ了解に苦しむ所なり。元來製絲業は家內工業として、發達したるものにして、機械力を利用すること少く、殆んど人力に依るを以て特にその統制には統一されたる支配權を必要とするものにして、支配權なくして製絲經營は不可能なるを以て、當會社は一時工場を閉鎖するも、自主權を擁護するものなり。

經營を不可能ならしめ、工場を閉鎖せしめんとするが如きは、勞資協調を破り產業の基礎を危殆に陷らしむるものにして、國民として赦すべからざるものなり、口に勞資協調を說き、產業破壞を計るが如き傲瞞なる不良組合は斷じて、容認する事能はざるなり。

當會社は是の如き不道德を決行せるものに對しては、爭議費用日當の如き如何なる解決を見るの日に於ても、絕對支辨せざる事を聲明す。

斯くして、九月七日から九月十一日まで、工女、工男は、罷業を繼續しつゝ、兎に角、宿寄舍に止ることを得たのであるが、九月十二日に至り、雇主側は、寄宿舍に居る數百の工女、工男に對する食糧の供給を絕ち、更らに、雨中夜間外出先から歸舍した數百の工女に對し、寄宿舍の門戶を鎖し、一步も舍內に入らしめず、雇主は隣近の宿泊を政行するに至つたのである。無論、何等の豫告を與ふることなしに、又た退舍期日を明示して、撤退の準備を爲す餘暇を與ふることなしに、突然此の不意打を喰はせたのである。

其後の事は、私は新聞紙上に傳へられてゐるところによつて、これを知つたにすぎないのであるが、要するに、凡ては、勞働者側慘敗に歸し、而して昨今日の都下新聞紙上に散見するところでは、岡谷各字聯合して、組合關係者一同に對し、居住を拒絕する申合を爲し、其勵行に努めゝありと云ふことである。恐らく、甚しい迫害は、其等の人々の身邊を、今、脅しつゝあることであらう。而して、少くとも岡谷に於ける組合運動は、茲に大なる打擊を被つて、一敗再び起つ能はざるが如き窮境に陷つてゐる如くに見える。

(四)

此くの如き結果からして、これを見るときは、諏訪に於ける勞働組合運動は結局大失敗に終り、組合による勞働條件改善の望は、全く杜絕せられたものたるが如くに思はれよう。

今此慘敗の原因を尋ねて見るに、私は幾多のものを指摘することが出來るが、組合指導者たちが、其指揮を誤つたといふ非難は、到底これを下し得ないのである。私は、今爭議兩當事者の何れをも、批判し

ようとして、此文を草するものではない。私は、製絲勞働者、就中工女の勞働及寄宿狀態改善の一有力方法としての組合運動の現在を考へて、其將來に及ぼしたいと云ふ、稍々廣汎な立場からのみ、此事件を考察しつゝあるものである。從つて、此度の爭議に於ける兩當事者の擧動の一々を記述したり、これについて批評したりすることを欲しない。乍去、慘敗の責任の一部を、組合指導者の巧拙に歸し、若くは、其當否に歸することだけは、全く誤つた見方であることを明記して置きたい。無論個々人の個々の行動については、或は咎む可きところはあつたかも知れない。同じ樣な事は雇主側の個々人についても云へよう。然し、其れは、問題の決定に、何の關係をも有たざるところである。關係のあるのは、全體としての對爭議態度であつて、而して此點に於いては、私は、組合側に、何の責めらるべきところはないものと認めた。全體として工女、男の統制は、よく保たれてゐたことは、疑ふべからざる事實であつて、恐らく、此位穩和な態度を以つて行はれた爭議は多くはあるまいと思ふ。其れは、爭議者の大多數が、年若い婦人であつた爲めもあらう。然し其れと同時に、重立つた人々が數百の工女を指導して、統制を保つに、努力したことを認めなければならない。

從つて、慘敗の原因は、組合當事者の當否巧拙以外にこれを求めなければならぬ。

私は、慘敗の原因の重なるものを數へて次の如く擧げ得るかと思ふ（一）縣吏、警察吏等の無理解又は無能、又は無責任、（二）爭議基金の不足（むしろ皆無）（三）輿論の冷淡無頓着これである。

（一）九月十日、私は岡谷へ行つた。而して、兩當事者を訪問して、具さに、事件の經過を尋ねた。爭議團本部の人々は、私に告げて云ふ。雇主側は、歎願者に對して、正面的に回答することを爲さず、唯外の人々や世間に向つて、第一項はこれを承認す、第二――四は、工業主の自主權を侵害し、工場管理權を勞働組合の手に奪はんとするものなるが故に之れを拒絕す――此れ甚しき誤解又は曲解である――第五、六兩項は徐々に改善を期す、第七項は調査の上にて何とかすべしと。しかし、我組合に對しては、何事をも答へぬ。これ我々が、不得止罷業を決行した所以である。雇主側にして、誠意右聲明通り實行し、而して誤解に對する辯明を聞くに意あらば、我々と會見するに何の妨もなかる可き筈である。然るに、我々の代表者が、會見を求めたるに對し、これを峻拒し、警察署長亦彼に左袒して、我々に對して、面會を強要するに於いては、已むを得ず、檢束處分に附すと威嚇した。しかし、我々は我々の代表者と會見する意が、雇主側に存するものならば、我々は平和談笑の間に相見ゆるに、毫も躊躇するものではないと。轉じて、雇主側について尋ぬれば、右の言明は、從業員代表者に對して爲したるを以て足る、又當方には誤解なし、辯明を聞く必要もなし、從業員以外の人々に會見する必要は、寸毫もこれを認めないと。

ソコデ、私は考へた。爭議兩當事者は、罷業以來何日を閲して未だ

一回も會見することなく、而して、兩者の言分には、多大の行違ひ若くは誤解あるらしく考へられる。兎に角爭議を永引かせざる爲めにも、兩代表者が一度び會見することは、決して無益ではあるまいと。よつて、東京の某有力團體から視察の爲め出張中であつた社會事業家某氏と懇談の上、爭議團の重なる人々に、我々の考へを述べて、若し雇主側にして諾するなれば、恰も今日の佳き日（其は皇女殿下御生誕發表の當日であつた）に於いて、兩者會見の擧に出られては如何と。爭議團の人々は言下に、異議なき旨を答へられた。よつて、私共兩人は、再び雇主側を訪問して、右の趣意を懇々申述べ、タトへ、爭議の解決を見ざるまでも、兎に角當事者が會見することは、決して無益でないと思ふから、枉げて之れを諾せられては如何と提言した。しかし、雇主側は、これを峻拒せられた。よつて、私共は、此事件の爲めに同地に出張中の縣吏某々氏に面會を求め、其盡力によつて、其日中にも、右會見の行はれるよう斡旋せられては如何と申出でた。其の一人の某氏答へて曰く、我々の見るところでも、雇主側と組合代表者との會見が實現出來れば、爭議は七八分通り解決するものゝ如くである。よつて實は過日來、或は直接に、或は間接に、雇主側に、其事を慫慂しつゝあつたのであるが、雇主側の態度強硬、これを諾せず、實は困つてゐるところである。猶向後とも、機會あらば、自分たちに於ても、其事を勸說して見るつもりであると。私は、此縣吏氏の甚だ理解ある言明を得て、大に意を強うして、岡谷を去つたのである。

然るに、其後何れ丈けの努力が、右兩氏によつて試みられたか、一向承はらぬが、兎に角會見の事は、ついに、實現せられずして終つたようである。

元より右の兩氏は、勞働爭議調停の職に在る人々でないから、當然右の努力を爲す可き責任を有つものとは云へない。しかし、繁劇な公務を後に、わざ／＼爭議地へ出張して何日を經過しつゝ、終ひに爭議の圓滿解決に、一指をも染め得ざりしといふことは、私は少くとも、其無能、其不熱心の事實を否定し能はざるものである。

しかし、其れは、雇主側の態度飽迄も強硬であつて見れば、強制力を有せざる人々として、或は如何とも出來なかつたとの口實を設け得られよう。

之に反し、私は、到底、看過し得られざる一事實を茲に報告せざる可からざるを悲しむ。

私は右兩氏と會見の折、更らに言つた。『先刻雇主側と長時會談の折、其言ふところは、事今日となりては、會見どころか、他の何事も爲す必要を認めない。從業員たちは、罷業を敢行した。これは、明かに、雇傭契約を彼等が破棄したものである。既に雇傭關係の存せざる彼等が、恬然として、我が所有財產たる寄宿舍に居住し、剩さへ我々の貯へ置きたる食糧品を奪ひ取つて、之を食料に充てつゝあるは、不法も亦甚しい。我々は所謂『社會的正義』なるものゝ脅迫の爲めに、此の無法を忍んで居るのであるが、我々は到底永くは忍び得ない。從つ

て我々は、一瞬、一刻も早く、彼等が寄宿舍より退出せんことを欲するのみ。此れ以外、我々は何も望むところない。此れ以外、我々は何事をも爲す必要を認めない』と。其言によつて察するに、雇主側は、近々寄宿舍居住の數百の工女、男を放逐するの暴擧にも出でまじき模樣である。若しも其樣な事が行はれるとしたら、其れこそ、人道上由々しいことである。此點について、縣吏、警察吏各位に於いて、深甚の考慮を旋らされ、假りにも其樣な非行の實現せられない樣致されたいと。これに對し、右兩氏口を揃へて曰く、マサカ、左樣な事はあるまい、其邊の御心配は御無用と思ふと。

右問答の交されたのは、九月十日の夜十時過のことであつた。其夜半の汽車で私は歸途に就いた。しかるに、たつた中一日丈け置いて、其翌々日九月十二日には、私の憂慮は、ついに杞憂たらざりしことが明かとなつたのである。雇主は、夜中而も雨の中を歸り來れる何百の年若い女工等を、何等の豫告を爲すことなく、亦た退舍準備の期間を與ふることなく、路傍に放出して仕舞つたのである。

私は縣吏某々氏等の不明を茲に特記すべき責任を有つ。獨り不明のみならず、此暴擧に對して、縣も警察も、ついに何等斷乎たる處置に出でなかつた社會政策上の非違、無能、無理解、無責任、を大書して置かねばならぬと思ふのである。而して、縣の知事は、其一兩日前に於いて、縣が此件に介入するは、未だ時機尚早なりと公言しつゝあつたと云ふ、其不明振り、其無能振りは、日本の知事中に在つても、實に典型的と云はねばならぬ。

工場內の危險防止の設備とか、寄宿舍に於ける衞生の施設とか、今日の工場立法は、無理解なる政治家の壓迫の下にあゑぎつゝ、兎に角極めて、手緩くはあるけれども、色々な規定を設けてゐるのである。しかし、夜間雨中、何百と云ふ年若い婦人勞働者を路上に放出して顧みないような雇主があつては、百日の說法屁一つである。右の雇主側の某氏の口吻を借りれば『犬も三日飼へば』と云ふ例がある。三日でも飼つた犬や猫を、夜間雨中路上に遺棄すると云ふようなことは、尋常人の到底爲し得ざるところである。

然るに、諏訪の右雇主は、これを敢てした。而して、警察は、これに對して、兎に角、其夜丈けでも、寄宿舍の門戶を開かしむることを敢てし得なかつた。出張中の縣吏たちも、拱手これを傍觀してゐたものと見へる。何たる無狀！　何たる無能！

罷業は決して雇傭契約の破棄ではない。三百代言を以てするも、其樣な無法なことは、今日モハヤ口にすることはあるまい。然るに、私の見聞した限り、諏訪界隈の官憲は、雇主側の右樣の主張に對し、甚だ曖昧模糊たることを云つてゐた。私は雇主側の某氏に對して、ソンナ踏違いの法律論を口にすることは、其れ丈けで、モハヤ、人の使用

者たる資格なきことを示めすものであるとまで答へた。

しかし、今は雇傭契約論をしてゐるのでないから、其點は敢て論せぬ。假りに、日本の法律解釋學が未だ甚だ幼稚であつて、罷業即契約破棄と斷ずるとしても、製絲工女、殊に寄宿舍に收容せられた其れについては、斷じて、其様な解釋を許す可きではない。少くとも、男子に貞操の義務ありと宣言するまでに進歩した日本の大審院は、斷じて其様な解釋を許すべきではない。

諏訪に於ける製絲工女は、何れも、雇主がわざ〳〵人を各地各縣に派して募集して來たものである。其就業地には、父兄の家を有たぬものである、知人等も多からざる無告の狀にあるものである。而して、初めから、寄宿舍の設備あつて、其處に居住することを條件として、募集に應じて來たものである。而して、其人々は、最も保護を要する年若い婦人であるのである。

西洋でも、勞働者住宅を、雇主から供する場合に、ストライキの際タトへ、豫告期間を與へても、立退きを求むることの非違なるは、十分に認められてゐる。單なる住宅でさへ左様である。食事の供給を伴ふ寄宿舍の使用が、ストライキの爲めに、直ちに拒絶せられる——而も、何等の猶豫期間を與へずして——と云ふことは、あらゆる道理がこれを許さない。其れは、單なる常識に訴へても、容易に理解せらるべきことである。

此度の様な寄宿舍締め出しの場合が、『工場附屬寄宿舍規則』又は『工場法施行令』などに於いて豫期せられてなかつたことは、我邦の現狀に對しては、たしかに、一つの缺陷である。殊に寄宿舍規則は、本年七月一日から實施せられた最新の法令たるに拘らず、此くの如き場合を豫測して置かなかつたことは、手落と云へば、たしかに手落で、其點は、筆者も責任を十分に自覺してゐる。しかし、ヨモヤと思つてゐたのである。其は、甚しい迂濶であつたことを悔ゆる。寄宿舍規則二十三ヶ條、可なり細密の點に渉つて規定して置き乍ら、最根本的の規定を逸してゐるのである。私は、此度の顚末に對して、呆然自失せん斗りに驚いたのである。

しかし、解雇については、『工場法施行令』第二十七條ノ二がある。而して、第二十七條ノ四には、就業規則に定む可き事項の一として、(五)解雇に關する事項を明記してあり、又た『勞働者募集取締令』にも、第三條募集主が、應募者に必ず明示す可く、且つ又た募集開始前地方長官に屆出づ可き就業案内又は雇傭契約書案中の一事項として、(九)雇傭期間及解雇に關する事項を舉げてある。又其第七條には、募集主事業を廢止したるときは、募集を許した地方の地方長官に遲滯なく屆出づ可きものと規定してある。

此等の規定は、何れも、製絲女工をも、其眼中に置いた規定であることは、疑ふ可からざるところである。

此度の爭議當事者たる雇主が、其工女募集に方つて、ストライキは直ちに解雇を意味すと、明かに示したか否か、且つ又其樣に地方長官へ豫め屆出でゝ置いたか否か、私は、これを知らない。又た地方長官が、其樣な屆出を、平氣で受理したものであるか、否か、亦これを知らない。

更らに又た、其雇主の定めた就業規則に、ストライキを直ちに解雇事由とすと定めて、地方長官に屆出てゝ置いてあるか、否か、これまた、私の知らざるところである。

しかし、私が諏訪に於いて面會した縣吏の人々は、此點について、何事も知らざりしこと、私同樣であつた。否其樣の規定の存在すらも或は忘れてゐたのではないかと、私は恐れるものである。工場閉鎖の各縣地方長官に對する屆出についても亦然りである。

工場施行令第二十七條ノ二には、明かに左の通り規定してあるのである。

『工業主にして、雇傭契約を解除せむとするときは、少くとも、十四日前に其の豫告を爲すか又は賃金十四日分以上の手當を支給することを要す。但し天災事變に基き事業の繼續不可能と爲りたるに因り又は職工の責に歸すべき事由に因り已むことを得ざる場合に於て雇傭契約を解除するときは此の限に在らず。

民法六百二十七條にも

當事者が雇傭の期間を定めざりしときは、各當事者は何時にても解約の申入を爲すことを得。此場合に於ては、雇傭は解約申込の後、二週間を經過したるに因りて終了す

第六百二十八條

當事者が雇傭の期間を定めたるときと雖も已むことを得ざる事由あるときは、各當事者は直ちに契約の解除を爲すことを得。但其事由が當事者の一方の過失に因りて生じたるときは相手方に對して損害賠償の責に任ず。

茲に『已むことを得ざる事由』とあるのは、甚だ漠然たるもので、三百代言的解釋の跋扈する餘地を殘すものであるが、今日の文明國の勞働立法の精神から云へば、――日本の法廷が如何樣に解釋するに拘らず――ストライキは、これに該當するものでは、斷じてあり得ぬ。況んやストライキが「天災事變」又は「職工の責に歸す可き事由」でないことは、言を俟たざるところである。

諏訪地方の製絲工女の雇傭契約は、たしか一ヶ年を期限としてゐて

右爭議當事者たちの雇傭期限の終了は、昭和二年末であつたとのことである。從つて、其れは民法で云へば、第六百二十七條の二に當らず、第六百二十八條に當るのであらう。假りに歩を讓つて、ストライキが其の所謂已むを得ざる事由なるものに當るとしても、工場法施行令第二十七條の二によつて、十四日の豫告期間を要する。林組が、工場閉鎖を聲明したのは、九月七日である。從つて九月十二日には、未だ十四日を經過して居らぬのである。況んや、ストライキは、決して、已むを得ざる事由と認めらる可きでないに於いてをや。

しかし、私は、漠然たる條文の解釋について、彼是言ふことを無益と見る。抑も右の寄宿舍規則を制定した精神に鑑みれば、其樣な事は到底、問題とならないから。唯返へす〴〵も其規則中に一條を置いて此度の樣な暴擧を頭から禁遏して置かなかつたことを殘念に思ふのみである。

しかし、其一條が存しないからとて、此度の寄宿舍驅逐に對する、警察吏、縣吏の無爲、無能、無理解、無責任は、到底寛假さるべきではない。

既に寄宿舍放逐が敢行し得らるれば、宿るに家なく、食ふに食なき數百の年若い婦人たちが、慘敗に陷ることは、鏡にかけて見るが如くである。大地を打つ鎚の外るゝことありとも、此の道行は、誤りなく起る。

これが、此度の慘敗の第一原因であつて、而して、其れが敢てし得られたは、責任の地にある吏員たちの社會政策的の無能、無理解、無責任から起つたことである。

（二）爭議團には、殆んど何等の基金はなかつたようである。心ある人にして多少の援助を與へた人もあるようであつたし、外國婦人中にも深甚な同情を寄せた人のあることを聞及んでゐる、又吉野博士等の指導せらるゝ『母の家後援會』等に於いても、力を用られた樣であるが、に兎角千に近い工女、男の食住を支へると云ふことは、到底出來ないことであつた。寄宿舍から驅逐せられても、基金が相當にあつて、若干期間、食住を支ふることが出來たら、マサカ、彼の如き慘敗は招かなかつであらう。返へす〴〵も殘念千萬なことであつた。

（三）輿論は甚だ冷淡無頓着であつた。都下の新聞紙中、稍々忠實に報導したのは、『東京朝日』、次いでは『東京日々』の二紙あるのみであつた。『報知』の如き大新聞、『國民』の如き品よき新聞、何れも、殆んど何事をも報せざる程度に、冷淡であつた。何とか將軍が先祖傳來の寶劍を以つて隣家の飼犬を突き殺したなどと云ふ記事を大々的に掲げ乍ら、何百のうら若い婦人たちが、雨中路上に放出せられた昭代の大

曲事については、數行の紙面を割くことをすら敢てしなかつた。却て英字新聞の『ジヤパン、タイムス』が、『東京朝日』と同程度の注意を此事件に向けたことは、むしろ異とすべき事であつた。

輿論の力強い支持を缺いては、未だ一回も經驗もない製絲工女――年久しく蹂躪せられ、壓迫せられ來つたところの――、初めての大規模なる爭議が、合理的な終局を見る望は、先以て存せぬ。

(五)

日本に於いて、初めて見た、稍々大規模な製絲工女のストライキは斯くて徹底的慘敗に終つた。而して、爭議關係者たちは、今其居住をすらボイコットせられつゝあると云ふ。

果して、此くの如くんば、健實な組合運動によつて、工女たちの勞働及生活條件を向上改善するてふ望は、全く杜絶したであらうか。

今日の現狀について見れば、此問に對しては、然りと答ふる外はない。誠に、死ぬ者貧乏と云ふ。慘敗を極めた組合關係者は、製絲工場主一同から蔑視せられてゐるは勿論、岡谷の土地の人々からも、憐しみの眼を以て見られてゐるであらう。否他工場の工女、男も當分は、組合に關係することを厭ふてゐることであらう。彼の人々に誤まられて、林組に於ける同勞者は、みじめな目を見た。もう懲々であると云ふてゐるかも知れない。從つて、當分の間は、組合運動に火の消へた如くであるかも計られない。此現狀のみに、觀察を限局する人は、諏訪製絲勞働男女工間に於ける組合運動の前途を、全然絶望的と觀ずることであらう。

私は、此の觀察に與し能はざるものである。私が、本文の初めに、組合普及の原因としてあげた三つの事情(一)勞働者間に於ける、殊に工女間に於ける人間的要求の目ざめ、これに對する雇主の全然的無理解(二)組合指導者の妥當なる態度(三)諏訪諸製絲工場に於ける勞働條件並に寄宿狀態の甚だ劣れるものであることの三點にして存在する限り、私は組合運動はいつしか再び盛んになるに相違ないものと信ずる。

故に、逆説的に云へば、諏訪製絲業者が、組合運動の起ることを後らしめようと、眞に欲するならば、(一)工女、男の人間的要求に對する理解を得ることに反省努力し、(二)而して、これに應じて、他から促されるを待たず、工場に於ける勞働條件、寄宿舍に於ける居住衛生の設備、食料の供給等を出來る丈け改善改良するに鋭意する外に道はないのである。勞資協調を促して、居住ボイコットをしたり、徒にもない屁理屈を並べたりして、組合運動者、組合關係者等を壓迫すれば、彼等は、益々自省戒飭して、其組合運動を、より深刻に、より徹底的に、擴け且つ深むるの刺戟を得ることになる外はあるまい。

乍去、雇主側に、理解の上進、勞働居住條件の改善に對する自發的進歩を期待することは、今日の有様では、迚も不可能なことと考へられる。從つて、他の考慮は姑く措くとして、此點から丈けでも、私は此度の組合の慘敗は、決して組合運動の終局を意味するものでなく、却つて、其のより進んだ第二期の開始を意味するものであらうと思ふ。但し其れには、組合指導者たるべき人たちの向後の出處が、重大な關係を有つ。若し、其人々の擧止宜しきを得ないときは、タトヘ遠き將來に、組合の發達を見ることは有り得るとしても、茲暫らくの間は、雇主の無理解、無反省は、却つて、此度の慘敗に勝誇らしめ、彌々其れを甚しくし、工女たちの運命は、更らに、一層悲慘なものとなり、絶へず向上しつゝ行く其人間的要求と、現實の狀態との隔りは、彌々甚しくなつて、堪へ難い狀態に陥るかも斗られないのである。

（六）

以上、私は、全く身を單なる觀察者の地位に置いて考察したところを申述べた。しかし、社會政策に社會立法に多少なりとも關係する一人としては、私は、現行法令の範圍内に於いても、當局者に於いて爲すべき幾多の事項の存することを主張せずして已む能はざるものである。

其一二をあげて見れば、第一にストライキは雇傭契約の破棄であるとの曲解を一掃すべきことこれである。第二に、募集により遠方から寄宿舍に收容せらるゝ被雇傭者に對し、此度の如き暴擧の再演せられざる樣規定を急設すべきことこれである。第三に、婦人勞働者關係の工場に對する工場監督の制度を、根本的に立直すことこれである。殊に、少くとも、其等工場に對する工場監督官は、地方廳官吏たる身分のものとせず、社會局直屬の身分のものと爲すべきことこれである。(此事は、製絲家が地方長官の地位をすら左右する權能を有つと噂せられてゐる長野縣について、殊に痛切に感ぜられる。)而して無論、其等工場に對しては、初めは監督官補としてなり婦人監督者を置くべきである。此等の施設は、現行法令を變更せず、若くは微細な修正加除を爲すによつて實現せられ得るのであるから、一刻の猶豫なくこれを斷行すべきである。

終りに、私は、世上の輿論が、婦人勞働者に對して、更らに格段の理解と同情とを加へんことを切願せざるを得ぬ。

此度の爭議當事者たりし工女たち、また其の指導者たちには、或は個々の點について非難さるべきことはあつたかも知れないが、爭議に對する根本的態度は、一の責めらるべきところを示して居らぬ。否、其結束の堅固なりし點、其統制の保たれてゐた點、對爭者に對する態度の大體に於いて穏健妥當なりし點等は、必ずこれを明記して置かねばならぬ。

此等の點に於いて、私は、他の勞働爭議の場合と比較することを能めて全く方面違ひの一二の場合と比較して考へて見た。卽ち本年夏の初め頃起つた仙臺二高の校長排斥騷ぎ、更らに近くは、同じ婦人間の問題であつた女子高師の校長騷ぎなどこれである。而して私は、諏訪女工の方が遙かに、其出處其進退に於いて、見上げたものであつたことを認めざるを得ぬのである。

二高騷ぎは有耶無耶に終つた。其れもよし。あれ丈け世間を騷した學生たちの間誰人がこれに對して公然責任を負つたか。新聞紙の傳ふところにては、學生側に一人の犧牲を出さずとの條件の下に、全騷ぎを全く取消撤回し、其首謀者等は、校長を非誇し、世間を騷がせたことに對し、何等公然たる引責の實を示さなかつたといふことである。彼の騷動其もの丶當否は勿論別問題である。唯人格手腕共に賴むに足らずと天下に公言した校長其人は依然たるに、斯く天下に揚言した學生たちは、恬然として其下に降服し、唯一片の謝罪文とかを讀み上げて尻を拭つたに過ぎぬといふ。勿論學生の大多數は、雷同者若くは彌次馬として、其の排斥運動に加擔したのであらうから──左樣でないなら、全學生が公然引責すべきである──一片の謝罪文で、元の巢へ舞ひ戾るに大して差支はあるまい。然し、少くとも其首唱者たり若くは指導者たりし人々丈けは、自己の不明不德の爲めに校長の德に累を及ぼし、世間を騷かしたことを謝す可く、公然罪を天下に謝して自ら校を退く位の事は爲すべきであつた。若し其反對に自己の校長排斥は決して、不當不明でなかつたと信ずるなら、不德無能なりと世間に吹聽した其の同じ人を校長として頂いて、ノコ〱と其下に屈辱を甘受して居るとは、變な話ではないか。其何れにしても、彼等初めは脫兎の如く終りは處女の如し。男子の意氣學徒の操持などは藥にしたくも見出されない。反つて、排斥せられた校長氏の明鑑を裏書する外はないことゝなる。少くとも、私の知る限り、昔しの學生騷ぎは、そんな輕薄な屁ピリ腰なものではなかつた。

更らに同じ婦人の騷ぎであつた女高師騷動に至つては、其不徹底其矛盾實に正視に堪へないのである。茲に、管々しいことを述べるのはむしろ筆の汚れとなる。

今、此等のものに比べれば、諏訪一千有餘の女工たちは、終始一貫條理井然たる態度を保つたものと云はねばならぬ。彼等は慘敗した。其慘敗は彼等の多くに取つては、血と淚とを以つて迎へられたものであらう。彼等は鄕里に歸つて、父兄に責められ、鄕黨に嘲けられたかも知れない。否、彼等は得らる可くして得られざりし工賃の爲めに、其父兄にも自己にも甚しい苦痛を釀出したかも知れぬ。而も、彼等は最後まで戰つた。寄宿舍を追出され指導者を奪はれ、官憲に厄介視せられ、身を措くに處なきドン底に陷るまで戰ひ續けた。而して慘敗したのである。彼等は、一人々々に其ストライキ加入に對して、十分以上の責任を荷つたのである。二高の意氣地ない學生たち、女高師のＨ

先斗りなる女先生たち、到底此の諏訪千餘の工女に對すべき面目を有つて居らぬのである。

殊に輿論の冷淡、無頓着なる二高女高師に對するの比ではなかつた間に、斯くも健氣な態度を保守した彼等の事を思ふとき、私は涙なきを得ぬものである。高等若くは最高等と云はれる教育を受け又は受けつゝある人々の間に見出し得ざる意氣と操持とが、高々小學校卒業以上に出でざる一日十二時間乃至十三時間苦役しつゝある勞働女子の間に見出さる。何たるコントラスト！ 何たる皮肉！

しかし乍ら、其はむしろ當然である。二高や女高師の騒ぎは、眞劍なものではない。生存の根本義に些も觸るゝところないものである。或は、單なる彌次根性、御殿女中根性の發露に過ぎなかつたかも知れぬ。之れに反し、諏訪工女の其れは、眞に人としての生存の根底に直ちに肉迫する重大事であつたのである。理論鬪爭家をして、如何様にも其の鬪爭慾を逞くしめよ。其れは少しも恐るゝに足るものではない。唯人間生存の根柢に横る鬪爭に至つては恐る可きである。可憐なる助けなき年若き婦人たちも、事これに關するときは、此くの如き意氣此くの如き操持を現示し來る。輿論は今冷淡無頓着なりと雖も、其れは決して永續することを許されぬ。晩かれ早かれ、世間は愕然として自失する様な、、、に逢着するであらう。

私は、斯くの如くに觀察して、此度の諏訪爭議に、言ひ盡くし難い深甚の意義を認めつゝあるものである。(二・十・八)

附記。

事本題に些も關係ないことであるが、二高女高師同様な意氣地ない一例を、最近に見せつけられた。其は、我邦美術家の最高權威團體たる帝國美術院の改革騒ぎこれである。改革主張者は(一)會員は會員自ら選出すること、從來の如く、官憲の天降り的任命を廢す(二)院長幹事は會員中より互選すること、屬吏の天降り任命を排すと主張しつゝあつたといふ。これは、今迄左様でなかつたことが、摩訶不思議であるくらゐ當然の主張である。フランスのアテデミー・デ・ボーザールは、アンスチチュ五學院の一となつてゐて、他の四學院同様右通りにしてゐること久しいのである。他の邦の美術院も大抵左様であらうと思ふ。我邦でも、美術院の姉妹團體たる帝國學士院は、昔から――但し東京學士會院時代には、會員の一部だけは、文部卿が任命したことがあつたが、其制け間もなく廢された――右の二ヶ條を固守してゐる。學者の團體に出來ることが、何故美術家の團體に出來ぬか。美術家は、學者よりも、低能で、□自治自爲の能力ないものであらうか。餘りに馬鹿〳〵しいことである。然るに文部省の局長とかは、美術家は、行政の手腕を缺くなどゝ揚言しつゝあつた由新聞紙に散見する。是れ我が美術家に對する大侮辱ではないか。美術家でも、美學者でも何んでもない、ほんの屬吏あがりの人々に其手腕其能力ありて、美術家其人にこれなしとは、驚き入つた話である。美術院の院長や幹事に、何れほどの手腕や伎倆がいるものとせられるのか知れないが、校長や役人の古手で出來ることが、日本美術の最高權威たる人々に出來ないことは、誰か眞面目にこれを信ずることが出來よう。然るに、美術院の諸士は、初めの勢は何處へ置き忘れたか、無耶有耶の内に退散したと新聞紙は報じてゐる。私は玆にも、意氣地なしの一例を見るのである。其れにつけても、諏訪一千の製絲工女の健全さは一際、強く私を刺戟せずして已む能はぬのである。(二・十・十二)

大衆講座

今月號より「大衆講座」を開始します。主に現代社會思想の基本をなすものに概念を與へたいのが目的です。しかし社會思想のみに限りません。一口に「マルサスの人口論」とか「マルクスの資本論」とか申しますが、なかなか以つて正確な智識を誰しも持合せがたい。本誌の試みは必ず何等かの効果を收め得ると確信し敢へて開講したのです（記者）

マルクスの『資本論』

高畠素之

1　如何なる書物か

マルクス『資本論』の翻譯が始めて市場に賣り出された當時、題名から聯想して、何にか金儲けの秘法でも書いた本であるかに思ひ込み、だいぶ株町界隈に雜客があつたらしい噂さを聞いた。戰後の黄金洪水で有頂天だつた時分であり、必らずしも一口噺の材料を捏造したとも考へられないから、如何さま有りさうな話しだと思つてゐる。しかし今日では、まさか『資本論』を株屋相手の赤本と間違へたり、マルサスと混同して『人口論』の姉妹著述と感ちがひする者もなからう。僅か十年足らずの月日だが、太閤様といへば千成瓢簞を聯想させるやうに、マルクスといへば資本論を聯想させ、社會主義學の教典であることは誰ひとり知らぬ者があるまい。

この事實は、取りも直さず、現代に於ける『資本論』の重要性を語るものである。味方はもちろん、敵方も、マルクスを知らずして社會觀を立てることが出來ず、マルクスを知るには『資本論』を頼るよりほか方法がない。隨喜派も毛嫌派も、勞働者も資本家も、デモクラットもミリタリストも、先づこれについて一通りの知識を得た上でなければ、時代の形勢を談ずる資格がないのである。ところが『資本論』と來ては、尨大と難解がその定評とされ、一般素人には喰ひつき兼ねる厄介な代物と考へられてゐる。

或る意味ではそれに違ひない。だが、物事は概ね案ずるより生むがやすく、尨大だ、難解だ、と頭ごなしに嚇かされてから肝膽を抜かれ

るが、書いてある理屈の筋道は簡單明瞭、猫が杓子でも人語を解する限り理解が困難でない。本篇の目的は、さうした『資本論』の輪廓の輪廓のそのまた一端を摑いつまみ、早わかりの早わかりを手引きするにある。素より原本の結構を傷つけまいとすれば、目次だけ並べても豫定の枚數を超過する危險がある。そこで大體の骨子を、それも說明の便宜に從つて祖述するの外はない。首尾よく參りましたら御喝采、といふところである。

最初は小手調べとして、先づ『資本論』とはどんな書物だかを語る必要がある。一卷、二卷、三卷の三部から成り、猶太系獨逸人カール・マルクスの著述といふまでは御承知でも、次のやうなイキサツを經て完成されたことは知らぬ人もあらう。元來マルクスは、畢生の事業として『資本論』の腹案を練り續けてゐたが、一六八七年、ちやうど我が明治元年に第一卷を公けにしたのみで、明治七年にはこの世を去つたのである。そこで親友エンゲルスが彼れの遺稿を整理し、續いて二卷と三卷とを公けにしたが、しかしこれとても、マルクスが『資本論』に說かうとした全計畫の完成ではなかつた。即ち生前のマルクスは、第一卷に『資本の生產行程』を、第二卷に『資本の流通行程』と『資本の總行程』を、そして第三卷に『餘剩價値學說史』を充てる豫定であつた。しかしそれでは、餘り尨大になり過ぎるので、豫定第二卷の前半だけを取つて第二卷とし（明治九年）、更らにその後半を第三卷として發表したのである（明治十八年）。豫定の第三卷部分に對しては、エンゲルスから更めて弟子のカウツキーに依囑し、別個に『餘剩價値學說史』として公けにした（明治三十八年―四十三年）。だから嚴密には、マルクス『資本論』といへば、このカウツキー編纂物をも加へなければならない。この樣に、最初の發表から最後の完成まで實に四十有三年、主演者マルクスの偉大さもさることながら、助演者たるエンゲルスとカウツキーの功績も沒却することが出來ない。

今や『資本論』の獨逸原書は各國に飜譯され、全譯抄譯を合はせれば二十數國語、正に『聖書』に亞ぐ勢力だといふ。日本にも拙劣ながら不肖の全譯があり、近くは河上博士と宮川學士との共譯も刊行されるとのこと。いづれもエンゲルス版までの三卷だが、カウツキー編纂の『餘剩價値學說史』も森戸氏櫛田氏等の努力で目下分冊刊行されつつある由。

2. 『利』の千姿萬態

全世界に信徒をもつキリスト教の『聖書』と共に、マルクスの『資本論』が各國語に飜譯されてゐる事實は、言ふまでもなくこの書物が、人類の心臟に訴へる何等かの『問題』を把握してゐる證據でなければならない。萬人の利害關心に訴へるところがなければ、誰れが醉狂にそんな大騷ぎをする筈もあるまい。

然らば資本論の取り扱ふ問題とは、一體それがどんなものであるのか。――題名を呼んで字の如く、資本主義制度の解剖を目的としたものに外ならない。布衍して說明すれば、それに依つて資本主義經濟を支配する法則と動力とを發見し、この經濟が如何にして生れ、如何にして滅びるかを科學的に究明したものである。

資本主義制度とは何であるか。詮じ詰めれば、『利』を得ることを出

でない。『利』は地代、利子、利得といふ風に、時と所とで色んな形をとつて現はれるが、終局は生産上の利潤から分れたものだ、といふのが『資本論』の考へ方である。

例へば茲に一人の企業家があつて、彼れが他人から資金と土地とを借りて生産事業を營み、假りに三千圓の利得を一年に擧げた場合を想定して見る。そして彼れが、借入れた資金と土地とに對してそれぞれ一千圓宛の利子と地代とを支拂ひ、殘餘の一千圓を自己の利得として取つたとする。この場合、資本主は資金を貸したことに依つて一千圓を儲け、同じく地主は土地を貸して一千圓を儲け得たのだから、表面的にはどうやら彼等の資金や土地が直接に『利』を生んだやうにも見える。だが、資金や土地は、決してアミーバの如く個體分裂をするものではない。百圓の紙幣はいつまで經つても百圓、二枚に分裂してひとりでに二百圓となるのではない。土地もその通り、百坪の土地はつひに百坪、荒れるに委せて放り出して置いたのでは、錢匣の增殖も自然的に行はれる道理がない。して見れば、所要の『利』は資金や土地からの直接の分裂ではなく、他に何等かの要素が働いて始めて生れることが知られるであらう。現に斯く一千圓宛の利子や地代を支拂つても、尙ほ企業家の手には一千圓の利得が殘されたのである。この利得は、決して資金や土地の生んだ直接の『利』ではなく、事業經營の途中で生れたもの、即ち生産利潤の一部と解すべきである。

かうした生産利潤は如何にして生れるか。資金や土地もその必要な條件ではあらう。が、しかし、單にそれだけでは少しも『利』の增減に貢獻しない限り、他の要素の働きをおのづから前提として考へなければなるまい。の唯一の要素として、マルクスは『勞働の支出』をそれに見出したのである。

何故に勞働のみが『利』の源泉となるか、これに關する詳しい說明は後段に讓るが、資本制度の解剖を具體的にならしめるため一例として、次の事實を提供し、如何なる徑路でこれらの『利』が生産利潤から轉化するかを調べて見よう。

例へば、茲に一人の男があつて、一千圓額面の五分利附社債二十枚を所有し、毎年その利子として一千圓の利子を取つてゐたとする。然るに彼れは、その全部を額面通りで他へ賣却し、合計二萬圓をそのまま一千圓の地代を收める土地に買ひ換へたとする。二萬圓に對して一千圓は五分の利廻りで、彼れの所得は以前より少しも增減するところはなかつた。そこで彼れは、更らに一萬圓を投じ、地盛りをしたり下水を掘つたりして土地の效用を增大し、毎年五百圓宛の增收をなし得たと假定する。收入に於いては同じ社債を尙ほ十枚買つた場合と同じだが、しかし彼れの第二回目の支出は、確定された地代を目安としたものでなかつた限り、即ち土地の效用を增大してヨリ多くの生産を得ようとした意味で、純然たる企業だつたといふことが出來る。隨つて、そのために得た五百圓は明かに生産上の利潤だつたことが知られる。利潤そのものである以上、それはそれとして說明の必要を見ないが、前述の社債利子の如きものは、如何にして生産上の利潤から轉化されたかが不明である。しかし、徑路は極めて簡單である。即ち社債を發行したところの會社は、二萬圓の資金を資本に繰り入れて生産事業を營み、それに依つて收め得た利益の一部を、債務に對する利子として

支拂つたに過ぎない。根本の根本に溯れば、生產利潤から轉々したことが知られよう。

然らば、利子ならざる地代の場合はどうか。これも前述の場合とイタチごつこで、マルクスの理論は可成り逆說的である。彼れの檢討は、二萬圓といふ土地の代價が如何にして生じたか、その疑問の分析から出發してゐる。

成るほど二萬圓といふ貨幣價値は、その土地の代價として、前の持主に對して彼れが支拂つた代金であつた。彼れが、何故に斯く二萬圓といふ大金を支拂つたかといへば、それに依つて一千圓の地代を收め得るからに外ならない。即ち地代を收め得るからこの土地に値段が生じたので、土地それ自體としては、最初から價格があつた譯ではない。勿論、更らに一萬圓を投じ、土地の效用を增大して五百圓の地代を增收するなら、この五千圓は投資された一萬圓の利潤と見られること前述の通りだが、最初の二萬圓には何等さうした意味は含まれてゐず、その土地が一千圓の地代を齎らすから、それを目あてに代價を拂つたに止まる。この樣に分析した結果、地代が地價に先だつたものであつて、土地價格の高低は地代の高低に依ることが明瞭になつた。

そこで問題は、この地代が一體どこから生れるかである。土地はそれ自體として何等の價値も生まない。隨つて、土地が地代を生むのではない。天から降らず地から湧かぬとすれば、殘る一つの勞働から——土地に對して直接間接に支出された勞働から、矢張りそれが造り出されたと見るの外ないであらう。假りにこの土地に對し一千圓の地代を拂つて、生產事業を營む企業家があつた場合を考へれば、地代はこの企業家が、勞働者の勞働から搾取した生產利潤の一部を以つて支拂はれたことが判明するのである。『資本論』第三卷は、斯かる利潤が轉ぜられて、如何に利子となり地代となるかの徑路を詳述したものである。

3. 價値を造る源泉

『資本制生產方法が專ら行はれる社會の富は「尨大なる商品の集積」として現はれ、個々の商品は其の成素形態として現はれる』——マルクス『資本論』の冒頭は、有名なこの一句を以つて書き出され、續いて『故に我々の研究は商品の分析を以つて始まる』となる。その言葉に從ふなら、資本制度を解剖せんとすれば、先づ『商品とは何ぞや』を明らかにして掛かる必要がある。

商品は生產物である。生產物とは、自然物に勞働を加へ、社會的な效用を與へたものである。——といふと、如何にも話しが藪から棒になるから、その前に生產といふ言葉の意味を吟味しなければならない。あらゆる人生效用に役立つ『富』の材料は、悉く自然界に埋藏されてゐる。動物は與へられたこの自然の富材を、そのまま取つて生活の糧としてゐるが、人間は更らに、勞働に依つて自然物の形態を變へたり場所を變へたりして、これに新らしい效用を增し加へて行く。つまり『富』の生產を行ふのである。生產物とは、この生產の結果として新らしい效用を生じた物品をいふので、天與のままの自然物とは違つてゐる。商品として通用するのは、かうした生產物ではあるが、その直接の生產者もしくは彼れの關係者が、自分達の使用を目的として生產したも

のでは不可ない。これを『他の生産物と交換』せんことを目的で造つたものでなければならない。同じく米をつくる場合でも、一家の使用だけを目的とするなら商品でないが、それを隣家の麥と交換する目的でつくるなら、始めてそこに商品の性質が生れて來る。隨つて、物が商品たるには、それが人生の效用に役立つことと、他と交換されることと、この二つの條件を兼ね備へることが必要である。

太陽は萬人の效用に最も役立つてゐる。だが、太陽は生産物ではない。隨つて他の生産物と交換もされない。人生に有用ではあるが、幸か不幸か、それ故に商品となることは出來なかつた。マルクスの術語に從へば、太陽のこの效用は『使用價値』と呼ぶもので、商品たるには『交換價値』を有たなければならぬといふ。然らば、使用價値にのみ役立つ有用物と、交換價値として役立つ商品とは、抑も如何にして區別されるか。マルクスはこれを、一定の數量を以つて交換されるか否かの區別により、交換されるものを商品、交換されぬ場合を單なる有用品と見なした。そして、一の商品が他の商品と交換される比率のことを『交換價値』と呼んだ。

例へば一着の洋服が、三反の木綿と交換され、三反の木綿がまた五斗の米と交換されたとする。この場合、若し洋服と米とが交換されるなら、必らずや一着と五斗との割合を以つてなされる。それ故、この洋服の交換價値は、木綿と交換される時には三反として現はれ、米と交換される時には五斗として現はれ、各個の場合の交換に應じて種々樣々の形態をとるのである。交換價値のこの種々相は、恰も一貫目の物體が米突法では三・七五キログラムとして現はれ、磅封法では八・二六七三ポンドとして現はれる如く、唯だ單に形を異にして言ひ現はされたに過ぎない。即ち目方の表現は違つても、重さの內容に變りがないのと同樣、一着とか、三反とか、五斗とか、それぞれの商品の交換價値にも、共通する一定の『內容』が横はつてゐることが知られる。商品の交換はこの『內容』に依つて行はれる。一着の洋服と三反の木綿と五斗の米とが、相等しい交換價値を有するといふなら、つまり三つのそれぞれ違つた物品に含まれる右の『內容』が等しいことを物語るこの『內容』を商品の『價値』と呼ぶのである。商品に含まれる斯くの如き價値は、然らば如何にして構成されるか？ああでもない、かうでもないと詮じ詰めた結果、マルクスはこれを一般的な人間勞働の結果として解釋した。

砂糖は甘く鹽は辛い。この二つの物品は交換される。しかし兩者の交換比率は、決して甘さの程度や辛さの程度で決定されるのではない。兩者のかういふ自然的性質は、よしんば交換を促がす條件とはなつても、價値の比較を導く條件とはならない。そんなら何がその條件となるか。說明の便宜として、假りに砂糖からは甘いといふ性質を除き、鹽からは辛いといふ性質を除いたとする。さうすると、砂糖や鹽は使用價値としての有形的な諸成分も諸形態もみな失つたことになるからこれらの物は無味乾燥な一個の勞働生產物と見なすことが出來る。家も、絲も、米も、その他の何も彼も、同じく斯樣に見ることが出來るのである。即ち、特定の生產的勞働たる建築勞働とか、紡績勞働とか、或は農業勞働とか、かういふそれ〴〵の勞働形態から切り離し、結局は唯だ單に『人間の腦髓と筋肉との支出』に過ぎないと解釋し得る。特

殊のそれ〴〵の形から離れた一般的な人間勞働の蓄積の結果と解釋し得る。價値を生み出す源泉は、この樣な一般的の人間勞働に外ならない。

商品の價値が斯くの如しとすれば、その價値の大小を比較秤量するのは少しも困難でない。つまり、それぞれの商品の中に、かうした一般的な人間勞働の量がどれだけ含まれてゐるかを調べればよいからである。勞働量の調査はこれも簡單である。なぜならば、專門特殊の熟練勞働をも、單なる『人間の腦髓と筋肉との支出』の意味で一般的勞働の倍加に約元し得る以上、一般的勞働の支出された時間の長短で總量を測定し得るからである。その結果、生產上にヨリ長時間の勞働を必要とする生產物は價値がヨリ高く、短時間の場合はその反對たることが明かになるであらう。それ故、洋服の一着が木棉の三反と等價であることは、後者に比べて前者には三倍の勞働時間が支出されたといふことになる。

とは言ふものの、價値の表現はこれを決定する勞働時間を標準とするのみではない。現に『三十勞働時間の木棉』とか、或は『三十勞働時間の洋服』とか呼ばず、十圓の反物とか三十圓の洋服とかと呼んでゐる。價値のこの貨幣名こそ、一の商品に含まれる人間勞働の表象であつて、これを商品の『價格』といふ。貨幣の價値に變動がない限り、原則として商品の價格は價値に從つて高下し、價値量のヨリ大きな商品ほど價値が高く、價値量のヨリ小さな商品ほど價値が低い。

4. 餘剩價値の正體

人間の勞働力を以つて、價値の唯一の源泉と見なすマルクスの理論を延長すれば、資本家の搾取する餘剩價値は當然、人間勞働の結果であることに歸納されねばならない。

勞働する力は勞働者のもつ唯一の商品である。彼等は好むと好まざるとに拘らず、この商品をその買手たる資本家に賣り、それで日々の露命をつないで行かなければならぬ境遇にある。若しその必要がないとすれば、彼等は勞働者ではない。既に勞働力が一個の商品であるとすれば、他のあらゆる商品の場合と同樣に、その價値はこれを生產するに必要な勞働量に依つて決定される。ところが勞働力といふ商品は勞働者の肉體と切り離すことが出來ぬものであるから、この商品の生產に必要な勞働量とは、つまり勞働力の所有者たる勞働者の肉體的生存を維持するに必要な生活資料のことである。だから結局、彼等の衣食住の價値に依つて、彼等の勞働力の價値が決定されるわけである。賃銀とは大ざつぱに言ふならば、斯かる勞働力に對して、資本家が支拂ふところの代價に外ならない。勞働力の價値は斯樣にして決定されるが、その基礎となる勞働者の生活程度は然らば如何にして決定されるか。生活程度には素より不動の水準がある譯でない。唯だ環境の狀態、家族の大小、修練の長短等に依り、おのづからなる平均範圍が定められるに過ぎない。その大體の標準で勞働賃銀の相場が造られるから、世間の景氣不景氣で甚だしい影響を受けねばならぬ。のみならず、もつと根本的に見れば、社會的生產力の發達により、あらゆる勞働生產物の價値を低下せしめる結果、勞働者の生活資料の價値をも共に低下させるから、延いて當然に、勞働力の貨幣價値たる賃銀をも低下さ

せないでは措かぬ。理由は追つての説明として、當面の題目たる餘剩價値の究明に急がう。

今も言ふとほり、勞働者は商品として賃銀と交換に、その勞働力を資本家に賣るのである。資本家はその勞働力を生産上に發揮せしめる。然るに、勞働力の發揮は價値の造出であるから、一定時間の勞働を繼續することにより、受け取つた賃銀に相當する價値を生産することが出來る。一日の賃銀を三圓とし、その價値限點への到達が六時間であるとすれば、勞働者は恰も六時間の勞働で、彼等の一日分の生活費を稼ぎ出した勘定になる。若し、勞働者が正當な價格で勞働力を賣却したものなら、六時間以上でもなく以下でもなく、カッキリ六時間だけ働けばよい理屈である。が、しかし實際はさう簡單に行かない。なぜ行かないかといへば、それには次のやうな二つの理由がある。

先づ勞働者は、資本家の指揮命令で勞働しなければならぬ。何をどう造るべきかは、すべて資本家の權限に屬することであつて、勞働者は勞働する上に少しも自由と獨立とが與へられてをらない。殊に彼等の勞働力は、漠然たる一日分として賣却したのであるから、煮て喰はれやうが燒いて喰はれやうが、實は苦情を持ち込むセキがないのである。これに反して資本家は、一切の生産機關を自己の掌中に握り、これに「買ひ切り」の勞働力を發揮させた生産を經營する。その結果として造り出される生産物の處分に關しても當然、彼等が全權を獨占することは言ふまでもない。だから、如何に直接の生産者だつたにしても、勞働者は指を咬へて傍觀するのがオチである。

ところで資本家は、これらの物を生産せんがために生産するのではなく、生産物を他に賣つて儲けることを目的としてゐる。隨つて、生産に費やした價値だけの物を生産してゐたのでは、肝腎の目的とする儲けは鐚一文も捻出されないことにする。そこで、ヨリ多く儲けようとすれば、出來るだけ長い時間勞働を強制し、それで出來るだけ價値の增殖を圖ることが唯一の方法となる。

前例についていへば、カッキリ六時間で勞働をやめさせるなどは愚かなこと、儘になるなら一日分の最長時間、即ち二十四時間の勞働でも厭つて貰ひたくないであらう。だが、こんなことは言ふべくして行はれない註文だから、假りに二十四時間の半分十二時間の勞働をさせた場合を想像して見よう。

いま勞働者は毎日、三圓の日給で十二時間の勞働をさせられる。しかし彼等は、一日分の賃銀三圓に相當した價値を六時間で生産する。而も尚ほまだ六時間を働らかれはならない。前半は彼等の生活資料を造り出すための勞働で、謂はば彼等自身の爲の勞働と見られる。これに反して後半の六時間は、純粹に資本家の儲けのためにする余計な、勞働者から見れば、勞働である。マルクスはこれを「餘剩勞働時間」と名づけ、この餘剩な時間に造る價値を「餘剩價値」と名づけた。「利潤」とは、この餘剩價値の具象化したものである。

既に『餘剩』をいふからには、これに對して餘剩ならぬ『必要』の部分がなければならぬ。マルクスはこれにも明答を與へた。即ち右の場合六時間の勞働で打ち切つたとすれば、資本家は投下賃銀を回收して一文の損得がなく、勞働者も恰度賃銀に相當する價値を造り出せたから、これとて一文の損得がなかつた譯である。双方とも五分々々、

前半のこの六時間は、資本家にとつては投下せる賃銀を回收するに『必要』な勞働時間であり、勞働者にとつては生活費を稼ぎだすに『必要』な勞働時間だといふ意味で、マルクスはこの時間內の勞働を『必要勞働』と呼んだ。

5. 資本蓄積の徑路

商品の交換は、その始め直接に物と物とを以つて行はれてゐた。然るに商品生産が發達すると、貨幣といふ一種特別の役目を帶びた商品が現はれ、交換の媒介をつとめるやうになる。この物々交換には色々な不便を伴ふから、何人にも共通の效用を有つた商品を特に撰んで、それとなら、他の如何なる商品も交換し得る物を準備する必要があつたからである。隨つて最初は、貨幣として稻、布、鹽、貝殼、干鮮等の如き商品が撰ばれた。然るに、これらの商品を凌駕し、貨幣の地位を金や銀が獨占するに至つたのは、金銀が裝飾材料として普遍的な重要さを以つて交換されてゐたからばかりでなく、その輕小不變といふ自然的性質が貴ばれてゐたためでもある。貨幣が出現してから、商品は一旦まづ貨幣と交換され、その貨幣が更らに他の商品と交換され、貨幣といふ商品の存在を中心として物と物とが交換されるやうになつた。その結果、交換の媒介物となるこの貨幣の獲得を目的として交換が行はれ、單純な必要物の交換に過ぎなかつた商品流通の原始的形態は、やうやく複雜を加へるやうになつたのである。これを實際的に說明すると、最初は『買はんがために賣る』といふ形だつたが、後には轉じて、むしろ『賣らんがために買ふ』といふ形をとるのである。

卽ち取る商品を一千圓で買ふのは、この商品を一千一百圓なり、一千二百圓なりで他に賣ることを目的とするのであつて、自分の使用に供しようといふのが目的ではない。

資本制社會で資本家の行ふところは、複雜の上にも複雜を加へたものであるが、現實の上ではこの貨幣獲得を唯一の目的としてゐる。そして斯ういふ賣買の結果、新たに附け加へられる貨幣部分こそ、餘剩價値の具象化された利潤に外ならない。何故に然るか？　賣買の結果といへば、如何にも買つた時と賣つた時とで、商品價値そのものが自然的に增減したかのやうに思はれる。しかし、一着の洋服と二反の木綿と五斗の米とは、相等しい價値を含めばこそ交換されるといふ話しであつた。して見れば、一の商品が最初の貨幣よりも價値のヨリ大きい(又はヨリ小さい)貨幣と交換さるべき道理はない。何時(いつ)の間にさういふ『開き』が出來たか。交換の上からでないとすれば、結局は生産の上から出來たと見るしかないのである。その間の事情を分り易くするため、もう一度、餘剩價値の造り出される徑路を振りかへつて見よう。

十二斤の綿絲を紡ぎ、それで與へられた三圓の賃銀に恰度相當した價値を造り出した。しかし資本家は、尙ほ餘剩の六時間を勞働させたから、それに二倍する二十四斤の綿絲を紡いだことになる。若し二十四斤の綿絲が假りに貨幣價値三十二圓四十錢だとすれば、資本家はこれに要した費用として棉花二十四斤(二十四圓)、紡錘百分の二十四個(二圓四十錢)、勞働力(三圓)を合計した二十九圓四十錢に對して、尙ほ三圓といふ剩りを殘し得たわけになる。この三圓こそ、一日に一人の勞働者から得る資本家の餘剩價値であつて、若し一工場で百人の勞

働者を使用するなら、全員から一日に三百圓、月につもれば九千圓といふ巨額を計上し、それが彼等の懐ろ(三)に利潤として轉ろげ込む。賣買の結果として見られる資本家の儲けは、最初の購買から最後の販賣に至るまでの行程を通して、これに投下された勞働から如上の徑路で搾取した結果なのである。

資本家はこの樣にして、その所有するところの貨幣價値に絶えず新らしい貨幣を附け加へ、その貨幣を無限に利用する。斯く利用される貨幣を資本と呼ぶ。

資本は最初、貨幣として資本家の手に握られてゐる。次にこの貨幣が賣るための商品に投ぜられ、商品の形をとつた資本に轉ぜられる。そして再び、この商品が賣られて貨幣資本に復歸し、同じ徑路をとつて新らしい資本として利用せられる。だが、第二の場合の資本は、第一の場合の資本に加ふるに賣買の結果として實現された利潤を以つてするから、前者よりもヨリ大きくなる。第三回、第四回、第五回……と繰り返へす間に、下世話のいはゆる『利は利を生む』の譬へに洩れず、鼠算的にその數字を增大してゆく。假りに一萬圓の資本を利用し一年に二千圓の餘剩價値を獲たとする。これをソツクリ原資本に繰り入れるなら、二年目には一萬二千圓の資本を以つて事業を開始することが出來る。同じ率で餘剩價値を生むものとすれば、三年目の始めには二千四百圓を加へて一萬四千四百圓の資本、四年目には二千八百八十圓を加へて一萬七千二百八十圓の資本となり、斯くして同年の終末には三千四百五十六圓の餘剩價値を齎らすから、合計二萬七百八十六圓といふ大きな數字になる。即ち、最初の一萬圓は次第に餘剩價値を齎らし、四年にして二倍以上の資本に轉化し得たわけである。

勿論、餘剩價値の全部を資本に利用することは、實際の問題として出來ない相談であらう。飲んだり喰つたり買つたりの生活費を始め、建物や機械やの損耗もあることだから、假りにその方面に半額の一千圓を充當し、殘餘の一千圓を資本に振り向けたとしても、七年目の終末には二萬九百三十二圓を蓄積し、やはり原資本に倍加する數字が算出される。

しかし、資本はみな斯くの如く餘剩價値を齎すものではない。餘剩價値を齎す資本は、唯だ勞働力の代價として振り向けられた部分だけである。けだし餘剩價値は、前來說明して來たやうに、勞働者の勞働のみから成り立つからである。ところが、資本は他の一部に於いて、原料、助成材、勞働器具等の生産機關にも充用される。これらの生産機關は、それが生産されるまでの徑路に於いては餘剩價値を齎したであらうが、既に生産機關として充用される場合には、それ自體として何等の餘剩價値を齎らすものでない。價値の大さを變化させるといふ意味で、マルクスは前者に可變資本の名を與へ、反對の意味で後者を不變資本と呼んでゐる。

社會的生産の發達につれて、資本家は外部との競爭上ヨリ宏大な建物、ヨリ精密な機械、ヨリ多量な原料を必要とし、これらの生産機關に振り向ける資本部分を次第に增大しなければならない。同時にヨリ多數の勞働力をも必要とするから、可變資本に充用される部分も增大するが、かういふ社會的生産の發達は生産力の增進を意味し、凡ゆる生産物の價値低下に導くものであるから、可變資本は不變資本に比し

て次第にヨリ小さき部分を占めなければならぬわけである。可變資本の相對的減少は、勞働者の受け取るべき賃銀總額の相對的減少を意味する。それ故、生産力が增大するだけ、勞働者はヨリ安い賃銀で長い時間の勞働を強制され、人口增殖率よりも高度の率を以つて過剩の勞働者が殖えて來るであらう。資本家はヨリ多くの生産物を生産せんとして、不變資本にヨリ多くの部分を充用し、出來るだけ勞働力の代價を値切らうとするから、自然と人爲との兩面から勞働者の所得は削減されて行く。一方の巨富に比較しての他方の貧困は、斯くして次第にその對立と力度とを增大する。そこに、資本制度特有の自己矛盾が横はつてゐるのである。

以上は、マルクス經濟學のほんの一端を摑いつまんだものに過ぎないが、『資本論』の主題はこれに血肉を附け加へて大掛りに發展したものと思へば大過はないのである。

次號は　マルサスの人口論

普選法の第一回試驗批判

府縣議選に於ける普選の試錬

森口繁治

一

今回の府縣會議員選擧は二重の意味で、來るべき總選擧の準備として重要視された。蓋し此選擧は所謂普選法に依る第一回の府縣會議員の選擧であつて、併もそれが二府二十九縣に亘つて行はれたから、第一には新選擧法が實際にいかに運用されるか、此選擧法の下に於てはいかにすれば有效な選擧運動がなさるるか、と云ふやうな、主として普選法の下に行はるゝ將來の選擧の實驗と云ふ意味に於て重要視されたのであり、第二には此選擧は殆んど同時に略ぼ全國的に行はれたから各黨に對する投票人の態度はどうであるか、殊に、新有權者は既成政黨に對していかなる態度をとるか、新政黨である無産黨はどれ程の投票を得ると云ふやうな關係が明かになるものとして來るべき總選擧の偵察戰として重要視された譯である。故に此選擧は本來地方議會の議員選擧であつたに拘はらす、此等の意味で宛然總選擧であるかの如く各政黨共全力を擧げて之に對したのであつた。それ故に、余も亦此等の意味に即して問題を考へて行き度い。

所が、言論界では一般に今回の選擧に當つて示された地方選擧と中央選擧との甚しい混同自體に對して先づ若干の狼狽と反感とを示し言論機關は擧つて之に反對した。併も實勢の上には此等の反對論は殆んど何等の影響を與へなかつたのである。だから、茲に既に一の重要なる問題が横はると云へる。尤も今回の府縣議選は右に述べたやうな特別の理由を有つて居たのであるから、此選擧に當つて各政黨が之に力を注いだのは當然であり、從つて又此場合、地方政治と中央政治との混同は不可であると云ふやうな一片の理想論が無力に止つたことは當然であるとして片付けられる感もないではない。問題がかくの如く簡單に片付けられるものならば幸ひである。だが吾等は不幸にして此問題をかくの如き簡單な一時的な問題であると考へることを得ない。

先づ第一に今回の選擧に當つて各黨派が之を來るべき總選擧の偵察

戰として重要視したのは何故であるか。謂ふ迄もなく同一選擧人に來るべき總選擧に於ても略ぼ同樣の黨派的選擇をなすことが豫想せられるからである。然らばかゝる推測をなすことには理由があるか。吾等は之を肯定せざるを得ない。一國の政黨が地方的組織を有する以上、地方議會の議員候補者は通常或る政黨的色彩を有するものである。而して同一區域に於て更に選擧が行はるゝ際には、或る黨派的傾向を有する候補者を選んだ人は、次の選擧に於ても略ぼ同一の黨派的選擇をなすものである。併も其關係は政見の外、個人的利益、因緣、情實、感情其他種々雜多の要素から決定せられるものであるから、急變しない傾向を有するものである。かくて政黨の地盤關係が生ずるのである。此意味に於て各地方に於て有力なる黨員を得ると云ふことは政黨として最も重要なる問題となる。そこで政黨が地方的組織を有する以上、地方選擧に對する政黨的關與は殆んど避くべからざる結果であると謂ひ得る。故に何れの國の實際に就て觀ても、地方選擧が中央政治の爲めに存する政黨の組織から離れ、別個の組織を基礎として選擧が行はれて居ると云ふやうなものは殆んどない、英吉利の自治政治は政黨的弊害を最も尠く受けて居るものとして推賞せられるのであるが、茲に於てすら、地方選擧はやはり通常政黨の地方組織を基礎として行はれるのである。唯英吉利では、地方選擧に於ける失敗は其政黨的不信任とは考へられないから、之を政黨に對する直接の打擊と取らないのであり、從つて政黨幹部の地方選擧に對する干涉の程度も甚しくないと云ふ迄である。此點から考へると、我國の言論機關が一面では地方選擧と中央選擧との區別を高唱しながら、他の一面では其選擧の結果を以つて直に政黨的信任不信任の度を示すもの丶如くに歸せんとする態度を執りつゝある事實は、政黨の地方的關與を一層甚しくする危險を敢へて犯しつゝあるものとして、其所に若干の矛盾があることが考へられる。

併しそれは少時措き、選擧が同一地域の上で行はれ、各種の選擧が同一の政黨的組織を基礎として行はれる以上、選擧が政黨本位に行はれることは殆んど避くべからざる結果である。從つて一般には、恐らく、一國の政黨的組織が完備すれば完備する程、中央政治の爲めに存する政黨が地方政治に關與する程度は甚だしくなり、此關係だけからでも、之を放任すれば、中央選擧と地方選擧との混同は益々著しくなる性質を有するものであると云へるであらう。併も政黨としては其地方組織は政黨本來の機能を全ふする上から云つても、地盤を開拓し、黨務を擴張する目的から云つても、勿論之を捨てることは出來ないのであるから、茲に地方自治の理論及び理想と衝突するものが存する譯である。

地方自治の要領は謂ふ迄もなく地方政治の自主であるから、之を理論的に云へば勿論中央選擧と地方選擧とを混同してはならないのである。故に今回の選擧に於て、多數の候補者が互に反對黨の中央政治に對する一般政策の攻擊に沒頭したことに對し輿論が之を非難したことは當然である。又之を實際的に云つても、中央政治のために存立する政黨が地方政治に關與することは、或は所謂スポイル・システムの行はるゝ原因となり、地方自治の純正を破壞する結果を伴ふ危險がある許りでなく、政黨が地方的問題に關係することは却つて反對に中央政

治の公正を害する結果をも惹起し易いものである。

此點は吾等が從來屢々指摘した所であつて、地方問題は通常吾々の日常の生活と最も密接な關係を有つものであるから、其利害關係は直談であり、地方民は容易に利害の打算をなし得る關係にある。從つて各政黨が若し此種の地方問題を利用すると云ふことになつたならば、地方民は必然地方的利害に從つて各政黨に迎合すると云ふことになる而して其結果は一局部の利害に拘束せられて公平な態度を取ることを得なくなり、憲政も自治も悉く破壞されるやうなことになるのである。尤も一局部の利益は他の總ての部分の不利益を意味するのであり、併も負擔は一樣に課せられるのだから、選擧人がちつくり考へたならば、かゝる僞瞞の黨略に欺かれる譯はない筈なのであるが、人間の弱點を利用した遣り方であるから、看す々々此僞瞞の黨略に欺かれる譯であつて、寔に殘念な次第である。

それに吾國では地方制度そのものも惡い。吾地方制度は歐洲大陸の地方制度に倣つたものであるが、それはナポレオンの定めた地方制度を淵源とするものであつて、甚だしく中央集權的である。殊に府縣では自治體の理事機關が國の機關である所の天降り的な知事であること人の知るが如くである。市町村では公選の理事機關を有つて居るけれども、自治體に對する國の監督權が頗る廣く、又強く殆んど總ての重要なる作用に就て、知事其他國家機關の制肘を受けねばならぬ關係にある。然るに中央政府としては、なるべく其政策に忠實である者が地方團體の機關を組織し、なるべく同樣の方針に從つて地方政治を行ふことを欲することが當然であるが、かゝる中央集權的な制度の下では、此目的の爲めに、制度を濫用することにもなり易い。反對に地方團體の機關としても、中央政府との關係が圓滑に行かなければ其事務を遂行することが出來なくなるから、勢ひ同樣の政治的色彩を有する者が其機關になると云ふことになる。故に此種の制度ではどうしてもファシスト的な、中央集權的な政治になり易く、自治の意味は失はれ易い。

併も我國では選擧に當つて之を取締り、或は選擧を執行する權があたかも此府縣知事の手に握られて居るのであるから、一層始末が惡いのである。右のやうな制度の下に、たゞでさへ政府に迎合しなければならない地位にある知事が選擧の機關を指揮し、殊に其取締りをすると云ふのであるから、知事が其地位を利用し、なるべく自分に都合よくしやうと計ると云ふことは寧ろ當然過ぎる程當然である。況んや知事は官吏であつて、其地位の保障を有しない。政務官事務官の區別があるのは、事務官に就ては、政府の都合に依つて其地位を動かさない所に意味があるのだが、吾國の行政官には其保障がないのだから、此點からも亦知事は政府に迎合せざるを得ない弱い地位に置かれて居る。かくの如き組織の下に於て、中央政治と地方政治とを區別し、知事は國の機關としては政府の命に從つてもよいが、自治體政治に就ては、自治の本義に從ひ、中央の政策に動かされてはならない、と云ふのは理論としては正しいが、實際としては殆んど行ひ得ない所を求めて居るものと謂へる。

我等は、從來の地方政治と中央政治との混同又は地方選擧と中央選擧との混同に對する非難が、理論的には尤も千萬であり乍ら、實勢を

いかんともすることを得なかつた理由を右の如き諸種の點にあるとするものである。而して右の如き有力な事實に對してはいかに合理的な理論も一片の弱き理窟として終らざるを得ないものであると信ずるものである。故に今回の選擧に當つても政府は地方官の大更迭を斷行して之に當り、各地方に於ても警察官の大更迭を行つて選擧準備を行つた。恐らく民政黨が政府を組織して居たとすれば、やはり同様の處置に出でたであらう。たゞ現内閣の内務大臣の遣り口はいかにもムツソリーニを思はしめるやうな遣り口であり、政友會の過去の歴史が過去の歴史であるから、殊更に大いなる衝動を與へたのである。

所が、此度の選擧では、此ムツソリーニ式策戰が恰かも民政黨側に逆用せられた感がある。民政黨から各地方に送つた選擧監視員なるものが之れである。余は寡聞ではあるが、從來多少各國の選擧事情を承知して居る、だが未だかくの如き實例には接しない。恐らく選擧の策戰と云ふ點から云へば非常に巧妙を極めたと云へるであらう。勿論以前に地方官であり、將來再び地方官となる可能性がある人々であつたとは云へ、現に官職を有しないし、將來再び同一地方に地方官となるには限らないのであるから、其直接の效果は到底政府が現任官吏に依つて選擧に關與した效果には及ばなかつたであらう。だが、そうでなくとも地方官警察官の大異動に依り、政府の干渉を豫想して居た一般民衆にいかにも政府が專制的であるかの如くに信ぜしめ、民衆の同情を得た點に策戰としての巧妙が見える。或は政府の壓迫又は干渉を怖れ立候補を躊躇して居たものに勇氣を與へたと云ふやうな效果も考へられる。地方官の行動をコントロールする點にも勿論或る程度の効果があつたと思ふ。此等の理由で此方策は策戰としては成功したと考へられる。少くとも政友會の高壓的な策戰は、此民政黨側の策戰に依つて非常な打擊を受けたと云へるであらう。

併し余は此方策の實行は我地方政治の將來に對し更に一の暗影を投じたものと思ふ。何となれば、從來と雖も地方官の或る者は政友系と見られ、或る者は憲政系又は政本系と見られる事實はあつた。併し地方官自身としては寧ろ黨派的色彩を鮮明にするを不利益とし、成るべく中立に近い態度を執らんとして居たのである。然るに今回の如くに露骨に地方官の移動を行ひ、内務部を固めるに司法系の者を以つてして、選擧に臨むと云ふとになれば、中央政府自身に必ずしも其意思はなかつたとしても、上司の意を迎ふることを努むる下僚は、上司の意は積極的に選擧に關與せしむるにあると解することは必然である。此意味に於て政府の選擧に臨んだ態度そのものが既に頗る不穩當であつたが、之に對し所謂監視員を派した結果は前官と現任官吏との黨派的所屬關係を一層明瞭にしたのであつて、或る意味に於て、地方官は既成二大政黨の何れかを選擇すべく餘儀なくせられたと云へるのである。吾等は此關係を頗る重大視するものである。恐らく將來民政黨政府の下に選擧が行はれることがある場合には、やはり同様の方法が用ゐられることが想像される。かくては、さなきだにファシスト化すべく運命付けられて居るかの如き感のある我地方政治は一層自治政府の實を失ふ惧れがある。尤も、伊太利社會黨左翼がファシズムを選んだやうに、右廻りを早道であるとする行き方もないではないから、そう云ふ意味で意識的にファシスト化すると云ふならば別の話であるが、政治

的指導原理を民主的理想に置き、其立場から、憲政及び自治を行つて行くと云ふならば、かゝるファシスト化は極力避けねばならないと云ふことになる。

然るに其原因は既に述べたやうに可成り複雜な基礎的な關係から來て居るのであるから、單に理論上中央政治と地方政治とは區別すべきものである、と云ふやうな點を高唱するだけでは、恐らく此關係は改るまい。此點を高唱することも素より必要であり、或は選擧民が地方的利害を以つてする政黨の僞瞞政策にあざむかれないやうに之を意識せしむることも必要であらう。だが、それと共に、吾が地方制度に對し一大改革を加へなければ、結局其弊は益々甚だしくなりはせぬか。現に同樣の制度の下にあり、併も民族の性情が頗る我民族の性情に似て居る所の佛蘭西では、我國と同樣の中央政治と地方政治との混同が見られ、自治の實は著しく失はれ、選擧民は地方選擧に對しては頗る不熱心になつて居る。我國では政黨組織が尙完備して居ない現在に於て既に目に餘る不都合な結果になつて居るのであるから、其將來が思ひやられる。余は今度のやうな選擧の際に官選郡長が居たとしたならば、地方選擧に於ける選擧の自由は一層制限せられて居たのではないかと思つて居る。此意味で、此關係だけからは郡長の廢止はよかつたと云へる。而して同樣の意味で、自治體を自治體として存續せしめるつもりならば、町村を郡長の監督から解放したやうに、今少しく之を自由にしなければ嘘であると信ずる。

尙序であるから云ふと、地方制度を大體現在の如きものとして存置するならば、地方官を選擧の機關とすることを廢めて、之を司法官の手に移し、裁判管轄區域を選擧區域としたらどうか。此場合、取締り官憲である警察官との關係をどうするか、選擧訴訟を何所で行ふかと云ふ樣な多少困難な問題がないでもないが、今のやうに多數の警官を用ふる當否は實は問題であつて、それを今の如く多數に用ひないとすれば、大した困難もないと思ふ。そして其結果は遙かに自由に公平に選擧が行はれることゝなると信ずるのである。白耳義では現に選擧の機關は、其職務上公平なる地位にある司法官を以つて之にあてて居る。恐らくは斯かる公平なる機關を選擧の機關とすることに依つて初めて選擧の公正は保障せられることになるであらう。單に罰則を重くすると云ふだけでは却つてそれが選擧干涉に惡用せられる惧れを增すのみである。嚴重なる規則は公正なる人に依つて適用されなければ正當ではない。余は此意味に於て、我國の朝野が此點に注意せんことを希望する。

二

さて、次に今回の實驗で普選法の規定そのものはどうであつたか。それは其目的とした不正競爭を避け、費用を減ずることを得たかどうか、即ち選擧の弊風を一掃し、又は少くすることを得たかどうか。余は此點に就ては新法はかなりの成功を收めたものと云ひ得ると信ずる。勿論今回の選擧では嚴重なる取締り規定が寧ろ惡用せられ、或る政派に對しては殆んど其言論の自由を奪つたと云ふやうな事實もあつたやうである。演說會場に數名の警官を派し、物々しく警戒し、或は一々演說を筆記せしめたやうな事實もあつて、演說會場に入ることを不愉快にしたが、是れ等も間接には言論の自由を制限する働をしたと思は

れる。後に云ふやうに此度の選擧ではかなり棄權者が多かつたが、それには疑ひもなく、此演說會場に於ける取締りが嚴に過ぎ、謂はんと欲する者をして充分に謂はしめず、聞かんと欲する者をして聞かしめないやうに導いたと云ふことも其重要なる一の原因である。新法が普通選擧制度を採用し、成年男子に一般に選擧權を與へたのは、謂ふ迄もなく、總ての階級に其發言の機會を與へることを目的としたものである。又新法は戶別訪問に依る運動方法を禁止し、言論に依る運動を保護する方針に出でたが、言論に自由がなければ、此主旨は徹底しない。此意味に於て、余は、今回の選擧の際に於ける言論の取締りに對する官憲の態度は普選法の精神に反したものであつたことを信ずる。取締りに就て甲の黨派に寬大であり、乙の黨派に酷であつた事實も見逃せない。或る所では、演說會場を取締る警官の數が政友會一、民政黨二、無產黨三の割合であると云ふ話も聞いた。買收の如きも、郡部ではやはり行はれた形跡がある。故に選擧の弊風が一掃されたとは勿論謂へない。

費用の制限に關する法の規定も頗る不完全で、妥當を欠くと考へられた點も少くない。例へば第百一條は演說又は推薦狀に依る選擧運動の費用は此種の運動をなす者自身が支出することを許して居る。併し第百四條第四號に依れば、此種の費用と雖も選擧事務長と意思を通じて支出した場合には選擧費用中に算入することゝなつて居る。併し其意思を通じたか否かは何を以つて計るのであるか。多くの場合は不明であらう。不明なる場合、之を算入しないものと決するとせば、演說又は推薦狀に依る選擧運動の費用は大部分選擧費用中には含まれないことになり、法が選擧費用を制限した意味は大いに傷けられることになる。反對に之を嚴重に解すれば、此種の選擧運動をなすに就て通意があつた場合には、費用の支出に就ても通意があるものと推定せられることになるであらう。然るに此場合にも、現行法では實費を算入することゝなつて居るが、それに一定の標準がないのであるから、いくらでも虛僞の記入が行はれることになる。或甲地から乙地に轉々として種々の候補者を應援したと云ふ場合には何所から何所迄を一候補者の負擔する費用とし、何所から何所迄を他の候補者の運動費として算入するかも明かでない。故に現行法の下では正直に選擧運動の費用を算出記入するか、否か、に依つて運動の上に非常な利不利が存在する。所が、此點に於ても、其算出の基礎が正當であるか否かは結局地方官の認定に歸することになるのであるから、與黨の候補者であるか、反對黨候補者であるかに依つて非常な不公平を生ずる惧れがある。故に例へば官吏の旅費規定と云ふが如くに其標準を示すことが必要である。自働車賃の如きもいかやうにも之を算出することを得る譯であつて、正直者が損をすると云ふ結果になり易い。併も吾等の欲する議員は寧ろかゝる正直な議員なのである。此等の點から考へて、余はアメリカの各州の中の或るものに於て行はれて居るやうに、選擧費用の制限をなすならば、寧ろ正當なる選擧費用となさるゝものを列擧すると共にそれに標準を與へると云ふ方法、又は一定額の選擧費用を豫め國の機關に提供せしめ、運動費の支出を國の手に依つてなさしめる方法を可とせざるを得ない。何れにせよ、我國の現行法では、何等の標準が示されて居ない爲めに、其實費とされる額に於て問題があり。從つて其

決算書に信を置きかたい缺點がある。故に此點に就ても、新法が完全に其目的を達したとは考へられぬ。否、反對に、余の耳にした所では正確に計算し、之を記入したとすれば、制限額を超過して居る候補者が多いやうである。でも、之を從來の無制限のときと比較すれば、遙かに其結果は良かつたと云へる。蓋し何の候補者もやはり制限額を超過した結果の怖ろしいことは了解して居たのであるから、なるべく制限額内に於て有效なる選擧運動をなすことに努めた事實は充分に認められるからである。又有權者の數が激增して居るのであるから、假に從來と同樣の方法の下に、無節制に選擧運動を行ふことを許して居たとすれば、各候補者共に、非常な負擔をする結果になつて居たであらう。此意味に於て新法は疑ひもなく成功して居る。余の友人の或る警察部長は新法は少くも費用の制限では成功したと謂ひ、或る代議士も今回の選擧の結果來年の總選擧に於ても費用の制限内で選擧運動を行ひ得る自信を得たと語つて居たが、余は此等の言を右に述べたやうな制限的な意味に於て肯定する。尙郡部に於ては交通機關のために莫大の費用を要するのと、やはり種々の情實が行はれ易い關係にあるのとで、市部と郡部とは多少事情を異にするやうであるが、一般的に云へば、此點に關する新法の成功は否認し得ない。

此外、法の規定で改善を要すると考へられる點は少くない。例へば第百條は選擧運動の爲め頒布し又は揭示する文書圖畫の制限に就ては内務省令に之を一任して居るが、此省令の規定の如きは其中に明かに實情に適せざる無用煩雜の規定を有つて居る。例へば其第七條には選擧運動の爲めにする張札は承諾を得ずして他人の土地又は工作物に之を揭示してはならないものと規定せられて居るが、田舍道の角の便所の隅——當然張札をなさるべく運命付けられ、勿論承諾を得ずして賣藥の廣告と名灸の廣告が同居して居るやうな場所——に張札をするのに誰が一々其承諾を求めるであらう。又一々其承諾を求めしめる必要が何所にあらう。併も其承諾を求めなかつたならば選擧法違反として第百三十二條に依つて罰せられ、第百三十七條に依つて五ヶ年間選擧權被選擧權を剝奪される。第一條に依れば選擧運動の文書を頒布する者は其表面に氏名及び住居を記載することゝなつて居る爲め、住居を記さなかつたものとして、濱口、田中兩總裁が告發せられたこと等も其不必要に煩雜なる制限規定の結果として起つた寧ろ滑稽なる事實である。

或は新法は所謂無投票當選の制を採用したが、此規定が候補者に惡用せられ、不都合なる妥協の行はれる危險のあることも明かとなつた。素より其所に利益の提供と云ふやうな事實があつたとすれば第百十三條に依つて罰せられるのであるが、其關係が不明なる場合には、現行法の下では、惡用者に對し、どうすることも出來ないのである。故に、勿論いかなる場合にも強いて競爭を行はしめるには及ばないが、少くとも投票期日前の一定期間内に於ては候補者たることを辭し得ないものとなすが如き或る制限を加へることが必要であらう。

選擧人名簿の作製方法、投票場に於て選擧人のイデンチテートを確める方法の如き選擧技術に關する部分に就ても不足を感ずる點は少くない。

併し之を概して云へば、新法は、之を舊法と比較すれば遙かに勝つ

て居るものと信ずる。取締り規則及び罰則が甚だしく煩雜であるために、一般に頗る窮屈だと考へられたやうであり、而してそれは右に述べたやうな或る規定に就ては當然であると考へられるのであるが、此窮屈であると云ふ考へは一面亦規定に對する不慣れ、又は舊式戰法に拘泥すると云ふ所から來て居たことも認めねばならぬ。然るに此方面から來る窮屈の考へは考へる人自體の方に罪があるとせねばならない。殊に新法が戸別訪問を禁止したことは運動員に對して非常な不自由を感ぜしめたらしい。此方法が禁止された結果、主として採用された運動方法は言論戰であつたが、其言論戰に就ても、演説會場では殆んど拍手すらも禁止せん許りであつたし、戸別訪問は禁止されて居たから、各候補者は自己の運動が何の程度迄奏功したかを知るに頗る困難を感じた模樣であつた。だが、選擧法の目的は素より言論戰にあつた譯であるし、演説が靜肅に聞かれることは望ましいことであるから、官憲の取締りが嚴重に過ぎたと云ふ非難は加へ得るにしても、選擧法の目的とする所は大體達せられたと云ひ得る。又選擧人の關係から投票を乞はれると云ふことが殆んど無くなつたから、此種の方から云へば、從來の如く毎日のやうに戸別訪問を受け、情實其他の煩雜なる訪問に依つて業務を妨げられることから解放せられ、何れだけ助かつたか解らないとも云へる。それに候補者の方から豫想が付かなかつたと云ふことは、それだけ選擧人が投票の自由を有つたと云ふことであるから、此意味から云つても其結果はよかつたと云へる。

尤も此點に就ても都會と農村との間にはやはりかなり間隔があつたらしい。即ち都會では情實關係を辿つて運動をすると云ふことは殆んど不可能だつたやうであるし、運動員の數が制限されて居た爲め、此關係からも實際に此種の運動をなすことを困難としたもの丶やうである。之に反して農村ではより密接な種々の關係で結び付けられて居るため、都會の如く自由には行かなかつたやうである。富山縣であつたか、或る老人が政友會に投票した爲め、小作人側から迫害されることを怖れて自殺したと云ふことが報道されて居たが、此事實は此老人が種々の關係に拘束せられて居たことを有力に物語つて居る。

加之、今回の選擧は普選に依る第一回の選擧であつて、各候補者共其運動方法其他に就て全く勝手が解らないと云ふ狀態に置かれて居た。從つて何の候補者も組織的な準備は殆んど整へて居なかつたと云つてよい。余の如きは、實は、立候補の意向を有すると思はれる人々が餘りに不用意に選擧期日の迫るのを待つて居たことにやゝ驚いて居たものである。だが、今回の選擧の經驗は普選の下に於ていかに運動すべきかを略ぼ敎へたことと想像する。前には有權者名簿すらなかつたのであるが、それも出來たのであるから、いかなる人々が選擧人であつていかなる關係にあるかを知る材料も出來た。從つて演説會を開くにしても何所でいかになすべきかが推測される譯であつて、今回のやうに盲目滅法にやると云ふことは少くなるであらう。選擧運動者としていかなる人々を選むかと云ふやうなことも自ら定まつて來る筈である。即ち運動は次第に組織的になるであらう。そして運動を組織的にするが爲めに、政黨の地方的組織は一層完備して來るであらう。從つて將來の選擧が今回の如く全く無準備になされた選擧と同樣であらうとは必ずしも考へられぬ。少くとも今回の選擧から直に新法の成功を豫斷

するのは早計である。總ての制度がさうであるが、制度の成功不成功は之を運用する人に懸つて居る。而して新法は今回の選擧に於て比較的成功したと觀られるが、それには、各候補者が無準備であつた爲めに、比較的自由に、其代りにどちらかと云へば盲目滅法に選擧運動がなされたと云ふことを忘れてはならない。故に選擧運動の効果が良くなかつたのである。棄權者の率の多かつた事實が之を物語つて居る。それ故、終局的な判斷を下すには早過ぎる。

恐らく各候補者は演説に依る選擧運動の存外手ごたへのないことを感じては居はしないであらうか。選擧人も亦同じ種類の演説會を聞くことに厭きると云ふやうなことは起らないであらうか。或は短い選擧期間内に政見を有權者の間に徹底せしめ、有效に選擧人の心を得ることは困難であり、かゝる選擧運動の效果は比較的弱いものであることを意識しないであらうか。殊に都會に於ては有識知識階級の演説會に趣く割合は比較的少ないものであつて、多くは新聞雜誌に依つて主として文字を通じて判斷するものであるから、今回の如き選擧運動のみに依つては此等の人々の投票を得るに不適當である。都會に於て政友會が慘敗したのは、其演説が功を奏したと云ふよりも、寧ろ吾國の言論機關一般に反政友的だつた結果であると云へないであらうか。

此等の點から考へると、今回の選擧の經驗は寧ろ運動方法を一變することを教へたのではないかと思はれる。即ち繼續的に組織的に地盤を開拓して置かなければ一時的な運動ではとても確定的な勝利は覺束ないことが悟られたであらうと思ふ。又吾國では從來政黨と有力な言論機關との關係が餘り密接ではなかつたが、有力な言論機關に依つて平素から戰つて居ることの必要が充分に意識されたであらう。要するに所詮は明確な立場と有力な組織とを有つもののみが勝利を占める。無產黨四派の中に於て、勞農黨の結果が最も良かつた事實は明かに此關係を説明して居る。かくて私は、普選の結果として、我國の各部分が一層組織化されることを豫想する。而して其所には、既に述べたやうに、民主的原理から云へば危險である分子が多少含まれて居るのであるが、良かれ惡かれ、此組織化は已むを得ない運命ではないかと思ふのである。從つて其弊害に對しては、恐らく別に其方法を講ずるより外はないのであらうと思つて居る。

三

最後に、投票の結果はどうであつたか。有權者の投票に對する態度はどうであつたか。又有權者殊に新有權者は各黨派に對しいかなる態度を採つたか。即ち有權者は投票に熱心であつたか、又候補者の選擇を誤らなかつたかどうか、普選は政治的分野の上にいかなる影響を與へるかゞ問題であつた。而して此點に就ては第一に棄權者の率がどうなるかが問題であつて、一般に棄權率が增加するであらうと云ふことは豫想せられた。併し其率は二割乃至三割であらうと考へられて居た。余の如きも第一回の普選ではあり、略ぼ右の見當であらうと考へて居た。然るに投票の結果を見ると、郡部では大體此豫想に近かつたが、都市殊に大阪神戸京都名古屋と云ふやうな大都市では棄權者の率は五割を上下したのであつて、豫想は全く裏切られたのである。

併し默つて靜かに考へると成る程其理由は乏しくないのであり、此

事實に依つて吾等は多くのものを敎へられた感がある。今その原因となつたと考へられる主なる點を擧げると略ぼ次の如き關係になるであらう。

一、第一の原因は吾が國の政黨の地方組織の不完備である。即ち、既に述べたやうに、今回の選擧は黨派本位に行はれたのであるが、殆んど總ての黨派が有效に選擧人をアトラクトするだけの組織と活動力とを有たなかつたと云へるのである。而してそれは從來の選擧が制限選擧であり、運動の方法としては戸別訪問が主であつて、情實及び買收に依つて居たことの結果であると考へられる。蓋し少數の選擧人に對し、右の如き方法を以つて運動をして良いと云ふことであれば完備した組織を必要としないことは謂ふ迄もないからである。然るに今回は此方法が禁ぜられたのである。そして政黨は新しい形勢に應じ、有效なる活動をなすに必要なる準備を整へて居なかつたのである。又之を有權者の方面から云へば、從來棄權率の少なかつたのは戸別訪問又は所謂狩り出しが行はれ、買收又は情實關係から投票を餘儀なくせられて居た者の多かつたことは爭ふべからざる事實である。然るに今度はかゝる關係は殆んどなくなつた。故に彼れを特に投票に誘ふ關係が少なければ自然棄權することになるのは當然である。所で、此棄權を防止し、自派のために投票せしむるだけの活動は今の政黨の地方組織では出來なかつたのである。成る程、各派は連日連夜演說會を開いて居た。だが併し有權者の何パーセントが各候補者の演說を聞いたであらうか。殊に大都市では議員定數も多かつたし、候補者の數も多かつた。而して候補者の質は非常に良いとは考へられなかつた。かゝる條件の下に大多數の選擧人の投票を望んだことは、實は其事自體が無理であつたと考へる。郡の投票率が比較的良くて、都市の投票率が惡かつたと云ふ事實は何を語るか。私はそれを郡部に於ては、村が單位をなして居るため、此小單位に對しては有效なる運動がなし易かつたこと、及び郡に於ては議員定數が少く、從つて競爭者の數が少かつた爲め選擇が容易であつたと云ふ點にあつたと思ふ。恐らく市部に於て、同樣に選擧人をアトラクトするためには政黨組織を完備し、更に有力なる候補者を得、明快なる政見を以つて爭はしめることが必要であらう。此意味で、來るべき總選擧では、其棄權率は今回程甚だしくはなからうかと思ふ。

二、都市に於て棄權の多かつた第二の理由は制度的な關係から來て居るのである。蓋し府縣は其各部分に市町村と云ふ自治團體を有つて居る。然るに都市にあつては道路設備、衞生設備其他吾々の生活に關係のある重要な施設は殆んど全部市の手に依つて行はれて居るのであつて、自治體としての府縣の事務で、吾々の生活に關係のある重要なものは殆んど無いと云つてよい。從つて一般に大都市の住民は何が其府縣會で論ぜられて居るか、何が問題であるかさへ知らない狀態に居るのであり、又それで差支へのない狀態にある。近時大都市が特別市制を要求し、都市の住民が市の外に更に府縣の公民であることを無意味であるとする主張に共鳴者の多いのもかゝる關係があるからである。郡部に於ては或は道路の修築に、或は河川の修理に、府縣の事務と密接なる關係を有つて居る。だが都市の住民はかかる利害關係を殆んど有たないのである。郡部にあつても、府縣の事務と關係の少ない町村

又は小島嶼はやはり同樣の關係にある。此等の部分に於ても何人を府縣會議員とするかは其生活と殆んど無關係である。從つてかゝる事情の下に於て、此種の部分に棄權の多いことは寧ろ當然であると云つてもよい。一部の人々は此棄權の多い事實を政治教育の不徹底に歸して居るやうであるが、吾等はさうは考へない。此棄權率が多い理由を以つて都市の住民の政治的自覺が郡部に比して劣ると云ふやうに考へるのは誤りである。余の知れる人々の中にも、有識者であつて併も各候補者が何を行はんとするか表にでもして知らせて欲しいと云つて居る人々が少からずあつた。吾々をして投票せねばならぬと考へしめる程の意見書を送つて來た候補者は一人もなかつた。故に余の友人の如きも汎太平洋水泳大會を見に行くか、投票場に行くかに迷つたと云つて居たが、それは少しも不思議ではない。棄權がかう云ふ所から來て居るとすると、利害關係がないから棄權するのであるから、別に憂ふるには及ばないと考へられる。利害關係のない人に迄投票せしめる必要はないかも知れないのである。たゞ之れが爲めに棄權の習慣を作り、選擧道德を低下することが怖しいだけである。

三、棄權の多かつた第三の理由としては選擧に對する不信用を數へたい。實は數へ度くない理由であり、眼をつぶり度い理由であるが、棄權者の一部に選擧に對する不信用があつたことはどうも否定し得ない事實である。勿論其原因は種々雜多であらう。或は民主的な議會政治――中央議會に對しても、地方議會に對しても――のロジツクそのものを信ぜざる者もあつたであらう。既成政黨の政治に愛想をつかし併も立候補者が依然同樣の既成政黨の黨員であると云ふやうな點から來たものもあるであらう。候補者の質に端的に愛想をつかしたと云ふのもあらう。が、何れにせよ、かゝる關係から選擧に氣乘りがしなかつた選擧人があつた事實は否定することが出來ない。併も第一回の普選ではあつたけれども、普選が衆議院議員選擧法として通過してからは二年半を經過して氣の早い都會人には其成立當時のやうな意氣込は失はれて居た。そしてそれが利害關係の薄い府縣會議員の選擧に先づ適用せられたのである。恐らく既成政黨としては先づ偵察戰を此選擧で試みなければ不安だつたのであらう。普選に就て殆んど爲す所を知らなかつた舊式政治家は之を其實驗としたかつたのであらう。無理もないと考へる。だが民衆は其中に意氣込を失つて居た。最近都市で催される普選に關する公民教育の講演と云つた風のものがいかに不振を極めて居たか。政治家は今少しく民心を明察する必要がある。此意味で、若し政治教育を受ける必要がある者があるとすれば、それは第一に舊式政治家である。

四、以上の他、雜多な原因として、或は二日續きの休日があつたことが數へられる、或は大都市に於ては名簿調製後に於ける選擧民の移動が多かつたことが考へられる、或は有權者は選擧權を特權視して居たが、普選になつた爲め、却つて之を輕視したことも想像される、地方選擧としての獨自の目的を失ひ、中央選擧と混同された爲めに選擧の意義が徹底しなかつたことが考へられる、選擧の取締りの峻嚴、投票場の威壓的空氣が選擧人を逡巡せしめたことが考へられる。

今回の選擧に於て、殊に大都市で、棄權者が豫想以上に多かつた理由は恐らく右の如き原因に出づるであらう。故に之を以つて直に新有

權者の政治的理解が乏しいもの、又は政治教育の徹底せざる爲めとするならばそれは誤りであらう。素より新有權者の中には政治的理解の乏しい者も少くはあるまい。併し新有權者に於ても、若し假りに過去の選擧の際に戸別訪問、狩り出し買收等が行はれなかつたとすれば、從來の如き棄權率の程度ですんだかどうか、それは大なる疑問である。故に一派の人々は、此棄權率の高かつたことは今回の選擧が比較的自由に理想的に行はれた證據であつて却つて喜ぶべき現象であるとさへ云ふのである。やゝ謂ひ過ぎの感もあるが、一面の眞理を含んで居る。

それは何れにせよ、第一回の普選に際しての、殊に都市に於ける今回の此大なる棄權率は吾々に種々の教訓を與へた。吾々は之を有りの儘に承認し、其理由に就て三省し、將來の改革に資せねばならぬ。

終りに、新有權者の候補者の選擇はどうであつたか、普選は政治的分野の上にいかなる影響を與へたか、此點に就ては秘密投票であるから、新有權者のみの投票がいかに分配せられたかを知ることは不可能であるが、二個の事實が吾々の注意を惹いた。即ち其一は、最初の二府三十七縣に於ける當選者數千百二十五名中新選議員が六百五十六名であり、再選議員が四百四名、元議員六十五名であつて、新選議員數が遙かに再選議員數を超過して居ると云ふ事實である。其二は無產黨が二十六名の議員を選出し得たと云ふ事實である。此等の事實は何れも地方議會に新味を注入したと云ふ意味に於て重要視すべきものであらう。勿論此等の新議員が果して普選に依つて選まれた新議員として何れだけの働きをするかは今後の實際に徵するより外はない。併し普選が新議員を議會に送るに役立つと云ふことだけは證明せられたと云つてもよい。殊に從來の制限選擧の下に於ては到底當選の可能性のなかつた無產黨議員の選出せられた事實は明かに普選の特質を語つて居る。併も組織力の最も強固な、主張に於て徹底して居た最左翼が無產黨四派の中で最も好成績を收めたと云ふ事實は吾々の注目に値する點である。既成政黨が議員の殆んど全部を占めたと云ふ事實は無論投票人の大多數が未だ急進的な又は過激な主張に贊成でないと云ふことを示すものと解するより外はないのであるが、併しそれならば無產四派の中に在つては其最左翼が最も劣勢であつて良い譯である。現に諸外國では最左翼は他の社會黨よりも劣勢である。故に右の事實は全く勞農黨の組織力の功に歸すべきであらう。從つて又他の無產黨に就ても其組織が有力になつたならば、無產黨候補者の當選率は一層增加するのではないかと考へられる。尙、現在の選擧方法では投票の移讓を許さない爲め、多數を立候補せしめた政友會の候補者の中には同志討のために落選した候補者が少くなかつたが、同樣に、無產黨に對しても此選擧方法が祟つて居る。今若し比例選擧が行はれ、投票の移讓を許して居たとしたならば、其當選者の數は一層多かつた筈である。最近無產黨四派は何れも、戰蹟に鑑み、共同戰線を張るの必要を感じて居るやうであるが、既成政黨も、無產政黨も、其選擧方法に就ても一考して見たらどうであるか。

府縣會選擧の結果と普選法の缺陷

關口泰

府縣會改選の結果については、政友會依然優勢と威張れば、民政黨は現有勢力を打破したりと誇る。無產政黨の出かたは割合に少ないと見る者もあれば、最左翼の勞働農民黨が十萬票を集めたことに恐れをなす者もある。見方はいろ〳〵あらうが、第一回の全國的普選の成績は大體に於て良好であつたといはねばなるまい。そして普選の效果が擧がらなかつた諸點は、それに相應した普選法の缺陷があり、この點を改正することによつて、もつとよき效果を、將來に期待することを得るのであつて、普選の實施の結果が、舊勢力が危險でなかつたことに安堵し、舊政黨が大體舊來の地盤といふものが頼りになることに安心したと共に、新勢力に對しても、期待すべからざる急激の變化と理想化された普選の效果を所期しない以上は、希望をこれに繋いでおける程度のものではあつたと思ふ。

一　干渉の無力と買收の減少

普選の最初が官權の干渉の奏効によつて汚されなかつたことは喜ぶべき第一の事實であつた。與黨の選擧不成績の後に、選擧取締の嚴正公平が宣傳されても、誰もそのまゝには受取らない。組閣後第一の仕事が、地方官大更迭であり、それからも始終選擧第一主義が唱へられてゐて、選擧對策の看板的政策の掲揚の外に何もしてゐないでゐたといつてよい現內閣であつた。米の買上も、蠶糸の融資も、それらしい時に、それらしい方法で行はれた。いつもは各省の豫算査定の時期によつてゐるのに、各省ともあれもしてやるこれもしてやるの積極無責任豫算を出しつ放しで、府縣會選擧が大體片のつく迄はお預けで、これも選擧第一主義の一表現をなしてゐる。その外小川鐵相の鐵道敷設と許可での黨勢擴張を初め、試驗場だ、種雞場だ、倉庫の移轉だといふ樣な地方地方の特殊直接の利害關係を利用してゐることも勿論である。

このあとになつて見れば空の恩を賣る一方に、威の方面は、專ら腕方官更迭は十分な效力を發生するであらうと安心して、政友會では、の喜三郎親方の睨みに信頼してゐた。あれだけ我黨振りを發揮した地眞劒の努力を缺き、田中總裁はじめ大臣から參與官まで、官權を笠にきての力に依頼してゐた有樣であつたのだ。そして護憲選擧の時の事は忘れて、選擧は昔の通り政府黨が勝つものときめてゐたかのやうであつた。

こういふ考へ方は、民政黨の方でも同じであつて、政府大干渉の宣

傳がきゝ過ぎて、自黨の立候補難まで惹起した仕末であつた。それは清浦内閣の總選擧で、親任待遇の内閣書記官長小橋、足輕黨を率ゐて負けた床次といふやうな人々が、水野内相だから敗けたが、鈴木法相が内相になつて腕を揮へば恐ろしいと思つてでもゐたのか、とにかく政府の鬼面は、反對黨の干渉宣傳で一層こわさうになつたことだけは確かである。

しかしながら選擧干渉といつても、今時まさかに品川彌二郎、大浦兼武時代の干渉が出來るものではない。司法畑に育つた鈴木内務大臣と山岡警保局長の兩法學博士の目論んだであらう所の干渉は、合法的干渉であらねばならぬ。そして普選法の嚴罰主義と、小うるさき取締規定は十二分に、その合法的干渉が出來るらしく見えたのである。これは普選法制定當時の司法省刑事局長として罰則について研究した筈の山岡法學博士の、特に目をつけさうな點で、例の警察部長を一人一人密室に呼んで秘策を授けたと新聞紙が傳へた時も、普選法を利用、或は惡用しての干渉といふことを世人も考へたのである。

しかし法律で飯を食ひつゝ國家に御奉公してゐる檢事と、選擧干渉の第一線に立つ警察署長とは違ふ。警察部長から警察署長から巡査に傳はる内には、警保局長の秘策にしても、氣がぬけたものになつてしまはうし、土豪警察官に普選法の缺陷を理解し、その缺陷を利用して取締的干渉をやるといふ樣な、法律を驅使する力倆もあるはずがないから、合法的干渉といふやつか、何でもかまはぬ品川式の暴力的干渉の樣には徹底せず、國家の爲に議員を買收するが何で惡いといふ程の大浦式干渉の樣に效果も擧げるわけにはゆくまい。

それに警察署長から巡査部長まで見透して見ても、この内閣が未來永久存續するものでもあるまいし、その管下の地方民とは、選擧以外の事で、常に接觸してゐるのだから、さう無理な片手落な、見えすいた不道理も出來ない。全村政友會といふ樣なところなら、政友第一でもよからうが、そんな政友村なら干渉は不必要、干渉が必要な位な非政友村なり、下手な干渉をやつて、次の内閣で第一番頸を切られるのを待つ迄もなく、その村の中でこれからの社會生活をしてゆくにも不都合になつたのではやりきれない。二大政黨對立時代になれば、首切られ知事、從つて次の内閣の知事連中が、干渉監視委員で出張つてゐないでも、さう超然官僚内閣が、羊の人民を對手にして、警察官の犬で、保護し指導し、監視すると共に逐ひまはしもしたやうに出來るものではない。昔とは巡査と人民の智能なり社會的地位なりがだんだん變動しつゝあるのである。

とにかくこんなわかりきつた事が、既成政黨の連中にはわからないで、政友會は政府に頼り過ぎ、民政黨は官權を恐れすぎてゐたのである。この選擧において、政府黨が必ず勝つといふ事實と及び信仰が崩れるといふことになれば、何ばう立憲政治にとつて喜ぶべき事であらう。在野黨が選擧に有利だといふ事になれば、もう解散をそんなにも恐れなくなる、憲本妥協だの、三頭首申合せだのといふ不道理な、解散除けの陰密政治が無くなるのである。

買收の方は、選擧費制限と戸別訪問禁止なんかで、それよりも選擧權の大擴張によつて、とても買收しきれなくなつて、ずつと減つた事は疑ひない。選擧費用も法定制限額以上をつかつてゐるのが通常だと

いはれ、買收も相當あるといはれてはゐるが、従來とはずつと變つてゐる事はたしかである。投票ブローカーが飯の食ひ上げをした事は所在の事實である。將來投票ブローカーも、或團體を作るとか何とか、新しき方法と手段とを案出するかも知れぬが、言論文書戰が中心となりつゝある以上は、もう候補者の方でも、效果の怪しい、正體の暴露しやすい投票ブローカーの餌食にもならず、これを近づけぬ口實も出來て來るであらうし、今度の選擧で買收の爲の金が候補者の懷からでてゐるとしても、それは選擧人の手にはいつたものは余り多くあるまいと思はれる。

それで買收は、候補者を圍む選擧ゴロの買收や、候補者の買收が、無投票當選の規定による效果として、今後もだん／＼多くなつてゆきはしないかと思はれる。候補者が籤引きによつて超過數を振り落した選擧區もあり、選擧當日前まで伏せておいて新しき候補者の出るのを防いでから立候補辭退をした者もあるが、とにかく無投票當選の新制度が、議員候補者の買收を誘發することは、考へられる事實である。議員候補者、議員候補者たらんとする者に對する買收や利害關係の利用誘導を、選擧人や選擧運動者に對するそれよりも、懲役の刑期も二年以下を三年以下に、罰金の額も、千圓までを二千圓までに重くしてゐることは、普選法自身これを認めてゐるといつてもよいであらう。

二　棄權增加の原因は何處にあるか

選擧干渉が比較的行はれなかつた、或は行はれてもそれだけの效果が擧らなかつたといふことが、今度の選擧の拙い方の收穫であるならば、棄權率が非常に多かつたといふのは、拙い方の随一の收穫といはねばならぬ。

この棄權は、それならば、新有權者によつて行はれたのか、それとも舊有權者によつて行はれたのか。棄權者がどの階級、どの部分にあるか。その原因は果してどこにあるかといふことは、調査し探究しなければならぬ必要事である。

舊有權者が前よりも多く棄權したのだとすれば、従來は戶別訪問や狩出しによつて他動的に投票してゐた者が、その選擧運動者の方面から加へる力が無くなつた爲に、當然に棄權したか。今までは制限選擧による特權であつたものが、普通選擧によつて一般化したから、それを尊重して行使する事がなくなつたのだらうなどとも考へられるが、これは少し穿ち過ぎたくつつけた理窟ではないかと思ふ。

新有權者の方に棄權が多いとすれば、選擧の意味が徹底せず、普選の有難味もわからず、又一般に政治的教育が皆無の爲に投票に出てゆく興味もなかつた爲か、それとも無産者は、工場等に縛りつけられてゐないでも、食ふに追はれて、選擧なんかに心も時間もとられてはゐられなかつたのか。或は新有權者といはず、新選擧法自らが何か投票を面倒にする規定を含んでゐるのか。棄權せざるを得ざる缺陷でもあるのか。

大阪、京都、名古屋、神戶、仙台諸市の棄權率が五割前後で世人の注意を惹きつけたのであるが、大都市の場合特に府縣會といふものが、都市生活には關係が薄くして、從つて常に都市住民は府縣會には關心をもたず、市から立つ府縣會議員の粒も市會議員よりも悪いといふ

樣な原因が、府縣會選擧の場合の大都市の棄權率を以て、市會や國會の選擧を類推出來ないといふこともたしかにある。又この投票日が日曜日と祭日とつゞいてゐたといふことが、農村ではともかく、都市生活者を選擧よりも遊樂に引付けたといふこともあつたらう。

投票日が日曜に當つた爲に、棄權が多かつたといふ事實は、昨年秋の札幌市會や、此の春の西巢鴨町の選擧にもあつた。殊に札幌の樣な勤め人の多い所では、役所や會社がある日の方が投票率は多からうと思はれる。大阪の樣な大都市では、猶更ら休日は遊びにゆくか、外出はおつくうだといふこともあつたのであらう。重大な選擧をよそに、遊びにいつたり、家で寢てゐたりするのは不都合には違ひないが、それにはそれだけの理由があつたことは爭へない。

從來の選擧人は、狩出しで心ならずも投票所に送り込まれたといふよりも、町に漲る選擧氣分に浮かされて、投票所に誘ひ込まれた者も多かつたであらう。今度の選擧ではそれがなかつた。從來のお祭りの樣な騷ぎ、立札の亂立、選擧事務所の人の出入りの賑かさ、投票所前の休憩所や、候補者のお辭儀の安賣り、皆感心したものではなかつたが、選擧人の心に選擧だ、投票だといふことを燒きつけるには十分なものがあつた。それが今度は選擧人の心に選擧だ投票だといふ注意を喚起する何ものもない。投票日には投票所を設け場所の入口から三町以内の區域には、選擧事務所も、休憩所も設けてはいけない、選擧運動の爲にする文書圖畫は頒布したり掲示したりしてはいけないといふので、却つてひつそり閑と、もう選擧が濟んでしまつたのかと思はせる位だ。從來の選擧騷ぎが過ぎたものであると共に、普選法による選擧取締は、選擧民の注意から、選擧を隱さう〳〵と努めてゐる點であまりに極端に過ぎてゐる。少し注意を惹く樣な奇拔の思ひ付をすると、すぐ氣勢を張るの行爲だといつて禁止する。

しかしながら選擧は、國民が代表者を國政なり自治政なりに送る喜びの日だ。少しは景氣よく、選擧氣分を浮立たせていゝ日だ。忘れてはゐられない程に、投票所に選擧人の注意と足とを惹きつける算段をすべきである。一體公けの事だといふと、へんにしやちこ張つて嚴肅がり、悶苦しくして、人民を寄せつけない樣にしたがるのは惡いくせだ。投票場は、投票管理者と投票立會人とが、重々しく並んで、どこへいつても警察官と鉢合せをする。もつと氣安く、民衆が自分の事を自分でする氣持で、選擧などはさせたらよささうなものだ。民衆が喜び勇んで行ける樣に、投票所も笑顏をもつて、胸と兩手を開いて、選擧民を迎へる氣分がほしいものだ。さうすれば一週間たてば又來る日曜の散歩よりは、四年に一遍しかない選擧の方に足を向ける樣に出來ないものでもあるまい。

それには投票所の設備を手輕くして、もつと數多く方々に置く必要もある。投票所まで一里も二里も歩いていつて、二時間も三時間も待たされるのでは、考へただけでもいやになつてしまふ。選擧は義務だ權利だといふ理窟よりも、投票をもつと便利に出來る樣にするのが、棄權を少くする早道に違ひない。

それから投票時間の問題にしても、大體は衆議院議員選擧法の『投票所は午前七時に開き午後六時に閉づ』に準じてゐたらうが、府縣制ではかういふ規定がない爲に、午後四時に閉ぢたり、午前八時から開

いた府縣もあつたやうであるが、これでは工場勞働者でなくつても、普通の勤め人でも執務時間中でなければ投票するわけにはゆかず、心ならずも棄權した人がないとは限らない。佐世保市會の普選の場合勞働者に投票權を行使させないといつて問題になつた同一事がやはり府縣會選擧でも方々に起つたのではないかと思ふ。日曜休日の慣習が普及してゐず、週休制度も確立してゐない所では、選擧日を日曜にするとか休日にするとかいふことは、選擧權尊重の效果を擧げ難い。むしろ投票日には、事業主は勞働者に賃銀を減ずることなくして、投票するだけの暇を與へる義務を定め、これに違反したならば選擧妨害の罰則を適用することにすれば、その方が實行的である。

最後に棄權の多い原因について、大阪府の警察部長が、新聞記事が從來の如く候補者の經歷や、選擧形勢を書き立てなかつたことを指摘してゐるのは面白い。實際普選になつてからは、新聞の選擧記事は、候補者の當落をきめる最大の力である。それで殊更に自重したのかも知れぬが、一方當選を得又は得しむる目的で議員候補者の身分職業又は經歷に關し虛僞事項を公にしたり、當選妨害の目的で虛僞事項を公にした時は、二年以下の禁錮又は千圓以下の罰金に處する明文と、新聞雜誌の編輯人や實際編輯擔當者は如上の目的及認識の有無に關せず單に編輯人として署名し若くは現實編輯事務を擔當したるの故を以て本文の實行正犯者と同じく處斷せらるべきものとす』といふ大審院の判例があるのだから、新聞は何時關係者から告訴告發されるかも知れぬので君子危きに近寄らずをきめこんだものだらう。それが東京の新聞より、大阪の新聞の方が、府會改選の地元だけに甚しかつたのである。

目的罪であるのに編輯人は目的なく認識がなくてさへも犯罪が成立するのも亂暴な話だが、一體選擧運動者が、新聞雜誌を利用し引札張札なんかでやるのと、新聞が公共のため報道の任務を盡す場合とは、全然區別するのが當り前である。そして寧ろ新聞が選擧記事を澤山掲載して、出來るだけ候補者について報導し、選擧人を啓發し、注意を喚起して、選擧に興味をもたせる樣にすべきで、そうしたら、大阪の警察部長がいふ樣に、棄權がもつと少なかつたらうと想像するのは間違ではあるまい。

それを新聞記事をこうやつて押へる一方、政府と民政黨が協力して普選疑義の小競合をやるので、新聞もしきりにこれを書き立て、選擧記事も、普選の缺陷をねらつた脫法行爲や、もぐり運動に興味をもつ、普選の初陣を、何だか陰慘な氣分で、普選法は選擧運動取締の嚴しくなつた、やかましくなつたといふ事のみ宣傳されて、ちつとも普選による民衆政治への門出の晴れやかに勇ましい、明るい氣分がしなくなつてしまつた。これはたしかに、選擧民に普選の本質を知らしめたものでなくて、民衆と普選とを離間して棄權率を大ならしめた原因といへるのである。農村や山間よりも都市の棄權率の多いのを、普選の意味が徹底しなかつたのだとは、どうしてもいへないわけである。

三　無產者の選擧權行使に對する障害

前述の投票日と投票所の問題も、主として無產者に關するのであるが、働かなければ食つてゆけない勞働者に、參政權といふ有難い權利

だから、一日の暇をかいても投票にゆかなければいけないといふのは無理な話だ。日當が貰へると思ふのも尤もなとこもある。紀州の或る投票區では、日和がよかつたので、漁民が沖に出てゐて、棄權七割以上といふ所もあつたといふが、これとて不都合だとは責められまい。

不在者投票は、地方普選には必要がないといふ理屈は立つまい。不在者投票は、規定で頗る巧く出來るかどうかわからないから、衆議院の方でやつて見てから、よかつたら府縣制にも採用しやうといふのが、本當かも知れない。とにかく當局者が、あまり時間のムダをしないで投票が出來るやうな方法は何とかして考へ實行しなければ、折角の選擧權の大擴張も何にもならなくなる。

結局は無産者は、平常の團結をもつて、選擧當日、その内の或部分が、投票にゆけないでも、自分等の代表が出せるやうにしてをく外ないのだらうが、それは無産者の側で考へることで、選擧法としては、投票管理者の方は不便でも、選擧人の方の便利を主として、投票分會を澤山こさへて投票及び其の往復に時間がかゝらぬ樣にするとか、當日は公費による無料交通機關を、投票者に向つて作るとか、賃銀付の投票日休日制にしないでも、雇傭者に勞働者を投票にやる義務を負擔させるといふ樣なことにする必要があらうといふのである。

それから投票自書の問題であるが、事實上無産者に文字の無いものが多く、文盲でなくても、人の名は讀めはするが、書くのがおつくうだ、假名で書くのはこうはらだといふ連中は可成り多い。候補者屆出制度を採用してゐる以上、投票自書主義を廢して候補者名簿に印をつける事にしたらば、多少棄權を防ぐことになるだらうし、これによつて無效投票を救ふことは相當數に上らうと思ふ。

國會議員の候補者は二千圓、府縣會なら二百圓といふ供託金制度が、無産候補者泣かせであることは、最も顯著な事實であつたが、今度の府縣會選擧に、これによつて無産黨候補者數が、豫定數だけも立てなかつたことは、既成政治勢力が、新興無産勢力に對して作つた關門であり斷擬であるのを、供託金制度が十分證したことを物語つてる。そしてその無産黨の供託金が一番多く沒收されてゐるといふことは、余りに無産候補者泣かせの效果が上り過ぎたものだ。

新選擧法の選擧運動取締りの方は、無産者にとつて特に干渉の余地があるといふことも無い樣だ。投票買收には金がないし、戸別訪問には暇がないから、この方面で警察官がいためつけるわけにはゆかない。選擧運動費用の制限額も、二千圓三千圓では、いはゞこれだけ使つて爭へといふ法定選擧費用額であるわけで、無産候補者としては、この制限額をもつと引下げて貰ひ度いわけだらうが、これだけでも制限されたといふことは、無産者が選擧を爭ふには、よき條件であるには違ひない。

無産候補者側の困るのは、選擧運動員の制限と、選擧運動といふことの解決がはつきりせず、やゝともすれば不當に擴張してゐることである。これは金をつかはぬ代りに、仲間の勢力の提供を受けて、金持候補と太刀打してゆこうといふ貧乏候補には頗る不都合である。例へば同一人が引續いて應援演說をすると、それが選擧運動になるから、選擧委員事務員以外の者がしてはいけないとか、ビラ張りや、ビラ配りの手傳をするのも選擧運動であるから、法定運動員の外は出來ぬ、

それで又運動員がすれば、戶別訪問を認められ勝だから、わざ〳〵無料宿泊所から日給を拂つて雇つてこなければならぬといふやうな事になつては、無產候補にとつては、いらぬ金がかゝることに結果する。

無產政黨が選擧運動に際して妨害をうけたのは、特に新選擧法によつてではなくて、一般的の所謂緊縮法令によつてゞある。治安警察法で、屋外集會はゆるされず、警察官の臨監で、注意だ、中止だ、解散だと、露に演說妨害をやられることだ。その上に出版法が働いて、文書の檢閲がある、ポスターも、勞働者の口の開き方が大きすぎるから治安を害するとか、稅金は地主と金持に出させろではいけない、多く出させろとしろといふ樣な干涉が行はれるのである。そして政府は傳家の寶刀として、治安維持法を隱してゐて、いざとなれば選擧費の出處が怪しいとか、私有財產制度を否認した言說だ、集會だ、協議だ、結社だと難癖つけることは何時でも出來るやうになつてゐる。無產政黨を治安警察法第八條で解散出來ることは、もはや試驗濟だ、これをしないのは、爲し得ざるに非ず、爲さざるなりと、政府では恩惠か善政を施してるつもりになるのである。

政治結社の解散權なんてものは、立憲政治以前の政府ならとにかく又せめて超然內閣制で、政黨は操縱されるもの以上でなかつた時代なら格別、相對峙する政黨が、その政府に在る場合、在野黨の政見政策が、政府の檢閲により、その許容を得なければ、文書も演說も出來ないなんて、馬鹿な話があるものではない。理窟だけ、それも讓步した理窟からいつても、選擧の間だけは、せめても言論の自由がなくつては理論が貫かない。

「內務大臣は選擧運動の爲頒布し又は揭示する文書圖畫に關し命令を以て制限を設くることを得」(第百條)といふことから、選擧運動の爲の文書圖畫は出版法や新聞紙法以外にあるといふわけにはゆくまいが、とにかく集會演說文書圖畫、皆特別に治安警察法などの外にをいて、屋外演說も一定の制限の下に許すとか、一々の屆出も要さぬとか、何とか出來ぬこともあるまい。

一般的にいつても、選擧犯罪の方は、たとへ惡性の買收でも、泥棒やなどの樣に取扱はないでもよいので、戶別訪問の嫌疑者に繩をかけたり、消防小屋へ押籠めて連行し、侮辱された被害者の婦人が海へ身を投げやうとしたなんかは、田舍の警官の勇敢さとしても、餘り甚しい例であるが、勞働者や無產者が、人權を蹂躙され、選擧權を冒涜された例は、外にも可成り多い樣である。

四　普選徹底の必要

普選の精神が警察官憲によつて徹底を妨げられる外、選擧人名簿の調查その他、市町村當事者の取扱によつて、選擧權擴張の程度を妨げられたこともあらうが、法規自身に、普選をなるべく普選らしくなくしやう。所謂急激なる擴張をなるべく內輪にしてをかうといふ努力があつたのである。例へば貧困に因り生活の爲公私の救助又は扶助を受ける者に選擧權を與へないことにした方は、理論からいつて怪しからんといつても、數の方は少いが、府縣會の住居制限二年は、國會普選の選擧人から二三百萬は、地方普選から排斥することに成功してゐる。それは學生はその鄕里の市町村の住民で、修學先の市町村の住民では

ないから、そこの選擧權は無いといふことになると、岡田前文相の様に靜岡縣まで歸つて、多額納稅議員の投票をした様なわけにはゆかぬから、事實上選擧權は行使出來なくなる。折角學生にも選擧權を與へたなら、住居地たる學校所在地で投票させる事が出來なければ、これも將來應召中の軍人と同じ様に不在者投票を與へるとか何とかしなければいけない。

二十五歲以上の學生の數は少ないであらうが、與へてをいて使はせないのは不都合である。二十五年を、ロシヤの様に十八歲にしないでも、英米佛その他の諸外國の様に、二十歲か廿一歲の成年には與へることにすると、學生生徒の選擧權といふものは、選擧に立派に反映するであらう。清新の氣はもつと流れ入つたらう。學生生徒に限らず、二十五年といふ理由のない年を、治安警察法でさへ、政治演說もきゝ政治結社にも入り得るとした成年者までに、選擧權を擴張すれば、あと二三百萬人は殖える。

そして今の選擧法では、選擧權を與へない結果として、選擧運動をしてもいけないといふことになるから、腐敗した政界を革新しやうとするには最有力な折角若々しい力は、選擧の外に置かれてしまふ。これは既成政黨や、革新される被告側の勢力は、反對するのは當然だが無產政黨としては、この廿五年以下の成年の選擧權獲得期成運動を起して、早く成功すればよし、成功しないでも、成功する迄は、青年を強く賴んで、政治運動を活潑にしてゆけるであらう。

それから普選が、無產大衆の政治參加を自由にするものならば、それはたゞ選擧に當つて供託金等の制度を廢して、醵つた金が無くても濟む様にすると共に、當選してからの生活も、その職務遂行の爲に脅かされない様にしなければならぬ。衆議院議員には三千圓の歲費があるが、府縣會議員は名譽職である。實費の辨償しか受けられぬ。これは昔の様に、地方の地主や物持ちの名譽の爲にならそれでもよからうが、無產者の自治政參加の場合には、このまゝでは不都合である。

市會に無產者議員が出ても、生活の爲に、例へば或る者は、餅賣りを新に始めなければならなかつたり、或る者は日給職工から月給に格上げて貰つた代りに、市會に出ても無產者の爲め戰ふことをしなくなつたりしてゐる。それが市會の場合は、住居地にゐるからよいが、縣府縣會だと住居地を離れなければならぬ。從來の旦那議員の様に、縣廳所在地に妾宅を構へたりすることも出來ぬから、生活保障の歲費が必要になつて來る。組合などがもつと發達し有力になれば、無產者の團結が、その代表者の生活支持も出來るであらうが、我が國の現狀はそれを望めない。且つこの事は、無產者の爲のみならず、今の職業議員の爲にも、歲費支給の必要があるのである。彼等はこれ無きが爲に他の利權を當然の權利としたり、實費支給の機會を作る爲に、水源調査だ、港灣視察だ、何だかだと九州の果から北海道まで、大名行列の金を費ひ歩くのを役得にしてゐるのである。歲費位の金はこれ等の費用で十分出るであらう。

五　具體的政策で爭へぬ理由

話を前の選擧運動に戻して、新選擧法は、戸別訪問等、選擧運動の舊戰術を排して、言論戰中心でやらせるのだと云つてゐながら、それ

なら言論戰なら自由にやれる樣に出來てゐるかといふと、そう出來てゐないので、治安警察法や、出版物取締法規が、選擧運動の場合にも、幅をきかせてゐることは、前述の如くである。

それで新選擧法の中に、演說保護獎勵的の規定といふのは、公立學校等の使用許可と、演說妨害を、三年以下の懲役禁錮、二千圓以下の罰金といふメチヤな嚴罰で、威かしてゐる位のものである。それから文書の方は、例の選擧運動の爲にする文書圖畫に關する內務省令で、制限を加へて、この制限に違反すると百圓以下の罰金といふことになつてゐる。それで今まで行はれた市會の普選でもそうであつたが、今度の府縣會選擧でも、選擧違反で起訴されてる數の過半は、この文書圖畫制限の省令違反なのである。

その省令といふのは、選擧運動の文書圖畫を頒布又は揭示する者は表面に氏名住居を記載すべしとか、引札張札の類は二度刷又は二色以下とし長三尺一寸巾二尺一寸を超ゆることを得ずとかいふ種類のものであつて、推薦者たる濱口氏や田中男の氏名に住居の肩書が無かつたから違反だ、赤黑の二度刷のポスターに、揭示者の住居氏名が紫インキのゴム判で押してあつたから違反だ。長三尺一寸が鯨尺の三尺一寸だから違反だといふ樣な、小やかましく地方警察では、違反違反を擧げたものである。

それで選擧法違反の罰則には、選擧權被選擧權の制限があるから、もし濱口氏をこれで引かけると、『本章に揭ぐる罪を犯したる者にして罰金の刑に處せられたる者に在りては其の裁判確定の後五年間衆議院議員及選擧に付本章の規定を準用する、議會の議員の選擧權及被選擧權を有せず』（第百三十七條）で、立憲民政黨總裁を、來年の總選擧に出られない樣にすることも出來ることになる。たゞその條文の第二項に『前項に規定する者と雖情狀に因り裁判所は刑の言渡と同時に前項の規定を適用せず又は其の期間を短縮する旨の宣告を爲すことを得』といふので、濱口氏田中男の場合は、總裁としてその黨員に一般的に名前を貸してやつたといふ情狀酌量で、裁判所が選擧權被選擧權を奪はないかも知れぬが、法としては、選擧運動の文書の揭示者の住居が無かつたゞけでも、百圓以下の罰金に處し、選擧權被選擧權を五年間奪うことが出來る樣に出來てゐるのは、缺陷といはなければなるまい。

演說の彌次までを交通集會の妨害、『その他僞計詐術等不正の方法を以て選擧の自由を妨害したるとき』と同樣に、三年の懲役二千圓の罰金といふ樣な嚴罰に處するといつて、府縣會選擧演說會場に、所管警察署名で張り出して、聽衆を威逼してゐるのは、余り見よい圖柄ではない。立憲國民がその代表者を選む機會に、その政見を聽くのに、警察官の臨監や、こんな張紙に威嚇されるのから早く解放されたいものだ。

消極的にはこれで初心の演說者は保護されるかも知れぬが、演說の內容に於ては、やゝともすれば制限を加へられる。治安警察法の公安秩序の警察的獨斷のみでなく、選擧法の所謂特殊の直接利害關係利用といふことを、曲げて解釋する爲の制限である。一體あの條文の說明は議會の選擧法委員會で、今の警保局長か、刑事局長時代、政府委員として花井博士の質問に、ちやんと答辯出來得なかつた『唯一つの場合』といふ六ケ敷いものだ。刑法學者の法學博士が說明に困るのだか

ら、地方の警察官の容易に判斷出來ぬ所、『選擧人の關係ある社寺學校會社組合市町村等に對する用水小作債權寄附其の他特殊の直接利害關係を利用して誘導を爲し』てはいけないといふので、道路港灣鐵道なんかも、これに近寄るとあぶないから、事實上、地方的の具體的問題には觸れられないといふ結果になる。

政策本位にならなければならぬといひ乍ら、具體的政策を封じてゐる結果、地方政戰でありながら民政黨は田中內閣の對支外交と財界救濟の失敗を攻擊する、政友會も、財界混亂の責任や、稅制整理による負擔過重で攻擊する。地租委讓と義務教育國庫全額負擔と爭ひ、さては松島事件や、金塊問題で泥仕合が始まるといふわけ。言論文書戰が、中央政界の知名の人の推薦や應援を必要として、中央政黨の力を地方政爭に引入れるに立ち至る傾向が十分ある上に、この特殊直接利害關係のある問題に觸れることを避ける結果が、いよ〳〵言論戰を、中央政爭の延長にして、地方自治體をまで二大政黨對立の色を濃くしてしまふのである。このことは無產政黨の場合でも同じである。

地方自治政の政治的問題といつても、實の處、今の府縣會の權限の範圍では、發案權はなし、豫算修正も原案提出權に抵觸しない範圍に限られ、反對しても知事の原案執行權があるといふ有樣では、我等が府縣會議員として立つ時は如何なる政策を以てするといつた所が滑稽になる。そこで知事公選とか、府縣會の權限擴張をし、眞の地方分權を行ひ、府縣の暴戾法令を府縣會自身で改廢出來る程度にまではならなければならぬ。今の府縣制のまゝでは、政治教育が普及して、府縣會議員の權能の眞相がわかれば、選擧有權者は、もつと棄權する結果になる位のものである。考へ様によつては、あんな權限のない、自治政の實のない府縣會に、議員を送るのに、よくもあれだけして選擧を爭ふものもあり、棄權しないで、六割七割の投票率があつたものだと思はれる。選擧權を重んぜさせる爲には、一票の實質をもつと充實させ、有效にさせなければ駄目だ。今のまゝの衆議院や府縣會では、政治教育が普及すれば、却つて棄權が殖へるばかりであらう。（十月五日）

農村時評

小作争議の趨勢

河西太一郎

小作争議の季節は近づいた。農村に於ける問題の中心はこゝへ集中して行く。今年は一般に近年稀なる豐作なること後段說くが如くであるが、しかしそれは決して小作争議を廢除するものではない。唯幾分その樣相を變へはするであらう、けれども凶年は凶年なりに、豐年は豐年なりに、争議は頻發する。

大正九年四〇八件、十年一、六八〇件、十一年一、五七八件、十二年一、九一七件、十三年一、五三二件、十四年二、二〇六件、十五年二、七一三件、本年上半期一、〇二九件といふ農林省農務局の小作争議統計によつても、争議漸增の趨勢は極めて明瞭であるが、之等の争議内容について近來最も注目すべき現象は所謂地主の攻勢である。

地主の攻勢は最も明瞭に耕地返還要求に現はれてゐる。此の要求件數は大正十三年には僅かに二十五件（争議總件數の一分六厘弱）に過ぎなかつたのが、十四年には一躍百六十二件（七分二厘弱）に上り、更に十五年には二百五十三件（一割二分六厘）に激增してゐる。小作人の息の根を絶やさんとする此の酷烈なる要求は今後も恐らくは此の趨勢を以て增し行くであらう。而して此の要求に關聯して行はるゝ土地立入禁止假處分や立毛差押、動産差押假處分等の攻勢的な所有權行使手段も亦地主側によつて激增的に採用されつゝある。今内務省社會局の之れに關する調査を見るに次の如くである

	立入禁止	立毛差押	動産差押
十二年	一	四	〇
十三年	一九	三四	〇
十四年	一四〇	三三九	四二七
十五年	一三一	四四五	五五九

尙昨大正十五年について之等の内容を見るに次の如くである。

一、土地立入禁止假處分、關係地主二百五十名、小作人四百名、土

地面積二百町歩。

一、立毛差押假處分、關係地主五百五十名、小作人八百名、土地面積五百町歩。

一、動産假差押處分、關係地主九百名、小作人二千五百名、價格三十萬圓。

右の中立入禁止の最も甚しいのは大阪、香川、三重であり、立毛差押の多いのは香川、福岡、三重等であり、更に動産差押の多いのは大阪、新潟、群馬、三重、山梨、鳥取、岡山、香川等である。

ところでかくの如き地主の攻勢は抑も何に因由するであらうか。一般に小作人の運動が被搾取階級としての小作人階級覺醒の結果であり之れに對する地主の攻勢は之れ又地主の階級的決心の致すところなることは云ふ迄もないが、こゝには更に今一歩突き込んで、かゝる現象の依つて生ずる具體的原因を闡明する必要がある。蓋しそれによつて始めてそれに對應すべき適切なる政策が樹立され得る筈であるから。

元來小作爭議の中心的原因が小作料の減免要求にあることは更めて云ふを要せざるところであるが、その然る所以は我國に於ける小作料の一般的高率が小作人の生活脅迫の直接原因を有してゐるからである。そこで小作人の要求は小作料の一時的減免に加へて、永久的減免に迄發展し、之れを中心として展開し來つた譯であるが、之れを小作人側から見れば此の要求は凡そ進んで止まざるべき性質のものである。何となれば、小作料の負擔は永久に小作人の生活の脅迫たることを止めないからである。假りに小作人が小作料を全免せらるゝに至つたとしても、辛じて今日の自作農の狀態になる譯であるから、今日の自作農の生活狀態を知る者は、それが小作人の安穩なる生活實現を意識するものでないことを知るであらう。況んや、小作料の全免どころか、尚相當高率の負擔を課せられて居るに於てをやである。從つて小作人の此の要求運動は彼等の脅迫せられたる生活より生ずる必至的命令と見なければならぬ限りに於て永續的運命を持つてゐるのである。ところで此種の要求は從來相當の程度に於てその目的を貫徹して來たのである。それは要するに個々の爭議の場合に於ける地主小作兩者の陣營の勢力關係の結果であること勿論であるが、之れを他の半面から見れば從來の地主側に於ても大體に於て或る程度迄小作人の要求を容れるだけの經濟的餘裕があつたことを語るものに外ならないと考へられる。然るに察知の如く我國には比較的小地主が非常に多いのである。彼等は小作料をその重要なる生活財源として居る。從つて小作人の要求を或程度に容れても尚その生活を保持することの出來る間はまだいいとして、小作料の減免が一定の程度以上に及べば彼等の生活そのものが直接に脅やかされる結果となる。事茲に至れば彼等も亦最後の決心をするものと見なければならない。我等は此の事實を看過してはならぬ。是等爭議の解決は近年益々困難を加へ行くのを見るのである。

今農林省農務局の調査に掛る最近三箇年小作爭議結果統計を見るに小作人の要求貫徹は大正十三年に總件數の五分弱（七五件）、十四年には四分強（九三件）、十五年には三分弱（五七件）と漸減し、妥協解決も十三年七割五分弱（一、一四八件）十四年七割四分弱（一、六二五件）十五年四割三分強（八六八件）と之れ又漸減せるに反し、未解決が十三年一割七分弱（二五三件）十四年二割弱（四三四件）十五年五割三分

數（一〇六一件）と漸增してゐるのは雄辯に此の趨勢を物語つてゐるものと見なければならない。

此の趨勢の原因は全く地主の攻勢にある。小作人の運動が衰へたるに非ず、地主が頑張り出したのである。而もその頑張り出した根底には我國一般小地主の切迫せる自衞的決心が潜んでゐること、而して小作人を追放して自ら耕地の經營管理に當らんとする者の漸增しつゝあることは前述の如くである。封建的地主の集團たるかの大日本地主協會は無氣力にしてなすに足らぬかも知れぬ。けれども死守的地主をメンバーとして各地に勃興しつゝある土地會社こそ小作人の最も恐るべき當面の敵でなければならぬ。彼等は彼等に都合よき現在の法律制度を露骨に利用して、小作人の生存闘爭の止めを刺さんとする者であるからである。

かゝる形勢に對應して近年小作側の戰術にも幾分の變化を來たし、耕作權の確立、立入禁止反對、動産差押反對等が到る處に叫ばるゝに至つたのは極めて當然である。が被壓迫階級によるかかる現法制に對する抗議的乃至改廢的要求は中々以つて實現せらるゝ譯のものではないから、決心せる地主と支配階級とを敵に廻す小作人運動の前途は頗に苦艱に充ちてゐると云はなければならぬ。が之れを避けることは彼等にとつては死滅のみを意味するが故に、彼等は何としても此の難關を突破し、生きる爲めの目的を貫徹せんが爲めに猪突猛進するであらう。

かくて今や小作爭議は最も切迫せる階級闘爭の形態を帶びるに至つた。その今後に於ける展開こそ愈々世人の深甚なる注目を要請せずんばやまないであらう。

自作農地法案

右に述べたるが如く次第に深刻化しつゝある小作爭議に對し、當面の對策としてブルジョア政府は小作爭議調停法の實施によつて僅かにお茶を濁しつゝある一方、之れが根本對策として傳家の寶刀たる自作農創定案を振り廻すことを忘れない。中にも現在の所謂積極内閣は之れが大規模の實施を宣傳しつゝある。即ち來議會に提出すべく農林省によつて作成せられたる自作農地法案の原案なるものによれば、政府は現行の簡易生命保險積立金一千萬圓の運用並に補給利子による創成策の外に新たに農地金庫を官設し毎年八千萬圓の年五分利付農地債券を發行し三十五箇年間年賦償還として自作農地の創設又は維持を圖らんとするものであるが、傳ふるところによれば政府は此の三十五年間に小作農地二百七十三萬町歩の約三割、七十餘町歩を自作農地に轉化せしめんとする計畫である。

此案に對するブルジョア諸新聞紙の批評は、現政府に實行の誠意ありや否やを疑惧し、又實行上の難點を指摘する點に於て大體一致してゐる。此の批評には妥當とせらるべき理由があるが、その點は暫らく別として、此の計畫によつて政府の所期するところを窺つて見やう。

先づ第一に地主階級の好感が期待せられる。その計畫の規模が大なるに於て益々然りである。蓋し、地主の多くは今日最早地主たるに安住してゐない、好機だにあれば、その所有地を貨幣に換價して、比較的

傾果の少なくして而も有利な商工業關係に之れを轉用せんとしてゐるのであるから、政府の計畫は彼等にとつては正しく救ひの舟でなければならぬ。次に自作農階級と雖も之れに惡感は抱かぬ筈である。自作農階級が今日次第に苦境に沈淪し行く傾向あることは疑ひなき事實であるけれども、所謂社會の中堅としての自重自尊に安じて安居を求めつゝ、その境遇に執着せる多くの自作農にとつては、政府の計畫はまさしく百萬の味方とも感ぜられ、益々現狀維持の信念が強めるであらう。而も自作農階級の向背は我國の如き小農國に於ては階級鬪爭の決算に至重の意義を有するのであるから、政府が之れによつて自作農をその味方たらしむることに成功するならば、その目的の大半は既に達せられたものである。若し夫れ之れによつて更に小作人階級の反逆的精神をも緩和し、その何割かをでもその保守的陣營に收容し得るならばそれこそ正に支配階級萬々歲である。これが現時の支配階級の狙ふところであり、その本能的魂膽であるに相違ない。唯政友會內閣はその所謂積極主義を標榜する手段もあり且つは又當面の選擧對策として憲政會內閣のそれに百尺竿頭大げさな一歩をつけ加へんとしつゝあるだけで、勿論その本質に於ては毫も變りがある譯ではないのである。

が之れが農村に與へる反響が果して支配階級の所期する如く行くかどうか。第一に地主階級は始めから彼等の陣營であり、之れが齎らす效果に就ても恐らく違算はあるまい。第二に自作農階級が政治家や學者等の執拗なる說教に幻惑せられ、又土地の所有者たる空虛なる自負に保守主義の湯池たる舊態は依然たるものであるけれども、生活の壓迫が現實にひしくと襲ひ來る今日に於てはそれもいつ迄續くかは判つたものではない。多くの自作農が拔け難き抵當負債の桎梏の下に絕望に陷りつゝあるのが今日の有樣である。若し政府案にして之れが救濟によく奏功するならば、彼等の大衆を自己の味方たらしめ得ることは火を見るよりも明かであらうが、單なる懸け聲だけでは最早彼等の望みを繫ぐに足りないであらう。結局此階級の向背は兩鬪爭階級の何れの一方がより早くより有力に實質的利益を提供し得るかによつて最終的に決せられるであらう。最後に小作人階級に至つては、その自覺したる分子は既に自作農創定案の僞瞞を觀破してゐる。三十五年間年賦償還の容易ならざることは云はずもあれ、辛じてその險難の行途を完了し得たる時彼等は果して救はれてゐるであらうか。これが抑も大なる疑問である。蓋し、彼等はかくすることによつて漸やく自作農の仲間入りが出來る譯であるが、自作農その物が既に救濟を要する狀態にあるのではないか。エンゲルスは嘗て『小農沒落の原因は實にその個別的な小所有地を基礎とする過小經營にあるのであるから、これが維持存續を計ることは唯その沒落を延期するのみであつて斷じて小農の解放を齎らす所以ではない。從つて我々の任務は、資本主義の支配する限り彼等の位地の絕對に救はれざること、彼等の小所有地をその儘に維持することの絕對に不可能なることを反覆說明し、農民をして之れを自覺せしむるにある』と教へたが、その後の資本主義の進展は實質的に之れを證明してゐる。自作農の大衆が終世拔け難き借金奴隸の苦境に陷りつゝあることが何ものよりも有力なる之れが實證である。勿論安穩平和な民としての典型的自作農の狀態を維持しつゝある者もある。しかしながら、その一見安穩に見ゆる生活は一體何によつて購は

れ、維持せられてゐるか。過激なる勞働と極端なる欲望否定との結果ではないか、彼等は眞に最には星を仰いで野に出で終日營々して牛馬の如く働らき、夕には星を見るに至つて始めて家路に就くのである。而も彼等は多くの場合妻も子も一家共稼ぎである。身にはボロを纏ひ、殆んど百年變らざる粗惡なる食糧を以て空腹を充してゐる。彼等は自己の享樂、自己の教養を斷念してゐる。彼等は文明の外に立つてゐる。彼等は文化の進歩には縁なき衆生である。――かやうにして始めて彼等は、恐らくは借金を作ることなしに、一個獨立の自作農たる位地を維持し得てゐるのである。これが現在に於ける模範的自作農の僞らざる實狀ではないか。かやうな自作農の存在は成程支配階級にとつては此上もなく好都合であるに相違ないが、その自作農自身の幸不幸に至つては勿論論ずる迄もないのみならず、かやうな存在が將來の社會の進運と調和すべくもないことは云ふ迄もない。一體かやうな狀態に到達することが小作人の理想であり得やうか。成程それによつて土地の所有權は得られる。が所有權の獲得が彼等の生活の向上を約束するものでないことは上述の如くである。而も所有權獲得の代償として彼等は土に縛り付けられる、彼等は運動の自由を失ふ。彼等は自ら保守的とならざるを得ないではないか。――ブルジョア政府の狙ふところはまさしくそこにあり、自覺せる小作人の反對する所以も亦まさしくそこにある。

が一般の小作人大衆はどうあらうか。彼等の中には依然として强烈なる土地所有慾を有する者も多くあらう。又小作爭議の漸やく難關に入れるを見て選擇を此の方向に採らんとする者を生ずるかも知れない。果して然らば政府の方策も案外奇効を奏するかも知れない。お手並拜見と出掛けたいところである。

豐作の悲哀

凶作の年の農村は誠に慘目である。借金の返濟どころか、どうしてその日を送るか の心配にあえがなければならぬからである。豐年は昔は鼓腹擊壤の喜びに農村は蘇つたものであるが、今は果して如何。

恰かも今年は豐年滿作とある。農林省の發表に掛る昭和二年産内地米の第一回收穫豫想高によれば、九月二十日現在六千百四十九萬二千八百五十石であつて、これを前年度收穫高に比すれば五百九十一萬二百十八石（一割六厘）を、前五ケ年平均收穫高に比すれば三百七十七萬三千八百九十六石（六分五厘）を增加してゐる。蓋し本年の稻作は苗代時期に於ける天候概ね適順なりし爲め苗の發育良好に進み、移植時期後は晴天多く高溫持續し、地方によりては干害を被りたるもの及び病害虫の發生を見たるものもあつたがこれが防除等に努めたる爲め概して大なる被害を認めず、且つ土用入後の氣候順調なりしと施肥管理の周到なりしとにより稻の生育良好にして九月上旬に於ける風水害も一部地方に止まつたから前記の如き收穫を見るべき豫想であるとある。此の豫想收穫高は、毎年の例によると、第二回豫想、實收高と漸次確實性を增すに從つて多少とも數量は減少するのが普通ではあるが最近の減少を考慮に入れても、昨年度の米穀需給關係は供給過多の傾もあることは顯著であつて、調節上翌年度へ持越しを必要とする五

百萬石を控除しても約三百萬石からの過剰米を生ずるに到るであらうと觀測せられてゐるのである。

かくて商品生産の支配下にありては折角の豐年も農民にとつては一喜一憂の種である。自己の勞苦が天候に幸ひせられて豐かなる收穫を擧げ得ることは生産者たる農民にとつては確かに此上もない喜びでなければならぬ。更にそれを穀倉に積み上げて樂しみ眺めることが出來るのであれば農民にとつて滿悦至極であらうが、今日は最早それが許されないのである。小作人は勿論その半ばを地主の穀倉に納付しなければならぬ。自作農の多くも右から左にそれを換價しなければならぬ。かくして肥料代を支拂ひ、負債利子の返濟に當てなければならぬのであるが、如何せん新米の出盛期とあつては、殊に今年の如き豐年にあつては、米價の慘落は必定であるから、農民は救はれない。而も殘れる僅かの所持米を食ひつぶし、新たに買ひ入れなければならなくなる時分にに、それとは逆の需給關係の發現によつて、米價は騰貴してゐると來る、而もかゝる場合何等かの原因によつて米價の低落することもあれば政府は直ちに米穀法の適用によつてこれが阻止に努めるのである。現に今年も政府は九月二十日から十月五日までの間に大正十五年度産米百萬石を買上げることを決定し、現に實行中である。この端境期に賣るべき米を有する者は大地主か商人のみであるが、政府は彼等の利益の爲めに、米の生産者でありながら却つて米を買はなければならなくなつてゐる小作人や自作農を苦しめることを敢てするのである。これが政府の農村振興策の現はれである。勿論新米大豐作の第一回豫想の影響を受けて米價は最近益々崩落氣勢に向ひつゝあるから、政府も新米出盛期に於ける對策を講じない譯にはゆかない。現に新聞紙の報ずるところによれば、政府は米穀委員會を臨時招集するに決定したとあり、その諮問内容としては、一、米價調節を主意とする二年度産米の大量買上、一、右に伴ふ米穀法の運用上改正に要すべき點、等が傳へられ、更に農家の賣急ぎ投賣を防止するため臨急資金の低利貸付を企圖する意向あるものの如く傳へられてゐる。總選擧を來年に控えてゐる政府としては誠に御苦勞千萬といふ外ないが、その所謂大量買上がどこ迄實績を擧げ得るかは大體豫想に難くない。

かくて結局救はれないのが農民である。商品生産法則の支配のまにまに翻弄せられながら、商人にはしてやられ、爲政者には蹂躙せられるのが現在の彼等の運命である。豐作がその生産者にとつて必ずしも喜びでないと云ふのは餘りにも不自然ではないか。此の不自然が自然に歸される方策が眞劍に考慮さるべき時期である。

經濟時評

悲觀樂觀

青木得三

悲觀論

現在の我經濟界を觀察する人の多くは甚しき悲觀說を唱へて我國財界の全局面に暗雲低迷霽るべくも見えない、經濟界の諸材料は悉皆悲觀材料のみであると論じて居る。唯少數の論者例へば某有力銀行の總裁或は政府當局の某有力者の如きは我國の財界の徐々に好轉せんとしつゝあることを說いて居る。然るに玆に又一派の論者があつて、今日に於て財界好轉を說くことは輕率に爲すべきものではない。それが爲に中間景氣を惹起するやうなことがあつては、由々敷大事であると懸念して居る、此の派の論者は必しも財界好轉說の實證に反對するのではなくして、寧ろ好轉說を唱道することに反對するやうに見える。

然し乍ら、大多數の論者は悲觀說であつて、殊に實業界に在る實際家は殆んど皆悲觀論者であるやうである。悲觀論の論據として最も聞くに足るものは、我國の企業家には本年春破綻した關西地方の某大商店の如く、內部に絕大なる資產の欠陷を包容して居つて、尙表面を糊塗して居るものが未だ少くない。而して其の企業家の中には相當大規模なる經營を爲して居るものがある故に、其の破綻するに至つた場合には相當大なる波瀾を經濟界に捲き起すであらうといふのである。此の論は其の前提に誤なければ結論は大に傾聽すべき價値があると私も考へるのである。唯一點、吾々の攻究しなければならぬ所は、本年四月の財界動搖は企業家の破綻が金融機關の破綻を伴つて居たことである。更に的確に之を言明すれば、多數金融機關の破綻が相次いで起つた故に彼の樣な大動搖を生じたのであつて、單純に企業家のみの破綻であつたならば、其企業家が如何に大規模なる經營を爲して居つても財界の動搖は必しも大きくはないといふ點である。蓋企業家の破綻は或る場合に勞働者の解雇を伴ふ故に無產階級に對する打擊を招來することはあるけれども、直接には資本家の沒落である。然るに金融機關の破綻は預金拂戾不能の爲に多數の無產階級若くは中產階級の生存難

を招來するのである。私は大正十四年の春に當つて東京の某大商會の破綻したことを記憶する。而して其の破綻が大なる波瀾を財界に捲き起さなかつたことも記憶する。當時は其の大商會と密接な關係にあつた某有要銀行は支拂停止を爲したけれども、それは一銀行に止つたので財界の大動搖は起らなかつたのであつた。故に私は現代の社會に於て恐れなければならぬのは一二の資本家の沒落ではなくして、多數金融機關の破綻であると思ふのである。

恐慌來らず

然らば悲觀論者の謂ふやうに、たとひ一二の大企業家の資産の內容に多大の缺陷を包藏するものがあるといふことが、眞實であるとしても其の破綻は必しも大なる波紋を財界に描くことは、無いのではなからうか。換言すれば、たとひ一二の大企業家の破綻が將來あると假定しても、多數金融機關の支拂停止といふやうな事實は最早將來に起らぬのではなからうか、私が敢て此の言を爲す所以のものは、我國の金融機關にして其の內容に缺陷を包藏して居つたものは既に本年の春に於て其の醜態を暴露してしまつたと信ずるからである。又當時內容に缺陷があつてしかも支拂停止を爲すに至らなかつた銀行は其の後他の有力なる銀行と合併せられ、而も其の合併の際事實上の減資又は積立金の取崩を行つて、資産の缺陷を銷却したと信ずるからである。

之を要するに私は我國經濟界の近き將來に於て再恐慌の來ることがあるとは信ぜられないのである。次に悲觀論者の憂ふる所は現在の財界が余りに不景氣であるといふことである。商業家も工業家も農業者も其の利益が餘りに小であるといふのである。否寧ろ利益を得ることが出來ないで損失を生じて居るといふのである。而して其の損失を生ずる最大原因は物價の低落に在ると私は信ずるのである。

物價低落

私は日本經濟界の景氣恢復の爲に大正九年三月以來久しく物價の低落を待つた。私は之より曩、先づ金融の緩和を待つた、而して其の金融の緩和は比較的早く來た。即大正十二年九月震災の前後を界として我國の金利は低下し始めた。東京銀行集會所の調査に依る東京平均金利（證書貸付日歩）は大正十二年九月の二錢七厘三毛を界として本年七月には二錢五厘四毛に達した。日本銀行最低割引歩合も大正八年の秋以來二錢二厘を長く繼續して居たのが、十四年の四月十五日に二錢に引下げられ、爾來二度の引下げがあつて、本年三月九日よりは一錢六厘となつて居るのである。金利の低下は私の豫期したよりも早く來たのであつたが、物價の低落は中々來なかつた。物價が低落しないでは景氣恢復は覺束ないといふのが私の確信であつた。然るに其の物價低落も亦終に來たのである。

斯くの如く私が論ずるならば、或る論者は怪むかもしれない、多數の日本の實業家は驚きの眼をみはつて『何を馬鹿なことをいふ、物價の低落はそれ即不景氣の象徵ではないか』と罵るかもしれない、然し乍ら私の論點は實に玆に在る。試に論者の謂ふ樣に物價の低落は不景氣の象徵である。從て物價の極端に低落した時は卽不景氣の極點に達した時である。私は久しく不景氣の極點に達することを待つて居つた

のである。私の待つて居た不景氣の極點は中々來なかつた。私が不景氣の極點であると考へた處が、さうでなくして更に甚しき不景氣が來たことも屢々あつた。しかし今日の我國の不景氣は最早愈極點ではなからうか。而して私は此の不景氣の極點を測るのに物價低落の極點を以てしたいのである。私はそれが最適當なる測定方法であると信ずる。

私が日本財界景氣恢復の爲に物價低落の極點が速に來ることを希望したのは、景氣不景氣循環の理法を信ずるからである。即好景氣の極點が永續しないのと同様に不景氣の極點も亦永續しないことを信ずるからである。故に私は我財界が不景氣の極端に到達すれば、必ず轉廻するものと信ずる、唯問題は今日の財界は不景氣の極端に到達したかどうかである。私は此の問題を檢討する爲に少しく我國の物價を調査して見度い。日本銀行の調査に依れば東京の卸賣物價は大正三年七月を一〇〇とすれば、本年八月には一七六である。又明治三十三年十月を一〇〇とすれば二二二である。此二二二といふ數字は大正七年一月（二二四）に於て近似數を示して居るが、それ以來は一度も表れたことのない數字である。成程倫敦及紐育の物價は大正三年を一〇〇とすれば本年八月にはそれぐ一五八及一四五であつて、我國の一七六に比較すれば、何れも稍低いのであるが、歐洲戰爭開始前に於ける東京の物價と倫敦又は紐育の物價との間には著しい相違があつたのであるから、私は東京の卸賣物價指數が大正三年七月を一〇〇として倫敦又は紐育と同じ程度に復歸するものとは考へないのである。即私は我國の物價が略低落の極點に達したのではないかと思ふのである。更に個々の貨物に就いて日本銀行の物價指數を見ると、明治三十三年十月を一〇〇とすれば東京主要商品卸賣指數は本年八月に於て最も低い物が甲斐絹で一〇〇、次が洋鐵で一〇一、次は洋釘で一〇八、硫酸アムモニア一二〇、銅一二二、洋灰一二四、羽二重一三二、板硝子一三三、白木綿一三八、鉛一三八、絹手巾一四五、眞綿一四八、苛性曹達一四九、魚肥一五五、綠絹一五五、絹裂地一五八、金巾一六五、生糸一六八、毛斯倫一七四、醬油一八三、鷄卵一八三、油糟一八六、油一八八、鹽一八八、木材一九〇、大麥一九六、といふ數字を示して居る。

私は現今の我國の物價が明治三十三年十月を基本として其の二倍に達して居ることは我國力の發展、人口の增加、國民生活の向上等に照して決して過當ではないと考へる。前に述べたやうに本年八月の東京卸賣物價平均指數は二二二であつて、中には味噌の如く四四九、鰹節の如く四二〇、又日本紙四〇九、牛肉三八六、石材三四八、鹽三三〇、製茶三二九、石炭三〇七、小豆三〇六、米三〇四、砂糖三〇二の如く三倍以上に達して居るものもあるけれども、此等は殆んど皆生活必需品である。而して生活必需品に對する需要は經濟界の景氣不景氣に依つて增減することの殆んどないものであるから、此等の貨物の價格は最早此の以上に低落することは殆んどなからうと思はれるのである。而して前に擧げた所の價格が明治三十三年十月に比較して二倍に達しない貨物の中には少からぬ輸出品を含んで居つて、將來財界の趨勢如何に依つては騰貴し易いものが存在するのである。

要するに私は、我國の物價が低落の極點に近づいたことを考へるのである。而して物價低落の極點は卽景氣恢復期の發端であると信ずるものである。故に私は必しも前途を悲觀したいのである。

金融緩漫

私は最近我國債の價格の頓に騰貴したことを耳にして居る。其の原因として傳へられる所は所謂一流銀行の手許に多額の遊金があつて、國債の應募又は買入を希望する故に國債の市價が斯くの如く騰貴するといふのである。又最近發行せられた東京大阪の市債が非常の好成績を以て賣れて行つたことを聞いて居る。之も亦第一流銀行が手許に在る遊金を以て競ひ買つたからであらうと考へる。經濟界が不景氣より好景氣に轉ずる間に於て一度金融緩漫の時期を經過するを常にすることは、經濟學界に於ける先覺の既に早くより道破した所であつて、而も此等の先覺は此の金融緩漫期に際して資金の過剩に苦しむ金融業者は最初先づ國債に向て走り、次に確實なる地方債に向て進み、最後に確實なる社債及株式に向て行く。是れ即新事業勃興の時期であつて景氣恢復の端緒であると説いて居るのである。私は我國の金融緩漫が此の第一時期より第二時期に入らんとして居ることを認める。而して第三時期の來る亦遠きに非ずと豫感されるのである。

然らば此等の先覺は何故に不景氣末期に起る金融緩漫の際に於て、資金過剩に苦む金融業者が先づ國債に奔り、次いで地方債に進み、終りに確實なる社債及株式に趨くことを説いたか。私は念の爲茲に一應の説明を試むる必要を感ずる。或はそれは無用の説明であるかもしれぬ。然し乍ら私が現在の我國の金融緩漫を以て不景氣時代の末期に起る喜ぶべき現象であると爲すに對して、一部の論者は現在の金融緩漫は變態の金融緩漫であつて決して喜ぶべき現象ではない、何となれば第一流銀行の手許には資金が餘つて困つて居るけれども、第二流以下の銀行には資金が枯渇して居るからであるといふ。私は第二流以下の銀行の手許に資金の潤澤でないことを否定しない。しかし第一流銀行が遊資の多きに苦しんで居ることは、やがて此等の銀行が確實なる新事業に投資する前提であると信ずるから、之を喜ぶべき現象であるといふのである。

好景氣の時代に於て金融業者が不確實なる企業を確實であると誤認した事實は大正七八年頃の我國の財界に於て數多の類例があつた。その事實は大正九年の財界變動に依り更に又本年春の財界動搖に依つて少からず明瞭となつた。或は之を一層正確に謂ふならば、大正九年三月の如き財界の變動の生ずることを豫想しなかつた故に無謀なる事業を有望であると考へたこともあつた。或は又一般的好景氣の熱に浮かされて愼重な調査を爲さず、爲に不確實な事業を確實であると考へたものもあつた。而して大正九年、十二年及昭和二年の三大事變に續け様に遭逢した我國の金融業者は萎縮した。彼等の今日の眼には確實な事業も不確實に映ずる、有望な企業も無謀に見える。故に彼等は空しく巨額の遊資を抱いて唯國債にのみ放資した、最近漸く確實なる地方債に放資するの傾向を現して來た、けれども未だ確實な社債、株式に放資し、或は有望な企業に對して貸出を爲すの時期には達しない。それは彼等が確實であり、有望であると考へないからである。

私が茲に確實な社債、有望な企業に對する貸出といふのは決して過去に於ける財界の變動に因つて創痍を受けた會社の整理の爲にする社債、若くは企業の救濟の爲にする貸出をいふのではない、内容の堅實

なる會社——それは過去に於て全然創痍を受けなかつたか、若くは受けたにしても既にそれを完全に整理銷却した——が新に事業を擴張する爲に發行する社債、若くは全然無傷で新に計劃せられる企業に對する貸出を謂ふのである、現在の我金融業者は斯の如きものに對しても極端なる不安を感じて居る。しかし、私は斯くの如き狀態が永續するものとは信じない、必ずや我第一流銀行が確實な新事業に向つて放資する時機が來ると信じて居る。

論者或は謂ふかもしれない、今日のやうな不景氣の時代にどうして確實な新事業を計劃する者があらうかと。それは一應尤もに聞える議論であるけれども、私は前段に述べた如く物價の低落が其の極點に達して、將來は少しづつなりとも上り氣味になるといふことであれば、新なる事業を計劃して決して不利なるべき筈はないと考へる。論者は或は又いふかもしれない。日本の實業家は一人として過去の財界變動の爲に創痍を受けない者はない、どうして彼等が新事業を計劃することが出來やうかと、之も一應尤もに聞える說であるけれども、日本の經濟界はいつ迄も古き實業家の手に依つてのみ經營せらるべきものではない。日本の人口は年々著しき率を以て增加しつゝある。各種の教育機關は年々新しき卒業生を極めて多數に出しつゝある。私はその中から未だ何等の創痍を受けざる大志を抱いて細心なる新實業家の出づることを期待する。我國の財界は永久に某子爵と某男爵の手にすがることは出來ない。況んや過去の財界變動の爲に深刻な創痍を受けた某々等の大實業家に對して私は其の捲土重來せざらんことを希望して居る。私は彼等が瀨戸內海の畔、風光明媚の地に悠々自適其の餘生を送られんことを祈つて居る。

新時代の傾向を察し得る新なる實業家に依つて計劃せらるべき新事業は確に日本に在る。過去の財界變動の爲に倒壞した企業に代るべき同種の企業のみを數へても相當な數には上るのである。而して其の新企業を起すに必要なる資金は第一流銀行の手許に餘つて居る。唯銀行當局者が一切の新事業を不安なり無謀なりと考へて居るのみである。恰も大正七八年の交に於て一切の新事業を安全なり、有望なりと考へた如くに。然し乍ら此の狀態はいつまでも續くものではない。

私は明治神宮の內苑と外苑を結び付ける道路の附近に住んで居る。而して先日新宿の町に建てられる計劃の新劇場の株式募集の勸誘狀を受け取つた。私は實に空谷跫音の感を爲した。しかし更に考へて現在の金融緩漫が此の新事業を計劃せしめたと感じた。觀劇を最大な娛樂として居る私に取つても之を確實有望な新事業であると斷定するには聊か躊躇する。木挽町と帝劇とが連月滿員であるとしても、此の計劃は未だ完全に確實有望であるとは結論し難い。然し私には此の株式募集は不景氣時代の末期否寧ろ好景氣時代の初期を象徵するものではないかと感じられる。私は源太景季の箙に指された紅の花が、寒風凛烈の裡に咲き匂ふのにも例へ度いと思ふのである。何れにしても現在の金融緩漫は決して悲むべき現象ではない。本年六月十一日に於て東京手形交換所組合銀行の預金總高は十八億一千七百萬二千餘圓であつたが、九月二十三日には十八億二千二百三十三萬八千餘圓となつた、大阪のそれは十二億三十三萬四千圓から十二億五百五十萬三千餘圓に增加した。之に反して貸出は東京に於て二十一億三千三百七十五萬一千圓よ

り十九億八千三萬三千餘圓に減じ、大阪に於て十三億五千八百八十二萬七千餘圓より十三億七百五十七萬八千餘圓に減じた、即東西兩大市場の金融は近來愈緩漫である。寒風漸く和いで梅花の一點を見るのも或は遠くないかもしれない

入超減退

私は更に財界の前途を悲觀せざるの資料として輸入超過の減退を擧げ度いと思ふ。即一月より九月末日に至る間の入超は本年は二億八百四萬圓で昨年は四億百餘萬圓であつた。しかし、此の點に關しても反對論者は最近の入超減少は輸出の増加に依るのではなくして、輸入の減少に依るのであるから、何等喜ぶべき現象ではないといふ。又他の論者は最近の入超減少は輸入減少の結果である。而して我國は外國から原料を輸入し之に加工して海外に輸出する國であるから、最近の輸入減少は將來海外に輸出すべき製造品の減少を意味するので、何等喜ぶべき現象ではないといふ。

成程一月より九月末日に至る迄の輸出は本年が十四億九千百餘萬圓昨年が十五億六百餘萬圓で千五百餘萬圓の減少を示して居る。同期間の輸入は本年が十七億餘萬圓、昨年が十九億八百餘萬圓で二億八百餘萬圓の減少を示して居る。故に本年の昨年に對する入超減退は全く輸入減少の結果である。然し乍ら、私は考へる、輸入の減少は何故に悪いのであるか。反對論の第二點のやうに原料品の輸入が減少して居る故に悪いのであるか、いかにも一月より九月末に至る棉花の輸入は昨年六億三千百餘萬圓、本年五億一百餘萬圓で一億三千餘萬圓の減少である、けれども輸入棉花の全部が製品として再輸出せられるのではない、半分以上は國内に於て消費せられるのである。私は常に考へて居る、日本の外國貿易といふのは生糸を輸出し棉花を輸入することであると。而して生糸はいふ迄もなく全部國内に於て生産せられる財貨である。絹織物は輸出品として勿論重要なるものであるが、其の原料は全部外國品であるから、生絲の如く輸出品として有利なものではない。

然るに本年一月より九月末に至る生絲の輸出は前年に比して増加して居る、即前年は五億一千九百餘萬圓であるのに、本年は五億六千七百餘萬圓であつて、四千七百餘萬圓の増加を示して居る、輸出總額が前年に比して減少して居るのに生絲の輸出が増加して居る事は實に愉快である。

抑、景氣不景氣と輸出入超過とは如何なる關係を有するか、いふ迄もなく、輸出超過は好景氣の原因、輸入超過は不景氣の原因である。何故に左樣であるか、私の信ずる所に依れば、輸出超過は金の流入を來し、通貨の膨脹を促し、物價の騰貴を齎すからである。我國は大正四、五、六、七の四ヶ年に於て夫れ夫れ一億七千五百、三億七千百、五億六千四百、二億九千三百餘萬圓の出超を示した。これが大正七八年に於て我國の經濟界が非常なる好景氣を呈した殆んど唯一の原因であつたことは、今日より當時を回顧して到底否定する能はざる所である。而して大正七八年に於て七千四百餘萬圓の入超を示した時に、吾々は不景氣の來る時期遠からざることを覺悟しなければならぬ筈であつた。

既に出超の好景氣の原因たる理由が金の流入、通貨膨脹、物價騰貴

にありとすれば、出超の內容如何は必しも問ふ所ではない、入超が不景氣の原因となるに就ても其の內容如何は必しも問ふ所ではない、入超の減退が不景氣を囘復せしむるに就いても亦同様である。私は常に輸出の增加、輸入の減少は物價の低落に待たねばならぬことを主張するものである。而して爲替相場の低落に依る輸出の增加、輸入の減退を排斥するものである。蓋し物價が低落しないで爲替相場が低落した爲に、日本製品の外國貨幣にて表示したる價格が低落し仍て輸出の增加するのは、之を國際經濟的に考へると資本と勞働と土地との成果を投賣するものである。國內の物價が低落した爲に日本製品の外國貨幣で表示した價格が低落し、仍て輸出の增加するのは之に反する。私は我國最近の入超減退を以て物價低落が其の主なる原因であると信ずるものである。物價低落の爲に輸出が增加する際には輸出數量は增加しても輸出價格は增加しないことがある。又物價低落の爲に輸入が減少する際には、輸入數量は增加しても輸入價格は增加しないことがある。而して輸出數量が增加して輸出價額の增加しないことは必しも喜ぶべきではないが、輸出數量が增加して輸入價額の增加しないことは極めて喜ぶべき現象である。何となれば是れ卽外國より廉價なる貨物を購入する所以であるからである。最近の入超減退を喜ばない論者の論據が原料品の輸入減少にあるならば、私は玆に論者の說を根本より覆し得る資料を持つて居る。卽本年一月より六月末日に至る六ヶ月間に於て棉花の輸入は三億九千餘萬圓であつて、之を前年同期の四億九千餘萬圓に比較すると一億圓の減少であるが、其の數量に於ては勿論、本年は八百五十萬餘ピクールであつて、前年同期の七百六十二萬餘ピクールに比較すれば約百萬ピクールの增加である、之を前々年同期に比較すると其の差は尙益々甚しいので、前々年の價額は六億四百餘萬圓であるが、數量は僅に六百九十五萬餘ピクールである。若し論者の謂ふ如く日本は原料に乏しき國である故に棉花の輸入數量の多きことを喜ぶといふならば、吾々は本年上半期の棉花輸入數量の前年及前々年に比較して大に增加したることを喜ばねばならぬ、然し乍ら其の價額は明に前年及前々年より減少して居る。而して私は之を更に一層喜ぶべき現象であると考へて居る。唯に棉花に就いて左樣であるのみならず、豆類、生ゴム、油糟、麻類、毛糸に就いても左樣である。

		本年上半期	昨年上半期
豆類	數量	五、六七七千擔	五、一三五千擔
	價額	三四、二二二千圓	三六、八〇九千圓
生ゴム	數量	一五三千擔	一一五千擔
	價額	一五、五九七千圓	一八、九五一千圓
油糟	數量	一八、六九五千擔	一八、二〇二千擔
	價額	八四、〇六九千圓	九六、三八九千圓
毛糸	數量	五、二八一千斤	四、四五九千斤
	價額	一五、七〇二千圓	一七、六三二千圓
麻類	數量	四八〇千擔	四二九千擔
	價額	一〇、八四四千圓	一一、五二五千圓

繰返していふ、日本は生糸を輸出して棉花を輸入する國である。生糸の輸出は本年上半期に於て前年同期に比較し數量、價額共に增加し棉花の輸入は數量に於て增加し、價額に於て減少して居る。之を喜ば、

ずして果して何を言ふのであるか。

樂觀論

斯くの如くして私は我國經濟界の前途を悲觀しない、悲觀しないといふことが即樂觀であるならば、私は財界の將來を樂觀する。此の樂觀といふ語が頗る現在の我國實業界の人々の耳に異様の響を與へるらしい。彼等は曰ふ、我國經濟界の空には暗雲が低く迷ふて、何れの一角にもその霽れて行かうとする兆が見えない。此の時に當つて財界の將來を樂觀するとは何たる愚論である歟と。

回顧して十年前の我國財界を追憶する、大正六、七、八年の交に於て我國の實業家は、一人として經濟界の將來を悲觀したものがなかつた。ツレード、サイクルの理法に從つて、甚しき好景氣は必ず不景氣に轉ずるものであり、其の轉回期に際して、恐るべき恐慌の來ることを信ずる者はなかつた。故に彼等實業家は或は益々其の工場を擴張して其の生産を增加し、或は新に事業を計劃して會社の設立を企て、或は大に商品の仕入を增加して販路を擴張せんとした。故に一朝大正九年三月の激變に遭遇するや、創痍滿身、流血淋漓、到底救ふべくもなかつた。彼等は大正七八年の交に於て經濟界の將來に恐慌と不景氣の必來るべきことを說く者があると聞いた時に、嘲笑と侮蔑とを以て之を迎へた。而して曰つた、學者が何を知つて居るか、經濟學に何がわかるかと。

私は最早や多く語る必要はない、唯昭和二年の今日に於て我國經濟界の將來に決して好景氣の來ることがないと信ずるものは、恰も大正七八年の交に於て經濟界の前途に決して恐慌と不景氣の來ることがないと斷じたのと全く同一であると言へば充分である。大正七八年の交に於て恐慌と不景氣の來ることを信じなかつた爲に日本の實業家は如何に大なる損害を受けたか、之を管々しく說明する必要はない。斯くの如き苦き經驗を甞めたる日本の國民が、尙目醒めることが出來ないで、嘗て好景氣が永續すると考へたやうに、今又不景氣は永續すると考へると は如何にも情けないことではないか、憐れむべきことではないか、否寧ろ滑稽なることではないか。亡友藤村操君は其の死に臨んで、華嚴の大瀑の巖頭の大樹を削り、「巖頭の感」と題して記した文の終に、「則知る大なる悲觀は大なる樂觀と一致するを」と云つた。私は我國經濟界の將來を論ずる每に、常に此の一句を憶ひ浮べるのである。

（二、一〇、七）

試驗難と民族の運命

上杉愼吉

問題の意義

中學校でも、女學校でも、各種の專門學校でも、又高等學校でも、毎年收容し得べき定員の三倍五倍或は十倍と云ふ入學志望者があつて、選拔試驗を行はざるべからざる結果、多數の入學不能なる學生を生じ、年歯も行かぬ青年子女が、文字通り命がけで試驗を受けなければならぬと云ふ悲慘なる情況を呈し、試驗地獄と云ふ言葉さへ生じ、子女の身神は疲弊し、年々過勞又は落膽の結果自殺する者さへも出來、父兄は前途暗黑なる少年落伍者の手をとつて不幸に泣く者、國内に充滿すると云ふ有樣であると云ふとは人心に痛刻なる刺戟を與へ、如何にして之を救濟すべきかは、今や我が國の一大問題となつて居る。私は之を目下我が國民の當面して居る内外數個の大問題と共に屈指すべき、容易ならざる大問題であることを切に感ずるのである。差し當り不幸に沈淪し、悲運に泣く多數の少年を、如何にして救ひ出すべきか、苟くも向學の志を懷く少年をして、遺憾なく皆滿足に、その目的を遂し得せしむるの方途を論ずるは、既に一大難問である。文部省が毎年あゝもしたら、こうもしたらと、苦心慘憺して居るのは、如何にも氣の毒であり、當局者の心勞を多とせねばならぬ。然れども、遂に答案は出でぬのである。今年考案せられたと云ふ、なるべく推薦に依ることとし、試驗を出來るだけ輕易にすると云ふのも、世間の人は彼れ此れ非難もするが、實際局に當る人々としては、隨分脳味噌をしぼつたものであらうと思ふ。凝ては思案に能はず、考へあぐめば、結局あんな處に歸するかも知れぬ。試驗が少年を苦しめる、試驗は地獄であると云へば、あゝでもする外はあるまい。しかし、この方法では、一般多數の人の云ふが如く、却て弊害は多大であることは明かである。然らば矢張り試驗をするかと云ふに、それが地獄であるから救はなければならぬと云ふのである。如何なる人も到底名案を案出することは出來ないのである。學校を增設して、入學志望の青少年を悉く收容すれば、それで解決がつくかと云ふに、決して然らず、次には直ちに試驗難は就職難と形を變じて、更に一層困難なる大問題を惹起して來るのである。今でも現に大學でも、專門學校でも、卒業生は皆極度の就職難に苦しんで居るではないか。卒業の日は失業の日なりとまでに云はれて

居る。今年私の委員たる行政官の高等試驗を受けた者が二千何百人ある驚くべき數と云はなければならぬ。その一割も高等官として採用せらるべきものではない。學校を増設して、志望者を全部入學せしむることとすれば、如何に恐るべき就職難の現象を見、社會の病根となるか殆んど豫測し難きものがあらう。然らば、國家社會に於ける、各方面の人物需要の程度を考慮して、卒業者を制限し、學校を制限し、入學者を制限するとすれば、又再び試驗難はひどくなるのである。是に於て、結局どうすればいいのであるか。教育者には到底解決はつかぬのである。つまり問題は教育者の手を離れて、國家全般の問題となつて來なければならぬ。私は嘗て一新聞記者の、如何にして試驗地獄を救濟すべきやの質問に答へて、毎年出生し來る小兒の身心の能力を査定して、適當の割合に於て、一定數の小兒を殺戮すべきのみと、奇嬌の言を弄したことがあるが、試驗難の問題たる、結局我が國が年々増加するこれだけの人口をこなし得る能力ありや否やと云ふ問題に歸着して來るのである。先頃の新聞に依ると、一年百萬の人口を増加すると云ふことである。かくの如くんば、入學難試驗難の起り來るは當然と云はなければならぬ。試驗難の現象は、此の人口増加と云ふ、我が民族の運命を定むべき根本問題の、最も深刻に露骨にあらはれ來つた一兆候である。私は今人口問題を一般的に論ずるだけの研究を遂げては居らぬが、人口の増加が、我が民族の運命に關する大問題として、最も周到なる考慮を要する問題なることが、試驗難と云ふ現象にあらはれ來つたと云ふ方面に、若干の考察を加へて、同胞と共に、吾人の警戒すべき處を知らんと欲するのである。

人口の量的増加

帝國の人口は、最近二十年間、大體毎年五十萬乃至八十萬人を増加して居る。昨年は百萬人に近き増加であると報告せられて居る。明治五年には内地の總人口三千三百萬人餘であつたものが、大正十四年には六千二百萬人餘に達して居るから、ざつと半世紀の間に二倍となつたわけである、實に驚くべき増加と云はなければならぬ、此の割合で進むとすれば、一億に上るのは、そう遠き將來のことでは無いと云ふ計算になる。此の驚くべき増加は先づ第一に、今日人の矢釜しく論じて居るが如く、切迫せる食糧不足の問題として、日本民族の運命の上に直接の關係を有する重大問題である。殊に人口の増加の、文明の進歩と共に其の率を加ふることは、ひとり我が國のみの現象ではなくして、國に依ては例外もあり、多少程度を異にして居ても、世界を擧げて、人口は急速に増加しつつあるのであつて、地球が養ひ得べき人口の飽和點が何十億なるかは、容易に測定すべからざるも、漸次にこれに近づきつゝあることは事實と見なければならず、それだけ我が國の人口増加に對する方策を立つることは困難であるのであつて、移住の奬勵と云ふが如きことも、移住そのものの主觀的能可能利不利の考察以外客觀的に一定の制限あるものと見なければならず、移住が本質上人口問題の解決策として稱揚すべきものなるや否やの疑問を差し挾くともまた自然の資源は、世界全人類に普遍平等に解放利用せらるる時が來るとしても、以て永久の解決策と爲すべからざるは、云ふを待たぬ。されぱとて、今日人皆口にする處の產兒制限なるものを徹底的に一般

的に實行すると云ふことは、道德的にも、民族發展の上からも、人種の改良と云ふ點からも、その他各種の方面からも、更に深刻周到なる講究を要する問題であつて、私は今玆に、私の之を非なりとする意見は默して置くとするも、少くとも直ちにこれを以て萬全の方策とすることを得ざるは、識者の悉く一致する處であらう。果して然らば、人口問題に就て、到底永久の解決法無しとすれば、實に之を人類の運命に對する決定的の不幸と云はなければならぬが、人類は斯の如くにして輕々しく失望落膽すべきに非ず、人類は人類自らの運命を信じこれを開拓し得る能力あることを信じて、理想に向て努力すべきは云ふまでもなく、少くとも、差し當り目前の急を救ふだけの處置は取らなければならぬ、殊に我が日本の如く人口增加の率の、他國に比較して著しく大なる處に在ては、速かに其の對策を講ずべきこと云ふまでもない。さればこそ、今日我が國に於て、人口增加と食糧問題とは、沸くが如くに論議せられて居るのであるが、私は眼界を轉換して、增加する人口の質の上よりして、人口增加の現象を觀察して見やうと思ふのである。

民族品質の低下

人口增加は、單純にそれだけの數の增加として、一般に取扱はれて居る、單純なる數の增加としても、我が國の人口が明治以來半世紀にして二倍となり、將來は二三十年にして、更に二倍となるの趨勢を示して居ると云ふことは、容易ならぬことであるが、二倍と云ふのは、同一なるものが二倍となつたのであり、將來二倍となると云ふのではなく、品質の劣惡なる者が、二倍以上數倍增加すると云ふ事實であることを、深く考慮しなければならぬ。私は單純なる數の增加よりも、この點が民族の運命の上に恐るべき影響を有することを力說して、世の人口增加を論じ、民族の將來を憂ふる者と共に、深切なる對策を講ぜんと欲するのである。皮相なる樂天家は、人口の增加するは目出度きことではないか、民族發展の兆候であるなどと云ふのであるが、若し人口の增加が、同じ品質の人間がそれだけ增加し又は優秀なる人口の率を增加すると云ふならば眞に慶賀すべきことであること云ふまでもなきも人口增加の率以上に低劣なる人間が增加すると云ふことであれば、これを民族發展の兆と見るべきや、民族衰亡の兆と見るべきや、容易に斷定しがたき大問題であると云はなければならぬ、私は人口增加を論ずる者は、單純なる數の增加よりも、寧ろ先づ、此の人口增加に伴ふ避くべからざる悲しむべき現象に對して深甚なる考慮を拂はざるべからずと爲すものである。

人口の增加と共に、民族の品質の低下することとは、既に歐羅巴諸國に於ける顯著なる事實として、學者の定論の存する處である。民族の內容たる人口中、優秀なる分子の增加と劣等なる分子の增加とが、略ぼ同率であつても、優秀なる分子はその數極めて少數であるのであるから、人口が著しく增加すれば、その民族は既に全體として品質を低下するのである。然るに、事實に於ては、何の民族に在りても、常に優秀なる分子の增加率は極めて低く、殆んど計算に入るべからざる程度であつて、劣等なる分子の增加は、その率極めて高く、人口の增加と云へば殆んど悉く劣等なる分子の增加であると見ていい位であるの

である。此は古代の希臘羅馬の衰亡を說く者の、既に皆一致せる處であり、近來の人口增加の趨勢に於ける、歐羅巴にあらはれたる最も顯著なる現象として、人皆認むる處である。羅馬は人の缺乏に依りて亡びたるに非ず、人多きに依りて亡びたりと云ふ、有名なる羅馬衰亡の原因に對する斷案は、既に人口に膾炙する處、現代の歐羅巴の都市に於て、人の容貌の觀察が、之を五十年前に比して一變せりと云はれ、解剖學上人の頭骨を檢査して、歐羅巴の優良なるタイプは既に悉く滅失せりとまでに云はれて居る。されば人口增加は、必然に免るべからざる結果として、民族の品質の低下を伴ふものであることを承認しなければならぬ。

知力及び道德上の素質に於て優秀なる者が蕃殖力弱きことは、一般に認められて居る事實である、謹愼克己の結果子を生むこと少きのみならず、體質上多產ならざるものの如くである、而して、遺傳的に優秀なる天性を有する者のみならず、修養に依りて知能德性の優秀を致せる者もまた少產なるは事實である、殊に醫學者が知力道德の優秀なる者のみでなく、體質の强健なる者も、亦著しく少產なることを認めて居るのである。優秀なる人間は子を生むこと少きばかりでなく、概して晩婚であり、近來益々晩婚の傾向を增して居る、獨身者も殖えて居る、婦人の獨立など云ふことの唱えらるると共に、優秀なる婦人にして遂に結婚せざる者は著しく增加して來た、反之、劣等者は性交に對して不謹愼であり、早婚であり、結婚外にも子を生むのである、されば體質の虛弱なる者、知力劣れる者、道德上の素質惡しき者が、多數の子を生むのであつて、人口增加に依て民族の內容と品質は根柢的に惡化するのを自然の事實とするのである、而して、此の趨勢はかくの如くして、幾何學級數的に加速度を以て進むのである、生れたる多數の子は益々墮落し、父よりも一層子を生むことを放漫となるのである。私生子の增加はかゝる現象のあらはれたる一兆候である。

たゞにかくの如くなるのみならず、優秀なる人間は、早くその生命をたゝふ者が多いのである、優秀なる人間の比較的短命なることは統計的には未だ立證し得ざるも、普通に人の認むる處である、優秀なる者は、社會に於て最も多くその能力を使役せられ、その精力を搾取せられ、最も危險なる環境に置かるるのである、生物進化論の適者生存の原理は人間社會には行はれず、劣者却て生き殘ると說く學者も近來少からぬ、生物學上の適者と云ふのは優秀者と云ふとであるとすべきや否やは問題であり、この事實を見て生物進化の原理は人間社會に行はれぬとは斷定すべからざるも、優秀なる者が、社會に於て多く死亡の危險に置かるるのは疑なき事實である、戰爭が民族中の優秀なる者を殺戮し、劣弱なる者を生き殘らしむると云ふことは、古來戰爭が單に人を殺すと云ふ以上に、人類に取りて恐るべき不幸なりとして人の說く處であるが、ただ戰爭の場合のみならず、平時に於ても、身心を消磨し、危險に曝露せらるるのである、優秀者は或は政治家となり、學者となり、技術家となりて、心身を疲勞し、精力を消耗して居る、勞働者として、優秀なる者は最も多く働かしめらるるのである、各種の娛樂遊戲の如きも、心身の疲勞を回復すべき必要ある優秀者はこれを享樂することを得ず、却て劣等者が、これに耽溺して居る、遠く野蠻未開の地に到りて、富源を發見し、これを開拓するの冒險を敢てする者

は、また優秀者である、飛行機を操縦して、人類の福祉を增進せんが爲めに身命を賭する者も、また優秀者である、凡て優秀者は劣惡者を保護するが爲めに難局に當るのであり、かくて優秀者は漸く死滅減少し、劣等者が急劇に增加し、人をして文明の進歩とは人間の素質の墮落なりといはしむる程に、全民族全人類の品質は時と共に低下し行くのである。

民族の品質が、人口增加の必然的結果として急速力に低下すると云ふの現象をばその原因を分類し、科學的に之を論證することは、一般讀者を目的とする此の小論文に於ては省略するが、かゝる科學的の論證を試みずとも、我が日本民族が人口の非常なる增加に伴ひ、著しくその品質を低下せることは、普通の觀察者の目にも明瞭に認め得る現象であらうと思ふ、人口增加の率よりも遙かに高度に於て、犯罪人、不具者、精神病者、白痴各種の慢性病者、低能兒、不良少年等の增加せる事實を一々列擧するまでもなく、日本民族なるものが、全體として漸次劣惡化しつゝあることは、一種の尙古論者の如く、現代を澆季なりとして慨嘆せざるも何人も認めなければならぬ、平明なる現象である。

私は試驗難入學難と云ふことは、此の現象の一兆候としてあらはれたるものであると思ふのである、人口が單純に增加したと云ふだけならば、學校の設備と、職業の增加と、自然に之に伴ひ、必ずしも異常なる病的なる試驗難を惹起することはなき筈である、これ私が試驗難をこの悲しむべき憂ふべき現象の最も適切に顯露せられたるものとして取扱はんとする所以である。

病的人口增加

明治以後人口が急劇に增加したのは、大體世界の大勢に伴ふものであるが、日本特有の事情もまた存するのである、而して、これ等の事情原因が、人口增加率をして、日本に於て異常に高からしめ、兼ねて增加する人口を殊更らに劣惡ならしめた。德川時代に於ては、日本の人口は大體に於て增加しなかつたのである、三百年間大抵一樣であつた、これ士族に在りては祿の世襲の關係上當然なることであり、農工商の階級に在りても、完全に土着して居るが爲めに、家族の數を不規律に增加することが不能であつたからである。然るに明治維新は百物を破壞一新すると共に、この社會組織をも全然轉覆したのである、武士は祿から離れ、町人百姓は家田地から離れ、全國の民衆は蜂の巣をついた樣に四散してしまつた、人は皆自ら働いて食つて行かなければならぬやうになつたと共に、誰れでも、腕一本で食つて行けるやうになつた、食ふだけではなく、書生が參議となり大臣となり、天秤棒一本で巨萬の富を成す者も輩出した、制度上四民平等となつたばかりでなく社會的に四民平等となつてしまつた、(西洋では、制度上の平等から社會上の平等になるまでには相當の年月がかかつて居る)、生存競爭は無制限に行はるるに至つた、義務教育の制度が早く立てられて、何人の子も文字を讀むことが出來るやうになり、中學が出來、大學が出來、私立の大學も出來、長男ばかりでなく、次男でも、三男でも、學校を卒業さへすれば立派に生活して行けるやうになつた、貧乏士族は借金しても子供を學校に入れた、それが割りのいい投資であつた、商人も農

家も、惣領は家業を繼ぐとしても、次男三男は皆學校に出した、立派な官吏となり勤め人となつて歸て來る、姉が藝者になつて弟を大學に入れたと云ふ話もあり、車夫の子が博士になつたのも珍らしくない、こうなれば子は生み放題である、少しも心配することは無い、七人九人と云ふ子供のある家族は當り前になつた、かくの如くにして從來の秩序と組織とをひつくりかへして、四散せる民衆は、何の顧慮する處もなく、人口を增加したのである。

これのみではなく、かゝる事情の場所に、西洋文明殊に機械工業が潮の如く流れこんで來た、人類平等の思想が、人口增加の大原因であると說いた西洋の學者もあるが、この平等の思想が、殊に低級なる意味に於て、日本人を支配した、人の質を顧みず量のみに着眼するに於ては、人口は無規律に增加せざるを得ぬ、何人も子を生む正當の權利ありと云ふは、現代人の一大迷想であると云つた人があるが、果して然るや否やは別として、事實はその通りに行はれた。早く義務敎育の制度が採用せられ、平等なる自由敎育が行はれた。交通運輸の便が開けて、全國は往來自由となつた、職業の撰擇も、住所の撰擇も、結婚も全然自由になつた、人間到る處靑山あり、空氣のある處ならば、何處までも行つた、內緣の妻と云ふ奇妙なる現象も生じた、人口の際限なく增加せる、而して、その品質の急劇に墮落せるは、當然の結果である。

機械工業は人間その者を墮落せしめた、人間は機械を使ふ者ではなく、機械の奴隸となつてしまつた、知力も技能も、天才も熟練も、凡て之を必要とせざる、人間としての價値なき、何人も皆平等なる、頭數を以て計算せらるる牛馬と化し去つたのである、ひとり我が國のみならず、諸國皆機械工業の發達に依りて、人口の放漫なる增加を來たし、人の所謂る「量の時代」を現出して、人間の價値はゼロとなり、民族は貧乏なる人群と化し、民族全體の品質は極度に低下したのであり、現代の社會問題は一に此の一點に集中するに至つたのであるが、我が國に於ては維新以前と以後との變化の突然にして、全然その聯絡を斷絕し、極めて急劇に工業の日本を現出し、所謂る長足の進步を遂げ、舊日本の夢にも知らざる別個の世界と變はり果てたる結果として人口の增加もその品質の墮落も、その病的なる程度と性質とに於て、世界無比の現象を呈して居るのである、これ世界共通の現象なりと雖も、農民は皆田園を捨てゝ工業に集中した、次男三男四男五男、何人子供が生れても、腕一本で食つて行けるのである、長男までも土地を離れて都會に押し寄せた、如何に人間の價値が劣等なるも、手足さへ具へて居れば、立派に同等の賃銀が貰へるのである、殊に東洋人は一般に貧乏を餘り苦にしない性質を持つて居る、食つて行けさへすれば滿足して居る、或は食へずとも何とかやつて行くのである、今日不景氣と云ひ、失業の極めて多きと云ひ、その爲めに勞働者の生活程度は如何にも下等であるのであるが、それでも朝鮮人がどん〳〵流れ込んで來るのはこれが爲めである、人口が一年百萬人增加し、貧乏人は貧乏の極度に在ると云ふのに、外から勞働者が盛んにはいつて來ると云ふことは、世界無比の不思議なる現象であつて、日本人は、それほど貧乏生活に平氣であるのである、或は貧乏もこれ程になれば、これを感覺することが鈍ぶくなるのであらうか、兎に角、それ程までに、不しだ

らに人口は増加し、その品質は下落するのである。

日本の人口は五十年間に二倍し、將來二三十年にして更らに二倍すると云ふがそれは決して、日本民族がその儘に、それだけ増加するのではない、同じ内容品質の日本人が倍加するのではない、まして優秀なる日本人が、増加するのではなく、優秀なる日本人は、だん／＼減ずるのである、人口が殖えれば結構ではないか、これ民族發展の兆として目出度きことではないかと云ひ居るわけには行かぬのである、人口増加して、國亡ぶると云ふことは不思議な次第ではあるけれども、古來不動の事實である、目前に顯著なる事實である、殊にその病的なる、我が國現時の社會には、幾多の悲しむべき現象が續出して居る、今日の民族的不幸、將來の暗澹たる運命、皆これに原因するとも考へらるる、道德の頽廢風俗の紊亂、皆病的なる人口増加の兆候と思はれざるはない。

しかし、私はこれ以上議論を發展することは、今度は止めて置く。而して、この病的なる人口増加と、民族の品質の低下が、試驗難入學難と云ふ現象にあらはれたる方面のみを、少しく考へて見やうと思ふ。

受驗難の眞相

方今大學專門學校程度の學生總數約十萬人、中等學校程度の學生總數約二百萬人に達して居る、その他陸海軍の學校特殊の學校を加ふれば、餘程の數に上るであらう、邦家文運の盛なる、國民向學の志の起れる實に慶賀すべしと云はなければならぬ、然れども、如何にして學校にかくも多數の青年が殺到するかと云ふことを考へて見れば、皆これ職業を得んが爲めである、本より職業を得んが爲めに學校に入るのは惡るい事ではなく、專門の諸學校の如きは、職業教育を目的とするものであることは云ふまでも無い、然れども、中學校に入る者も、皆職業の目的の爲めにするのであつて、人格を陶冶し、品質高き國民たるの素養を得んと志すが如き者は、全く無いと云つていい、職業と云つても、師範學校に入る者の如きは、教育と云ふが如き、高尚なる事業に一身を獻げんことを志すのではなく、唯だ衣食の生活の爲めの職業としてこれを撰ぶに過ぎぬ、その他の職業と雖も、本來ならば、職業なるものは、衣食の生活の爲めのものではなく、社會國家に一身の能力を奉仕貢獻することを目的とするものでなければならぬが、今日の物質萬能の世の中では、全然衣食の爲めにするものとせられて居る、陸海軍の學校に入るも、また單に生活の職業として、之を撰ぶのではないかと思はるる者が多い、大學は學術の蘊奥を究むる處であつて、官立私立を問はず、一國文明の發展に一身を捧げんことを志す者の入るべき處であるにも拘らず、これまた殆んど凡て職業の爲めの學生を以て充滿して居る、一定の專門學科を撰ぶのは、その如何に國家社會に有用なるやに在らず、自己の天性能力に適するや否やをも顧みず、主として就職の難易、待遇の良否を標準としてこれを決するを通常として居る、高等の學校に入るのは、それだけ多くの收入ある職業に就き得ると云ふだけの考慮に依るのである、一と通りの生活にて滿足し、又は滿足する外なき者は中學校で止め、一層贅澤を爲さんと思ひ、それだけの學資ある者は、大學まで行くのである、學校に入るは、工場に行

くと異る處は無い、親に資力無き者は工場に行き、資力ある者は學校に入るだけの差である、何人子供があつても、工場にやるか、學校に入れるかすれば、どうにか食つて行けるのである、かくて全日本、勞働者と學生との群と化してしまつた、工場と學校とは多量に增加し、品質の低下せる人々の集中する處となつたのである。

學校に入る者は、たゞ一に衣食の職業を目的とするばかりでなく、樂に食つて行かうと云ふことが、その主たる有力なる動機である、この點に於ては、工場よりも遙かに下等である、文明の進步（？）と共に、人口增加と共に、出來るだけ働かずに、出來るだけ贅澤な生活をしやうとする者が、人口增加の率以上に增加する現象は、歐羅巴に於て夙に認められ、時代の悲しむべき病弊の一とせられて居るのであるが、我が國の現狀もその通りである、所謂る自由職業に從事する者が非常に增加した、自由職業が惡るいと云ふのでないが、フランス、アメリカなどに於て、その過多に苦んで居るが如く、例之辯護士が現在日本に約六千人居るのは實際の必要以上であらうと思ふ、小說家俳優音樂者等の如き職業に從事する者が非常に殖えたことは何人にも感ぜらるることである、新聞記者、小官吏、銀行會社の書記などに志ざす青年が著しく增加した、何もそれ等を惡るい職業であると云ふのではないが、その大多數は樂に暮らして行くことを目的とするものなることを云ふのである、されば勞働者と雖も、資力無き者と雖も、どうにかして子供を工場にやるよりも、學校に入れたいと考へるに至つた、工場と學校とを行きつ戻りつする青年も少からず居る、なるべくならばホワイトシャツを着る生活をしたいと云ふのである、近來諸國に勞働者の內から、勞働運動者なる者が生じた、ホワイトシャツを着て働かずに食て行ける、これほど旨い職業は無いのである、モダンボオイとかモダンガアルとか云ふ者の續出するのも、惰民が如何に增加しつつあるかの一兆候であるに過ぎぬ、婦人に關する方面は、本論文ではまた說かぬことにしたのであるが、職業婦人なる者も、主としてなるべく樂に食て行かう、出來るならば贅澤もしやうと云ふのがその動機である、その最も極端なるものは賣笑婦である、賣笑婦はどこの國でも、何時でも、人口增加に伴ひ、その率以上に增加するのである。私は最後に、樂に食つて行きたいと云ふことを目的として撰擇せらるる職業の內に教師を擧げなければならぬことを悲しむ、殊に中等學校の教師がそうである、直言することを許さるるならば、中等學校の教師は現在の我が國に於ける、所謂る知識階級中、最も品質の劣れる者であらう、中等教員の品質の劣惡なる原因は一にして足らず、今これを論ぜんとは思はぬが、兎に角、初めより怠惰を目的としてこの職業を撰べる教師が、怠惰を目的として蝟集し來る生徒を教へて居るのは、全國あらゆる學校の實狀である。

かくの如き動機、かくの如き目的を以て中等以上の學校に入り來る學生であるから、彼等はたゞ卒業さへすればいいのである、學問をすることが目的ではない、卒業免狀を目がけてたゞ機械的に授業を受けて居るのである、されば課業が樂なれば樂なるほどいい、若し一回も授業を受けずに免狀が貰へるものならば、最も結構とするのである、試驗はなるべくならば無い方が望ましい、あつても形式だけの、極めて簡易なるを喜ぶ、知識を得人格を磨き能力を發達させ、以て國家社會に

貢献しやうと云ふのでないから、人體解剖を知らずして醫者となり得、形だけの試験を通つて辯護士になれるなら、それを最も熱望するのである、初めから一生怠惰で暮らさうと云ふ目的を以て學校に入つて來たのであるから、在學中あらゆる方法を盡くして、怠惰に徹底せんとする、これが現在我が國の學生なる者である、教師も元來怠惰を目的とする者であるから、別にそれほど氣にもかけぬ。入學もなるべくならば無試験なるを望む、試験をしても、なるべく形式だけにして貰ひたいのである、一年に百萬人宛増加する人口が、而して、その品質は急激に低下しつつある人口が、食はんが爲めの職業を得んが爲めに、而して殊に樂をして食はんことを目的として、怠惰を目的として、怠惰にして卒業することを目的として、學校の門に蝟集潮來するのであるこれ即ち現下の入學難受験難なる現象の眞相である。

勉強せずして、試験を通過しやうとする者に取つては、試験は慥かに地獄である、能力なくして學校に入らんとするは、駱駝が針の孔を通らんとするよりも、無理なる願である、父兄もその子供の低能にして不勉強なることを知りつつ、生んだ子ならば、食ふだけのことはしてやらなければならぬとして、どうしても學校に入れて呉れと云ひ、この無理なる願を通さんとして、試験は地獄だと云ふのである。誠に虫のいい話と云はなければならぬ、子供の低能にして不勉強なるを知つて居るならば、工場に送つたらいいのであるが、それは出來ぬ、樂をしながら生活して行けるやうにしたいと云ふのである、この働かずして食はんとする品質劣等なる群衆が學校の門に殺到して、自ら反省することを知らず、反省するだけの思慮能力すらも失つて、試験は地獄であると罵聲を發して泣き叫ぶのである、これに對して當局者は目前の對應策を講ぜなければならない、然れども、この現象たる、更に深刻なる民族の運命を物語るものなることを知らなければならぬ。

民族的チレンマ

入學難又は試験難なるものが、人口増加及び必然之れに伴ふ民族の品質の低下、殊にその我が國現代に於ける病的發展の最も適切に暴露せる一兆候なりとすれば、我が國民は如何にしてこれを救濟すべきや策の出る處を知らざる一大難問に逢着せるものとして、長大息を發せざるを得ぬのである。學校を増設して、悉くこの品質低下せる人口を收容しても、結局學校を卒業して、怠惰を目的として且つ素質の劣悪なる増加して止まざる人口をこなすことは出來ぬ、工場からも學校からも失業者の群を成して出て來るばかりである、然らば、素質劣悪にして不勉強なる者は學校に入るべき者ではないとして、學校を相當な數に制限し、入學試験を嚴重にして、これを學校から驅逐すべきやと云ふに、彼等はさなきだに劣等なる者共である、これに教育を施さざるならば、一層墮落するばかりである、而かも、彼等は筋肉の勞働にも適せざる者である、國家としてこれを教育したいと云ふことは出來ぬ、さすれば民族の品質は愈々低下するばかりである、到底名案は案出せられぬのであつて、民族として茲に一大チレンマに陥つたものと云はなければならぬ。これ私が、國民の一部分を殺戮する外は無いであらうと激語したる所以であつて、吾人は唯だ試験難に暴露せられたる現實を凝視して茫然たるばかりである。

人口增加に應ずる對策として論議せらるるは、移住と産兒制限とである、共に一顧妙案なるが如くに思はるるも、人口增加が單純なる數の增加に非ずして、品質の低下を伴ふものなる以上、萬全の解決策とはならぬのである。海外に移住して活動の新領土を開拓すると云ふことは、特に優秀なる心身の能力を有する者に非ざれば不可能なることである、外國も亦人口增加に苦しんで居るのである、移住國は、人口寡少なるも、我が國と同じく人口過多の國々から移住して來るのである、これと競爭して未經驗の土地に立脚地を發見し、發展を試むるは、餘程優秀なる民族に非ざれば爲し能はざる處である、我が國民が滿蒙に發展し得ざるも、一には其の素質能力の劣れるに依るのである、滿洲領有以來二十年、あれだけ有利の條件の下に於てすら、移住し來る支那人に壓倒せられて居るではないか。産兒制限と云ふことの實行可能なりや否や、又道德上人道上是認すべきことなりや、其の影響の善惡如何等の問題は暫らく論ぜぬとしても、産兒制限は決して人口の內容を優良ならしむる方法ならざることは、人の認めて居る處である、強制して産兒制限を行はしむることは、全く不可能と爲すべきのみならず、かの去勢を強制して見た處で、その效果は僅少なるものであつて、一定の犯罪人とか遺傳性病人とか云ふ者を去勢し又は結婚を禁じ得るとしても、知能道德の素質を檢査して、その劣惡なるものを去勢し又は結婚を禁ずることは出來るものではない、産兒制限の必要なる所以を宣傳して、各自謹愼して産兒制限を實行せしむるやうに仕向くべしと云ふ考は廣く行はるるも、これ決して民族の品質を優良ならしむる所以ではない、何となれば、素質の優秀なる人々は、かゝる宣傳又は注意を受けずとも、既に自ら克制して止まるべき處を知て居るのであり、劣惡なる者は、假令如何なる宣傳又は注意を受くるとも謹愼すべき所以を知らず、却て結婚外の性交を恣にして、民族の墮落を促進するのであつて、産兒制限の宣傳に依りて、民族の品質を改良すべしと云ふが如きは、全然夢の如き話であるとしなければならぬ。

民族の運命の問題

私が此の論文を起草して江湖に發表する所以は、試驗難なる一現象が、我が民族が漸くにして進退維れ谷まる窮境に陷り、遂に甚大にして劣惡なる人口を抱きて自ら亡びざるべからざるに至る、恐るべき運命の迫りつつあることを示すものなることを警告して、大に覺醒する處あり、自ら省みて、日本民族の品質を優良ならしむるに努力すべきことを勸說せんが爲めである。今日最も早く此の點に着眼して、民族の優良の爲めに最善の努力を爲さんとしつつある者は、北米合衆國である、かの移民の排斥的制限も、劣等なる人種の混交に依りて民族の品質が低下せんとするを除かんとするのである、かの禁酒は彼れ此れけちをつけんとする人もあり、我が國に之を實行すべきや否やはおのづから別に論あらんも、實に敬服すべき民族的一大英斷であつて、その目的とする處は一に民族の品質の向上にあるのである。又各州に於て優生學の敎ゆる處に從ひ各種の法制を定めて居るのも、實に思ひ切つたることであつて、これほどにアメリカ民族の子孫の爲めに顧慮し、その優秀を保持し、益〻これを向上せんことに鋭意して居るのである。私はこれを他山の石として、我が同胞が、日本民族の將來の運命の爲

めに、最も深刻に考慮しなければならぬ時が來たと思ふのである、事は決して、容易に非ず、人口増加を抑止せずして、優秀なる大民族を造り上げんとするは、上述する處に依りても、殆んど不可能に近きことを爲さんとするものなることを覺悟しなければ、而して、或は不可能に近きも、このままにして、自ら亡びるを待つことは出來ぬのである、日本民族の力量は茲に試めさるるのである、日本民族は自ら自己の運命を開展し得るや否や、今や吾人は日本人の天才と能力と、道徳と科學と、凡てこれを傾注して、解決せざるべからざる、此の大問題の前に立つて居ることを知らなければならぬ。

『試驗地獄』

山川　均

現在のわが國は、あらゆる方面で地獄の光景を現はしてゐる。民衆の經濟生活は、文字通りに地獄の奈落にある。この灼熱の地獄に甘露の雨を降らしてくれる約束だつた政友會政府のいはゆる積極政策なるものも、いよいよ懷勘定の一段となつて、どうやら怪しくなつてきた。日本は財政的にも火の車であつて、この火の車は、そもそも地獄の一光景にほかならぬ。この光景の間に、特殊會社や特殊銀行や特殊利權をつかまへ浮び上がららとする政界の亡者がぼつぼつしゆん動する。日本の政治もまさしく地獄である。この地獄の光景を一そう凄愴暗たんたるものたらしめたのが、いはゆる『試驗地獄』であつた。

昔は男の子が年頃になると、徴兵檢査といふ問題に脅やかされた。ところが今日は、丁年を待たないで入學試驗の脅迫に當面する。小學校の四年か五年になると、ぼつぼつ試驗の準備教育なるものが始められる。先づ親たちが血眼になる。先生も一生懸命である。でなくとも薄給をもつて過度の勞働を強いられ、すでに青ざめてゐる若い先生たちが、正規の時間外の殘業として、課外の仕事を強いられる。中學校への入學率によつて、直ちに小學校の格式が決定され、親たちの信用が定められる。先生もまた血眼である。

氣の毒なのは無心の子供であるが、その子供も、いつまでも無心ではゐられない。無心の子供もやがては有心となり、意識的にこの競爭のコースを走るようになる。朝は正規の始業の一時間も前から、古本の夜店が開かれるほど――と多少の誇張をもつて言ひ得るほどの、嵩ばつた教科書を詰めこんだ包みを提げて――これは文字通りの重荷である――學校にゆき薄暗くなるまで『受驗準備』を頭に詰めこんで歸つてくる。それから復習に取りかゝる。

『どうも困つたものだ！』と親たちもかう云ふし、先生たちもそう云つてゐる。『何とかして買はなきやあ』と親たちも云つてゐれば、先生も考へてゐる。『これぢや第一、子供がたまらない』親たちもそう考へてゐるし、先生もそう思ふてゐる。それでゐて何ともならないばかりか年々ひどくなつてゆく。この懊悩が、『試驗地獄』といふ、ふさわしい言葉に結晶したのである。

○

これは一たい誰れの罪だらう。犯人の見附からぬことが、この問題を今日まで、未解決のまゝで殘して來た理由にちがひない。

しかるにこの犯人は、最近、文部省の手によつて檢擧された。この犯人の名が『試驗』であつた。この犯人を處刑さへすれば、親たちも先生も、なかんづく氣の毒な幾百萬の子供たちが『試驗地獄』から救はれる。そうしてのびのびとした子供らしい子供の國が再建される。これが文部省の試驗制度改正案なのである。

試驗制度が、教育上の弊害であることはいふまでもないことであつて、私もまた、試驗廢止の熱心な賛成者の一人である。しかしこの犯人――試驗――の背後には、果して有力な教唆者はなかつたか？　これが問題であるばかりでなく、實は眞實の問題なのである。

入學試驗は、一たい何のために必要だつたのか？　それは主として入學者を制限するためであつた。

しかるに實際には、入學者は試驗によつて制限せられる前に、すでに制限せられてゐる。今日、義務教育以上の教育は、賣り物の性質をもつてゐる。それは形式の上ではすべての人々に門戸を開放して、これを享有する均等の機會を與へてゐるかのようではあるが、實際にこれを享有することのできるのは、これを買ふことのできる人々だけである。そこで今日の入學志望者なるものは、教育に對する實際の需要者の何分の一、または何十分の一にしか相當せぬ數字であつて、それは教育に對して購買力のある需要――いはゆる有効な需要――の分量にすぎないものである。

かように教育に對する需要は、その商品的な性質の結果として、自働的に制限せられてゐるのであつて、この制限せられた需要を、さらにもう一度制限する裝置が、即ち入學試驗であつた。

この事實を考へたなら、わが國における教育の供給が、需要に對して、いかに不足してゐるかを想像することができる。教育に對する實際の需要者のうちの僅かに幾パーセントかゞ、有効需要――入學志願者――となつて現はれる。この有効需要者のまた僅かに幾パーセントかゞ、實際に教育を買ふことができる。食糧配給所の前に行列を作つてゐる飢ゑたる群衆のうちの僅かに何人かゞ、パンを買ふことができる。これはまさしく教育饑饉の狀態である。これが試驗を絶對に必要なものとする。

○

教育に對する需要は、必然に、年々増加する。これは國民の生活標準の向上――美しい言葉でいへば『文化』の發達――の結果だけを考へても當然なことであるが、現在の狀態は、國家がこの國民の要求を

滿たして居らぬといふことを意味してゐる。たゞに要求を滿たして居らぬばかりでなく、この要求を、國家がどれだけ眞面目に受け取つてゐるか、といふことからしてが問題である。

これは國家の歳出が、いろ〳〵の費目の間に、いかに振り向けられてゐるかといふ事實の上にも反映してゐるのであつて、國家の歳出は國民の必要の增大につれて年々增加してゐるのであるが（歳出が、國民の必要に應じて增減してゐるかどうかは、疑をさしはさむ餘地のないほどに大きな疑問であるが！）この增大してゐる國民の要求のうちで、教育に對する要求が、歷代の政府によつていかに取扱はれてきたかといふことは、豫算の變遷を見れば明らかである。近年の豫算のうちでも、軍事費が歳出の三〇％を占領してゐるに反し、教育費は僅かに八％であつて、陸海軍費の僅かに三〇％にすぎぬ。

ところが實際には、教育に對する需要は、文化的な要求の自然の增大以上の割合で增大してゐるのであつて、今日、教育は知識に對する要求として需要せられてゐるばかりでなく、よりよき生活の方法──職業を得る機會──に對する競爭に優越的な立場を占める條件として、需要せられてゐるのであつて、この事實は教育に對する需要を一そう激增させ、入學の競爭を一そう慘憺なるものにしてゐるのである。

そこでこの事實──教育に對する需要と供給の關係──が存してゐる限りは、入學者を制限する裝置としての入學試驗は、絕對に必要であつて、その廢止は、絕對に不可能だといふことは二二が四となることよりも、一そう明白なことだと云はなければならぬ。したがつて或る形式の試驗を廢止すれば、その跡には他の形態をとつて試驗が現はれる。一切の形式の試驗と名づけられるものを撤廢しても、尙ほ試驗と名づけられぬ試驗が殘るにちがひない。

この新しい形態の試驗が、文部省案においては、『小學校長の申告』なのである。

○

從來の舊式な試驗に代へるにこの新式試驗をもつてすることに對する第一の非難は、從來の試驗には、忍ぶべからざる弊害があつたにもかゝはらず、そして實際には僥倖の要素を多分に含んでゐたにもかゝはらず、なほかつ少なくとも、形式上では、實力の競爭であつた。しかるにこの新式の試驗は、實力の競爭に代へるに情實の競爭をもつてするものだ、といふ非難であつた。であるからこの反對は、試驗の撤廢に對する反對ではなくて、文部省案が試驗を撤廢して居らぬこと、即ち新しい形式の試驗をもつて代置したにすぎないこと、この新式の試驗の不合理に對する反對を意味してゐる。

內申制度を取つたなら、情實上の弊害が起こるだらうか？　起こるだらう、と答へることは、教育者諸君に對する恐らくは無上の侮辱であらうと思ふから、私はこの種の『言辭を弄するもの』の一人となることを差控へようと思ふ。けれどもこの申告制度が實施せられたなら、多かれ少なかれ、教育者は種々なる誘惑にさらされるといふのは、爭ふことのできない事實であつて、そのために教育者は、教育のために努力するほかに、この種の誘惑と戰ふ餘分の努力を課せられる。これは一點の疑ひのないことであらうと同時に、教育者諸君の餘暇を少しも

傷づけるものではない。競爭のある限りは、何らかの形で應援が行はれる。まさかに太皷や石油罐を叩くことが、紳士協約によつてとめられゝば、應援歌をどなる。應援歌を禁ずれば、拍手をするだらう。拍手ができなければ、旗を振る。その旗まで取り上げてしまつたなら、恐らく目くばせで應援する。情實的誘惑の起こるべき根原を殘しておいて、情實的誘惑だけを鎭壓すれば、誘惑はますますデリケートなものとなることは疑ひがない。

最近、東京市立小學校長會では、この點について、『試驗制度改正案に反對する理由として、小學校長の提出する成績證明に對し往々不信の言辭を弄するものあり、かくの如きは徒らに小學校教育の全般にわたり疑惑の念を懷かしめ、教育の權威を傷づけ、憂慮すべき危局をはいたいするおそれなしとせず、吾人はこの誤れる浮說妄論を打破し、小學校長の證明はあくまでも公明嚴正にして絕對に信憑するに足るべきものなることを聲明し、以て教育の神聖を確保せんことを期す』といふ聲明書を發したといふことである。いふまでもなく、この聲明書は、小學校長の證明を、絕對に公明嚴正なるものとすることに有らゆる努力を拂ひ、これによつて教育の神聖を確保せんことを期したのではなくて、『絕對に……ものなること』を聲明したのである！

從來の試驗制度のもとにおいては、試驗が兒童の一生を決定したのである。申告制度——この新しい試驗制度——の下においては、小學校長の『申告』が、兒童の一生の運命を決定するのである。私はこの餘りにも重大な——或は絕大な——責任を負はしめられようとする教育者諸君を氣の毒だと思ふ。

○

入學試驗の廢止には、私は熱心に贊成する。けれども入學試驗を廢止する以上は、徹底的に廢止すべきである。しかし教育に對する需要が供給を超過してゐる以上は、何らかの方法で入學者の制限をしなければならぬ。たゞこの制限は、當然に、試驗の性質を帶びることの最も少ない方法を選ぶべきである。この意味で、私は抽籤が最も妥當な方法だと思ふ。

抽籤は、小學以上の教育を受ける機會を、偶然と僥倖で定めるものだといふ非難がある。たしかにその短所がある。けれどもこの種の非難は、今日、教育の機會が、社會全體の人物經濟の上から見て、小學教育以上の教育を受けるに最も適した性能の兒童に與へられてゐるものである、といふ事實を前提としてのみ、初めて意義ある非難である。しかるに實際においては、教育の機會は、性能の上からの適者どころか、教育を受ける熱望に準じてさへも分配せられて居らぬ。教育に對する事實上の需要者の、僅かに幾パーセントかゞ有效需要者だといふことが、この事實を充分に證據だてゝゐる。かように教育が購買力ある者のみに供給せられるといふ商品的性質を備へてゐる限りは、偶然と僥倖によつてこの購買力のある家庭に生まれたものゝみが、學校の門前に集るのであつて、そのうちの幾人かゞ偶然と僥倖による入門を許されたからといつて、今更らしく偶然僥倖呼ばはりをするのは滑稽にあらざれば僞善以外の何ものでもないのである。

上級の教育を受けるに適した性能、または希望を唯一の標準として

すべての兒童に、この標準に應じた程度と分量との教育を受ける機會を均等に開くこと──即ち教育の機會の分配を合理化し科學的にすること、教育の機會に對する偶然や僥倖の要素を徹底的に除去すること──は、社會全體の發達と福祉とのために、最も望ましいことである。けれどもこれは現在の教育制度の原則を、根本的に革命することを意味して居り、それはまた現在の社會制度を根本的に一變することによつてゞなければ、考へることさへもできぬ。この事實に目ざしてゐる人々の、偶然や僥倖の非難には、何らの力もないのである。

入學者の制限が不可避である限りは、これを抽籤によつて行ふと同時に、教育者は兒童の進むべき學校の選擇や、上級の學校に進むべきか否かについて、親たちのために、親切忠實な助言者となることが必要である。

それと同時に、全國に亘つて思ひ切つて學校の増設を行ふこと。その財源は、軍事費の徹底的な削減によるほか、絶對に道がない。

學校卒業者に對する一切の特典特權を、徹底的に廢止することの必要は、いふまでもない。

○

かりに學校の増設によつて、入學志望者のすべてを收容し得るにいたつたとしても、教育の機會が制限せられてゐるといふ根本問題──これが入學試驗問題の底に横はつてゐる、根本的な問題なのである──は、幾分解決されたといふだけであつて、この解決は、學校の門前に來る以前に、自働的に行はれる制限には、全然觸れないでゐる。この問題も、教育が商品原則で供給せられる現在の制度の下では、滿足に解決せられぬことはむろんであるが、或る程度にこれを緩和することさへも、教育界の問題とならぬことは寧ろ不思議といふべきである。學校は増設せられても、その門戸は、依然として無産者の子弟には固く閉ざゝれてゐる。少なくとも無産者の子弟のうちで、小學校において一定の標準以上の成績を示してゐるものは、その志望に應じて國費をもつて上級學校に進ましめる制度を設けねばならぬ。また無産者の子弟に就學の機會を開く一つの方法として、東京市小學校長會の決議した夜間中學校、並びに各種の夜間技術學校の公設が必要だと思ふ。

しかしながら無産者にとつて教育が制限せられてゐることは、たゞに義務教育以上の場合のみではない。それは義務教育の場合においてさへも、單に登校してゐるといふ以外の點で、甚しく制限せられてゐる。この制限を徹廢せぬまでも緩和するために、小學兒童に對して、國家が晝食を支給すること、國家が一切の學用品を支給することは絶對に必要である。この支給はすべての學童に均しく與へらるべきものであつて、その財源は、當然有産者に對する新税、または所得税の累進賦課によるべきものである。

○

兒童は試驗の地獄から救ふばかりでなく、一般に、學科の地獄から救はねばならぬ。それと同時に、小學教育（中學もまた）の効果を倍加する必要がある。そのためには、無益の學課を削除し、或は時間を

傷づけるものではない。競爭のある限りは、何らかの形で應援が行はれる。まさかに太皷や石油罐を叩くことか、紳士協約によつてとめられゝば、應援歌をどなる。應援歌を禁ずれば、拍手をするだらう。拍手ができなければ、旗を振る。その旗まで取り上げてしまつたなら、恐らく目くばせで應援する。情實的誘惑の起こるべき根原を殘しておいて、情實的誘惑だけを鎭壓すれば、誘惑はますますデリケートなものとなることは疑ひがない。

最近、東京市立小學校長會では、この點について、『試驗制度改正案に反對する理由として、小學校長の提出する成績證明に對し往々不信の言辭を弄するものあり、かくの如きは徒らに小學校教育の全般にわたり疑惑の念を懷かしめ、教育の權威を傷づけ、憂慮すべき危局をはいたいするおそれなしとせず、吾人はこの誤れる浮說妄論を打破し、小學校長の證明はあくまでも公明嚴正にして絕對に信憑するに足るべきものなることを聲明し、以て教育の神聖を確保せんことを期す』といふ聲明書を發したといふことである。いふまでもなく、この聲明書は、小學校長の證明を、絕對に公明嚴正なるものとすることに有らゆる努力を拂ひ、これによつて教育の神聖を確保せんことを期したのではなくて、『絕對に』『……ものなること』を聲明したのである！

從來の試驗制度のもとにおいては、試驗が兒童の一生を決定したのである。申告制度――この新しい試驗制度――の下においては、小學校長の『申告』が、兒童の一生の運命を決定するのである。私はこの餘りにも重大な――或は絕大な――責任を負はしめられようとする教育者諸君を氣の毒だと思ふ。

○

入學試驗の廢止には、私は熱心に贊成する。けれども入學試驗を廢止する以上は、徹底的に廢止すべきである。しかし教育に對する需要が供給を超過してゐる以上は、何らかの方法で入學者の制限をしなければならぬ。たゞこの制限は、當然に、試驗の性質を帶びることの最も少ない方法を選ぶべきである。この意味で、私は抽籤が最も妥當な方法だと思ふ。

抽籤は、小學以上の教育を受ける機會を、偶然と僥倖で定めるものだといふ非難がある。たしかにその短所がある。けれどもこの種の非難は、今日、教育の機會が、社會全體の人物經濟の上から見て、小學教育以上の教育を受けるに最も適した性能の兒童に與へられてゐるものである、といふ事實を前提としてのみ、初めて意義ある非難である。しかるに實際においては、教育の機會は、性能の上からの適者どころか、教育を受ける熱望に準じてさへも分配せられて居らぬ。教育に對する事實上の需要者の、僅かに幾パーセントかゞ有效需要者だといふことか――この事實を充分に證據だてゝゐる。かように教育が購買力ある者のみに供給せられるといふ商品的性質を備へてゐる限りは、偶然と僥倖によつてこの購買力のある家庭に生まれたものゝみが、學校の門前に集るのであつて、そのうちの幾人かゞ偶然と僥倖による入門を許されたからといつて、今更らしく偶然僥倖呼ばはりをするのは滑稽にあらざれば僞善以外の何ものでもないのである。

上級の教育を受けるに適した性能、または希望を唯一の標準として

すべての兒童に、この標準に應じた程度と分量との教育を受ける機會を均等に開くこと——即ち教育の機會の分配を合理化し科學的にすること、教育の機會に對する偶然や僥倖の要素を徹底的に除去すること——は、社會全體の發達と福祉とのために、最も望ましいことである。けれどもこれは現在の教育制度の原則を、根本的に革命することを意味して居り、それはまた現在の社會制度を根本的に一變することによつてゞなければ、考へることさへもできぬ。この事實に目ざしてゐる人々の、偶然や僥倖の非難には、何らの力もないのである。

入學者の制限が不可避である限りは、これを抽籤によつて行ふと同時に、教育者は兒童の進むべき學校の選擇や、上級の學校に進むべきか否かについて、親たちのために、親切忠實な助言者となることが必要である。

それと同時に、全國に亘つて思ひ切つて學校の增設を行ふこと。その財源は、軍事費の徹底的な削減によるほか、絕對に道がない。

學校卒業者に對する一切の特典特權を、徹底的に廢止することの必要は、いふまでもない。

○

かりに學校の增設によつて、入學志望者のすべてを收容し得るにいたつたとしても、教育の機會が制限せられてゐるといふ根本問題——これが入學試驗問題の底に橫はつてゐる、根本的な問題なのである——は、幾分解決されたといふだけであつて、この解決は、學校の門前に來る以前に、自働的に行はれる制限には、全然觸れないでゐる。この問題も、教育が商品原則で供給せられる現在の制度の下では、滿足に解決せられぬことはむろんであるが、或る程度にこれを緩和することさへも、教育界の問題とならぬことは寧ろ不思議といふべきである。學校は增設せられても、その門戶は、依然として無產者の子弟には固く閉ざゝれてゐる。少なくとも無產者の子弟のうちで、小學校において一定の標準以上の成績を示してゐるものは、その志望に應じて國費をもつて上級學校に進ましめる制度を設けねばならぬ。また無產者の子弟に就學の機會を開く一つの方法として、東京市小學校長會の決議した夜間中學校、並びに各種の夜間技術學校の公設が必要だと思ふ。

しかしながら無產者にとつて教育が制限せられてゐることは、たゞに義務教育以上の場合のみではない。それは義務教育の場合においてさへも、單に登校してゐるといふ以外の點で、甚しく制限せられてゐる。この制限を撤廢せぬまでも緩和するために、小學兒童に對して、國家が晝食を支給すること、國家が一切の學用品を支給することは絕對に必要である。この支給はすべての學童に均しく與へらるべきものであつて、その財源は、當然有產者に對する新稅、または富稅の累進賦課によるべきものである。

○

兒童は試驗の地獄から救ふばかりでなく、一般に、學科の地獄から救はねばならぬ。それと同時に、小學教育（中學もまた）の効果を倍加する必要がある。そのためには、無益の學課を削除し、或は時間を

減少する必要がある。小學校における毛筆の習字は、もちろん全廢すべきである（中學においては、云ふまでもない。看板書きや提灯屋の志望者は、特別な職業上の技術として學べばよい）。小學校の最初の期間だけ、鉛筆やペンの習字で澤山であつて、それ以後は實際に字を書く必要によつて、おのづから書方を學習せしむべきである。

修身もまた、學課の項目から削除すべきである。これは德育を無視するものだといふ非難に對しては、私は次の如く答へたい。學校の德育を、一週何時かの修身の時間に限定してその中に追ひこんでおくことこそ、德育を無視せぬまでも、極めて輕視し、もしくはこれを破壞してゐることを意味してゐる。德育とは、或る種の道德上の公式や、時としては固陋の偏見を注入することではなくて、兒童の人格を育て上げることなのである。それは算術や讀方と同じ立場に立つ一學課として、一週間の何時間かを要求すべきものではなくて、學校生活の全面において、教師と生徒、兒童と兒童との接觸するあらゆる機會あらゆる場面において行はるべきものである。今日の德育が、修身教科書の暗誦に終つてゐるのは、主として『修身の時間』といふものがあつて、それはやがて學校教育の德育方面を、おのづからこの『時間』のうちに限定せしめてゐるからである。（中學程度の教育では、現代語でない死語たる國文、漢文を全廢すべきである。古代語は、有益にして必要な特別の研究の題目ではあるが、普通教育の學課となるべきものではない。支那の現代語を解するに足りない漢文なるものを、支那でならば兎も角、日本の學校で教へるのは、有ゆる意味において無意義である）。

字を覺えるために非常な時間と精力とを奪はれてゐることは、わが國の教育を、他國のそれに比して遙かに能率の低いものとしてゐる重大な理由である。この點から少なくともローマ字の採用は絕對の必要である。ローマ字の採用は、決して充分なものではない。日本が世界の文化史の上に大なる貢獻をするためには、徹底的に言葉を改める必要がある。この點では、思ひ切つて私はエスペラントを採用することが最も合理であつて、これこそ『國家百年の大計』だと考へる。國語を變へる？　これは國本を忘れたものだ！　かういふ非難をする人は恐らく支那へ歸化した人だらうと思ふ。他國の國民的文字を使用せぬ人のみが、かような根據に立つて、全く國民性を持たないエスペラントの採用に反對することができる。

しかしながら實際の問題としては、人爲的に國語をかへることは至難であつて、ローマ字の採用をもつて滿足しなければならぬ。左から書く方が遙かに便利で自然なようにでき上がつてゐる支那文字の『左書き』さへも建國の精神から拒否せられてゐるわが國の現狀では、ローマ字の採用すらも、容易に望まれない。それにも拘らず、兒童を學課の地獄から救ひ出し、教育を遙かに效果あるものとするためには、文字の變更は、必要缺くべからざるプログラムの一つでなければならぬ。

アレッサンドロ・ワリニャニ師の第二回日本訪問

木下杢太郎

緒言

耶蘇會士で伊太利生れの伴天連アレッサンドロ・ワリニャニ師(Alessandro Valignani)は日本の天主教史上で重要な人物である。彼は素より基督教の弘法者であつたが、同時にまた文化傳達者の資格を有して居た。わたくしはドン・マンシオ伊東某其他三人の天正時代の遣歐青年使節たちの事蹟を研究するに附けて、この耶蘇會士に對する興味のいよいよ加はつて來るのを覺えた。彼は三回我日本の地を踏んだが、其當時は一般歴史の上からも日本文化史上からも甚だ事繁き時代であつて、群雄の割據、信長の覇業から秀吉の天下平定に至る、眞に目も眩き大戲曲の連續であつた。殊に西歐の人々に接觸する機會の多かつた九州の地に於ける事情には一種特別の興味がある。西歐の文獻からワリニャニ師の事蹟を訪ぬるのは同時にその時代の歴史に對する補遺ともなることである。

ワリニャニ師の始めて我國に渡來したのは千五百六十八年即ち永祿十一年のことである。そして主に五島で活動した。然し千五百七十一年(元龜二年)には耶蘇會の總長の指命に由り「主に捧ぐる職務上重要なる用件の爲めに」歐羅巴に召喚せられた。そして途中印度に滯留することなく、葡萄牙を經て羅馬に赴いた。その後、千五百七十五年、羅馬よりの歸途、當時エスパニヤのジエスイタ派の學府なるアルカラを通り、(日本風に算へて)當時三十三歳であつたルイス・デ・グスマン師に會つて日本の事情を傳へたことは、この有名な日本傳教史の著者の書中に記されてある。

其後ワリニャニ師は印度に於て巡察使の職に在つたが、千五百七十九年(天正七年)に至り、日本巡察使として再び日本に渡つた。その三年間の滯留は目まぐるしいほどの活動であつた。そして千五百八十二年二月(天正十年正月)には、かのドン・マンシオ等の青年を伴つて日本を去つた。

千五百九十年(天正十九年)ワリニャニ師は三たびその姿を日本に現はした。嚮きに歐羅巴に遣はされた四人の日本青年と共に陽七月二

十一日長崎に上陸したが、このたびは印度副王の使者として太閤秀吉に謁見する爲めであつた。

ワリニャニ師は千六百六年（慶長十一年）に老齢を以て支那に長逝した。わたくしはまだその纏つた傳記を見たことがない。佛國アシュメ文庫の古鈔本（49―イ―3）には「パドレ・アレッサンドロ・ワリニャニの生涯及び死」といふ一節がある。此耶蘇會士には三四の有名なる著書がある。又其手翰はアンリイ・コルヂエ氏の日本書目に引用するだけでも十餘通を數へる。遺憾ながら然しそれ等はおいそれと手に入るものではない。

わたくしは茲にワリニャニ師の第二回日本訪問の事情を記さうと思ふが、據るところは僅かにシャルルヂワ師の日本史（P. de Charlevoix Histoire et Description Generale du Japon MDCCXXXVI）クラッセエ師「日本西教史」（太政官本局翻譯本）獨譯コエリョ師書簡千五百八十二年二月十三日長崎發信のもの（Gaspar Coelio Summarium und Kurzer Bericht dvon den newerfundenen Japonischen Inseln und Königreihne…1582.Freyburg,1586）僅兩三書に過ぎない。わたくしはなほ之に日本側の文献を加へて、地名、人名、其他の事情を明にせむと欲したが、今の狀態は之を爲すに十分の便宜を有しなかつた。即ち此記錄は寧ろ文學的のものである。竝にアレッサンドロ・ワリニャニ傳の準備であり、藁本である。然しシャルルヂワ、コエリョ等の書の未だ翻譯或は紹介を見ない時に、この自家の備忘錄を發表するのも、恐らく、無用の業であるまいと信ずるのである。

わたくしは本稿で、啻に原本記事の眞僞を闡明しないのみならず、又思想的にそれ等の事實を批評しない。唯古書に傳へらるゝ出來事を、取捨し、按排して抄錄するのみである。

日本到著、ロノ津の會議

ワリニャニ師は數年來印度に於て總巡察使の職に在つたが、日本に於ける宣教師の事業及び行狀の巡察の使命を帶びて、再び日本に渡來り、千五百七十九年の始めに口ノ津に到達した。上陸後先づ聞いたのは豐後の前領主（大友宗麟）の耶蘇教に入つたと云ふことである。それで何よりも先にその國に赴かうと欲した。殊に當時日本の副管區長であつたカブラル（[illegible]）師が臼杵に耶蘇會の修道院を建てようとする企圖に助力を與へむといふ心もあつたからである。然し豐後に於ける事情は師の前にその國に行くことを許さなかつた。それ故に豫定を變じて口ノ津に止まり、凡ての耶蘇教々師たちに書を送つて此港に來集せむことを求めた。

都に在るもの、事故の爲めに來ることの出來なかつたものを除き凡ての教師たちがここに集まつた。その時日本には五十九人の教師が居たが、ワリニャニ師が會の長老アクワヰタ（Acquavita）に送つた報告書中には、彼等に就いては何等詐ふべきところを見ないと云つてゐる。そのうち二十三人はパドレであつた。彼等の或者は二年の間に七萬人の人に洗禮を與へて居る。また或者は萬難を排して修道院とセミナリオとの建設の基礎を築いてゐる。是れ等の關係からしてワリニャニ師は、今や日本に司教管區を設立することを法王廳に請願すべき時期であると感じたのである。

師はいま日本は戰爭の禍害の底に沈淪してゐるが其國民は道德性に於て英雄的の所を有する者であるを知り此國の傳道にはフランシスコシヤヰエル大師の書き遺した個條を嚴守するの必要なるを認めた。主要なる目的は殉教に走ることでなく、多くの精靈をしてクリストに赴かしむるにあると云つて人々を激勵したのであつた。そして基督教の傳道に對して障礙となるは何であるかを考究した。是等の討議は個條書にせられ、ワリニヤニ師に由つて羅馬に送られたのである。

唯この口ノ津で大討論を惹起し而も遂に結着を見なかつた問題は、傳教事業は、專ら旣に開墾せられて妨害を受けざる地域に於て一層盛ならしむべきか、乃至は從來の方針に從ひ、不斷の兵燹に荒されて信仰の根蔕の甚だ固くなり難い地方に弘通せしむべきかといふことであつた。それでこの議案は歐羅巴耶蘇會の委員會の討議を仰ぐことにした。

會議が結了して教師の大部分は各々の寺院に復歸した。唯その受持の區域には多少の變動を見た。即ちグレゴリオ・デ・セスペデス師（Gregorio de Cespedez）を一伊留滿と共に都に送り、そこでルイス・フロイス師（Luis Frois）の留守をなさしめた。尤もフロイス師も其後急ぎ都に歸つた。

ワリニヤニ師は豐後に行き、それから都に行くといふ計畫であつたが、事情の爲め、兎に角先づ有馬に行くことにしたのである。

豐後事情

然らばなぜワリニヤニ師が豐後に往くことを躊躇したかと云ふに、そこは恰も戰亂の渦中に在つたからである。

大友宗麟には三人の息があつたが、其第二子（他の二人の名は分つてゐるが、この人の名は逸したと云ふ）は其後嗣として最も適當だとせられたが、日本の習慣として長子を措いて嗣となることが出來ない。加之近親間の不和を防ぐ爲めに佛門に入らなければならなかつた。所がこの次子（日本西教史には親家を以て之に擬す）は、當時十四才であつた。耶蘇教の教師たちに慣れてその說を喜び聽き、佛教は却つて之を忌み嫌つたのである。

宗麟は臼杵に住んだ。そしてそこに美しい耶蘇教寺院を建築せしめた。その爲めに唯一城砦の在るに過ぎなかつた臼杵の地が漸く繁華な都會となつた。宗麟は師父に（カブラル師ならむ）そこに修道院とコレジオとを建てる口約をも與へてゐる。それで耶蘇寺に師父たちを尋ねる機會も多かつたであらうが、其時にはよく少い子息を伴つたのである。わかい殿が耶蘇教に歡喜したのはかう云ふわけであり、終にその宗門に歸依することを申し出たので宗麟は大に困却し、又佛教徒であつたその母は大に憤怒した。（宗麟の夫人をば教徒たちはイサベルラと呼んでゐた。）宗麟は、その子を愛して其志を容す氣があり、夫人に向つて基督教徒たらば佛徒たるよりも一層その兒に恭順たるべきを諭したが、夫人の偏執を解くことが出來なかつた。それで最後の斷案を下す前に副監督の意見を聽かうと欲したのである。

カブラル師は時に大村領に在つたが、宗麟よりの書狀が再三も來るので、已むを得ず豐後に赴いた。そして宗麟の話を聽き、その子を見ると、その決意が動かすべからざるものあるを見て、兩親に勸めて耶蘇

教に入れしめた。宗麟は之に同意した。

洗禮の日には、屋形の人々が皆その儀式に列した。宗麟自身もそれに臨席し、又多數の庶民も參會した。かくして宗麟の第二子にはセバスチアンといふ名が與へられた。宗麟はこの儀式の間には常に跪いてゐたと傳へられてゐる。西教史には「國主は猶佛教徒たりと雖も大師父の禮服を着け、聖壇の所より出づるを見る時は跪き、その儀式を行ふ間は帽を脱せり」とある。又曰く「土人の公子と共に洗禮を受くるもの亦夥多なり。」是れは、千五百七十五年（天正三年）陽曆十二月の事であり、即ちわがワリニャニ師の日本到着の四年前である。

その夜國主は師父の所の晩餐に列し且つその子と共に洗禮を受けた凡ての人々をその席に連らしめたといふ。而して宗麟の夫人は怒つて之よりその子と義絶した。

新に洗禮を受けた公子は其後極端な排佛を行つた。人々は却つて之を諫止せざるを得なかつた。

翌年カブラル師は府内の信徒の需に應じ、國主に請うて、耶蘇降誕祭の盛儀を行つた（西教史）。

セバスチアンは同臭の青年を集めて宗教結社を作つた。そして毎日曜日毎に、寺の儀式の果てたのち相集まつて研鑽した。恰も初期基督教時代に行はれた愛の會食の如くであつた。そこに於て論議せらるる事は全く教儀の問題ばかりであつたが、殊に異宗の學僧の難問に對する辯論が最も多く考究せられたのである。それより後は異宗徒は是等青年を恐れて敢へて之と討論しなかつた。

セバスチアンの洗禮以來豐後の屋形に於ける對基督教徒態度が一變した。それまではこの教を以て屋形が保護を加ふる民庶の信仰に過ぎざるものとなした。屋形の公子自ら洗禮を受けるやうになれば自ら人の考も變らざるを得なかつた。而して公子の此改宗は土佐の國主（長曾我部元親）にも深い考慮を促す原因となつた。その夫人は實に、公子の姉であつたのである。

その頃土佐の國主は、その岳父の屋形に在つた。その領土の紛擾から逃げてここに來てゐたのであつた。

此頃豐後には宗教の事に關してなほ一つの重要な事件があつた。事は當時その場に在つたカブラル師及びルイス、フロイス師の報告に詳しい。クラツセエ師、シヤルルヴワ師も亦之を引用してゐる。われわれは既に邦文日本西教史で之を知るが故にここには唯必要なる節だけを作らう。

宗麟の夫人の弟に親方と云ふのがあつた。繼嗣が無かつたから京の公家から七歳ばかりの子を貰ひ受け之を養子となし親虎と名付けた。豐後の屋形は之にその女を嫁せしめんと欲し、親方も之を諾した。親虎十四の時臼杵の屋形に伺候した。それよりカブラル師になじみ漸くその教に薫習した。

親虎十六歳、許嫁の女十三歳の時親虎の婚姻を促した。然し親虎の信仰の強いのは宗麟の夫人の喜ばざる所で親方をして之を訓誡せしめたので、親方はその子の信仰を動かさむと欲したが兒の信念は強く、親方は遂に之を豐前に移して幽閉した。此間親虎はひそかにカブラル師と書信を通じた。數箇月の後親方は再び之を臼杵に呼んだが毫もその志の變つてゐないのを知つた。兒は却つてカブラル師の許に走つ

て洗禮を乞ふた。親方は怒つて再び之を監禁した。そして或は折檻し或は世間樂を以て誘つて其決心を翻へさうとしたが、兒は父の意に逆づて遂にカブラル師に洗禮を受けた。その儀は使徒サン・マルコの祭日の前日（シャルルヴワ師に據るに陽暦四月廿四日である）に行はれた。そしてシモンと名付けられた。親方は三たびその子を幽閉した。カブラル師はシモンにひそかに日本語に翻譯せるサン・セバスチアン傳を贈つてその志を激勵した。親方は三箇條の問題を提げて、人をしてカブラル師を詰責し且つ懇請する所あらしめた。師は一々之を辯解した。親方は更に師を威嚇したが效がなかつた。一方にはまたその子を欺き、若し父の言に從はなければ師父及び教徒を悉く殄滅すべしと言つた。然しシモンはカブラル師の通信を得る途を有したから毫もその態度を變じなかつた。親方はいよいよ憤滿して師父、法兄弟及び教徒を殺し、その寺院を焚く決心をした。師父及び教徒の方でも其報を得て陣戰の準備をした。宗麟の第二子ドン・セバスチアンも來つてカブラル、フロイス兩師及び教徒を助けた。（此時臼杵の寺院にはこの兩師の他、二人のジエスイタ派教師及び二三の問答師がゐたのである。）この時はこの公子の洗禮の後二年であると云ふから、千五百七十七年（天正五年）の事に係る。カブラル師は公子を諫めて其場を去らしめた。關市の教徒は男女貴賤を問はず、此風聞を得て來り集つた。此間セバスチアンとシモンとはひそかに郊外に相會した。この邪宗觀の夫人に聞えてその怒を買つた。夫人は月餅、遠く狩獵に出てゐる宗麟に急を告げ且つ兩公子を讒訴した。宗麟はその情を察して敢て之を聽かなかつた。カブラル師も亦宗麟に書を送り、ドン、セバスチアンは自ら赴いて父に諭し釋明するところがあつた。宗麟は之に向つて師父及び教徒を庇護すべき保證を與へた。屋形の人々、佛僧之を傳へ聞いて驚愕し、夫人は痛憤した。親方に至つては宗麟の意を迎へてドン・シモンを厚遇せざるを得ないに至つた。かく教徒は擾亂に至らずして解散した。（本來日本人は勇俠を好み、死を輕んずる風があるので、今回の事件で耶蘇教徒は大に一般人士の同情を贏ち得て、異宗の人々の洗禮を受けるものが甚だ多かつた。——シャルルヴワ。）後日親虎は、豐後と薩摩との戰にその國土、その君父の爲めに殉ずるに至つたがその死は極めて悲壯であつた。その事を敍する爲めには親虎に關する以上のいきさつを記して置かねばならぬ。

翌千五百七十八年（天正六年）に宗麟は其家督を嗣子ヨシムネ（西教史は義統の字を充つ）に譲つた。（シャルルヴワ師は宗麟の夫人が事を企てたのは此機會であつて、新國主の意志の弱いのを知り、宗麟の留守中の事であると記してゐる。其他シャルルヴワ師の記は少しくタラツセエ師と異る所があるが、恐らく同じ原本に據つたものであるらしいから一々その異同を論じない。）

豐後に於けるその後の事情を記す前に尚ほ一言附け加へて置くべきことがある。即ち前年の陽七月四日に長崎に多數の異國教徒の到着せることである。是れは先年カブラル師の命により教師を求めむが爲めに印度に遣はされたるバルタザル・ロペス師が、それ等の人々と共に再び入朝したのである。パドレ六人、伊留滿七人であつた。グスマン師の西教史はその名を傳へて居る。即ちパドレはアントニオ・ロペス師、ラモン師、メルシオオル・デ・モラ師、セバスチアン・ゴンザレス

教に入れしめた。宗麟は之に同意した。

洗禮の日には、屋形の人々が皆その儀式に列した。宗麟自身もそれに臨席し、又多數の庶民も參會した。かくして宗麟の第二子にはセバスチアンといふ名が與へられた。宗麟はこの儀式の間には常に跪いてゐたと傳へられてゐる。西教史には「國主は佛教徒たりと雖も大師父の禮服を着け、裝束所より出づるを見る時は跪き、その儀式を行ふ間は帽を脱せり」とある。又曰く「士人の公子と共に洗禮を受くるもの亦夥多なり。」是れは、千五百七十五年（天正三年）陽曆十二月の事であり、即ちわがワリニヤニ師の日本到着の四年前である。

その夜國主は師父の所の晩餐に列し且つその子と共に洗禮を受けた凡ての人々をその席に連らしめたといふ。而して宗麟の夫人は怒つて之よりその子と義絶した。

新に洗禮を受けた公子は其後極端な排佛を行つた。人々は却つて之を諫止せざるを得なかつた。

翌年カブラル師は府内の信徒の需に應じ、國主に請うて、耶蘇降誕祭の盛儀を行つた（西教史）。

セバスチアンは同臭の青年を集めて宗教結社を作つた。そして毎日曜日毎に、寺の儀式の果てたのち相集まつて研鑽した。恰も初期基督教時代に行はれた愛の會食の如くであつた。そこに於て論議せらるる事は全く教儀の問題ばかりであつたが、殊に異宗の學術の難問に對する辯論が最も多く考究せられたのである。それより後は異宗徒は是等青年を恐れて敢へて之と討論しなかつた。

セバスチアンの洗禮以來豐後の屋形に於ける對基督教徒態度が一變した。それまではこの教を以て屋形が保護を加ふる民庶の信仰に過ぎざるものとなした。屋形の公子自ら洗禮を受けるやうになれば自ら人の考も變らざるを得なかつた。而して公子の此改宗は土佐の國主（長曾我部元親）にも深い考慮を促す原因となつた。その夫人は[illegible]に、公子の姉であつたのである。

その時土佐の國主は、その岳父の屋形に在つた。その領土の紛擾から逃げてここに來てゐたのであつた。

此頃豐後には宗教の事に關してなほ一つの重要な事件があつた。事は當時その場に在つたカブラル師及びルイス、フロイス師の報告に詳しい。クラッセ師、シャルルヴヮ師も亦之を引用してゐる。われわれは既に邦文日本西教史で之を知るが故にここには唯必要なる節略だけを作らう。

宗麟の夫人の弟に親方と云ふのがあつた。繼嗣が無かつたから京の公家から七歲ばかりの子を貰ひ受け之を養子となし親虎と名付けた。豐後の屋形は之にその女を嫁せしめんと欲し、親方も之を諾した。親虎十四の時臼杵の屋形に伺候した。それよりカブラル師になじみ漸くその教に薫習した。

親虎十六歲、許嫁の女十三歲の時親虎の婚姻を促した。然し親虎の信仰の強いのは宗麟の夫人の喜ばざる所で親方をして之を制肘せしめたので、親方はその子の信仰を動かさむと欲したが兒の信念は強く、親方は遂に之を膝前に移して幽閉した。此間親虎はひそかにカブラル師と音信を通じた。數箇月の後親方は再び之を臼杵に呼んだが亦もその志の變つてゐないのを知つた。兒は却つてカブラル師の許に奔つ

て洗禮を乞ふた。親方は怒つて再び之を監禁した。そして或は折檻し或は世間樂を以て誘つて其決心を飜へさうとしたが、兒は父の意に逆つて遂にカブラル師に洗禮を受けた。その儀は使徒サン・マルコの祭日の前日(シヤルルヴワ師に據るに陽暦四月廿四日である)に行はれた。そしてシモンと名付けられた。親方は三たびその子を幽閉した。カブラル師はシモンにひそかに日本語に飜譯せるサン・セバスチアン傳を贈つてその志を激勵した。親方は三箇條の問題を提げて、人をしてカブラル師を詰責し且つ懇請する所あらしめた。師は一々之を辯解した。親方は更に師を威嚇したが效がなかつた。一方にはまたその子を欺き、若し父の言に從はなければ師父及び教徒を悉く殄滅すべしと言つた。然しシモンはカブラル師の通信を得る途を有したから毫もその態度を變じなかつた。親方はいよいよ憤懣して師父、法兄弟及び教徒を殺し、その寺院を焚く決心をした。師父及び教徒の方でも其報を得て應戰の準備をした。宗麟の第二子ドン・セバスチアンも來つてカブラル、フロイス兩師及び教徒を助けた。(此時臼杵の寺院にはこの兩師の他、二人のジエスイタ派教師及び二三の問答師がゐたのである。)この時はこの公子の洗禮の後二年であると云ふから、千五百七十七年(天正五年)の事に係る。カブラル師は公子を諫めて其場を去らしめた。國市の教徒は男女貴賤を問はず、此風聞を得て來り集つた。

此間セバスチアンとシモンとはひそかに郊外に相會した。この事宗麟の夫人に聞えてその怒を買つた。夫人は月餘、遠く狩獵に出てゐる宗麟に急を告げ且つ兩公子を讒訴した。宗麟はその情を察して敢て之を聽かなかつた。カブラル師も亦宗麟に書を送り、ドン、セバスチアンは自ら赴いて父に説し辯明するところがあつた。宗麟は之に向つて師父及び教徒を庇護すべき保證を與へた。國都の人々、佛僧之を傳へ聞いて驚愕し、夫人は痛憤した。親方に至つては宗麟の意を迎へてドン・シモンを厚遇せざるを得ないに至つた。かく教徒は擾亂に至らずして解散した。(本來日本人は勇俠を好み、死を輕んずる風があるので、今回の事件で耶蘇教徒は大に一般人士の同情を贏ち得て、異宗の人々の洗禮を受けるものが甚だ多かつた。――シヤルルヴワ。)後日親虎は、豐後と薩摩との戰にその國士、その君父の爲めに殉ずるに至つたがその死は極めて悲壯であつた。その事を叙する爲めには親虎に關する以上のいきさつを記して置かねばならぬ。

翌千五百七十八年(天正六年)に宗麟は其家督を嗣子ヨシムネ(西教史は義統の字を充つ)に讓つた。(シヤルルヴワ師は宗麟の夫人が事を企てたのは此機會であつて、新國主の意志の弱いのを知り、宗麟の留守中の事であると記してゐる。其他シヤルルヴワ師の記は少しくタラツセエ師と異る所があるが、畢竟同じ原本に據つたものであるらしいから一々その異同を論じない。)

豐後に於けるその後の事情を記す前に尚ほ一言附け加へて置くべきことがある。即ち前年の陽七月四日に長崎に多數の異國教徒の到着せることである。是れは先年カブラル師の命により教師を求むが爲めに印度に遣はされたるバルタザル・ロペス師が、それ等の人々と共に再び入朝したのである。パドレ六人、伊留滿七人であつた。グスマン師の傳教史はその名を傳へて居る。即ちパドレはアントニオ・ロペス師、ラモン師、メルシオオル・デ・モラ師、セバスチアン・ゴンザレス

師、ゴンザロ・ラエロ師、グレゴリオ・デ・セスペデス師であり、伊留滿はラグナ、カリオン、アルヴァロ・チアス、チエゴ・メスキタ、シモン・デ・アルメイダ、チエゴ・ペレイラ及びバルトロメ・レドンドである。長崎の信徒は水中に入つて新來の教師を迎へたと云ふ。カプラル師はその爲めに長崎に往つた。そしてそれ等の人々の部署を定めた。その兼ねてより抱いてゐた企圖――豐後府中の僧院は之をコレジオにすること、臼杵の僧院は之を修道院にすること――はいよいよ實行せらるべき曙光を見るに至つた。元來カプラル師は偏見を持して居り、日本人教徒は問答師以上には任用しないことにしてゐたのである。

さてなるべく簡單に豐後薩摩間の戰爭を記さう。

宗麟は義統に家督を讓つたが、まだしばらくは其後見をなした。千五百七十八年（天正六年）の頃にはいよいよ隱居しようとしたがいろいろの事件の爲めにその事が遲延した。一はその女婿なる日向の伊東氏の死である。此人はなほ後來の記事の爲めに重要な關係があるから、少しく精細に述ぶところがあらう。

日向飫肥の領主伊東義益（日本西教史は祐丘を以て之に當ててゐる。今德富氏及び Steinchen に從ふ）は伊東義祐の子であつて宗麟の妹を娶つた。そして二人の男子があつた。長はヨシカタ（義賢？）と云ひ、後に教名をバルテルミオと云つた。次は義勝で、日本天主教史上に同名高いジエロニモである。父の死する時、その長子は纔かに十歳であつたと云ふ。乃ち此機に乘じて、薩摩の島津義久はその領地を攻略した。それで義益の夫人は遁れて臼杵に來たのである。そこで宗麟はその子義統に勸めその復讐をなさしめ、六萬の兵を擧げて日向に入つたが、薩摩勢はその準備が十分でなかつたから河の（今の地圖に耳川と書かれた河でもあらうか）西岸に退き、義統の兵はなほ之を追撃して完全に勝利を收めた。宗麟は喜んで自らその地を檢分してクチモチ（西教史は津久見かと云ふ疑ふべし。）といふ地を選んでその菟裘を營まんと欲した。然しながらまだ十分義統の手腕を信ずることが出來なかつたから豐後を離るるを躊躇したのである。その上なほその女と親虎との婚姻を定める必要があつた。夫人は然し教徒に對する怨恨が治まらず、此事には不賛成であつた。又親方の方では既に退隱せる宗麟よりもその夫人の方をより多く顧慮する必要があつたから、夫人と心を合せて親虎を迫害しその改宗を強要した。親虎は之を肯じなかつたから遂に之を放逐した。親虎は、フロイス師を賴つた。宗麟はこの事を聞いたが知らざる爲してゐた。そして臼杵の師父に請ふて親虎を府內の會友に托すべきことを命じた。それで夫人も親方も宗麟が得心したものと考へた。

所が宗麟は突然新婦を娶つたことを宣言した。婦といふのはドン・セバスチアンの妻の母である。そして同時に前夫人に對してその弟の家に寄るべきことを言ひ渡した。夫人及び親方に取つては實に晴天の霹靂のやうであつた。

この事と共に人々をして瞠目せしめたことは、新夫人もその女も共にカテシスモを受けたものであつたことである。宗麟は又カプラル師に請ふて、わかき日本人伊留滿のジョアンと名付くる者（これはセバスチアン、シモン、などの盟友であつた）を屋形に遣さしめ、日日說教せしめ、自分も之を聽聞した。

かくて新夫人とドン・セバスチアンの妻とは受洗した。母はジュリア、女は（西教史＝キャント）と名付けられた。その儀には宗麟も臨席した。そしてこの婦以外の婦をば娶るまじき旨を宣告した。

而も千五百七十八年（天正六年）の陽暦八月廿八日には、彼自らも、臼杵の寺院に於て、カブラル師の手から洗禮を受けた。この時宗麟は五十歳前後であつたといふ。（大友宗麟は天正十五年に五十八歳で卒したといふから、この年は日本風に算へて四十九歳であつた筈である。Steinchen は四十五歳と云つてゐる）そして兼ねて傾倒してゐたフランシスコ、シヤギエルに肖つてフランシスコの名を求めた。彼がこの大なる耶蘇會士に會つて後廿七年のことである。式後師父等と會食し、またメサを聽いた。

やがて宗麟は全然隱居し、自らはクチモチに棲むことに決した。こゝをば純粋な基督教徒の市街にしようと欲したのである。そしてその建設の未だ完からざるに已に自ら此に移つて工事の監促をした。その移轉の日の行動は甚だ戲曲的である。シヤルルヴヲワ師の記する所に據るに、受洗後五週間、卽ち陽十月四日の日に小舟を艤裝して臼杵を發した。船には靑地に金の輪廓を置いた紅十字を現はしたる緋の旗を張つた。新夫人、セバスチアン、その妻、親虎、カブラル師、ルイス・アルメイダ、ジョワン及び多數の教徒が隨行した。宗麟は此新市街には耶蘇教徒以外の人々の移住を許さなかつた。

ルイス、フロイス師は臼杵に留つた。義統は之に、その父に倣つて基督教を庇護すべきことを約ひ、且つ府内にコレジオを建設することをば援助するであらうと約束した。そして嘗て佛寺として建築したる一寺を寄與した。又更に詳くその教儀を知らむが爲めに適當の書を與へむこと求めた。フロイス師は自ら日本文を以て綴れる小冊子を獻じた。義統は其妻と共に受洗する日のあるべきことを豫告した。

此時に當つて薩摩との戰爭が再び開かれた。薩摩は前回の失敗を恢復せむと欲して日向に侵入した。豐後はこの方面の防備を怠つてゐたのである。義統は立ろに四萬の兵を集め親虎を將として遣はした。そして、指揮萬端はその父宗麟に委托した。又自らはその本營をノセ（コエリヨ師では No-im 豐後日向の境なりと云ふ）に遷した。フロイス師も義統に隨つてその地に行つた。

豐後の兵は利を得、途々の佛寺を毀ち耶蘇教の寺院を建てた。宗麟の前夫人はこの機に佛徒を助け再びその勢力を恢復しようと努力した。そこで義統はフロイス師を臼杵に返した。師は更に宗麟に訪いで再びノセンに來た。義統の姉妹を娶つたコタン殿といふのを洗禮し之をレオンと名付けその妻をマリアと名付けた。斯人は後にノセンの地を管理した者である。

豐後勢は三城を手に入れた。然し最後に移つた第四の城が最も堅固なものであつた。親方に勝戰は油斷して、之を攻めるのに少兵を以てした。この城は薩摩勢に取つては頗る重要なるものであつたから、彼等はその軍を整理し、秘密裡に行進して急に之を襲撃し、豐後の兵は武裝する隙もなく之と戰つた。

ドン・シモン（親虎）は既にその父に許されてこの軍隊に加つたのであつた。彼は從來武道に於ては若れてゐたかつたのである。今や、父の親虎が多くの隨兵に圍まれて甚た危いといふ報を得るや、直に隊

の爲めに殺された。然し重傷の爲めに死すべく見えたその父は回復した。シモンの死んだのはその十六歳の時であるといふ。

然しこの敗戰の爲めに豐後の勢力は覆へされて了つた。然し薩摩の領主は敵がそれほどの打擊を受けたものとは思はなかつたから、再び軍隊を編成して之と爭はうと欲し、肥前の龍造寺隆信及び筑前の秋月種實と同盟を結んだ。龍造寺は始め有馬の家來であつたが後豐後に隷屬し、之に對して貳心を抱くものであつた。薩摩の領主はこの關係を知つてゐるから龍造寺を誘つたのである。

秋月氏は筑前に於て大なる領土を有してゐた。然し島津は此方面の解決を急ぐ必要なかつたから、唯それと結びて、豐後に當つたからである。薩摩勢は殆ど敵を見ずして日向の大部分を略取することが出來た。一方秋月氏は筑前に於ては何等の抵抗を受くる事なくして豐前まで打入つた。豐前もまた大友の屋形の領土であつた。龍造寺は筑後を攻略した。かくして宗麟が擴張した領土は義統の代に至つてその大半を失つた。

さて國情がこんなであつたから宣教師等も亦安泰なるを得なかつた。それでワリニヤニ師は、日本に到着するや、まづ豐後に至つてその領主父子を訪ねようと思つたのであるが、右のやうな有樣ゆゑに得る所少かるべきを慮り、それで一時その事を中止して、まづ有馬に赴くことにしたのである。

ワリニヤニ師有馬に赴く

ワリニヤニ師の來朝の頃は、有馬の領地に於ては耶蘇教は公認せられてゐる有樣であつた。當時の領主は有馬晴純の長子の義貞（或は義貞又は義直――德富氏。西教史には義純とあり、）であつたが、千五百七十六年（天正四年）陽曆四月八日にその夫人、その兄弟（一人の）姉妹（一人の）三人の甥及び多數の家來と共に洗禮を受けたのである。

その實の弟で、大村純前の養子となつた純忠は既に千五百六十二年（永祿五年）にトルレス師の手で受洗してゐる。又大友宗麟の第二子（千五百七十五年）がカブラル師により洗禮せられたるは既述の如くである。さう云ふ時代であつたから兼ねてより耶蘇教に對しては好意を有してゐた義貞が洗禮を受くるに至つたのは怪しむに足らぬ。教名はアンドレアといふのである。

始め義貞のこの志を知るや、口之津に在つたアルメイダは、この事を豐後なるカブラル師に傳へ、急ぎ來つて、その手により此儀式を行ふべきことを求めた。そこで副監督は凡ての事を打ち捨て有馬に赴いた。然し有馬の領主は、カブラル師が容易には來ることが出來まいと推したから、アルメイダをしてその式を行はしめたのであつた。

シャルルヴワはから解釋してゐる「侯は深く基督教を研究した。彼がこの教の保護者を以て標榜したのも當然である。彼の大なる世間的の野心もこの志をば奪はなかつた。改宗の事は、殊にその父の死後は一再ならず企てられたのである。一たび、その妻の兄弟たる諫早の領主及び平戸の領主（松浦隆信）と同盟してその兄たる大村氏に當つたのは甚だ奇に見ゆるが、この事は宗教上の見解とは全く無關係で、專ら兩者の性格の差異に原くのである、有馬氏は純忠の到底この同盟

に抗すること能はざるべきを察して、その戰鬪時に利を占めむと欲したのである。且つ大村家は有馬の分枝であり、その能く領土を保つのは有馬家に依る所が多い、然るに實際はといふと大村は却つて勝利者となつた。この奇蹟は義貞をしていよいよ基督教を崇ぶに至らしめたのである。云々。」

この最後の說は兎も角として當時の事情は略ぼ之を察することが出來る。大村純忠が平戶の松浦氏に取つて、海外貿易の上の競爭者であつたことは附加するまでもない。

領主の改宗で有馬の領土に於ては耶蘇教は頗る好況を呈した。そして未だ宣教師たちの足迹を印せざる地方に於ても多數の人々が競つて洗禮を受けた。恰も好し、同年、口ノ津には四人の師父が到着した。即ちアロンゾ・ゴンザレス、クリストバル・デ・レオン、フワン・フランシスコ、アントニオ・ロペス（グスマン師の記せる綴に從ふ）である。この年の終には有馬領內に二萬の教徒を数へることが出來た。

洗禮後の義貞の態度はかなり過激であつたらしい。その居市の佛教の大伽藍を耶蘇教の寺院に改めた。同樣に事を領內の各地に於て行はしめた。從つて佛教徒の反感は亦深甚であつた。彼は義貞の長子（西教史には「晴信、一に義貞、義純＝＝上記の義直＝＝の弟とす」とある。眞僞を知らない。）に賴つた。それでまた二三の逸話が傳へられてゐる。義貞が唇に腫物を生じて痛悩し、宣教師に會ふことを望んだのに、世子は之を阻んだといふことである。義貞はその疾の爲めに翌年の陽曆十一月に死んだ。人にはその臨終に再び佛法に歸依したと宣傳して盛んなる佛葬を營んだといふやうなことである。

義貞の死後、世子は宣教師を國外に走らしめ、又基督教徒に再び佛法に歸ること命じた。寺院は毀たれ、十字架は倒された。その爲めに又いろいろの不思議の現はれたことなども傳へられてゐる。

世子（今は假に西教史に從つて晴信として置かう）は然し教徒の改宗するものの甚だ少いのに驚かされた。そして教徒の私かに師父を隱匿せしむるを知つてその家を焚かしめた。即ちなほこの領地に止まつたのは三人の師父であつたが、今は已むを得ずそこを去り、カブラルは肥後に赴き、ロペス及びアルメイダの兩師は天草に渡つた。それで、晴信もその伯父たる人々も又佛僧たちも基督教は旣に潰滅したと考へその迫害を中止した。その間に晴信の感情は漸く變じて來た。

アレツサンドロ・ワリニャニ師の口ノ津に到着した當時、近き有馬に於ける事情はまづざつとそんなやうであつた。師は口ノ津の會議でこの事を聞き、會議の完了後、肥後に赴くよりはまづ有馬に到つて領主に會ふことが更に必要であると感じたのである。

「日本西教史」には、之れより先き、大村純忠が自ら有馬に赴きて晴信に會ひ、之を諫めて、その心を翻さしめ、晴信をして師父等を復歸せしむることを約はしめたと記してゐる。それでカブラル師は時を移さず有馬に到り晴信に謁してその決意を謝すと晴信も再び基督教を布くことを許しその證左として己が弟をして受洗せしめたといふのである。

さてワリニャニ師が有馬に到ると、晴信は頗る之を懽迎し、之と宗教の事を談じて、自らも遠からず教徒たるであらうと宣言した。晴信の近親のものにも亦之れと志を同じうするものが少くなかつた。

唯然し急激なる變化は事を害ふべきを慮り、受洗の儀は口ノ津に於て行はるべしと言つた。ワリニャニ師はその準備の爲めに口ノ津に赴つた。

其後の晴信の躊躇煩悶の有様をばシャルルヴワ師は頗る戯曲的に物語つてゐる。こゝにはそれを記す要もなからう。

此間龍造寺は急に有馬の領地に攻め入つて其數箇處を略取した。屋形の一老佛僧は、寧ろ基督教を誤解するものではなかつたが、晴信に說して、方今の狀態に在つては、援助は唯、大村純忠に求むるばかりであつて、その同情を得ん爲めには基督教を排すべきでないことを諫言した。是亦基督教排斥の一派に取つて大痛棒であつた。然しから云ふ事情からして洗禮の事は遲延せしめざるを得なかつた。殊に戰備が不慮の轉化を見る場合には基督教にその咎を歸せらるべき慮があつたからである。且つ斯る形のうちで晴信に對して快からず思つてゐるものは、その不滿を宗教問題に假托した。既に欵を龍造寺に通じたものさへある。さういふ事情を知つたのでワリニャニ師はいよいよ躊躇したのである、窮境に陷つたわかき晴信は神に頼るより他に途がなく、軍陣の間に師を呼んで、こゝに洗禮の儀を行はしめた。その一人の伯父、一人の甥、二人の兄弟及び多數の侍臣がその行を共にした。又數週の後には、晴信の妻となるべき女、その母及び同族の二公子も洗禮を受けた。而して晴信はプロタジオ、その婚約の女はルシアの名を得たのである。時は千五百八十年（天正八年）の復活祭であつた。

間もなく龍造寺との戰爭も好箇の解決を見た。晴信の臣下は漸く兵を集め、葡萄牙人も之に兵器及び兵員を送つた。又龍造寺の外國貿易の良港を求むる心のあるを知つてワリニャニ師は自ら龍造寺の許に至つて調停の勞を執り、龍造寺は遂に兵を引いて肥後に歸つた。ワリニャニ師は闔國の人士から感謝せられた。

晴信は忽ち四十有餘の佛寺を毀つて、基督教寺院建設の資として之を寄進した。そして口ノ津、有家、有馬に寺院を築かしめた。

有馬領土に於ける僧院及びセミナリオの事

口の津の會議で既にその計畫のあつたことを識つたワリニャニ師は、有馬領のうちに、日本の少年を教育すべきセミナリオを建設する事に熱中した。そして晴信とも屢此事に就いて協議した。また一箇のコレジオを造ることもいろいろと準備せられた。

有馬領に於ける是等の事情はガスパル・コエリヨ師が千五百八十二年に長崎より羅馬に向けて發信したる書に詳しい。今左にその大要を抄譯しよう。

曰く、此地に於ける基督教の僧院は有馬のものが最も立派であつた。そこにはたゞ日本學生の爲めのセミナリオがあつて、その裡に二十六人の貴族の子弟を收容してゐる。昨年（千五百八十一年ならむ）有馬及び有家に建築せられたる家屋は甚だ宏壯である。殊に有馬のものが傑れて居り、美しき寺院と三棟の穹窿或は家屋より成つてゐる。實に九州に於ける此種建築のうち最も大なるものである。是等の家屋は、大きく且つ多くあつたが、その爲めに必しも莫大なる費用を要することはなかつた。と云ふのはその材料は日本異教の寺院を毀して之を得、又は有馬の教王、ドン・プロタジオが材木を寄進したか

らである。

有家は有馬から程遠からぬ處に在るが、此にも美しい寺院が建てられた。有馬のものに較ぶればやや小い。兩處の寺院は基督教の爲めには多大の貢獻を爲した。即ち爲めに信徒の數は著しく增加し、その他の異端不信者も之を緣に教に入らむといふ決心をしたのである。今年は六百の人が洗禮を受けた。

次にセミナリオに關しては、そこの學生は心靈、風儀、學術に於て顯著の進步をなし、その粗暴なる言語を消し、不信の行爲を示すを見聞することなく、皆平和と諧和との裡に暮してゐる。その教養及び信念は、歐羅巴教會の修道士にも劣らざるべく、その課業にいそしむことは豫期以上である。其記憶、其悟性は歐羅巴に生れたる青年と同じく、寧ろ之に勝る所がある。その歐羅巴語學の習得に於ては、其彼等のものと甚だ緣遠きものなるに拘らず、數箇月のうちに能く之を讀み、綴り得るに至り、其至難なる拉丁語の如きもその怜悧なる記憶及び悟性とその不斷の勉強とに由つて著しき上達を見るに至つた。云云。

之によりてわれわれは結髮し帶刀せる當時の耶蘇教青年の面影眼前に髣髴せしむることが出來るのである。

ロノ津

ワリニャニ師の有馬に於ける事業は順調に發展した。そこで師はまた口ノ津に引き返して、戰禍に沈淪した此地の多數の貧困なる基督教徒救濟に從事した。その爲めには葡萄牙商人はその財嚢を開いて布施をなした。

ワリニャニ師豐後に赴く

大友宗麟はしばしば書をワリニャニ師に遣はしてその豐後に來つて世子義統が洗禮の式を行はむことを求めたので、師も之に應じて臼杵に赴くべき用意をして居たのであるが、其後は宗麟より却つて其出發を延期すべき指授を得たのである。その理由は義統の優柔に歸すべきであつた。義統は其性怯弱で外に強敵を受け、内は非基督教派の近臣に迫られて、其政令に果斷を缺いた。そして寧ろ多く非基督教派に聽いて、師父に對する感情は冷却してゐたのである。宗麟も此事情を知つたからワリニャニ師を招くのを躊躇したのであつた。宗麟は病弱の人となつた。病中は世子及びその諮問を拒絶した。扶掖えて再び基督教主義を布告した。

其他に小さい内亂があつた。義統の臣下にチカヒロと云ふものが在つたが、忽ちに屋形から離れ、前領主が前夫人及び親方に與へたる舊領の故地を復する旨を宣言した。宗麟はむしろこのチカヒロに援助を與へた。それで前夫人と親方は屋形より遠からなければならなくなつた。

そのうちチカヒロは死んだが、その子のチカクラは再び義統父子と紛議を起した。宗麟は薩摩との戰爭の敗北以來、屋形の威信の墜ちたのを痛感した。そして若しワリニャニ師が臼杵に來るやうなことがあれば、チカクラの途に之を阻む意志を有することを察知した。是等の事情が、宗麟をしてワリニャニ師の招待を躊躇せしめたのであ

る。

一方にワリニャニ師はまた他の事件で心を痛めて居た。それはドン・ルイスと名づけられた五島の領主の訃音である。またその爲めに起つた同地方の擾亂である。

肥前の大村純忠が歿したが其庶子は支那の女の生むところであつた。それで有馬晴純の第二子が迎へられてその後を嗣いた。而して庶出の子（西教史の譯者は千々岩直員かと言つてゐる）は五島を與へられて、五島殿と稱せられた。是人は耶蘇教を喜はざる純忠の臣下と結んで純忠を攻めたことがあつたがその子は伊留滿のアルメイダやロレンゾオ（後者は日本人）の感化を受けてこの教を信じ遂に受洗の決心をした。その父も敢て之を阻まず、當時トルレス師の命でその地に居住して居たパドレ、ジョワンニ・デ・モンテに就いて洗禮を受けたのである。それは千五百六十八年永祿十一年のことであつたが、千五百七十年（元龜元年）陽七月に、同年新に副監督として日本に來たカブラル師の司令の下に、師父の會議がセキの島（志岐？獅子島？）に於て催され、その結果ワリニャニ師がこの五島に遣はされて、モンテ師に代り、ドン・ルイスを助け、その手でその妻、侍女、臣僕を洗禮した。ドン・ルイスの夫人はマリアと名付けられた。ドン・ルイスは熱烈なる基督教の保護者で、ワリニャニ師は屢この公子と共に擾亂の渦中に投ぜざるを得なかつた。而して彼が後年アルカラに於てルイス・デ・グスマン師に語り、後者の日本傳教史の資となつたのは主としてこのドン・ルイスの行狀であつた。から云ふ記憶があるので、ドン・ルイスの死、その後のその領地の動搖は師に取つて大なる傷心事であつたのである。

又其後の事に移るが、義統は既にその統御力を失ひ、自らは退隱してその父に再び政務を見ることを請うた。そこで宗麟は、その子の退隱は許さなかつたが、之を補佐して政治を統御した。

かくして叛臣のチカクラを平げ、その親戚及び一味の者を殺して罪の輕きものは之を許して、國内が再び平安を得た。かの親方もまた歸參がかなひ、嗣子がなかつたから、宗麟は之に其第三子の親盛を與へた。世間は宗麟が再び精兵を擧げて臨敵に迫り、その失つた諸地を恢復するだらうと期待したが、宗麟は敢て此擧に出でなかつた。それは我子を信頼せぬからでもあつた。

而してワリニャニ師が再び招かれて、いよいよ豐後に赴いたのは、から云ふ紛擾のやつと治まつた時であつた。千五百八十年（天正八年）の陽曆九月十四日のことであつた。宗麟、義統の父子、共に臼杵に在つた。義統も面はゆく思ひながら師を見た。そしてやがて自分も基督教に入ることを約し、そして、その證左として府内に學校建築の爲めに一區の地を與へた。宗麟はまた臼杵の一地と資金とを與へた。是等の地方に於ける學校建築のことは次の項に於て述べよう。

この年府内、臼杵及び附近の諸地に於て洗禮を受ける貴人三十人に餘り庶民の之に倣ふものは無數であつた。ドン・レオンはノセンに寺院を建立せしめ、そこの教徒は三千五百餘人であつた。

また概に言つた日向の伊東義益の夫人はその長子と共に臼杵でワリニャニ師の手から洗禮を受けた。次子（ジエロニモ）は既に夙く之を得たのである。

宣教師の行狀作法に關する問題

ワリニヤニ師は漸く日本の事情に通じて來たから、今まで猶豫して來た重要な問題の解決に取懸ることになつた。即ち是等宣教師たちの行狀及び作法の問題である。師は豐後に在る間、副管區長カブラル師及びパドレ、ルイス・フロイスと此事に就いて熟議した。然し三人の間に一致を見ることの困難な場合が屢あつた。

第一は日本の習慣、即ち住居、飲食、衣服殊に（食事その他の時に於ける）、訪問、接客の禮、辭儀の法——一般に日本の禮儀作法を、どの點まで容認すべきかと云ふことであつた。そして是等の諸點に於ては佛僧、神官の爲す所に倣ふべきであると決定した。國民の信頼を得るにはそれが好方便であり、歐羅巴禮法の率直單純は此國に在つては却つて禮を失するものと見做される恐がある。此國のかなり煩瑣な禮法も之を習はなければならぬ。ワリニヤニ師がその總長に當てた書翰にも亦この規定の事を言ひ、歐羅巴修道者に取りては寺院の裡に於ける極めて嚴格なる規則とてもこの禮儀の見習ほど苦しいものではないと記してある。從來は宣教師たちはこの點に就いてはかくまで嚴格ではなかつた。その爲めに人々の作法の間に往々甚しい不一致があつたのである。然し行狀の統一といふことはまた一の重要な義務であるから、ワリニヤニ師はこの問題を巨細に亘つて吟味したのであつた。

其中でも巡察使が最も愼重に考慮したのは法服の材料の事であつた。と云ふのは、其形に於てはジエスイタのパドレたちは印度に於けると同型であつて、問題はなかつたのであるが、その木地に就いては、二三の教師は木綿を廢して、日本特産の絹布を用ゐた方が可いと考へた。その一の理由としては絹は日本に於ては慣例であり、此國に於ては幼童と雖も之を着る。且つ日本の貴人は斷然と蔑視するを喜ぶから、彼等と交るには亦此種の衣を附けるがいいといふのである。サン・フランシスコ・シヤギエルの如きも豐後の屋形に赴く時は常に盛裝した。而して平服を着けてゐる時は屢嘲弄及び危害を被つたといふこと、又トルレス師は聖徳を傷けることがない限りその國の俗に順ふを可とし、日本の宗務に服するものは絹の長袍を着けるから宣教師もまた之に倣つて着衣がないと言つたといふことなどを例に引いた。（尤も實際はトルレス師は絹衣を着けたことなどはないのである）一方には亦此事は豐後、大村の諸侯の希望する所でもあつたのである。

フランシスコ・カブラル師が副管區長の資格に於て日本に來た當時は實にかかる狀態であつた。彼はまづ之を弊害と觀じた。そして十分その得失を考察した後に決心する所ありそして日本の高貴たる人の前に現はれるにも、印度より齎したる粗服を以てした。それで反對說の人人も彼に服した。唯バルタザル・アコスタ師（是れ絹服の習慣を作つた人である）だけは之に從はず、依然としてその宗教の爲めに利益であると辯解した。此抵抗は高價に報いられ、日本の佛教には聖者を要し、殊に不從順は其動機如何を問はず最も禁忌すべきものであるので、副管區長は遂にアコスタ師を印度に送還した。師はその後も前非を悔ゆる樣子がなかつたから更に僻地に逐はれたのであつた。而して彼は遂に耶蘇會を脫したのである。かくしてジエスイタ僧はまた禮の

服裝を附けることとなつた。この解決はワリニャーニ師の許しとした所であつた。

衣食問題が解決して今度は有馬及び府内に設立すべきセミナリオの制度の事が講究せられた。ワリニャーニ師の考は後來、出來るだけかかる設備を增して行かうといふのであつた。彼等の言葉に從へば、神の榮光を宣揚するあらゆる手段のうちで、セミナリオに由つて青年を教育するのが最も確實なる效果を有するものであつた。その上に、此國に福音を傳へる工人を作ることは焦眉の急であつた。需要日に日に增して、印度や歐羅巴からの供給ばかりでは到底間に合はなかつた。好い工人を作るには長き時を要する。而してかくの如き企圖は全く合理的であつたから、ワリニャーニ師は反對說などを豫期しなかつたのである。然るに實際は抗議が副監督より出でた。

フランシスコ・カブラル師は高德のパドレであり、細心の傳教者であつたが、その性が偏執であつた。神に祈つて得したる自己の判斷を以て最上のものとなし他に聽かなかつた。此人は日本人を識りその才能を認めて居つたから、一旦日本人が完全に宗教的人格的に教育せられたら、終には歐羅巴人を蔑にするに至るだらうと恐れたのである。それで今まで協會に入つた廿六人の日本人は、基督教教師たるを以て目的としてゐたのに拘らず、唯宗務の助手たるに足るだけの修業しか許されてゐなかつたのである。

然し彼が日本人をかく待遇したことは、必しも確實なる經驗に基いてではなかつた。實際に於て彼等は謙遜であり、從順であつた。その上その國の習慣に通曉してゐること、その國語を話すこと等の點に於て、歐羅巴生れの傳道師よりは遙か好き便宜を有してゐるのであつた。尤もワリニャーニ師とてもカブラル師の懸念を諒としたいこともなかつた。殊に本來の事は過去の經驗ばかりから判斷することは出來ないものである。然しながらワリニャーニ師はカブラル師の抱いてゐるやうな、極端な懸念は正當とすることは出來なかつた。で精密に人選して、謙遜、事に從ふやうなもののみを許して學を授けようと提議し、之を固執した。副監督はなほも之に服せなかつた。ワリニャーニ師は此人の心の頑固にして後來憂ふべき結果を生ずることあるべきを慮つて、之を印度に返し、その職をばガスパル・コエリヨ師を以て充さうと決心するに至つた。因に云ふコエリヨ師は葡萄牙生れで千五百七十二年（元龜三年）印度より日本に渡つたのである。

さて豐後の形勢に於ては、國內も平穩となり、宗麟はその子の洗禮を望んだが、義統は心依然として定まらず、ワリニャーニ師もまだその時でないと見たから、此を辭して都に向ふことにしたのである。

大村領

ワリニャーニ師は豐後から都に上る途、大村領を過ぎた。

大村純忠の永祿五年に洗禮を受けたことは既に記した。彼はそれからは熱心たる信者となつて、領內に基督教を奬勵した。松浦氏の平戶の繁昌を長崎に奪つたのだから、此事は政事的の意味に於ても重要だつたのである。同年兄有馬義貞を助けて龍造寺と戰つた。翌千五百六十三年には龍造寺と有馬大村の和議が成つた。然し同年他國より來つた純忠を喜ばない重臣たちは五島の領主と結んで謀叛し、純忠は飯林に

遁れて危難を免れたこともある。内亂はいよいよ大きくなり純忠はその父有馬晴純の援によつて辛うじて兩閥のうちから救ひ出された。間もなく純忠の再擧して亂を平ぐるやいよいよ基督教の弘布に力めたのである。千五百七十三年（天正元年）には然し平戸の松浦氏及び諫早の領主との同盟軍に攻められて大村は掠奪せられ、純忠は再び危地に陷つた。幸にこの度も形勢を逆轉せしめた。純忠の信仰は、千五百七十六年には領内耶蘇寺院四十、信徒四萬を數へしむるに至つた。翌年には龍造寺の軍がまた攻めて來たが、之を擊破することが出來た。

まづざつとさう云ふのがワリニヤニ師の第二回の來朝の頃までの大村の狀況である。ワリニヤニ師が豐後から、大村領に出ると、またしても大村と龍造寺との間の葛藤があつた。

ガスパル・コエリヨ師の書簡は略次のやうに此事を記してゐる。

龍造寺は數年來その主豐後國主に背き、その領地肥前及び筑後を打ち從へ、豐後國主の他の領土をも蹂躪して今年肥後の國主となつた。九州の諸侯は大いに彼を恐れたが、就中有馬侯、大村侯はその事甚しかつた。彼等は殆ど龍造寺に隷屬したが、なほ戰々兢々としてその怒を恐れてたのである。殊に少からず耶蘇教徒を驚かした事件は、彼龍造寺が大村のドン・パルトロメオ（純忠）に對して、その子と供に彼がコンガの城に來らむを促したことである。大村の一門は相謀つてその領地の一部を割く決心をなした。かくして龍造寺は平和の假面の下に大村父子及びその臣僕を誘つて手中に收め之を殺してその全領土を奪はむと欲したのである。然し若し彼等にして其招待を謝絶して不信の意を示さむか、龍造寺は忽ち干戈を以て彼等に迫るであらう。然らばこの強敵に對して果して抗することが出來るであらうか。

然し副監督（カプラル師なり）は大村父子の龍造寺の城に往くことを喜ばなかつた。そして温言を以てこの招待を斷ることを勸告した。固より龍造寺は肯かなかつた。それで純忠は人々と謀り、神に祈り、敢て龍造寺の許に往く決心をした。そしてその子及び五十人の家來と共にコンガの城に赴いた。

有馬の屋形の人々及び基督教徒たちの心痛は極度に達したのである。殊に教徒に取つては、若しドン・パルトロメオにしてその臣下と共に敵手に斃れむか、有馬の國主及びその領地も亦同じ運命に陷るであらう。この國土に於ける耶蘇教の事業は全く泥土に委ねられるべきであるといふ心配があつた。かくして人々は廿日の間を危惧の裡に暮した。然るに神は純忠を嘉して事は無事に濟んだ。龍造寺は決して純忠親子を虐待しなかつた。却つて之を厚遇し、兩者の間に平和が、決せられたのである。龍造寺等はその女を純忠の子（即ち喜前）に遣はさむと欲することを告げ、純忠は之を諾した。

この幸なる解決はこの上もなく人々を喜はしめた。殊に他の一派の之と全く異る結果に終りしを見たから一層その喜悦は大きかつたのである。筑後に一豪族があつた。即ち教徒である。その富及び勢威は純忠と伯仲した。此人が純忠と同時に龍造寺に招かれた。恐らく龍造寺は始め此兩者を殺す積りであつたであらう。此人はカマチ殿と云ふのであつたが、龍造寺の心を疑つて逡巡したが純忠の例を見て、遂に意を決してその招待に應じ、近親の者と共に龍造寺の城に赴いた。龍造

祢は之を遇することまた慇懃であつた。然しその辭去するに當つてや、途に五千人の兵を伏せて之を殺して、勞せずしてその領土を奪つたのである。而もその一族及び妻妾を殺戮するやして暴虐を極めた。

カマチ殿の不幸を見るにつけても、人々は深く神の恩を感謝した。巡察使及び副管區長は基督教徒の安寧の龍造寺に依ること多きを見、數々人をして之を訪ひ、敬意を表はした。そして彼よりも厚意ある返事を得たのであつた。終に副管區長は自ら龍造寺を訪ねた。そして頗る優遇せられた。而も龍造寺の好意はその心底に一物を存するに出でた。即ち支那より來る葡萄牙商船のその領內に寄港するのを望むのであつた。その代りには耶蘇教寺院の建設をも許さうと云つた。副管區も之を聽いて大に喜んだが、然しその有馬及大村に對する態度を視ると、その厚意のほども大に疑ふべきを識つたのである。

薩摩は始め豐後の大敵であつた。然し龍造寺が勢力を得來つて、豐後の領土を攻略するや、そのやがて鋒を己に向くるに至るべきを慮つて信長及び豐後と結ぶに至つた。それで今度は龍造寺に對して攻勢に出で、その曾て豐後の領主より奪ふ所の日向の大半を其手に收めた。今や豐後の領主は腹背に敵を受くることになつたが、その爲めに有馬、大村の諸侯並に爾餘の基督教徒はしばらく安穩なるを得た。（田中義成博士の織田時代史には「九州に於ては薩摩の島津義久の兵威最も振ひ、日向肥後を略し、大友氏を壓して將に九州を風靡せんとするの觀あり。仍りて大友氏は援を信長に請ふ、八年＝千五百八十年＝八月、信長乃ち大友氏の爲めに近衞前久をして書を義久に送りて和を促すと共に、自ら中國を征せんとするの意を述べて、以て之を威壓せしかば義久大に懼れて命を奉じ且つ使者を出して之に答ふ」とあり）。以上はコエリヨ師の書簡の物語るところである。獨逸古譯の原文はる解し難いところがあるから多少の誤なきを保せない。

なほこの序にコエリヨ師が薩摩に就いて書き續けることを引かう。

薩摩も亦自領に葡萄牙商船の寄港するのを渴望してゐる。然し耶蘇教の傳道、教會堂の建設を許さなかつたから葡萄牙人はそこに上陸しなかつた。それで巡察使及び副管區長に懇請する所があつた。ワリニヤニ師が豐後を辭して、大村領に往くとて薩摩の一港で船を待つと、人をして之に一駿馬、一名刀を送つて、印度副王に齎さむことを乞ひ、且つ耶蘇教の師父及び葡萄牙人と交を訂せむと欲する旨を言はしめた。又巡察使が將に乘船せむとする時、更に人を遣はし、耶蘇教師父の爲めに其首都の一區地を與へて、寺院僧房を建築せしむべしと約せしめたのである。云々。

巡察使は唯途に薩摩を通つただけである。そして船に由つて大村領に入り、純忠に會つた。それは純忠が危險なる旅行から歸つて間もない時であつた。そして長崎に赴いて其地の寺院を見廻つた。

ワリニヤニ師の目で見られた當時の長崎の市街居民の狀況はどんなであつたらうか。それは甚だわたくしを誘惑する興味であるが、その研究は今は之を斷念しなければならぬ。唯手近にある歐人の記錄から知られることのみを書き記さう。

ワリニヤニ師は大村の人々に向つて、九州の諸港中、印度、支那より來る船舶に取つては長崎に優るものがない、然し此には何等の防備が施してなく、不時の攻撃に處することが出來ないと云ふことを教へ

た。大村侯もその言を尤もとしたので、師に此を勸めてまづ横瀨浦(?原文オコシウラ)の防備を作らしめ、住民及び商船の安全を期せしめた。其後人は之に依つて段々と他部に及んだ。而して其後久しく長崎が——稀に特別の事件の爲めにこの港を避くる必要のあつたこともあるが——葡萄牙商船の入る日本唯一の港となつた。此事シヤルルヴワ師の日本史の第五卷第八章に出でてゐる。

又巡察使が長崎滯在中、一葡人が日本の侍を殺し、基督教徒たる其子父の讐を復したことから端緒を發し大きな騷動となり、巡察使は長崎を去るに至つたといふやうな事件が物語られてゐる。巡察使はそれでまた一度有馬に赴いて事靜まつたのち再び長崎に歸つたといふ。

ワリニヤニ師都に向ふ

上述の如くワリニヤニ師は、豐後、有馬、大村の間を往來してゐたことと思はれる。そして千五百八十一年(天正九年)の陽曆三月に纜を發し、肥前の港から乘船して都に發向した。パドレ・ルイス・フロイス及び日本人伊留滿ロレンゾオが一緒である。船長は豐後の國主に誓つて、長門の諸港には寄るまいといつた。是れは毛利氏が基督を憎み、又之を庇護する信長の敵で、而も信長とは正に開戰中であつた。歐羅巴の宗旨の首長が都に出づる爲めに、やがて豐後を發するといふことを豫知して、若し領内に寄港するやうなことがあれば之を捉へむといふ計畫があつたからである。

それにも拘らず船は二度も毛利の領土に投錨した。それからまた海上では長い間海賊の追尾する所となつたりなどした。

このロレンゾオ(或は葡萄牙綴でルレンソオ)といふ日本人伊留滿は曾て千五百五十九年(永祿二年)にヰレラ師の案内として豐後の府内から京に上つたことのある男である。その事は ルイス・フロイス師の「日本史」に詳しい。多少、參考になると思ふからその時の船路を記するに、まづ府内を出で沖の濱から船に乘り、モリエまで航し、更に安藝に至り、宮島より伊豫のホリエに出で、風を待つて十日止まり、それより備後の鞆津に達し、ここに又十日滯留し、室津を經て兵庫に行きそれから堺に達したのであるが、この行程は四十四日であつた。尤もその使は便船に乘つて行つた上に、いろいろの事情で船を代へたりなどしたから、普通以上の日數を要したのである。ワリニヤニ師の行は大友氏の別仕立の快船に由つたのであるからもつと早い筈である。クラッセエに從ふに、豐後出杵を發したのが三月一日で、堺に着いたのが聖週の前二日であつたといふからその歲のパスコワが幾日になるか知らぬが、兎に角二十日を餘り越さぬ行程であつた。堺に上陸するや直に高山右近の居城高槻に向つた。

高槻

巡察使ワリニヤニ師が高山右近の領地に入ると沿道の歡迎は實に目を見張るものであつた。此地に於て如何によく基督教が弘通せられてゐるかを目賭して巡察使はこの上もなく喜んだのである。

たとへば或日巡察使は一人の高貴たる侍の領土を通過した(この名は諸報告中に之を見ないと云ふ)。その夫人が忽ち來つて師の足下に跪いた。そして手を組いて祝福を與へむことを請うた。師が之には大

いに驚いたのである。元來この婦は善き基督教徒であつた。が、數日前我知らずして爲したる過が大事を惹起す原となつた。然しその位地高きを顧みて、公衆の前にこの悔改めをなしたのである。師はその德を賞め、之を慰めた。

例のコエリヨ師は語る。「右近殿は當時廿四歲であつた。然し信長の寵を得、高槻の城、その他の田園村落を有し、領内の民のうち二萬五千人は既に基督教に入つてゐた。多數の貴人も此内に算せられる。此歲また三千五百の人が新に洗禮を受けた。巡察使は、ここに於て名狀し難き敬愛の感情を以て迎へられた。右近殿は同地に一人の師父の來り住むことを望まれ、八人或は十人の教師の住み得べき僧院を立て、年々の費用を支出した。巡察使の豐後より、都に至る途中この地を過ぎた時は恰も聖週に當つた。教師たちも信徒も師が此に止つて聖週及び復活祭の儀式をなさむことを望んだ。而して儀式は極めて莊嚴に施行せられた。師の到着の報の知れてから日數も立たなかつたのに、美濃、尾張、その他の諸地より貴賤の信徒が參集した。人々は既に久しく師の來るのを待ちあぐんでゐたのであるから、師の堺に上陸したのは日沒の後であつたのに拘らず、使を四方に馳せてその到着を知らせたのであつた。

翌日黎明に八十餘の騎馬の人、多數の徒步の庶民が師を迎へむが爲めに來つた。ジヤオン、サンガ、オイアカマ（堺より十五里乃至二十里の處である）の貴人は深夜師の着報を得て、火急堺に赴いたのである。人々の師を導いて高槻に至るや、居民の歡喜絕頂に達し、老幼婦女も木盞村より來つた。而してかく莊嚴に音樂、オルガンを以て祝はるゝ祭典はこの地方に於て未曾有のことであつたから人々の驚も亦大であつた。寺院に於ては救世主の柩は飾られ、それを拜し、又身を鞭撻せんとして來れる庶民は無數であつた。巡察使は身の高槻に非ずして、羅馬に在るかと疑ふほどであつた。

次の復活祭の日は日出前二時間から盛なる行列が行はれた。その狀全く歐羅巴に於けると同じであつた。いろ〳〵の色で染められた十字架の旗、彩色せる提灯がその間に雜つた。

畫像、船艦、聖盃、城砦等の形が作られて運ばれた。行列に加はるものは二萬人許であつた。異宗のものも亦之に列し、多大の感動を受けた。後メサが讀まれ、多くの人々がサクラメントを頂いた。

右近殿は多數の教徒を招いて饗應を供した。領主も他の人も大に喜悅して、聖屍祭もまた師の司命のもとに、同じやうに行はれたいといふ希望を陳べた。

而して實際にまた、巡察使が安土山より歸つて途に再びこの地を過ぎ、人々の希望の如く、ここで聖屍祭の儀式を行つたのである。

都

ワリニヤニ師は高槻で復活祭を濟まし、京都へ出て、オルガンチノ、フロイス兩師を隨へて信長に謁した。師が印度から連れて來た黑人が大に信長の好奇心を引いたとも、又信長が師に坂東の駿十疋を贈つたとも諸書に傳へられてゐる。又信長は同年（天正元年）の舊曆二月二十八日に京都で近國の諸侯を集めて「御馬揃」の大競技を擧行した。「禁中の東南北八町に馬場をやり、高さ八尺に埒をゆひ、柱をば

錦にてつつみたり。既に其日にも成りしかば、主上行幸たる。御相雲客殿上人、さも花やかに出立給ひて、左右の桟敷位に随つて列坐せられる。辰に始まり、未に終りしかども、皆見るほども無きやうぞ覺えける。」と信長記にあるがそれである。而してワリニヤニ師も又此席に招かれたのである。その如何に壯麗を極めたかは伴天連の報告に詳しいがそれは「日本西教史」に讓らう。

當時京都の基督教はオルガンチノ師が首長となつて活動してゐた。そのここに至るまでの沿革及びその當時の情勢等は今ここには記すまい。唯今コエリヨ師の書簡から左の一節を拔かう。

信長は小國より起つて既に日本の三十四箇國をその掌中に收め、而かもなほ未だ服從せざる諸國の征討に力めて居る。その爲めに日本の貴族より甚だ恐れられ、彼の敵すらも交を訂せむことを求むるといふ有樣である。然し信長は之を肯ぜず、凡てを屈服せしめむと欲するのであつた。信長は自ら覺つては居ないが、畢竟神の掟をこの國に弘むる爲めに選ばれたものである。彼は神、佛を尊崇せざるのみならず、佛僧及び異宗の徒の大敵である。是等の諸派は、皆富みて勢力を有し大なる城市、富裕なる都會を自家の權力内に容れむとし、信長に抗した。彼等の敵對がなかつたなら信長は疾くに日本全土の主となつて居たのである。信長は毫も容赦なく彼等を攻めて既に其大學林を毀ち、伽藍、僧房を焚き、皆之を其將士に分つた。それで他の諸侯も之に倣ひ、佛僧を伐つたが、我會(耶蘇會)の教師に對しては好意を盡した。殊に今年信長は我等に特別の友誼を表し、その居城(安土山)の一好地を與へてここに寺院、住居を建設せしめた。そして巡察使が都に來るや大なる敬意を以て之を迎へたのである。云々。

安土

巡察使は京都から安土に往つた。いつの日であるか詳しいことは分らない。コエリヨ師は「信長は都に上られそこで巡察使に會はれた。信長が安土山に歸られると、巡察使も亦やがてその後を追うて安土に來た」と言つてゐる。シヤルルヴワ師は巡察使は「馬揃ひ」の前後信長と共に安土に往つたと言つてゐる。孰れにしても師は京都にはさう長く滯在することなく安土に赴いたと察せられる。そして京都並にその附近の宗教事情を巡視したのは、多分安土に二箇月滯在ののちのことであると考へて可からう。

巡察使が安土に赴いて最も重要なる要件はその地に基督教寺院及びセミナリオを建設することであつた。是等の普請は同年の初冬十月頃にはまだ準備中であつたことは、信長公記に「十月七日愛智川邊、朝鷹つかはされ、御歸に桑實寺より直に新町通御覽じ、伴天連の所へ御立寄、爰に而御普請の樣子被仰付。」「十月廿日より伴天連北南に二通、新町鳥打へ取鎮立されられ候はん由にて、御小姓衆御馬廻衆へ被仰付。足入沼を埋めさせ、町屋鋪、被與、御普請在之。」とあるといふので分る。ワリニヤニ師はオルガンチノ師を以て安土のセミナリオの長とし、フロイス師を京都のパドレたちの指導者となした。

安土に於てワリニヤニ師が如何に信長に待遇せられたか、又そこのセミナリオの模樣はどうであつたかと云ふことは、予は之を前稿の「安土城記」(「改造」大正十四年四月號)に詳記したから今ここには

記さない（尤も同記は幾分小說化したが、大體は事實に適ひ、殊にコエリヨの報告に據つたものである）。

唯ここのセミナリオは、ワリニャニ師の去つた後（天正十年中ならむ）竣成して、オルガンチノ師の外に四五人の伴留滿あつて、廿五六人の貴族青年を教育したといふことをつけ加へて置かう。而してそれ等青年のうちには實に伊東義益の第二子ドン・ジエロニモ伊東祐勝が雜つてゐたのである。

コエリヨ師曰く「我々は神の恵に由つて、是等の青年に多大の收穫のあることを望んだのであるが、皆その育善く、賢く、且つ語學も上達したから、豫想以上の結果を得ること疑なき所である、云々」

なほ予が「安土城記」を書いた時にまだ手にすることの出來なかつたフロイス師の日本歷史（獨譯本）の記に興味ある事柄があつたからこの序にここに引用しよう。それはヨホウ・パウロの子ヰセンテ法印が千五百八十四年まで安土のセミナリオの教師をしたといふことである。然らば上記のイルマンの一人であつたらう。ヨホウ・パウロの如何なる人であるかは日本の文獻に徵すべきものがないさうである。シュウルマン及フオレチュ兩氏（譯者）に從ふと、パウロの子は千五百三十八年と千五百四十四年との間に若狹で生れ、受洗後ヰセンテ・ヰレラ Vicente Vilera の名を得た。千五百八十年に耶蘇會に入り、カテシスト、教師及び著述者として活動した。安土の後には大阪、長崎、京都等を往來した。日本支那の文學上の教養あつて、多數の宗教書を著述或は飜譯した。彼は巡察使によつて京都の方面に遣はされ、安土のセミナリオの少年に日本の宗派について講義した云々。」

近畿の巡察

ワリニャニ師は安土に止ること二箇月で、一まづ信長に暇を告げ、京都及びその附近の教徒を見まふことにした。信長も快く之に同意して、その領分のうちなら何處でも自由に旅行し、說教して差支ないと言つた。

さてワリニャニ師が巡回した地方の事情は如何であつたか。是も亦コエリヨ師の書簡に聽かう。但しそのうち不明な地名、人名はまた之を考證する機會を有しない。

書簡に曰く、都及び其附近の耶蘇教も今年は其數を增した。前年までは唯一つの僧院が有るばかりであつたが、今年はそれが四となつた。即ち安土のセミナリオ及び僧院（是等は日本に於ける最も立派なものである）津の國の高山右近の領地内に於ける僧院及び河内に於ける僧院がそれである。この地方に於ける基督教徒の數は二萬五千に及び、教役者の數も亦增加して八人のものが十四人となつた。それは五人のパドレと九人の伴留滿とである。是等の人々は附近の諸地に遣はされ、播磨、越前、美濃、尾張までも神の掟が弘通せられた。安土のセミナリオの諸規定は有馬のものと同樣である。

都は九州よりも人々が富裕であり、都雅である。基督教弘通の效果は隨つて一層大なるものがあるだらうと信ぜられる。佛僧もここに莊嚴なる伽藍を建ててゐる。それ故に又巡察使もここの布教は特に意を用ふべきであると考へたのである。

巡察使は都の附近の諸地を歴訪した。多數の貴人は喜んで師を迎へた。或地方では十里廿里を遠しとせず、教徒が群集し來つて、師はそれが爲めに晩餐を設けて、千に餘る人々を饗應した。又人々は師の豐後に歸る爲めに五艘の船を準備せむと提議した。然し師は既に大友宗麟の大船を有するを以て之を斷つた。

又曰く都は内裡の住みたまふ處なり。内裡は日本の主上なるが、今は×のみである。然しここは日本第一の都會である。それで巡察使はここに一の僧院を建築せむと決心した。然し異宗の壓迫が甚だ大きい。前年までは我等に一の住居をさへ貸し與へなかつた。そして辛じて、異宗の人々に取り圍かれた街隅に小さい場所を見出したのであつた。

この度は信長の好意によつて一寺と一僧院とを建てた。寺院は小さいが、美しく、且釣合よく造られた。内部は巡察使の齎らされたる燭臺、銀瓶、畫像、聖壇等を以て飾つた。

この寺は然し甚だ世間の耳目を聳動せしめ、從つて佛僧の反感を招くこと多大であつた。この年都に於ては三百の人々が受洗し、そのうちには貴族もあつた。

オルガンチノ師は安土に他の家屋を建築した。

巡察使は印度より多數の伊留滿たちが來るならば都にコレジオを建てようと企圖した。ここを中心として諸地方に布教師を出さむと考へたのである。この目的を以て既にルイス・フロイス師は一日本人伊留滿と共に越前に遣はされた。そこにはシユストオ高山（高山右近）の父（ダリオ、高山飛騨守）が居た。都より七十五里の處である。ここでも貴人の歡迎を受けたが、殊に高山右近の父母は喜んで之を己が家に逗留せしめた。パドレがダリオの家に留るといふ報知傳はるや、人足人はここに集り來つた。日夜説教し五十人の改宗者を見、ここに小寺院の基礎が築かれた。フロイス師はその同伴者の病氣や、戰爭の爲めでその地の人々の不安があつたりした爲め、長くはそこに止まらず都に引返した。

巡察使はダリオの居地より十五里離れたる處に赴き、そこに篤信の教徒レオンを見出した。

他のミツシヨンは播磨國になされた。巡察使はそこに一人の伊留滿を遣つた。

美濃、尾張にも亦一人のパドレ、一人の伊留滿が遣はされた。信長の長子（三位中將信忠）は之を厚遇した。而して巡察使自身も亦この地方に赴いたのであつた。

コエリオ師はなほ河内及び攝津の事情に就て物語る。

高槻は津の國に在つて四人の異宗の領主に分割せらるゝが、そのうち高山右近のみは基督教徒である。それに接するは河内國であり、又多くの領主の割據するところである。然しその二三の者は基督教徒である。オカヤマ、サンガイボウ、ソボシンガラ、及び堺では、凡てゞ六千人ばかりの教徒が居る。

オカヤマは基督教徒たるジヨワン・ヨワキ殿（Jouguin-dono）の領する處で、その附近の村落を併せ四千五百の教徒がある。城市は高槻より九里、都より二十七里のところに在る。このヨワキ殿と高山右近とは好誼がある。ヨワキ殿はその齡、その勢力は劣るが、その信仰はジユストに譲らない。

ジョワンの母の兄弟のジョルジエ・ジヤヒチ殿（Giufuchindono）といふはまた古よりの教徒であり、その高徳を慕つて、人々は之を父と呼びなした。彼はその記憶に由り、初めて日本に来れる我が協会の師父たちの名を書き記し、内に綿を挿み、表に絹を置いた美しい書籍を作つた。又それ等師父たちの手紙を集め之を切つてその書中に貼り込んだ。かくしてそれを宝物として珍重し、教徒の敬ひまた羨むところとなつた。オカヤマにはジョルジエの力により一教会が建てられた。

オカヤマより三里の処にサンガと云ふ島がある。その領主も亦基督教徒である。その住民五百もまた教を信じ、一の寺院と附属とがそこに建てられた。

この島より六里の処にシモン・タガ殿（Tagandono）といふのがある。この河内の国は二部に分たれ、その一部は異宗の君之を領し、他は基督教徒たる三人の君の領する所である。シモンはその三君のうちの一人であり、その女はオカヤマのジョワンと結婚した。そしてその領民をして教徒たらしめた。彼は三三の城に住んだ。八百の教徒がそこに在つた。然し寺院はまだない。シモンはやがて之を建設せむと企ててゐる。之に隣接する二国の領主のうち一人はシモンの義兄弟でありノマ殿（Nomandono）と呼ばれた。この人もまた師父に対して好意を有したのである。

そこよりなほ十五里乃至廿里の処にトボシガタ（Tobexingata）の城市がある。この地方はまた三人の君の領する所である。そのうち二人は基督教徒である。然し地域は大きくなく期待する所も亦随つて少い。他の更に一なる領土を有する一人の君は今年改宗した。その息の一人はシモンの一女と結婚した。そして全領土を挙げて基督教徒たらしめやうと力めて居る。その父の死んだ時にその子（シモンの女の夫）がその家督を継いだが、その歳は十一に過ぎなかつた。近くさういふ例があつたので、人々は或は信長のその領地を削つて之を他の功臣に与へはしまいかと憂慮したのである。そこでシモンはその少年を携へて安土山に詣り信長に謁し、贈るに重宝の刀と帷子とを以てした。信長は之を喜んで、地を換へ又は之を削るやうなことはしなかつた。而して贈る所の宝刀も之を少年に返した。巡察使が河内を訪づれた時、人々はこの地方に一師父一伴侶を遣はされむことを望み、師も亦之に同意した。

堺は三三より十二里離れてゐる。日本の大都の一である。多くの富豪此に住み、領主といふものなく、自治の制度を有するから人々は之をレプブリカと呼んだ。人々は此に特権と自由とを受用し、他の城市の常に戦禍に悩まさるる時にここはいつも平穏である。これ等の理由からして、我々の師父たちは此地に附属を置かむことを望んでゐた。然し仏僧の反対や莫大なる費用を要するといふやうな関係からその事が延引してゐるものであつた。ここの貴人のうちにパウロ・ボンダイ殿（Bonduindono）と云ふがあり、Tobexingata の君である。その人の助に由つて、附属を建てることが出来た。そして今度は更に市の中心部に移転する機会を得たのであつた。人々は更にここに、寺院の外に更に一の墓林を作らむといふ希望を有してゐるのである。

さて巡察使ワリニヤニ師はこれ等の場処を歴訪し、そして到るところにメサを読み、洗礼の式を行つた。各地に於て約五百人の人々が洗

寵を受けたのである。

ワリニヤニ師都を辭す。又土佐の長曾我部元親の事

近畿地方の巡回を了へてワリニヤニ師は再び安土に戻つた。その時信長が繪屏風を賜つたこと、また花火を揚げ、城に提灯を飾つて盛大な祭典を擧げて師に誇示したことなどは前記の「安土城記」に之を記した。

さて巡察使は信長に別れを告げ、いよいよ安土の地を去つた。オルガンチノ師が之を堺まで見送つた。師が再び高山右近の高槻を過ぎてそこで聖體の祝日の儀式を行つたといふのは、この途であつたのか、或はそれは安土を留守にして近畿を見廻つてゐる間のことであつたのか分りかねる。師は陽曆三月末に初めて高槻に來り、四月の始めに京都の馬揃を觀、それから安土で二箇月暮し、近畿を巡察して再び安土に歸り更にそこを辭して、再び高槻を通つて聖體祭を施行したといふと少しく勘定が合はない。或は始め安土に止まつたが滿二箇月ではなかつたかも知れぬ。尤も是れは聖體祭を六月上旬と見ての計算である。それは兎も角も、高槻では再び盛なる行列をなし、寺院の前に穹窿門を造り、街道に灯を燃した。また多數の人々に晩餐を供した。皆右近の負擔する所である。

かくして、多分盛夏の候であつたらう、ワリニヤニ師は堺から乘船して歸途に就いた。コエリヨ師は、その航路一島の外側を廻るに在りといふが、蓋し是れ四國を指すのであらう、長門の海賊を避けて此道を取つたのである。この島には故あつて一箇月も滞留したと云ふ。

當時ドン・パウロの長曾我部氏は戸島といふ小島に流竄してゐたらしい。元親がその臣[illegible]氏の領く所となり、難を避けて岳父大友氏に寄り、千五百七十六年に（モンチ師の手に由つて）洗禮を受けたことは既に述べたが、後また迎ふる所となつて、岳父より分たれたる手勢を具して土佐に歸り、ヨサガミ氏をハタの地に擁立し、自らは平和な基督教徒として、宣教師の爲めに寺院、僧院を建ててやつたりしたが、此事がまた異宗の反感を買つて、再び謀叛が起り、元親は戰場に傷き、遂に彼の長島に韜跡せざるを得ないに至つた。

コエリヨ師に據るに、ワリニヤニ師はその長島から十八里距つた處まで來たので、人を遣はして元親を招いたといふ。元親は直に一船を艤して之に赴き二時間師と物語つた。（シヤルルヴワ師はワリニヤニ師自ら元親の居處に到つたと記してゐる。）師は元親の客歡に應じたが、元親は既に世間慾を離脱して少數の臣僕とそこに滿足して暮してゐたのである。そして異宗者の間に唯獨りの基督教徒であり、その教化を及ぼすことの出來ないのを悲しんだ。そして己が信仰の告白をなして、基督教徒として生き、基督教徒として死なむことを誓ひ、師にして若し彼が死を豊後にて聞かば、寺院に到つて彼の爲めに祈らむことを求めた。是れ彼が、四年前に受けた重傷の爲めにその身の甚だ衰へてゐるのを知つたからである。又元親は、近日その一子十三歳なるを遣るから之を伴つて有馬のセミナリオに入れむことを依托した。

ワリニヤニ氏豊後に歸る。並にその地方に於ける寺院、僧房及び學校の事

初秋或は中秋のことであらう。ワリニヤニ師は元親の一子を連れて豐後に歸着した。宗麟はなほ豐後の政事を見てゐた。ワリニヤニ師のその間の詳しい消息を書いたものをわたくしはまだ手にしない。[illegible]の諸[illegible]はただ師が日本の青年を歐羅巴に送る企圖の實行に努力したことを記するのみである。唯シヤルルヴワ師はその頃豐後に於て「日向の女王その息女と息女の二子と共に寺院の懐に入つた」と記してある。日向の女王とは前にしばしば述べた、伊東義益の夫人を指すのである。その女、その孫に就いて今之を考ふる便りがない。

此機會に於てコエリヨ師に據つて九州の寺院の状態を一言しよう。

アレツサンドロ・ワリニヤニ師が日本に於ける基督教教師の僧院、駐在地を巡視して九州に歸るや、新に一つのヸセ・プロインシアル（副管督）を選び（コエリヨ師はそれを以て己たりとは記さず）その下に、兼ねてより人々の希望せしが如く、日本の管轄を一教區となすの制度を定めた。而して支那の僧院等も亦この監督下に在るのである。然しマラツカ、マルツコの如きは地の理に從ひ前の如く印度のプロインシアルに直隷するのである。

日本に於ける基督教區は三部に分たれ、その各に於てそれぞれの僧院、駐在所を有す。これ等は今や十四で、コレジオ一、修道院一、セミナリオ二の他に十箇所の僧院があるのである。師父、法兄弟の數は七十人である。目下の企圖としては都にコレジオを建てることで、印度より有徳の人の來るを待つてゐる。今年修道院に入れるは二十人の修道士であり、うち八人は葡萄人、他は皆日本人である。二つのセミナリオには五十人の青年がゐる。多くは貴族の子弟で、そのうちには日向の侯の一子及一孫、有馬侯の血統のものもゐる。

九州には始め十の僧院を置く筈であつたが師父法兄弟の數に乏しい故之を五つに縮めた。各地にパドレ、イルマンの七人と三四人の日本人の通詞が住んでゐた。

就中修道院は臼杵に在る。是れは昨年（千五百八十一年？）の聖誕祭の夜始めて開院の儀式を擧げたものである。そこには日本人六人と葡萄牙人六人とが學問にいそしんでゐる。巡察使は京より歸つて後なほ二箇月この地に滯留し、その基礎を確立する爲めに努め、屢々葡萄牙語の演説を以て人々を鼓舞し、フロイス師之を日本語に傳へた。今や修道師を併せ協會の人々二十人がこゝに住んでゐる。最新のもの、建築費及び維持費はドン・フランシスコ凡て之を支辨した。而も僧院の間にも拘らず、態々都から工人を呼んで技術の精巧を期したのである。巡察使が都より歸ると、そこの堂を完成せしめ、莊嚴なる儀式を以て祭典を行ひ、府内その他より師父法兄弟その他の人々來つてその行列に參加した。

教師の不足からノセン（コエリヨ師は Nosen に作る）の駐在所は之を撤廢し、一パトレ、一イルマンは之を他に遣はした。

府内のコレジオには師父、法兄弟十三人が在つて主として拉丁語及び日本語習得に勉勵して居つた。殊に日本語に關しては辭書、問答書を作成した。(もしこの事が確實であるとすると多分後に千五百九十年代に出版せられたる諸書の稿本であつたのであらう)で

又有馬のセミナリオに於ては巡察使が都から歸つて來たといふので、そこの學生たちが歡迎會を催した。巡察使はその有樣を見て大に

喜び、巡察旅行の困難も之を以て十分償はれると云つた。青年たちはセミナリオの廣間に自作の詩を張つたり、又それを色紙の細工で裝つたり、禮拜堂や聖壇などをば畫圖や堂像を以て飾つたりした。それ等の事の裡によく秩序調和が保たれてゐた。そしてその日は有馬の貴人の縱覽を許したので、人々は競つてこゝに來り嘆賞した。また有馬侯も自らその儀式に臨席し、他の人々と共に巡察使を歡迎しセミナリオの裝飾を賞められた。

大村に於てはその僧院に二人の師父と二人の法兄弟があり、その附近の五つの寺院は皆その監督のもとにある。巡察使が都から歸つて大村純忠を尋ねると、純忠は熱心に之を迎へ、その聖誕祭をば大村に過されむことを懇望した。而して師の司令のもとに甚だ莊嚴に施行せられたのであつた。

巡察使はその他、日向、薩摩等の教徒を、見まつてゐる。その事は、當時平戸、天草、等に於ける基督教の事情と共に、今は本稿の餘りに長くなるのを恐れて、之を詳記しない。

ワリニヤニ師日本を去る事、並に四青年留學生の事

ワリニヤニ師が京都から歸つて急いで決定しようと欲したのは、夙ねてから計畫して置いた通り、日本の青年を歐羅巴に遣はさうといふことである。今の言葉の留學といふのが師の意圖を現はすのに最も適當な言葉であると思はれる。こゝにまた同時代の聞見者なるコェリヨ師の言に據るに、「もし日本の基督教王たちが日本より羅馬の法王廳に使者を派遣し、その名に於て基督の代表者に歸依の情を表はしたら法王の喜は如何に大であらうとワリニヤニ師は考へられたのである。

「之と共にエスパニヤの基督教王を訪ね、歐羅巴の重要なる諸地を巡覽し、諸々の好事を聞見し、殊に歐洲諸侯の高貴、羅馬諸寺院の莊嚴を拜したならば、自らの見識をも高め、又再び故國に歸つてのちは、この國の人々に其親しく目睹せることを傳へ教ふることを得るであらう。この國に於てわれわれの事業の阻礙せられるのは、人々がわれわれ基督國民を以て劣弱のものにして生命肉體の糧を得むが爲めにこの國に來りて新教を說くと誤信するが故である。われ等が本國に於て凡ての利福を棄て、而も海山遠離の國に來るものなることを信ずるもの殆ど無きが故である。

「また一方に巡察師はからも考へられた。若し是等の日本使者が歐羅巴に赴いて、その性情、その悟性、その典雅、其怜悧を示さば、法王及び諸々の基督諸侯も之を尊敬するに至るべく、隨つて基督の爲めに、この國民に對して多大の援助を與ふるを厭はざるべく、ここに新寺院を建設する我々の事業も隆盛を來すであらう。是を以て巡察使は諸王と談合して、四人の高貴なる基督教青年を歐羅巴に送ることに決したのである。

「その一人はドン・マンシオ Dom Moncio であつた(前に屢々記した日向の伊東義益の妹の長子である。その名は確かには分らない。)是れ日向の王の孫であつて、豐後王の血族である(シヤルルブワは豐後の王の甥と記す。またその歲は十五歲であると言つてゐる)。この者が豐後王の書翰を携へ、王の名に於て法王の足に跪くことになつた。も一人はドン・ミゲル Dom Miguel (千々石清左衞門なりと云ふ。)である。是れ有馬王の甥で大村侯ドン・バルトロメオの孫である。この青年はこの兩侯の書翰を携へて法王の許に到るのである。その他に二人

の貴族青年が之に隨ふ。一人はドン・ジユリオ Dom Julio（中浦某）、一人はドン・マルチニヨ（Dom Mortinho）（原某）である」

ここに少しく註解を加へる必要がある。大友宗麟は始め安土のセミナリオに居るドン・ジエロニモ伊東義勝を正使として遣はす積であつた。然し近く印度に出帆する船に間に合はなかつたからドン・マンシオを以て之に代へたのである。これ等の青年たちは殆ど同じ年配であつた。而してワリニヤニ師自身これ等青年を歐羅巴に導く筈であつた（この事その後故あつて實現せられなかつた）そしてなほ師傅としてヂエゴ・デ・メスキタ師がジヨルジエ・ロヨラといふ日本の法兄弟を隨へ一行の同伴者となつたのである。

又宗麟の方から言へば、その常に念頭に懸くるところはフランシスコ・シヤギエルに對する仰慕である。彼等青年を遣はすのも一にはその福趾を祈る念からであつた。そして初めは特に大船を艤装して之を送る積りであつたが、ワリニヤニ師の意見として之を廢め、便船を藉りることになつた。師が法王、西班牙王及びコンパニヤの長老たるアクワギワ師に宛てた書翰にもこれ等青年に對して過分の榮譽を與ふるのは不必要である。寧ろ多大の愛情を示すべきであると記されてあるといふことである。

「大村侯は、始めドン・ミゲルの母のその子の旅行を悲しみ、之を許さざるべきを憂慮した。ドン・ジユリアノの母に於ても同樣であつた。これ等女性を說伏するの人々は大に骨を折つたのである。それで母たちも、もはや之を阻まず、却つて快くこの擧に同意するやうになつた。

「これ等の使者たちは孰れも皆甚だ壯かつたが、然し法王も歐羅巴の諸侯も彼等の智德を見ば之を愛し之を重じ、而して我々の協會のこの國に於てなしたる貴き事業の效果を認むるに至らむことは疑ない所である。」とコエリヨはその書簡に記してゐる。

かくして千五百八十二年二月二十二日（天正十年正月三十日）一行は葡國商人イニヤシオ・デ・リマの船に乘つて長崎を出帆し歐羅巴に向つて出發した。

後記

ワリニヤニ師は一行を伴ひゴアまで來たが羅馬よりの命令で印度に止ることになつた。

さて一行のそれから先きの旅行に關しては、われわれは既に明治十一年出版の太政官本局の翻譯本「日本西教史」の第七章に出つてかなり詳しく之を知ることが出來る。この章は主として千五百八十五年出版の Guido Gualtieri の日本使節紀に據つたものらしい。然し或部分に密であり、或箇所には粗であることを免れない。それでわたくしはその原書の翻譯を企て已にその一部を雜誌「思想」に掲載した。

またワリニヤニがその後印度に在つても、日本青年の教育の事業を忘れずに、その爲めに自らも拉丁文の書を作り、又人をして之を作らしめたことなどは、日本文化史上の甚だ興味ある一節である。然しこの事は先年わたくしは「ぽるつがる記」（思想大正十四年）其他の小稿のうちに記したことがあるから、今重ねてここに述べない。

即ちこの稿は日本青年使節研究の準備である。後日好機會があつたら更に未だ見ざる原本に就き或は日本側の史書を參考して、誤謬をなほし、遺漏を塡めむと欲するものである。（八月廿一日夜脱稿。）

最も價値低き生活の上に

武林無想庵

Villa Lcs Pinr, Cras de Cagnes, A. M., France.

——一千九百二十六年十月五日。

どうも、かう、始終わく〳〵して、一瞬間も心に落ちつきをもたないやうに素質づけられてゐる、わたしのやうな人間には、小說を書くなどといふことは、どう考へても、よほど無理だ。

かうした日記が、そのまゝに小說であり得る場合をのぞいては、わたしにはどうも全く小說家としての資格はなさゝうだ。

ながい年の經驗上、文章を書くにあたつて、わたしは刻々のわたし自身の心理狀態をばそのまゝ無邪氣に叙述してゆくといふ、この特殊の形式が、どうしても一番わたしに適當したものゝやうに思はれる。

——つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にうち向ひて……と、日本では誰でもよく知つてゐる文章の書き方がある。

つれ〴〵草は小說ではあり得ない。小說ではあり得ないけれど、生命の書ではあり得る。わたしはつまり生命の書がつくりたいのだ。生命の書をつくることに、一生を獻げつくしたいのだ。

一千年の間に、日本には、さうした書物をつくり得た人は、わたしの記憶では、たつた三人しきやなかつた。淸少納言がその一人だ。兼好法師がその一人だ。さうして齋藤緑雨がその一人だ。

所謂隨筆を書いた人は澤山ある。けれども隨筆を書くより外に全くその生命のもつて行きどころのなかつた文士は、非常にすくない。業平には短歌があつた。蜀山人には狂歌があつた。露伴、鷗外、漱石、荷風等には、單なる隨筆の上にのみ、その全生命を見出すべく、あまりに豐富なその他の才能があつた。

さう、まだもう一人あつた。『方丈記』の作者のあつたことをわたしは一寸度わすれした。で、都合四人だ。幸にしてそのうちへ若しわたしを加へることができるなら、都合五人となる。

なんといふわたしは思ひあがつた人間であらう？　わたしは果して

さうした一千年間の一民族のうちに、五指を屈するにも足らぬほど珍しい人間の列へ、堂々として伍し得られるだけの、本當に人間らしい心を有する文士なのであらうか？ わたしはどうしても誇大妄想狂だ。

が、どうかしてわたしはこの一度生まれて二度とは生きられない人生のうちへ、その人生そのものゝ價値をば、そのまゝに文學に具象して殘してゆきたい一念にもえてゐる。

詩でもない、小説でもない、戲曲でもない、また哲學でもない。つまり、あゝでもない、かうでもないのである。要するに、醋豆腐なのであらう。さうしてそれにも拘らず、何かしらん書かずには生きてゐられないのだ。何かしらん直接心に觸れて來ることをば、文字のかたちに直して置かなければ、一日として安心がならないのだ。

* * *

不快だ。どうしても不快だ。小説として書きはじめた文章を讀みかへすと、たまらなく不快になる。努めてあとを續けようとすると、いひやうのない不快さが、心の底からムッと突きあげて來て、ピタリと續けようとする筆先をとゞめて了ふ。と、例の、ゐても立つても、どうしてもゐたゝまらぬ、不安きはまつた心の狀態に陷る。

* * *

本當のことを書かうとして、知らず〳〵ウソを書いてゐるからなのだ。

* * *

――まことはうその皮、うそはまことの骨、うそとまことの仲の町、迷ふもよし原、悟るもよし原。

蜀山人にこんな文句があつた。はじめてその句に接した時、わたしは躍りあがるほど嬉しくてたまらなかつた。

――拈華微笑の猪牙にのりて、涅槃の岸に纜をとかせ、面壁九年のゐつゞけは、なんぢが尻のくされ縁か、金がふんだんだるまなるか、から〳〵唄ッ。

かうした爛熟したデカダンスの上で、一生飄忽としやれのめしてゐられた時代もあつたのだ。さうしてそんな時代はとうの〳〵昔この地球上から名殘りなく消え失せて了つてゐる。

――潯陽地僻にして音樂なし。

それにも拘らず、同氏には『琵琶行』の名吟があつた。

わたしはクロ・ド・キヤアニュに流離しつゝ、三十年來の解けやらぬ懊惱に、七顛八倒しつゞけてゐるだけだ。

――十月八日。

どうしてからわたしは自分を責めてばかり暮らしてゐるのであらう？　責めれば責めるほど、いたづらにたゞいぢけるばかりの自分ではないか？　わたしのやうに魂のいぢけきつて了つた人間はすくない。マンフレツドではないが、わたしの眼は全く外を見ようとしない。さうしてたゞ内にばかり意地の惡い瞳を向けてゐる。

意地の惡い瞳は探海燈のやうにたえずわたしの心の底をかきさぐつては、そこに何物をも發見し得ぬ、あまりに貧困なその内部をばあざけり笑ふのだ。さうしてたま／＼あるものは、オヅ／＼した食慾と抑壓された性慾の糟ばかりだ。意地の惡い瞳は、それ見たことかと、あからさまにその糟の上をば照らしつけて、一層意地惡くあざけり笑ふのだ。

なぜもつとのび／＼とした心持にはなれないのであらう？　なぜ意地の惡い内部の瞳をとぢて、あかるい、のどかな、生きて生甲斐のある世界の方へ、活潑に地の魂の兩眼をば見ひらかぬのであらう？

わたしの心のうちには、かつてゲーテがあつたやうに、たつた一つの心のうちで、互に相容れないファウストとメフィストフエレスとが、永遠にいがみあつてやまないからだ。

靈と肉、天使と惡魔、善と惡、——人間であるかぎり、必ず一生苦しまなければならぬ、根本的の矛盾性から、たしかにそれが來てゐるのだ。さうしてその矛盾性こそは、とりもなほさず道徳生活の發足地であるからだ。

自責は道徳の序だ。さうした瞳ばかり發達してやまぬわたしといふ人間は、ひよつとすると、他の一切をすてゝ、或は道徳的に生甲斐のある無上道をば、しやにむに求めつゝある一種の狀態の上に、常に心の焦點を照準させてゐるのかも知れない。

考へて見ると、わたしの過去は、要するに自責のみの生活であつた。酒と女と藝術との阿片から離れた時、三十年來のわたしの生活にはたゞ／＼苦がい自ら責むる瞳ばかりがあつた。

嚴格に云ふまでもなく、わたしは佛教徒ではない。キリスト教徒でもない。儒教の信者でも、道徳の信者でも、シントイズムの信者でもない。新しいイズムから云つても、決してソシアリストでも、コンミユニストでもない。わたしのやうな心の狀態にゐるものをば、舊宗教は異端者と呼ぶ。新宗教はブルジョアジイのクラスに編入する。

しかもわたしは日一日として正しい本當の人間生活を求めて／＼やまないのだ。なぜか？　わたしの生活はつねに正しくないからだ。つねに本當ではないからだ。然らば、その正しい本當の生活とは何か。トルストイの言葉をかりれば、嚴格に理性に服ふ生活だ。あくまでも世智辯聰を折伏して、般若智に生きる生活だ。これがわたしの無上道だ。さうしてどうかして日蓮のかつて一生を献げたやうに、「身命を惜しまず」といふ域にまで、この生活を向上させたいと、それ許り希つてやまないのだ。

般若智をもつてすれば、それゆゑに、このわたしの日常生活は、い

かに罵つても、嘲つても、恐喝しても、呵責しても、遂に飽き足る筈はないからだ。

＊＊＊

あゝ、なんといふ空疎きはまつた心境であらう？　なんといふ悪趣味きはまつた文章であらう？。正しく飯を食ひたいために、その日の勞働にあてゝゐる、わたしのこの文章を讀むと、決してこれで正しく飯のくへる資格はないと思ふ。それにも拘らず、わたしはこれを賣つて食はなければ、全く外に賣るものがないのだ。さうして財産と稱する不勞所得をもたぬかぎり、人は必ず何ものかを賣らずには生きられない時代なのだ。

　薩陀波崙菩薩は市に立つて、隨のかぎりに自分のからだの買ひ手を求めた。帝釋天はかれを試みるべく、その肉を要求した。かれは喜んでそれに應じた。摩訶般若波羅密經の作者はシエクスピーアよりも深刻だ。

　薩陀波崙菩薩の賣つたのは血肉だ。鮮血淋漓たる肉塊だ。さうしてわたしの賣つてゐるものは、かうした空疎と悪趣味だ。

＊＊＊

――十月九日。

たつた一萬フランばかりの金の顏を見ると、すぐ氣がゆるむ。さうしてグズ〳〵してゐるうちに、それが三千フランとなり、二千フランと減ずると、忽ち悲觀する。さうして餓死がすぐ目の前に迫つたやうに慌てる。

　つまり、生活に對する自信がないからだ。これで生活を立てようと決心してゐる自分の職業に對して、ハツキリした自信がないからだ。『いゝもの』を書いて送りさへすれば、「改造」では喜んで買つてくれるにきまつてゐる。然るに、その『いゝもの』が書けないのだ。さうして書けるのはこんな愚痴ばかりだ。悲觀の原因はつねにそこにある。悲觀してゐるうちに、日は容赦なくたつ。さうしてその日の食料を買はずにはすごされぬ。せつぱつまつて、書きちらした愚痴を賣りに出す。はる〴〵と日本まで送る。送りつけられた人こそ迷惑だ。さう思ふと、心苦しくてたまらなくなる。

　なぜ『いゝもの』を書くためにわたしはもつと奮勵努力しないのであらう？

――あなたにはどうも物に熱中する力が乏しいやうに思ふ。と、そばで見てゐる妻が云ふ。

その通りだ。わたしには熱が足りない。が、たゞ足りないではすまされぬ。死火山でさへ機會が來れば爆發する。どうにでもしてこのほとんど死滅したやうな心に口火をつけなければいけない。

　わたしの心は死んでゐる。三十年前から死んでゐる。わたしは死のやうに冷めたい心を抱きながら、なるがまゝにたゞ肉體のみの生くる

にまかせて來た。從つて三十年來のわたしの生活は、要するにたゞ盲動であつたものにすぎぬ。

＊＊＊

あゝ、三十年！　さうしてその長い間、わたしは一體、この世の中で、果して何をして暮らして來たらう？　物心づいてから後の三十年なのだ。文藝をもつて身を立てやうと志してからの三十年なのだ。モオパッサンなら、もうとうの昔、さッさとその全集をかたづけて、さッさと死んで了つてゐる。ゾラならば、規則正しい執筆の下に、ルーゴン・マッカールの大篇を殘らず書きあげて了つてゐる。

あゝ、三十年！　その前半をば、わたしはたゞの親の脛かぢりとしてのみ、徒らに暮らして了つたではないか？　さうしてその後半をば、惜しげもなく親の遺產を蕩盡することのためにのみ、ムザ〳〵と費して了つたではないか？

わたしは今日一文なしの境涯になつたことを悔ひない。たゞ一篇の人に示すに足る作品を書き得なかつたことを愧づる。

＊＊＊

——十月十日。

——十月二十九日。

とにかく翻譯の一部を纏めてしまふやうに、妻に催促されて、この十八日間、はなはだ不完全な字書を唯一の力として、曲りなりに漸く纏つた五十枚だけをば、ゆふべで、どうにか片づけて了つた。

妻のフランスで出版しようと企てゝゐる醫者小說の第一編が、これで一トまづ完成されたかたちだ。さうしてこれを例のリシテル氏に訂正してもらひさへすれば、とにかくそれだけを一ト纏めにして、巴里のファスケル氏の手許へ送りとゞけることができる。

が、ファスケル氏がそれを讀んで、果して何と云つてよこすであらう？　去年妻に向つて勸めてくれたとほり、果してそれを『ルウヴル・リイブル』へ掲載するやうに取計らつてくれるであらうか？　さうしてその一册の書物としての出版をば、快く承諾してくれるであらうか？

＊＊＊

わたしのしてゐることは、すべて冒險だ。さうしてその冒險は、三十年前、わたしの文藝に志を立てた時からはじまつたものだ。

＊＊＊

——十月三十日。

——文學とは何ぞや？

夏目漱石先生でさへ、二十餘年の苦悶煩惱の末、漸く倫敦へ留學す

るに及んで、はじめて起した疑問だつたといふ。

——藝術とは何ぞや？

トルストイでさへ、『コサツク』を書き、『クロイツエル・ソナタ』を書き、『戰爭と平和』を書き、『アンナ・カレニナ』を書き、さうした長い長い大努力の末に、はじめてかれの魂にめざめた疑問ではなかつたか？

＊＊

十歳のころから、わたしはたゞ無性に小説を讀むことばかりがすきだつた。それがズツと續いたのだ。ズツと今日まで續いたのだ。さうして恐らく死ぬまでそれが續くのであらう。さうして何が文學か、何が藝術か、つひに分らずじまひになるのであらう。

——十月三十一日。

その時分、わたしが小説を讀みはじめた時分、わたしはよく病氣した。さうして病氣をすると、きまつて寢床の中で小説を讀んだ。わたしは病氣になることを喜んだ。それは公然と學校を休んで小説が讀めるからであつた。それほどわたしは小説を讀むことがすきであつたものだ。

病床の枕元には、灘色に塗つた樫盆の、はなはだ粗末な、小さい本箱があつた。さうしてその中には、丁度今日の講談本を思はせる、その頃の通俗小説が一杯つまつてゐた。

四册つゞきの繪本太閤記、背革に金字で細かくその内容を列記した大岡政談、それよりも厚い赤クロースの本朝俠客美談、三河後風土記、難波軍記、楠公記、前太平記、尼子十勇士、宮本武藏武勇傳、北條美談、越後傳吉傳、大丸屋騒動記、明治太平記、いろは文庫、吃又平名護屋太刀、道中膝栗毛、通俗三國誌、義經再興記——すべてそんなたぐゐのものばかりであつた。

これはわたしの義父の、又その義父なる、すなはちわたしにとつては義祖父にあたる爺さんが、日課の講釋をきゝに行くひまくに、すべて蒐集したライブラリイであつたものらしい。その爺さんは、その頃から四五十年以前、わたしの義父をその養子にした時代には、津軽鰺ケ澤の小さな廻船問屋を營んでゐたものだといふ。さういへば、いかにもさうした爺さんの趣味に相當したライブラリイであつたことが領かれる。

その中で一番最初にわたしを惹きつけたのは義經再興記であつた。その次が道中膝栗毛、さうしてその次が三國誌であつた。

近所の三丁目谷（その頃のわたしの家は麴町一番町にあつた）に年古く住んでゐた、河内さんと云つて、昔は將軍家の典藥の一人であつたとかいふ漢方醫が、始終わたしの病床を見舞つてくれるのを常としたが、來るたんびに、いつも枕元に道中膝栗毛や三國誌のあるのを見て、

――磐雄さんはさう小說がすきぢやア、大きくなつて、どうしても小說家になるね。小說家はよござんすよ。おなんなさい。おなんなさい。種彦のやうなエライ小說家におなんなさい。なんかんとよく云つたものだ。

　柳亭種彦の家と河內さんの家とは緣戚だつたさうで、この人の若い時分には、三日にあげず、『田舍源氏』の作者の家へ、のべつ遊びに行つたものなんださうな。それゆゑに、この人にとつては、種彦が日本で一番エライ小說家なのであつた。

　この人はその後わたしの大學時代わたしの保證人になつてくれたがわたしが中途で大學をよしてしまつたのをひどく殘念がり、胃癌で死ぬ三日前、見舞に行つたわたしの手を、寢床の中から、瘠せ衰へた手でギユッと握りしめて、

　――なぜ磐雄さんは文學士になつてわたしを喜ばしてくれなかつたんだ？　と、落ち窪んだ眼にいつぱい淚をためながら、苦しげにあへぎ〳〵わたしを責めた。

――十一月一日。

――兄さん。

――なんだい。

――兄さん、お嫁さんをもらはない？

――お嫁さん？　不思議だね。わたしにはチヤンとお嫁さんがあるぢやないか？

――そのお嫁さんぢやないのよ。兄さんの本當のお嫁さんよ。

――本當にも、噓にも、お前、お嫁さんは一人にきまつてゐるぢやないか。支那人ならいざ知らず。

　分の厚い、緣なしの、強度の近眼鏡をキラリとさせて、妹は一寸押默つた。兄には、妹のいふ言葉の意味が、わかりすぎる位よく分つてゐた。妹にもまた、兄の答が決してその本心を語つてゐるものでないことは、明らかに讀めてゐた

　二人の視線は、見やるともなしに、利久窓の小障子の上にそれた。まぶしいほどに朝日を浴びたその小障子には、カツキリと染め出された灌木の一部と共に、小鳥が一羽、氣せわしなく動いてゐた。

　――それぢや、兄さんは、あのお嫁さんに滿足してゐるの？　と、しばらくたつてから、やゝ小意地の惡さうに、妹がきいた。

　濃い兄の眉はピクリと動いた。と、かれはシガレツトに火をつけた。さうして苦笑をまぎらすやうに、空嘯いて、煙の輪を一つ大きく吐きながら、

　――なぜそんなことを訊くんだい？　と、きゝかへした。

　――なぜツて……と、妹は下脣を咬んだ。さうして眼は漠然と鳥影を追ひながら、

　――あんな人、あたし、兄さんの本當のお嫁さんとは、どうしても思へないんですもの。と、わかりきつた事を云はぬばかり、はき出

すやうな調子で答へた。
兄は『ふん』と云つた。さうして續けさまにスパ〳〵と煙をすつた。と、紫色の煙が机の上を這ひまはつて消えた。机の上には、さま〴〵の表装をした洋書が四五册、秩序なくちらばつてゐた。ゴリキイの英譯『カムレーヅ、』ヰリアム・ゼースの『プリュラリスチック、ユニヴアス、』ミュッセェの英譯『近代人の告白、』ブラウニング詩集など。
——さうすると、どういふ人がわたしのお嫁さんだつたらいゝと、お前は思ふんだい？　と、すひつくしたシガレットの端をば、眞鍮の灰皿の上へ、やけにこすりつけながら、大儀さうに頬杖をついた顔へ、なかば小馬鹿にした表情をうかべて、かれは何となく嫉むたさうに云つた。
——そりやきまつてるわ。と、妹は事もなげに答へた
——どうきまつてるんだい？
——むろん兄さんを了解できる人でなくちやいけないわ。
——わたしを了解できる人？
——さうよ。
——ふん。わたしにやわたし自身すでに自分自身といふものがまるツきり分らないんだがなア。
——だから本當に兄さんを了解できる人が兄さんには必要なんぢやありませんか！
——自分にさへわからぬ自分がどうして他人にわかる？
——他人だからわかるのです。
兄はカラ〳〵と笑つた。
——それぢやア、わたしのお嫁さんにだつて、キッとわたしが了解できるにちがひないよ。
妹の眼鏡はまたキラリと光つた。
——兄さん！　と、かの女は居ずまひをなほして云つた。——兄さん、あたしは眞面目で云つてゐるのです。兄さんのために云つてゐるのです。本當に兄さんを幸福にしてあげたいと思つて云つてゐるのです。
かの女の聲は低かつたが、その尋常の妹らしい言葉の底に、男性としての兄の本能をそゝるに足る、異様に蠱惑的な或る響きがあつた。
兄の顔色は變つた。かれはテレかくしにブラウニング集を手にとりあげて、無意味にペラ〳〵とページを繰つた。さうしてむづかしい顔をしながら、ジツと妹を見た。
妹はかれの妻よりも美しかつた。就中、透きとほるやうなかの女の皮膚の白さには、新鮮な、淡紅色の血の色が、溌溂と健康に漲つてゐた。傳統的な化粧にその顔を彩どるかれの妻にひきかへて、妹は、あたかも自然そのまゝの美を誇るやうに白粉も臙脂もまつたく用ひなかつた。フランス人形に見るやうな、フサ〳〵とやゝ褐色にちゞれたかの女の髪は、香油の力を借りることなしに艶やかな光があつた。

かれは思はず太息をついた。

利發にかゞやく妹の眼は、妻に對する人知れぬ兄の不滿をば、その太息のうちに決して見のがさなかつた。かの女はニッコリした。

——面白いことがあるわ。と、恰も話頭を轉ずるやうに、不意に陽氣な調子で云つた。

——どんなことだい？　と、つひ釣り込まれて、兄もニッコリした。

——そりや面白いことよ。あたし兄さんには云ふまいと思つてゐたんだけれど、……きかしてあげませうか？

——ウン、きかしてもらひたいね。

兄の顏にはまたさッきの小馬鹿にしたやうな表情が浮かんだ。

——お嫁さんが兄さんをいのり殺さうとしてゐるんですつて。

——なに？　いのり殺す？

——えゝ。

——へえ、そいつは驚いたね。

——ところが、それがとても滑稽な話なのよ。と、妹はいかにも面白くてたまらぬやうに續けた。

——ある晩、猛がそッとあたしのお部屋へやつて來たんです。さうして、『姉さん、大變なことがある。内の姉さんが兄さんをいのり殺すと云つてゐる。』とわく〳〵して云ふぢやありませんか。なにしろ、あのそゝッかしやの慌てものゝ云ふこつてせう？　何をまた早呑込みに勘ちがひして來たのかと思つて、きゝかへすと、大事さうに抱へた内懷ろから、おそる〳〵一通の手紙を出して、『なんでもいゝから、まア、これを讀んでくれ。』と云ふんです。讀んで見ると、それはたしかに兄さんのお嫁さんがこま〳〵と書いた、里へ出す手紙の文句には相違ないんですけれど、不思議なことにはどうしたのか、それがみんな猛自身の手で書いてあるぢやありませんか。あんまり妙だから、どういふわけかきゝたゞして見たんです。すると、どうでせう！……でも、兄さん、猛は可愛いゝ人間よ。あんなにまで兄さんのことを心配してゐてくれるのかと思ふと……實はかうなんです、……兄さんのお嫁さんが、なんとなく人目を避けるやうにして、これを郵便に出して來て下さいと云つて、たいへんに厚い手紙をこッそり猛に頼んだものなんださうです。猛はそれを受取ると、すぐ、この中にはきッと兄さんのわる口がいッぱい書いてあるにちがひないと、直覺的に感じたんですッて。そこで、よッぽど、そのまゝに握りつぶして了はうかと思つたんだけれど、そんな事して、あとでわかると、却つて面倒だから、それよりや、いッそ、この中實を、眼鏡の姉さん……猛はあたしのことをさう云つて、内のお嫁さんとあたしとを區別してゐるんです……に見せた方がいゝと、さう思つて、わからないやうに封をあけ、大いそぎでうつしとり、さうしてそれをあたしの ところへ持つて來たんだと云ふのです。

——へえ！　おそろしく手數のかゝつたことをしたものだなア……

……で、その中にあたしをいのり殺すと書いてあつたわけなのかい？

——ところか、それがちッともさうぢやなかつたんだから、大笑ひぢやありませんか。

——と、なんと書いてあつたんだい？

——かうなんです、つまり、……普通の人の眼では、どう考へて見たところで、どうしたつてあたりまへの人の行動とは思はれない、まつたくわけのわからぬ兄さんの日常生活を、いろ〳〵さま〴〵と書きならべた末、内の旦那様はどうもすこし氣のちがつたお方のやうだから、一日も早くそれが癒つてくれるやうに、あたしは朝ばん佛壇へ向つて祈つてゐます、と書いてあつたわけなのよ。それをあのそゝッかしやの娘か、たゞ『いのる』といふ字だけ讀むと、忽ちカッとのぼせあがつて、前後のつゞきなんぞ見るひまもなく、一圖にさう思ひ込んでしまつたものなんです。……ね、面白い話でせう？

ガラ〳〵と表門の戸が開く音がしたので、妹はヒョイと立ちあがつた。彼女に松葉杖をとりあげて、それを右の腋の下へあてがつた。

＊＊＊

書きはじめた小說の第一回がこれだ。

——十一月三日。

三十年間のわたし自身といふ一節の人間にまつはつた生活を、まづそこから書きはじめて見る氣になつたものだ。が、どうも面白くない。どうも物足りない。かうした何となくサニンくさいあり來たりの表情法では、それがわたしの現在の心境へ、どうしてもシックリと溶け込んで來ないのだ。

——J'aime les nuages… les nuages qui passent…là-bas……les merveilleux nuages!

あゝ、どうしたら、さうしたいかにも自然そのまゝなる、無心な、思無邪な心持で、やすく〳〵と又らく〳〵とこの筆が運はしてゆけるものであらうか？

＊＊＊

間に生れた、たつた一人の女の子を中心として、落體のやうに、しかし又極めて平凡に、わたしのかく今日同樣をつゞけつゝある事と、七年以前、ふとめまぐろしい人間世のやちまたで、はからずその後の結因縁をつくる前までは、丁度三十年といふ長い〳〵月日の間、その四六時中つねにわたしの生命の底を流れ、その四六時中つねにわたしの生活の方向を左右してゐたのは、とりもなほさず、この松葉杖をついたわたしの、、、であつた。

＊＊＊

——十一月五日。

——どうしてさう突拍子もない古い時代の事なんぞ今頃になつて書きはじめる氣になつたの？ そんな誰にも興味のない過ぎ去つた昔の事よりや、現在の生活を書いたらどうなの？

きのふの朝、さう云つて妻に指摘された。

さう云はれて見ると、一言もない。さうして何を妻に云はれても、必ず一言のないのがわたしの常だ。それがわたしの現在の生活だ。その日〳〵に伸びてゆく妻子の生活、それに歩調をあはしてゆく努力、それより外にわたしの現在の生活はない。

時々、なんといふ妻は手前勝手な人間であらう？ と、さう思つて、云ひやうのない不快さを感ずる事がある。と、わたしはすぐに昔自分がわたしの養父母や實の父や又わたしを愛してくれた女達や友人達に對して、妻がわたしに對するより、もつと〳〵、ずッとより以上に手前勝手な人間であつたことを思ひ出す。さうして今更たかゞそれんばかりの妻の手前勝手に對して、わたしは決して不快なんぞを感じてはならなかつた人間であつたことに氣がつく。妻に對してわたしがつねに一言もないのは、要するにそれが爲だ。それほどわたしは過去に於いて手前勝手を極めて來た人間なのだ。わたしはそれが書きたかつたのだ。さうしたこの世に於ける最も愚かな人間が描寫して見たくなつたのだ。何となれば、凡そ手前勝手な人間ほど、それほど世の中で愚かしいものはないからだ。それほど世の中で憐むべきものはないからだ。さうしてその愚かしいもの丶中で、その憐むべきもの丶中でわたしの過去の一生が、どうしてあその價値を極めたもの丶やうに思はれるからだ。同時にさう思ふ事そのまゝが、すでにわたしがいかに愚であり憐むべきであるかといふ立派な生きた證據であるからだ。

* * *

——十一月六日。

雨が降る。十日も十五日もつゞけて降る。波が高い。ヴァル川から押し出した濁水が、赭黒い波となつて、どう〳〵と打ちよせる。時には殘らず砂利濱を洗つて、道路の上までもなめて行く。道がわるい。到るところに濁水の沼をつくる。時に大雷雨が來る。大きな雹が降る。世界で一番美しい空と海とを領有してゐる、四時花のたえぬ南フランスには、こんな事は二十年來ないことだといふ。

けふやむか、あすやむかと、空ばかりながめながら、やんだら久しぶりでニースへ入浴に赴かうと、何日待つて見ても、空は依然として黴つたまゝだ。雨は依然としてたえまなく降りつゞける。そのうちに小遣が乏しくなる。三十フランとなる。七フランとなる。

——炭もないし、お砂糖もないし、お米もないし……どうせ七フランでは足りつこはないから、エピツシエで借りてらッしやい。と、子供の着物にミシンなどかけながら、妻が云つた。

天氣になつたら、入浴がてらニースへ行つて、先日婦人公論から妻のところへ來た原稿料の小爲替を、そのうち入るだけ金にして、銀行

から引出して來る筈が、つひ雨のためにのび〳〵になつて了つたものだ。

——お前はいつもよく錢なしで何でもとつて來つけてゐるんだから、お前行つて來たらどうだ。わたしはまだ一度も借りて來たことがないんだから、却つて借りにくい。と、わたしは答へた。

——だつて、こんなお天氣ぢや、一歩だつて外へは出られやしない。あとでマダムが拂ひに來ると云へばいゝぢやないの。

——まア、併し、ブス代だけのこして、ヌイイでも買つて來よう。

わたしはどうしても借りるのがいやさに、さう答へて置いて、そこらに若しや小錢はのこつてゐないかしらんと、古外套のかくしだの、机の曳出しだの、古鞄の隅つこだのを、たんねんにかきさがして見たところ、そこに二十文、こゝに十文と、かきあつめて丁度四フランほど出て來た。平生われ〳〵が日常生活に對して、これだけ大まかであつたいゝ證據だ。

わたしはそれだけの十一フランなにがしをもつて、雨の中をビチヤ〳〵と食料の買ひ込みに出かけた。

——十一月九日。

北海道の札幌で、けふはわたしの實の母親が、三十四歳の壯齡にも拘らず、何かしらん不思議にからだの肥る病氣のために、あへなく息を引きとつた日だ。

わたしはまだ十七歳であつた。さうして東京にゐた。麹町區一番町十一番地なる、わたしの叔父母の家にゐた。

死んだといふ電報がとゞいた時、叔父母はその電報紙をジツと見つめながら、

——どうせたゞ葬式を送るだけのことだから、今度はもう行くにも當るまい。それがためにこの夏わざ〳〵あひに行つて來たやうなものだからナ。

——わたしもさう思ひますよ。

と、ほとんど符節をあはすやうに云つた。

わたしは別に行きたいとは思はなかつたけれど、さうした叔父母の語氣のうちに……

* * *

けさ、起きぬけ、湧いた感想をば、消えぬうちにと思つて、漸くそれだけ書きはじめたところへ、久しぶりで來た femme de menage をノエミが、この部屋と相對したクイジンで、カタコト勞働を開始した物音と共に、わたしをとりまく雰圍氣が忽ちソワ〳〵と動搖し出して、わたしの感想はそれだけでプツリと切れてしまつた。さうして何だかだと云つてゐるうちに、もう午後の六時半になつてしまつてゐる。

あさ湧いた感想をば、それをそのまゝ思ひのこすところのない程度

にまで、充分に書きつくして了ふには、勿論、一日だけで足りる筈はない。場合によれば、たつたそれだけの感想が、一年も二年もかゝつて書かなければならないやうな一冊の書物になることもあらう。けさ湧いたわたしの感想は、恐らくさうした種類に屬するそれであつたもののやうに思はれる。さうしてノエミの働きに來たことゝ、それとは全く何の關係もない。

* * *

—十一月十日。

—この二三ヶ月あなたの書いてることは、みんな原稿の書けないといふ事ばかりぢやないの。どうしてさう書けないんでせう？

妻は甚だ不思議さうに。また甚だ心元なさゝうに云つた。

—なに、原稿が書けないのぢやない。小説が書けないのだ。

わたしは例のまけ惜しみらしく答へた。

—小説が書けないッて……あんなに年中小説ばかり讀んでるあなたぢやないの。

—さうサ。何よりも小説が一番すきだから、つひ讀まずにはゐられなくなるので讀むんだけれど、それは何も自分が小説を書きたいために讀むんぢやない。自分以外の個々の人間が、いかにそれ〲特殊の人生を體驗してゐるか、要するにそれが知りたいために讀んでゐるのサ。さうして自分の書きたい小説は、わたしでなければどうしても體驗のできない人生をば、わたしでなければどうしても書けない樣式で、でき得るかぎりハッキリと描寫したいのだ。さうしてそれがどうも思つたやうに行かないので、かうして毎日〲苦しんでゐるわけサ。

—さうすると、つまり、あなたのは自畫像ばかり書かうといふわけね。

—さう、畫なら自畫像かも知れない。併しわたしは畫かきぢやない。またわたしは畫を描かうとしてゐるのぢやない。わたしのは文學だ。決して繪畫ぢやない。繪畫と文學とでは、わたしのやうな場合になると、その間に非常な距離が生ずる。世間ではみんな、藝術といふ文字にあやまられて……

—そら、また、いつものネゴトがはじまつた。ネゴトぢや御飯がたべられない。と、妻は遮つた。

われ〲の生活は結局その日の飯を食ふことに歸着する。

—十一月十一日。

珈琲、一エクトオ、パン一キロ、ソオシツソン一エクトオ、それだけで八フランなにがしとられる。

エピシエのかみさんは、品物を一々秤にかけながら、

—何といふいゝお天氣です！ 日本にもこんないゝお天氣がありますか？ などゝ訊く。

來る。

久しぶりの好天氣だ。エピシエの前はすぐ砂利濱で、あを〳〵とした海と空とが、何とも云へぬ心持よい色彩を湛へて、黄金色にちる暖かい日光と共に、その上を漂ひながら、フウワリと居の中へはいつて來る。

——さう、滅多にありませんよ。と、あたしは答へた。

——日本はフランスより暖かいところですか？

——夏はズッと暑いし、冬はもつと〳〵寒いのです。併し、春と秋とは、殊に秋の日本は、そりやとてもいゝところです。

わたしの頭には、錦木の色づく頃の、クツキリとした、いかにも清朗な京都の風光が、ふとねたましく浮んで消えた。

——日本には人口がどの位あります？

——六千萬。

——六千萬！　それぢやア、フランスより二千萬から多いのですね。して見ると、日本はフランスより大きな國だと見えますね。

——けれど、土地はフランスよりズッと狹いのです。

——人口が多くて、土地が狹いのですか？

——さうです。さうして人口のわりに食べものが足りないのです。だから、貧富の懸隔がフランスよりひどくてね、それは住みにくい國ですよ。

——へえ、さうですか？　すると、フランスの方がよつぽど住みいいのですね？

——えゝ。

——あなたはズッとフランスでおくらしになるおつもり？

——えゝ、まア、できたらね。

『實は茲まで來て、立往生してしまつてゐるのぢやないか？』と、例のわたしの心の底で、わたしは一寸も身動きのならぬ、かく悉く行きづまつたわたしの現在の生活を嘲つた。

* * *

——が、行きづまつたところこそ、人間生活の眞の究竟ではないのか？　人はそこで自殺する。人はそこで人を殺す。人はそこでこの世を見かぎる。わたしはまだ自殺する氣にならない。人を殺す氣にならない。ます〳〵この世を見かぎらない。わたしの生活はまだ本當に行きづまつてはゐないのか？　人間生活の眞の究竟には達してゐないのか？

家へかへつて、わたしはさうわたしの心に訊いて見た。

わたしの心はたゞニヤリとした。さうして何も答へなかつた。

* * *

——十一月十三日。

波が高い。砂利濱へぶッつかるその音が、とき〴〵窓硝子をブル〳〵と震はすほどにひゞく。雨にはまだならぬけれど、空は陰ほッたい灰

色雲の連續で、鬱陶しく閉されてゐる。どうしても氣の落ちつかぬ、云ひやうもなくいやな心持の日だ。

妻は子供をつれて、ニースへ買物に出かけた。

例の悲觀につかつたまゝ一日を暮らす。

＊＊＊

——十一月十四日。

一睡すると、悲觀は消えてゐる。すこし天氣がよくなると、枉屈した心はすぐ健康に甦がへる。わたしの悲觀は淺薄だ。わたしの枉屈には根柢がない。なんといふフワフワしたわたしの心であらう！

＊＊＊

——十一月十五日。

モルモットにちよッと似た小動物で、フランスでは Cochon d'Inde ——天竺豕子——と稱してゐるのを、近所のマダム・シヤンパニユのところから大枚四フランはづんで、妻が子供の友達にと買ひ込んで來たものだ。二タ月ほど前だ。

で、もうすッかり馴れきつて了つて、このごろでは、デジヤネの食卓の上や、ピジヤマを着たイヴオンヌの膝の上で、パンのかけだの砂糖だのを、はなはだとりすました顏つきをしながら、うまさうにカリカリやることが例となつてゐる。

マダム・シヤンパニユのところでは、それを飼犬の食用として蕃殖してゐるわけだから、もし妻に四フランで買つて來られなかつた場合には、いふまでもなく、今ごろはもうとうに犬にたべられて了つてゐるだらう。

他の生命を奪ふことなしには、いかなる動物も一日として生存を許されぬ、何としても動かすことのできない生物界の原則が心苦しい。

そこに詩が生まれる。

食ふことなしに生存できないわたしは、同時にそこに詩を見出さずには、どうして生きつゞけ得られやう？

＊＊＊

——十一月十六日。

ボオドレエルの『散文詩』と、スウヴエストルの『屋根裏の哲學者』とを讀む。この一世紀以來、どちらも世界で有名な本だ。さうして十數年以前、どちらも嘗てわたしの一度よんだ本だ。

人間世の平凡さがいかにたへられぬものであるかを前者はしみじみと愬へてゐる。人間世の平凡さをいかに最後まで耐ふべきかを後者は懇切に教へてゐる。さうしてどちらのいふことも眞實だ。人間世のあらんかぎり眞實だ。生きようとする人間の心には、かならずいつもこの兩面が啀み合つてやまない。

＊＊＊

──十一月十八日。

強風。ときぐ\驟雨。ときぐ\雷鳴。

心持かわるいので、終日、讀書。

夜に入つて、物凄い大暴風雨となる。

──十一月十九日。

ポンプの水がスツカリ濁つて、とても飲用にならぬので、海岸の共同泉へ汲みにゆく。

例の灰色に黒ずんだ怒濤が、大砲のやうな爆音を立てゝ、ヅシンヅシンと砂利濱へぶツつかつてゐる。ときぐ\ドシヤ降りの大雨が來る。

ゆふべから濱邊へ打ちあげた流木が、到るところに小山のやうに盛りあがつてゐる。村の人々は荷車なンぞひツぱり出してせつせとそれを自分達の家々へ運んでゐた。實際、これだけあつたら、村全體の一年中の燃料には困るまいと思はれた。

わたしはジョルジ・デュアメルの Elire を思ひ出した。デュアメルのは併しかうした流木ではなくて、難破船の積んでゐた鮪の罐詰だ。

わたしには併しそれが鮪の罐詰でなくて、たゞの山から押し出した流木であることが、却つてより以上人間生活の眞實にとつてズツと意味深く考へられた。

デュアメルは天才だ。さうしてデュアメルの天才が創造した傑作よりは、その日ぐ\の自然現象そのまゝの方が、はるかに多く文學的であることがわたしには感じられる。

* * *

『セリメーヌがアメリカへ向けて出帆する！ セリメーヌ──御存知の、それはセシール・ソレルだ。さうして最近のセギュール伯爵夫人だ。

シエーアプールから紐育へ彼女を運んでゆくところの『パランジエリア』號の船中へ、花形女優の一團と、さうして佛の國をばアツと云はせんがために、無數の價打知らずの藝術品と、價ぶみのできぬ衣裳と寶石とを、彼女はウントコセと積み込んだ。

女實業家として、セリメーヌはその合衆國への到着をば、ばかげきつた廣告法で、前ぶれをすることを知つてゐた。さうしてその廣告こそ、もう一度、われぐ\に、「現代の社會にあつては、l'art pour l'art は久しい以前から l'art-Commerce のために驅ひかくされてしまつてゐる。」といふ實證を與へる。

セシール・ソレルが三四のブルジョア新聞に與へた會見は、この老ひぼれた大根役者の根性が、そのたゞ懸念するところ、たゞぐ\金のみに……Business のみにあるといふことを思はせる。

攫へ去るところのもの\一切の美をば、彼女はすべてそれをば紙幣に飜譯してゐた。

彼女の履物、彼女の衣裳、エトセトラ、それ等は數百萬法を價打するであらう。思へ、ローブ九十七、コスチューム二十七、頭飾十五、帽子三十三、靴百二十三足、靴下百足、それ等を百二十七箇の大小の鞄につめて、この藝術家が携へ去ることを思へ！

加ふるに、弗國王等に接見せんがためには、彼女は世にも美麗なる度の中にとりかこまれてあらんことを冀ふ。就中、ルイ十一世に屬した机、それからラ・デュバリイの使用せし寢臺、さうしてこの寢臺だけでも三百萬弗の價格がある。

三百萬弗の一寢臺！……さうして人間の子供等は生まれる。かれ等の母親がそのうちにかれ等をかくまふべき最も小さき寢床もなしに。

革命時代の制度にあつては、このセリメーヌの所有する價値ある藝術的調度は、國家の所有財産であつて、古代藝術の證跡として民衆の前に陳列されてゐた。

資本主義の制度にあつては、それ等はすべて Commercialisés されて、一個人の所有財産となつてゐる。』

ラ・デュバリイの大寢臺とセシール・ソレルの肖像とが、寫眞となつて、この一篇の文章にそへてあつた。きのふの『ユーマニテ』の婦人欄のうちにだ。

＊＊＊

——十一月二十一日

地震以來、まる三年のわたしのフランス生活は、いかにわたしの價値なき人間であるかをわたしに教へた。さうしていかにその價値なきところから正しい人生を歩みなほすべきかを教へた。

コンミュニズムの理想は彼岸にある。文藝のメチエはその日〳〵の惡戰と苦鬪とにある。さうして彼岸に到着すべき般若波羅蜜多は念々不離心の焦眉に迫る。

紅葉と美妙

江澤春霞

此處に記す事はすべて、筆者が其の幼少時代からのふるい記憶を喚起しつゝペンを走らせたもので、傍にノートを置き、それを探り乍ら書いたものではない。從つて、文中の「時」の上に多少記憶の喚起し方の過失が無いとも限らぬが、然し、事柄の上には毛頭間違ひはない。念の爲に、お斷り申して置く。

上　紅葉山人と芝神明

紅葉山人の出生地が、芝の仲門前である事は、硯友社派の諸文豪には勿論の事、文壇には多く知られてゐるが、此の仲門前には、其の土地と云ふのではなく、其の町内に限られた言葉の上に、著しい特徴が、近頃まではあつたものである。

現今は、此の町内に土着の人が極めて寡く、住む人の多くは他府縣出の人々であるので、自然に、其の特徴は壞滅して了ひは仕たが、それでも、僅少に現存する古老や、算へる程しかない土着の人々の口からは、辛うじて其の特徴を知る事が能きる。

それは、言葉の中に、ラ行の中の「リ」を云はず、カ行の中の「キ」を以てこれに代へるのである。

例へば、「それより此の方が可い」とか、「あれより其の方がうまい」とか、一般の人の云ふ場合に、仲門前の人々は、「それよキ此の方が可い」とか、「あれよキ其の方がうまい」と云ふのである。

これは、相州小田原の人の言葉の特徴と共通であるさうで、其昔、現今の大門前の電車停留場附近から、金杉橋を經て本芝へ通ずる道路が、砂地の磯端で、往來の旅人は此の磯端を通つた時分に、小田原の漁民で怎うしてか此の磯端へ漂着した者があり、それが、仲門前へ永住した爲に、「それよキ」「これよキ」「あれよキ」と云ふ右の特徴を、此の町内へ遺すに至つたのであると云ふ。

これは、美妙齋主人が、芝濱松町一丁目七番地から神田駿河台鈴木町十六番地の坊城伯爵邸内へ引移つて間のない時、何かの話の次手に、曾てそれに就て調べて獲た處を、筆者に語つて、何彼と、江戸の言葉に就て敎へを垂れられた時の、話である。

此の特徴は、不思議（と云ふのは大袈裟かも知れぬが）にも、隣町や近間の町には傳はつてゐない。裏側で背中合せの片門前にも、表側の濱松町二丁目三丁目にも、更に、近接した宮本町にも七軒町にも、決してうつツてはゐないのである。

其事を、濱松町一丁目、即ち美妙齋主人の住んでゐた處の、所謂神明前で生れた筆者は、好く土地の古老に話を仕た事であるが、其の古老連も、其の都度首傾げをては、「成程然うだね」とか、「まつたく妙さね」とか云つたのを、筆者は好く覺えてゐる。

其の特徴が、紅葉山人には著しく表はれてゐた。

ゆつくり話をする時には、怎うかすると聽濁す事はあつたが、山人が語調を早めて物を云ふ時には、右の「それよキ」「あれよキ」が耳立つたものである。

嘗て、斯う云ふ事があつた。

山人が芝神明町の裏通りの、土地の人が裏町と云ふ處の何とか云ふ家（では甚だ相濟まぬが、家の名は實際に忘れて了つた。現今も在る筈だが、伊澤孫兵衛と云ふ質見世で、近所に土地を澤山有つてゐる人の家の隣家で、其頃地上げを仕た、格子作りの二階家で、しもた屋）に間借を仕て、芝愛宕下に在つた三田英學校を卒業し、大學豫備門へ入つたばかりの時分であつたと思ふ。夏の夜の暑い晩で、年こそ忘れたが、九月十二日の夜であつた。山人は、紺飛白の單衣に兵古帶と云ふ書生丸出しの姿で、筆者の家の簷下に近く、家の者に成る丈姿を見られぬやうに用心を仕ながら、瓢然と佇つて家の内を覗いたのである。

筆者が、年は忘れても、月日を覺えてゐるのは、其時、神明の祭の夜であつたからであるが、神明の祭は、だら〳〵祭と云はれる程に日數が長く、毎年九月十一日から二十一日まで執行されるもので、紅葉山人が、筆者の家の前に佇つた夜は、其の祭禮の二日目であつた。

當時、筆者の家は、屋號を丁子屋と云ふ唐物屋であつた。唐物屋と云ふのは、西洋小間物店即ち洋品店の事であるが、筆者の家は、明治年間からの唐物屋で、市内最古と同業者の間に許されてゐた丈に、現今の洋品一切の外に、舶來の洋傘、舶來の遠見、ブランデー葡萄酒チン利久其他、洋酒一切をも賣つてゐたのである。

其の唐物屋の前に山人はそつと佇つて、店を覗き込んだのである。これは、筆者を呼出す積であつたが、其時奥に居た筆者は、店の者の知らせを受けて、急いで店へ出て見ると、山人が佇つてゐるので、當時、公立芝小學の三年生であつた筆者は、すぐに戸外へ出ると、山人は

「勝さん（筆者の本名は勝太郎）熱くつて仕樣がないから出て來た。一緒にお出な、宮の内へ行つて見やう。」と、云ふのである。

折から祭の人の出盛り時で、宮の内（神明境内）は雜閙の盛りであつたが、そんな場所は嫌ひだとばかり思つてゐた山人が斯う云ふので、筆者は大喜びで、すぐにそれを母に計ると、母は、

「宜いとも、徳さん（紅葉山人の本名徳太郎を指して云ふ言葉）が連れて行つて下さるのならゆつくり行つてお出。」と、許してくれ、自分も店先まで出て來て、山人に何か言葉をかけたが、當時まだ書生の山人は、無言で點頭いた丈で、筆者の手を曳き、サツサと立去つて、宮の内へ向つた。

狹い社内を歩いて、見せ物を一つ二つ見て、「大々餅」と云ふ汁粉屋へ寄つて、汁粉の箸を把つた時に、徳さんは、

「勝さん、君の家は代々の江戸つ兒でも、上總生れの人が養子に來て、

唐物屋を始めたのだから、屋號を上總屋と云ふのだとは聞いて知つてゐるが、上總屋より江澤商店と云つた方が、開明の世に相應しいね。」

と、斯う云つた。

其時、筆者は、それに答へるよりも、德さんの言葉咎めをするやうに、

「德さんは怎うしてそれよりとりの字が云へないんです。舌が廻らないんですか。」と、子供心に無遠慮に訊ねた其の言葉の鋭かつた爲か、德さんは、其の淺黑い顏を心持赧くして、其儘默つて了つた。

これは、勿論、前の美妙齋の話を聽かぬズット以前の事であるが、子供とは云へ、筆者の此の無作法は、德さんの感情を害ねたらしいので、筆者は後でどんなに悔んだか知れなかつた。

中　紅葉山人と谷齋老

此の德さん即ち紅葉山人の實父が、芝愛宕下町一番地の通稱仙臺屋敷に住んだ有名の彫刻師谷齋である事は、水蔭先生の新著「硯友社と紅葉」其他に記され、文壇には大分知られてゐるが、時代の隔りで、谷齋を知らぬ人が今は大分多く、現今の文士の中には、谷齋を普通の幇間だと信じてゐる人もあるやうで、それが、谷齋を謬り、強て、一代の文豪として眞に歷史中の人物たる紅葉山人尾崎德太郎氏に累を及ぼさぬとも限らぬので、此に、些か谷齋に就て記す事と仕た。

谷齋は、小さな物に彫刻をするのに秀でた人で、今の世の言葉で云ふ美術彫刻師であつた。年齡も時代も、此の方が谷齋よりは少しの兄ではあつたが、當時、區内新錢座町に住んで、刀の鞘や煙管筒櫛髮插箱の類の塗上にかけては江戸一と云はれた橋本屋市藏事通稱橋市と、此の谷齋とは、芝區内の人が自慢の二名工であつた。

然し、谷齋は天才肌の職人氣質に滿ちた人で、氣が向いて仕事にかゝれば、二日が五日でもコツ〳〵やるが、厭だとなると、どんな處からどんな嚴しい催促が來やうとも、十日でも半月でも、決して仕事場へは入らなかつた。其代り「サア出來たよ」と、持つて來た物を見ると、新しい其の「彫」に、自づと時代の味が附いて、何とも云はれぬ技倆の冴えが見え、誂へ主の中でも、水商賣の女などには、思はず小さな感嘆きを仕て、押戴いた者さへあつた程である。

筆者の家では、前に記した唐物屋の外に、モウ一度、祖父母がチト派手な稼業を此土地で營んでゐた關係で、橋市とも谷齋とも、至つて心安く附合つたが、筆者の母は、橋市に強て頼んで塗上げて貰つた挿櫛に、好みの彫を谷齋に仕て貰つたのを、身にも金にも替へ難い物にして、内々それを自慢の種に仕てゐたが、まつたく、其の當時、橋市谷齋合作の櫛を頭上に載せる事は、髮かざりを生命と仕た江戸生れ女にあつては、慥に一種の誇であつたに違ひなく、一面から云へば、贅澤でもあつたに違ひないのである。

此の櫛は、筆者の叔父の陸奥宗光の許に厄介になつてゐた「おけいさん」と云ふ婦人で、筆者には異母の姉に當る人が、其後紀州へ歸る時に、チト惜しいが餞別に贈つたと云ふ事を、母から聞いた事があるが、それは兎も角も、谷齋は爾う云ふ名工で、稼げば幾らでも金の出來る男。技倆の聲も名と共に益々揚つて、歿後久しい今も猶、あつばれ稀代の名工として、現代人に崇敬された事であらうに、持つて生れ

た江戸氣性。好きな事には無駄を吝まず、宵越しの錢は有たぬ男のふところ兎角淋しいのと、根が道樂者の外を遊んで歩きたさとから、誰を手頼にするともなく、最初から一本立の太鼓持。それも、屋號も無ければ藝名もなく、稼業の名の谷齋を其儘に、根據は芝に据ゑて置いても、坊主頭を振立てゝは、廣い市中を勝手に飛んで歩いた所謂「野太鼓」の組となつて了つたのである。

然し、太鼓持にはなつても、表稼業は廢めた譯ではなく、氣が向けば、仙臺屋敷のむさくるしい昔のお長屋跡の借家に燻つて、斯の名工が仕事をコツ／＼する。其處へ誰かゞ遊びに行けば、すぐに細工を止めて了つて、角力結構、お芝居上等、箱根熱海の湯治場行は猶賛成と、ぶつかり放題出放題次第、直ぐに客にくツついて行き、三日はおろか、七日半月、吾家へ歸らぬ事があつたが、然し、好くある型の幇間臭は少しもなく、其の態度にも話の調子にも、氣骨のある處は誰にも見えて、平常は兎に角、客と一緒に遠方へ行く時など、急いで吾家へ取つて返し、どんな工面を仕ても、何彼の時に恥かしくない丈の金の用意は仕て行つたもので、それを、男兒の嗜みと仕てゐたのを、谷齋とは「きやうだい附合」を仕てゐた筆者の祖母は、常に口を極めて賞讃したものであつた。

其の谷齋は、晩年縮緬の赤羽織を着て市中を歩いたり、回向院の大相撲に、番狂はせの勝負のあつた時など、其の赤羽織で土俵へ上つて、奇嬌な行爲を好く仕たので、「赤羽織の谷齋」と云へば、誰知らぬ者もないやうになつたが、其代りに、太鼓持としての谷齋の名が高くなればなる程、谷齋と紅葉山人との行通ひは、次第々々に遠ざかつて了つた。

「おつかさん、徳太郎の事は頼みますよ。あつしはあれの事ばかり氣にかゝつてね。」と、谷齋は、筆者の家の、唐物屋でない方のへ來ては、筆者の祖母に向つて好く斯う云つた。

谷齋と筆者の祖母とは「きやうだい附合」であつたが、土地（神明）の婀娜者や派手商賣の人達は、祖母の事を「おつかさん」で通してゐた爲に、谷齋も斯う云つてゐたのであるが、當時はまだ一介の書生の尾崎徳太郎、それがあんな大文豪にならうとは、流石の谷齋も豫期した事ではなかつたと見えて、平常に至つて陽氣な男が、毎日のやうに遊びに來て、祖母と二人ぎりになると、きつと斯う云ふ事を云つては、其の兩眼に怪しい露を光らせたのを、祖母の膝に縋はりながら、幼な心に、筆者はそれを能く見て能く覺えてゐる。

其後、筆者が物心を覺えて、一旦、紅葉山人の門生となり、間もなく、美妙齋主人山田武太郎氏の門下に移つてから、祖母の話で知つた處に依ると、谷齋は嘗て仙臺屋敷の吾家で、紅葉山人に向つて、

「徳太郎、俺はこんな道樂者だが、おまへの學問の入費は何とでも仕て必然屆けてやる。それは安心するが可いが、おまへの爲には世間體が宜くない。だから、おまへはあんまり此處へ來ない方が宜い。さうして、俺の事は考へずに、お祖父さんの後繼として、家業は何でも可い、自分の好きな道で早く出世を仕てくんな。」と、斯う云つて、諭したさうである。谷齋は、其事を筆者の祖母に語りながら、怎う云ふものか、時に依ると、

「徳のやつがあつしの家へ來るのをいやがつてね。」と、此男に似合は

ず愚痴つぽく云つた事があるさうで、細君はそれを解し難き一つの謎と仕てゐた。

筆者は、一度、此事を、駿河臺の家で美妙齋主人に語ると、年の行かない時分から仲が好く、其頃も纏睦じく附合つて、互ひに氣心を好く知合つてゐた事とて、美妙齋は、言下に、

『ナニ、それは、谷齋が徳さんを可愛いので、急に逢ひたくなつた時に内々呼出しをかけるんだが、年の行かない時分ではなし、徳さんもおいそれとすぐには行き兼ねるので、翌日なり翌々日なりに行くのが、谷齋には其間が待遠しいからさ。』と、斯う云つた。それを、美妙齋の母堂が傍で聽いてゐて、

『來るなと云つたり來いと云つたり、谷齋さんもあんな人だから我儘さね。』と、顔には笑ひながらも、心では谷齋の心裡を深く思ひ遣つた事があつた。

そんな次第で、谷齋は山人の住居へは行つた事がなく、山人の方も、行きたい心を強て抑へて、餘り谷齋の家へは行かなかつたものらしい。

其の谷齋は、それよりズッと後、京橋加賀町に住んだ竹さんと云ふ消防組頭で、加賀町の竹頭と云へば、廣い市中で顔のよかつたいきな男に連れられて行き、向ふ兩國のさる飲屋で河豚料理に舌鼓を打つたが、竹頭は其の鰒があたつて、其晩脆くも落命。サア谷齋は氣に病むまい事か、それからは飲食ひに氣を附けて、切りに神の冥助を祈つたが、これも壽命で仕方がなく、竹頭が死んでから半年ばかり後、何と云ふ事もなく患ひ附き、間もなくコロリと此世を去つた。然し、斯う其頃は、可愛い伜の徳さんも、硯友社の重鎭で日の出の勢ひ、言文一致の美妙齋よりは賣出しは少し遲れたが、雅俗折衷の名文家で、紅葉山人の名聲隆々たるのを見た事とて、谷齋も定めて成佛した事であらう。

下　紅葉山人と美妙齋

美妙齋主人山田武太郎氏の嚴父は、地方高等官として各府縣に轉任し、警部長として令名のあつた人である。警部長と云ふのは、現今の警務部長の事で、其の地方の警察權を握る立派な高等官ではあるが、何分地方官だけに、兎角轉任勝ちで、長く同一地方に家居を定め難いところから、江戸生れの妻女よし子に東京で擧けた長子武太郎氏の教育方を委ね、よし子の母なる人（或人は叔母だと云つた）を、千住在から呼迎へて同棲させ、三人が月々の生活費は、在勤先から送金する事に仕て、前に記す通りに、芝神明前なる濱松町一丁目七番地に住はせて置いたのである。然し、怎う云ふ都合か、よし子は其處で小やかな桶屋の店を開いた。尤も、桶屋とは云つても受賣で、ホンの少し、手桶小桶の類を店先に並べて置くに過ぎなかつた。當時、即ち西南戰爭頃から、筆者の生れた明治十三四年頃まで、士族上りの人の商ふ云ふ小店を好く市内で見かけたものであるが、其の桶屋の伜にも似ぬ美妙齋が溫和た風貌と、中學校へ通つては、怠らず學課にいそしむのが、土地柄だけに著しく目立つた爲に、「桶屋の武さん」の名は、いつからともなく遠近を風靡した。しかも、武さんは、學校への往復の外は、殆ど外出を仕た事のたく、山内（芝公園）に櫻が咲いても、勝

早く、人の起出ぬ中に見て來ると云ふやうな事が、土地柄の人には恐ろしく評判の種になつた。

其の武さんのところへ、進んで交際を求めに行つたのは、眼と鼻の間の神明町に住んだ尾崎の德さん（紅葉）であつた。

『武さん、圓山（芝山内の小丘）へ行つて見ないか』と、紅葉の德さん門口から聲をかければ、美妙の武さんは、外出嫌ひな人にも似ず、いつでもきつとそれに應じた。

『奇態だね、うちの武は。あんな偏屈だけど、德さんとなら何處へでも行くのだからね。』と、當時、まだ小學生の筆者を相手に、母堂よし子は好くこんなことを云つた。

讀賣新聞に出て好評であつた美妙齋の「武藏野」は、其頃から書きかけの處女作であつたが、同じ讀賣新聞へ出た紅葉山人の「飾海老」も、當時流行の女學生を題材にして書いて見やうかと云つた德さんが、其後の處女作であつた。

紅葉山人が神明町を去つてズット後に、美妙齋も、駿河臺へ引移つたが、其處へも德さんは好く遊びに行つた。美妙齋が、英文學に心醉し、韻文物を書く前提として、新體詩を好く作り、「新體詩選」を編述して、小石川の某書房で上梓發行するに方つても、紅葉山人はそれを援けた。

二葉亭の「浮雲」が出た時、紅葉山人は美妙齋の駿河臺の家でそれをみて、美妙齋の書齋の柱に身を凭せ、一氣に「浮雲」を讀破して、『お勢が面白く描けてゐるね、』と、云つたのを覺えてゐる。

硯友社を創めたのも、まつたく、二人の力を中心にして、文壇に暴れやうと云ふ固い約束からであつたが、美妙齋はやがて硯友社から遠ざかつた。

『德さんは嘸憤つてゐるだらう』と、美妙齋は苦笑したが、脫けるのにも理由はあつた。然し、これは、筆者の出る幕ではない。唯、美妙齋にも苦しいところがあつた事だけを、遺つた門生として、筆の次手に記して置くにとゞめるが、斯うして、兩者の交際はパッタリ絕え、爾來年久しく、美妙齋は其間に神田平永町へ家を新築して引移り、金港堂の「都の華」の編輯を主宰したり改進新聞へ入つたり、其間に一度都新聞へも入つたが、やがて、小石川久堅町へ引移り、向島でラムネ屋を經營して大損を仕たり、田澤稻舟女史との問題で世間を喚がしたりしたが、後、瀧ノ川へ移つて、例のアギナルドをかくまひ、折角の俠氣も色眼鏡で其筋に睨まれた不幸もあつたが、其中に、青木嵩山堂の依賴を受けて「日本大辭書」編纂の大事業に着手し、嵩山堂から金も出て、生活も幾らか樂になつた。それは明治三十四年頃で、旣に北瀧轉居の翌年であつたと覺えるが、其年の秋、瀧ノ川に名高い「もみぢ」も色づき初めた頃の、日射和かな午過ぎに、當時は既う文壇の第一人者たる尾崎紅葉が、突然、美妙齋の寓居を訪れて、家族の人々を愕かしたと云ふのである。

これは、其の當時、仔細あつて打絕えてゐた筆者が、其後暫くして無沙汰の詫びに行つた時に、

『勝さん、こないだ久し振で尾崎の德さんが來てね』と、目頭して、美妙齋の語つたところであるが、其話を聽いて筆者は胸が碎けたやうな思ひが仕た。

其頃、美妙齋は、怎うした心裡の豹變か、往昔優美であつたのとは打つて變つて、狷介不羈の行動を敢て仕た爲に、其の寓居へは、訪客至つて罕であつた折から、昔懷しい此の珍客の來訪を受けては、大酒に灼けた美妙齋の其顏に、心からの喜びを見せた事が首肯れるからである。

斯うして、互に久濶を叙して後、兎角懷しがる母堂よし子を退かせて、美妙齋は紅葉と一室に相對した時、紅葉は、美妙齋に向ひ、美妙齋の少しも思ひ設けぬ相談をかけたと云ふのである。

勿論、これも美妙齋の話で、以下、その話のつゞきであるが、紅葉の其時の相談と云ふのを記すと左の通りである。

即ち、獨逸へ行つてゐる巖谷漣山人（小波）が、來年の夏頃までには歸つて來ると思ふが、獨逸行に成功した漣山人が、歸朝後の新企畫には侮り難いものがあると思ふ。就ては、僕も局面を轉換して、一つウンと働いて見たい。それには、怎うしても君に片棒を舁いで貰はなければならない。其の企畫は何だと云ふと、雜誌だ。君も、將來雜誌が文壇を支配する時の來る事を主張し、婦人雜誌發刊を企てゝゐると云ふ事だから、其の企てに費す力を、更に一層大きくして、僕の仕事の一半を受持つて貰ひたい。尻押は、君も知つてゐる西園寺（今の公爵）さんだが、雜誌は月刊で大部の物として、これを和洋兩文で行きたいのだ。即ち、雜誌の一半を邦文、一半を英文として、邦文の方は僕、英文の方は君に受持つて貰ひ、働ける若い人を使つて大いにやりたいのだ。そこで西園寺さんとも相談して、題號を邦文の方に「浮世」英文の方に「ゼ、フローテイング、ウオールド」と命けたよ。内容は無論文藝本位だが、フローテイングウオールドだ。方面を廣くやりたいね。西園寺さんはね、君、金に糸目を附けるなと云ふんだ。面白いぢやないか。一つ、大いにやらうよ。と、斯うであつた。

『それは面白い。進んでやりたい。』と、美妙齋は即座に同じたさうである。

然し、嵩山堂の仕事を今更止す譯には行かない。骨は折れるが、これを來年の夏までの中に完成して、遲くも初秋までには「浮世」の發刊を實現したいと、美妙齋は大乘氣で、其後、二三度、紅葉山人と遇ひ、逐次、其の相談を進めたと云ふのである。

其後、それが怎う進行したか、筆者は、美妙齋に訊く機がなかつた。

ナゼと云ふに、筆者は、唐物屋の店の潰れた爲に、職を求めて横濱に奔り、商館番頭になつたりガイドの眞似を仕たり、三四年苦勞を仕てゐる中に、日露戰役の幕は開いて、豫備歩兵として召集されたからである。

何しろ現役をわづかの間しか勤めず、人員過剩で除隊となつて歸鄉してゐた筆者が、此の召集には些か驚いたが、兎に角、旅順から奉天と轉戰し、負傷を仕て内地へ後送され、豫備病院や熱海やで傷の治療を仕てゐる中に、迚も人間並の働きは能きぬとあつて除隊され、戰役直後、傷が治つて久々で瀧ノ川に美妙齋を訪れた時、主人はコツ〳〵と「日本大辭書」の修正編纂をやつてゐたが、恰度幸ひ、君に仕事がなければ此の仕事を手傳つてくれたまへとあるに、筆者もそれを承諾して、專心編纂を援けながら、或日、「ゼ、フローテング、ウオール

ド」の事を訊いて見ると、美妙齋は苦笑して、

「サア、怎うなつたかね、德さんは惜しい事に此世に居ないし、關係者からは何とも云つて來ない。多分、駄目なんだらう。月日も大分經つてゐるからね。」と、斯う云つたが、暫くしてから、

「然し、一度行つて見やう。今まで外出は能きなかつたが、君が來てくれたんで、二時間や三時間用達に出ても差支ないからね。」と、云つて、酒の爲に爛れ切つて、めつきり肉の落ちた顏で、美妙齋は淋しく笑つた

× × × × ×

「日本大辭書」編纂の手傳ひは、仕事の上に興味はあつたが、何分にも朝は早く夜は遲く、まつたく根仕事なのに疲れ來て、強て暇を貰つて芝神明の祖母の家へ歸り、紅葉山人とは深い仲の堀紫山先生の紹介で二六新報へ入つたが、其後は、ツイ、敷居が高くなつて、瀧ノ川へはとんだ御無沙汰。其中に、美妙齋も引越し先の本鄕駒込の陋居で、酒の爲に病を獲て、斯の言文一致の大功勞者も空しく鬼籍に上つたが、子供の時から同一土地に育つて、師事するよりは兄事して來た德さん武さんであるだけに筆者は、今更のやうに、痛惜の念の深さを覺える。(完)

筐底句日記抄

小澤碧童

大正十三年

五月十二日

京都の村上三千穂氏永觀堂北門の居より眞如堂傍芝の藥師大興寺に移住したる由

初夏の君うたたねの夢訪はむ

五月十五日

來訪の成瀬日吉氏をそそのかして同伴目黒路を散策す

まづ洗足池畔なる勝海舟翁のおくつきに詣づ

若葉して輪塔明るし森の中

共に語りゆく程に不圖勝伯邸の構えうちなりければ

道いつかやしきうちなる桐の花

まだ日の高ければ道を多摩川にとりて丸子の渡しに出づ

砂利船の歸るを追ふて燕かな

舟中に馬と身をつき合せ向ひの河原に渡りしばし遊ぶ

燕ゆく丸子の宿は土手向ふ

五月廿五日

八つ手の實莖ごと落ちて淋さよ

六月十四日

山吹やつれづれに見る葉の茂り

六月十九日

米蒔いて雀を呼ばう五月晴

六月廿九日

壷酒に山梔子の花靜なり

散り敷くや小庭は花のねづみ黐

七月十四日

外に出る用のさてなし盆の月

七月十九日

相見れば馴染顔なる定齋賣

舊魚河岸の某亭の樓上に竹馬の友米倉冷雨氏と會合してまた例の長談に夜をふかす折柄涼風のめでたくて

川船やいつか寐につく夏の月

七月廿二日

大森に歸る某氏を雷門まで送りて

戻り路の遠き別れや夏の月

七月廿六日

下痢數度且右腕のしびれ怪しければ昨日より盃をとらず

やめきりになる酒ならぬ土用かな

老の腹弱にして見る土用かな

七月廿七日

言ひ甲斐なき日々を送り居ると思へば

時鳥しようことなしに寐に戻る

八月二日

小庵より近き上野なれどのぼるも臆劫にて

朝涼し降る霧雨にそこらまで

八月四日

故祖父即現院第三十七回忌　故父隨法院第三十七回忌取越　菩提所谷中三崎妙圓寺に於いて法要

顏揃ふほどに一と降り夕立かな

八月九日

糊付の强きを好む性にてけふの着心よく

夕かげや淺草にゆく浴衣かげ

八月十一日

井戸端の物音にめざめて

初秋や旭の昇る間の一と涼ぎ

八月十七日

初秋の蠅を追ひ打つ日影かな

八月十九日

初秋やほとけにあげて五目飯

八月廿六日

齋藤古原艸氏の母堂の告別式に參せんとして

若染みし椎の濡れけり秋の雨

八月三十一日

竿のさきやとり下ろされし交ひ蟬

「昭和二年九月三十日上根岸御院殿下僑居龍吉舍に於いて淨寫」

漱石の思ひ出（二）

夏目鏡子述
松岡讓筆錄

五　新家庭

松山での月給は八十圓だつたさうですが、熊本では百圓でした。それでも其當時は製艦費か何かさういふ軍事費を官吏が出さなければならない時で、月給の十分の一はその爲めに政府で差し引いて渡したものです。それから大學に居た頃貸費生だつたので、それを正直に毎月七圓五十錢づゝ返へして居りました。後で小山温さんに伺へば、當時の大學はそれ程規則づくめでなく、家計困難につきと願書を一本差し出しておけば、貸費は愚か授業料迄免除されたものださうで、誰も彼も皆其の手をやつて、しかも卒業してから返へすどころぢやなかつたさうです。夏目さんは馬鹿正直でしたなといつぞや笑つてられたことがありましたが、これは隨分長いこと克明に續きました。

此の二口が毎月差引かれる上に、月々父へ十圓、姉へ三圓づつ送つて居りました。父へ送る金もたしか貸費生の返金と同じやうな意味をもつてゐたらしく覺えて居ります。

これだけの金が毎月いるのですから、謂はゞ七十圓の月給取りです。其中から大概の月に二十圓位づつ本を買つて居りましたから、一家の暮しはざつと五十圓ですが、それでも子供はなし、どうにかやつては行けました。とはいふものゝ、元々お嬢さん育ちで新婚早々と來てゐるのですから、どう家計を切り廻していゝかてんでわからず、どうかかうかやつてゐるとだけで、月々いくらかでも殘るどころでありません。が二月三月と過ぎるうち、これではならぬと心細くもなつて、せい〲切りつめて少しづつでも貯金をしやうといふ氣になつて、毎月五圓づつそつと文庫の中にしのばせておきました。文庫といふのは私の手習の御手本やら紙やらを入れておいたものです。

或る日外出して、夕食近くなつて來ましたので、大急ぎでぱつと着物を脱ぐなり不斷着に着かへて、其儘台所へ入つて煮物こしらへなどしてから居間へ戻つて見ますと、どうしたものか脱ぎ捨てゝ行つた着物の位置から、第一障子の開け方から違つてゐます。直覺的に變な氣持が致しましたので夏目をよんで見てまはると、緣側の上に泥足がついてゐて、たしか先刻迄机のわきにあつた筈の手文庫が見えません。うま〱こそ泥にかつぱらはれたのです。何が入つてゐたんだと夏目

が尋ねますから、手習のもの一式ですと答へますと、泥棒がまづい字にあきれてゐるだらうと笑つて居りましたが、私は漸くの思ひでへそくりを貯め込んだところですから口惜しくてなりません。とう／＼言ふまいと思つてゐたのですけれど其事を打ちあけますと、案の定夏目は、かくして貯金なんぞするからさと一笑に附されて了ゐました。しかしこれはまだあとのことです。何しろ新婚當座御茶碗が四つ切りなく、差し向ひで二つを御飯茶碗に、二つを御汁碗代りに使つてゐたのですから、その二十圓ばかりの盗難はかなりの大問題だつたのです。

新婚の眞夏も過ぎて、九月に入ると早々一週間ばかりの豫定で、一緒に九州旅行を致しました。福岡に居る叔父を訪ねて、箱崎八幡や香椎宮や太宰府の天神やにお參りして、それから日奈久温泉などに行きました。今ではそんなこともありますまいが、其頃の九州の宿屋温泉宿の汚さ、夜具の襟なども垢だらけで、浴槽はぬる／＼すべつて氣持の悪いつたらありません。ひどく不愉快なので、私は懲り懲りしまして、それ以來九州旅行は誘はれても行く氣になれませんでした。

歸へつて來てから旅行中の俳句を澤山作つて子規さんの處へ送りました。其頃はよく俳句を作つて居りまして、それを又丹念に卷紙や半紙に書いて、子規さんのところへ送るのでした。今でもその頃の句稿が澤山殘つて居りまして、それには子規さんが朱筆で點を打つたり、丸をつけたり、評を書いたり、添削したりして居ります。自分でも餘程興が乗つてゐたものと見えて、句を作るのは勿論のこと、よく金を送つては子規さんあたりから活字本の七部集だとかいつた俳書を買つて貰らつて、食事をする時にも傍に離さずおいて熟讀してゐたこともあります。

或る日俳書をひらいてしきりと感心して居りましたが、ふと私を顧みて、

「足駄の渡つて濟る春の水てのがあるが、足駄つて知つてゐるか。」

と申しますから、

「女のことでせう。」

と答へますと、此奴生意氣に知つてゐたとか何とか申しまして、それから俳句をやつて見ないかといふことになつて、十七字をならべて見ました。それでもどうならべて見ても句らしい句になつた例がありません。よく笑はれたりしていま／＼しく思つて居りますと、或る時、やはり俳句の本を讀み乍ら轉げかけて笑つて居ります。何が可笑しいのかと尋ねますと、この句が可笑しいのだと申して示した句が、

兩方にひげのあるなり猫の戀

といふのです。此方も一つけちをつけるつもりで、どうせ相手が猫なんですもの、兩方にひげのあるのは當り前ぢやありませんか。ちつとも可笑しいよなんかないぢやないのといつた工合で抗議をしますと、だからお前には俳句がわからないんだつて、とう／＼愛憎をつかされて了ゐました。

ところが其頃私と同じに無能の俳句の生徒が居りました。それは菅虎雄さんです。菅さんも俳句の熱狂にそゝられて入門か何か、ともかく句を作つては見せられたらしいのですが、其中に、

梅の葉のドブンと川に落ちにけり

といふ句がありました。夏目が笑つて申しますには、蛙ぢやあるまいし、ドブンと落ちる木の實があるものかてんで、この方もとう〳〵物にならず了ふらしうございました。

そんなわけで俳句には隨分と熱心で、松山時代から熊本に居る間の五年間ばかりが、一番俳句の出來た時で、生涯の句の殆んど三分の二はこの五年間に出來たものゝやうです。

自然子規の話なんぞも折にふれて出て參りまして、子規て奴は横着な穢い奴だ、下宿に居る頃、眞冬になると火鉢をかゝへ込んで厠へ這入つて、あたり乍ら用を足して出て來て、その火鉢ですき燒をして食ふんだなんて申してゐたのを覺えて居ります。何しろ自分では、毎日欠さず下駄の足を洗ひ、さうして三四度も廊下に雜巾をかけるといふ潔癖な姉さんを見てゐるのですから、中々きれい好きでした。

九月の半頃、旅行からかへつて間もなく光琳寺町から合羽町に移りました。そこは家も廣いので、同じ學校の歴史の長谷川貞一郎さんが同居されました。

長谷川さんは私達と違つて中々の交際家でして、お客が隨分とおいでになります。翌年新家庭初めての正月を迎へました時に、私もさつぱり勝手はわからぬ乍ら、大に奮發していろ〳〵御馳走を調へたつもりでしたところ、何しろ思ひがけなくお客が四五人、生徒が五六人もつめかけて來る始末で、早速食膳がなくなつたのを始めとして、後から來た方々には膳も出せない始末。そこへ女中は一人と來てゐるし、出入りの商人が又どうしたものか、自分の方も正月だとあつて少しも仕出しをしてくれないので、とう〳〵不貞腐たとあつて、夏目が怒り出します。長谷川さんが氣の毒がつて中に取りなして下さいますけれども、私も口惜しいので、晴衣の上に前掛をかけたまゝで、元日の夜から十二時頃迄かゝつて、食膳を作りました。何しろお客の口數の多いところへもつて行つて、生徒さんたちが無闇とたべるのだからやり切れたものではありません。私も泣きたくなつたのですが、夏目もこれに懲りたと見えて、正月には家に居ないに限るとあつて、次の年から正月へかけて大抵大晦日に旅行に出ることに致しました。食べ物の話で思ひ出しましたが、後に長く胃をわづらつて、とう〳〵胃で命を取られた夏目も、其頃はまだ中々の大食ひで、（夏になると少し胃が弱る樣子ではありましたが）どちらかと言へばこつてりした脂つこい肉類のやうなものが好きで、魚は臭いといつてあまり好みませんでした。年も漸く三十を越したばかりで、物の味もわかり、又相當美味しいものも食べたかつたのでせうが、此方は年は行かないし、人間お腹さへ空いてゐれば何でも美味しい筈だなどと禪坊主じみた頑固なことを言ひ張つて、多くは美味いも不味いもお構ひなしだつたのですから、今から考へると吾乍ら亂暴だつたと氣の毒でなりません。其年の夏に東京へかへつて來てゐた時にいつもこの手を繰りかへしてゐるのを母に聞かれて、主人にそんなことをいふものがあるもんですかと、いたいお小言を食つたことがありました。

こんなことの外にも、一體に夏目の好みが江戸つ兒式の、どつか下町風のところがあるのに反し、私が謂はゞ山ノ手式に育てられて來てゐるので、趣味の上などでも何かとちよい〳〵とした小衝突があつたも

のですが、一年位たつ迄はさうした氣質が呑み込めませんでした。それでも私の父といふのが家庭の暴君で隨分短氣で母なぞ度々弱らされてゐたものでしたが、それに比べると夏目はゆつたりしてゐて、すべてのことについて公平だし、父のやうに自分勝手な向つ腹を立てるでなし、成程先生などといふものは修養の出來たものだと、それ位の感心が關の山でした。

でも女中が外出したりすると、色男に會ひに行つたんだらうなどと疑りますので、此方はあけすけとした質で、そんなことをいふ氣持がわからないで、どうも變なことをいふ人だ位に思つたことも時々ありました。

六　文友の噂など

子規さんのことは前にもちよい／＼申しました。

其の前後のことだつたと覺えてゐます。別に文學趣味があつたわけでもありませんが、お友達の頭本元貞さん（當時伊藤總理大臣の秘書をして居られました）の奥さんなんかゞ、佐々木信綱さんの門に入つて和歌をやつてゐられたりしたので、自然私もいくらか感化されて、文藝雜誌なんぞも手にするやうになつたのでせう。

或る日、夏目が私のもつてゐた『文藝俱樂部』を取り上げて、つくづく卷頭の短冊を眺めて居りました。それは文藝俱樂部の新しい臨時增刊で、閨秀小說號ともいふべきものでして、そこには三宅花圃、大塚楠緒子、藤島雪子（佐々木信綱夫人）御三人の石判刷りの短冊がならべてあるのです。三宅さんの歌が、

朧々かすめる夜半の月かげに
　匂ひそひたる山櫻かな

大塚さんの歌が、

君まさずなりにし頃とながむれば
　若葉がくれに櫻ちるなり

藤島さんの〻が、

雲雀なく聲もたのしく聞ゆなり
　さかきが岡の春の夕暮

といふのです。皆美しい假名書きでしたが、わけても三宅さんの出來榮えがいゝので、夏目もしきりと感心してほめて居りました。それから大塚さんの歌を、

「お安くない歌だ。大方大塚が留守なんでこんな歌が出來たのだらうが、大塚も仕合せな男だ。」

などゝ申します。段々聞いて見ると、楠緒子さんのお婿さんになられた大塚保治といふ方は夏目の友達で、今獨逸へ留學してゐられるといふことでした。大塚楠緒子さんの噂は頭本さんの奥さんあたりからも聞き、又結婚なさる時に美しいローマンスのあつたことなども、其當時の私共若いものには知らないものがなかつたのですが、そのお婿さんが夏目のお友達だとは其時始めて知りました。それから興津の水濤閣に避暑して、楠緒子さんが繪を描いてゐられた時見初めて、當時大學で媒酌人の名人と言はれた清水舍監に頼み込んで、案外話が早く纏まつたこと、星ケ岡茶寮で結婚披露式があつて招待された時、兄さんの仙臺平の袴を借りて行つたこと、それからあれは何の時

想の美人だよなどといふいらぬこと迄付け加へて話してくれました。

丁度其頃、同じ大學時代の友達の米山天然居士が亡くなられました。米山さんの話は前からちよいちよい聞かされて、あれは文科大學始まつて以來の怪物だなんて申して居りましたが、非常な我儘者で、友達で喧嘩をしないものがなかつたといふ位の人だつたさうです。大學の歴史の試驗の時、たしか箕作元八さんの時間だつたと聞いてゐますが、時間が切れても一向平氣の平左で答案を書いてゐて、いつ提出するとも果てしがつかないので、箕作さんもしびれを切らして、米山さん一人を殘してかへられたさうです。暮方に小使が教室の掃除に行きますと、ランプをつけたまゝ天然居士一人泰然と答案を書いてゐたとかいふのですから、其當時としても大變な豪傑だつたのでせう。その天然居士が、夏目に、豫備門から本科へ移る時のことでせう。向つて、

「將來何になつて社會に立つ積りだ」

と申しますから、

「工科へ入つて建築をやつて、大に金をとらうと思ふ。」

と答へますと、

「馬鹿な、この貧乏國で、どれだけ立派な建築が出來ると思ふか。知れたものぢやないか。これよりか文學をやつて、傑作を後々迄のこせ。」

と忠告したといふことです。それだけで文學に代はつたのでもありますまいが、ともかく最初は建築をやる積りでゐたとは、確かに當人の口から聞いたことがあります。

大學時代に二人制服でならんで寫した寫眞があります。其後其寫眞の米山さんの半身だけを、四つ切位に引きのばさせまして、其上に追悼の句を題しました。

空間を研究せる天然居士の肖像に題す

空に消ゆる鐸のひゞきや春の塔　　漱石

七　父の死

此の夏休みには耶馬溪の探勝がやりたいなどと申して居りましたが、六月二十九日に夏目の父が八十四才で亡くなりましたので、試驗もそこそこに切り上げて、七月早々上京致しました。さうして虎の門の官舍に落ちつきました。

一體夏目は生家のものに對しては、まづ情愛がないと申しても、かつたでせう。あるものは輕蔑と反感位のもので、勿論義理堅い人ですから、義理を缺くやうなことはなかつたやうですが、とにかく金ちやん金ちやんと御機嫌をとられたりちやほやされたりすればする程反感を募らせる方で、中へ入つて隨分私は困りもし又氣まづい思ひを致しました。さうして兄さんなどに氣の毒でなりませんでした。それでも黑白のけじめが甚だはつきりして、きらひならきらひ、好きなら好きで人が何といつたつて頑として動かないのですから、どうにも仕方がありません。一番上の兄さんの大助さん、此の人はとうに亡くなられたのですが、この兄さんとお母さん（これもすでに亡くなられてゐましたが）の二人だけはほめもし、又なつかしがつても居りました。

お母さんのことは自分でも『硝子戸の中』に書いてなつかしがつて居りますが、長いこと御殿奉公を勤めてゐて、夏目へは二十七かの時後妻に來られたので、先妻には娘が二人あつたのです。大變いゝ方なので奉公先の明石樣の御部屋でも、其歳になる迄手離さず、それで婚期がおくれたとか申します。いろ〳〵昔の衣裳やら髪道具など凝つた美しいものをもつて來られたのださうです。さうした話が出る度に、

「よくもあんな親父のところへ來たものだ。」

などと口癖に申して居りました位でしたが、反對に父にはとうもいい感じはもつてゐなかつたやうです。

「お前學問をするつて一體何をやるんだ。」

「文學をやります。」

「何に、軍學をやる。」

あの五十三四の時の年寄り子だと申しますから、父の所謂グンガクをやらうといふ頃には、お父さんもやがて八十に手の届かうといふ、文學か軍學かわけのわからなかつたお年だつたのでせうが、それでも容捨なく、

「このとほりわからず屋だから、いやになつちまう。」

などと申して居りました。それから親父はけちんぼの癖に、妙に金のたまらぬ男だつたなどと笑つてゐたこともあります。其頃聞いた話で、うそか眞か知りませんけれど、父が二度三度の食事の獻立をするのださうですが、時分時になつて女中が、

「御隱居樣、今晩は何に致しませう。」

と伺ひに參ります。

「茄子でも煮ておけ。」

が定まり文句で、また今晩もお茄子でせうよつてな工合に、臺所で女中が皮肉りながら伺ひに行つたもんださうです。其頃のことですから、一錢買へば五十もある茄子です。それでゐて自分一人は二階の部屋に茶簞笥を背負つて坐はつて、いつでもそこから菓子をつまみ出しては、ひとりでぼり〳〵食べてゐられたさうです。

しかしさういふ風に夏目に不評判だつた父も、若い時には中々のやり手で、祖父が大酒呑みで家産を傾けたのをたてなほした、ぱり〳〵の名主だつたといふことです。話は少し大袈裟ですが、見附を出て一歩牛込の方へ入ると、それ馬場下の名主樣がおいでになつたつて、泣く子をおどした位のものだつたなどと申しますが、それはともかくとして一時は中々羽振りもよかつたのださうです。さうして名主交際で廓へなんか遊びに行つても、外の名主は當時の金で三百圓も積み夜具にかけて、大盡風を吹かしてそれを誇つたりするのを、いゝ頃加減にこそ〳〵座を外して來て、遊びに使つた金だと思つてこれを買はふといつた案配に書畫などを集めてゐたさうです。自分の屋敷の前の坂に夏目坂と名をつけたり、家紋をとつて喜久井町といふ町名をつけたりしたのは、大方このお父さんだらうといふことです。

『硝子戸の中』にある御維新のすぐ前頃に、抜身の夜盗の一團が夏目の家に押入つた話は、私が兄さんから聞いて話したのを書いたのですが、兄さんは其時母の蒲團の中で一緒に寢とれてゐたさうですが、姉の悲鳴と哀訴とを今でもはつきり覺えてゐると申して居られます。何でも浪人が軍用金をとりに入つたのだといふことですが、父が土藏に浪

人の一隊を案内しましたけれども、千兩箱は澤山あつたが、中味はからであつたとかいふことです。けれどもそれ以來夜盜避けとあつて、柱の中に穴をほつて其中に金を隱くすやうにし、自分は押入れから屋根裏に梯子をかけて、天井裏に蚊帳をつつてねたとか申すことです。

さうして苦勞して守つてゐたお金も、今で言へば會社ゴロなのでせうが、何でも陸軍かへ納める糧秣の會社見たいなものを作るとうまくそゝのかされて、大變儲かりさうだと乘氣になつて出資をし、又判をついてやつたのがもとで、當の責任者はドロンを極め込み、出資金は本も子もなくした上で、判をついた金を拂はなければならない破目になつて、とう／＼青山あたりや新宿あたりに持つてゐた土地も人手に渡し、折角の身代を片なしにしたといふことです。夏目が物心がついてからは、始終惡い時ばかりにめぐり合はせたわけで、名主の全盛時代の恩惠には殆んど浴さなかつたのでせう。

一番上の大助といふ兄さんは、大學にも入り、學問もあり、又男前も立派な方だつたさうですが、惜しいことに肺が惡くて病身だつたのです。其頃父は府廳から警視廳にまはつてそこで勤めて居たのださうですが、その下役に樋口一葉女史のお父さんが勤めてゐられまして、父は年も年でしたし、それに名主のいゝ顏で腕利たといつても、學問はなし、小五月蠅く働くのも臆劫だつたのでせうが、樋口さんの方は學問もあり、それに誠に小まめに立ち働くので、父は大層調法がつて使つて居りまして、時々は金を貸してやつたものだと申します。一葉女史の貧乏は有名な話ですが、お父さんが生きてゐられる時から樂ではなかつたらしいのです。しかし何にしろよく働いてくれるし、謂はば大事な片腕といつた工合で、言ひなりに金を用立てゝゐたものの、中々返へしてくれるといふことがありません。

樋口さんは其頃山下町の官舍に居られ、大助兄さんもやはり父の引きで、そこの飜譯をやる役についてゐて同じ山下町の官舍に住んでゐました。父だけは牛込から通つてゐたものと見えます。大助兄さんも勤めてゐる位だからまだ丈夫でしたでせうし、年頃ではあり、男前はよし、それに名主の長男ではあり、まづ／＼申分のないところから、樋口の娘に字も立派だし歌も作るし、第一大層な才媛がある、あれを貰つちやどうかといふ話が持ち上がりました。ところが考へたのは父です。たゞの下役でさへこれ位金を借りられるのに、娘を貰つたりなどしたらそれこそどうなることかとかう算盤を彈いたものと見えまして、この話はそれなりきりで、あたら一葉女史を夏目の家に貰ひそこねたといふわけです。

やがて大助兄さんが亡くなります。續いて次の兄さんもなくなりました。其下にたしか姉さんが一人あつたのださうですが、先妻に二人の娘があつて、男の子ならいゝけれど、若し自分の娘が可愛いやうでは先妻に申譯がないといふので、母の意志で生まれるとすぐよそへ養女にやつたとのことです。それ程氣を使つてゐられたものと見えます。

三番目の兄さんは直矩と申しまして今矢來にゐられますが、其頃は和三郎と呼んでゐられました。この兄さんがお腹に出來た頃、あんまり子供が生まれるといふので、其頃の產兒制限をやつて、黑鯛をたべるといゝとか、するめをたべるとおりるとかいつて、しきりにそんなこんなの見境なく流產しやうとしたのださうですが、とう／＼流れず

了ゐに生まれた子供は、そんな敵と戰ひやつれたものか、眞黑なそれはく小いひなくした子が生まれました。母もこれは自分の恥だといふので、外一倍溺れるやうに愛したものださうです。母も亦この子がおとなしいといふので、金之助なんかのあばれん坊と違つて、大層可愛がつたといふことです。それに兄が次々に亡くなるなどといふことがあつて、なほのことこの兄さんを大事にしてゐたものでありませう。この兄さんは今でも芝居好きですが、子供の頃猿若三座の芝居見物になんぞ連れて參りましても、初めから終迄キチンとしておとなしく見てゐるといつた工合で、父や母の受けは大變よかつたといふことです。

　父は日が暮れるとすぐに寢床に入つて、十二時頃にきまつて目をさましてます。其時、大きな聲で、

「和三はかへつたか。」

と尋ねるのですが、兄さんがよく夜遊びに出たものと見えて、嫂さんがハイとか何とかいゝ加減にあしらつてつくろつておきますと、今度は、

「今何時だ。」

と來るのださうです。すると嫂さんも心得たもので、

「九時ですよ。」

とあつさり片付けておきますと、それで安心されると見えて、朝まで眠られるのださうです。

　先妻に二人の娘があり、一人は新宿の女郎屋伊豆橋に嫁に行き、一人は高田の姉さんでとほつて、後まで殘つてゐる姉さんです。新宿の方の消息は存じませんが、高田の姉の話はいづれ後で詳しく申し上げる機會があらうと思ひます。

　これが私の傳へ聞いてる父や兄さんたちの大體の輪廓でありますが、父が亡くなる頃は、夏目の家も大分傾いて居りました。

八　上京——轉居

　一年振りで二人で上京いたしましたが、其時私は懷妊して居りました。ところが長途の旅行や何かゞ祟つたのでせう。東京に來て間もなく流產して了ゐました。

　中根の家では毎年夏になると一家揃つて鎌倉村木座の大木伯の別莊をお借りして行くのが例でした。此の夏も小い妹たちは出かけてゐて、自分たち二人は丁度いゝから虎の門の官舍で留守居でもしてゐる積りなのが、こんな事になりまして私の健康が勝れませんので、鎌倉へ行つて保養することになりました。夏目も東京と鎌倉との間を幾度も往復して居りました。

　ある時、圓覺寺に宗演禪師を訪ねたとかで、漢文のむづかしさうな御本を拜借して來て、しきりと讀んでゐたことがありましたが、次の年の夏頃には、よく一人で座敷の眞中で座禪を組んで居りました。

　丁度夏目が鎌倉から虎ノ門の官舍へ歸へつた時のことです。閣下がお通りになるといふので、家中のものが二階あたりの戶を閉めて、（それがあの頃の官舍の規則だつたのです）みんな門のところにならんで、御送迎申上げました。夏目も一緒にならんで居りましたが、其うちに

いつの間にか袴が見えなくなりました。一番上の妹が氣付いて、

「おや、夏目のお兄さんは。」

と尋ねると、母が

「儀式張つたとか五月蠅いので隠くれたのかも知れないよ。」

と申して居りますうちに、白茶けた仙台平の袴を浴衣の上につけて、大層改まつて出て參りました。

「あら、お兄さん、どうなすつたの、袴なんかつけて。」

妹が目を丸くして尋ねますと、夏目はすましたもので、

「熊本のやうな田舎に居ると、陛下の行幸を拜するといふやうな機會がありませんからね。」

と申しまして、大層几帳面に御送迎申上げたさうです。後で、妹が、

「お兄さんて随分面白い方ね。」

と其話をして居りました。

上京中は度々病氣の子規さんを訪ねてゐたやうでしたが、愈々九月にもなり、學校も始まりますので歸へらなければならない、出來ることなら一緒にかへりたいといふので醫者に診て貰ひますと、今暫らく靜養した上でといふ事で、夏目一人で先にかへることになりました。歸へり際に、其頃紅葉山人の『金色夜叉』が讀賣新聞に連載されてゐた最中で、上京してそれをずつと讀んでゐたのですが、熊本のやうな田舎には讀賣新聞が行かないので、それを毎日東京から送れと申付けて參りました。ところが毎日となると些細なことなのでかへつて忘り勝ちになつて三回分も四回分も纏めて送つたりして、ひどく手紙で怒られたことがあります。當時の紅葉山人の人氣は大したものでしたが、『金色夜叉』にはそれ程感心はしてゐなかつたやうでした。感心してゐたのは一葉女史の作物でした。一葉女史の全集を買つて參りまして、官舎の二階にねころびまして、『たけくらべ』などには殊に感嘆して、男でも中々これだけ書けるものはないと申して、しきりに全集を讀んでゐたさうです。これは私の弟から聞いた話です。

私がまだ熊本にかへらない前に、九月早々大江村の落合東郭さん（漢詩人）のお宅へ移りました。落合さんが東京に勤めてゐられて、自然家があいてゐるのでおかりしたのでした。十月健康も恢復したので歸へりたいと思つて居りますと、折よく落合さんの御母堂と、落合さんの奥さんの御里の、元田永孚（明治天皇の侍講）の令息御夫婦のお二人が熊本へおかへりになり、しかも元田さんのお宅が、今度お借りした落合さんのお宅のすぐお隣りといふわけで、一緒に連れて行つて頂いて、十月二十五日頃熊本につきました。

來て見ますとこゝは大層景色のいゝところで、家の前は一面に畑、その先が見渡す限り桑畑が續いて、森の都と言はれる熊本郊外の秋の景色は又格別でした。其代り冬になると随分と寒く、見たこともないやうな大きな氷柱が、水車のあたりにのべつたらに下がつて居りました。

畑に百姓のお爺さんがよく姿を見せました。夏目はそれと懇意にな

つて、挨拶を交はしたりしんみり話をしたりしてゐましたが、ある時午飯をたべながら、

「あのお爺さんは俺よりよつぽど金持だ。あれで六十圓の貯金があるんださうだ。」

と眞顔で申しますので、女中が旦那さん妙なこと言ひなさるつてわけで大笑ひに笑つたことがありました。其女中はテルといふ名で、色の淺黒い二十七八の女でしたが、よく忠實に働いてくれるのはいゝが、これが私にまけない大膽な朝寢坊です。で私の留守中朝飯もたべさせずに學校へ出したことがしばく〵あつたさうですが、さうすると旦那さんに申譯がないとあつて、歸へつて來て夏目が御飯をたべて了ふ迄決して自分でも箸をとらないのです。

庭に小い祠がありましたが、テルがその神樣に線香を上げ蠟燭を上げてしきりに拜んで居ります。一心に願がけでもしてゐる樣子ですから、いゝ旦那でも欲しいのかと夏目が冗談に尋ねて見ますと、どうぞ朝起きになれますやうにと殊勝なお祈りしてゐるのでした。

夏目はずつと冷水浴をして居りましたが、寒くなると水をかぶる騒ぎつたらありません。プウく〵言ひ乍ら、冷いので躍り上がり飛び上つて、あたりかまはず水をはねとばします。テルが側で見て笑ひ乍ら、

「旦那さん、はねまはつて、小鰯のごとある。」

と評したものです。夏目もこの朴直さが氣に入つたと見えて、時々冗談口をきいては私たちを笑はせて居りました。或る時、甘いものが欲しかつたと見えて、いきなり臺所へ入つて來て、羊羹を一片切つてたべながらテルの方を向いて、

「お前にもやらうか。」

と揶揄ひ氣味に申しますと、もうちやんと御相伴をしてゐますよとすまして答へたものです。夏目も降參して、

「料理人手元すかさずといふか、本當だね。」

と笑つて居りました。

私が東京からこの新居へ歸へつて參りますと、今迄居なかつた書生さんが一人居ります。これが『吾輩は猫である』中の愛嬌者多々羅三平事股野義郎さんです。書生さんは間もなく土屋忠治さんが加はつて二人になりました。二人とも五高の學生で、大方三年生だつたでせう。土屋さんは謹嚴な人でしたが、股野さんと來たら腹も立つた代りには、隨分と笑の種を蒔いたものです。

この多々羅三平君飯を食ふの食はないつて非常な大食ひでしたが、たゞ御飯だけではなく、お汁を御飯と同じ數だけ平らげるのですから驚く外はありません。さうして食べながら、まるで子供のやうに、ぼろく〵御飯粒をこぼすのです參つて了ゐます。

學校へ御辨當箱を持たせてやると、持つて歸へつて來たとなしで、いくら女中が小言をいつても、次の日はやはり手ぶらで歸へつて來る。そこで仕方なしに大きな子供の頭程もあるおむすびの中に梅干を入れて持たせてやるやうにして、これで漸く辨當箱の難は免れました。それからよく酒を呑んでは十二時頃にかへつて來ます。冬の寒い頃には、それ迄私か女中か誰か一人起きてゐて門を閉めなければならないのがつらいのですが、一向そんなことはお構ひなしで、歸へらて來

るなりいつの間にやら鐵瓶の湯を一つぱい吞み盡くして、からのたゝ火鉢にかけておくといふ先生です。

母屋と離れて別棟の小い離れがあります。それが書生さんの部屋でしたが、鼠が出て仕方がないから猫を貸してくれといつて多々羅先生が猫を連れて參ります。部屋へ行つて障子をぴしやり／＼閉める音がすると、やがて「玉々々」と猫を呼ぶ聲がします。其頃にはたしかに抱いて行つて部屋の中に監禁した筈の猫は、いつの間にやら臺所でテルの足に背をなすりつけながら、にやんと鳴いて居るといふ徹底した間の拔け方です。

この家賃は七圓五十錢でした。父が亡くなつて十圓の金も送らずにすむやうになり、大學への返金も完納して、その頃からいくらかづつ經濟上の余裕が出來るやうになりましたが、少し樂になると余分に本を買つた。

この年の正月のことでしたかと思ひますが、安藤さんといふ自分の小學時代のお友達で、其頃熊本の郡部の小學校の校長かをしてゐる方を訪ねまして、その訪問記を書き綴りました。何枚位のものか忘れましたが、その文章を長谷川貞一郎さんに讀んで聞かせてゐたのを覺えて居ります。それはどこの雜誌に出たこともないやうですし、家に草稿もありませんし、全集にものつてゐないやうですが、どうたつたものですかしら。或は自分で破いて捨てたものかもわかりません。俳句以外の此頃の文章といへば、私の記憶にあるものはそれ位のものです。

九　養子に行つた話

其頃のことでしたでせう。鹽原のおやすさんから長い手紙が參りました。鹽原とのいきさつは自叙傳小說「道草」の中で自分で書いてゐることですから、詳しいことをこゝで申す迄もありませんが、其の手紙からいろ／＼聞いたことを、順序ですから少しばかり話しておきませう。

鹽原は「道草」の中では島田となつて居ります。

一體、夏目は慶應三年正月五日に生まれたのですが、それが申の日の申の時に當つてゐました。その申の日の申の刻に生まれたものは、大泥棒になるものだが、それを防ぐには金偏のついた字を名につければよいといふ俗信があつて、其れで金之助といふ名をつけたといふことです。其代りえらくなれば大層出世するものだといふのです。

ところが生まれはしたもの〻、父の五十四才かの時の年寄り子で、はたへ對しても見ともよくない上に、第一お乳がない。そこで家へ女中に來てゐたもの〻姉が四谷で古道具屋をやつてゐる、そこへ乳があるといふので里子にやることになりました。ところがその古道具屋といふのが、別にれつきとした店をもつてる程のものではなく、毎夜お天氣がいゝと四谷の大通りへ夜店を張る大道商人だつたのです。

或る晩高田の姉さんが四谷の通を歩るいてゐますと、大道の古道具店の傍に、おはちいれに入れられた赤ん坊が、暗いランプに顔を照らし出されて、可愛らしく眠むつて居ります。近よつて見ると紛ふ方なく、それが先頃里子にやつた弟の『金ちやん』なのです。何が何でもおはちいれに入れられて大道の野天の下で寝せられてゐるのはひど

い。嬢さんは無性に可哀さうになつて、いきなり抱きかゝへて家へかへつて參りました。一時の氣の毒さで連れ歸へつて來ては見たものの、元々家には乳がありません。一晩中泣きとほしに泣き明かした始末に、連れて來た嬢さんは父から散々叱られて、仕方なしに又その古道具屋へかへして了ゐました。かうして乳離れのする迄古道具屋に預けておかれました。

けれども元々家へは置いときたくない父の肚なのですから、機會があれば他へ養子にでもやらうとしてゐたものでせう。そこへ折よく養子の話が持ち上りました。貰ひたいといふのは子供のない鹽原夫婦です。

鹽原といふのは元夏目の家に書生をしてゐたものですが、この男見所があるといふわけで、名主の株を買つて貰らつて段々に取り立てられ、其頃では淺草の戸長となつて居りました。妻女のおやすさんといふのも、たしか夏目の家に奉公してゐて、一緒にして貰らつたのださうですが、夫婦の間に子供がありません。養子を物色してゐたところへ、第一候補に上つたのが、いらないもの扱ひにされてゐる夏目の末子です。他人の子ではあり、男の子で願つたりかなつたりで、此方もやる位なら氣心の知れたところがいゝといふので、とう〳〵鹽原へ養子に行くことになりました。それが夏目の三歳の時です。

最初のうちは夫婦二人とも大層な可愛がりやうで、殊に妻女のおやすさんなんかは、何でも欲しいといふものは買つてくれるし、それは〳〵吾が子のやうにちやほやしたさうですが、そのうちには子供はそつちのけにして、夜晝夫婦喧嘩ばかりするやうになりました。一體おやすさんといふ人は根が非常なやきもちやきだつたのですが、やきもち喧嘩をするにはする原因があつたのです。といふのは戸長をして居りましたもので、淺草のどこかの後家さんで淋しく暮らしてゐる女があり、それがいくらか地所や何かの財産をもつてゐるところから、いろ〳〵その面倒を見てやつてゐるうち、女の方ではひどくそれを力にして頼つて來たのが始まりで、終ひには色にからんで仕舞つたものらしいのです。やきもちが募れば男も意地づくになりませうし、後家さんの方でも笠にかゝつて來て、とう〳〵その女が家へ入り込んで、あべこべにおやすさんを追ひ出さうといふ始末。さう〳〵喧嘩ばかりしてゐる家では、子供の上にどんな災厄が振りかゝらないものでもない。かういふので殊に一番上の大助兄さんが大層同情して、自分は病身ではあり、到底夫婦も出來さうにないので、金ちやんを養子にして後を取らせやうと引きとることになつたのださうです。それが夏目の七、歳の時の話です。

引き取るについても先方で中々渡してくれません。漸く其頃の金で三百五十圓、養育料として支拂つて身柄を受取りましたが、籍はいつかな渡してくれません。鹽原の方ではもう少し大きくなつたら、其頃流行つた役所の給仕にでも出す積りでゐるらしく、其上手離すとなれば幾分の愛情もあつて、澁つてゐたものでせう。隨分大きくなる迄鹽原姓を名乘つてゐたものださうです。

そんなこんなで養家では結局養子ですから親身の愛情もなかつたのでせうし、實家では實家で父が養子にやつた奴だとあつて、これ又つつかけものにするといつた工合で、家庭的には謂はゞ孤兒同然の身の

上で、隨分苦勞に苦勞をしたものらしいのです。

そのうちに一番上の兄さんも死んで相續者をきめなければならなかつた時、今の矢來の兄さんが、この不縁養子の話を思ひ出して、後をとるかと尋ねましたところ、こんな家の後をとるのはいやだと一言のもとにはねつけたさうです。

おやすさんは間もなく件の後家さんに投り出されました。

そのおやすさんが遙々熊本へ手紙をよこしたのです。鹽原を出てからのことから、夏目の幼時のことなどが、いつぱい書いてありました――

鹽原を出てからおやすさんはある酒屋の後家さんに行きました。間もなく夫は亡くなりましたが、先妻の娘が一人、それが年頃なので婿を取りまして、相當商賣をやつて居りました。娘も婿も親切にしてくれて、おやすさんの上に幸福な日が續きましたが、それも一時、やがて戰爭が始まつて、婿は出征して戰死をして了ました。大切な男手が無くなつては商賣も出來ず、店は他人に讓り、戰死者の遺族に下りる年金で、小い家に入つて暮らしを立てゐました。自分が苦勞して育て上げた娘ではないけれども苦しい中にも隨分と大事にしてくれてゐる。おやすさんはかう書いて居ました。それだのに何かと自分に苦勞をかけて大きくなつた夏目は、今は大學を出て、月給の百圓も取つてる立派な男になつてゐながら、一向振り向いてもくれない。子供の頃疱瘡を病んだ時、どんなに寢ずに看護して上げたと思ふ。五才の時小便をしやうとして緣側から轉がり落ちて腰の骨の脫けた時、どんなに自分が面倒を見てやつたゞか。あの時はどうだつた、この時はかうだつたと、昔々養育に骨折つたことをいろ／＼とならべ立てたそれはそれはくどい手紙でした。結局困つても居るからいくらか金が欲しいといふやうな意味合がほのめかしてありました。が此方も、それは非常に困るといふのならやらないこともないけれども、引き取られる時にきれいに金迄拂つてわかれたものを、今更そんなことを言はれたのでは際限がないといふので、體のいゝ返事を書いてやつてたやうでした。

其后幾年か過ぎて、夏目が修善寺で大患にかゝつた頃、おやすさんが訪ねて參りまして、それからは一年に一度位は見えたでせうか。來る度に少しづつお小使を上げたので、後ではかへつて金を貰ふので行きにくいとあつて見えなかつたやうです。尤も晩年にはリユーマチスで手足もよくきかなかつたといふことでしよ。

おやすさんは后で秋田雨雀さんの養母といつた形になつて、六七年前亡くなりました。生前雜司ヶ谷に墓參に行つたかへり道に、鬼子母神の社へ出ますと、そこでふと杖に縋つたおやすさんにお會ひしたのが最後でした。

鹽原の方は其後慾にかゝつて、洋行からかへつてから、先きの養育料の二重取りにかゝりました。此事は「道草」に詳しく書かれてゐますが、あのとほりです。子供の時は夏目も隨分數奇な運命を辿つたものです。當時の養育料三百五十圓は相當の大金で、傾きかけてゐた夏目の家にはそれだけ餘分の品がなく、其時は他から借りて返へしたといふことです。何しろ商家で相當門戶を張つてゐた時のことゝて、[illegible]つてゐる癖に何かと物入りのある上に、兄さんが死ぬやらその又次の兄さんが死ぬやら、さうして一人一人が死ぬとそれは又御大層な[illegible]

かゝるといふわけで、弱り目に祟り目の出る一方で、大分弱つてゐたものださうです。

かうして私たちの明治三十一年も暮れて了ひました。（未完）

前號補遺

（一）見合ひの時、一箸つけた引物の鯛を折詰めにして持つてかへつて兄さんに笑はれた話は致しましたが、其時かへつてからどうだつた、氣に入つたかとか何とか兄さんたちがよつてたかつて尋ねますと、歯並みが惡くてさうしてきたないのに、それを強いて隱くさうともせず平氣で居るところが大變氣に入つたと申しましたので、みんなで妙なところが氣に入る人だ、だから金ちやんは變人だよと笑つたことがあるとか兄さんに伺つたことがあります。

（二）それから見合ひがすんで、新年會をしました時に、夏目も虎の門の官舍に來たことを申しましたが、その歸りに、夏目さんのお伴と書生が大きな聲で呼びますと、年とつたよぼ〱の俥夫が、それは〱きたない俥を引いて現はれたさうです。私も送つたのですがそんなことは氣がつきませんでしたが、あたりがわりにきれいなのに俥があんまりきたな過ぎるので、來る時にはそれ程にも思はなかつたのでせうが、それが大層氣がかりになつて、歸へつて來てからその話を兄さんたちにして、本統にきまりが惡くて冷汗をかいたと申してゐたさうです。

前號訂正

前號に私の父が新潟の病院長になつて行つたやうに書きましたが、實は病院長に獨逸人が招聘された、その通譯として招かれて、後でそこの副院長かになつたものださうです。退任が私の生まれる前後で、私は程經て母に連れられて彼方に參り、たしか五つの時迄新潟で育てられました。

日本プロレタリヤ藝術史論

青野季吉

一

わがプロレタリヤ藝術運動の内部に、極く最近、對立鬪爭の姿が明白となつて來てゐる。同じマルクス主義藝術運動を指標して立つてゐるものに、勞農藝術家聯盟と日本プロレタリヤ藝術聯盟との二つの中心があり、一般に非マルクス主義の藝術團體・無政府主義的・サンヂカリズム的の藝術團體と見られてゐるものに、無産派藝術聯盟等等があると言つた風である。そしてその各々が『文藝戰線』『プロレタリヤ藝術』『解放』を機關誌として、その理論とそれに基く作品とを發表してゐる。

この現象を一目觀て、日本のプロレタリヤ藝術運動の内部が、恐ろしく混亂してゐるかのやうに非難する者がある。或はまた、同黨異伐をこれ事としてゐるものであるかのやうに難ずる者がある。これらの非難や攻擊は、日本のプロレタリヤ藝術運動の歩いて來た長い受難の道に、少しの理解も持たない者が、卒爾に今日の現象を眺めるところから生ずるものであることは明らかだが、しかし對立鬪爭の間に夾雜した現象で、彼等にそう誤認されても仕方のないものが無いとは言へない。それは認めなければならぬ。だが、その浮いた現象に囚はれて、根柢を爲し、基調となつてゐる必然の流れを見極め得ない者は、樹を觀て森を觀ざるの徒と言はなければならぬ。

我々尠くとも日本のプロレタリヤ藝術運動のたどつて來た道に、幾分でも注意と關心とを持つてゐる者の眼から見ると、現在の對立鬪爭の姿は、運動内部の混亂でもなければ、同黨異伐の淺猿しい人間惡でも何でもないのである。それは當然の發展の段階に外ならないのである。言ひ換へると、プロレタリヤ藝術運動は、その發展において當然今日のやうな對立鬪爭の段階を踏まなければならないのであり、それを踏み得るまでに發展して來たのであり、この段階を踏みしめることによつて始めて次の發展の段階へと入つて行くことが出來るものなのである。

プロレタリヤ藝術運動の現在を理解し、それが當然の發展の段階であることを呑込むためには、各派の主體の宣言するところ、その綱領として掲げるところ——それは當然の理由から、不完全なものであり、把握の不十分なものであるけれども——を仔細に調べて見ることが第一に必要であるが、それと平行して、日本のプロレタリヤ藝術運

動が踏んで來た道を、一應たどつておかなければならぬ。この議論があつて始めて、觀點をもつてプロレタリヤ藝術運動を云々することが出來る。

私はこゝに日本のプロレタリヤ藝術運動の歴史を事實に亘つて敍述しやうとするのではない。たゞ日本のプロレタリヤ藝術運動の歩いた道を、一應跡づけてみて、今日の現象の理解に役立たせたいと思ふのであり、我々の運動の現在にたいする人々の同感を深め度いと思ふのである。

（直接こゝには關係のないことであるが、プロレタリヤ藝術運動の過去を顧察するにあたつて、口をつぐむ能はざるものがある。プロレタリヤ藝術運動は、とにかくに、明治の終りにその萠芽を示し、大正の後半期において、文壇的に言つても一つの有力な思潮を形造つた藝術運動であつて、その時期に應じてその思潮を體現して、文壇及び社會の注目を惹いた作品も生産してゐる。それに拘らず、明治・大正の日本文學の總決算期と言はれて、その文學作品の大集成が企てられてゐる今日、その中に果してプロレタリヤ藝術作品と運動が反映してゐるであらうか？　これを思ふ時、私は、その大集成の企劃者・編輯者及び一般讀書人の眼界の狹隘と云ふよりも、寧ろ、その心理の根柢をなす無意識的の階級的嫌惡と言つたものに衝き當らずにはをれないのである。それは決して明治・大正の文學作品の總決算ではなく、僅かに一部の合計であるに止まつてゐる。それも執拗な階級的反感によつて、他を斥けた一部の合計であるに止まるのである。）

二

日本のプロレタリヤ藝術運動の歩いて來た道を跡づけて行くと、それが一個の意識的な藝術運動の形をとつて現はれて來た以前に、その前史とも言ふ可き時期がある。それは明治四十年前後、木下尚江、堺利彥、荒畑寒村等の諸氏が、社會主義文學を或は創作し、或は飜譯した時期及びそれにつゞいて大杉榮、荒畑寒村、山川菊榮氏等が雜誌『近代思想』等において、當時の文學現象に向つて唯物史觀的な立場から批判暴露をつゞけてゐた時期であつて、プロレタリヤ文學の歷史をたどる上では、どうしてもこの時までさかのぼつて行かなければならぬ。

それと言ふのは、一つには大正十年以後のプロレタリヤ藝術運動の主張の一部は、明らかにこの時期に胚胎してゐるし、最初の意識的にプロレタリヤ藝術を唱導し、創作に着手した人々のうちには、直接にこの時期の人々に影響されてゐた者をかなり見出すからである。

この前史期の社會的特質は何であつたか？　それは日露戰爭の後、日本の資本主義が發展成熟への一大飛躍をなし、それと同時に、日本のプロレタリヤ運動が漸く勃興しかけた時であつて、社會主義運動が第一期の隆盛を迎へた時であつた。日本で最初の社會主義政黨が出來かけやうとしたのもこの時期であり、日刊『平民新聞』の發行を見たのも、更に勞働組合らしい勞働組合の出來たのもこの時期であつた。が、それと共に支配階級の抑壓が、最も露骨に現はれたのもこの時期であつて、前期の社會主義藝術の活動が、この支配階級の抑壓と闘爭

してゐることは、留意すべき點である。この期の文學が、その内容に別個の問題として、文學の形式をかり、藝術の假面をつけて、社會主義の思想を普及しやうとの意識に基いてゐたのは、主としてその抑壓に關聯してのことであつた。しかし支配階級の抑壓が比較的に輕微であつて、その政黨運動や組合運動が直接的に行はれたと假定したら、この期の文學は或は存在しなかつたかも知れないと想像することは間違ひであつて、その意識的に基礎とするところは何であつても、その創作者・飜譯者等の心理の根底に文學的要求の潜んでゐたことは、その作品によつて示されてゐる。たゞその文學的活動が、支配階級の壓迫と結びついてゐるところに、この期の活動の特殊性の一つが在る。それを見逃してはならないのである。

それならばこの前史期の支配的な社會思想は何であつたか？　主として社會主義文學を創作し、飜譯し、更に當時の文壇現象を批評暴露した人々のそれを、今から考へて見ると、かなりに諸の流れの混合したものであることを發見しない譯に行かない。自由主義的の思想も可成りに混入して居れば、無政府主義思想にも色づけられて居り、更にサンヂカリズムの思想が大いに巾を利かして居ると言つた有様である。その哲學的根據とする唯物論にしても、ほとんど哲學的唯物論の範圍を出でないものであつたことは爭はれない。そう言ふ譯であるからその藝術によつて普及しやうとした思想的内容も、主として啓蒙的なものであるか、漠然たる社會主義の鬪爭觀念であつた。この時期の後期において、『近代思想』によつて文壇現象を批評暴露した時にも、その批評暴露の仕方は、多くは相手の論理の矛盾を指摘するか、その反社會的性質を暴露すると言つた程度のものであつて、積極的に對立した觀方を提示すると言つた性質のものではなかつた。

この前史の藝術理論はどうであつたか？　その意識的の基礎とするところは、既にも述べたやうに、藝術を便利な用具として、その假面をつけて、當時の社會主義思想を普及宣傳しやうと言ふのであつた。普通の意味の宣傳藝術が即ちその全部であつた。當時の支配的な理論によると、藝術とは支配階級が民衆を陶醉させる阿片に外ならないものであつて、無産階級にとつて何の用途もないものである。だが、然し藝術的形式をかりて社會主義思想を民衆の心に注込ませることは、少くとも支配階級の抑壓を外らす上からも便利である、と言ふのであつた。したがつてプロレタリヤそれ自身の感情の藝術的解放の道を拓くとか、それによつてプロレタリヤ藝術を創造して行くとか言つたことは、この期の人々には全然問題ではなかつたのである。であるから、またしたがつてこの期の人々には、藝術を輕蔑しながら藝術を創作し飜譯すると言ふ矛盾が見出された。これは當然その理論から出て來た結果であつた。そうしてこの矛盾は、今日もプロレタリヤ藝術運動内の一部の人々に見出されるものであることを注意しておき度い。

がこゝに心にとめておかねばならぬことは、意識的の方面ではそうであつたが、彼等が無意識的に認めてゐた方面である。彼等は先づ第一に、藝術の社會的感染力を認めてゐた。藝術は常に支配階級のイデオロギーに奉仕するものであつて、その限りにおいて勞働民衆にとつて一個の阿片に過ぎない。しかし藝術的方法の持つ社會的感染力は、これを無産階級のイデオロギーにも奉仕させることが出來ると認めたので

ある。その場合には藝術は民衆にとつて阿片ではなくて、一轉して民衆を呼び醒す有力な武器となる。卽ち藝術には、支配階級——ブルジヨアジーの藝術と、プロレタリアートの藝術とがあり得る、と言ふことを彼等は無意識的に認めてゐたのである。この期の人々をもつて、一方に社會主義藝術を創作し、飜譯したに關らず、他方において徹底した藝術無用論者であるかのやうに說く人があり、當の本人もそれらしい言辭を爲すことが無いでもないが、それは大きな誤りである。

前史において指摘しておく可き文學的貢獻は、木下尙江氏の『火の柱』『勞働』その他の謂ゆる勞働小說、堺利彥氏のバーナード・ショーその他のヨーロッパの社會主義文藝の飜譯、ずつと後になつての荒畑寒村氏の『艦底』その他の短篇小說である。木下氏の勞作は、自由黨初期の政治小說と、當時の通俗小說とをつき合せたやうなもので、當時の宣傳小說の理論にもつとも妥當したものであつた。今日、氏の作品はプロレタリヤ藝術運動の內部で顧られないが、しかし、新らしい衣をつけて氏の實利主義の複製に汲々としてゐる者も見受けられないことはないのである。當時ヨーロッパには旣にショーやロンドンやシンクレヤー等に社會主義文藝が存在して居り、堺氏はそれのいゝ飜譯を示したが、それらのヨーロッパの社會主義文藝の先達が文藝活動において目指したものが堺氏によつて全部的に紹介されたのではなかつた。こゝにも當時の宣傳理論の反映を見てとることが出來る。それらと對照して、荒畑寒村氏の諸短篇は、後のプロレタリヤ藝術に大きな意義を持つものであつた。勞働の體驗や反抗意識の藝術的表現、社會的矛盾にたいする新らしい諷刺文學等、その後のプロレタリヤ文學において生長發展して來たものが、かなり健康な萌芽の形において、そこに見出されるのである。そしてそれまで社會主義文藝を全然無視してゐた文壇の一部が、藝術作品としてそれを認めたのであつた。謂ゆる文壇との交涉の端緒もまたこゝに見られたのである。

日本のプロレタリヤ藝術運動は正しくは、大正十年前後から始まる。それから數へれば今年で約六年の歷史を持つてゐる。だが、前史の活動を計算に入れゝば、十年以上の歷史を持つてゐることになる。この年月は決して短かいとは言はれない。

三

いまも言つた通り日本のプロレタリヤ藝術運動が始まつたのは、正しくは大正十年前後であるが、それ以前に一種の過渡期のあつたことを見逃してはならない。私はかつてから書いたことがある。

『第一期』(こゝで云ふ前史期)の特質はさうであつたが、しかしその期の末期になると、來る可き時期を暗示する現象が、あらゆる部分の過渡期においてさうであるが如く、こゝにも現はれて來た。荒畑寒村氏、荒川義英氏、藤井眞澄氏などの創作的努力と、その齎らした結果とは、決して右の特質(曩に述べたやうな前史期の特質)におほはれるものではない。更にその期の最後に出て來た平林初之輔氏、佐野袈裟美氏の評論の如き、明らかに第二期(こゝで云ふ第一期)の前期を形造る特質のものであつた。(『轉換期の文學』一四二頁)

この過渡期の特質と見る可きは、前史期のそれとは異つて、社會主義者が餘技として文學藝術を創作し、飜譯すると言ふのではなくて、

比較的専門に近い創作家・評論家が出て來て、專ら社會主義的立場から創作し、批評するやうになつたことである。したがつて文壇との交渉も比較的濃厚になつて來るし、宣傳藝術の範疇をはみ出て、プロレタリヤの藝術の萌芽がよほどに生長して來たことが眼についた。更にまた、これは前史期に見られなかつたことであるが、藝術を中心として集まる小さなグループもこの過渡期に生れて來てゐる。その中で最も生長したものは『黒煙』に據つたそれであつた。が、このグループが一個の藝術運動の主體となつて、無産階級運動の一翼たる使命を意識して、積極的に働きかけると言つたやうな、後來の諸時期に見られるやうな現象は、勿論まだこれを認めることが出來なかつたのである。またこの期の藝術理論にしても、前史期のそれを多く出たものではなかつた。

かくて大正十年以後の第一期の、日本におけるプロレタリヤ藝術運動の最初の隆盛期の幕が開かれたのである。

第一期は大正十年から大正十二年秋の大震災までであるが、先づこの期の社會的特質をふり返つて見やう。

世界大戰の結果として日本の資本主義は異常な發展を見、大小の成金が續出し、一方資本の集積の度も異常に高まつて行つた。それにつれて無産者運動が一大飛躍をなし、社會主義思想は勞働階級の手へ深く浸込んで行つた。が、大戰による好景氣は凡そ大正八年頃まで續いて、やがて大正九年には一大恐慌が襲來し、事業の休止や縮少にともなつて、勞働階級は賃銀値下や失業の不安に襲はれた。すなはち言葉をかへて言ふと、日本の資本主義は『大戰中におかれてゐた特殊な位置の結果として、それは完全なる帝國主義段階に到達した。即ち資本主義の最後の段階たる帝國主義の諸條件を完全に附與せられ、帝國主義としての本質的活動の舞臺に入つたのである。併しながら世界資本主義の一般的傾向は、既に帝國主義的矛盾の尖銳化の結果として、急速なる沒落の過程に這入つてゐたのであつた。』（『藝術』パンフレット二二頁）この資本の攻勢期、勞働階級の受難期に、第一期のプロレタリヤ藝術運動が擡頭し、恐ろしいまでのテンポをもつて進展して行つたことは注目に値する。だが、この事實からして、藝術運動は一般無産者運動が低調となつたときに、その或部分の補綴として擡頭するものと考へたら、それは早斷であらう。藝術運動が一般無産者運動からの分化をヨリ完全にして、無産者運動の一翼としての機能をヨリ十分に果して行くにしたがつて、それは寧ろ無産者運動の隆興とその歩調を合すものとなるであらう。

然らばこの時期の社會思想はどうであつたらうか？　歐洲大戰中及びその後に、わが國の社會思想界は、一時民主主義思想の支配するところとなつてゐた。このデモクラシーの思想は、國家主義にしばられてゐた思想界を解放して、活潑な活動の舞臺を開いたのであつた。一方、資本の攻撃が始まり、勞働がこれに加はるにつれて、民主主義の支配はやがて社會主義の時代へと移つていつた。堺利彦氏、山川均氏、高畠素之氏、大杉榮氏等の如き、明治時代の社會主義者及び無政府主義者が思想界の表面に出て、特に山川均氏は長き沈默を破つて、デモクラシーに向つて果敢な鬪爭を開始した。一方社會主義思想は勞働運動の中に强い支配力を持つて來て、その運動は尖銳化して行つ

た。ところでこの時期の初期の社會主義思想の内容には、革命的サンヂカリズムの色彩が濃厚であり、兼ねてまた無政府主義思想の支配力も強烈なものがあつた。が、この時期の中期及び末期にはロシアにおける無産階級革命の勝利の大波につれて、わが國にもボルシェヴィズムの思想が浸潤し來り、まことに恐ろしいテンポをもつて、社會主義思想團體及び勞働組合を攫みとつた。山川均氏がボルシェヴィズムの影響をうけて、かの有名な方向轉換論を唱導して、社會主義運動の無産大衆化を要求したのもこの時期であり、勞働總同盟の合同主義と、アナルキズム及びサンヂカリズムの勞働組合の自由聯合主義との大衝突を來したのもこの時期であつた。更にその方向轉換過程として、政治運動の必要が叫ばれ、無産階級政黨樹立の主體確立の運動が、秘密の間に進行し、一度び官憲の知るところとなつて、徹底的の彈壓を蒙つたのもこの時期であつた。日本のプロレタリヤ藝術運動の第一期は、この時期に發生し隆盛を見たのであつて、したがつてサンヂカリズム、アナルキズム及びボルシェヴィズム(コンミュニズム)の對立の姿が、そのまゝ藝術運動のなかへも持ち込まれて來た。しかし藝術運動は藝術運動としての特殊な制約をもつてゐる。それら三つの對立した思想の流れは、この運動の内部にあつて特殊な結合の形をとつたのであつた。

藝術運動の擡頭・隆興には、また、藝術運動が直接の舞臺とする文壇の條件も作用する。ここにこの時期の文壇の狀態を一瞥しておかう。この時期の初期の文壇は、相當に活力のこもつてゐた文壇であつた。自然主義文學の衰亡につづいて、白樺派の貴族的・理想主義的文學思想が文壇の前方に歩み出で、一方菊池寛、芥川龍之介氏等の理知主義的の文學が、文壇の主流を分け持つてゐた。かくて一つの旺盛な創作時代がつくり上げられて居り、文藝批評界は痲痺してしまつてゐた。がこの期の中頃になると、文壇にはほとんど批評らしい批評が影をひそめてしまつた。文壇は甚しい無苦悶の狀態を露呈した。プロレタリヤ文藝運動が最初にまづ、文壇のこの狀態にたいする批評として發現し、文藝批評の方面でブルジョアジーの文藝の社會的基礎の暴露によつて、相當の功をおさめたのは、文藝のこの狀態に聯關してゐるものであつた。とにかく文壇は文壇として行詰つてゐた。そして文壇それ自身のなかから新らしい藝術思潮が望ましい力をもつて生れ出るの兆はまだ見えなかつた。そこへ一方プロレタリヤートの成熟にともなつて、文壇外から、新らしい、文壇的に云つても革命的な文藝思潮が擡頭して來たのであつた。第一期のプロレタリヤ文藝運動のすばらしい飛躍は、それ自身に内在する力の威力以外に、謂ゆる既成文壇のこの狀態の産物に外ならないと言つてよいであらう。

四

第一期のプロレタリヤ文藝運動の藝術理論を考へて見ねばならぬ順序となつた。この期の藝術理論は、ほとんどその凡てがブルジョアジートとの闘爭の過程に展開されたものであつて、第二、第三期において發展せしめられた殆んど凡ての論鬪が、この期において取上げられて居る。この點は十分に留意しておかなければならない。プロレタリア藝術の主張が文壇の注意を惹くと、第一に問題となつたものは藝術の

本質論であつた。ブルジョアジーの作家・批評家は聲を大にして、藝術に階級なしとの藝術超階級論をもつて立ち向つて來た。これに對してプロレタリヤの作家・批評家は藝術現象の辨證的觀點に立つて、それに應へたのであつた。この藝術超階級論は、ほとんど凡ての既成作家・批評家が、唯一の武器としたものであつて、兩陣營の論爭でこれほど執拗に、これほどムキになつて論ぜられた爭點はその後もなかつたと言つてよいのである。

プロレタリヤ批評がこの時期において、先づ藝術を辨證法的に取扱つて、その階級的規定性を暴露闡明したことは、前史期の宣傳藝術からの大きな飛躍であつて、こゝに始めてプロレタリヤの獨自の藝術の存在權にたいして、理論的の基礎を据ゑたものであつた。更にプロレタリヤの批評は、唯物史觀の立場から藝術理論を構成しやうとの努力を示した。その中最も記憶さるべきものは平林初之輔氏の『唯物史觀と文學』(十年十一月)の一文であらう。こゝではたゞ唯物史觀の立場から、文學藝術の歷史性が明快に說明されてゐるにとどまるが、それはプロレタリヤの批評がこの時既にいかに明白にその新らしい藝術理論の基礎をつかんでゐたかを示すものであつた。第二・第三期において、プロレタリヤ藝術理論の確立が呼ばれ、その努力の結果とも見るべきものが提出されはしてゐるが、そこに發展せしめられたものが、この期の努力の結果をどれほど出でてゐるかは疑問である。

更にこの時期において、實際運動と文藝運動との聯關性の問題、文藝運動それ自身の持つ特殊性の問題、プロレタリヤ文藝の樣式の問題等が、プロレタリヤ作家、批評家の關心に上つた。そしてそれに對して凡そ二樣の見解の對立が明白となつた。實際運動と文藝運動との聯關性の問題では、文藝運動をもつて、實際運動の一翼と見做す見解と、實際運動とは直接に何の聯關も持たぬ獨自の運動と見做す見解とが對立した。文藝運動の特殊性の問題では、文藝運動と單なる作品行動に局限しない見解と、主として作品行動に局限することをもつてその特殊性とする見解とが對立し、プロレタリヤ文藝の樣式論ではリヤリズムの樣式論と、表現派・構成派等の樣式論とが對立した。その外、プロレタリヤ文藝の讀者の問題も、必然に問題となつたことを忘れてはならない。この問題では、プロレタリヤ文藝と言つても讀者は知識階級以外のものであり得ないと見る見解と、最初は先づ知識階級であるが、その發展の指標は勞働階級への浸潤の度合ひに求めなければならないとする見解が對立した。而してこれらの對立は、一方にコンミュニストと、他方にアナルキスト及びサンヂカリストとの對立であつて、コンミュニストの主張は、實際運動との聯關性の問題では一翼主義をとり、文藝運動の特殊性の問題では、非作品局定主義をとり、樣式論ではリアリズムのそれを執り、讀者の問題では勞働階級主義をとつたのであつた。

かく第一期のプロレタリヤ藝術理論は、ほとんど凡ての問題を掘たのではあつたが、それは摑みとり、それを相當に力强く提出したと云ふにとどまつてゐた。そこに第一期の理論の特質がある。この理論が實踐によつて證明され、更に實踐から理論を汲取つて來ることは、當然第二・第三の時期へと殘された仕事であつた。例へばプロレタリヤ文藝の讀者・觀賞者の問題としても、第三期（現在）において、一

方プロレタリヤの機關誌の生長によつて勞働階級への浸潤の度を目ざましく加へ、他方プロレタリヤの獨自の演劇運動の組織によつて勞働者農民の中へ深く入ることによつて、實踐的に解決されて來てゐるのを見るのである。

第一期の文藝運動が、前史期及び過渡期のそれと異つて來た一つは、ともかくにも文藝運動の主體が出來上つたことであつた。それは小牧近江・村松正俊・佐々木孝丸氏等によつて組織されたところの、機關紙『種蒔く人』を中心とした團體であつた。この團體外にもいろんなグループがこの時期に生滅したことはこゝに述べない。『種蒔く人』が一度びその活動を始めると、そこへは多くの人々が結びついて、十分な意味においての當時の藝術運動の主體となつた。したがつてこの主體にこの期の藝術運動の特質が反映した。そこにはコンミユニストとサンジカリストと而してリベラリストとまた多分にアナルキストの要素を持つた人々が雜居した。そうして渾然たる結合をつくつた。が、この團體の團體としての主張は、コンミユニストのそれに基いたもので、例へば實際運動との聯關において飽まで一翼主義をとり、インターナシヨナリズムを主張し、當時の『對露非干渉運動』に參加し、『國際青年運動』と結びつき、無産者思想團體とつねに行動を共にした。これは十分に注意を拂ふべき點で、藝術運動の一翼主義はこの時すでに、その初發的な形において實踐されてゐたのであり、非藝術至上主義に立つ非藝術行動の規定がこの時すでに、漠然とではあつたが意識されてゐたのであつた。

作品行動の方面からこの時期を見ると、この時期ほど、批評活動と相ならんで創作活動の旺盛な時期はなかつたと云つてよいであらう。單なる宣傳藝術として前史期のそれの複製のやうたものは、ほとんど發見されなくなつた。この時期の創作活動で特に目ざましかつたのは、前田河廣一郎、新井紀一、金子洋文、中西伊之助の諸氏であつて、特に前田河氏の『三等船客』金子氏の『地獄』中西氏の『赭土にめぐむもの』は大きな藝術上の收穫とされた。恰かもこの頃、社會主義文藝の先達堺利彦氏が下獄するので、その勞に酬ゆるため『藝術戰線』と題して二十九人のプロレタリヤ創作家・批評家の文藝が集められた。この頃の作品活動にいかに多くの人々が參加してゐたかを示すために、こゝにその集に加はつた人々の名を列記して見やう。

(第一部)秋田雨雀・新井紀一・有島武郎・麻生久・江口渙・藤井真澄・今野賢三・金子洋文・加藤一夫・小泉鐵・前田河廣一郎・松本淳三・宮島資夫・内藤辰雄・中西伊之助・小川未明・尾崎士郎・佐々木孝丸・鄭然圭・吉田金重(第二部)青野季吉・藤森成吉・長谷川萬次郎・平林初之輔・細井和喜藏・小牧近江・新居格・新島榮治・佐野袈裟美(外に裝幀者村雲毅一)

この期の作品活動の内容を總括して見ると、謂ゆる體驗小説と云はれたもの、即ち勞働の體驗を表現したものが、その主要部分を形造つてゐたと言つてよいであらう。それに加へて、プロレタリヤの立場に立つて、啓蒙を目ざした作品がまた多く見られた。そしてその樣式としては自然主義の傳統をそのまゝうけついだものが多かつた。その內容においてもその樣式においても要するに自然生長的の要素が支配してゐたのであつて、その限りにおいて既成文壇から容易に受け入れら

れる要素を多分に持つてゐた。またその限りにおいて、一個の完成された藝術として迎へられるものが『容易』に生產されたのであつた。前記の『三等船客』や『地獄』をその實例としてよいであらう。この時期にはまた詩の方面の活動が特に熾烈であつた。その殆んど凡ては單なる反抗・忿怒・憎惡を表現したもので、その中には多分にニヒリストの心理が混入してゐて、物凄く人々を擊つと言ふよりも、底の知れぬ暗さの中へ人々を引摺り込むと言つた性質のものが多かつた。

かゝる第一期の發展がまだその當然の進展をとげない中に、大震災の襲來があつて、この期の幕が俄かに下りてしまつたのであつた。もし大震災が來なかつたとすれば、次に來る段階は直ちに激しい內部的の對立であつたらうと豫測される理由がある。そして第二期の沈滯期をしてその期間を短縮せしめることが出來たであらうと思はれる。大震災は何としても大きな打擊でなければならなかつた。

五

プロレタリヤ藝術運動の第二期は、およそ大正十二年末から、大正十五年の秋までの比較的長い時期であつて、一口にこの時期の特質を言へば、プロレタリヤ藝術運動の沈潛期であり、兼ねて次期の發展への準備期であつたと言ふことが出來る。關東地方の大震災は一切の發表機關を奪つてしまひ、特にプロレタリヤの發表機關に手痛い打擊を與へた。藝術運動が發表機關を奪はれることは、その運動の主要武器を奪はれることを意味する。この期の初頭においてプロレタリヤ藝術運動がほとんど消滅したかに見え、近視眼のブルジョア作家、批評家をして、プロレタリヤ文藝亡びたりと歡喜せしめた。が、プロレタリヤ藝術運動は文壇的理由によつてのみ發生した藝術運動ではなくて、階級の生長と相俟つて發生した藝術運動であるから、その階級の生長が停止しない限り亡ぶるものでない。そこで一見死滅したかに見えたその底には新らしい飛躍が準備されてゐた。而してその飛躍はこの期の中期及び末期において鮮やかに目について來たのであつた。

世界資本主義の崩壞に合流した日本の資本主義は、大震災の打擊によつて愈々急速な崩壞の過程をたどり、不景氣はいつ停止すべくも見えず、勞働の不安は加はるばかりであつた。かくて勞働階級は極度の困難に立ち、資本の攻擊がます／＼加つて來たのがこの期の社會的特性であつた。

この資本の攻勢に對抗すべく、勞働階級の間には次第に『政治への傾向』が濃厚となつて來た。而してその指導精神となつてゐたものは、コンミュニズムの思想であつたが、この期の初期に於ては、そこには多分の組合主義的要素が發見された。が、事實の辨證的發展は、無產階級政治運動の方向轉換過程をして急速なテンポをもつて過程せしめた。この期の中期末期には既に、組合主義政治鬪爭と全無產階級政治鬪爭との二つの政治主義の對立を見、各々その政治主義によつて無產政黨を樹立して對立するにいたつた。このあはたゞしい發展の過程に聯關してプロレタリヤ藝術運動も亦、あはたゞしい過程をとつて進まなければならなかつた。

この時の文壇はいかなる狀態にあるであらうか？　第一期當時の文壇の沈滯を破つたものはプロレタリヤ藝術の主張であつたが、この時

期の初めになると、文壇には新感覺派なる一派の運動が擡頭して來た。當時の沈滯した既成文壇に一種の清新な空氣を輸入し、傍らプロレタリヤ文學に向つて新らしい闘爭の陣營を形造つた。新感覺派の本質は一種の頽廢的な技巧主義であつて、武者小路氏等の理想派、菊池氏等の理知派に對立して、新らしい感情派の内容をもつてゐた。この藝術運動は確固とした社會的根底に立つてゐると言ふよりも、ヨリ多く文壇的理由に基いたものであつた。したがつてその生命も決して長くはなくて、この時期の終りには一派の人々の藝術は次第に變質し、藝術運動としての意義を失つて來て、プロレタリヤ文學の新らしい進出期が現出し、プロレタリヤ藝術にたいして、ブルジョアジーの側からの新らしい攻撃――舊い内容をもつてしての！――が始まつた。私は曾つて文壇の新法則なるものを說いたことがあるが、ブルジョアジーの文藝と對立して、一度びプロレタリヤの文藝が發生して來れば、もはや全文壇にあつての最も主要な運命的な問題はこの對立であつて、文壇それ自身に何等かの新流派運動が擡頭して、文壇がそれに幻惑されてゐる間はこの主要な運命的な對立は一時隱されてゐるが、その幻惑が去つて文壇それ自身に問題がなくなると、常にこの主要な運命的な對立が表面に浮き出て來るのである。こゝにもまたこの新らしい文壇的法則の實證があるわけである。

この時期のプロレタリヤの藝術理論は、第一期に提出された諸問題の整理・發展がその中心の關心となつてゐた。特にこの期の中期・末期には、無産階級藝術理論を、科學的に組織しやうとの努力が各方面に現はれて來たのである。その中に特に注意を惹いたものは靑野季吉氏の『無産階級藝術論』『社會問題講座』であつて、私の『調べた藝術』の提唱も多少の注意を惹いたかに思はる。要するにこの時期のプロレタリヤ藝術理論も、やはり一種の準備的努力に終つて、第一期に展開されたところを何程も押進めはしなかつたと言つて大して間違ひではないであらう。が、この期の末期において漸くその兆候をあらはして來たところの理論上の一つの傾向は、特に注目すべきものがあつた。と言ふのは全無産階級的政治闘爭の政治主義が高調せられるにつれて、機械的に藝術理論における方向轉換を要求するものが現はれかけて來たことである。が、それはまだこの時期には何程の發展も見なかつた。

第二期の文藝運動の主體が、前期の『種蒔く人』の後身である『文藝戰線』であつたことは說明するまでもないであらう。『文藝戰線』は震災の直後に發刊されて、この沈滯期によくプロレタリヤ藝術運動の旗印となつたものであるが、その構成分子は最初は依然として前期に變らなかつた。發刊當時は藝術運動の中主として理論及び作品行動に主力を灑ぐ旨を宣言したが、これは震災によつて攪亂されたプロレタリヤ藝術運動の陣營を建て直す上において、一つの必要な段階であつた。かくて維持された藝術運動は、やがて大衆的活動の舞臺へ踏み出すべき段階に到達し、そこに立てられたものが『日本プロレタリヤ文學聯盟』の組織であつた。この聯盟の組織の企ては、コンミュニストもアナルキストもサンヂカリストも依然としてそこに雜居して、とにかくにもプロレタリヤ藝術運動の共同戰線を形成しやうとの意圖に出たものである。それには大震災によつて受けた大打擊を取りかへし、大

衆活動への集團的藝術を與へやうとの要求が作用してゐたのであつたが、その企ての進行の過程において、もはや集團主義によつて行はふとするコンミユニストと、飽まで個人的自由の心意に基いて藝術活動を行はふとするアナーキストとが、同一集團の中にあつて藝術活動を行ふことの不可能が明白となつた。かくて『日本プロレタリヤ文藝聯盟』は發生と共に分裂し、こゝに完全にコンミユニストの指導下におかれて、新らたに『日本プロレタリヤ藝術聯盟』と改稱された。それにつゞいて『文藝戰線』を構成する要素の間にも分裂が來て、そこに混入してゐたアナーキスト及びサンヂカリストが、組織の外へ去つてしまつたのであつた。こゝで始めてプロレタリヤ藝術運動の陣營內において、アナーキストとコンミユニストとが同一組織の中に混合してゐる事實を、何處にも見ることが出來なくなつた。卽ちこの二つの運命的な對立した分子は、こゝに始めて完全に分離してしまつたのであつた。

實際運動の方向でのコンミユニストとアナーキストとの完全な分離は、早く既にプロレタリヤ藝術運動の第一期當時に行はれたのであつたが、藝術運動にあつてはいまの時期まで、一方に對立しながらに他方に何等かの形に於て提携して來たのである。これには藝術運動の持つてゐる特殊な性質が大いに作用してゐたものである。と言ふのはその抱懷する社會思想の上では明確に對立してゐても、プロレタリヤの藝術を建設して行くと云ふ點及びブルジヨアジーの文壇に對立してプロレタリヤの文壇を維持し發展させるといふ點では、提携して行ける余地があつたからである。少くともあると考へられたからである。このことはまたアナーキストの側にもコンミユニストの側にも、その世界觀に基いた明確な藝術理論がその大體の骨組だけでも出來上つてゐなかつたことを語るものであり、それだけその世界觀と藝術觀とが遊離してゐたことを語るものであり、かねてプロレタリヤ藝術の運動全體が、まだ觀念的な運動の域を脫しなかつたことを語るものでなくて何であらう。

この時期の中期及び末期において、特に創作活動の方面で新らしい人々の生々とした活動が見られた。その主なる作家は、葉山嘉樹・林房雄・村山知義・久板榮二郎・山田清三郎・里村欣三・小堀甚二の諸氏であつた。中山氏や山田氏は新らしい人と言ひ難いが、その創作活動が生々と展開されたのはこの時期であつた。こゝに擧げた人々の創作を始めとして一般にこの時期のプロレタリヤ創作の特質を數へて見れば、從來の體驗小說一天張の範圍を出でて、その內容の上にもその樣式の上にも、いろんな試みが爲されたことであつた。それらの試みは或は中途半端であり、或は失敗に終りはしたが、その中には文壇の全注意をあつめたやうな作品も生れた。そうかと思ふとまたプロレタリヤ藝術運動の前史へ逆戾りしたかと思はれるやうな『單なる宣傳藝術』も新らしく試みられた。プロレタリヤ藝術作品の中で、一方にプロレタリヤの生々とした感覺が生かされて來たのもこの時期のことであり、他方に鋭い批判的・知識的要素が迎へ入れられたのもこの時期であつた。要するに或意味において完成された第一期の作品から、新らしいプロレタリヤ藝術へ飛躍するための、準備的努力が、やはりこの時期の創作の特色だと見てよいであらう。

プロレタリヤ藝術の讀者の方面で、この時期の特に後半期に現はれ

た現象は、意義に富んだものである。それは第一期のそれの讀者が、主としてインテリゲンチヤであつたに反して、こゝでは漸くその讀者の重要部分が勞働階級に移らうとする傾向を示して來たことである。それはプロレタリヤ藝術の作品そのものゝ内容にも基づくが、主として『文藝戰線』に見るやうにその機關誌が勞働階級に向けてその進路を開いて來たことと、他方『無産者新聞』の如き無産階級それ自身の新聞紙が生長して、それによつてプロレタリヤ藝術の存在と作品とが容易に勞働階級に紹介されるやうになつたことに基づくものである。プロレタリヤ藝術が文壇における存在權を確立したのは、第一期の仕事の結果であつたが、勞働階級の心臟を摑むといふその本來の目標へ第一歩を踏むの歡びに接したのは、第二期の後半期においてであつた。

かくて多産的な展望をもつて、プロレタリヤ藝術運動は第三期へと突入したのである。

六

プロレタリヤ藝術運動の第三期は、大正十五年の秋をもつてその幕が開かれたもので、現在もその過程のうちに在るのである。この時期の今日までの特質は、第二期の後半期に發した創作活動の旺盛に加へて、プロレタリヤ批評が謂ゆる理論鬪爭の名によつて果敢に行はれてゐることである。それと共にプロレタリヤ藝術運動の内部に、あはただしい分裂の過程が見られ、諸藝術運動の主體の對立が現出したことである。

この時期の社會的特質は前期のそれを一層濃厚にしたもので、かの金融界の大混亂にその一端を見るやうに、今やわが國の資本主義は急速な速度をもつて崩壞への道をたどり、更に支那の反帝國主義運動・國民革命運動は、その崩壞を更に重壓し、それを防止しやうとして田中軍閥内閣は、極端な反動政治を敷き、勞働階級の言論集會をほとんど完全に彈壓してゐる。この重苦しい空氣の中にあつて、プロレタリヤ藝術運動は再びその活躍期に入つたのである。

無産階級運動の方面では、勞働者農民の共同戰線黨として、謂ゆる全無産階級的政治鬪爭主義によれる勞働農民黨が漸くその基礎を確立し、組合主義政治鬪爭を指導精神とする日本勞農黨と對立し、更に社會民衆黨及び日本農民黨の如き小ブルジョア黨と對立鬪爭してゐる。プロレタリヤ藝術運動がこの期において政黨運動と積極的に結合して來たのはまた當然と言はなければならない。がこゝに注意すべきことは、政治運動の方面で、全無産階級的政治鬪爭の理論を機械的に移行し、空疎な理論鬪爭に陶醉して、極左翼的自慰にふけつてゐる分子の存在することである。而してそれは理論拘泥主義となつて現はれ、組織的分裂主義となつて現はれてゐる。この小兒病的逸脱が、プロレタリヤ藝術運動の陣營内にも反映して來たことは、これもまた自然と言つてよいであらう。

この時期の文壇を一瞥すると、第二期の末期當時の沈滯が更にその度を加へ、創作界に何等目ざましい活動がなく、老大家のマンネリズムを讚仰して居るにとどまり、文藝批評の方面でも創作家の感想的批評に一時の不滿をいやしてゐるに過ぎない。そしてそこで積極的に行はれてゐるものは、明治・大正の文學の總決算である。プロレタリヤ藝

術運動の第三期の活躍は、當然この文壇へ大きな衝撃を與へなければならなかつた。文壇はまた新らしくプロレタリヤ文藝の存在權を云々し、個々のプロレタリヤ作品に向つて注意の眼を向けてしまつた。が、この期のプロレタリヤ藝術運動は最早や文壇内にとどまつてゐるものではなくなつた。したがつて文壇が注目し、批評し得る範圍は、プロレタリヤ藝術運動の一部分に過ぎなくなつたのである。たとへばこの期の最大の特色たるプロレタリヤの演劇運動——勞働者農民の間での——の如きは、彼等の視野の及ぶところではないのである。

第三期のプロレタリヤ藝術理論は、私の「自然生長と目的意識」の論綱にその端を發したやうに見える。無政府主義者はこの論綱を誤認して、自然生長を否認するものとして論難した。一方コンミユニストの陣營にあつてはこの論綱の一般論的であるの故をもつて、折衷主義的であるとして、現在の政治鬪爭のモメントに對して具體的目標を掲げよと要求した。私はここでこれらの非難に答へることを差控へるが、その論綱は單にマルクス主義的の藝術理論の基礎として役立たせるだけのものであつて、現在のモメントに妥當した藝術運動の目標を規定するにはこの基礎を確實に把握する必要があることは言ふまでもないことで、それに注意を促すだけのものだつたのである。マルクス主義藝術運動の陣營は、これに聯關しこれから伸展した謂ゆる理論鬪爭の結果二つに分裂してしまつた。一つは『勞農藝術聯盟』の理論であり、他は『日本プロレタリヤ藝術聯盟』の理論である。前者は藝術運動をもつて飽までも全無産階級政治鬪爭の一環とするが、藝術運動には藝術運動としての機能があり、それを果す特殊組織がある、その機能と組織とによつて始めて、一環たる使命を完全に果すことが出來ると主張する。それに反し後者は、藝術運動の特殊の機能と特殊の組織とを、事實において認めず、直ちに機械的に藝術を武器として全無産階級政治鬪爭に結びつかうとする。この兩者の見解は、各々まだ十分に發展されず、したがつて分明でない部分が多いが、その對立の基礎は十分明白であると言つてよい。即ちその對立は、政治的見解にあるものではなくて、藝術運動の理論と實踐の範圍に存するものである。一は藝術運動の特性に十分にして周到な注意を拂ふことを要求し、他はそれに無視的態度を執る。こゝに藝術運動としての明白な對立が存するわけである。この對立はプロレタリヤ藝術運動内部の混亂でも何でもなく、マルクス主義藝術運動の發達の一定の段階において當然來るものであつて、この各々の理論は實踐を通じて始めて補正され、やがてその對立から新らしい進展統一が生れ出るものである。この期の藝術理論にはこの外に、藝術の樣式論に立入つたものも見受けられて來たが、まだ何ほどの發展も見てゐない。

この時期にはいま述べた『勞農藝術家聯盟』と『日本プロレタリヤ藝術家聯盟』との二つのマルクス主義藝術團體の外に、それに先立つて、第二期において完全にコンミユニストと分離したアナーキスト及びサンヂカリストが無産派藝術聯盟なるものを組織したが、それがまた分裂してしまつた。元來が集團主義に基かない藝術理論の把持者が、何等かの必要の手で結合したものであるから、この分裂は當然であらう。かくてこの團體は今や有名無實なものであつて、プロレタリヤ藝術運動の内部には、マルクス主義藝術運動における『勞藝』と『プ

ロ藝」との對立があるばかりである。

この時期の創作活動は今日までのところ、相當に旺盛ではあるが、第一期のそれよりは内容及び樣式において餘り進んでゐるとは思はれない。新らしい作家にしてもまだ出現してゐない。が、第二期に生れ出た作家が、いづれもその内容及び樣式において、從來の自然生長的な行き方に疑問を抱いた結果、一種の行詰りを經驗してゐることは事實である。この行詰りはこれもまた當然なものであつて、この新らたな時期における創作活動が、第二期の延長であつてよい筈はないのである。が、一方にはこの行詰りを經驗せず、機械的に政治闘爭と結合せんとする小兒病的な意識から、單なる宣傳藝術・觀念藝術を生産して、この時期に妥當した藝術だと考へてゐる者を見出す。それはその抱く藝術理論からの當然の産物ではあるが、決して正しい意味のプロレタリヤ藝術ではないであらう。

プロレタリヤ藝術運動の第三期の目ざましい現象は、何と言つても演劇運動である。この運動は、第一期・第二期には見られなかつたもので、藝術運動の場面の廣汎になつたことを語るものであり、かねてプロレタリヤ藝術運動が、勞働者農民に接近して來たことを示すものである。その演劇の内容にはまだ眞に見るべきものがないとしても、「前衞座」『プロレタリヤ劇場』が勞働者農民の間に這入つて行つて、直接に訴へかけるにいたつたことは、廣く演劇の上からも意義あることでなければならぬ。プロレタリヤ藝術は、第三期に入つて始めて、その目標とする讀者と觀者に接近することが出來たのである。

私はこれで日本のプロレタリヤ藝術運動が歩いて來た道を、一應はたどつて見た。そして私の見解をも加へて、その中に筋道をつけて來た。私のつけた筋道は或は間違つてゐるかも知れない。しかしながら日本のプロレタリヤ藝術運動が、その時期々々に生じて、いかなる社會的條件の下に、いかなる無産階級運動の條件に應じ、いかなる文藝の空氣の間に、進展して來たかはほゞ理解されやうと思ふ。

凡ての運動に於いてそうであるやうに、プロレタリヤ藝術運動にも、多くの過誤と迷行があつたでもあらう。或はまたその正體を見失ふまでに多くの夾雜物がふくまれてゐたでもあらう。否、現在でもそれが無くはないであらう。しかし日本のプロレタリヤ藝術運動は、確かにそれらの過程迷行を是正し、それらの夾雜物を闘爭の過程において排除して來て居り、そして太い足跡を殘して歩いて來てゐると思ふ。その一時の過程を見、瞬間の夾雜物を見て、その進行の太い足跡を見得ない者は、再び云ふ、樹を見て森を見ざるの徒である。(二七・九・七)

時事語彙解說

辯證法

ディアレクチアの譯語。無限の過程の中に全體を捕へんとする方法で眞理は『肯定――否定――否定否定』の發展過程にあるといふ。これを融合大成したヘーゲルは、概念の自己運動を說明するためにこの方法を採用したが、彼れの唯心論を唯物論に置き換へたマルクスは、精神的概念の代りに物質的生產力を持ち來たり、以つて社會の歷史的發展を說明する方法に應用せり唯物史觀說は即ちそれなり。

止揚

また棄揚ともいふ。獨逸語のアウフヘーベンの譯語。元來この語は通俗には『やめる』といふ意味なれど、ヘーゲルは字學上の分析から Auf（上に）と Heben（高める）の意味を加へて辯證法的說明の便宜に資したり。例へば『有』の概念は唯だあるのみで何ものでもない『無』は何ものでもないことである。斯く思惟することの過程は、有が無になり、無が有になることと即ち否定否定の『成』で、この成は『有』『無』の正反の止揚すなはち『合』である。

ヘゲモニー

英語の Hegemony なり。本來は國や州などの同盟に於ける盟主の意味。廣く個人の場合などにも同じく用ふ。近來は勞働運動などに於いて各派共同戰線を張る場合の音頭とりの意味にも用ひらる。

强制和議法

債權者と破產者との間の合意に因り、債權者はその債權の幾分を拋棄し、或は相手に猶豫期限を與へ、配當手續きに依らないで破產手續きを終へ、而して破產者に財產の管理處分の權を回復せしめんとする法律。つまり、通常の破產終結の方法に依ると、破產財團を總て金錢に換へて各債權者に配當するのであるが、さうしないで、債務者に破產財團の管理や處分の權利をはやく回復させて、その事業の繼續を援け、再興の機會を與へる爲の法律を言ふのである。破產法二八六條以下を見られたい。

商租權

他國內に於いて最惠國條款に依つて認められた商業上の優越權をいふのである。例へば日本が支那に於いて、日本租界以外の支那の土地を租借し、或はその土地に於いて商業上の自由、優越が許容された場合この日本の有する權利をいふ。現在ではこの權利は專ら支那に於いてのみ見られる樣である。

イデオロギー

これはもとドイツ語であるが日本では（一）觀念學（二）觀念論（三）觀念形態等の譯語がある。しかしその一々の譯語の相異に從つてその示す範圍も異つて來る。以下これを示さう。（一）正確な哲學上の用語から言へば觀念學と譯すのが正當である。これはもと、十八世紀のフランスの感覺論が革命時代及びその直後に繼次發展せしめられて出來た一種の哲學。即ち形而上學を排して、哲學を人性論心理學に歸着せしめ、觀念の分析及びその起原成立の探求を專らとせるもの、（二）この言葉に觀念論といふ譯語が用ひられる場合は、一般哲學の認識論上の觀念論即ちイデアリズムスと區別しなければならぬ。この場合は、只漠然と觀念を主とする哲學といふ意味で、實證主義唯物論等に對する一般の主觀哲學を總括していふ樣である。（三）我國で目下一般世間にいはれてゐるのは觀念形態の譯語が當てはまる。これは人間の觀念の中で作り上げられた存在物を指すので、宗教、哲學、道德、法制等皆この意味でのイデオロギーである。

完璧なる資本論は

決定版に據る高畠氏の飜譯

吾が社の資本論は決定版に據る完譯である。決定版以前のものに據る譯書とは大いに其の選を異にする。（序文を御覽下さい）

資本論は第四版に於て決定版となつたが、本文に於ても註に於ても幾多の增補がある、高畠氏の飜譯は右決定版の最新版たる第六版に據つたものである。

高畠氏の改譯『資本論』

石川三四郎

◆◇四五年前パリーのコスト書店でもマルクス全集を計畫し、其廉價なのに社會を一驚せしめたが、高畠君の改譯『資本論』(改造社版)はそれにも輪をかけての廉價なので、當に世界第一の廉價出版といふことが出來やう。

◆◇併し、如何に定價が安價であるからとて、其實質が惡いのでは安價必ずしも廉價ではない。然るに今度の改造社の廉價版の見本を見ると、高畠君が心血を注いで、改訂に改訂を加へられた此最後的決定的の譯は、此難解書の典型であるかの如く言はれるマルクスの書を、恐らく原文よりも解り易いと思はれるほど暢達な行文に譯出されてゐる。

◆◇私は今日まで高畠君の同書の飜譯はとても難解だといふ話ばかりを聞いてゐた。私は最初の版も第二の改訂版も讀んで居ないから之を何とも批評することは出來ないが今度の第三回の最後的改訂版の校正刷を拜借して讀んで見ると資本論中でも最難所と言はれる第一卷が何の苦も無く解つて行く。

◆◇飜譯に經驗のある人は誰でも感じるとであらうが、飜譯といふものは椽の下の力もちで、餘り骨折りばえのせぬものである。然るに飜譯者の身になつて見ると是れほど骨の折れる仕事はない。殊に語法と組織とに於て非常に西洋語と隔絶してゐる日本語に飜譯することは其經驗者でないと想像も及ばない苦心を要するものである。高畠君は改譯中の苦心を語つて次の如く言つてゐる。

◆◇『改譯中、私はツクヾヽ自分の仕事が時計師の時計修繕に似てゐることを感じた。ああして見たり、かうして見たり、左の文字を右に持つて來たり、書き直してまた消して見たり、蟲眼鏡で見るやうな譯註の七號ノンプルをつけて見たり、はづして見たり、時々ペンのさきがピンセツトのさきのやうな氣がして、書くといふよりも寧ろ摘むといふ感じが絶えなかつた。』

高畠君の勞苦思ふべしである。

◆◇私はマルクスの主義思想とは正に反對の地位に立つてゐるものである。ダアウインの進化說を基礎とせる所謂科學的社會主義にも辨證法的唯物史觀にも單純なる勞働價値說にも私は全然反對の意見を持つてゐるものである。けれどもマルクスの眞摯なる熱心なる、そして堅忍不拔なる研究と精勵とには、何としても敬服せざるを得ない。

◆◇マルクスとエンゲルスとの共著『共產黨宣言』は兩人とも若い時分の作であり、思想の未熟にして前後辻褄の合はない處が多く、如何にも青年の宣言らしく讀まれるが、『資本論』と『經濟學說史』とは彼の著作中の最大なるもので、不朽の傑作であることは今更斷る必要もない。此『學說史』だけでもコストの全集では六册になつてゐる。

◆◇こうした大仕掛な、氣長な細密た研究から成つたマルクスの『資本論』である、確かに社會經濟學上の一寶庫と言つて可い、然も此寶庫は從來我國一般の讀書者に對して固く密封されたものであつた。其密封の寶庫が高畠氏の勞苦によつて開放せられ然も世界無比な廉價を以て提供されるのであるから、私の樣なマルクス主義反對者も喜ばない譯には行かない。

◆◇社會主義者中には、マルクスの『資本論』中の所說に反對するものが昔から頗る多かつた。然るにロシヤ革命以來、マルクス主義を以て自任する人々の間に爭論が起つて、ボルシエギキ流のマルクシストと、正統マルクシストを以て自任するカウツキイの如き一派とが相對立する樣になつた。其爭論點は主として革命の手段及び獨裁制に關する論爭である。

◆◇日本のマルクス主義者も、もう一度虛無に歸つて、マルクスを研究して見たらどうだ。今日マルクスが蘇生して所謂マルクス主義者の生活なり運動なり思想なりを目擊したとしたらどうであらう。マルクスをして眉を顰めしむるものが甚だ多くありはしないか。丁度好い時機に『資本論』の廉價版が出される。マルクス主義者たるもの先づ何を措いても此書を讀むべきである。

◆◇併し此『資本論』は單にマルクス主義者のみに對して經典たる價値があるのではない。同書中の經濟學的諸論點に就いては多くの反對說又は修正論があるにしても、英國の經濟狀態、社會生活、政治問題等に就て、精細、周到、該博なる研究討査の結果を逼く輯錄してある此書は、日本の現社會を觀察批判する上に、最好の指針となるものである。故に苟も現代日本の社會問題、經濟問題に心を傾けるものの爲には善良無比なる伴侶となるであらう。

◆◇或は小作問題に遭遇し、或は農村疲弊の原因を探らうとし、或は勞働爭議の形勢を批判し、或は經濟恐慌の因果を究めやうとするに當り、本書を播てマルクスの審判に聽くならば、必ず其れに適應した事實と、其れに對する何等かの批評とを見出すことが出來るであらう。

◆◇拮屈ごうがなる修辭と細分密綜せる推理行論とに顚屈辟易することなく、先づ此書を通觀して之を達觀する時は、自ら合點する處が深く、前述の如き諸問題に遭遇したる場合に、直ちに本書中の記事を想起するに至るであらう。此點に於て從來本書を密封の寶庫と稱したことは誤當でない。知識の普及せられた今日、此位のものは何人も常備の參考書となすべきである。

◆◇裝幀見本を見るとドイツ式の固いデッサンで出來上り、全體の氣分が堅牢そのものを表現してゐる。マルクスの著作の裝幀として如何にもふさはしい。

園頼三著　装幀　船川未乾畫伯

怪奇美の誕生

最新刊

四六版四百二十頁
挿畫三十葉
コットン紙
箱入美本
定價二圓五拾錢
送料拾八錢

『怪奇美（グロテスク）の誕生』は珍奇だ。しかし單に奇を衒ふのではない。著者は云つてゐる『私の魂は冥府をかけめぐつた。……黒い影につゝまれた悲哀や苦惱、とるに足らぬ平凡なもの、哀れに忌しきもの、それらの中にすら美を見出さうとする。…所詮美に依つて魂の解脱を切望するものだ』と。美を求め、善を探究し、人生の深き愛に徹せんとして、命がけでなやみ苦しめる一學徒の心境記錄、深刻にして清新、高雅にして大膽、珍奇にして眞摯なる著者の筆致には、讀む者の心を感激で打震はさずには置かない力と熱とが籠つてゐる。行文亦珠玉の文字にてつらねられ全文皆詩であり、芳香高き藝術の隨筆集である。

挿畫三十葉は皆特異清新なるもののみを蒐め、行文と共に獨特の興趣をそゝる。

薄田泣菫著　八版

隨筆 猫の微笑

定價貳圓
送料拾貳錢

詩人であり、哲人であり、エッセイストである泣菫氏の近業、氏の益々圓熟し枯淡味を帶びた獨特の心境を餘蘊なく披瀝された名著

創元社編纂　九版

增補 文藝辭典

上紙六百頁
・特價貳圓八拾錢
送料拾八錢

文藝上一切の言葉を網羅して最も正確なる解説を施した我國唯一の文藝上の辭典として江湖より甚大な歡迎を享く

發兌　東京市芝區二本榎西町二　大阪市西區靱上通一丁目　**創元社**　振替東京一五六五　振替大阪五七〇九九

普通選擧の戰蹟につき

普選は何を教へたか

清瀬一郎

一、棄權の多きは普選法の成功を立證す

記　者「選擧の形勢はどうです？」

地方人「どうもこうもあらへん。こん度の札入れは、フセンとかフーセンとかいふて、はがき二枚よこしたきりで挨拶にも來ませぬワイ」

記　者「ヒヤーツ」（豐能郡枳根莊村にて）

右は今回の選擧より數日前に、大阪の某新聞「街上所見」と題して連載せられたる漫畫の賛である。選擧には少くとも挨拶が附き物である。挨拶以上の或ものが普通である。此事情の下に我國の選擧界は經過し來つた。試みに左の表を一瞥せよ。

國名	選擧年度	棄權率
日本	一九二〇年（大正九年）	〇・一四
英國	一九一八年	〇・四二
佛國	一九一九年	〇・三八
獨國	一九二一年	〇・二四
伊國	一九一三年	〇・四〇
米國	一九二〇年	〇・四三

立憲の母國である英國に於ける一九一八年の棄權率が四割二分であるのに、我日本に於ける大正九年の棄權率が一割四分であるといふ事は何を教へて居るのであるか。（右表には示さなかつたが、大正十二年の府縣會選擧の棄權率は一割五分四厘）我國民が英米人に比しより以上選擧權を尊重するといふ事であるとは何人も斷言することは出來まい。舊選擧制度の下に於て何故に世界無比の棄權率の僅少を示したか言ふまでもなく其理由の第一は「狩出し」である。其理由の第二は戸別訪問である。其理由の第三は賄賂である。大阪毎日新聞は今回の選擧直後、「普選の所感」なる小品文の懸賞募集をやつた。其内一寄書家は自分が投票立會人として親しく選擧權行使の有樣を見た感想を述べ

るとて書いた文章の内に

「投票當日、病人や不具者等、他人の扶援を受けて來る人が少かつた」

と述べて居る。此人は從前の選擧法時代に於て、病人や、不具者が他人に助けられて投票に來るのを恰も孝子、節婦の美談に在る事柄の樣に、之を美化して考へて居つたのであらう。孝子節婦は萬人に一人ではないか。選擧の際に限り、之と同價値の義人が簇出したのに疑問は起らなかつたか。果せるかな、地方人は、候補者が口を普選に藉り、挨拶にも來て吳れぬのを不滿に思つた。フセンかフーセンかは知らぬが、冷淡至極な候補者等だと怨んだ。此空氣は投票數日前に豫感せられた。私の住んで居る大阪府に於ては、府廳は此空氣に狼狽して府費を以て「棄てるな一票迷ふな利慾」と書いたポスターを作り、至る所に之を貼りつけた。二大新聞も亦棄權防止の爲めの社說を揭げた。私は當時窃かに考へた。「此日本人を八割六分まで狩り出した舊選擧勢が惡かつたのだ。「迷ふな利慾」も結構だが、人も事もあらうに、府知事さんに「迷ふな利慾」と敎へて貰はねばならぬ投票は棄てられた方が善いのではないか。見よ、必ず棄權は大なるべし。若し棄權率大ならば是れ、戶別訪問を禁じ、連續面接を禁じ、賄賂、干涉を嚴罰した新法の效果である」と。九月二十五日は投票日であつた。二十六日の朝刊新聞は果然、「驚くべき普選の奇現象」との大見出を附けて、各地の棄權率の大なりしを報じた。

大阪府の棄權者……五割五分
京都市の棄權者……五割三分
神戶市の棄權者……三割五分
名古屋市の棄權者……三割三分

或人は投票當日が祭日の翌日の日曜であつたから、郊外に遊ぶ者が多かつたのだと診斷した。他の者は普選法規が嚴に過ぎて居るから投票者が恐怖を感じたのだと判決した。しかし、投票よりも遊山を擇ぶ人を強いて足止めして投票用紙に文字を書かせてそれが何になる。普選法が怖い樣な人には選擧權は不似合だ。——普選法が布かれた爲め、國民の立憲思想が減退したと考へる人があつたら、それこそ、病院が建つた爲め病人が出來たと考へる愚人の類だ。普選法が布かれたが爲め、全體として、日本人の立憲思想は進んでも居るまいが、退いても居らぬ。之が昔から、日本人の僞らざる本體であるのだ。日本全體としては今回の棄權率は四割二三分であるそうな。前揭英、米、伊、佛の棄權率と對照すれば、先づこれで、良い顏である。過去に於ける僞投票（本人の眞意に出でず、他より強ひられ、又は誘はれたから、僞の字を使ふ）を篩い落したといふことが普選法の一大成功であつたと祝福せねばなるまい。

二、府縣會は無產黨活躍の好舞臺ではない

本年九月末に行はれた府縣會議員の選擧は二府三十七縣に亘り、之に參加した有權者は實に六百二十萬人に及んで居る。當選者の政黨所屬は極めて明白であるとは言へないが、大體次の如くであると報ぜられた。

政友會　五五五

民政黨	四七七
實業同志會	五
革新黨	七
無産黨	二七
無所屬	一一七

而して無産黨と總稱せらるゝものゝ内譯は次の如くであると言はれて居る。

日本農民黨	三
社會民衆黨	三
日本勞農黨	三
勞働農民黨	一三

大體から評すれば、無産黨は懸け聲の割合には不振であつたと言はれなければならぬ。其原因については當時種々に説明せられた。或は(1)選擧運動資金が不足した。(2)無産黨が分立し過ぎた。(3)一般無産民衆が無自覺狀態に在る等は當時與へられた説明であつた。

右等の觀方は何れも誤つて居るのではないと思ふ。しかし、此外に見遁すべからざる一事實があるのではないか。それは他でもない。今日の制度では、彼の府縣會なるものは無産黨の活動舞臺としては十分適當な場所ではないのではないか。各無産政黨の中心人物の思想哲學は如何にもあれ、無産政黨なるものは其實力に依り先づ立法的手段に訴へて社會の改革を圖ることを旗幟としなければなるまい。我黨の立法要求はこれ〳〵なりといふことを高く掲げて之を大衆に識らしめ、此大旆の下大衆的運動を捲起するのが本旨でなければならぬ。しかるに我國の府縣會には毫も立法權が與へられて居らぬ。知事は府縣令なるものを出す。此内には隨分ひどいものもある。しかし此等府縣會の改廢の權能は少しも府縣會に與へられて居らぬ。一體我國の府縣會位、可笑なものは今日世界に稀である。明治四年に藩を廢して縣を置いた。此時多く舊藩主又は其代理者を縣令とした。其後之を縣知事と改稱した。それ故知事の制度には封建的色彩が濃厚だ。明治十一年になつて府縣會を置いたが、固より知事の權限を制限する性質のものではなかつた。明治十一年の府縣會規則の第一條には「府縣ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徴收方法ヲ議定ス」と在るだけで、府縣會の制定に干與せしめざるは勿論、府縣會事業の發案權さへも與へられて居らぬ。其後府縣制は改まつたが、府縣會の權限は舊態依然である。

かゝる府縣會に於て政黨が如何なる理想を行ひ得べきであらうか。今回の府縣會選擧に於て各無産政黨の候補者の掲げたる政策を問くに或は自轉車税は廢止だとか、或は府縣營業税の廢止(理髪業、湯屋業の課税)だとかいふのであつた。此等は未だ以て新興政黨の新運動を徴章するに足らぬではないか。新興無産政黨の健闘の舞臺は、現在に於ては衆議院に留保せられたる立法の審議の場合でなければならぬ。衆議院に於てこそは、言論の自由も擔保せられ、こゝを通過したる法律は、國民は必ず之を是認する約束である。無産黨の諸君は、來るべき衆議院議員の選擧に向つて勢力を集中せられんことを望む。

三、代議制度の機構的進化

元來、國民中より代表者を互選せしめ、此等の多數決に依り法律を作り又政治の方針を定めるといふ事は、人類の長き歷史に照して見れば、極めて昨今の發明である。多くの發明品につき我々が始終經驗する所は、發明其ものは相當の價値があつても、其初期に於ては、之を實施する機構が十分でない爲め思ふ樣に使ひこなせぬ場合が多い。邦文タイプライターでも、自働式の電話でも皆此類であつた。代議制度は暴力主義よりは進んだものであることは疑ふの餘地はない。然るに此代議制度に對する怨嗟の聲の絕へぬのは、實に之を實施する機構が未だ完成して居らぬ爲めであると觀ねばならぬ。公平に見て今回の普選法は此點に關する一大進步であつたのは事實である。戶別訪問は禁止せられた。演說會の爲めに小學校が開放せられた。選擧委員の數が制限せられた選擧費用が制限せられた。それ故、辨當職も行はれなくなつた。投票所附近の休憩所も廢せられた。從て投票當日の米搗バッタと姿を消した。選擧違反の數も激減した。大正十三年の衆議員に選擧の際には一萬四千人の違反者を出したが、今回は六百九十人、件數にて三百廿三件と報告せられて居る。其内文書圖畫に關する規則等は法規を知らざるが爲めに法に觸れた場合が多からう。將來は必ず減じやう濱口民政黨總裁や田中總理大臣さへも文書圖畫の法規に觸れたとして訴へられた位であるから。要すに選擧に關する制度は一大進步を遂げた。

しかし、今回の選擧に於ても既に惡用せられた法則がないでもない。彼の無投票當選の制度の如きはそれである。選擧期日七日前の候補者屆出の當時には立派に定員を超過し、競爭狀態でありながら、投票の前夜候補間又は地方有力者間の妥協に依り候補を辭退する。法律に依れば辭退者あるときは直ちに他の者が立候補を屆出づることを出來るとなつて居るが、彼等は相通じて之を妨止する爲め投票前夜午後十一時五十七分とかに候補辭退屆を出して、他人をして更に保證金を供託して、立候補の屆を爲すの隙なからしめた。此等は法の濫用である。更に之を改むるの途を講ぜねばならぬ。

今日以後、ポスター競爭なるものが流行する形勢が見えて來た。昔の訪問競爭や辨當競爭よりは上品ではあるが、是亦必ずしも理想的ではない。畫家の競爭ならば兎に角、政治家を選擧する爲めの競爭である。ポスターの意匠の巧拙で政治家の價値は判らぬ。しかも、此ポスターは其政治家の自ら畫くものでない事は無論である。

又演說會が多過ぎる。有權者が各候補者の意見を知る爲めに忠實に各派の演說を聞かうと思へば、仲々骨の折れることであらうと思ふ。そこで將來の選擧の方法は機會の均等と費用及び時間の節約に向て進むべきであると思ふ。學校開放に一步を進めて、同時又は連續に各候補者をして此處にて政見を發表せしめ、有權者をして一二度の出席に依り各候補者の主張を知ることを得しめるやうにしなければならぬ。又之に出席の出來ない人の爲めに各候補者の政見を公費を以て數箇所に揭示し、又は無料を以て之を有權者に送附するといふが如き方法に進むべきであると思ふ。此意味に於て一部の者の唱へつゝある選擧公營案は大に研究の價値あるものと考へる。

無產政黨の戰跡を語る

薄茂人

豫想外に多い得票

私はゴビの砂漠を、張家口から庫倫へ、自動車で横斷する雪月花の旅をつゞけたことがある。中秋の鈍い太陽の光を浴びて、興安嶺へ馳けつけるらしい、眼界いつぱいの大草原を埋めて、鹿の大群が行く手をふさぐのに出會つた。

自動車を大群の一角に乘り入れると、タイヤの轍の跡に、二三頭の鹿が四ツ足をふるはせて倒れてゐた。「鹿を射止めた」と、戯めいてひき殺したことを忘れ、私は車の上に凱舞したものだ。

舞臺は廻はる。

ここは二府三十七縣（勞農黨の靜岡、三重、日農黨の山梨等六縣は未開票）の山河を舞臺に、逐鹿戰は終つたのである。

私は轍の跡に、射止められた鹿を見つめる。ポスターの押收、演說會の妨害、不當檢束といふ支配階級の彈壓と、あらゆる困難のもとに血みどろに戰つた記錄であるだけに、「豫想外に多い無產派の得票」といふ、ブルジョア新聞の喝采を博する戰跡を、ともあれおさめ得たので、車から飛び降りて、車を高らかにさし上げて凱舞したいほどの愉快を禁じ得ない。

保證金と戰費の缺乏

逐鹿戰に於ける、無產派の當面した困難は限りなく多い。わけてもいかんとも出來ない困難は、保證金二百圓の工面と運動費の缺乏であつた。右は「當選第一主義」の社民、日農黨、左は「當選を眼中に置かない」といふ、公式的に一應××××××したところの勞農黨、右から左へ、一連の無產黨は、ともかく立候補第一主義を以てのぞむ策戰ではあつたが、保證金が百圓できた、百五十圓になつた。百八十五圓だ、あと十五圓、もう一といきといふところで、屆出期日が過ぎて、斷念しなければならぬことになり、無い袖を恨んで、中止した立候補者候補はたくさんにある。或は京都市で勞農黨のために氣を吐いた神田、奥村兩君の選擧費用は、たつた百八十圓にすぎなかつたが、無產派候補一人平均の總經費は三、四百圓見當であらうか、いくらにせよ黨本部から二千圓も補助するブルジョア黨候補から言はすれば、いくらでも無い端した金ではあらうが、宣傳費に行き詰つて頗に袖手傍觀、投票日の來るを待ち佗んだといふ候補者も少くはない。

しかしかういふことは選擧制度に穿たれたる、ブルジョアジーの陷穽の然らしめるところだと云つて了へばそれに相違ないことではあるが選擧戰を有効に闘ふために、候補者をあらん限り多く立てるために、保證金の工面の出來さうなものを候補者にあげる弊害を防壓するためにも、無産黨は日常之れにそなへる準備──特に機關──を持たねばならぬと考へる。

敵前の無産派亂闘

射止められた數を數へると、皮肉にも當選第一主義の社民、日農が敗けて、本部の書記局へゲモニーのもとに、スローガンと指令の亂射亂擊によつて、少からず支部黨員を惱したる勞農黨が勝つた。さらに皮肉なことには、當選を眼中に置かない、勞農黨の指令發行者の音頭によつて、勝つた捷つたの、凱歌と亂舞がおこなはれる。

勝つた、捷つた、日勞黨に勝つた、社民黨に勝つた。日農黨に勝つた。だが、祝ひ酒に醉ひしびれて、われらの前面の敵、ブルジョア黨の存在、それとの闘爭を忘れないことだ。

大阪此花區の社民黨、香川木田郡の勞農黨、神戸市の日勞黨、岡山加古郡の日勞黨は、最高點でブルジョア黨の贈を奪ひ、次點ながら惜しいところにまで肉迫したものに、勞農黨の香川大川郡、京都綴喜郡、山口大島郡、岡山上道郡、加西郡、日勞黨の山形飽海郡、大阪北河內郡、社民黨の岐阜安八郡、京都下京區、日農黨の朽木河內郡、大阪北河內郡、中河內郡、岐阜稻葉郡などある。

さうかと思ふと、靑森三戸で日勞黨三十二票、盛岡で勞農黨八十七票と云つたやうに、法定得票に達しないで、保證金獻納の憂きめをみた無産候補は四十九名四割七分ある。

社民黨の松岡君が、參謀赤松克麿君に「矢野と君が公認するからこんなことになる」と一本參らせといふ話も、そんなところからおこつたことではあらうが、社民、日農のむごたらしい敗戰は、しかも松岡、赤松の兩君の手の屆かないところに原因はあらう。

それはともかく、一連の無産派──改良主義黨としての社民、日農を含む──の全的敗因の一つは、讀者が次ぎの表によつても知られる如くブルジョア黨の敵前に於ける無産派亂闘の混亂にある。

それは誤れる「選擧協定」に原因するが故に、敗因はわれらの手の屆く範圍に置かれたものではある。

香川	香川郡	○勞農黨、農民黨
	×綾歌郡	○勞農黨、日勞黨、農民黨
	×三豐郡	日勞黨、勞農黨
大阪	東成區	○關西民衆、勞農黨、社民黨
	×港區	社民黨、勞農黨
京都	×下京區	○勞農黨、社民黨
	×綴喜郡	勞農黨、日農黨
×奈良	北葛城郡	勞農黨、勞農黨
兵庫	川邊郡	日勞黨、社民黨
×岐阜	本巣郡	社民黨、農民黨
富山	中新川郡	社民黨、日勞黨
高知	高知市	日勞黨、社民黨

群馬×群馬郡　勞農黨、農民黨
　　山田郡　農民黨、社民黨
福島×石城郡　勞農黨、日勞黨
秋田　鹿角郡　勞農黨、日勞黨
鳥取×東伯郡　勞農黨、日勞黨
　×西伯郡　勞農黨、勞農黨、日勞黨
新潟　新潟市　○農民黨、○勞農黨
×福岡　八幡市　○民憲黨、勞農黨、社民黨其他、

備考　○印は當選、×印は協定によつて當選し得るもの、

勞農黨の選擧協定方針が、ここで日勞黨と、また奈良の生駒、大阪浪花區の革新黨と、いかにおこなはれたか。それは協定方針が實踐的に價値のあるものであつたかどうかを、實踐の過程に於て示してくれたものではある。

だが、ここでは、それの究明は端折つて、さきへすすまねばならぬ×印を見よ。

當選を眼中に置かぬ筈の、勞農黨が奈良の北葛城、鳥取の西伯郡で慾をかまへて二人の自黨候補をあげたために、少くも一人は當選し得るところを、みごとに通配落選の標本を示してゐる。さすが落選同盟の効果はあつたなどと、感心する場合ではない。といふことは、强ち當選第一主義の社民、日農の尻馬に乘るわけではないではないが、ブルジョア黨との鬪爭のための無產派協定、大衆動員を眞に有効ならしめるための協定、演說會場の演壇よりも、議政壇上を眼がけて突進しなければならぬための協定、われ〳〵は、この見地から、敵前の戰鬪員は、ブルジョア黨に何にを與へ、われ〳〵に何にをもたらしたかを、轍の跡の殘骸によつて、ここに見た。

勞働者動員の失敗

殘骸!!　殘骸は、蘇生しないが、ここに見るところの殘骸は、その正體をはつきり見究めることによつて、將來に生き大跨に步るくところの殘骸ではある。

さうした殘骸はなほある。

岡山、高崎、桐生、岸和田、佐世保の勞働小都市には、候補さへあげ得ず、勞農黨は大阪八幡、久留米、大牟田、戶畑、秋田、盛岡に敗れ日勞黨は長崎、前橋に旗を捲き、社民、日農は數ふるところもない。

神戶と足尾に日勞黨、大阪に關民、社民、京都、名古屋には勞農八幡に民憲を僅かに當選せしめたにとどまる。

京都が豫想外の成果をあげたかはりに、名古屋は大部分小ブルジョア層の投票で埋つた。足尾の石山君は、民政派が鑛山勞働者をたぶらかすために、中立の看板をかむつて現れたるも、さすがは鑛夫總聯合の牙城微動さへしなかつた。

或は神戶の阪本勝君、大阪此花區の坂本重藏君が、最高點の榮位にすわつたからとて、無產各派の勞働者の政治的動員失敗の事實は否み難いのである。都市の投票と雖も、小ブルジョア層の散票の多いことも、又見逃せない。

しからば、ブルジョア新聞が斷し立てるところの「豫想外に多い投票」は、無產派に何處から集つたらうか。

もちろん秋の枯葉を掻き集めたわけではない。それは主として農民組合の組織の力のあらはれである。

勞農黨にしても、農民組合の强力なところほど、得票が多く、得票の大半も農民の投票である。秋田尾去澤鑛山を背景として立つた日勞黨は、かんじんの坑夫部落からは一握の票數を得たゞけで、大部分は農民組合の投票であつたことなど、勞働者動員の失敗を偲ばしめる。

× × ×

大阪の演說會での話だが、勞農黨の演說を聞くと、拍手する、同じ聽衆が社民黨の演說を聽くと、之れにも拍手する。

此奴、わかつてゐるのか、わかつてゐないのか、こちらがわからなくなると、傍聽したところの新聞記者が私に話してくれたが、われ〱は、勞農黨と社民黨へ、同時に拍手をおくる、かうした小ブルジヨア的層のことについても然り、勞働者の動員についても考へればならぬ。だから働きかける、われ〱の頭と舌と手は、言ひ換へると戰術は、巧妙に周到でなければならぬ。日勞黨に勝ち、社民黨に勝ち、日農黨に勝つた勞農黨の手は、捧げる祝杯を置いて、かゝる小ブルジヨア、勞働者を、投票に動員された大衆をいかに組織するか、政治的自由獲得のために、いかにして大衆的鬪爭にこれらを導くかについて、考へ、且つ即時指導しなければならぬ。

日勞黨は敗けた。社民、日農は大敗した。敗けたかれらは、敗因がどこにあるかを究めねばならぬ。それは、轍の跡の、殘骸の一つ〱をさらにこまかく、見究めることによつて達せられるであらふ。

無産黨合同の趨勢

堺　利彦

（一）

無産諸政黨を合計して三十名たらずの府縣議員が出た。よくそれだけでも出たものだとも考へられる。モツト甚だしい失敗もあり得ないわけではない。殊に勞農黨が他に傑出して獨り十餘名を出し得たのは、我が左翼の爲に頗る意を强うするに足る。現在に於ける左翼の分裂狀態からして、モツトみじめな結果に落入りはしないかと氣遣つた者も、決して少なくは無いだらう。その意味からすれば、今度の選擧の結果は、左翼無産黨に取つて、寧ろ意外の好成績と云つてもいゝわけである。

然しそれが果して、現在に於ける左翼無産黨の態度なり政策なりが大いに宜しきを得た結果であるかどうか。日勞黨が頗る振はなかつたのは、その立場上、當然であるとしても、勞農黨があれだけの好成績を示したのが、總て其の現在に於ける態度政策の直接の結果であるとは限らない。もちろん勞農黨は、その成立の歴史上、無産政黨の本流である。そして又、左翼が脱退してから以後に於いては、左翼の正系である。それやこれやの情勢上、勞農黨は種々有力なる便宜を有して居る。多數者の支持を受けるから有力な便宜も得られるのではあるが既に便宜を有するが爲に稍や容易に多數者の支持を得るといふ理由も無いではない。勞農黨が其の左翼としての根本の立場に於いて正當である事は無論だが、今度の選擧にあれだけの好成績を得たのは必ずしもその現在の政策に缺點が無いからではなく、寧ろ少なからぬ缺點があるにも係はらず、能くあれだけの結果を擧げ得たのだとも考へられる。例へば、勞農黨が日勞黨と對立して居るが爲に、大いに勝利を博したと云ふのでなく、寧ろ日勞黨と對立して居るにも係はらず、能くあれだけの勝利を博したとも考へる事が出來る。

そこで左翼無産黨たるものは、頗る振はなかつたと見える日勞黨も勝ち誇つて居るらしい勞農黨も、同じく共に、此の際に於いて反省熟慮すべきである。

（二）

左翼無産黨が意外の好成績を得たと云つても、それは實に僅々十數個の當選に過ぎない。僅々十數個の當選を好成績と賞揚せられる事は寧ろ多大の恥辱では無いか。況んや得々として自らそれを誇るに至つては、實に沙汰の限りである。彼等は選擧前に於いて、可なり多數の當選を豫測して、仰々しくそれを吹聽して居たでは無いか。その豫測數に比べて、現實の當選數はずゐぶん小ひさなものではないか。何處に自ら誇るに足るものがあるか。

豫測に多少の誤算があるのは已むを得ない。只だ其の誤算を率直に過失として承認し、その過失の原因を研究し、それに依つて將來再び同樣の過失に落入る事を免かれようと努める時、そこに初めて堅實な運動を見るのである。然るに若し、幾度も幾度も極つた樣に過大な豫測ばかりする者があるならば、それは既に誇大妄想狂か法螺吹かの列に加ふべきである。而もその豫測が當然にはづれた時、少しも反省する事を知らず、恬然として顧みて他を言ふか、或は强いてコジツケの理屈を以て、更に他の妄想的法螺を吹き續ける者があつたならば、それこそは實に許すべからざる詐欺漢であり、背徳者である。

我々は勞農黨の當事者がそれ程の甚だしきを敢てするものとは信じない。然し勞農黨の內部に、稍これに類似する者が多少ともありはしないかと氣遣ふことを禁じ得ない。彼等は他の無産黨に對する些々たる勝利に陶醉して、有頂天になつて居るらしく見える。彼等は傲然として語る。見よ、かのエセ無産黨は、三つ四つを合せて猶ほ吾黨一つの當選數に及ばないではないかと。それは確かに事實である。然しそれを誇る事は即ち敵を忘れた事を意味する。

彼等は謂ゆるエセ無産黨のみを敵として戰つて居るのではあるまい彼等はブルジョア階級と戰つて居るのではないか。ブルジョア階級を

代表する政友會や民政黨を敵とする事を忘れないならば、僅に十數個の當選者を以て、得々としてエセ無產黨に誇る樣なケチな料見が何處からどうして出て來るのだろう。

政友會も民政黨も五百内外の當選者を出して居る。それに比べる時十數個の當選が何だ。假りに民衆黨、日農黨、日勞黨などの當選者を各三名とし、勞農黨のそれを十三名として計算して見ると、勞農黨は確かに他の『エセ無產黨』の四倍强である。然し勞農黨の十三名をブルジョア黨の五百名に對比すると、後者は前者の四十倍弱である。四十倍の大敵と戰はねばならぬ所の地位にある劣弱者が、他の方面に對する四倍やそこらの自己の優勝に誇つて、有頂天になる樣な暇があるべきだろうか。獅子の前に立たされた小猫が、傲然として鼠の弱小を憫笑するとしたらどうだらう。

（三）

更にブルジョア政黨の得票數と無產政黨のそれとを比べて見る。政友、民政、兩黨の得票は約四百萬で、無產諸政黨のそれは約二十萬である。然るに前の兩黨はそれで約一千人の當選者を出し、後の諸黨は僅かに三十名たらずを出して居る。之を計算して見ると、ブルジョア黨では一人あたり凡そ四千票、無產黨では凡そ八千票の割合になつて居る。して見ると、若し無產黨が功妙な戰術を用いたなら、約倍數の當選者を出し得た筈である。無產黨はブルジョア黨に比し、僅々二十分一の得票に過ぎないが、當選者は更にそれよりも少なく、三十四五分一に過ぎないわけである。

この、無產諸黨内に於ける、得票數に對して當選數の少いといふ事實には、種々の理由が存して居るだらうが、小黨分立の現狀が其の理由の大なる者の一つである事は、疑いないと考へられる。例へば勞農黨と日勞黨の對立の如き、それである。現にこの二黨の間に選擧協定の出來なかつた鳥取では、大失敗が演出され、その協定の出來た新潟では、相當の成功を呈して居る。假りに勞農黨の當選者十三名、日勞黨の當選者三名を確定として考へるに、この兩黨が合同（若しくは密接に提携）した場合、その結果は決して、十三名と三名を加へた十六名ではない筈である。それは必ず、兩黨の得票數に相應するだけの、十六名以上をかち得るに相違ない。

思ふに今度の選擧經驗は、多數の無產黨員に幾多の敎訓を與へただろう。たとへ一部の指導者連が、その野心や、感情や、行きがかりなどからして飽くまで分立の現狀を固執しようとしても、多數黨員の切實なる要求は、必ず遂に左右兩翼に於ける、それ〴〵の接近を生ぜしめるに相違ない。卽ち右翼に於いてに民衆黨と日農黨、左翼に於いては、勞農黨と日勞黨、それらが次第に密接の提携を行ひ、遂に漸く合同に向つて其の步を進めるだらうかと思はれる。

然しそれが來年の衆議院議員總選擧以前に於いて、果してどれほどまで進行するかは、大なる疑問である。然し又、若し總選擧以前に於いて、幾許も此の形勢が動いて來ないで、殆んど分立の現狀のまゝ總選擧に臨むものとすれば、それは又餘りに情ない成行である。今度の府縣議選擧の經驗に少しも學ぶ事が出來ず、再び同じ樣な經驗を來年の總選擧に繰返して其上で初めて漸く目を醒すといふほど、それほど

人間は馬鹿なものであらうか。

(四)

棄權率の高いのには固より種々の理由があるだらう。ブルジョア政黨の甲と乙との間に擇ぶに足るほどの差異が見つからないと云ふのも其の一理由だらう。一般人心がまだ政治に冷淡だから棄權が多いと云ふのは當つて居まい。一般人心を冷淡ならしめて居る原因は現在の政治その者に在る。然らば新興の無產政黨が能く人心に熱を生ぜしめ得るかと云ふに、まだそこまで行つて居ない。無產政黨も數個分立の現狀にある。その間に取捨撰擇を行ふ事は、一般無產者および其同情者に取つて容易でない。左右兩翼の本質すらまだ幾許も認識されて居ない從つてそこにも又人心を冷淡に導き、遂に棄權に落入らしめる原因がある。

選擧當日を休日にしないから、それで少からぬ棄權者を生ずると云ふのは、もちろん當つて居るだらう。よしんばその當日が日曜であつても、それが實際の休暇でない日曜である場合、矢張りそれが爲に棄權を生ずるといふ事情もあつただらう。然るに右と全く反對の見方がある。即ち選擧當日が丁度日曜であつた爲、多くの有權者は投票場に行くよりも、むしろ家族的の物見遊山に出かけたのであるといふ。そしてそれが決して虛僞でも惡口でもないらしく考へられる。この見方からすれば、だから普通選擧なんぞ尙早だつたのだといふのだといふ結論になるかも知れない。然し投票場行を物見遊山に代へるといふ程の冷淡さは、決して單なる政治的無智から生じた結果ではない。その原因は即ち現在の政治その者の中に在り、政黨その者の態度行動の中に在る。そして無產諸政黨も亦た決して其の責を免かれるわけに行かないのである。

今一つ問題がある。左翼無產黨が或る意味に於いて存外好成績を示したとしても、その當選者が果して皆な優良な素質を持つて居るかどうか。選擧上に於ける一時の便宜の爲、姑らく景氣の好い黨派に屬して當選を僥倖したと云ふ連中が若しあるとすれば、今後に於いて、裏切的行動が續々として出現するだらう。そんな事も決して無いとは斷言されない。それらも考慮に入れて置く必要がある。

(五)

之を要するに、我が無產諸政黨は、右翼も左翼も、まだ本當に大衆と結びついて居ない。何と云つても、まだ個々の組合を中心とした政黨に過ぎない。殊に今度の選擧の形勢を支配したものは、主として農民組合であるらしく見える。そこで今後に於ける、無產黨發達の最大要件は、實に只だ本當に大衆と結びつく事である。

然るに若し此の情勢の下に於いて、徒らに宗派的のおかたまり主義を發揮し、言葉の上では何であらうとも、實際上に提携合同を阻止する者があるならば、それこそ實に無產階級運動の賊である。

選擧の正體を凝視めて

馬場恒吾

普選の府縣會選擧に際しての棄權率の分配が端なくも選擧の正體を暴露した。

大都市に於て棄權率が有權者の五割前後と云ふ驚くべき多數に上つたのは其所には買收が行はれてゐない事を示し、農村に於ての棄權率が二割五分程度に止まつた事は其所には尙買收が行はれてゐる事を示す。其外のどんな解釋説明も事情の眞相を捉へてゐない。何となればさうした事情なくして、智識程度の低い農村民が比較的智識程度の高い都會民より、よりよく投票すると云ふ理由がないからである。

都會に於ても、投票買收が絕對になかつたと云ひかねる。現に私の知つてゐる選區に於ても、一日働けば二圓五十錢になる。それ丈けは出して貰らはねば、投票には行かれぬと、或時、或都會で、或候補者に直接申出でたる有權者がある。併しこれは寧ろ例外で、都會には買收は大體跡を絕つた。

それ故に今迄買收されて投票した者、或は今迄の有權者が投票を金に代へたと思つてゐる新有權者は、金を貰はずに投票場に行くことは何んだか自分一人馬鹿にされて、損をするかの如く思ふ。かうした人達は投票をすゐる。茲に五割と云ふ棄權率が現はれた。然るに農村に於ては此買收が尙克明に行はれたそして之を行ふ事が可能であつた。何となれば投票の代價が五十錢に、或は一圓に下落したからである。極貧の階級には、五十錢でも有難がられた。

選擧の取締りが嚴重になつた。選擧運動費が制限された。其額は大抵二千圓前後であつた。運動員、事務員の數が制限され、名前が屆出でられ、それが外出するときには戸別訪問を見張る所の監視の眼が光つた。そして運動費の支出項目は何日檢査されるかも知れなかつた。それ故に表面は買收困難であるかの如く見えた。

何んぞ知らん。運動員、又は事務員として屆出でゝない運動員が居る。それは運動員でないから、誰れの家へ、何を持つて訪問する事も自由である。そして買收帳を懷ろにして盛んに活躍した。其結果として、府縣會選擧で最低一萬圓、平均三萬圓、多きは七萬圓と運動費がかゝつたと云はれてゐる。

さうして多額の運動費を絞り取らるゝ政治家は憤慨して語つた。今の地方青年が純眞だなんて嘘の皮だ。青年は今迄の選擧ブローカーが莫大な運動費をせしめた話を聞いて、それに彼等自身の想像を加へて少しでも選擧運動をすれば大いした金が取れるものと決めてかゝる。

だから途方もない要求を出して來る。其始末に惡るい事は、從來の職業的のブローカー以上だと。此政治家は既成政黨のそれであるから、青年の方も遠慮會釋なく要求したものと見える。

同じ政治家の話しに、普選になつて、買收が止むなどゝ考へるのが抑も間違ひだ。戸別訪問こそ出來ないが、そんな事は少しも差支へにはならない。村々には何事にも口を利く所の顏役が抑へてゐる。それが吾々の爲めに働いて呉れる。その顏役は有權者に現金を渡さなくても、只口約束をしておけばよい。選擧が濟んだ後に村の祭禮とか何んとかで、何日でも皆んな集まつたときに勘定すればよい。それに近年色々の選擧が年中行事の如く行はれる。何々委員、何々會員を選ぶと云ふ所の、すべての選擧に、それ／＼投票の相場が決つてゐる。それ故に買收の金額は銀行勘定見たやうに、帳面にしておいて、一年分纏めて拂つてもよいのだと。

今度の選擧に働いた民政黨の代議士は云つた。戸別訪問が出來ないなんて、それは吾々や無産政黨のみの事だ。政府黨なら、何んだつて大つぴらにやつてゐるんだと。

投票買收の盛んな或縣で、農民組合から候補者を立てた。自分等は勿論買收なしに運動したが、既成政黨が買收に來るのを防がねばならぬ。そこで組合員が村の要所々々に徹夜張番をした。すると警官が來て此張番を引張つて往つた。直ちに釋放されたが、何故引張つたかの理由が明白でなかつた。

外の縣で、候補者は私に云つた。かうして演說會に集つて來る連中の中には矢張偵察に來てゐるものがある。此候補者は買うだらうか、買はないだらうかと。それを偵察するのだ。そして家に歸ると、大抵今頃は拾圓札を持つて來さうなものだと待つてゐるんだと。

又外の縣では、普選になつて投票が五十錢とか一圓に下落した。五十錢や、一圓貰つて五十日も牢に入れられては損だと云ふ事を皆んなに徹底させなければならぬと云ふ人があつた。すると隣りの人が、何分新有權者は今迄の有權者が投票を賣つて金を儲けた事を知つてゐて普選になつたら、自分等も儲ける事が出來るんだと樂しみにしてゐたんだ。だから五十錢でも一圓でも遣らなければ投票に來ぬのだと話した。

私は或時、或地方に演說しに行つたとき、今迄買收される習慣になつてゐる此地方の人に向つて買收されるなと云つた所ろで駄目だと思つた。それで演壇に立つて云つた。買收されてはいけない。買收されると選擧違反になつて牢に入れられる。だけれど、若し誤つて金を受取つた人があるとする。そのときは何うしたらよいかと云へば、金を返すが一番よい。たとへ又、金を返へす事が出來なかつたときでも、金を呉れた候補者に投票をしてやらぬ方がよい。其候補者に投票すると二重の罪を犯す事になる。金を受取つたときに選擧違反の罪が一度、其候補者に投票したときに惡い候補者を當選さすと云ふ國家に對する道德上の罪が一度、即ち二度の罪になる。金を受取らぬ方が一番よい。併し金を受取つても、其候補者に投票さへしなければ、せめて國家に御奉公丈けは怠らなかつたと云ふ事になると云つた。

併しかうした演說が投票にどんな利き目があるかと、今でもそれを疑問としてゐる。何となれば、日本人は變んな處に義理堅い。五十錢

でも貰へば、其人に投票しなければならぬやうに思ふ。それは根が正直な性格から生れて來る心持ちであらう。個人に對する良心はあるが、公衆に對する良心が薄い。だから矢張金を與れた方へ投票が集まる。

茲に於て吾々は選擧の正體を見付けた心持ちがする。今迄の選擧は大體に於て買收以外になかつた事を見る。普選後の選擧も都市では買收はないが、農村ではそれが繼續されてゐる事を見る。普選になつて、有權者の數が府縣會選擧でも倍加した。其代りに平均二三圓であつた一票の代價が最低五十錢迄に下落した。普選は候補者側に、數が多くなつたから、値は下げて與れと云ふ口實を與へたのである。新有權者は無産階級であるが故に、此値下げが可能であつたのである。既成政黨が今迄に農村で集めた四百餘萬票の大部分は、、、、投票であつたであらう。無産政黨の二十萬票丈けは確かに買はれなかつた投票である。滔々たる大河は濁流だ。其傍のちよろ〱川が淸き流れだ。

滔々として行はれる買收の事實に直面するとき、誰れでも一寸考へる。買收される事が惡いと云つたつて、之を直ほす分別があるかと。

或農民運動者はよく演說して云ふ。天下の娼妓は大抵農家の娘である。女工もさうである。下女もさうである。農民は自分の娘を賣らなければ食へないのだと。娘を賣つて食ふ。そんなにしてゐる農民に投票を賣つてはいけないと云つて、どれ丈けの効果があらう。

既成政黨は何れも農村振興を云ふ。併し彼等の立場から云へば、農村を窮迫のドン底に押し付けてゐる方が利益である。何となれば、投票を買收する事が可能であるからだ。いくら農民だつて懐ろさへ豐かであつたならば、僅少に一圓や五十錢で法律に觸れる危險は犯さないだらう。

農村の演說會に行つて、畑から歸り途の聽衆、顏も手も着物も泥だらけの聽衆に對するとき、彼等に向つて天下國家を論ずるのは、彼等の環境を侮辱するものだと思ふ。彼等の要求するのは食物だ。溫かい着物だ。娘を自分の家に取り戻したい事だ。

吾々は政治を我等のものにする事によつて、即ち民衆自身のものにする事によつて、我等の生活は改善されると說いた。それは眞理である。事實である。正しき事である。併しそんな事を云ふと同時に私の胸に一つの疑問が起つて來た。政治を我等のものにする事に依つて生活は改善される。それは何日だ。今晩の米、今日着る衣物、今日にも呼び戾し度い娘、そんな事を頭に置いてゐる聽衆には如何にも氣の長い事を云つてゐるものだと響きはせぬかと。それよりはウンと既成政黨から取れる丈けの金を取つて、投票は我等の味方に入れて與れと云つた方が簡單明瞭ではないかと思つた。併しさうは云はなかつた。前に云つた如く、日本人は根が正直だから矢張金を貰つた方へ投票しさうであつたからだ。

原敬は政治は力だと云つた。(それを否定するのは、事實を直視する勇氣のない者の理論のごまかしである)。併し其力と云ふのは、投票を五十錢で買ふ力である。五十錢で買つた政權で、大きく儲けんとする商才の力である。

之に反對する既成政黨は叫ぶ。五十錢で賣るのは損だ。、、亞流に大きく儲けさすのはいまく〱しいではないか。それよりは吾々が天下を取つて大に儲けやうではないかと。そして裏に回つては矢張買收を

する。

政治がさうした封建的な復仇的な爭ひである間は、勝つ爲めには手段を擇ばず、大河は依然として濁流である。

無產政黨の行き方は違ふ。政權を取る事を頭に容れてゐない。勞働組合に依り、農民組合により、消費組合に依り、其他すべての方法に依つて、先づ無產階級の生活を樂にする。同胞友愛の情を植ゑ付ける。隣保相助ける習慣を作る。そして先づ愉快に暮らして行ける分別をする。投票を買ひに來ても、賣らないで濟む生活狀態を作る。それがちよろ〳〵川の水淸き所以だ。

其心持ちは選擧事務所に行けば判る。既成政黨の選擧事務所には秘密の空氣が漂つてゐる。運動員の顏が險惡になつてゐる。誰れかゞ誰れかに喰つてかゝる。それが何時でも金の問題であるから、厭になつてしまふ。

無產政黨の事務所は皆んな開け放しだ。別に隱くすほどの金もないからであらう。皆んな樂天的な顏をしてゐる。友愛と團結の精神に立つてゐるのだから、天下是れより樂しきはなしと云ふのである。

無產政黨のちよろ〳〵川は、啻に淸き流れであるのみならず、熱い友情の溢るゝ溫泉だ。惱める日本人よ。此所へ來て溫まれ、そして大河の濁流に汚された身體を淸めよと叫び度くなる。(二、一〇、八)

新刊紹介

增補文藝辭典 文藝上一切の言葉を網羅した便利な辭典である。(創元社編纂・定價二圓八拾錢・東京市芝區二本榎西町二創元社)

私は斯う考へる (山川均著・定價二十錢・東京市麴町區麴町八ノ二無產社)

勞働運動と理論鬪爭 (荒畑寒村著・定價十錢・東京市麴町八ノ二無產社)

詩輯 **月光室**(殿岡辰雄著・非賣品・大阪市北區道本町六二かんがるう社)



德富蘆花氏

德富健次郎墓誌

君號蘆花、明治元年十月廿五日生二肥後水俣一。父洪水一敬、母矢島氏久子、兄蘇峰猪一郎。幼時體質蒲柳、少壯享二父兄訓育提撕一、中年以降卓然自立成二一家一。其著作大行二于天下一。妻愛原田氏、形影相倚。無レ嗣。臨レ終託レ兄以二後事一、泊然逝二于伊香保養痾處一。實昭和二年九月十八日也。享年六十。君稟性眞摯而狷介、不レ能二與レ世俯仰一。亦能施レ人愛レ衆。情緒泉湧、才思雲生。畢生直情徑行而只好二眞善美一。歸二葬粕谷村莊之林中一者蓋遵二遺意一而亦所レ以レ成二村人之志一也。兄蘇峰六十五叟揮レ涙書。

一日如夢の記

蘇峰生

昭和二年九月十九日早朝、伊香保仁泉亭別館にて、此記を艸す。

＊　＊　＊　＊　＊

九月十七日は、感冒の氣味にて、頭痛、腰痛と共に、咳を發し、近頃珍らしく出社せず平臥した。實は十六日の夜、青山會館に於ける、德富蘇峰記念講演會に出席したる際からのことであつた。否な十五日頃からのことであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

十七日午後四時頃、妻は一通の電報を手にして病床に來つた。把て見れば伊香保なる弟より、只今お目にかゝりたし、直に御出を乞ふとの至急報だ。此れは予に取りては、決して期待しないことではなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

予は大正二年の秋、京城にて弟を見て以來、遂ひに面會の機を得なかつた。予の弟に對する態度も、感情も、始終一貫してゐる。然も弟の其の父母、兄弟に對する態度と、感情は、何故にや時に變化あり。その爲め兄弟咫尺の間に住しつゝ、十五個年間も、遂ひに手を把りて驩晤するを得なかつた程の、不自然なる狀態を現出した。

＊　＊　＊　＊　＊

今春弟の病の甚だ輕からざるを聞くや、予は相見んと欲するの情に禁へず、予の姉達を介して、其の方便を講じた。而して遂ひに親から柳谷の弟家に出掛けた。然も弟は予に面會せず、予は空しく雨のばら〳〵降る草深き庭に立つて、澁茶一碗喫するを得ず、天を仰いで去る可く餘儀なくせられた。

＊　＊　＊　＊　＊

爾後幾回か凡有る道を便りて、面會せんと試みた。されど其機の自から熟するを俟つの他はなかつた。而して早晩其機の來るを信じてゐた。

今や其機は來つた。然も其機の來ると共に、弟の病狀の頗る漸みたらんことを豫測して、慨然とした。

* * *

予は早速病床より蹶起し、伊香保行の準備をした。乃ち予の子女を悉く伴ふことゝした。弟の尤も嗜みたる物を携ふることゝした。而して折角同日午後逗子に赴きたる予の秘書並木浅峰君をも、電話にて召還した。

* * *

十七日の夜は、予は餘りの嬉しさと、弟の病狀の掛念とにて、殆んど眠る能はなかつた。それはかねて弟の氣質を心得たる予には、彼が此夜眠る能はざることを、感得したるが爲めであつた。

* * *

電報の著してから、やがて伊香保から電話が二回程かゝつた。第一は待つてゐると云ふことだ。第二は時間の打合であつた。如何に弟が予を待つてゐたかは、此れにても推知するに餘りある。

* * *

九月十八日、天は雨を催した。空は陰鬱だ。午前四時半に起き、支度を整へ、七時五分の汽車にて上野を發した。熊谷に至れば、伊香保から待つてゐると云ふ電報が、車中に運ばれた。新町に至れば、再び高崎から自動車で來れとの電報が運ばれた。而して何れも故らに健次郎と署してあつた

* * *

高崎には仁泉亭主人と、根岸國民新聞前橋支局長が迎へ來れた。我等は自動車にて、秋雨を衝き、高崎から澁川を經て、伊香保に十一時前に著した。仁泉亭の別館に至れば、靴を脱する間もなく、吾弟は頻りに病牀より大聲を發して、いざいざと促がした

* * *

妻は家を出づる際に、弟の容貌が平生に異る可きを豫期し、面會の場合には、それを見て取り亂さぬ樣にと注意した。予は固より覺悟の前であつた。注意したる妻は先づ泣き伏した。十五年相見ざる兄弟姉妹は、玆に相見たが、病人の目に、我等が如何に映じたるかは知らねども、病人の變れは、實に意想通りと云はん乎、意想外と云はん乎。萬龍の葬式にさへ泣かなかつた予も、涙を出さない爲めには、渾身の努力を要した。

* * *

弟は兄を迎ふるに安臥しては失禮であるとて、予等が到著以來、疾を力めて床上に起坐したとのことであつた。前夜は一睡もしなかつたとの事。一刻も速かに逢ひたしと、今朝來待ち兼たとの事。電報の

文句は弟が自から口授し、殊更らに健次郎と署名せしめたとの事。而して予等を迎ふる爲めに、弟の注文にて小豆飯を作らしめたとの事。以上は後に側近の人々から聞いた。

* * * * * *

予等の談話は、予が聞役で弟が話役であつた。弟は極めて靜かにそろ／＼と話し初めた。先づ予の顏を見るや、あゝ間に合うてよかつたと云ひ、又た水滸傳々々々と再三叫んだ。又た敗北々々と云ひ、獨逸々々と繰り返した。弟は娓々として過去の心得違を謝した。而して自分も日本一の兄を持つてゐるを愉快とする。此後の事は一切無條件で御願ひする。而して其の夫人を顧み、此女を助けて呉れよと云うた。聞いて此處に至れば、予も殆んど涙潸々として臆を霑すを、禁ずる能はなかつた。其他の談話は、餘りに神聖なるが故に、此には掲くることを見合はする。

* * * * * *

談話は容易に盡きなかつた。然も予は過去を語ることを止めよ。何よりも元氣を付けよと云ひつゝ、子女を悉く病床を繞りて立たしめた。弟は何れもの顏を熟視し、能くも皆々綺麗に成長したと云ひ、特に其の手しほに掛けたる鶴子を見上げ、見下し、愛撫禁ずる能はなかつた。而して病人自ら午餐の世話までした。

* * * * * *

雨は相變らず降つた。予は別室と弟の病床との間を、幾回となく往來した。弟は兄に逢ひたい、姉に逢ひたいと、屢ば予等を招いた。

* * * * *

病人は寒を怯れた。今でも室内には、火を擁しつゝ、尙ほ寒きを訴へた。されば此冬は熱海に越年せんとて、當人の希望に任せ、直ちに其支度に取り掛つた。事は直ちに電話にて運んだ。熱海では借家が見出された。汽車の打合も出來た。途中同伴の醫師も約束が出來た。而して愈よ明後日――二十日――予等夫婦も吾弟と相伴うて、熱海に赴くことに內定した。

* * * * *

吾弟は熱海の宿が定まつたと聞いて、滿足の意を表した。而して愈よ明後日――醫師は動かす程ならば、一刻も速かにと云うたから――と申し出でた時には、一寸待て下さい、明後日は萬熊の處に行くと、啖然として冥想するかの如く獨語した。

* * * * *

弟は嫂に向て、萬熊は惜しきことをした、萬熊は兄さんの身代りに死んだのだと云うた。而して機嫌克く病苦を忍び、其の兄嫂子姪等と共に、寫眞「最後の」を撮つた。而して子姪の歸り去るを、惜に堪へ

ざる如く目醒した。弟子がまたお目にかゝりますと云うたら、默然默して答へなかつた。

* * * * *

弟は常初予等も亦還り去るものと、豫期してゐた。然も予等が尙ほ留ることを聞くや、頗る滿足し、且つ安心し、予の休息のことさへも自ら指圖した。

* * * * *

弟は此處は大磯であるかの如き心地がする。新島先生には負債があると云うた。予は先生の負債は、兄が代りて皆濟したから、安心せよと慰めた。此の負債は固より金錢上の意味ではない。

* * * * *

弟は予を見て、兄さんは理想家であるとか、兄は賢く弟は莫迦だとか、どうも兄さんには感心するとか、半は尊敬の語でもあり、半は皮肉でもあるかの如く、連發し、而して私がわるかつた。熟柿はほてりと地に墮ちた。何もかも悟を開いた。云ふだけ云うて、荷が輕くなつた。最う今ま死んでもよいと、全く安心したるが如く、快心の笑をもらした。而して側近の醫師達にまで、皮肉を浴せかくるから、此際惡口だけはよしては如何かと云へば、此れは矢島家傳來で、致し方がないと笑うた。

* * * * *

予等は熱海行の事は、尙ほ弟の氣分次第によりて定めんとし、餘りに予等が病床に近くは、病を亢奮せしむる所以たるを虞れ、姑らく別處に退き、仁泉亭主人と相語り、主人の厚情に酬ゆ可く、揮毫帳に揮毫などした。

* * * * *

然るに日沒より弟の樣子が、急變の調があつた。百方手を盡した。而して午後十時五十分には、遂ひに昇天した。而して極めて安らかに、殆んど眠るが如く昇天した。予は多くの人の末期を觀たが、弟の如き立派なる往生は、殆んど觀たことがない。

* * * * *

予は弟の希望と依賴とにより、一切の後事を經紀することとした。予が秘書並木君と與に、十八日の夜半と云はんより、十九日の午前二時迄、諸般の打合をした。

* * * * *

豫ねて九月と云ふ月は、我等に取りては事故ある月だ。今年の九月も何事か無ければよいがと、妻と相語つたが、遂ひに天地間に持つた唯だ一人の弟を喪うた。予の心は淋しくある。

（昭和二年九月十九日午前七時、伊香保仁泉亭に於て）（完）

弔德富健次郎辭（九月廿三日青山會館に於て）

德富猪一郎

皆様、兄が弟を葬ると云ふ事は極めて不自然な事であります。又其葬る場所に於て兄が弟に就て御話をすると云ふ事も恐らくは不自然の事であらうと思ひます。併し私が茲に一言申しますことは、單に御座なりの義理一片の弔辭ではないのであります。茲に立ちまして、弟の遺骸の前に立ちまして、併せて皆様の前に立ちまして、一言申しまするととは、是は弟の志であらうと思ひます。

×

弟は死する時に、私の手を執りまして、後の事はよろしく賴むと申しました。其のよろしく賴むといふことの中には、少なくとも今日此の場合に私が一言をすると云ふ事も加はつて居たであらうと信ずるのであります。

×

弟の文學上に於ける位地は、天下の公論がありまして、私か茲に彼れ是れ申す必要は無いと思ひます。併しながら其の得たる所の位地は、私共の父が與へたのでもなく、兄たる私が與へたものでもなく、是は弟の獨自一己の力を以て開拓したる所の位地であります。さうして是までにやり上げたと云ふことは、私の父も、私も、全く意想外の事であつたのであります。この一事だけは私が皆様に告白し、併せて私の亡き父の申す分迄告白して置きたいと思ふのであります。

×

弟の著作は先程略歴に述べてある通りであります。其外にもまだ澤山あります。例へばコブデン、ブライト、グラッドストーン、ゴルドン將軍などと云ふ様な本もあります。其他色々の飜譯もあります。

併しながら弟の人物、弟の性格と云ふ様なことは、弟の作りました、若くは書きました所の多くの文字を透して御覽になつたのみでは十分でないと思ふのであります。此の場合に於て私は其邊の事も一

言申上げて置く必要を感じます。

×

世上では兄弟不和などと云ふ樣な話がありましたが、それはさうではないのでございます。全くそれは間違つて居る事なのです。不和と云ふ事は兩方からの時に初めて云ふ事であります。弟は私に對して感心しないこともありましたらうし、不平もありましたらうし、或は近づき、或は遠ざかつた事もあるのでありますが、斯く申しまする私は私が人心付いてから今日に至るまで弟に對する感じと云ふものは毛頭變りませぬ。其の力量、其の手腕、其の文才、其の貢獻と云ふ樣な事に就きましては、時と共に評價が變つて參りまするけれども、弟に對する友愛の情と云ふ點に對しましては、私は神の前に誓つて申しまするが、不和などと云ふ事は絶對に無かつたのであります。私は色々の事を澤山書きましたけれども、是まで私の書いた著作の中に、弟の惡口などと云ふ樣な事は一言半句も書いた覺は無いのであります。若しあつたと云ふ事であれば、あなた方の中から證據を御突き付け下さつても差支ないのであります。斯の如き譯でありまして、私及び私の兩親は、弟に對しては常に親及び兄たるだけの事を考へて居たのであります。

×

併しながら唯だ不幸にして吾々は弟を見るの明を缺いて居たのである。弟が是だけの者にならうと云ふ事を豫期して居なかつたのである。で吾々は弟に向つては寧ろ不明であつたと云ふ事を云ひ得るであらうと思ひます。

×

凡そ世の中の事は、遠い所の人は長所のみを見ます。近い所の人は缺點のみを見るのである。それに吾々兄弟は不幸にして性格がさう一致して居ない。固より弟が違つたと思ふ程に、違つて居たかどうかは問題でありまするが、兎に角違つて居る。兄は先づ、私の自身の事を申すも如何でありまするが、譬へて見れば河内木綿の樣なものである。弟は羽二重の樣なものである。同じ布地でも河内木綿と羽二重とはどうしても違ふのである。で、有體に申しまするると、弟は直情徑行の人間である。然し決して横着者ではなかつた。我儘者であつた。然し極めて正直、親切、父母には孝行、兄とか姉とかには極めて友愛であつたのである。父母には孝行、兄には友愛、それが何故に時としては父母にも遠ざかり、兄にも遠ざかつたかと云へば、それは弟が惡いと云ふばかりではありませぬ。殊に兄弟喧嘩は兄からと云ふことがあります。私共は喧嘩はしない。併しながら少なくとも弟の方からは、時としては親及び兄に背いた。是は兄が何か弟に對して

仕向け方が十分を缺いたと云ふことを私が自ら反省するより外に途は無いと思ひます。

×

私は長い間、どう云ふ譯であらうと云ふ事を反省したのでありますが、不肖にして十分にそれを覺悟し得なかつた。併しながら今日になつて考へて見ますれば、多少其の理由も分つたかの如く感ずるのであります。

×

と申しまするのは、弟は父母の晩年の子であります。弟は私に五歳違つて居たのである。それで私の兩親は、弟を子と思ふよりも寧ろ孫と思つた。私は弟を弟と思ふよりも寧ろ伯父が甥、親が子と云ふ樣な考へを持つて居つた。五歳位の違ひでさう云ふ事をと云ふ樣に御疑ひになるかも知れませぬけれども、私は極めて若い時から、同輩から小爺いと云ふあだ名を受けた。小爺いとは小さい爺いさんと云ふ事であります。非常に小まつちやくれた男であつたと思ひます。それで五歳の差でありますけれど、自分では十五歳位の差に思つた。まるで弟をば掌の上に載せて見る位に考へて居る。自分の弟であるが對等とか若くは後から付いて來るとか云ふ感じは有たなかつた。又た親達は、孫の樣なつもりで、うまい物を食はせるとか、若くは頭を撫でてやると云ふ樣なことはしたけれども、一所懸命に教育などと云ふ樣な事をするだけの必要は感じなかつた。

×

それで弟の方から申しますると、愛に餓ゑたのではない。愛には食傷して居る。併しながら敬に渇して居る。尊敬と云ふ事に渇して居る。それで始終弟が癇癪を起す時には、己れを侮辱したとか、失敬をしたとか、馬鹿にしたとか云ふ樣な事を申して居つた樣でありますが、何故にあゝ云ふ事を云ふかと考へて見ますと、今日になつて見ればさう云ふ譯であることが、漸く分つて來ました。

×

それに又常人と吾々、此の吾々と云ふ中には父母も加へての話でありますが、異つたことは、大分異つて居る。私は常人の子供の時からの模樣をよく知つて居りますが、非常な内氣者で、はにかみやで、人の前では碌々物も云へない位の風であつた。弟の小學校時代には、餘りに其の學科が出來過ぎて、傍輩に氣の毒であるとて、故らに知らぬ振りをして、點數を減した程でありました。それから大變に感情が激烈である。それから其の時々の事を其時の氣分氣分でやつて行くと云ふ樣な事がある。それから最も小さい事によく氣が付いて、それから何事にも餘り辛抱と云ふことは出來なかつたと云ふよりも、寧ろそ

れは嫌ひである。それで弟の極く幼少な時分には、帳面二つ、善人帳と、惡人帳と云ふものを拵へて、大概の自分の好きな人は善人帳、嫌ひな人は惡人帳と云ふものに書いて置いた。恐らくは此の善人帳惡人帳の氣分は彼の死に至るまで殘つて居ただらう。彼の著作の中には、自ら善人帳に揭げられた者と、惡人帳に揭げられた者とあつて、惡人帳に揭げられた者は洵に不仕合せな者であつたかも知れませぬ。

×

それから自分の嫌ひな友達が來ると、自分ではそれを追ひやることは出來ずに、よく母に告げて、あの人は嫌ひだから、早く追つ拂つて吳れと云ふ樣な事を賴んだ。學校に行く時に、辨當がうまくないと、食はずに歸ると云ふばかりでなくして、大概辨當箱ぐるみ川の中に棄てるとか、道に棄てると云ふ樣なこともありまして、隨分辨當箱を澤山、母は取かへ引かへ購つたのである。それから物が欲しいと云ふ事になれば、別に父母に相談すると云ふこともなく、店からずん／＼取つて來ると云ふ樣な譯でありました。私の父は非常に几帳面な性格の者でありました。それでさう云ふ事を見ますると、是は困つた子供だと云ふ事でありまして、私もどつちかと云へば、さう云ふ風の事は餘り好きの方ではない。それで其時から、とても此子は一本立ちは出來ぬと云ふ事を父母は云つて居りましたからして、私が、それでは私が此子の世話は引受けます、御安心下さい、私が必ず此子は引つ張つて行きますからどうぞ御安心下さいと、斯う云ふ譯で私は自ら兩親に代つて弟の保護者……後援者位ではない保護者と云ふ樣なつもりになつて了つた。それがずつと後まで殘つて居たので、多分弟から絕交せらるゝ樣になつた、それが一つの理由でないかと、私は近頃になつて漸く考へ付いたのです。もう考へ付いた時には絕交された後であつて、何とも仕方がない。下司の智慧はあとからと云ふ樣な譯であります。

×

さう云ふ譯でありまして、弟は天才でありましたが、同時に弱虫泣虫、怒虫、偏屈虫でありまして一寸手が當りませんでした。明治十一年私が十六、弟が十一。十六の兄が十一の弟を伴れて京都の同志社へ出かけたのである。さうしてどし／＼私が教育をした。丁度新兵を下士官が教育する樣な譯であつて、下士官の方では當り前と思ふけれども、新兵の方では虐待と解したかも知れない。河内木綿で羽二重を非常に揉んだものだから、羽二重の方が少しは痛かつたかも知れない。さう云ふ樣な事が始まりなのである。此話を長くすれば彼の傳となり、私と彼との交涉の傳になりますから、それは略しますが、要するに決して吾々共は、弟を憎いと云ふやうなことはない。弟はどう云ふことをしても、兄には土をぶつつけても、石をぶつつけて

も、惜いなどとは思はない。唯さう云ふ事をさせずにうまく行く事が出來なかつたと云ふ事を自ら恥ぢて居たのであつて、何時かはさう云ふ事がうまく行くだらうと思つたのである。で、さう云ふ樣に弟がなつたのも決して弟の責ではない。實は、弟がもう少し偉くなると云ふ樣なことには氣付かずして、其の弱點とか缺點とか云ふ事のみをよくこつちが見て、それを矯め直さうと云ふことのみに餘り骨を折り過ぎた我等不見識の罰であらうと諦めました。

×

兎に角履歴にもありました樣に、新島先生の懷から逃れて、熊本にに歸りました弟を、私が明治二十二年に引つ張つて、そして「國民の友」「國民新聞」で種々やらせて見ますと、實に私も其時には驚いた。何時の間に斯う文書をよく讀み習つて、兄よりも能く讀める樣になつたか。又た文章を書かせて見ると中々能く書くのである。それで是は洵によい者を得たと思つて、私は是ならば己れの秘書位は勤まると思つた。これが又た恐らく一つの間違ひであつたかも知れない。さう云ふ譯で私は段々弟と交渉をやつて來たのである。

×

弟は實に鋭敏な頭を有つて居りまして、一を聞けば十を知ると云ふ樣な事も出來たのである。

先程履歴に「黑潮社」を作つて獨立したとありましたが、其の「黑潮」と云ふ小說は、實は兄が弟に種を授けたのである。私が自分が書けたらば書きたいと思つて居たことを、どうも自分は小說などを作る筆は有たない。又た小說を作ることは自分としては欲しない。それでどうか、あれ程の筆を有つて居るのであるから、弟に書かして見たい。是は恰もヴイクトル、ユーゴーが「九十三」と申しまする小說で佛蘭西革命を書いた如く、維新から明治時代の潮流を書いて見たいと云ふことで、弟と相談して、乃ち此の青山會館の立つて居りまする此の所に私が居りました時に、何時も夕方から庭に緣臺を出して、私が色々と、斯う云ふ風の事もある、さう云ふ風の事もあると云つて弟に話した。それが卽ち「黑潮」である。若しうまく行つたならば兄弟で非常な大著述が明治年間に出來たかも知れませぬが、「黑潮」が出來つゝある間に、弟から絕交狀を突き付けられたのである。

×

大槪の事には驚かない私も、其の書付を當人が持つて來て、之を讀んで與れと云はれたのには、聊か一驚を喫した。それから私がそれを讀んで申しまするには、お前さんが己れと絕交すると云ふ事も、したければ致し方がないけれども、此の書付を今天下に公にするだけは、勘辨して與れる譯には行くまいか。己れも松方內閣の沒落以來非常な惡評を受けて、世の中で己れの事を褒める者は一人もない。どの

新聞を見ても、己れの事を惡く書く者はかりである。自分も常に人の事を澤山書いて居るから、人から惡く云はれた所で、自分に何も應へることはないけれども、何を云つても兩親のお前さんから斯う云ふものを突き付けられては己れもやり切れない。のみならず漸く己れもどん底から再ひ頭を擡げつゝある矢先に、此の手紙を天下に公けにされては、あの徳富蘇峰なる者は、輿論から見限られたのみならず、肉親の弟から迄見限られたと云はれるだらう。さうなつては己れは立つ瀬がない。それも辛抱するが、年を取りつゝある兩親の手前どうも己れは忍ひない。お前か何と考へて呉れてもそれは仕方か無いが、世間に公にする事だけは勘辨して呉れないかと申しましたけれども、そこが弟の本色だ。小崎さんの所謂、己れの欲する所は結果を顧みないで、出したのである。成程それは大變な名文であつて、今日でも人はそれを暗誦して居る位の事であります。

×

私は實に困つたものと思ひましたけれども、それ等の事に就ても別に弟を恨むことも無かつた。怒ることも無かつた。何故ならば、弟は恨んだり怒つたりする程の人間とは考へて居ない。もう少し善人であると私は思つて居たからの事である。處が日露戰爭後、焼打ちの後ひよつこり青山の家に訪ねて來て、兄さん、どうも今迄のは私か不心得だつた。是から一緒にやらう。仲直りしようと云ふことである。洵に有難い。お前さんがさうして呉れれば實に俺はもう何よりの事である。で、それから弟か外國に行くと云ふ事になりまして、私は神戸迄弟を送つて、それから私は支那に參りまして、支那から歸つて參りますると、横濱には既に弟がトルストイの訪問から歸つて迎へて居る。それか丁度明治三十八年から三十九年の頃のことである。

×

其後當分の間はまことに圓滑に行つて居つたのである。弟は固より私に調子を合はせる樣なことはないけれども、私は下手であるが、弟の音樂に全く合奏は出來ぬでも、せめて邪魔にならぬ位の程度に弟に交際つて行つたのである。が、私は弟の書いたものは餘り讀まない。何故なれは、餘り讀む時に於いては、是は間違ひであるなどと云ふ樣な感じを自分が起すのは、弟に對して濟まぬことゝ思ふから、私は讀まなかつた。併し乍ら私は恐らく弟の孝行であつたらうと思ふのである。弟の爲めには私は何事でもすると云ふ決心は持つて居たのである。

×

さう云ふ譯でありまして、互に相容れて居たのでありますが、大正二年の秋、京城で弟に會ひました時分には、私は弟を迎へるとか案内するとか、極端の、外の人には其の十分の一も勤まらぬだけの御奉公をしたのであるが、弟は大變な不機嫌で、停車場から碌に挨拶もせ

ずに歸つて行つたのである。何が惡かつたか、其處は自分も分らずに濟んだのである。それ以來又弟から見限られた。併し何時かは又弟がやつて來るだらう。今日は來るか、明日は來るかと待つて居た。其待つて居たのが十五年。十五年經つて病氣したと云ふことを聞きましては、私も氣が氣でなくて、何とかしたいと思うて、姉共も頼んで色々會ふ道を講じて見た。又自分も千歲村へ行つて見たり、及ぶだけのことをしたが、門前拂ひをされた時には、自分の嫌ひな小さな友達を自分で追つ拂ふことが出來なかつた、母に云つて漸く追つ拂ふことをした弟が兄を門前拂ひをするなどと云ふことは、弟も偉くなつたと云ふ樣に考へることも出來たが、實は私は其の時は悲しかつた。併しさう云ふことは誰に向つて申すことも出來ず、唯だ弟の心が何時か和らいで來ると云ふことを信じて居たのである。それから先のことはもう新聞にも出て居る樣でありますから、私は申しませぬ。今申した通りのことで決して私は弟を惡く云ふのではありませぬ。

×

私は自分及び自分の兩親を辯護するのではない。併しながら一體の本情は今申した通りであつて、決して不和とか、疎隔とか、仲違ひと云ふ樣な言葉は私は用ひて頂きたくない。私は未だ曾て弟と仲違ひした事はない。不和であつた事はない。餘儀なく追つ拂はれたから行かぬのであつて、自分の方から行かなかつたのではない。何時も弟を思つて居たのである。恐らく弟も心の中にはさう思つて居たのであらうと思ふ。實に弟は私共の樣な情の……私も薄情とは自分で思はない。併しながら弟は私共の樣な情の荒い人間ではない。私共の情と云ふものは如何にも荒つぽく、唯だ素麵の樣に出て行く。弟のは實に緻密で、小さくて、毛細管の中にある樣なものである。それで弟が親孝行などをやる時などに至つては、非常に孝行をする。兩親も、もう健次郎の孝行には實に困る。ああ孝行をされてはやり切れぬもう少し親不孝をして吳れないだらうかと斯う言つた。何故なれば誰でも滿足しなければ擦する。手を引いても滿足しなければおんぶする。斯う云ふ譯である。もう兩親に對しても餘り儘せりで、餘り盡し過ぎるのである。私が病氣した時にでも、弟程に良い看護をして吳れる人はない。痒い處に手の屆くと申しまするが、實にそれ以上である。さうして、何處迄もやる。私共が溺れる人を見た時には、飛込んで助かるだらうと見れば下駄をぬいで飛込む。弟は助からうが、助かるまいが人が溺れて居ると見ますれば自分がどてらを着て居らうが何を着て居らうが直ぐに其の儘で飛び込んで行くと云ふ譯であつて、さう云ふ處はとても私共の及ぶ處でない。さう云ふ樣な良い處に澤山持つて居たのである。併しながら私共の流儀は物事を秩序立つてやつて行く、弟は氣分でやつて行くと云ふ事であつて、所謂道が違つて居る。弟はまるで兄は理の人、自分は情の人だと言ひまするが、神

様はさう人間をはつきり分けて作ると私は思はない。矢張り兄弟には多少の共通點があるべきだと思ふ。情の人とか理の人とかは、弟が勝手に分析したのである。弟にも理性はあつたと思ひますが、私にも人並の人情は持つて居ると信じて居る。併しながらやり口が多少違つて居る。但だ其の元に還つて見れば、私が始終弟を自分が保護者として見て居つて、斯うしたら宜からう、さうしたら宜からうと云ふ様な事で、指圖した様な位置に始終立つて居た事が、弟の爲に障つた一つの大きな理由ではなかつたかと思ふ。夫も或は間違ひの一つであるかも知れませぬが、此間伊香保で會見の時、其處まで話す暇がなかつたのは遺念でありました。それで私は何も此際申す事はございませぬ。唯だ私が洵に感心するのは、實に弟の臨終の良いことでありまして、私も偉いお方の死には多分立ち會うて居る。併し乍ら弟の死には實に感心した。所謂大いなる禪僧、若くは禪僧でなくても高僧方が往生される時でも、あれ以上の往生は出來得るや否やと云ふ事を私は疑うたのである。

×

さうして弟の逝つた翌くる日、即ち九月十九日、秋雨蕭條の中、伊香保から弟の遺骸を未亡人一同送つて來た時に、雨が漸く武藏野に掛る時に霽れまして、上州を出て熊ケ谷邊に掛ります時に霽れまして、さうしてまるで曠日の如く奇麗な太陽が西に輝きまして、東の方にも、何んと云ふ美しい虹でありますか、大きな虹が半輪を作つて映じました。實に天地が弟の死んだ事をそのまゝ自然を以て表して呉れたのではないかと思ふ程、私は感激しました。

×

私は何ほ此上申す必要はない。唯だ私が存在した事も、弟の存在には決して無意義でもなかつた、初めには指導者と思ひ、中頃は他山の石と思ひ、さうして終には弟も萬一の場合には兄が生きて居るからして、己れの心事は兄が克く諒として居るであらうと云ふ事を心の奥底には信じて居たであらうと思ふのである、

×

私も今更弟に向つて何も申す言はありませぬ。弟が今日の地位即ち皆様方の御贔屓下さる様な地位を作つたのは、私の力でもなく、父の力でもなく、母の力でもない。全く弟の力で開拓したものであつて私共も一家親族として弟の餘光を擔ふと云ふ事は。弟に向つて感謝せねばならず、又皆様方に向つて弟の著述、又弟の爲した事が聊かでも國家の爲人道の爲に利益があつたと云ふ事をお考へ下さると云ふ事であれば、弟の爲にも本望と思つて止まないのでございます。玆に一言弔辭を述べて置きます。（終）

昭和二年九月念七一校　速記の儘、修補を加へず。　蘇峰老人

追憶記

ひとり徳冨健次郎先生を山上に葬る

前田河廣一郎

葬儀に列せざる理由

電報で、朝日新聞社の鈴久允君から、トクトミロカノオモヒデタノム――云云と云つてよこしたのが、九月二十日の夜八時ごろであつた。『オモヒデ』はすこし氣になつたが、そのまゝ、過去二十二年間にわたる、先生と私とのあらましの關係――主として恩義を蒙つた話を、朝の一時ごろまでに書き終つた。すこし昂奮してゐたせいか、書いてゐる物の終り頃になつて、しきりに涙の流れるのを覺えた。翌日ガラスのやうに霽れた山の朝を、その返電や雜信、原稿などを一と纏めにして、二つの橋を渡つて、湯田中の郵便局へ行つた。山峽の河原には、もう四五日も經てば藥すべのやうにすがれてしまふ、名もない可憐な小花が咲きみだれ、水のかれ〴〵になつた岩の下には蟋蟀が鳴いてゐる。寂として山裾に包まれた坂道には、近頃に珍らしい秋の日溜りがあつた。私はぶら〳〵歩きながら、一軒の店で赤い林檎を二つ買つて、道々がり〳〵とそれを咬んだ。谷の方を向いてゐるときは赤かつた林檎も、手に取つて見ると半分は青くて、舌に澁が殘つた。私は、この秋の日にふさわしい、滑らかな茶が一杯欲しくなつた。安代の入口を少し本道から外れて河原へ降りると、磊々とした石塊の中に一軒の茶店がある。澤山の赤蜻蛉のむれてゐる下をかひ潜りながらその椅子へ掛けて、何氣なく、綴込になつてゐる新聞紙をめくつて見た。次の瞬間、谷底へ顚き降ちかゝつてゐる人のやうに私は驚いてゐた。無性に茶を啜つた、銀貨を一つ盆の上へ投つた、飛び出す、水のせゝらぎがする、石、そんな物にも行手を遮ぎられた――かういふ無意識動の經過の間、私はつねにたつた一つの事柄を思ひ、惱み、そのためにどこへ行かうとしてゐるのかも忘れてゐた。やつと思ひ出した時分には、私のゐる角間に近い澁温泉の郵便局へ行かねばならぬと氣がついた。宿の主人の山本君から借りた二圓のうち、まだ一圓とすこしは殘つてゐた。今度は全く別な動機から、もう二三通電報を打たねばならぬのである。

町は、澁温泉特有の、柳手の細工物やけばけばしいレッテル附の諸

品などをあきなふ高低の店屋を兩側につらね、ふだんならば相應に人通りもあるのだが、五六日あとの秋祭にすつかり疲れきつたらしく、往來の日向には、濾水に女どもの洗濯してゐる姿だけが、單調な影を投げてゐた。ふらふらとその間を縫つて步るいた私は、晶るいさばさばした日光を浴びながら、その淡白な光に暗らいコントラストをはつきり意識し得るほど、自分だけの鈍黑な煩悶をつづけてゐた。誰か見知り越しの者が挨拶したらしかつたが、それも通り過ぎてしまつてから、眸のどこかに印象したのを懷ひ起こした程度の關心しか持ち合はさなかつた。ひたぶるに心は新聞の——あの綴込みをめくつた何枚目かの、大きい社會記事の上に彷徨した。

『先生は死んだ！　死んでゐたのだ！』

實際、私は知らなかつたのだ。私だけが知らなかつたのだ。十五日に東京へ歸へつた妻からは、その晩の手紙があつたきり、あとは新聞でさへも送つてよこさなかつた。四五日小さな部屋に貝のやうに閉ぢ籠つてゐたので、旅館の帳場へも行かなかつた。雷線の切れた何かの器械みたやうに、廣ろい建物にかたかたと一人だけの音を立てて暮らしてゐたのである。そして、まだ養生されて、もう秋口になつたから、だんだん恢復されたらうぐらゐに思つて、些かの豫覺もなく翁君へ書き送つた原稿の主人は、もう、三日前に亡くなつて居たのである。何といふ不覺！　私は、諡で、二つの長文電報を打つた。それで金がすつかりなくなつた。その一通は、取あへず、千歲村の德富愛子氏あてに。翁君へは、原稿へ追加の電文を。

『こりや東京へ歸へらにあならんかな？』

から呟いて、私ははつとした。

『この間なども、すつかり覺悟したらしく、死んだら、朝日の御方と（おそらく石川六郎氏かも知れない）貴方とだけに葬式は出していただくんだ、と云ふて居りました。』

これは、先生が危篤を傳へられて間もなく御見舞に行つたをり、へりしなに、氣丈な奧さんが淚一つこぼさず傳へられた言葉であつた。子供のやうにローマンテイツクな病床の空想かも知れない。だが、この言葉は、今となつて思ひ起こすと、病床の空想から生れたローマンテイシズムの最も鋭い尖端をもつて、私の心臟—全身に Compassion を與へずには置かない。——何故となれば、恩義、信賴、熱愛のすべてをもつてしても、私は今東京へは歸へれないからである。

歸へれない——といふこと、これは些か私事を發かなければならない。早い話が、金がないのである。この五月から、不思議にもやはり先生と同じ病氣で信州へ來た私は、滯留已に五ケ月にもなるのだが、やつとこの間妻子だけを——帶俗のついてゐない、家賃の溜まりきつた家へ歸らせることが出來て、自分は最小限度の消費生活の下に、一種の動的抵當としてこゝに踏留まらなければならなくなつたのである。旅館の主人が私に好意を持てば持つほど、そこに生じてゐる心苦しい經濟的咒縛の糸を、無斷で切るわけには行かない。しかも、この五ケ月の間、私の關する範圍の狹い出版業界に於てすらも、財力は乾缺乏の枯渴現象だけが、醜くい岩のやうに目につくだけである。から、いた海のやうに陷沒して、見わたす限り稿料未拂、出版違約、需要なると、私の貧乏は直ちに Community の貧乏でありた。借金の催促

をする人も借金に困つてゐた。他人の借金を同情する人も自分の借金に困つて第三者を呪つた。生活難、就職難による慘殺事件、家族共同の自殺！　いたる處に、社會の小ブルジョア層以下の民衆は、互に網を張りわたした無數の蜘蛛の群のやうに、誰かの屍を超えないと、そとへは出られないのである。そして、外へ出たとしても、亦、無限に蜘蛛の巣がつゞいてゐる。――私の歸京出來ない理由は、ごく簡單であるが、同時に、社會的である。

　私は、白日の下を、水の音と桑の葉の乾いたそよぎを耳にしながら、崖の上に塊まつた小さな温泉村へ急いだ。私の手元には花環はない。宗教を捨てた私はカデンスの重い挽歌を知らない。靈魂を信じない私は、死は物質の解體還元であるとしか思はない。故人先生の生きてゐた生命の、それも私が觸れ合つた部分だけを瞑想することが、現在の私が營み得る、最も華やかな、最も長列の孤獨な葬儀である。

　秋の山には栃の果が降りしきる。私はしづかにその下を辿りながら故人を追憶しよう。………

先生の精神主義

　私は、先生の薦めでアメリカへ出發する前に、子供らしい計畫のあまり、撰擇して行かうとする行李を先生の前に展開したことがあつた。すると、他人の思想や行動に絶對に干渉したことのない德富氏が、そのときだけはスペンサーの『第一原理』と、大部の厚みに綴ぢ込んだ醫學雜誌の臨床講義や精神病學の講義などを四五册沒收して、

『これは預つて置きませう。』

と云はれた。

　私の十九の年である。私は、それに不服だつた。そこでアメリカへ行つてから、スペンサーを讀み出し、それからハツクスレーやヘツケルまでも讀み漁つた。本來、先生は基督教の人である。どれほどの社會觀を述べようと、どれほど肉の情熱に燒け焦げようと、あまたたび死に直面しようと、最後の隱れ家を、宗教にしか求められなかつた。一度は、私もかういふ信仰を求めようとした。そして怪しげな野調で讚美歌を歌ひ、僞善者のやうに食卓でアーメンを唱へた。たしかに一種の清淨な觀念や純化された感情は、そのために誘發された。そして一旦かういふ人技的に濾過された觀念系體を獲得するや、それを支持するための形而上的努力と不自然なアッセテイシズムとをもつて、それら以外の現象に、動的相關性を無理してまでの倫理價値を搬入して、始終その排擊と整調とのために、より目前の（目前にあるがために近視的なメタフイジシアンに輕蔑される）よりオルガニツクな、人類全體の關心事を妄却し勝ちで、從つて、救濟は個人的沒入――ともすれば健全な世界觀の妄脱――以外の何物をもたらさないことに期するのである。トルストイの煩悶がそれであつた。先生の煩悶もそれであつた。二元論の相剋である。私は、この信仰に感化される前に、アメリカへ送られた。そこで獨自の煩悶を重ねた。後年、十四年目に、私達夫妻が御會いしたとき、先生は笑つて

『そら、御預りした本を御返へしして、』

と云つて、十四年目だけ黄ろくなつたスペンサーを奥さんの手から運ん

抑された。不幸、スペンサーはもう私には不用であつた。いづれにせよ、アメリカへ行く前には、よく東洋風なメタフオリカルな熟語で、先生のピユーリタニズムを皷吹されたものであつた。それらは、ぼつりぼつりと、あるひは突發的に鋭どく、それでゐて、まるで語る人自身が自分に云つてゐるやうに發言されるのであつた。しかし、私が歸朝してからは、一切さういふ思想上のプロとコンの比較はさいたやみになつた。震災の年に、妻と子供と三人で、壁の落ちた粕谷の家を御訪ねしたとき、私の無事だつたのを欣ばれた先生は、いつになく昂奮して居られて、日本の國家社會の缺陷を雄辯に指摘されたが、終りに、しみ〴〵と、

『貴方は全然新しい背景から立てゐるから幸福です！　私には、こびりついて離れぬものがある――。』

と云はれて、傳統や歴史や過去といふものに引摺られてゐる自身を嘆かれるやうな口吻であつた。歐洲へ再度の漫遊の途上、『朝日新聞』などに寄せられたそのをりをりの書信には、かなり過激とまで思はれる非戰論、國境撤廢論、關税廢止などのデモクラシー思想が溢れて居つたが、それらは、やはり感情的な先生の精神主義の發露としか見るわけには行かない。愛――博愛思想以外に、それらの思想は、全然實行的科學的基礎を缺いてゐたのである。又、かういふ人道主義の危險は、直ちに、先生の場合に於ける如く、國家主義に逆轉するのである。有名な、幸徳事件直後、一高で先生が演説して、新渡戸稲造氏の辭任問題となつたことなども同一系路の精神主義の發露である。その點、先生は幸徳氏等の葬儀を司會したと傳へられる植村正久氏と酷似してゐた。偶然にも私はその二人を個人的によく知つてゐる。植村氏は『生れてはじめてだ』と苦笑しながら、氏の愛弟子である私の妻との結婚媒酌人となつて、向島の妻の姉の家まで結納を持つて行つてくれた人である。植村氏にもやはり熱烈な社會制度の缺陷に對する批判性はあつた。しかし、私達から云へば、百の顯微鏡下の發見も、その科學がロツクフエラー・インステチートに幽閉されてゐて、人類に貢獻する處がなかつたら、存在價値がないのと同じことで、數人の撰ばれた少ブルジヨアにだけ解放される侃々の文明批評も一つの新しい熱血の漲るプロレタリアートの運動には如かないのである。トルストイが都會の乞食にコペツカを惠みきれなくなつて、靈の救濟である、と逃避するに到つたと同じ經路をもつて、先生も植村氏も、社會救濟の主體として靈を先づ推された。私は靈は物質であると信ずるのである。そして、社會は『救濟』さるべき性質のものではない。

しかし、かういふ相容れない思想に立つた私を、よく先生が抱容して居られた、といふことを思へば、そこに何か共通點がないとも限らない。性格から云つても、先生の感情的な處、頑强で容易に枉げない點、孤獨を愛し、家庭的にはやや暴君がかつた點、それでゐて常に正直で涙もろくて潔癖であつた點など、私は、不遜にもよくも眞似をして生きてるなと自分を思ふほど、先生は私の原型であつた。奥さんに、私の妻が泣いて訴へに行つたとき、奥さんの慰撫された言葉は、よく先生の行動と私のそれとが似てゐるといふことを髣髴させる以外の何物でもなかつたのを記憶する。大きい先生は、曲りくねつた（先生にとつて）と思はれる私をも、やはり同じ土壌に培はれる者が

い灌木だと思つて、側で眺めて居られたのであらう。私は先生と對座してゐるとき、第二の――いや、むしろ第一の親父を想像した。どんな我むしやらでも、どんな乳臭い理窟でも、極端なマテリアリズムでも、有りのままに曝らけ出して、それでわかつて貰らへるものと安心した。私が雄辯になると、先生は默つて言葉を拾つてだけ居られた。決して批評はされなかつた。しかもそれは小說を書く職業作家の共通心理であるところの、一種の皮相な現象並行論的見地から、まアお前のやうな馬鹿も浮世の複雜さを構成する一要素だ位の無關心的態度ではなかつたのである。そこには潛熱があつた。默した力が控へてゐた。私といふものを愛しながらの侮蔑であつた。そして、ときどき、あの眼鏡のうしろから大きい眼を瞠つて、じつと私の顏を默視されるのである。そして、その都度、私は、まだ闊葉をひろげ切れない若い木のやうな自蔑を持つのであつた。――しかし、もうその眼は、永遠に瞑ぢてしまつたのである。

師弟ならざる師弟

文學的には、二十代の私は、むしろ『蘆花狂』の一人であつたかも知れない。中學校時代に、私の文學憧憬期を支配した人が三人あつた。鏡花、樗牛、蘆花がそれである。そのうち、先生は他の二人をアウト・リヴしてしまつた。文壇的には、私はただの一度も、先生の推薦とかそんなことにすがつたことはない。文章ですらも、生れて十八歳のとき、たつた一度見て戴いただけである。歸朝しての處女作『三等船客』だけは、『今でも昔どほりに叱られる健次郎先生に』として獻本した。大體に於て、私は、德富健次郎といふ名前の下に、自分の名を聯ねて歌つた覺えはない。數ある他人の作物を批評もしたが、先生の本は一度も批評したことはない。ときに買へないと、新しい作が出ても讀まずに過ごすことがある。『みみづのたはごと』以後の作は、大抵間接にしか知らない。でも、私の著はした本だけはどうにか缺かさず御贈りしてゐた。

だから、文壇的師弟關係や作家間に慣れてゐる人は、突如として、故人德富健次郎氏に對して、私が『先生』呼ばはりすることの奇異に搏たれるであらう。だが、他の場合に於ても書いたとほり、先生と私との間柄は、極端な人的關係以外に出でないものである。私が德富氏を『先生』と呼ぶことは、Ecce Homo! の意味に於てゞある。玄關番になつて『青蘆集』の著者に、塗鴉の惡文へ朱を入れて貰はうとした念願は、今を去る二十二年前に、きつぱりと最初の會見に於て撥ねつけられた。しかし、私は、今日、私達の玄關を狙つて、Aの文學者からBC――ZYまでも巡歴して歩るく文學青年とちがつて、德富健次郎を生活の資料にしようとは思はなかつた。しかも執拗に先生へついて廻はつた。と云つて、どんなに困つても、決して先生のポケット・マネーをせびつたことはなかつた。先生の私に對する出資はもつと深かつた。先生の私に對する文學的後見は雜誌社の周旋ではなかつた。數へて見ると、先生は一度私に職業を世話し、一度私に金を呉れ、二度めしを馳走してくれた。しかし、この僅かな具體度數には、それぞれの場合の重大な意義が、尠くとも私には、在つたのである。第一に、私が原宿の『黑潮社』をぶつきら棒に御訪ねして、郷里を飛び出

した十八の青年の生活難を想へたときに、先生は、當時關係して居られた石川三四郎氏の『新紀元社』へ同伴されて、私の書いた『マキシム・ゴルキーを論ず』を原稿のままで石川氏に示された。石川氏の助手といふことで、それからたしか月々二三圓の金を貰つて、私は主として雜誌の帶封を書いたり、新刊紹介を三行に書いたり、築地へ雜誌を取りに行つたりした。先生から金を戴いたのは、アメリカへ行けと促がされたときである。その時分、現在の粕谷の邸がまだ『御殿』にならぬ昔で、野中にぽつんと立つた一と棟の廠舍に以前に首縊りがあつたとかいふ荒凉たる噂が、黑く先生と奥さんの二人ぽつちの頭上を壓迫してゐるやうな淋しい頃であつた。私は先生の有り金を全部攫つてしまつた。晩餐は奥さんの菜食主義のメニューを御馳走になつて、アメリカへ出發した。それから震災後私達三人が行つたをりに、晝飯を振舞はれた。まだ三才になる私の子供が、先生の膝の上で小便をして、横を向いて苦が笑ひされたのを記憶してゐる。——かういふ出來事の間に、二十年といふ時間が流れてゐたのである。そこには、御互の上に、いろいろな涙ぐましい、腹立たしい、居ても立つても居られぬやうな、あるひは涙で泣ききれぬ悲痛な變化が埋まつてゐた。その變化の種々相をじつと腹に入れて、先生と私とは、不離不即の水のやうな淡々として關係を持續したのである。それを持續せしむるやうにしたことが、第一に、先生の偉らさであつた。私は明治文壇の師弟關係中の美談と云はれる紅葉、鏡花の間柄を羨まない。文章術や文章を賣る上に於てこそ、紅葉と鏡花の關係は入り組んだものにちがひなかつたが、その思想的感化はどこにあつたらうか？ もともとあの時代には、思想は借り物、ただ絢爛たる名文を新しくさへ書けばいいとされる風ではあつたが、鏡花の作物に紅葉はどんな思想を殘し、それが今日にどんな役割を演じつつあるだらうか？

先生は、ほんとの意味の師として、私に先づ正直であれと敎へた。『皮を剝き、皮を剝き、血が出てもよろしい、骨まで削つてもいい、先づ自分をほんとに出すこと！』これは先生の私の日常の行爲思索に對して敎へられた言葉だ。二十年、その年月は永いが、まだ語調がびんびん私の耳の傍で高鳴つてゐる。次に、私は先生に働くことを敎はつた。決して机の前で不健康なペンを捻つて、出たらめな色戀のプロットを捻つて衣食せよとは先生は敎へなかつた。私は喜んでその敎へに從つた。自然主義輸入時代に、淸からず高からずと雖も、私が自分の肉體の健康をば保ち、その健康の把持によつて當時流行の獨歩、花袋、藤村諸氏の作物を或る距離まで押し遣つて判斷出來たのもそれである。それから第三に、先生は全然變つた世界に、私を獅子の仔落しに蹴落とした。

『泥の中から黃金を掴んで來るんですな！』

かう云つて、私をアメリカへ投り出した。アメリカは學問であつた。未だに學びきれない大きい學問である。生活の業を知らない、英語もよく話せない、日本文がちつとばかり書けた面皰青年の私は、暫く水中に擲きつけられた海の子供のやうに、先づアメリカで生活の鹹味を味はふべく、泳ぐことから覺えた。そして、青春の大部分を血の出るやうなアメリカの生活難に濺いで、妻をめとつて日本で御目にかかると、先生は澆解として、溫かい手を差し伸べられた。要は、良

矣、と先生に見られた。

『若いもの見てはうれしき今日の春』

床の間に掛けてあつた、田中正造翁の一軸を先生は外づして來て、

『これは、私の御祝ひのしるし』

と笑はれた。それは十四年目の邂逅である。

始終一貫、私は人生の危險なポイントポイントを、先生の手に撮み上げられて育つたのである。これ以上に、世の中に『先生』といふべき言葉の篏まる事例はあまりあるまいと思はれる。で、私はさもしい文學的徒弟關係の結合を離れて、いつも『先生』と平氣で呼べたのである。もし、私が全然、先生の思想を思想とし、信仰を信仰とし、煩悶を煩悶として、第二の『自然と人生』を書き、第二の『黑潮』や『寄生木』を書いたところが、それはわざわざアメリカくんだりまで私を押遣つた先生の氣持である筈はない。先生は、自分の行はない部分を私に試驗して見たらしかつたのである。そして、自分では自分の煩悶を獨りで闘ひ、私には私の解決のために獨りでの惱みを負はせて置きたかつたのである。それが最後まで持續された。もし、先生が私を破門したとすれば、それは、萬人共通の人生の一部分を破壞したことになつたであらう。

手紙、其他

私は昔『黑潮』の第二編の原稿を見たことがある。半截の罫紙に、毛筆で、木屑の釣つた、達者な書體で書かれたものだつたが、その文章の殆ど全部と云つていいほどが訂正に訂正されてあつた。あの文章家が、どうしたものかしらと怪しむだほどだつたが、この一字一句をもおろそかにしない凝り性が、洗練のプロセスであつたにちがひない。晩年にいたつて原稿を拜見する機會に接しないが、おそらく『富士』などの、あの平明な敍述も、投げ出したやうな素材的な放膽も、まつ黑くなるほど塗り潰した原稿から印刷されたものであらう。先生の性格に非常に氣むづかしい個所のあつたことは否めない事實であらう。神經質で通つてゐる漱石の原稿の書き損じも見たが、それなどは字を完全に塗り潰すといふだけで、書きかけて嫌になるとぽいと投り出したものにちがひない。最初の一枚をしつこく最後まで物にする――こんなことにも、よく先生の執愛的な性格があらはれてゐると思ふ。

先生はめつたに手紙は書かなかつた。もし私が今日まで保存して置いたとしても、それらは恐らく取り混ぜてものゝ五通とはならなかつたらう。私達が結婚して、妻が難産のあげく長男を生んだと云つてあげたので、よほどそれが氣に入つたと見えて、太郎に添書のやうな書簡箋へ、

『子供は父の父なり、母の母なり、力なり。』云々

と書いてくれた。力といふのが長男の名である。

さういふわけで、終ひに、私の方でも手紙といふものゝ用途を原始的にしか解釋しなくなり、在米當時は二年も三年も音信しなかつたことがある。それについて思ひ出すことは、曾て中川愛氷といふ閔光社から出てゐた『女鑑』の編輯をしてゐる男のところへ私が書生に行つたことがある。そのとき『徳富健次郎先生足下』と書き出した手紙の端切を、愛氷君に見つかつて、そんな失禮な呼び方をする奴があるも

んか、足下とは何だや、と叱鳴られ、「文章軌範」でもよく讀めと云はれたので、頭にさわつて早速そこを飛び出したものであつた。尤も愛氷君は、私が三錢切手を一枚窃盗したとかいふ刑法上の名義を以て私を追ひ出したことにはなつてゐるが。

そこで、私にはいくらも先生へ出そうとしては出しそびれた手紙があつた。その一つなどは、英文で、私が毎日つけてゐた日記の中に原文が書かれたまゝになつて殘つてゐる。どんなに通りのいゝ言葉で手紙を書き、いかに細密な心的經路を説明したところが、それらは、一つの生きた書留郵便物として、私が大きくなつた姿を、粕谷の上り框にあらはしたには如くはなかつたのであらう。

「ジャングル」の譯を御贈りしたとき、飛びついて讀まれたらしく「富士」の起草が難澁で汗を絞つてゐると書かれたのち、「ジャングル」を讀んで又々肉類がいやになり菜食へ戻らうかと思つてゐると話して來られた。それから稍經て、あの病氣が迸發したところを察すると、菜食をやめられた反動の美食がよくなかつたと思はれる。

「調布へ行つて鰻を食べました、二人前。」

そんなことも、いつか云つて居られたやうに思ふ。

殊に、歐米から歸へられてから、洋食の重厚を愛されたせいか、いつか御伺ひしたときは、奧さんの廚房を建てる――洋式に、

「この人にも随分と苦勞をかけましたから、」

と心から吐息されてゐたので、何かな私も心あたりの食器などを差上げたのであつたが、あの調子で洋食を進行さして行かれたら、恐らくもつと死期を早められたことと思ふ。

どうも術語でも發明を多く使ふのは、讀者を疲憊さしはしないかしらと、私は素人判斷をしてゐる。

先生の作物について

私は、今こゝで、明治文學史に於ける先生の地位を論じようとは思はない。しかし、二三心づいた事柄を拾つて、その特長の一角から塵埃を吹いて見たいと思ふ。

いつだつたか、島崎藤村氏が編輯してゐる時分の「早稻田文學」に題は忘れたが、二頁丈の「人を殺ろした」云々の短篇を寄せられたことがあつた。

「ばつさりと袈裟掛けに――」人を空想で殺ろした話である。あれなどは、どうも神秘で（惡るい意味の）獨り合點の、精神的殺人の幻影以外に何物をも頭に刻まなかつた。もし、あの小短篇を完全に説明出來たら、恐らくその時分の先生の宗教的煩悶が判明するだらう。追かにあれだけは、どの短篇集にも編入されてゐないやうだ。しかし、あゝいふメタフオリカルな唐突な發言は、よく先生にはあつたことだ。それにしても、トルストイの「ハジ・ムラツド」のやうにまで具象化されてゐないのは、西洋人と日本人の相違であらう。先生の物には寓意といふ方面が多く、象徴といふ機械的なスケールまで行かなかつた。寫實的幻覺が多いやうに思はれる。同じリアリズムの形式を採つても、トルストイのやうに大がゝりでない點、リアリズムに取入れられてある物理力がいつも感情によつて彎曲されてゐる點、リアリズムその物の機械的構成に作者が策を弄やして一足飛びにスピリテイズム

へ飛躍した點など――思ひあはせると、諸作を通じて、あまりにも『日本人』的にあらはれてゐる。

『ゾラ、ユーゴオ、トルストイ諸大人のあとを追ふて、』といふやうな文章が、『黒潮』の家兄と別れる辭に序文として挿入されてゐたことを記憶するが、先生は、ゾラ、トルストイのいづれよりも、ローマンテイックな點に於て、國家主義的自由思想家たる點に於て、むしろユーゴオなどに近似してゐはしないかと思ふ。世の中の人は『小トルストイ』などと綽名してゐたやうだが、『黒潮』の『磯澤』といふ侯爵などの描寫も、トルストイの中年期の根氣の良い、そしてどこか酸味を帶びた、貴族的な皮肉を弄してゐるやうな、系統的に云へばフランスの自然主義の餘波に押されたやうなリアリズムは、先生にはなかつたと思ふ。例へば『不如歸』の武男の母樣が煙管の雁首を飛ばして障子に孔を開ける個所なども、あの當時としては利いたものであるが、もつとあの婆さんの内面描寫が外面に表現されてもいい筈である。『黒潮』の『おすみ』にしてからが、本來のリアリズムをゾラやトルストイ流に適用すれば、あれぐらゐの描寫では浮出てゐないと思はれる、そこで、作者の主觀的な敍述が必要とされる。何とかといふ（手元に本なければ）女主人公が若くて尼になる個所などの名文――あの名文が、抑もユーゴオである。『新紀元』にたつた一回掲載されて、あとは『山上より』といふ煩悶期を陳じた書簡になつてゐるが、あの第二編目の、勞働者が横濱邊の海近かい工場地帶を彷徨してゐる光景――あすこから、もし先生がゾラに私淑してゐたとすれば、『ジャーミナル』が展開さるべきであつたのだ。あすこから『ジャーミナル』に展開しなかつたことが、既に、社會主義か宗教か、物か心か、靈か慾か――と、在來まで混和されてゐたものが分裂した最初の現象のやうに思ふ。これはかへすがへすも日本の文學にとつて惜しい手ちがひのやうに考へる。

もし假りに私がポール・ブールゼエのやうに、神經質な心理分析を逞しふしたとすれば、先生の孤獨を慕ふ氣持の中に無數の非プロレタリア的傳統が巣食つてゐたのでないかと思ふ。尤も、文學者はどんなか場合に、獨りでゐないと仕事は完成されまいが、先生のときには孤獨を求める心は、自然との融合といふ道徳的にして耽美的な要求とも變じてゐたし、それに、宗教といふものは兎もすると淋しさを美化するものである。德富蘇峰氏が、人も知るとほり『國民の友』を旗じるしにして九州を乘り出し、自由民權平等の思想を鼓吹し、それが中途でぐらりと變節したといふことに、先生との不和の樞軸があつたと假定すれば、先生自身も、やはり、『黒潮』の第二編に於て、社會改革者としての坐せつを見てゐるわけである。更らに晩年に於ては、日本主義をさへ振翳すに至つたのである。むべなり、兄弟、病褥に於て最後の握手をしたとは。かういふ點は遠慮のない處、師と雖も私は、先生の美しい本能が人類に貢獻するといふ努力を營んでゐた限り、一つの錯誤として指摘しなければならない。そしてそのために、先生の偉大さはコムマ一つ減るわけのものではないのである。何故、ゾラと共に『三都』まで、ドレフユウーズ事件まで漕ぎつけなかつたか？　さうすれば私は、ゾラのやうなメダンに於ける贅澤な生活をもゆるさうに。やはり、先生は横井小楠の甥（？）であつた。ああ、傳統――

晩年に於ける先生の自傳的作物の全部は不幸にして拜見してゐないが、「黒い眼と茶色の眼」以後は、あゝいふ自己描寫を試みられたのち新しい首途をその上に發見しようといふ意圖が動機となつてゐたのではないかと思ふ。穿ち過ぎて穿ち及ばざる妄評であるかも知れないが、その點、ゾラが晩年にいたればいたるほど探險器を擴大したのと對比して、先生の「日本人」らしさがあらはれると共に、科學を選ばれなかつた第一歩からしての當然の踏み出しであり歸結であると思ふ。その代り、ヴェテズイリーの書いた『エミール・ゾラ』に信憑すると、むしろ冷淡でそつぽう向きのゾラにくらべて、最後まで熱と涙と愛に固まつてゐたのは、先生である。

最後の訪問

粕谷の日當りのいい椽側は、春も冬も暖かく亢い脱化の樂にはなつかしい落葉が吹き溜まつてゐた。荒れたるがままに、庭の内外の雜木林には、先生そのもののやうな自然と靜寂とが漲つてゐた。京王電車のステーションから降りて、村路の牛輪を目途に這入つて來る、竹藪の多い陰つぽい、いつも泥濘になつて野菜車や肥料運搬車の轍の痕の食ひ込んだ、あのたらたら降りの小徑、あすこまで來ると、私の胸は子供のやうに騷がしくなるものだつた。無雜作な押扉が一枚あつて、門が閉いてゐることも同じく閉ぢてゐることもあつた。隱遁——と云つても、そこは活氣ある、快活な笑ひの潜んだ牧歌的な家であつた。

しかし、最後に先生と永遠に相見ざるべく御會ひした日は、すべてががらりと變つてゐた。第一に、愛すべき便宜な椽側であるが、それが概ね雨戸によつて獨占されてゐるがために憎むべき、一台の自動車がものものしく椽の横に、小鳥の巣を踏みくだいて横はつてゐた。私は、ボンカンだとかメロンだとか、かさにして朱欒の鉢一つにやつと載る位の手土産を持つて、むしろ自分の訪問がわるいことのやうに思ひながら門口に立つた。大概締まつてゐる押扉が、その日に限つて、だだつぴろく開いてゐた。台所に立つ二三人の女の人達が、怪訝そうに私の顏を見て、見たあとですぐ忘れてしまつたやうに物一つ云はない。急激にやめた步行のために、私の顏が汗ばむで赤くなる。返事のないのに、すこしむつとした感情が絡らむで、益々それが赤くなる。

——奥さんにでもよろしいのですから、ちよつとお目にかかれませんかしら？——から云つて名刺を、女の一人に手渡して、私は錆びた上り框に腰をおろしてゐる。

奥さんが來られた。いろいろなことが一時に喉へ痞へる。やつと一と言だけ云ふ。奥さんの瞼は、眼鏡の奥にかすかに潤んで、非常な努力で閉ぢようか、そのままにして、涙をはふり落とそうかと迷つてゐるやうに見える。

——まア、お這入りなさい。實は今日はすこし調子が良過ぎて、朝からあんまり御客樣と御話ししたもんですから、午後から發熱がありましてね、御醫者さんは迚も面會——などの容態ぢやないと申すんですが、貴方のことをちよつと申しましたら、是非會ひたいと仰有る（たしか奥さんは敬語を使はれた）んですの。……それもほんの一分間だそうです。どうしても御醫者さんは、それ以上はいけないつて仰有るもんですから」

私は縁側で、危篤の新聞を見た當然の結果として、先づ大體の經過を御訊ねする。それから、建て増された方の先生の書齋へ、長い鍵の手に折れた廊下を歩るいてゐた。廊下といふものは、實に長いものだと、このとき思つた。そして、どの隅にも、番兵のやうに、きつと女の人が一人や二人は直立してこちらを熟視してゐないことがないやうな、一種の監守狀態に置かれた自分を意識した。ぱつと濃艶な紅絨緞を敷きつめた、重苦るしい部屋へ這入る。四五人の婦人が、何かの式場でもあるらしく立つてゐる。横の大きい卓には、正木不如丘氏らしい紳士が、卓上電話に近い方へ體のポーズを定めてゐる。私はすこし怖氣がついた。それは、もうすこしアツサリした光景を頭に描いてゐた罪であらう。プロレタリアの第二の本能として、着物を恥ぢた。しかし、第一の本能が、そんな浮はついた氣持を容赦なく打消す。病室は緞子のカーテンのむかうである。

私は、先生の前へ立つた。先生は大型なダブルベッドに、めちやめちやに毛布の襲撃にあつて苦るしんでゐるやうに見えた。その實、何枚の毛布も掛つてゐないのだが、ベッドの木材がさういふ感じを與へた。花がある。花があるな、と氣づく。

先生はぽつかり眼を開いて、こつちへ向きなほつた。自ら『能吉』と云はれるほどの濃い髯が、やや霜枯れて、それでも、蒼白く膨くんだ顏面を擁ひきれずに伸びてゐる。眼鏡は外づして居られた。恐らく先生の黑つぽい眼鏡を外づして居られるのを見たのは、これで二度目であるやうな氣がする。尠くとも、それは最後であつた。マルクスが、アグネスやエヴエリンなどといふ娘達に圍まれて亡命の旅路で失くなつた——その光景がふつと頭へ浮んで來る。

私は思はず泣き出しさうになつた。

『先生、もつと生きてゐて下さい！』

大きい聲になつた。先生はじつとキヤメラのフオーカスを定めるやうに、圓るい洞察的な眼を私の上に置かれた。

『はい、生きます。死なないと決心しました。生きますとも！』

『さうですか、有難う！』

しばらく私は默り込んで、立ちはだかつた。そのとき、はじめて、ベッドの隣に二人の女性のうづくまつてゐたのに氣がついた。看護婦であらう。絕對に何の物音もしない。眞空になつたやうな部屋である。突然、私は、差し伸べようとした手を自制した。病體を動かしてはいけないのであつた。先生は大きくうなづいた。そして、微笑をさへ造らうと、顏筋の一部が動いた。

『——ぢや歸へります。長く御邪魔しちや、御惡るいのですから。』

私は言葉が終るや否や、わき目も振らずに次の室を出た。わき目をしたら、ぼろぼろと淚がこぼれるからである。それを見られると——男といふものの鬪爭的な本能からが、女の前で恥をさらしたやうな氣になるからである。だが、恥をさらしても、私はもつと泣くべきぢやなかつたか？歸へり際に、私は奧さんに、妙なこと、ほんとに妙なことを云つたものだ。

『どうぞ、先生が快くおなりになつたらしらせて下さい。』

そして、伊香保でこの十八日に死去されても、まだ奧さんからは通知がない……。（信州にて）

懺悔僧としての徳富蘆花

賀川豊彦

一

逝く日が近いとは氣附いてゐたが、彼の心を靜かな森の外側に引き出さない爲に、私はわざと伊香保まで行かなかつた。逝いたことを新聞で知つた私は、蘆花氏の氣持を思うて泣いたのであつた。

蘆花氏は、一生のうちに、何人位の人を愛したか私は知らないが、嚴格なピユリタニズムを持つた彼の良心は、さう多くの人を愛し得なかつた。その中にも私が彼に愛せられた一人であることを知つてゐるので、然かし私の顏を度々見たかつたらうとは考へてゐたものの、森の靜かさに浸つて居た彼をさう屢々攪拌するのは氣の毒であつたので、度々は會ひに行かなかつた。然し、蘆花氏は、私の出してゐる個人雜誌「雲の柱」の愛讀者で、隅から隅まで讀んでゐられるのには、私も恐縮した。

危篤の傳へられた夏の初旬の或日のことである。夫人から私に會ひたがつてゐるといふ言づけがあつたので、私はあの靜かな樅林の細道をつたふて柴の折戸を叩いた。

寢てゐるだらうと思つた私には、元氣よく椅子にもたれて、起き上つてゐる蘆花氏を見ることは、全く不思議であつた。蘆花氏は直ぐ信仰の話を私に語り初めた。

「もう神に賭りました」

さう彼は大きな眼を光らせて私に云うた。

それはその前の月に、神の賭博者といふ題で「雲の柱」の卷頭語を私は書いた。そのことを彼が云うて居たのだ。彼は私と一緒に祈つた。足が德利の樣にはれ上つて居た蘆花氏は、私が祈つた時に大きな聲で「アーメン」と附加した。

「富士」の話が出た。私は今後病氣が善くなれば富士の頂上を究めたものは降りて來ねばならぬことを彼に話した。

「さうだ、さうだ」

と彼は頷いた。彼が逝く前、數年間の間に彼は贖罪といふことを屢々私に繰り返した。彼は色々な形でキリスト教の意味を瞑想して居た樣である。勿論彼のキリスト敎は、民間のキリスト教とは大分距離があつた。彼の純な非妥協的な氣持が、村で酒を賣り乍ら教會に出席

する或人達と相容れなかつたことは當然である。彼は、伯母にあたる矢島楫子でさへその點には容赦しなかつた。彼は餘りに正直で、餘りに神の爲には馬鹿者であつた。彼は、彼の五つの時に起つた出來事の爲に、殆んど常人には解せられない精神的不具者になつて仕舞つた。それは「新春」のはじめを見ればよく解る。恐らくは日本で書かれた最嚴格な告白文の一つは「新春」の最初の數十頁であらうが、私は餘り氣の毒で一々彼の胸のうちを訊き正す勇氣を持たなかつた。彼に嚴粛な神の姿が濃厚になると共に、彼はあの新春の告白錄に出てゐる樣な影が彼の全身をおほひかくして、彼を死の踵に追ひやつた。

彼は一生を懺悔僧として送つて仕舞つた。世間では彼を我儘者と呼び、癇病者と云ひ、凡ゆる言葉で彼に惡評を浴せかけたが、五つの時の出來事を眞面目にとつた彼は、父の死にすら、お葬式に出られなかつた程悲しみ悶えた。

兄貴に對して、色々な不滿足な點もあつたらう。然し、私が見た所によると――少しは間違つてゐるか知れないけれど――彼が最も不滿足だつたのは彼自らに對してゞあつた。そしてその次は彼の母に對してであつた。そしてその次に彼の母をさうした間違に導き入れた父に對して彼は不滿足を感じてゐた。兄貴に對する不滿足の如きは、彼の魂にとつては、さう大きな問題ではなかつたらう。彼はそれ程野暮ではなかつた。

彼は一生の求道者であつた。そして、彼の不思議な心理を知るものは、キリストだけであつたらう。彼は地上に於ける最大の罪惡に就いて煩悶した。その爲に彼の心は暗くなつた。彼はその爲に父と母との死ぬのを待つて居た。まあ何といふ矛盾した言ひ方であらう。然し彼の五才の時の出來事が、そんなに迄彼を苦しめたのであつた。そして母が死に父が死んだ後に初めて彼は罪の赦されたことを意識し、復活のキリストを見たのであつた。私は、彼程自己に向つて嚴粛な懺悔僧を未だ日本に於いて見たことが無い。一面から云へば彼はキリストを信じ乍らも罪の赦しを信ぜなかつた人間であるとも云ひ得よう。其處に彼の弱味があつた。けれども一面から云へば、其處に人間としての實に深刻な自己内省が彼を支配した。あれ程内側に深く喰ひ入つた峻嚴な道徳律を守つた人間を私は多く知らない。彼は實に寂しい人であつた。餘りに寂し過ぎた。彼は自分が作つたトラピストに自分一人でたて籠つた。あゝまでしなくてもよささうなものだのにと人々は考へたのであらうが、魂の扉の内側を知る人にして始めて蘆花氏の煩悶は讀めた。今時のクリスチヤンにあれ程嚴格な人は少ない。彼は眞個のトルストイアンであつた。いゝやトルストイは性について瞑想しなかつたが健次郎は贖罪に就いて瞑想する程人間の誤謬と良心の戰について瞑想したのであつた。さうした自己内省の領域を知らない人間にとつては、蘆花が新春以後に書いた仕事は少しも面白くなからう。然し、彼ほど正直な嚴格な心理學者は居なかつた。彼は自己を隅から隅まで點檢して新生への勇躍に精神上の努力を拂つた。私が斯ういふ行方をすると文學的に斯ういつてゐるのだと人は考へるかも知れないが、彼の宗教的氣分をよく知つて居る私は、それが理智的にさうであつたことを知つて貰ひたい。

私は、彼が情熱的に、私を愛して呉れてゐることを知つてゐた。何故

年前のことであつたか私は忘れて仕舞つたが、日は確か一月十四日の晩であつた。彼が再度の聖地旅行から歸つて來て間もないことである。彼は、愛子夫人と私が兵庫の湊川敎會で說敎してゐる處へやつて來た。そしてストーヴの脇の長いベンチに夫婦で腰を下した。その頃は未だ日本では婦人が多く洋服を着てゐなかつたから、愛子夫人の洋服姿が眼についた。私はその時迄蘆花氏の顏を十分知らなかつた。それで人の好ささうな米國移民の夫婦者が私の話を聞きに這入つて來たのだと考へてゐた。話が濟んで會衆が去つた後、彼は豫言者の樣に私に近づいて來た。そして

「君は僕の顏を覺えてゐないか」

斯う彼は私に訊ねた。勿論私は彼の顏を覺えてゐる道理はない。明治四十年頃に青山學院の講堂で、黑眼鏡をかけた蘆花氏の顏を遠くから見たことがあつたけれども、その輪廓を私は記憶してゐない。

「君は僕の兄貴の處には屢々行くにかゝわらず僕の處には、何故來て與れぬのだ」

と斯う彼が云ふたけれども私は未だ氣が附かなかつた。そして愛子夫人が「德富です」と云はれたので彼の兄の蘇峰氏とその輪廓に似通つてゐる點のあることを私は發見した。蘇峰氏は私を手引きする樣に一々親切に色々なことを敎へて與れる。あの忙がしい文筆の中に私の爲には六時間も、七時間も色んなことに就いて個人的指導を與へて與れるのであるが、それに引かへて蘆花氏の熱烈なこと、私は初め會つた時には全くど膽を拔かれて仕舞つた。然し私は日本人から歡迎をうけたうちで蘆花氏の歡迎位私を驚喜せしめたものは無かつた。彼は私に飛びついて來て、西洋人がする樣に私をかたく抱きしめ、子供に云ふ樣に私に感謝の言葉を述べて與れた。彼は私の詰らない詩集「涙の二等分」と共に太平洋を東から西に渡つたことを告げて與れた。そしてその場で私に二つの忠告をして與れた。第一は貧民窟を出よといふことであり、第二は餘り苦しい生活をしないで、少し樂な生活をせよと云ふことであつた。そして、私に對する忠告は子供が生れることによつて、守らざるを得なくなつた。妙な關係で私は德富兄弟に此上なく愛せられる樣になつた。然し蘆花氏は私を子の樣に思ふて與れたので、私は色々と思想上のことに就いても議論をした。

二

彼は眞個の意味に於ての藝術家であつた。その爲であつたか彼は隨分世評を氣にした。私の樣に世間の評判を少しも氣にしない人間にとつてはをかしい位であつた。彼は明治四十年頃の若さを何時も持つてゐた。私は彼の自然的作品が非常に好きであると云ふと彼は本當に喜んで居つた。彼は自分の庭の凡ての木に就いて色々面白いローマンスを私に物語つて與れた。彼は全く子供のやうになつて私を歡迎して與れるのが何時ものことであつた。私は粕谷のこはれかゝつた茅葺の家を訪問することを何時も恐れた。彼が私に無理に食物を奬める癖があつたからである。ありつたけの果物と、ありつたけの野菜を私にすゝめた。あんなにして閉ぢ籠つてゐたけれども、新聞をよく讀んでゐるものだから世間の事情は實に細しかつた。作品に對しては實に嚴格で富士などは二年も前に書き上げてゐたにかゝはらず、未だにコツ〳〵

き直してゐた。校正も自分で一人した。それを考へると私の様な大ざつぱな人間は文筆で飯を食ふ資格が無いと何時も考る。

彼は何時も支那服に似通つたボテ〳〵の着物を着てユツクリした生活に浸つてゐた。家具類に對しては頗る無頓着で、雜然として部屋一面に取り散らしてゐた。或人は粕谷の小屋を粕谷御殿と呼んだが、其處は御殿でも何でもなく、彼は實に貧乏臭く住んでゐた。生活様式は疊の上に椅子と寢台を用ゐてゐた様であつたが、再度の聖地旅行から後は百姓もあまりしなかつた様である。話題は彼の兄蘇峰氏の様に豐かではなかつた。蘇峰氏はイギリスの政界の事情などは、日本の政界以上に細しく知つてゐるが、蘆花氏には、そんな知識は勿論無かつた。然し、日本民族を愛する點に於て、蘆花氏と蘇峰氏とどちらが強かつたかと云へば、私は弟の方が感情的に強かつた様に思ふ。「大平洋を中心として」の編輯の如きは全く蘆花氏の此の氣持で編輯されたものであつた。私は二三時間もそれに就いて蘆花氏と「離れ」で議論したことがあつた。彼は詩人であつただけに實に極端な議論を吐いた。それが子供らしくつて、私には何時も面白かつた。議論に疲れると

「もう已めて寢かうね賀川君、見方の角度が違ふのだからね」

と云はれるのが何時ものことであつた。

三

私は屢々彼を社會に連れ出して、「新紀元」時代の若さを彼に與へ様と努力して見た。さうすることが彼の藝術家としての生命にとつて新らしい刺戟を與へることでもあると考へた爲に。然し彼はそれを忌み嫌つた。彼は始めて私の「家庭科學大系」に「アダム、エバ論」を書いてやると云ふ約束をして與れた。恐らくは彼自らの氣持としては私の様な雜駁な生活をすることが、如何にも氣持惡く考へたものらしい。彼は、或創作に專念し出すと、それを完成する迄、他念なくやり遂げる藝術的良心があつた爲であらう。私の誘惑に決して耳を貸さなかつた。それで私も敢てそれを繰返さなかつた。彼は靜かに、彼の家を取り圍む櫟林の精にきゝ入つて、武藏野の自然に浸つた。彼は自分の庭に生えて居る一本の雜草すら刈りとることを忌み嫌つた。それ程迄、彼は自然を好愛した。恐らくは、愛子夫人の次に彼を慰めたものは、彼の家を取りまくあの美しい雜木林と雜草であつたらう。

四

蘆花氏の宅を訪れると何時も必らず口癖の様にきくことはアダムとエバと云ふ言葉であつた。彼はその言葉を詩的に用ゐた。彼は男女二つを合して完全な人間になれることを私に主張した。最初のほど、私はその言葉を、輕くうけ取つてゐたが蘆花氏はそれを、復活した人間の姿としてうけとつてゐることに氣がついて、何時もその言葉に領いたのであつた。彼はその長い煩悶と、自己批判の後に靈肉合致の新生命を、眞裸のアダムとエバの中に發見した。彼の云ふアダムとエバは創世紀のアダムとエバではなくして、復活のキリストを見たアダムとエバであつた。彼の煩悶を知らない人間には、實際蘆花氏の云つたアダムとエバの言葉の如きは本當に無意味である。今日の時代が餘りに宗

教から遠ざかつて行つた爲に、蘆花のターミノロジーが如何にも變にきこえるけれども、それは決して彼の哲學ではなくして、彼の體驗がさうした氣持に導いたのであつた。

新しきアダムとエバの結論に達した蘆花氏は、彼自らの武藏野のエデンに於ては非常に幸福な生活を送つた樣であつた。彼はうまいものを食ふ工夫も知つてゐたし、さう私の樣に月末の米代にも困る樣なことは無かつた。然し、女中は餘りに寂しいので相當に困つてゐた。

蘆花氏は「富士」が完成する頃藁小屋を破壞して、洋式の建物を一新造り、その屋根で星を研究するのだと私に家の設計の話迄語つてゐたが、とう〳〵家を改築しない前に彼は、彼の云ふ天の親爺の處に歸つて行つた。

彼が植えた樫はもう直徑一尺ばかりになつて居る。「みゝずのたわごと」に出てゐる石地藏は相も變らず南向きに据ゑられて、武藏野の春秋を樂しんでゐる。私の爲に書いてやると云つた「アダム、エバ論」を彼は書かずに死んだ。彼は今靜かに彼が曾つて愛した櫟林の間に眠つてゐる。然し私は近年著しく發展して行く大東京の勢力が何時迄その櫟林を靜かに美しく保つか疑ふ。恐らくは、こゝ數年を出ないで、上高井戸村から千歲村にかけて嫌なトタン張りの家が澤山建つて行くことであらう。

その嫌なトタン屋根を見る前に、日本の大きな自然詩人は地上を去つた。彼の葬式のある日に私は播州印南郡の村々を驅けづり廻つて既にくづれ落ちて仕舞つた農村の美を、もう一度復活させ樣と聲をからしてゐた。その日私は日本最初の普選に村の無產黨を支持して居つた。それは彼に對する私の最大の弔意であつた。その日の私の演說は臨監の警官によつて中止を命ぜられ、私共の同志は、十數名警察に呼び出されて、取り調べをうけた。さうした瞬間に私は、靜かに眠る蘆花氏の柩が土に埋められることを記憶せねばならなかつた。

「賀川君餘り澤山な仕事をしないで、もう少し樂にやり給へ」

さうした熱情の籠つた彼の忠告が今猶私の耳の底に殘る。恐らくは彼が櫟林の中に眠つても彼は私の無產運動を土の下から支持して吳れてゐるであらう。私はそれを信じてゐる

健次郎先生臨終記

附、德富兄弟離反の顛末

石川六郎

德富健次郎先生の臨終の模樣を書くには、どうしても德富兄弟疎隔の事情から筆を起さなければ、了解が充分でないと思ふ。私のこの一文は、まづ最初に、德富兄弟の親疎幾變轉した顛末を叙し、次に六十翁の弟と六十五翁の兄との泣き笑ひの再會の場面、第三に、死床に尚且つ愛の苦鬪を戰ひ續けた健次郎先生の臨終の光景を有りの儘に物語らんとするものである。

兄弟疎隔の事實

德富兄弟離反の第一頁――健次郎先生が猪一郎先生に、即ち弟が兄に最初に絶縁を宣告したのは、明治三十六年一月、『黑潮』の單行本の卷頭に揭げた「告別の辭」であつた。當時それは名文として天下に鳴つたもので、兄の名聲を低めたか否かは別として、弟の名聲を高むるに與つて力あるものであつた。

……余は久しき以前より我等の傾向の次第に異なるに氣づきたり。而して此相違は實に氣血と共に生れ出でたる先天的相違なるを認めたるなり。余は此が爲めに久しく煩悶したり。……夫れ人の運命は已に胎内にあつて定まる。松子は松となり、槲子は終に槲とならざるを得ず。主義も同情も要するに自家發展の現象のみ。是故に強き君は自づから力に同情し、弱き余はおのづから弱きに同情す。複雜なる性格の君は、世に處して婉曲を辭せず。單純の余は偏に直截を好む。經世家として君は事功の上に立つ。折衷讓歩は事を爲す者の金誡、君が一隻眼は常に利理の抱合點を離れず、君が眼中より見れば文學の如きは唯經世の一手段のみ。思想界に住む者は枉げざるを以て骨とす。文學に籍を置く余は自づから文學の獨立を唱へ、美を通じて眞善域に彷徨せざるを得ず。即ち經世の手段に於ても、君は國力の膨脹に重きを置きて、帝國主義を執り、余はユゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の流を汲むで人道の大義を執り、自家の社會主義を執る。余は決して君を非とし、自ら是とせず。眞理の山には峰多し。君は彼峰に立ち、余は此峰に立つも、畢竟山外に立つにはあらず。……事態已に斯の如し。余は恩義の重きが故に、何時までも君が旗下に逡巡す可き理由あるを見ず。假令君憐むで余が愚を容れ、余強いて國民新聞の一隅に寄居するも、終に是れ何の要ぞ。若し余が書

にして君を累するあらば、君に背くなり。若し君が欲する所に従ふて余が説を枉げなば、余は自ら欺くたり。若かず相分れて、おのおの其道を行かむには。兄弟牀を對するも、夢は東西に飛ぶ。烏鵲今宵一枝に棲むも、明朝は南天北地の身なり。骨肉は情なり。傾向は天なり。各賦命に従ふて、自己を發揮せむのみ。湘南の双親老いたまへりと雖ども、必ず不肖を以て余を責め玉はざるを信ず。……

この告別の辭は、國民新聞社を脱し、兄の膝下を去ることを聲明したもので、もとより兄と絶縁し、全く交際を絶つといふ意味でもなく、又その理由もないのである。併し事實は絶交であつた。三十七八年戰役の頃、健次郎先生が黙然顧みる所あつて猪一郎先生の所へ親しく詫びに行つたまでは、兩家の交渉は全く斷えたのである。

表面に現はれた思想傾向の相違、主義主張の懸隔以外に、當時兄に對する弟の不滿の頗る深酷なものゝあつたことは、健次郎先生夫妻が後年出版された『富士』第二卷(大正十五年二月)に明記されてある。猪一郎先生は『富士』を通讀されて居らぬやうであるから、或はこれが初耳で、その意外に驚かるゝかも知れぬが、それには斯う書かれてゐる。

熊次(健次郎)は駒子(愛子)を妻にして、もう六年も一處に棲んで居る。戸籍面も、人前も、立派な妻である。然し駒子が十分わがものであるとは決して思へぬ。自分にはひけがある。駒子には隔がある。而して周圍の引力が彼女に働く。心を彼女に寄する男、牽く男、牽かうとする男はいくらも居る。第一は兄である。兄が競争者であるは心外だが、事實である。「時」を云へば、熊次より二年も前に兄は駒子を識つてゐる。力を較ぶれば弟は兄の足下にも寄り付けぬ。正式に駒子が熊次の妻であり、兄に現在妻子がある、なんかは殆んど問題でない。自分を信じ得ぬ熊次は、勿論兄も信じ得ぬ、駒子も信じ得ぬ。すべてがXであつた。熊次は駒子が自分を愛せぬとは思はぬ。然し兄と駒子の間に一縷の脈が通ふてゐる事を、最初から感づいて居る。それを熊次は奈何することも出來なかつた。去年の夏の頃、駒子は寅一(猪一郎)の夢を見た。熊次と駒子は臥してゐる。と思へば何時の間にか熊次が寅一に化つてゐた。駒子はそれを言はなかつた。然し熊次はそれを感じた。兄が來ると、駒子が強くなつた。兄の前では駒子の素振りが變つた。熊次の前でいつも小さくなつてゐる彼女は、兄の前では夫につんけんと大人ぶつた。駒子はまた熊次が何故兄の前に小さくなるかを解せなかつた。親兄弟の一座に、熊次が片隅に小さくなる卑屈を不快に思つた。それで殊更出しやばるやうにするつもりでゐた。それがますます熊次を不快にした。夫を易く扱ふ妻を、兄の前では忍んだ。あらめ屋のさし向ひでは、祭聞にの術嚼をせずには措かなかつた。……兄と熊次夫妻と熊彦と舟で小鯛を釣る。反對の側に座つて釣る兄の糸と駒子の糸が水中で絡まる。何でもないが、やはり熊次には不快であつた。……隣宅の庭で兄が駒子を人に紹介して、「これは私の家内——否、弟の家内で」と口輕く言ふのも、熊次の胸を刺す一言であつた。……兄が來ると不快になる熊次の素振は、人目にもついた。其前、岩原の姉が居る頃、熊次の氣分が殊に惡かつた。姉が兄に日ふた。

「熊次さんは大變氣分が惡いやうですね。何とかしてやつたら如何です？」
「何が氣に入らんか、些とも分らん。」
兄が答へた。
緞宅の庭の暗に立聞く熊次は罵りたかつた。
「白ばくれるな。胸に聞いて見ろ！」
人には言へぬ不快を懷いて、熊次は追々欝憤の昂ずるを奈何することも出來なかつた。恩義は恩義としても、不快は恩義の秤を蹴つた。瞋恚の渦まく頭に浮ぶ自己は、負債者よりも貸し越してゐる自己であつた。熊次は一々はつきりとそれを列ぶる事は出來ぬ。然し夥しい無理枉屈を彼は感じた。何かは知らぬが、與へらるべきを與へられず、酬ひらるべきを酬はれず、欲せざるを強いられ、播かざる所に刈らるゝわれを感じた。自由になりたい。然し見えざる鐵鎖が縛つてゐる。尋常に平にありたい。然し其處には自然のやうになつてしまつた無理がある。熊次は此頃口癖のやうに曰ふた。
「憐愍の、同情の、そんなものは、俺は要らぬ。俺は Justice を求める。」
Justice の何かは、はつきり口に出しては言へなかつた。然し彼は Injustice を感じ、Justice を求めた。求むる自分を決して無理とは思はなかつた。然し兄である、弟である。父母から分れた同じ血である、骨である。自由になりたい。然し見えぬ鐵鎖が縛つて居る。悶へ出しては、氣も狂ふばかりもがきにもがいた。駒子は苦しむ夫を眼の前に見た。然し奈何する事も出來なかつた。それは女の駒子が知らぬ男の惱みであつた。……(『富士』第二卷三一三―三一七頁)

たとへ口には出さぬにしても、兄に對して、「白ばつくれるな、胸に聞いて見ろ！」とは、何といふ激しい憤怒の表白であらう。これは先生三十二歲、結婚後五年の事であるが、併し兄に對する嫉妬の芽は、結婚して一月とたゝぬに萠え始めてゐた。
……熊次は駒子に對する兄の愛の日に日に昂ずるを感じた。……熊次の嫉妬の眼は駒子を見る兄の眼の異樣な輝きを決して見落さなかつた。……(『富士』第一卷一六七頁)
然で第一に問題になるのは、『富士』が果して事實物語であるか、否かといふ事である。一體先生の著述は、そも〳〵蘆花生の昔から、大體左の五種類を出でないやうである。
(一)客觀小說『不如歸』『黑潮』『寄生木』
(二)自傳小說『思出の記』『黑い眼と茶色の目』『富士』
(三)雜　　文『自然と人生』『靑山白雲』『靑蘆集』
(四)旅 行 記『順禮紀行』『死の蔭に』『日本より日本へ』
(五)傳　　記『ゴルドン將軍傳』『トルストイ』『竹崎順子』
思ひ出す儘に數へて見たので、先生の著述がこれに盡きるのではない。客觀小說と云つても、滿足なのは『不如歸』位のもので、『黑潮』は斷片であり、『寄生木』は靑年軍人の手記から生れた特殊のものである。結局先生は自傳小說家であつて、多くの旅行記も、小說ではないが自傳の一部には相違ない。思ひ出し〳〵書き綴らるゝ記憶力の絕倫なるには驚嘆の外はない。それは恐らくは先生の一生が、幼時より結

婚生活を通じて、恰かも空蝶の殼の中の如き生活であつたからでもあらう。餘事はさておき、自傳小說の中でも、『思出の記』だけはやゝ毛色が變つてゐて、自傳と空想とが適宜に調合按排されたものであるが、他の二作は純粹の自敍傳である。即ち『黑い眼と茶色の目』は同志社時代の初戀を書いたもので、稿を改むること實に六回に及んだと聞く。而して『富士』に至ては、先生夫妻の結婚生活の一片の薄衣をもおほはない赤裸々たる記錄として、夫婦互に筆を執つたものであつて、記述は悉く眞實であり、自己の思想感情を少しも掩ひ隱すことなく吐露したものである。強いて眞實ならざるものを求むれば、人名が變名であることだけである。多少の記憶違ひがあるにしても、文字通り夫妻共著であるのであるから、それが有るにしても稀有であらう。それから、『富士』執筆の動機として聞いた所では、夫妻愛、夫婦一體が人生の根本である、獨身で死んだキリストの教にはまだ足らない所がある。夫婦愛の完成は我等二人の使命である。夫婦一體の道に進むまでには二人の間に多くの試煉があり、苦鬪があつた。又互ひに殼を脫することが出來なかつた。二人はすべて懺悔し合はなければ不可ない。綺麗に殼をぬがなければ不可ない。丸裸にならなければ不可ない。かくて『富士』は懺悔錄として世に出でたのである。それには愛子夫人が處女でなかつたことも表白されて居り、健次郎先生が性の衝動に打ち負けたいろ／＼の事實も表白されてゐる。それのみか、兄の秘密をも、代つて懺悔するつもりか、憚からず書いてゐるのである『富士』が正直な、赤裸々な事實物語であるといふことには、一點の疑をはさむ余地はないのである。

茲で私自身の立場を明かにする必要が生じたのであるが、何れも大恩下の文豪たる兄弟兩先生に對して、等しく師傅を辱うし、甲乙なく敬意を表することを光榮とする立場にあるのである。といふのは、私は多年國民新聞社に在つて猪一郎先生に師事し、その恩遇を荷つてゐたものであるし、私の妻は健次郎先生同夫人の膝下に子の如く愛せられ、兩先生の仲の睦まじかつた際に、兩先生夫妻の勸奬媒酌によつて結婚した次第であつて、兩家を均しく第二の親とも難有く思つてゐるのである。しかしそれは丁度夫婦仲のよかつた時に出來た子供が、夫婦別居の破局に際してはみじめな立場に置かるゝと同樣、兩先生の久しき疎隔は私共夫婦に取つては悲慘そのものであつたのである。私共のなし得た最善の努力は、親しく兩家に出入した場合、勉めて一方のよき意志、よき消息を他方へ傳へることであつた。さうしてその反對の報導を傳へることを避けた。この微意が兩先生の和解に聊かの貢獻をも主張し得るほどのものでないことは勿論であるが、自ら兩先生の性格、境遇、周圍の事情を知り、從つて疎隔の眞相をも幾分摑み得たやうに思ふのである。猪一郎先生が弟嫁に横戀慕したといふやうな、『富士』に記されてゐる事實の全く無根であらうことは、苟くもその人を知る者の悉く一致する所であらねばならぬ。これは全く濡衣である。かゝる公表は、兄先生に取つて如何に迷惑であり、片腹痛くあらうか、誠に笑止千萬の事と云はねばならぬ。健次郎先生にはかゝる「愛の錯覺」が屢々行はれたといふこと、殊に臨終の當日にすらこれが行はれて六十翁の死床の人が、夜の目もねずに看病しつゝある五十六の老妻に對して、その愛情を疑ふやうな嫉妬の言を發したといふ事

嫉さへあつたのである。(この事は後段に詳記する)かく言へば人は健次郎先生を以て極端なる嫉妬狂、若くは戀愛患者と即斷するであらうが、暫らく私の説明を聞かれたい。先生の性格は一言にしていへば all or nothing である。世を擧げて Something is better than nothing といふ格言が幅を利かしてゐる中に、自己の一本調子を把持し、一塵をも止めざる清純を欲したのである。(前段『告別の辭』參照)白か然らざれば黒、その間の中間色を許さないのである。先生は徹頭徹尾直情であり、潔癖であり、偏狹である。六十の死に至るまでその通りであつたのは、實に世にも珍らしい性格といはねばならぬ。殊に夫婦間の問題に於ては、先生は一毫も假借しない。少しでも疑はるべき形跡を存することを許さないのである。一點の曇りなき明鏡を求めたのである。曇りのある鏡は寧ろ叩き壞さねば措かなかつたのである。『富士』を書き初めて、夫婦道の建設を志したのも、純眞なる all or nothing を徹底せんとしたのである。兄と妻との親しみに就ても、先生は地位をかへて兄の身になつて考へて見るといふやうな廻りくどい事を敢てしないのである。唯だ直ちに親しみそのものを不都合とするのである。嫉妬の情が内に燃えることを如何ともすることが出來ないのである。尚その外に、兄弟の間柄に於ては、先天的に弟には變屈さ、内氣さが加重され、反抗と親愛との解き難き纏れの中に、世には多くの兄弟悲劇が醸されるのであるが、私自身また弟なるが故に、弟なる健次郎先生の心事に共鳴する點が少くないやうに思ふのである。

理窟はさて措き、話は前に戻つて、徳富兄弟の疎隔——正確に云へば兄に對する弟の離反には、その思想傾向の相違以外に、愛子夫人を中心とした深酷な感情の乖離が深く蔵せられてゐたことを私は信ずるのである。さて最初の義絶後の健次郎先生は『黒潮』の自費出版などして居たが、越えて二年、日露開戰となり、世を擧げて戰勝を謳歌した中に、平和主義の先生は衷心安からず、自ら進んで非戰論を唱へ、國際平和の福音を高調するにしても、自ら顧みて、骨肉の間柄が平和でないといふことは、純なる先生に取つては忍ぶことが出來なかつたのである。そこで進んで猪一郎先生を訪ねて、これ迄の不悌を詫びたのであるが、その時の猪一郎先生の態度が、さうした場合に世間一般の兄貴が示すであらう鷹揚さ無頓着さを裝うて、極めて輕く「マア好いさ」といつた程度に答へられたので、兄貴から叱られもし、同情されもし、シンミリとお互の胸をたち割つて談し合ふことを豫期して出掛けた健次郎先生は、頗る失望して我家に歸つたのである。失望はしたが、併し兎に角兄弟の交りはこれで復活したのである。以上の記述だけに依つても知らるゝ通りに、徳富兄弟の永き不幸なる疎隔の唯一の原因は、單なる理解の不足に歸着するのである。別の言葉でいへば、お互に調子を合せることに失敗したのである。純粹直情の健次郎先生はしばらく措き、世の甘酸を知り悉し、迂餘曲折の妙訣を解する猪一郎先生にして、弟の心を酌み、若くは嚙みしめて味はうことに成功せられなかつたことは、何とも殘念な事といはねばならぬ。猪一郎先生の如き、よき子であり、よき父であり、よき夫であつて唯だ一つよき兄であることに缺くるが如く思はるゝのは、天が人に完璧を許さない一例ともいはゞいふべきであらう。

越えて四年、明治四十一年の夏、猪一郎先生の末女である幼なき鶴

子さんが健次郎夫妻の養ひ子として千歳村に引取られた。この時も猪一郎先生から「嫌になつたら何時でも返したまへ」と云はれ、健次郎先生は頗る不滿だつた。それは、何故「一旦引取る以上は飽まで責任を負つて立派な人間に育て上げて貰ひたい」と云つて呉れないのだらうといふのである。

大正二年の憲政擁護騒ぎに國民新聞社は燒打ちを受け、猪一郎先生は社内に籠城して苦闘した。健次郎先生は直ちにこれを慰問し、餅をつかせて持參し、兄弟手を執り合つた光景は他の見る目も羨ましいほどの骨肉の愛に充ちたものであつたといふ。斯くて兄の苦闘に一臂の力を添へるために、絶えて久しき國民新聞紙上に長編小説の筆を揮ふことゝなつた。併しその素晴らしい意氣込にも拘らず、僅か十數回を續けたばかりで、突然筆を投げてしまつたのである。これが小説『十年』である。この小説のために夥しき廣告宣傳をした國民新聞社の損害は輕少ではなかつた。然らば何が健次郎先生をして『十年』を中止せしめたかといふに、國民新聞社から先生の手許に原稿料を屆けたことがその原因であつたのである。原稿料を支拂はねば濟かぬといふ世智辛い世の中に、先生の場合は全くその反對だつたのである。即ち先生は、兄の新聞の苦しい立場に同情し、幾分でもそれを助ける意味で氣持よく筆を執り初めたのに、世の文士並に先生を遇し、折角の先生の眞意を沒却せんとしたことを憤つたのである。併しこれも猪一郎先生の側から考へれば、新聞に執筆して呉れることが非常なる援助である、相當原稿料を支拂ふことは寧ろ禮儀であると信じたに相違ないのである。何はともあれ、兄弟の間で、口に出して云はなくとも、お互の心意氣は呑込めさうなものと局外からは考へられるけれども、兩者の心持の喰違ひは如何ともする能はず、折角親しみが熱度を加へたかと思へば、すぐに又背馳するやうに運命づけられてゐたといふことは、何といふ悲むべき事實であらう。

鶴子さんを養女に貰つてから、健次郎先生夫妻の煩悶が一層繁くなつたといふことは、何たる運命の惡戲であらう。即ち愛子夫人がこの子をわが子の如く愛すれば愛する程、夫の心を暗くする。それは鶴子さんを愛することは、取りも直さずその父なる猪一郎先生を愛するといふ結論に導くからである。愛すべき者を愛し得ない惱みが續いた。

ある時、朝鮮なる猪一郎先生から二枚のはがきが千歳村に屆いた。一枚は健次郎先生へ、他の一枚は愛子夫人と鶴子さんとの連名であつた。何故に健次郎愛子を連名としないのか。愛子と鶴子とを連名にしたのは何の意味か。健次郎先生は怒りの絶頂に身を震はした。さうして愛子夫人に向つて冷然と曰つた。

「どうだ嬉しいだらう!」

健次郎先生がフッツリと兄の家に出入しなくなつたのはこの頃からである。その年(大正二年)秋、兄弟が偶然朝鮮京城で邂逅し、兄は弟の案内役を勤めたりして心ゆくばかり世話をしたのであるが、その時袂を別つて以來、十有五年の久しき疎隔が續いたのである。この時の絶交は、弟から何の宣告もなく、猪一郎先生はその理由がわからず、五里霧中の感に堪へなかつたさうである。たゞ前に述べたはがきの一件や、次の一事實等より推測して、恐らくは三十二年に逗子に於て高潮した兄に對する嫉妬憤懣の激情が、大正二年の朝鮮の旅に

際して再燃したものと思はれる。朝鮮での一事件といふのは、兄弟が肩を並べて清涼里を談笑しながら散歩してゐた際、いつも慎み深くのみ振舞つてゐた愛子夫人が、西洋婦人のやうに快活な氣輕な態度を執つて見たい氣分になり、うしろから突然兄弟の肩を並べた間に挾まり、話の仲間入りをした所が、健次郎先生は見る〱顔色を變へ、わざと自分の歩調を遲くして默してしまつたといふ事實である。此時の旅行といふのは、先生が煩悶の極死地を求めて滿洲朝鮮までさまよひ歩いた『死の蔭に』の旅行であつた。旅行から歸つて逗子に兩親を見舞ひ、

「乃木さんの死をどう思ひますか」

と藪から棒に質問して兩親を面喰はせたが、

「死ぬのは敗北たい」

との兩親の一致した言葉に、先生の心機一轉したやうに聞いた。

翌大正三年の五月、父淇水翁が重態となつて上京したけれども、健次郎先生は「斷じて兄の家には足ぶみをせぬ」と云つて、見舞に行かなかつた。迎へが櫛の齒を引くやうに青山から千歳村へ飛んだけれども、頑として應じなかつた。結局—鶴子さんを代理として見舞にやつたが、迎へに行くまで歸るなといふ申渡しは、そのまゝ兄夫婦の手許に送り返す意味であつた。それでも催促が五月蠅いと云つて黑原へ逃げた。これは「兄が自身で迎へに來たら行く」といふことであつたらしいけれども、固よりそんな氣持は通ずべくもない。かくて先生は、父の死床を見舞はず、看護せず、臨終にも顔を見せなかつたのである。しかし此の不孝なる子は、その後三年間門を鎖して、父の喪に籠つた。

大正十四年に『富士』の筆を執り始めたのは、前にも述べたやうに、夫婦愛の完成のための懺悔録としてゞあつた。しかし先生の身に取つては、夫婦の懺悔だけでは物足りなかつた。兄が此書を讀んだら、兄自身この懺悔の仲間入りはせずとも、せめては

「さうか、そんなに君たちを苦しめたのか、私の注意も足りなかつた。」

と言つて呉れさうなものである。手を取つて共に泣いて呉れさうなのである。健次郎先生は只管その日を待つたのである。自ら病に臥して、命旦夕に迫ると傳へられたその日までも——。

遂にその日は來たらしく見えた。猪一郎先生は親しく病床を見舞ふべく千歳村の弟の家の門に立たれたのである。兄上の來訪が病床に傳へられた。健次郎先生は取次の者に向つて

「獨りか？」

「お獨りです。」

暫らく考へて

「まだ早い、その通りいふのだよ。」

猪一郎先生は其儘歸つて行つた。健次郎先生は自分の言つた通りを傳へたか否かを、幾度も〱取次の者に念を押した。

「まだ早い」

は何を意味したか。恐らくは猪一郎先生は

「私はまだ死なないと思ふから、お目にかゝるのはまだ早い。」

といふ意味に解釋したであらう。私はこゝにも兄弟の心持に錯誤のあつたであらうことを恐れる。健次郎先生の言葉の意味は斯うでたか

つたであらうか。「富士」に書いた事についてお互に諒解し合つた上でなければ、お目にかゝるのはまだ早い！」

再會から臨終まで

伊香保に轉地後の健次郎先生の病狀は、夏の頃ひどく腸を惡くし、食物が吸收されず、そのまゝ便に出るので、榮養の點から非常に心配されたが、秋冷と共にそれも幾分恢復し、固形の食物も攝取し得るやうになつたので、やゝ愁眉を開いてゐたのである。併し山の秋風があまりに身にしみるので、伊香保で冬を越さうといつて居た病人もたまらなくなり、熱海に行かうか、それより寧ろ遠方の別府へ行かうか、それには大阪から飛行機に乘つたら便利だらうなど、每日轉地の話で持ち切つて居た。

九月十七日（土曜、臨終前日）

午前東京より佐々廉平博士來診、病人は待ち兼ねて直ぐにも腹水を取つて貰ふつもりであつたのに、博士が「御飯でも濟んでから水を取りませう」と午後に延ばしたので、病人は氣を惡くして「今日は止さう」と云つて寢てしまふ。二時頃、轉地の話が出て、佐々博士「熱海も好いが、逗子は如何です」「逗子には兄の家がありますからね」と病人が眉を曇らせたので、博士は「どんな因緣がおありになるか知りませんが、醫者の立場として申上げたので、逗子なら私も每日でもお伺ひ出來るのです。」その時愛子夫人が急に「逗子へ行かうではありませんか。逗子は私共の發祥の地のやうな思出の深い所ですし、それに此上は血のあたゝまりででも元氣を增す外はないと思ひますから」といふと病人も「私もいろ／＼榮養を取つたが、骨肉を食べなければ足りません」といつて博士の手を取つて泣き出したので、博士も貰ひ泣きをした。この時愛子夫人はお靜さん（先生の姪で發病以來一切の家政を受持つた福田夫人）が猪一郎夫人と手紙の往復をしたことを思ひ出し、隣室のお靜さんを呼んで、「一寸大森の姉さんからの手紙の事を話して御覽なさい」といふとお靜さんは心得て「伯父さん（猪一郎先生の事）も逢ひたがつて居ます、手紙を出せば直ぐ來ると書いてありました」と云ひ、物は言はなかつたけれども病人の顏に感謝と喜びの表情があり／＼と見えたので透かさず「ね、大森へ電話をかけませう、電報を打つて直ぐに來て貰ひませう」病人が可なり大きな聲で「ようし」と云つた時には、もうお靜さんは病室をかけ出して千明本館の電話室へ突進してゐた。かくて至急電話、至急電報は矢繼早やに大森なる猪一郎先生の許に走つた。それは午後四時頃であつた。大森からの返事は、「すぐ行きたいが、兄さんは熱があつて寢てゐるから、明朝子供等を連れて行く」といふことで、病人も「逢ふとなれば早く逢ひたいな」と非常に待ち遠しがり、「明日はお祝ひに小豆飯を炊け」と命じたり、餘程興奮したものと見えてその夜はほとんど一睡もしなかつた。夕方佐々博士歸京し、入れ違ひに慶應病院の長岐氏來診、前の日曜に腹水を取つた跡が癒着せず、腹から始終水が漏出して不快なやうであつた。

九月十八日（日曜、臨終當日）

朝の水を飲みながらも、兄の一行が何時頃着くかと尋ね、待つて居

る、健次郎」と汽車中の兄にあて、打電させなどしてゐたが、突然

「しまつた、負けた！」

と言ひ出した。その意味は、兄を迎へることの早計を後悔したらしく見えたので、夫人はいつそ兄さんの一行の來るのを途中でやめさせやうかとも心を痛めたが、「いゝえ貴方の負けではありません、こんな山の上へ兄さんを引上げるのですから、矢張り貴方の勝利です」といふと「それも一つの見識だ」といつて微笑した。

起きてゐて「寒い〳〵」といふので、横になつて暖まるやうに勸めても、兄を迎へるんだからと云つて寢ない。漸やく横にして、足をタオルで暖める、やつと暖まつたと思ふと起き上つて、何時か〳〵と豫定の十一時を待ち遠しがる。腹部の漏水で着物がぬれ汚れたので着換へさせようとしても「ナニこれでよい、兄弟ぢやないか」と云つて應にない。

やがて玄關に人聲がして一行が着いた。しかし中々病室へ姿を現はさない。病人が「早く來らい」と怒鳴る始末。間もなく「ヤア」といつて猪一郎先生、續いて靜子夫人、長女の三宅逸子夫人、三女の阿部久子夫人、六女の矢野鶴子夫人、これが中で一番なつかしい人であた。それから三男の武雄氏。弟は兄を見上げ、見つめ、ニッコリ笑つて無言に手を出す。兄はその手を受けて握り締めて「お久しう」と唯一言。あとは大勢の雜然たる挨拶やら、紹介やら。病人は暫らく姪たちの顏を見比べてゐたが心地よげに「皆綺麗な眼をして、よい顏をしてゐるな」といひ、兄に「どうかい、病氣は？」と尋ねられて、漏水によごれた腹部を指さして「みんな親の罰です、私が惡かつたんです」と云つて泣く。

猪一郎先生は「もう俺達が來たら千人力さ」と病人に力づけ、愛子夫人から伊香保もだん〳〵寒いので逗子へ轉地するつもりでゐることを聞いて「それは逗子より熱海の方がよい、熱海はどうかい」病人は極めて從順に「では熱海に行きませう」と兄の一聲で熱海行きに話が極まり、旅宿の事、乘車の事、日取の事など、いろ〳〵話し合ひがあつて、病人は「すべて無條件で兄さんに任せませう」と言ひ出したので、猪一郎先生は熱海ホテルに電話をかけさせて、部屋を取らせ、轉地の話はずん〳〵進行した。兄さんに任せるといふ健次郎先生の心持は、長々の病氣で貯への金も殘り少なくなつたので、緩々熱海に滯在する費用萬端も兄さんに任せる意味であつたらしく、現に愛子夫人が熱海行の費用の事を切り出したら「ナーニ今度は存分お世話になるさ」と極めて安心の體で、熱海への電話の交渉が着々進捗するのを喜んで弟「日本一の兄貴を持つてゐるから」鸚鵡返しに、兄「日本一の弟だから」双方相見て輕くアハヽと笑ひ合つた光景には、病室らしくない明るさがあつた。健次郎先生は兄に向つて「こゝに寢て居て、伊香保に居る氣がせず、大磯に居るやうな氣がします。どうも徳富先生を思ふと見えて……」と語り、又愛子夫人を指さして「この人も淋しい人だから宜しく頼む」などゝ云つた。

病室には猪一郎先生の一行と、附添の人々とを併せて人が十人以上も居た。病人は寢台の側に侍座してゐる夫人の肩を輕く叩きつゝ「この人が周到に看護して呉れるけれども、たゞ最後の一點が……ねえお靜さん」お靜さんが何の事か呑込めないといふ顏をしたので、十

く言葉を繼いで「醫者との間さ」

黑か白か、鼠色を許さない、妥協を蛇蝎の如く嫌ふ健次郎先生である。その多年の訓練を受けた愛子夫人は、すべては夫の言葉を金科玉條とする從順すぎる夫人であるけれども、たゞ一つ、苟くも夫婦間の愛と誠の一點に關して疑惑の痕跡でも留めることを許さない、たとへ垂死の夫でも、この事だけは飽迄追窮しなければ措かない夫人であるが、餘り突然なので頓に言葉も出ない。この險惡の空氣を見て取つた猪一郎先生が、

「アハ、、それは妄想さ」

「お靜さんに其言をいふ勇氣ありや否や」

健次郎先生は文章語を使つた。愛子夫人は

「お靜さん、どんなひどい事でも遠慮なく云つて下さい」

お靜さんは病人が愛子夫人の行爲のうちに、醫者に親しみを見せ過ぎて、妻たる埒を越えたと解釋して、それを憤つてゐるのだなと解したので、

「私はさうは思ひません、私はもつと叔母さんがお醫者に愛想をよくして貰ひたいと思ふ程で、むしろ不足に思つて居ります。」

そこで夫人が、看護婦たちに、あなた方も思つてゐる通り云つて下さいと促したので、一人の看護婦が

「私は奥樣が御病人に本當によくなさるので、涙がこぼれるやうです。とても私共には及びません」

今度は夫人が病人に迫つた。

「サア、何でも明らさまに云つて下さい、云つて下さい。思ふことを口に出してハッキリと言はない、若くは言ひ得ないことが、健次郎先生の一生に附纏ふ不幸のやうに思はれる。併しそれが氏の自敍傳を大成せしめる所以であつたかも知れない。が流石に先生夫妻の間柄では、お互に喧嘩し合ひ、お互に言ひ募り合ふことが、お互を幸福にする近道であつたのである。併し這間の消息を解せない人々に取つては、此場合の光景は明かに不穩當であり、危險千萬に感ぜられたに違ひない。そこで仲裁が入つて「もうよい、だまつて〳〵、判つてる〳〵、よか〳〵」といふことになり、病人はそのまゝ、寢かされてしまつた。

昼飯の時間になつて、來客一同は別室で、病人はいつもの通り夫人と並べてキチンと食卓につき、忙しいお靜さんを靜かに待ち合せ、食前の祈りをなし、小豆飯の箸を取つた。御馳走は兄さんのお土産のトンポニー（支那料理）と子持鮎、「やつぱりトンポニーは旨いな」といつて一膳の御飯を快よく濟ました。これが最後の會食であつたのである。午後には熱海の旅館の交渉がきまり、汽車の一室を借り切る話になつて、日取りもいよ〳〵明後日と決定するまでに至つて、病人が急に機嫌を損じて、「熱海行はよしませう」と云ひ出したので、ホテルの部屋だけは借りて置いて、餘の事は暫らく後廻しにする事となり、ごたごたのうちに夕方になり、長岐醫師はあまり咳嗽が出るといふので注射を施し、腹の溜水の手當をして東京に歸り、それと前後して、猪一郎先生夫妻だけを殘し、愛子夫人等の姉妹が歸つて行つたので、あとが急に淋しくなる。一同の歸り支度を見て、「兄さんも歸るのか」「イヤ

私たち泊つて行く」と聞いて、病人は非常に悦んだ。甥子さんたちが「それでは叔父さん、又參ります」といふと「……」横をむいて嫌な顏をしてゐたが、「よしお歸り、時間がおくれるから早くお歸り、時間がおくれるから早くお歸り、」「今度は叔父さん、熱海でお目にかゝります、明後日は熱海へお出になるでせう？」「イヤ明後日はもう萬熊（先年物故せる猪一郎先生の二男）の所へ行く」聞く者にはこれが靑天の霹靂であつた。是まで强く生きることをこそ口癖に言ひたれ、未だ曾て死の迫まるを豫期したやうな口吻を洩らしたことはなかつたのである。前日兄に逢ふと言ひ出したのも、お静さんの氣轉と時の拍子でスラ／＼と運んだらしく、病人自身目前に死を豫期して會見を急いだやうには見えなかつたのである。兄弟會見の後も、熱海への轉地の話などが主な話題であつて、古い疵に觸れるやうな深刻な話もなく、勿論遺言じみた話などおくびにも出なかつたのである。尤もその前に靜子夫人（嫂）が病人に「萬熊さんも死んでね」と話して二人で泣き合つたことも、病人の感傷を高めた一つであつたらしいが、それよりもその頃咳嗽がひどく出て、非常に息苦しかつたらしい事も、ヒョイとさういふ言葉を口にさせた一因でなかつたかと、これは愛子夫人の推測である。

夜に入つた。先生は欲しくないといつて夜食を廢した。病人と差向ひになつた夫人は、晝の出來事について、夫を追窮せずには措かなかつた。六十翁と五十六の老妻との物語り。

「あなたはどうして私をお疑ひになります？」

「腹が立つたらう？」

「私はあなたを突き飛ばしたかつた。そんなに私をお疑ひになるなら、私は今夜にも此處を去ります。さうして死んでしまひます。」

「それでは淋しい、困る。」

「そんなら私のいふ事を聞いて下さい、あなたは思ひ違ひをして、夢にでも御覽にたつたでせう。本當になぜあんな非道い事をおつしやるのです。」思はず病人をゆすぶる。病人は大人しく

「おれも考へが足りなかつた」

と素直に詫びたので夫人の胸も納まり、話をやめて病人を横に寢かし、おやすみを勸めたが、咳嗽が止まらない。頓服藥をすゝめて見たが利かない。「苦しい、痛い／＼」といふが、何處が痛いかわからない。起して寢臺に腰をかけさせると、漸やく氣持よさゝうに居眠りを始める。これで幾らか疲れがなほるだらうと、その儘にして置くとフラリフラリうしろへ引くりかへるやうになるので、蒲團など積み重ねて凭りかゝらせると、咳嗽も止まり、すや／＼と寢入る。ほとんど帶も解かずに毎夜つき切りで看病してゐる夫人に取つては、病人が眠る時が矢張り自分の睡眠時間であるので、少し離れて、向ひ合つてコクリ／＼眠り始める。餘り靜かなので、お静さんが病室を覗いて見ると、病人は頭を兩手で押へて、髮の毛をかきむしるやうにしてゐる。側へ寄つて見ると、少し瞳が開いてゐて、何となしに樣子が變に思はれたので、あはてゝ別館の猪一郎先生夫妻を迎へに馳け出す。その足音に夫人も眼を覺まし、看護婦を指圖して何よりも頭を冷やす。ぬれタオルを頭に載せると、氣持が惡いのか、手で拂ひ退ける。懐中

電燈を眼先につきつけてチラ〳〵させて見るが、一向反應がない樣子、熱を計ると三十八度七分。

靜かに寢かさうとするが頗る重い、横にすると「アイタ〳〵」といふ。「はゞかり〳〵」といふので見ると、もう大便が漏れてゐた。やゝ落付いて靜かになる。併し死の忍び足が刻々近づいて來てゐることは明かであつた。やがて病人は愛子夫人の肩を輕くトン〳〵と叩いて唇を動かした。それはこの世の別れの最後のキッスを求むるのであつた。

注射をする。溫泉醫が來診する。併しもう脈は有るか無しである。靜子夫人が「健次郎さん!」と呼ぶ。「ウン」と答へる。愛子夫人が「あなた、しつかりして下さい」と叫ぶ、矢張り「ウン」と答へる。これが最後の短かい言葉。それからは呼べども應へず、何の遺言もない。愛子夫人は醫者の力が及ばないならば、自分の愛の力で回復させやうと、狂氣のやうに心臟部を揉み動かすやら、段々に冷え行く全身を撫で溫めるやら、「もうおよしなさい、もう諦めなければ不可ません」と押し退けられ、それでも堅く〳〵病人の手を握りしめて放さなかつた。時に午後十時五十分。病氣は心臟と腎臟の痼疾。享年六十。實に毫末の苦しみをも伴はない、文字通り眠るが如き大往生であつた。さうしてその死顏は「永遠の平和」そのものであつた。「死の勝利」であつた。(完)

秋の日向で

近藤憲二

思ひ出話に時を過ごして喜んでゐるやうな男は過去の人間だ。少なくとも薹の立ちはじめた人間だ。未來に希望を持ち、そのために勢いつぱいの働きをしてゐる人達には、そんな無駄な時間はない筈だ。ところが、この俺れに、三十を少し飛びだしたばかりのこの俺れに、思ひ出話を聞けつてかい？ 可哀さうに！

しかし、考へて見ればお互ひに都合のいいことだ。將來の新社會に就いて論じたり、現在の闘爭に熱をあげたりすると、どんな目が光らないものでもない。それよりは、秋の日向で、ぼつり／＼思ひ出話に耽つた方が、第一無難でいい。尤も、僕等の思ひ出話だ、少々色がかかるのは致し方がない。御勘辨願はなければならない。

——下手な講釋には、何かしら長口上の前置きがある。僕も先づこれだけの前置きをして置いて、さて、とりとめもない斷片的な思ひ出に移らう。話のまづいのは、まだそれほど薹の立つてゐない證據だと喜んで貰ひたい。

× ×

十月の澄みきつた空を眺めて、先づ第一番に思ひ出すのは鎌倉の秋だ。大正十年十月の下旬、市ケ谷監獄を滿期放免になつて、そのころ鎌倉にゐた大杉のところに寢ころんでゐた時の閑かさだ。日向に出てしやがんでゐる。秋の日光がほか／＼と脊中ぢうを暖めてくれる。監獄のまづい食い物で脂のぬけきつたからだを——。そして、手近かに同志達の聲が聞かれる。——僕はそれだけでも充分滿足だつたのだ。今でもまだ、秋になるとその日を直ぐと思ひ出すほど、それほど僕には滿足な愉快な日だつたのだ。かくして僕は、たゞ有耶無耶に二日三日と日を過ごした。ともすると、監獄で考へて來たいろんな計畫も忘れ勝ちであつた。監獄で何を考へて來たつてかい？ そんなことはどうだつていゝぢやないか。第一もう忘れてしまつた。どうせ教誨師の坊さん達には喜ばれさうもないことだつたらうよ。

そのころ大杉のうちにゐたのは、後ちに福田大將狙撃事件で捉まつて今は秋田の刑務所にゐる和田久太郎と、やはり同事件に連座して市ケ谷で牢死した村木源次郎とだつた。飛びまはり屋の和田は、殆んど

毎日東京へ出かけた。どうかすると二日も三日も、どこをどう歩いてゐるのか歸つて來ない日もあつた。村木は大がい家にゐた。藥の加勢をしたり、部屋の掃除をしたり、僕と一緒に日向ぼつこをしたり、煙草を吸つたりしてゐた。

或る日の朝だ、大杉と村木とが蒲團の上に寢そべつて話してゐる。やがて二人の笑ひ聲が聞えた。椽の端で新聞を讀んでゐた僕は、この笑ひ聲で何に氣なしにひよいと顏をあげた。

『もうやめだ、からだがすつかり疲れたからなあ……』

村木はさう云つて、紙の上に擴げてゐたものを無造作にまるめて懷ろに入れた。僕が顏をあげたのはその瞬間だつたのだ。僕はその時ちらりと見た。村木が懷ろへ入れたのは、確かに、、だつた。、、、、、、、、、。僕の目には確かにさう映つた。しかし僕は、勿論何にも尋ねなかつた。それは僕等仲間の道德だ。、、、、、、がある以上、おまけに『もうやめだ』と云つた以上、その間に何事かなければならない。その位いの目やすはつく。だが、それを尋ねないのが仲間の道德だ。一人でやれることは一人でやるだらう。ひとの手を借りたい時には相談をかける筈だ。先方が話さないのを、こちらから出しやばつて聞くことはない。默つて居ればいいのだ。僕にもその位いの修養はあつた。で、知らぬ顏で、再び新聞を讀みつゞけた。

その頃僕は朝早くから目が醒めた。薄暗いうちから目が醒めた。監獄で早くからたゝき起された習慣が殘つてゐたのだ。一人で目を醒まして、ながい間蒲團の中でもぐ／＼してゐなければならぬのは辛いことだ。殊に監獄から出たので、話はうんと溜つてゐる。それをぢつと我慢して寢てゐるのは一層つらいことだ。とうたう我慢が出來なくなる。すると僕は、氣の毒だとは思ひながら、一緒に寢てゐる村木を揺り起す。

『おい、夜が明けたぞ、もう起きようぢやないか！』

その頃はまだ三十二三であつたが、「ご隱居」といふ綽名をとつてゐたゞけあつて、村木は目ざとかつた。又、少々不足でも嫌やな顏もしないで云ふまゝになるのが彼れの性質であつた。僕等はかうして、朝早くから、蒲團の中に潜つたまゝ話し合つたものだ。

、、、、、、を見てから一兩日過ぎた朝のことだ。村木は蒲團の中から手を出して煙草に火をつけながら話し出した。

『君のゐない時に一つ仕事を思ひついてね……』

彼れはかう云つて、まるで商賣の計畫でも話すやうな極く氣輕な調子で、企らんだ「或る」事件の内容を打ちあけたのだ。非常に愉快さうな元氣な聲で。——

『僕はこの通りのからだだ。とても諸君と一緒に驅けづりまはることは出來ない。第一、健康が許さない。しかしこの俺れにだつて出來ることはある。で、君のゐない時に一仕事考へたんだ。』

僕にはもう大體の見當がついた。彼れの氣性を承知してゐる僕には、物やさしいベールの下に包まれてゐる彼れの鋭さを知つてゐる僕には、これだけ聞けば大體の見當がつかない筈がない。おまけに、ここまで話を切り出した以上、無遠慮に尋ねたつてかまはないことだ。

『で、、、は誰れだい？』

『、、だよ、、、だよ。』

と云つて、ちよつと話を切つた。そして又續けた。

『でね、その位いの仕事なら僕一人で澤山だ。奴等に餘計な疑ひを持たせたり、仲間に迷惑をかけたりするやうなことがあつては詰らないと思つた。幸ひ和田君は琉球の方へ行つてゐて當分歸らないからいいが、大杉君には暫らく東京を離れて貰はなければならない。その間にやらうと思つたんだ。やがて大杉君は岐阜の名和昆虫研究所へ行つた。僕は一生懸命で、、後をつけまはつてゐた。

『或る日のことだ、新聞を見てゐると、何時何分に、、が旅行先きから、、に着くと出てゐたんだ。「よつし！　今日だ！」僕は獨りでさうきめた。で、その時間を見はからつて、、、へ行つた。ホームへ出ようとして地下道へ來ると、もう一行がやつて來るぢやないか。、、しいのが先頭になつて、幾人目かに歩いて來るのは確かに、だ。寫眞で見馴れてゐるのとそつくりだ。「よつし！」――しかし、卑怯だつたんだね。僕はその日、、を持つてゐた。それを拔いた拍子に、自分で驚くやうなことはないかと思つたんだ。おまけに、俺の腕の力をちと危ぶんだ。もし仕損じては馬鹿馬鹿しい、、、、を持つてくればよかつた。僕は瞬間にさう思つた。まあ今日は見合せて置け、やはり、、、の方がいい。――とうたう平氣な顏でやり過ごしてしまつた。』

彼れはかう云つて、自分で自分を嘲るやうに笑つた。

『それからは、、、、を持つてつけまはつた。麻布のあたりも歩いた。、、のまはりもぶらついた。「愈々！」と思つて、、、へ行つたこともある。が、どう間違つたのか、どうしてもぶつかんない。そのうちに大ぶ疲勞して來た。すつかり元氣がなくなつた。ええ糞ッ！といふ氣になつて溫泉へ行つて寢ころんで來た。――君！　なかなかうまく行かないものだよ、もう止めだ。』

彼れはさう云つて又笑つた。晴れやかに笑つた。

それから數日をおいて、僕は鄕里へ旅び立つた。牢屋にはいつてゐた僕を心配してゐてくれた親達に、何はともあれ先づ不孝者の無事な顏を見せたかつたからだ。

僕は京都で、汽車の窓から新聞を買つた。ところがどうだ、新聞の一面にデカデカと大きな活字が並べてある『、、、、』の記事だ。加害者の名はまだ出てないが、、、、、、だ。ドカーン！と胸を打たれた。僕は早速汽車を降りて號外の出るのを待つた。鈴の音らしいのが聞えると、立ち上つてあちこちと見渡した。僕はぢりぢりしながら待つてゐた。その間のどんなにも長かつたことか。やがて號外が出た。、、、、、、、、であつた。僕はホツとして再び旅をつゞけた。

鄕里には十日もゐたか。しかし、上京の途中あちこちで道草を食てゐたので、鎌倉へ着いたのは十一月も終りに近かつた。大杉の家へ來て、村木の顏を見るなり僕は云つた。

『おい、隨分心配させたぢやないか。』

村木は笑つてゐた。「野郎、早いことやりやがつた」と云つて。

久米正雄氏が曾つて大杉の追憶を、やはりこの『改造』に書いたことがある。それが偶然この頃のことに觸れてゐたやうに思ふ。

或日、久米氏は、大杉と一緒に[illegible]の一室で話しこんでゐた。

どうせ二人とも、息抜きに原稿でも書きに行つてゐて偶々落ち合つたんだらう。二人が話してゐたところへ、女中が號外を持つて來た。「、、、、」の號外だ。久米氏は、こんなものを見た時に大杉がどんな顔をするかと思つて、特に注意してゐたといふのだ。すると大杉は急に暗い顔をした。——確かさう書いてあつたやうに記憶する。

久米氏は大杉といふ叛逆人が、所謂殺といふ問題にぶつかつた時どんな顔をするだらうといふ、極く抽象的な興味に引かれてゐたのだ。さういふ意味で觀察してゐたに違ひない。ところが大杉はその時、僕が京都で、ぶつかつたのと同じ不安にぶつかつてゐたことと思ふ。そして、やはり僕と同様に、鎌倉へ歸つてから、

『おい村木、隨分心配させたぢやないか。』

と云つたかも知れない

× ×

話がちと、、になつた。これで見ると、村木といふ男は無茶一方の男だつたやうに誤られる恐れがある。村木が無茶な男だつて！それは大變な間違ひだ。彼れほど優しい、人懷つこい、愛想のいい男は滅多にあるものぢやない。そして、人の面倒がる厄介な仕事は、大概彼れが一人で引き受けてゐた。仲間の誰れかが監獄へたたき込まれる。彼れは早速あちこちと歩きまはつて、金や本を集めて來ては差入れしてゐた。これは仲々面倒な仕事だ。簡單なやうで、ちよいと誰れにでもは出來ない仕事だ。彼れはそれを自分の役目の如く心得てやつてゐた。また誰れかが病氣をする。彼れは早速でかけて行つて看護をしたり、ロハ病院を探しまはつたりした。そして又、行く先きのどこのうちでもを自分の家のやうにして、台所の加勢をしたり使ひに出たりした。皆んなも頼みよかつたんだ。「ご隠居」といふ綽名は、さう云つた彼れの性格を實によく現はしてゐる。從つて、一身上の、ちよいと人には打ちあけにくい話でも、村木になら氣輕に話せた。和田久太郎君が那須温泉へ行つてゐていい人が出來た時にも、和田君は誰れにも一切秘密にしてゐたが、「ご隠居」だけには話してゐた。

しかし、かういふ物やさしい方面の話や、「ご隠居」的な話は、一體に興味の薄いものだ。小學校の生徒だつて、修身の本よりは猿飛佐助やチャン／＼バラ／＼の方が面白い。で、こんな話はやめて、やはり少々色のかかつた話に戻らう。

大杉や和田が、米騒動の前後に亀戸で『勞働新聞』といふのを出してゐたことがある。今でもさうだが、その頃は殊に政府の方針がやかましくて、社會主義者の雜誌や新聞と見れば片つ端からやつつけた。發賣禁止になる位ぢやない、もし印刷所で刷つてゐるのでも見つからうものなら、流石に、、は持つて歸れないと見へ、、、だけ刷らしてさつさと引き上げてしまふ。それどころか、、、、、、、にまはつて、これこれのものは、、、、てはいけないといふ御達しだ。、、のせいぢやない、たゞもう何んでもかんでもいけなかつたんだ。從つて新聞雜誌を出すといふことは、並大抵の骨折りではなかつた。うまく出來上つたとしても、隠すのが又一仕事であつた。『勞働新聞』も素よりさういふ状態に置かれてゐたのである。

『勞働新聞』の第何號だかゞ出た時だ。和田はそれを擔いで村木の家へ持ちこんだ。そのころ、、の×町にあつた村木の家が先づ安全だと思つたんだらう。ところが數日おいて、村木が少しからだの調子が惡くて寢てゐるところへ、、、、、の高等がやつて來た。『勞働新聞がこちらにあるといふので、、、から搜して來いといふ命令なんですが……』

村木はゆつくりと起き上つて靜かに云つた。

『あゝさうでしたか、それは御苦勞さま。ところが生憎來てゐないんですが、それでも御役目だから一應見て行きますか。まあ、お上んなさい。』

から優しく出られたので、高等は少々きまり惡さうな顏をしてもぢもぢしてゐた。村木はそんなことに頓着なく、『まあ、お上んなさい』とも一度促しながら、先きに立つて押入を開けた。そして積んである小道具を引つぱり出したり、行李を引つぱり出したり、さては蒲團を降さうとまでした。

『兎にかく見せて貰ひますかな。』

と云つて上つて來た高等も、この勢ひにすつかり安心して、一層きまり惡るさうな顏をした。

『村木さん、もうよろしい、もうよろしい、ナニ、無いことは初めから分つてゐたんですが、、、、の命令だつたもんですから。』

二人はそれから、散らかつた部屋の中で暫らく雜談をしてゐたが、やがて高等は『お大事になさい』と叮嚀に挨拶をして出て行つた。

村木の開けた押入の、風呂敷がふうわりと掛けられた下には、幾千部かの『勞働新聞』が隱されてゐたのだ。

こんな時に大杉だつたら、『禁止命令を持つて來たか？　たに？　持つて來ない！　、、！　構はず僕等を縛つて、、に來たんだらう！　出て行け！』つて怒鳴るところだ。和田なら先づ『勝手にしやがれ！』と云ふところだ。僕なら差し詰め、默つて睨みつけてゐるところだ。が、村木はさうはしない。そこに彼れの面目がある。

、、、、事件計劃者の一人に村木のゐたことは既に諸君の御承知の通りであるが、豫審調書によると、彼れはその當日、、、が、、、の講演をする筈になつてゐた會場の、、、？で待ち伏せてゐたのださうだ。、、が、、、へ立寄らうなぞとはちよつと考へなかつたことであらうから、和田は、、、の前に、村木は會場内に、離れ離れになつてゐて、先きにぶつかつた方が、、、、、、になつてゐたのではないかと思はれる。

村木はその日浴衣がけで出たさうだ。例によつて、ふらり〳〵と出たさうだ。いつでも前の小屋にゐる尾行巡査が、

『村木さん、どちらへ？』

と尋ねた時に、彼れは呑氣さうに答へた。

『天下の形勢はどうかと思つてね。』

尾行は、また戯談が始つたと思つた。何か野菜でも買ひに行くのだらうと思つて尾いて行かなかつた。

これは、後で尾行巡査の話してゐた話だ。全く、あゝ平氣た樣子では、誰れだつて乘せられてしまふ。

×

×

僕は前に、村木はどの家へ行つてもそこを自分の家のやうな調子で直ぐと臺所の加勢をしたり部屋の掃除をしたりして親しんでしまふ、と云つた。しかしそれは、仲間の家だけではなかつた。とんでもない方面の所へ行つてもやはりこの調子があつたと見える。

大正十二年の暮れも押し迫つた或日、警視廳から大杉達の骨をとりに來いといふ知らせがあつた。大化會にとられてゐた骨が出て來たから渡さうといふのだ。村木が行つた。

警視廳の廊下を通つて新聞記者室の前まで來ると、大勢の記者が一齊に村木のところへ押しかけて來た。腕にとつつかまつたり脊を引いたりして離さない。

『村木さん、話して下さい、話して下さい!』

『あなたも今日の事件で召喚されたんですか?』

『早く! 早く、早く!』

と云つた調子だ。村木は何んのことだか一向わからない。さう云へば警視廳へ足を踏みこんだ時から、何やら騷々しさうではあつた。しかし、何んのことだか分らない。

『一體何んですか? 僕には何だか何だかさつぱり分らないんだが。大杉の骨を取りに來いといふから來ただけなんで。』

新聞記者は、それを聞くか聞かないうちに、又どこかへ雪崩をうつて走つて行つた。村木はただ呆氣にとられて見てゐた。

しかし、特別高等課の室へ入つて見ると成るほど大變だ。ちつとしてゐる者なぞありやしない。サーベルや私服が夢中になつて室を出たり入つたりしてゐる。椅子もテーブルも皆んな空になつてゐる。その筈だ、某重大事件の當日だつたんだ。

村木さんは先づ課長の椅子にどつかりと腰を降した。うまさうな辨當が置き去りになつてゐる。丁度おひる時だ。村木は早速ベルを押して給仕を呼び、茶を持つて來さして御馳走になつてしまつた。それでも其處を去るでもなく、いつまでも、坐りこんで、煙草を燻らしてゐた。金ピカの何處かの署長らしいのが、急いでやつて來た。そして村木を誰れと思つたのか叮嚀にお辭儀をして『ちよいと電話を拜借』と云つた。村木は横柄に頷いた。

『もしもし、××署ですか、今日の事件はうちの署には關係ありませんから、安心してゐて下さい。』

署長はこれだけのことを簡單に云つて電話を切つた。そして又、村木にお辭儀をして出て行つた。

村木は、待つてゐても骨が貰へさうもないので、默つて歸つて來た。

後で、社の連中はさう云つて笑つた。

『だが、見えたから不思議ぢやないか。』

彼れは澄ましてゐた。

序でに村木の話をも一つ。いや、村木の話といふよりは私からのお詫びだ。

大分前のことだ、堺（利彦）さんが自宅で確か砲兵の伍長だつたかに刺されたことがある。僕はその知らせを聞いて、村木と一緒に大急ぎで飛んで行つた。行つて見ると、床に少しばかり血の跡があるだけで、靜かなものであつた。この家に、つい先刻闘ひがあつたなど〻は思へないほど靜かなものであつた。やがて警察から檢證に來たり新聞記者が來たりしたが、それ等の人が歸ると、やはりもとの靜かな狀態に還つた。堺さんは階下の奥の一室で寢てゐた。

僕等は、集つて來た同志の人達と一緒に、二階で暫らく話してゐた。しかし大勢でかうしてゐたつて仕方がない、村木だけ殘つて貰つて皆んな引き上げようぢやないか、といふことに相談一決した。村木は又ぞろ「ご隱居」役を引き受けたのだ。

皆んなは歸つた。夜は大分ふけて來た。看護と云つたつて別に村木の手を借りなければならぬほどのことはない。かうしてゐても退屈だ。どれ、寢るかな。村木は獨りで二階へ上つて、寢てゐて讀む講談本のやうなものでもないかと、あちこち探しまはつた。本箱の中や机のまはりを、ところがその時、ふいつと目についた物がある。短刀だ。拔いて見た。なかく切れ味のよささうな代物だ。村木は默つて懷ろへねぢ込んだ。

村木はその翌日も堺さんのうちにゐて、やうやく夕方近くに社へ歸つて來た。そして、こつそりと、いい短刀が手にはいつたと話した。その短刀がどんな顔をしてゐたかは、見せなかつたから分らない。

ね、堺さん、――本當にあなたの所にさういふ紛失物があつたでせうか？ もしさうだとすれば、それは村木の仕業です。おそ蒔きながら、死んだ村木に代つて私から幾重にもお詫び致します。奴もただ私有慾にかられて盜んだのではありますまい。、、、、、、、、、、、、のでせう。その邊を酌んでやつて下さつて、どうか勘辨してやつて下さい。

× × ×

村木のことを話してゐると、どうした譯けだか一緒にコズロフのことが思ひ出される。コズロフと云つたつて分るまいが、大正十一年の夏、神戸から追放になつた所謂る「怪露人」コズロフだ。大杉が其著「漫文漫畫」の中に書いてゐるコズロフだ。村木はこの男の夜逃げを加勢したことがある。葉山から鎌倉まで、二人で車を引つぱつて逃げた話は、村木がよく面白可笑しく話して聞かせたものだ。そんなところから、村木と一緒にコズロフを思出すのかも知れない。大きなからだのニコくしたコズロフと、青い顔をした「ご隱居」の村木とが、片こと交りの日本語と片こと交りの英語で話しながら車を引いてゐる圖は、全く美事な光景だつたらうよ。しかし僕は今ここに、夜逃げの話をしようと云ふんぢやない。それは大杉が、僕等以前にちやんと書いてゐる。僕がまづい筆を走らせることはない。

僕は前に、監獄を出てから郷里へ歸つたことを書いた。不孝者の僕本な顔を、何よりも先づ心配してくれてゐた親達に見せたいと思つて、郷里へ急いだことを書いた。そしてその歸りに、あちこちで道草を食つたことも書いた。その道草の一つは、そのころ須磨にゐたコズ

ロフの訪問だつたのだ。

僕は大阪で、、、、、須磨へ行つた。コズロフの家へ行くと戸が締つてゐる。が、入口に牛乳が並んでゐるところを見ると引越したのではない。暫らく經てば歸つて來ることだけは確かだ。僕は遊園地を長い間ぶらついて、再びコズロフの所へ行つた。丁度折よく、歸つて來て戸を開けるところであつた。コズロフも、妻君のクララも、小さいスガチカも、大變喜んでくれた。「大杉さんはどうしてゐる？」「村木さんは丈夫か？」それから、あれは？　これは？　矢つぎ早やにいろんなことを訊ねた。僕も心から打ちくつろいだ氣持になつた。

夜になつてからは、コズロフと二人だけで話した。コズロフは蓄音機をかけて、レコードを換える度びに詳しい說明をしてくれた。オペラ物をかける、すると彼れは寫眞入りの筋書を持ち出して、こんな風に說明するのだつた。

『この人、この人に惚れて居ります。この人、この人に惚れて居ります。この人、この人に殺されます。殺されても泣きません、歌ひます。』

西洋人臭い尻上りの日本話だ。

女中さんが、『ちよいと買物に出さして貰ひます』と云つて出て行つた。二人は更に遠慮なく話した。どんな話をしたつてかい？　それだからいけない。僕等だつて物騷な話ばかりしやしない。久し振りに逢つたんだ、いろんな話が出ようぢやないか。が、正直正銘、全く呑氣な話で持ちきつてゐたのだ。

その夜はコズロフの家で泊つた。翌朝一緒に食事を濟ませると、コズロフは大急ぎで勤めに出た。僕は暫らくクララと話してゐたが、やがてお別れをして家を出た。

往來へ來ると男が二人立つてゐる。僕を見るとパッと兩方へ離れた。

『しまつた！』

僕は瞬間にさう思つた。僕は今までの經驗から、その人間がどういふ種類の人間だ位いは直ぐ分つた。しかしどうすることも出來ない。コズロフの家へ舞ひ戻つて見たところで仕樣がない。まくにしても一向土地不馴れである。仕方がない、どうにでもなれと思つた。電車の停留所まで來ると愈々二人がやつて來た。僕の手を掴んで、、、ゐる。どうして、、、ゐるのかは知らない。たゞ無暗に力み反つて、、、ゐる。

『須磨の、、まで來て下さい。』

仕方がない、ついて行つた。隨分長らく應接室で待たされた。やがて縣の外事係が來ての訊ねだ。

『コズロフの所へ何の用で來た？』

『遊びに來たんだ。』

『何か用があつて來たんだらう？』

『遊びに來たんだ。』

頑固なやうだが實際その通りだ。さう答へるより仕方がない。

『どうしても云はないか？』

『遊びに來たんだから遊びに來たと云つてゐるんぢやないか。』

こんなことを幾度か繰返した。幾度繰返しても同じことだ。彼れは

部屋を出た。僕は『益々檢束だな』と思つた。それにしても先づ處分して置かなければならぬものがあつた。所持品檢査をされて見つかつては、ちと困る物があつた。と云ふと大袈裟だが、ナニ、たつた一枚の紹介狀だ。しかも或る人へ宛てた、『この男が行つたら御馳走を食はしてやつてくれ』と書いた大杉の名刺だ。こんな名刺が一枚見つかつたからつて何んのこともないんだが、紹介先の人に餘計な迷惑をかけては濟まないと思つたんだ。

丁度室には俺れ一人だ。この時だ！ 僕は大急ぎで名刺を口へ入れた。そこへ折惡しくさつきの男が引きかへして來た。僕は茶をグイッと飲んだ。が、名刺の紙は堅い、喉の中途に引つ掛つて氣持の惡かつたこと。

僕は間もなくお許しが出て、、、を出た。しかし、コズロフの家へ來たのがどうして知れたかは全くの不可思議であつた。

鎌倉へ歸つて皆んなにこの話をした。ところが村木がかう云ふんだ。

『君の行つてゐる時に、、、が外へ出なかつたかい？』

『うん、出た。』

『それで分つた。僕の行つた時もさうだつた。そしてやはりバレた。』

僕もやうやく謎が解けた。

其後、和田君が行つた時にも、又しても同じことを繰返して詰らない目を見た。

僕等がかうして度々コズロフを訪ねたのは、別に何んの計劃があつた譯ではない。懸け引のないところ、全くたゞ遊びに行つたゞけのことだ。コズロフも一人ぼつちで淋しからうと思つて賑やはしに行つたまでのことだ。ところがこれが、コズロフ、、、、、、、だつたんださうだ。馬鹿々々しい、うつかり遊びにも行けやしない。

× ×

こんな話をいつまで書いたつて仕方がない。もうこの邊で切り上げることにしよう。秋の日は短い、もう大ぶ陽が薄らいで來た。約束の紙數が盡きたのだ。それにしても、この思ひ出の中に出て來た人達は、皆んな相應の仕事をして、死んだり、殺されたり、遠くへ追ひやられたりしてしまつた。僕は何にもしないで、日向へ出て思ひ出話に耽つてゐる。仕末の惡い呑氣坊だと笑つてくれ。

饒舌錄（感想）

谷崎潤一郎

前號に於いて、私は芝居と云ふものがどうしてもわざとらしい感じを伴ふものであることを云つた。舞臺上の自然主義とか、寫實主義とか云つたところで、結局何處までも舞臺上の約束であつて、實際日常生活の通りに演ぜられる芝居なぞが、決してあるものでないことを云つた。尤もさう云へば芝居に限らず凡べての藝術が皆幾分かさうではあるが、芝居は此の點が特に著しい。それは前にも述べた通り、完全な一人の頭から出來るのでなく、個個の人間が寄り集まつて演じるのだから、何としてもバラ〳〵になり易く、それに俳優一人一人の人柄や臭みが邪魔をすることは防ぎやうがない。幸にしてその人柄に牽引力がある場合には、それが所謂「持ち味」となつて珍重せられるが、さうなれば觀客は俳優その人を好くのであつて、彼が演出する戯曲の內容的價値とは關係がない。さうして皮肉にも、名優と云ふものは多く個人的魅力の強い俳優なのである。名優は「その役になりきる」と云ふが、實は反對で、たとへば鴈治郎は紙治になつても盛綱になつても鴈治郎であり、その鴈治郎であるところが喜ばれる。が、たまたま鴈治郎が嫌ひな人だつたら、彼の扮するどの役を見ても眞つ先に臭みが鼻に附いて、到底出し物のよしあしなどを判別する餘裕はないであらう。徳川時代に俳優が「河原乞食」として卑しめられてゐた頃には、舞臺以外に接觸する機會が少かつたからまだよかつたが、近頃のやうに彼等の社會的地位が進み、俳優である一方に紳士夫人令孃として素顏を曝す場合が多くなると、尚更その人の生地の臭みが舞台の上へまで附いて廻つて、われ〳〵の空想を打ち毀す。「寺島君」「波野君」「喜熨斗君」等を考へずには、菊五郎や吉右衛門や猿之助の劇を見ることが出來なくなる。

ひそかに思ふに、かう云ふ弊害を芝居から除き去らうと云ふのは、畢竟無駄な努力ではなからうか。づぶの素人から俳優を養成しても、舞台へ出せばやはり身に附いた癖があるもので、就中最も身に附いて離れないのはその人の肉聲である。われわれはほんの一行のセリフを

開き、聲を聞いただけで「ああ、あのいつもの役者だな」と云ふ感じが、芝居そのものの興味よりも先へ來る。明治以來坪內博士の文藝協會を始めとして、上山草人の近代劇協會やその他類似の新劇運動がずゐぶん興つたり亡んだりしたが、私は實は、めつたにああ云ふものを見に行つたことがなかつた。と云ふのは、あの時分の所謂新劇の俳優なるものは、大概は中學校以上の學歷を持ち、在來の歌舞伎役者に比べて頭腦もあり教養もあると云ふことを誇りとし、それを身上にしてゐたのだが、しかし今日ならば兎も角、あの頃の時勢としては、中學や專門學校に學んだ程の青年で俳優などにならうと云ふのは、さう云つては失禮だけれど、あまり質のいい學生ではなかつた。先づ大抵は學校の成績も芳しくなく、放蕩に身を持ち崩して中途で退校させられたのや、ちよつと男つ振りがよくつて女に持てる代りには色魔と云ふ以外に取り柄のないのや、文士にならうとしてなり損ねたのや、要するに學生の中の食ひ詰め者が多かつた。無論少數の例外はあらうし、その當時から今日に及んで俳優として相當の名を成した者は、やはりそれだけの天分があつたのであらうが、大部分は不良青年の集まりであつた。それで新劇の舞台を見ると、どうも私には食ひ詰め者や道樂息子や色魔や低能兒の生地が見え透いて、――私自身が當時は親不孝の食ひ詰め者だつたせゐもあらうが、――彼等俳優の境遇が身に詰まされて、その方が芝居よりも實感的に悲慘であつた。私なぞは職業の關係上、個人的に彼等と接觸する機會が多く、その人柄や內幕を知つてゐるので、なほさうであつた。

新派の芝居が廢れたのも、恐らくさう云ふことが餘程原因になつてはゐないか。新派俳優にはその人柄に一種獨得の臭みがある。歌舞伎俳優の臭みはそれが都會人を惹き着ける持ち味となつてゐるのだが、新派俳優のは、都會人、――分けてもさう云ふ感覺に鋭敏な東京人の肌に合はない。出し物の下らないことよりも何よりも、此れが新派の衰へた所以ではあるまいか。

○

斯かる見地から考へると、小劇場などと云ふものにも私は深い疑ひを持つ。

云ふまでもなく、小劇場に於いては、觀客席と舞臺との距離が接近するから、從つて俳優は餘り不自然な化粧や扮裝をする譯に行かない。彼等は日常生活に於ける場合と餘り違はない樣子をして舞臺に現れる。だから觀客には、彼等俳優の自然の皮膚の色が見えるばかりでなく、時として肌理の粗さや細かさや、鼻の穴の眞つ黑なところや、鼻毛や鼻糞や襟垢までも分つてしまふ。つまりそれだけ假面の下から露骨に生地が見え透くのである。斯くの如くにして觀客の空想を戲曲の世界へ導くことは餘程むづかしい。ほんのちよつとした表情をしても、わざとらしいことが直ぐに眼につく。先年物故したエレオノラ・デューゼは心の底から劇中の人物に同化することが出來、舞臺で泣く時はほんたうに涙を流したさうだが、さう云ふ天才的の俳優が演じてこ

その理想的であらうけれども、われわれが普通日本で見せられる小劇場なるものは、多く舞台の經驗の淺い、漸く養成されたばかりの俳優たちが演ずるのである。その出し物が表現派の飜譯物であらうと、或ひは日本の新作品であらうと、畢竟するに舞台の上でしやべつてゐるのは未熟な少年少女どもであると云ふ氣持ちを、餘人は知らず、私は忘れ去ることが出來ない。蓋し小劇場は一般の劇壇に刺戟を與へ、新しい空氣を注入する點で確かに必要な存在であり、その方面に興味と利害とを有する者は容易に見に行く價値はあらうが、それ以上の何物でもない。殊に飜譯物などは舞台で見るよりも本で讀んだ方が、不純な媒介が這入らないだけ却つて完全に鑑賞し得る場合が多い。

ところでこれは餘談であるが、若し私の好きな歌舞伎俳優、――たとへば松助とか、中車とか、羽左衞門とか、菊五郎とか、さういふ役者たちが小劇場へ出場し、彼等が日常生活の生地をその儘現はして、久保田万太郎君の戯曲とか、いつぞやの小山内氏の「息子」のやうなものを素直に自然に演じてくれるのであつたら、私はそれこそ喜んで見に行くであらう。彼等はめいめい固有の持ち味が濃厚であるから、完全に戯曲中の人物になりきることは出來ないかも知れないが、それならそれで、私は彼等の持ち味そのものを樂しむことが出來る。俳優に限らず、凡べてその道で叩き上げた一流の職人になると、素で出しても何となくその人柄に奥床しい味ひがあつて、名人の落語家などが日常の茶話をしてゐるのを聞くと、高座の上とはまた自ら異つた趣があり、何の奇もない片言隻語にも不思議に惹きつけられるものだが、小劇場であつたら、つまりさう云ふ個人的の魅力にしんみりと接することが出來さうに思ふ。

それと同じやうな理由で、若い美しい女優を見るには小劇場が一番いい。お客は彼女の滑かな皮膚や、生え揃つた睫毛や、すずしい瞳や、眞珠のやうな齒並び迄も殘す所なく味はうことが出來るのである。こんなことを云ふと甚だ不眞面目に取られさうだけれど、實際小劇場へ行くお客の心理には、半ば無意識的にもせよさう云ふ性慾的の動機が多分に含まれてはゐないだらうか。芝居を見に行くと云ふよりも生地のままなる美少年や美少女を見に行く。――正直に云ふが、少くとも私などはさうである。

○

私の云はんと欲するのは、戯曲本位、内容本位の演劇などと云ふものは要するに一種の夢想であつて、實現し得べきものでないから、それよりも寧ろ形式本位、俳優本位に甘んじた方がいいと云ふのである。さうして實際の劇壇が、現にその通りなのである。俳優本位、形式本位でない劇團はいくら脚本の選定に苦心したところで、結局は立ち行かない。ここで芥川君をまた引き合ひに出すが、嘗て同君は澤正の芝居を口を極めて罵倒してゐた。「あんな馬鹿馬鹿しいものはないな、あんなものなら僕だつてもつと巧くやれるな」と云つてゐた。私も恐らくは見たらそんな氣がするだらうと思つて、まだ一遍も觀いた

ことはないのだが、兎にも角にもあの一座があれだけの人氣を博するようになつたのは、俳優本位だからである。此の傾向は歌舞伎劇が廢れて新時代劇の世にならうとも、苟くも芝居と云ふものの續く限り永久にさうであらうと思ふ。早い話が映畫劇でさへスタアー・システムではないか。映畫劇中の最も高級なる獨逸物でさへヤンニングやクラウスの人氣で客を呼ぶのではないか。

要するに舞台藝術の價値なるものは、半分以上俳優の個人的魅力、もつと突つ込んで云へば肉體的魅力にある。但し、勿論魅力と云つたところで美貌の男女優に限るのではない。美男や美女でも一向魅力のない人もある。團十郎や團藏の如きは決して美男子ではなかつたけれども、最も特異なる容貌の持ち主であつた。大體に於いて、如何に顏立ちが美しくても頭の働きの鈍い者は何となく魅力に乏しいものだが、されぱと云つて肉體的條件を缺如してゐては、到底俳優として大を成すことは出來ない。

○

正宗白鳥氏は九月號の中央公論の劇評の中で「人生のための藝術」と云ふ言葉を使つてをられる。この言葉は廣くも狹くもいろいろに解せられるので、適確の意味を捕捉するのに苦しむが、一時の流行語であつた「考へさせる劇」と云ふやうなもののことであるならば、前にも云ふ通り直接戲曲を讀んだ方が捷徑であり、芝居にそれを求めたところで恐らく失望に終りはしまいか。芝居はあらゆる藝術の中で一番享樂的、官能的、肉感的、性慾的分子が多いのであるから、どうしても先づ感覺に訴へて味はねばならない。全然享樂的氣分を去り、恰も學校へでも行く積りで物を教はりに行く芝居などと云ふものが、事實あるべき筈がない。

私は芝居は、お客は娛樂半分で見物に行き、興行師は俳優本位で狂言を組み立て、それで一向差支へのないものと思ふ。俳優にして優秀な技倆と魅力とを持ち、觀客にして洗錬されたる趣味と感覺とを有するならば、官能や肉體の美を通して何かそれ以上の永遠なるものを、精神的の美を感じ得られる。俳優の或る一瞬間の表情、眼つき、ポーズの中にでも、優れた繪畫や彫刻を見るのと同じやうな不滅の美しさを汲み取ることが出來る。形式の美もそこまで來れば内容の美と同じことである。さうして芝居を見物に行く一般の民衆は學者や思想家ではないのであるから内容的價値のものよりも形式的價値のものの方が感じ易い。學問はなくても、高い形式美を味はうだけの鋭い感覺の所有者はある。感覺と云ふものは使へば使ふほど洗錬されて來るものである。

○

以上私は、分り易く云ふために芝居の靜的方面、繪畫的方面を例に引いて、動的方面、音樂的方面に云ひ及ぶ暇がなかつたが、孰れにしても芝居を見るには感覺が大切であることは云ふまでもない。學問や識見や思想なぞも必要だが、三味線の音色のよしあしも分らないやう

な人間だつたら、芝居を云爲する資格はないと云つてよい。

私はしばしば自分の作物が上演される場合に、稽古に立ち合つたり、劇中の性格の解釋につき俳優から質問されたりしたことがあるが、常に感じるのは新劇の人たちより歌舞伎劇の人たちの方が新しいものに對しても理解が早いと云ふことである。これは何故かと云ふに、一に全く熟練されたる感覺を持つてゐるからだと思ふ。歌舞伎劇の俳優たちは長い間の傳統に依つて藝に對する感覺が妙に鋭く發達してゐる。彼等は頭で理解しないでも感覺で嗅ぎつける。形式から內容に這入つて行ける。舞台の上の坐作進退に關しては、ちつとやそつと學問をして飜譯物で近代文學をかぢつたくらゐの青年では、太刀打ちが出來ないのも當然である。それと同じで、劇評にしても專門の所謂劇評家の批評より、都會の下町のお孃さんや奧さんの方が往々成る程と頷かれるやうなことを云ふ。

人の感覺と云ふものは、習慣に依り、種族に依り、地方地方に依つて隨分違ふ。歌舞伎俳優のやうな專門家は藝に對する感覺が特別に敏いが、一般にお客の側から云ふと、東京人は菊五郎風のスッキリとした藝の味はひを解するが、鴈治郎のうまみは大阪人でなければ分らない。それ故一つの芝居を甲の人は面白いと感じ、乙の人はつまらないと感じても、既に感覺の相違であるから議論をするだけが野暮である。一人は此の鰻がうまいと云ひ、一人がまづいと云つたところで、二人の舌が違ふ以上は如何とも仕方がない。

○

正宗氏は私が菊五郎を褒めたのに對し、「厄年」の芝居を例に引いてさんざん菊五郎をコキ卸された。

私もあの「厄年」を見たが、私に云はせれば菊五郎の扮する商人がうすつぺらなものであつても、眞の商人らしくなくつても、そんなことは一向問題でないのだ。あの芝居は菊五郎のものとして決して出來のいい方ではなかつたけれども、しかし事件がサラサラと運んで行くところに、あつさりとした、上等の米の飯でお茶漬けを食ふやうなうまみはあつた。菊五郎といふ役者は世話物で鍛へたせゐか、妙にああ云ふサラサラとしたものをやるとその人柄に附いてゐる魅力が出る。眞の商人にはならなくつても何か菊五郎一流の美が現れる。それが私は好きなのである。

が、「厄年」を評し、菊五郎を評してゐる正宗氏が、何故にあの中の朝妻船の踊りに就いて一言も云つてゐないのであらうか。これが私には不思議であつた。舞踊を除いて菊五郎を論ずるのは無理であり、又あの場面が「厄年」の中でも一等よかつた筈であるのに。

○

私は何も歌舞伎劇ばかりを謳歌し、新しい芝居を否定する積りではない。けれど少くとも今のところ歌舞伎劇の外には、人の感覺に訴へ、人を醉はせるだけの舞臺上の美がないことも事實である。私は澤正の「金色夜叉」よりはいかに不出來でも菊五郎の「厄年」を取る。

完成された美であつても古くなれば飽かれる道理だから、いつまでも歌舞伎劇で滿足する譯には行かないし、いづれはそれに取つて代るべき演劇樣式が生れなければならないが、それにはわれわれ日常の生活の形式がもつと整つて來なければ、芝居ひとりが生れ變ることは出來ないと思ふ。西洋文化と東洋文化とが雜然混沌として入り亂れ、秩序もなければ均整もない今の世の有樣では、さう簡單に行くものではない。歌舞伎劇は徳川時代の文明が爛熟の域に達した時に最も進步した。芝居は外の藝術よりも、社會的、物質的條件に左右されることが甚だ多い。それは凡べての藝術の中で最後に發達するものである。まだ新しい音樂さへ生れないのに、何として新しい芝居が生れよう。

○

世の中には、物に醉へる性質の人と醉へない性質の人とある。後者のやうな人に取つては、歌舞伎劇のみならず、凡そ芝居と云ふものは悉く無用の長物であらう。

私の見るところを以てすれば、正宗氏は醉へない性質の人であり、それを誇りとしてゐるかに思はれる。此の人が劇場へ出入りをして抑も何を求めようとするのか。

豫約募集

◇全八卷◇

菊判總頁五千六百餘頁

小穴隆一畫伯裝幀

芥川龍之介全集

芥川龍之介全集刊行に就て

曠世の才を抱きてしかも黽勉倦まず、鏤心彫琢して金玉の文字を就す。幽雅又清艶、警拔又清妙。隻波のうちに漂渺を藏め、古典のごとき沈靜のなかに近代の憂思を潜む。篇篇一句として心血の痕はだらならざるは無し。これ彼が藝術に非ずや。少年既に鬱然として大家を成し、獨自の境を拓き得てしかも須臾も自足せず。藝術の諸形式諸傾向、一として試みざるは無く、試みて遂げざるは無し。鷲は日輪を望み見ていや高く翔らんとす。悲しむべし多病と多愁と。腰圍は詩に因つて瘦せ、雙肩は生に由つて歪みぬ。一朝人生の無常を感悟するや、冷然として大死に趣き身邊一絲の亂るるものを見ず。これ彼が生涯に非ずや。彼を稱して人生の殉教者また藝術の聖使徒と呼ばんとする者はひとり我等のみにあらざるべし。宜なり、天下を擧げて彼がために痛哭する事や。噫生命は短し、されど藝術は永し。彼が泡沫の生涯は終りぬ、然れども見よ、嚴として彼が藝術は天地とともに在り。我等友人相謀りて彼が述作を網羅し、芥川龍之介全集の刊行を企つる所以のものは、實に玆に存す。期して斷翰零墨をも洩らさざらんとするは、彼が如き一代の文人に對する時代の義務にして、ひとり友朋の私情のみにあらざるを信ず。不文をもつて微衷をのべ江湖の諸君子に訴ふ。幸にこの擧を賛して我等をして大成せしめられよ。謹みて白す。

▷申込期限

昭和二年 十一月三十日 ◁

編輯同人

小穴隆一　室生犀星　久米正雄　佐佐木茂索
谷崎潤一郎　宇野浩二　小島政二郎　菊池寛
恒藤恭　久保田万太郎　佐藤春夫
（いろは順）

芥川龍之介全集刊行の經緯に就て

芥川龍之介全集刊行については、生前、大正十五年十月、新潮社と契約がとりかはしてありました。ところが遺書には、「僕の作品の出版權は（若し出版するものありとせん乎）岩波茂雄氏に讓與すべし。（僕の新潮社に對する契約は破棄す。）僕は夏目先生を愛するが故に先生と出版書肆を同じうせんことを希望す。但し裝幀は小穴隆一氏を煩はすことを條件とすべし。（若し岩波氏の承諾を得ざる時は既に本となれるものの外は如何なる書肆よりも出すべからず。）勿論出版する期限等は全部岩波氏に一任すべし。この問題も谷口氏の盡力に待つこと多かるべし。」と認めてあります。よつて谷口喜作氏は、初七日の翌日、七月三十一日、新潮社に赴き折よく在社の佐藤義亮氏と面談すると、大變に潔く解約して下さいました。ただ當時の中根駒十郎氏が不在でしたので、契約書は八月十日、靈前に供へて頂いた次第でした。岩波氏には八月十九日、田端で谷口氏面接、委細お頼みすると、岩波氏も大變よろこんで引受けて下さいました。全集刊行につきましては、死去の當時、何等かの噂も出たりして多少皆さんのお耳にも入つてゐることと存じますので、右の趣を明かにすると同時に、佐藤氏岩波氏の御好意を茲に感謝する次第であります。

昭和二年九月

芥川比呂志
芥川文子

故人の知遇に感激しその附託に背かざらんが爲め微力を顧みず全集刊行の事業を設んでお受け致しました。薄弱なる動機と愼重を缺く態度とによる廉價版横行の際かゝる全集の刊行は困難が尠くないのでありますが眞に藝術を愛する江湖諸君子の諒解と援助とを待つて此事業の達成を故人の靈に告げたいと思ひます。

昭和二年九月

岩波茂雄

第一卷　小説　第五卷　隨筆
第二卷　小説　第六卷　隨筆
第三卷　小説　第七卷　書翰
第四卷　小説　別冊

申込略規

頒布方法　全八卷豫約申込者にのみ頒布。但選擇豫約の求めに應ぜず。

刊行期日　昭和二年十一月より毎月一冊づゝ刊行。昭和三年六月完結。

體裁　菊判十ポイント活字一段組枠附一冊平均七百餘頁、紙質英國製コットン紙、布裝天金函入。口繪二葉宛

申込方法　申込金四圓を添へて期限内に申込まれたし。但此申込金は最終會費に充當。一時拂は申込金不要。

申込期限　昭和二年十一月三十日。

會費　毎月拂　一冊分　四圓
一時拂　全八卷　參拾圓

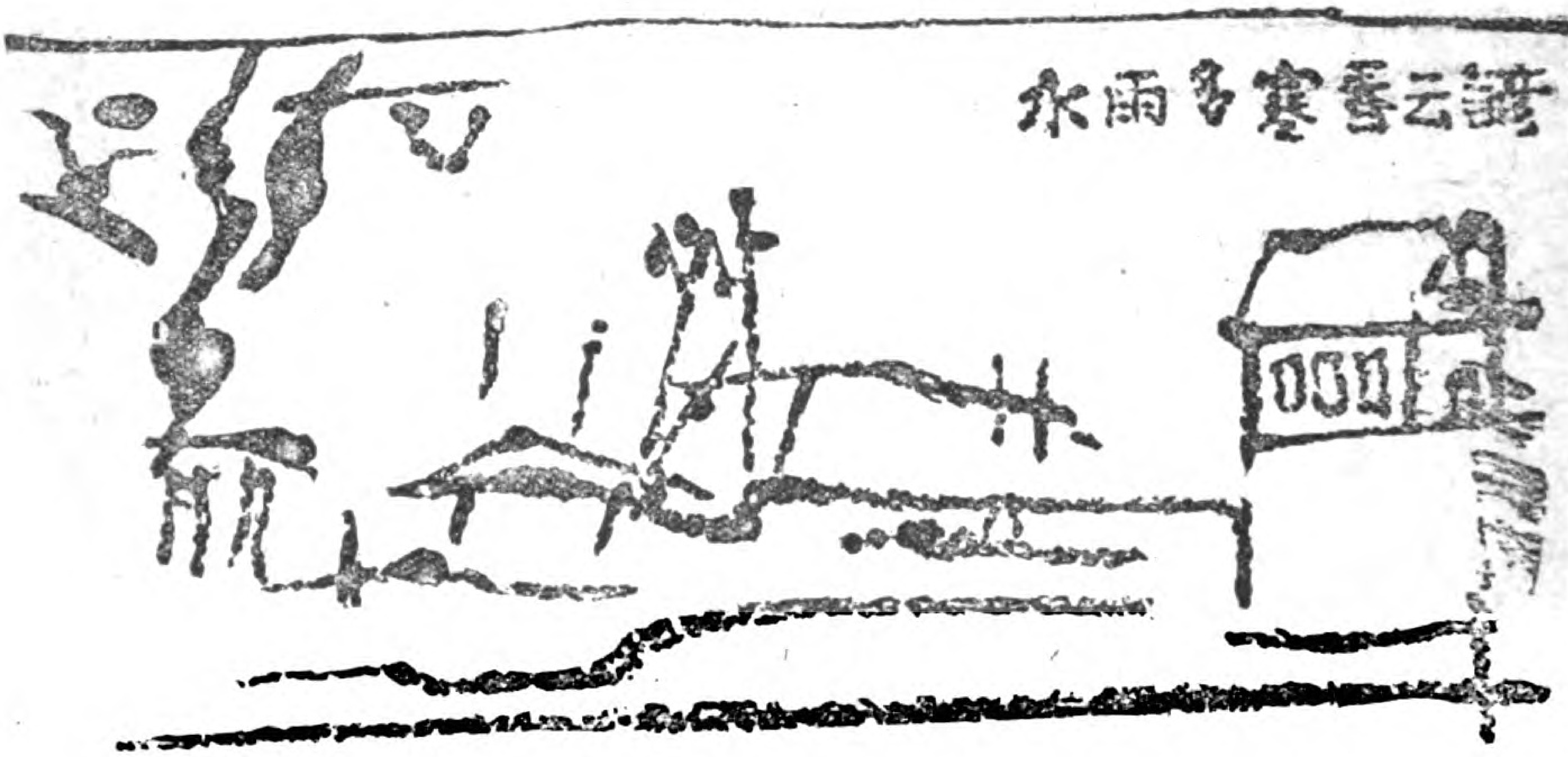
送料　會費の外に書留送料を要す。

◇豫約申込取扱全國各書店

內容見本
無代進呈

東京神田南神保町
振替東京七四四一六番
電話九段(33) 二一〇八番・二一〇九番・一〇二二番

岩波書店



暗夜行路

志賀直哉

前月號の後半を少し書きかへたので、讀者及び編輯者にはお氣の毒であるが、それだけを再錄する事にした（作者）

十

直子の怪我は大した事はなかつたが、腰を強く打つてゐて、二三日は起上る事が出來なかつた。

謙作は一度直子とよく話し合ひたいと思ひながら、直子が變に意固地になり、心を展いて呉れない爲めにそれが出來なかつた。

直子の方は彼が未だ要との事を含んでゐると思ひ込んでゐるらしいのだが、謙作から云へば、苛々した上の發作で、要との事など其場合浮ぶだけの餘裕は全くなかつたのだ。

「お前は何時まで、そんな意固地な態度を續けて居るつもりなんだ。お前が俺のした事に腹を立て、あんな事をする人間と一生一緒に居る事は危險だとでも思つてゐるんなら、正直に云つて呉れ」

「私、そんな事一寸も思つてゐないことよ。只腑に落ちないのは貴方が私の悪かつた事を赦してゐると仰有りながら實は少しも赦してゐらつしやらないのが、つらいの。發作

邪推つて、私が何か利かないだけで、あゝいふ事をなさるとはどうしても私、信じられない。お栄さんにも前の事、うかゞつて見たけれど、貴方があれ程病的な事を遊ばした事はないらしいんですもの。お栄さんも、近頃は餘程變だと云つてゐらしたわ。前にはあんな人ではなかつたとも云つてゐらした、そんな事から考へて、貴方は私を赦してゐると仰有つて、實はどうしても赦せずに居らつしやるんだらうと私思ひますわ。貴方は貴方が御自分でよく仰有るやうに私を憎む事で、尚不幸になるのは馬鹿々々しいと考へて、赦してゐらつしやるんだと思ふ。その方が得だと云ふお心持で赦さうとしてゐらつしやるんぢやないかと思はれるの。それぢやあ、私、どうしてもつまらない。本統に赦して頂いた事には何時まで經つてもならないんですもの。それ位なら、一度、充分に憎んだ上で赦せないものなら赦して頂けなくても仕方がないが、それで若し本統に心から赦して頂けたら、どんなに嬉しいか分らない。今までのやうに決してお前を憎まうとは思はない。拘泥もしない。憎んだり拘泥したりするのは何の益もない話だと云ふ風に仰有つて頂くと、うかゞつた時は大變ありがたい氣がしたんですけど、今度のやうな事があると、矢張り、貴方は憎んでゐらつしやるんだ、直ぐさう私には思へて來るの。そして若しさうとすればこれから先、何時本統に赦して頂ける事か、まるで望がないやうに思へるの」

「それだからどうしたいと云ふんだ」

「どうしたいと云ふ事はないのよ。私、どうしたら貴方に本統に赦して頂けるか、それを考へてるの」

「お前は無暗に謝りたいとは思はないか」

「そんな事。又どうして貴方はそんな事を仰有るの？」

「いや。只お前が先に希望がないやうな事を云ふから訊いて見たゞけだが……兎に角、お前が今日位はつきり物を云つて呉れるのは非常にいゝ。お前が變に意固地な態度を示してゐるので、此方から話し出す事が今まで出來なかつた」

「それはいゝけれど、私の申上げる事、どう？」

「お前の云ふ意味はよく分る。然し俺はお前を憎んでゐるとは自分でどうしても思へない。お前は憎んだ上に赦してくれと云ふが、憎んでゐないものを今更憎むわけには行かないぢやないか」

「……貴方は何時でも此度、さう仰有る」

直子は怨めしさうに謙作の眼を見詰めてゐた。

謙作はそれは直子の云ふやうに實際もう一度考へて見る必要があるかも知れないと思つた。

「……それにしても此間の事をさう云ふ風に解すのは迷惑だよ。兎に角、俺達の生活がいけないよ。そしていけなくなつた源因には前の事があるかも知れないが、生活がいけなくなつてから起る事がらを一々前の事まで持つて行つて考へるのは、それは矢張り本統とは思へない」

「私は直ぐ、さうなるの。僻み根性かも知れないけど。それともう一

つは貴方はお忘れになつたかも知れませんが、蝮のお政とかいふ人を御覧になつた話ね。あの時、貴方が云つてゐらした事が、今、大變氣になつて來たの」

「どんな事」

「懺悔と云ふ事は結局一遍こつきりのものだ。それで罪が消えた氣になつてゐる人間よりは懺悔をせずに一人苦んで、張のある氣持で居る人間の方がどれだけ氣持がいゝか分らない、とさう仰有つたわ。その時、何とかいふ女義太夫だか藝者だかの事を云つてゐらした」

「榮花か」

「その他あの時、まだ色々云つてゐらした。それが今になつて、大變私につらく憶ひ出されるの。貴方はお考へでは大變寛大なんですけど、本統はさうでないんですもの。あの時にも何んだか貴方があんまり執念いやうな氣がして恐しくなりましたわ」

謙作は聞いてゐるうちに腹が立つて來た。

「もういゝ。實際お前の云ふ事は或る程度には本統だらう。然し俺から云ふと總ては純粹に俺一人の問題なんだ。今、お前がいつたやうに寛大な俺の考へと、寛大でない俺の感情とが、ピッタリ一つになつて呉れさへすれば、何も彼も問題はないんだ。イゴイステイックな考へ方だよ。同時に功利的な考へ方かも知れない。さういふ性質だから仕方がない。お前といふものを認めてゐないか、認めたつて認めなくたつて、俺自身結局其所へ落ちつくより仕方がないんだ。何時だつて俺はさうなのだから……。それにつけても生活をもう少し變へなければ駄目だと思ふ。若しかしたら暫く別居してもいゝんだ」

「…………」直子は一つ所を見詰めたまゝ考へ込んでゐた。そして二人は暫く默つた。

「…………別居と云ふと大變妙に聞こえるが、」謙作は幾らか和らいだ氣持で續けた。「半年程俺だけ何所か山へでも行つて靜かにしてゝ見たい。醫者に云はせれば神經衰弱かも知れないが、假りに神經衰弱としても醫者にかゝつてどうかするのは厭だからね。半年といふが或は三月でもいゝかも知れない。一寸した旅行程度にお前の方は考へてゝいゝ事なのだ」

「それは少しも僻まなくていゝ事なのね」

「勿論さうだ」

「本統に僻まなくていゝ事ね」直子はもう一度確めてから、「そんならいゝわ」と云つた。

「それでお互に氣持も身體も健康になつて、又新しい生活が始められれば此上ない事だ。俺は屹度さうして見せる」

「えゝ」

「俺の氣持分つてるね」

「えゝ」

「暫く別れてゐるといふ事は、決して消極的な意味のものぢやないからね。それ、分つてるね」

「えゝ。よく分つてます」

其晩謙作は暫く家を離れる事をお榮に話した。お榮は大不賛成だつた。お榮は尾道行の前例から云つてもそんな事は何んにもならないと云つた。そして幾ら今の生活が惡いからといつて、夫婦が別居して、更にいゝ生活に入れる筈がないではないかと云つた。謙作は說明に弱つた。

「第一尾道行とは動機が幾らか異ふんですがね。あれは出來ない仕事を無理にやらうとして失敗したが、今度は仕事は第二で自分の精神修養とか健康回復とかいふのが目的なんだから。別居といふと大變大袈裟に聞こえるけど、何も別に家を持つといふのではなく、保養に旅へ出た位に思つて貰へば丁度いゝんですよ」

「何所へ行く氣なの？」

「伯耆の大山へ行かうと思ふんです。先年古市の油屋で一緒になつた鳥取の縣會議員がしきりに自慢してゐた山だ。天台の靈場とかで、寺で泊めて呉れるらしい。今の氣持からいふとさう云ふ寺なんか却つていゝかも知れない」

十一

謙作はいよいよ旅へ出る事にしたが、普通の旅とは心構へが異うだけに出發際が何んとなく妙だつた。

「何時でもいゝんだ。どうせ一日で山までは行けないんだから……」……彼は出來るだけ輕い氣らしい調子をしてこんな事を云つてゐた。彼は汽車案内を見ながら、三時三十六分の汽車に乗れるか。若しそれに遅れたら五時三十二分の急行でもいゝ」

「電報や何かお手紙下されば、直ぐ明治屋から送らせますから……」

「まあ、なるべく、さう云ふものを取寄せずに、むかうの物で間に合はさうよ。なまじ、都の風が吹いて來て、里心がついては面白くない。さう云ふ意味で、なるべく用事以外、お互に手紙のやり取りはよさうぢやないか」

「えゝ。……それでも若し貴方に書く氣がおでになつたら下さればいいわね。若しさう云ふ氣におなりになつた時には」

「さうだ。それはそれでいゝ譯だが、そんな事を云つて了うと、お前がそれを待つて居さうで矢張り窮屈になるね」

「それならどうでもいゝわ」

「お前は俺の事なんか何んにも考へなくていゝよ。お前は赤ちゃんの事だけ考へてゐればいゝんだ。俺も赤坊が丈夫でゐると思へば、非常に氣が樂だよ。迷はず成佛出來ると云ふものだ」

「亡者ね、まるで」と直子は笑ひ出した。

「實際亡者に違ひないよ。その亡者が、佛様になつて歸つて來るんだ」

「いゝたち際に緣起の惡い事を仰有るのね」

「これほど緣起のいゝ事はないさ。即身成佛、と云つてこのまゝ佛様

になるんだ。歸つて來ると俺の頭の上に後光がさしてゐるから……。兎に角、俺の事は心配しなくていゝよ。お前は自分の身體を氣をつけるんだ。それから赤ちやんを特に氣をつけて、」

「つまりおんばさんになつた氣でね」

「いゝいゝ。おんばさんでも母親でもいゝ。兎に角、暫く細君を廢業した氣になつてゐて貰ひたい。未亡人になつた氣でもいゝ」

「貴方はどうしてさういふ縁起の悪い事を云ふのがお好きなの？」

「蟲が知らすのかな」

「まあ！」

謙作は笑つた。實際彼は今日の出立を「出家」位の氣持でゐたのだが、さういふ氣持をその儘現はして出るわけには行かなかつた。丁度いゝ具合に話が笑談になつたのを幸ひ、そろ／＼出かける事にした。花園驛から鳥取行に乘る事にした。

「もう送らなくていゝよ。なるべく簡單な氣持で出かけたいから」

お榮が茶道具を持つて出て來た。

「三時に家を出ます。――それからお前、仙に俥を云はして呉れ。三時」

「もう少し早くして御一緒に妙心寺邊まで歩いちや、いけない？」

「暑いのに歩いたつて仕方がないよ」

「…………」直子は一寸不服な顔をして、臺所の方へ出て行つた。

「又、先みたやうに瘦つこけて歸つて來ちやあ、いやですよ」お榮は玉露を丁寧に淹れながら云つた。

「大丈夫。何も彼も卒業して、人間が變つて還つて來ますよ」

「時々お便りを忘れないやうにね」

「今も云つた所だが、まあ便りはしないと思つてゝ下さい。便りがなければ丈夫だと思つてようござんす」

「今度は三人だから淋しくはないが」

「赤坊を入れて四人だ」

「さう／＼。赤ちやん一人で二人前かも知れない」

「鎌倉へは手紙を出しませんからね。あなたから、出來るだけ何氣なく書いて出しといて下さい。餘計な事を書かずに」

お榮は點頭いた。

謙作は茶を味はひながら、柱時計を見上げた。二時を少し廻つてゐた。

直子が赤兒を抱いて出て來た。未だ眠足りない顔で、顔の眞中を皺にしながら、まぶしさうに眼をしてゐる。

「お父様の御出發で、今日は感心に泣かないわね」

「その顔はどうしたんだ」謙作は笑ひながら指先で赤兒の肥つた頰を突いた。「もう少し、機嫌のいゝ顔をして呉れよ」

赤兒は全く無心に首をぐたり／＼さしてゐた。

「隣人は如何なる場合にも和睦の途を極めよ。近所の隣人は面識の時で

こり〳〵した」
「えゝ、そりや大丈夫。第一病氣になんぞさせない事よ」
「今のうちはお乳だけだから、心配はないが、來年の夏あたりは何んでも食べるやうになるから余程氣をつけないとね」お榮は直子に茶をつぎながら云つた。
謙作は風呂場へ行つて水をあび、着物を更へた。そして暫くすると、俥が來たので、大きなスーツケースを膝の間に立て、西へ廻つた暑い陽を受けながら一人花園驛へ向つた。
嵐山から龜岡までの保津川の景色は美しかつた。が、それよりも彼は青々した淵を見ると、それに浸つて見たかつた。川からきつたての山々の上に愛宕が僅かにその頂を見せてゐた。彼はいつも西に見る山をもう東に見てゐた。そして彼の頭には瞬間衣笠の家が遠く小さく浮かんだ。
綾部、福知山。それから和田山へ來て、漸く夏の日が暮れた。
彼は其晩、城崎へ泊る事にして、豐岡を出ると、車窓から名高い玄武洞を見たいと思つてゐたが、暗い夜で、廣い川の彼方に五つ六つ燈を見たゞけだつた。
城崎では彼は三木屋といふのに宿つた。俥で見て來た町の如何にも温泉場らしい情緒が彼を樂ませた。高瀬川のやうな淺い流れが町の眞中を貫いてゐる。その兩側に細い千本格子のはまつた、二階三階の湯宿が軒を竝べ、眺めは寧ろ曲輪の趣きに近かつた。又温泉場としては珍らしく古風な感じが彼を喜ばした。一の湯といふあたりから細い路を入つて行くと、桑木細工、麥藁細工、出石焼、さういふ店々が續いた。殊に夜店を開いて賑つた細工物が明るい電燈の下に大變美しく見えた。
宿へ着くと彼は直ぐ前の御所の湯といふのに行く。大理石で囲つた湯槽の中は立つて彼の乳まであつた。強い湯の香に、彼は氣分の和らぐのを覺えた。
出て彼は直ぐ浴衣が着られなかつた。拭いても〳〵汗が身體を傳つて流れた。彼は旋風機の前で暫く吹かれてゐた。傍のテーブルに出石案内といふ小さな本があつたので、彼はそれを見ながら汗の退くのを待つた。
大乘寺、俗に應擧寺といふのがあつた。それは城崎から三つ先の香住といふ所にある。彼は翌日其所へ寄つて見ようと思つた。子供から應擧の名は聞いてゐたが、その後、狗子や鷄や竹などの繪を見て彼は少しも感服しなかつた。第一圓山派といふものに殆ど興味を持たなかつたが、再び此邊へ來るかどうか分らぬ氣がしたので、寄つて見る氣になつた。
此所が暑いのか、其晩が暑いのか、何しろ蒸暑くて彼は寢つかれなかつた。此湯は春秋、或は冬來て却つていゝ所かも知れぬと思つた。
翌朝起きたのは六時頃だつた。彼は寢不足のぼんやりした頭で芝生の庭へ出て見た。直ぐ眼の前に山が聳え、その山腹の松の枯枝で三四

猴の鳴が交々啼いてゐた。庭には流れをひき込んだ池があり、其所には青鷺が五六羽首をすくめて立つてゐた。彼は未だ夢から覺めないやうな氣持だつた。

十時頃の汽車で應擧寺へ向ふ。香住驛から俥で行つた。

應擧の書生の時代、和尚が應擧に銀十五貫を與へた。應擧はそれを持つて江戸へ勉強に出た。その報恩として、後年此寺が出來た時に一門を引き連れ、寺全體の唐紙へ揮毫したものだといふ。

應擧が一番多く描いてゐた。その子の應瑞、弟子では呉春、蘆雪もあり、それぐ面白かつた。

應擧は書院と次の間と佛壇の前の唐紙を描いてゐた。書院の襖絵の山水が殊によく思はれた。如何にも徃氣な繪だつた。次の間は呂洞賓（？）これには濃い彩色があり、もう一つは松に孔雀の繪だつた。

呉春の四季耕作圖は温厚な感じで氣持よく、蘆雪の群猿圖は奔放で如何にも蘆雪らしく、八枚の襖の二枚は構圖からも描法からも、傷輕を投出して了つたやうな露骨な破綻を見せてゐた。酒に醉つた蘆雪が眼に浮び、呉春との對照が面白かつた。

應擧の模寫といふ禪月大師の十六羅漢が未完成のまゝ庫裡の二階に陳列してあつた。

沈南蘋の双鶴圖、浪の間に頭を出してゐる岩の上に、雌鶴が足を縮め、兩翼を開き、脊を低く首をめぐらし、雄鶴を見上げながら立つてゐる。上の岩に眞直ぐに立つた雄鶴が強い眼差でそれを見下してゐる。雌鶴の子を生む爲めの本能が如何にも露骨に描き出され、そしてそれを上から強く見下してゐる雄鶴の態度も謙作には興味があつた。

「もう、他には……？」謙作は脊後に立つてゐる小坊主を顧みた。

「まあ、繪はこんなもんですが、此他に左甚五郎が彫つた龍といふのが屋根にあります」

二人は庫裡から下駄を穿いて、戸外へ出た。戸外は何時の間にか曇つてゐた。二人は本堂を左へ廻はつた。石段から一間程登つた所に一寸した平地がある。其所から、大屋根破風に置かれた大きな丸彫の龍を望んだ。龍の寫實だと思ひ、彼は輕い可笑味を覺えた。

「これは實物大ですね」さう云つて笑つたが、小坊主には通じなかつた。

「おゝ、降つて來た」

仰ぎ見た謙作の顔に大粒な雨があたつた。

「此龍が雨を呼んだのだ」彼はこんな笑談をいひながら、又庫裡の方へ歸つて來た。

十二

其晩、謙作は鳥取に泊つた。此所では幅一町長さ七里に亘る海岸の砂原にあると云ふ大摺鉢、小摺鉢といふもの、それから多鯰ヶ池といふその砂原に添ふた小さな湖の見物を薦められたが、何里かを俥に揺られて行くのが、もう臆劫で、繪端書を買つて濟ました。晩餐の給

仕に出た若い女中は多鶴ヶ池の伝説、湖山長者の伝説などを彼に聞かせた。多鶴ヶ池の話ではお稲といふ娘が大蛇になつて其池に住んでゐたが、或る時、鳥取の侍を追ひかけ、侍が家へ逃込んで門を閉めたのを口惜しがり、自身の鱗を三枚門の扉に貼りつけて帰つて行つた。その鱗は最近まで其家に伝へられてあつたといふ話を真面目に話してゐた。

謙作は翌日の天気模様を気にしながら寝た。若し雨ならばもう一日何所かへ泊らねばならぬのが今は少し面倒になつてゐた。東郷湖の東郷温泉なども面白さうに思はれたが、それよりも早く、涼しい大山に登り、延び／＼した気持になりたかつた。

夜中、驟雨の音を聞いて、彼はこれならば却つてあしたはいゝかも知れぬと思ひながら眠つた。

翌日は果たしていゝ天気だつた。ヂリ／＼と照りつけられる一日が想はれるやうな朝だつた。彼は九時頃の汽車に乗つたが、又前日のやうに何十といふトンネルをくゞる事が、おもひでもあつた。

彼は前夜、町で買つて来た帝国文庫の高僧伝を開き、元三大師の条を少し読んで見たが、直ぐ疲れて了つた。湖山池の景色はよかつた。湖山長者が、田植の日暮に日を呼び返へした罰で、その持田が一夜にかういふ池になつて了つたといふ伝説は此池としてよく出来てゐると思つた。低い山と山との間の如何にも耕地として相応しい場所が、一面の水をたゝへてゐる様は、出水の田甫と見れば見られる眺めだつた。此湖の伝説をよく書いた小泉八雲の物にこれはないかしら——さう云へばハーンの物を少し持つて来ればよかつたと彼は思つた。東郷池は湖山池に較べ、何の趣きもない湖だつた。伝説があるかどうか彼は知らなかつたが、恐らくないだらうと思つた。兎に角人口に膾炙される伝説を持つた場所は何かの意味でさういふ趣きを供へてゐるものだと思つた。

上井、赤碕、御来屋。彼は汽車の窓から車外の景色を眺めて来た。盛夏の力といふやうなものが感ぜられ、彼は近頃に珍らしく元気な気持になつた。二尺程に延びて密生した稲が風もないのに強い熱と光との中に揺れて見えた。

「あゝ稲の穂が燃えてゐる」彼は亢奮しながら思つた。

實際稲の色は濃かつた。強い熱と光と、それを真正面に受け、押合ひ、へし合ひ歓喜の声をあげてゐるのが、謙作の気持には余りに直接に来た。彼は今更にかう云ふ世界もあるのだと思つた。人間には穴倉の中で啀合つてゐる猫のやうな生活もあるかわりに、かう云ふ生活もあるのだと思つた。今日の彼にはさういふ強い光が少しも眩しくなかつた。

大山といふ淋しい駅で汽車を下りた。俥夫を呼んで訊くと、大山までは何六里あるとの事だつた。それも俥で行けるのは初めの三里で、あとは徒歩で行くのだといふ。

「それぢやあ、此荷物はどうするかね。馬にでもつけて行くのか？」

「俺が脊負つて行きます」

仲仕は五十餘りの痩せた男だつた。

「木が入つてるから却々重いぜ」

「なに、此位は……」仲仕はそれをもう一度さげてみて笑つた。

「旦那は？」

「私は汽車で辨當を食つて來た」

「それぢやあ直ぐ出かけませう。俺は分けの茶屋で何か食はして貰らへばいゝ」

これから六里の道を一緒に行くといふ事が既に彼等を幾らか親しくしてゐる感じだつた。

謙作は俥に乘つた。

「日は長えが、何しろ半分からはづつと登りだからね」

前に遠く、線の立派な大山を眺めながら謙作は此炎天に此仲仕があすこまで荷を運ぶかと思ふと不思議な氣がした。

「上は餘程涼しいだらうね」

「そりやあ涼しい。昔は此邊の氷と云やあ、みんなあの山の雪を持つて來たもんだ。冬、積み重ねて置いたのを夏になつて、切り出して來るのだ。俺は若い頃、その人足をやつてゐた」

狹い通りで子供達が騒いでゐた。人取りのやうな遊びで、子供達はそれに夢中で、却々俥をよけなかつた

老仲仕は丁度其所に落ちてゐた細い竹の枝を拾ふと、子供等の頭をちよい／＼叩きながら行つた。

「老ぼれ」「阿呆」子供達は毒づいてゐたが、老車夫は笑ひながら、手の屆く子供の頭は一々叩いた。

間もなく、その狹い通りから急に廣い道へ出た。七八間あつて軒の低い家が兩側に並んでゐた。それが此道を一層廣々と、又明るい感じに見せた。三叉に竹竿を渡し、それへ白い無闇と長い物が一杯掛けてあつた。片側半分程は軒並それだつた。干瓢だといふ。

「干瓢にしちやあ幅が廣いな」

「未だ乾かねえからさ」

「名物にでもなつてゐるのか」

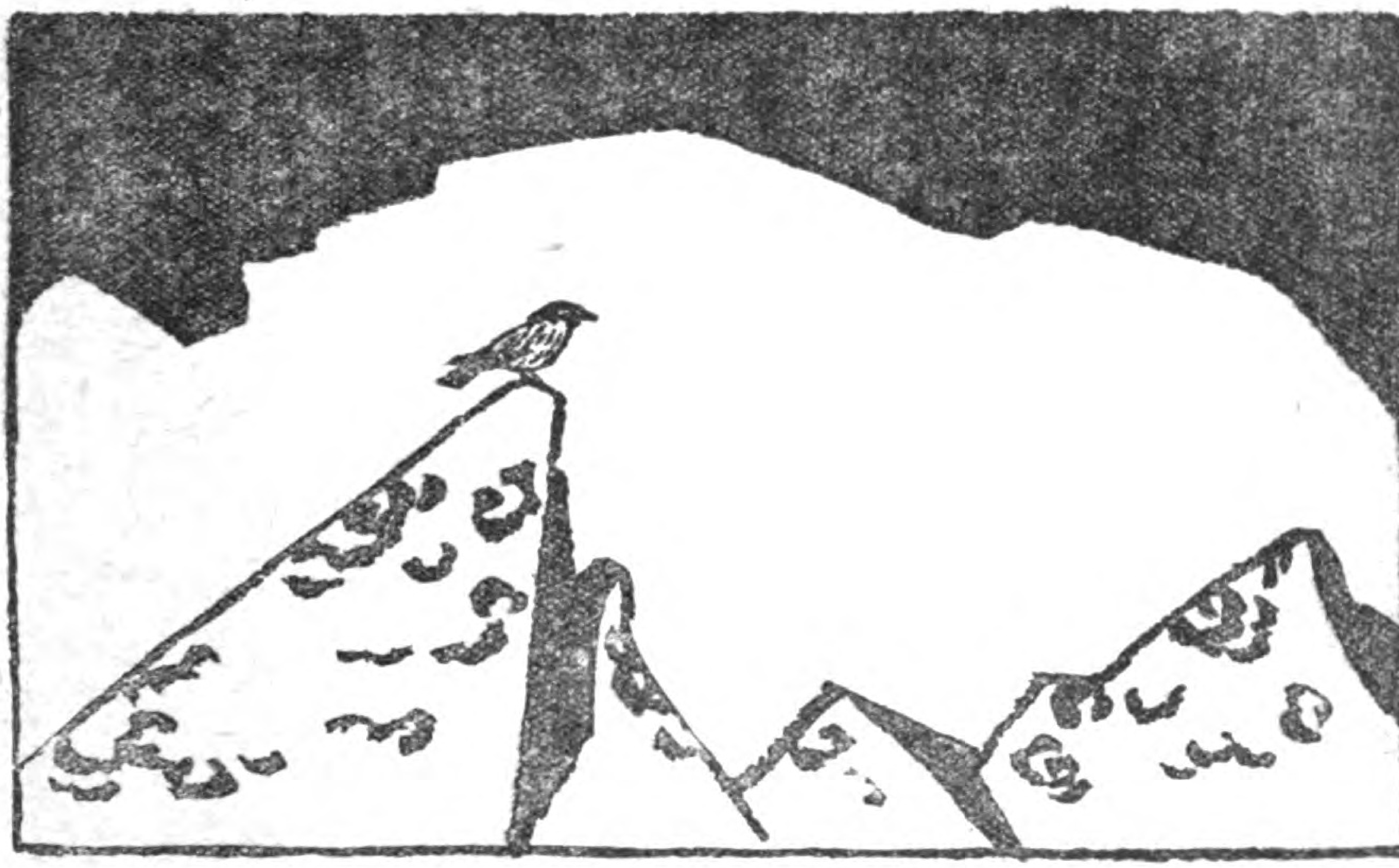
「なに、名物といふ程ぢやあない」

駈けたり、歩いたり、二人は氣樂にこんな話をしながら行つた。

二里來て、其所からはもう俥は通はなかつた。老車夫は俥を百姓家に預け、脚絆で荷を脊負つた。謙作は麻帷子の裾を端折つた。

道から細い坂を登ると、上は廣々した裾野だつた。最近まで軍馬の養成所になつてゐたとか、廣々した氣持のいゝ處だつた。一體大山は馬市でも名高い所だと云ふ

二人はゆるい傾斜の原をゆつくり歩いて行つた。（未完）



皮膚

横光利一

その地下室では眞實よりも機智を愛した。ここでは自由に疲れ果てた飽滿狀態を監獄と云つてゐる。アスパラガスの影の動かぬ耳。柘榴の割れ目に齒を立てた女。バアイオリンの下で傾くカツプ。煙草の煙に首を締められた蝶ネクタイ。圓形のソフアーにズボンの縞が觸手のやうに開いてゐる。

「アイロンピヤー。」

「グレナーデン。」

フオークの花の咲き亂れたサイドホールの鏡の中を、ボーイの胸が帆のやうに辷つていつた。梶は近か寄る仲間に伯爵夫人を紹介した。片眼の潰れた社會主義者。ポンプのやうに饒舌る新聞記者。女に相槌より打たぬ演出家。耳を引つ張る癖のある評論家。窓の開閉ばかり氣にする圖書館長。時計を質に入れることの好きな法律家。鉢の小さな腹水を猫だと云つてきかない閨秀作家。伯爵夫人は此の會合の特長を捕へることに苦しんだ。いつも視線の獨占に馴れてゐる夫人の肩は、此の夜に限つて輕やかな視線のために呼吸の入れ場を紛失した。圓形のソフアーの一角では今しも愛蘭の處分に就いて問題が起つてゐた。梶は丸煮の鳥にナイフを入れながら伯爵夫人に囁いた。

「あなたは、此處の空氣については、あまり觀察なすつてはいけませんよ。」

「でも、あなたにだけならいいんでせう。」

「いや、僕についてはなほ更です。」

ダンスがピアノの傍から起り出した。周圍のソファーでは忽ち踊る組の處分がついて、縞のズボンが一齊に立ち上つた。テーブルの上で指揮がタクトをとると、鳥の足が皿の上で踊り出した。ストッキングは金色の圓弧を描いて流れていく。柘榴が床の上に轉げると、靴先で蹴られながら踊りの組から組へと跳ねていつた。

「あなたは今夜は、昨日と今日とを間違へてゐらつしやるんだわ。」

「いや、今夜はあなたを愛してゐます。」

「道理であなたの足は、ひつかかつてばかりゐますのね。」

置き忘れられたコップの酒の中で、縺れた背中の波が搖れてゐた。棍は伯爵夫人の不似合な諧謔を粉碎して踊りの環の中へまぎれ込んだ。

「あなたが結婚をなさる前には、よく僕はあなたと踊つたもんですが。」と棍は云つた。

「ええ、あの時には、あたしの足もよく延びたもんですわね。」

「でも、まだお忘れにならない所をみると。」

「もう此の頃は、連れていつた鸚鵡とばかりお話をしてゐますの。」

「此のお宵中では、そんなことは何有るもんぢやありませんよ。」

「いいえ、あたしの背中は何時の通り痩せて了つて。お手に何かつきましてよ。」

「かうしてゐると、背中がまるでぐるぐる廻つてゐるやうなものですわ。」

「ええ、あの頃も、こんなに何もかも廻つてばかりをりましたわ。」

「僕があなたを、自轉車に乘つて追つ驅けたことを、あなたは覺えてゐらつしやるかしら。」

「ええ、それはもう、あたしは、あの頃のことばかり思ひ出して暮してゐるやうなものなのよ。」

踊りの群れは時計の針とは逆に、思ひ出のやうにホールの空間を廻りながら流していつた。

十一時が鳴ると、椅子の踊が一つづつ壁際にテーブルの面を眺め出した。棍は帽子とステッキを受けとつて地下室から出て來ると伯爵夫人に追ひついた。二人は暗い石段を斜めに降りながら、花棚の蔭の下で青いランプを沈めてゐる馬車の方へ近か寄つた。

「あなたは、もうどこへもお廻りにはならないの。」

「ええ。」

「じや、どうぞ。」

二人は馬車の燈の中へ身を隱した。建物に纏つた燈の光が車輪の口から退いた。馬丁は霧に濕つた夜氣を靜かに鞭で叩きながら、石橋の上を驅つていつた。

伯爵夫人は眼の耳を受話器のやうにあてたしたから、

「ね、あそこにゐらした方方はなぜみんな、あんなに戀愛を侮辱してゐらつしやるんでせう。あなたはどんな風にお考へになりまして？」

「そりや、戀愛なんて、あり得ないと思つてゐる者ばかりだからですよ。」

「あたしには、そんな風には思へないの。何んだかみんな、戀愛を恐れてゐらつしやるやうな氣がしたわ。」

「いや、もうそんなものなんか、どこにも恐れる必要さへ認めないと云ふ連中ばかりなんですよ。」

「おや、どうしてそれで、あんなに樂しさうにしてゐられるの。」

「おや、苦しさうな顔をしてゐて、何の役に立つとお思ひです？」

「おや、あなたも矢張り、いつも、そんなお考へを持つてゐらつしやいましたのね。」

「しかし、これでも、これが一番安全で、簡素な生活法だと云ふことも、ちやんと心得てゐるんですよ。」

「でも、人間が、いつまでそんなことをしてゐられるものか、面白いわね。」

「まア、もう暫く見てゐてごらんなさい。今に、樂しさうな顔をして自殺する男が、一人や二人は出ますから。」

「あなたたちは、もう少し女と云ふものを、侮蔑なすつたつていいと思ふわ。」

「いや、あそこにゐた連中は、誰も彼も、僕ほどあなたを侮蔑してゐるのは誰もないと思つてゐる男ばかりなんですよ。」

「それで、戀愛がお嫌ひなの。」

「所が、戀愛と云ふ奴は、一人の女に、僕ほど深くて美しい男は世界にないと思はす術なんです。そんな魔術が通用したら、友情なんて、友達を輕蔑する立派な道具である以外の、何物でもありますまい。戀愛を侮蔑すると、必ず階級が生れて來ます。例へば、あなたが、伯爵夫人であるやうに。」

「あら、あたしには、戀愛なんかたゞの一度もなくつてよ。」

「おや、プロレタリアでもかまひません。そこで僕たちは、社會主義者のやることが、その優れた精神とは反對に、新らしい階級を造り出す運動にすぎなくなるといふことを洞察してゐるもの丶集りになつて來たわけなんです。」

「おや、あなたたちが、あたしとお交際ひして下さらうと云ふのは、あたしに新らしい教育をほどこしてやらうと云ふおつもりなのね。」

「いや、僕があなたをお連れしたのは、あなたが優れた戀愛否定論者の素質を、多分に持つてゐらつしやると云ふ證明を、皆の者にしてみたかつたゞけなんです。」

「まア、おや、隨分あそこは複雜な所でしたのね。」

「さう、それに、あなたは、少し賢くおなりになつて、損をなすつた傾きがありましたよ。皆の者は、あなたが伯爵夫人だと云ふ理由で、

どれほど自身の心が動揺するかを見詰めてゐるらしい容子も見えましたが、まア今夜は無事で、何よりでした。」

伯爵夫人は滑らかな笑ひを洩しながら、あらためて梶を正視するやうに身を離した。

「ぢや、今夜はあたし、皆さんの試験に使はれたやうなものなのね。」

「そりや、いづれあなたは、どこでだつてさうでせう。あれでも、みんな夫々、美しい姿や心には人一倍敏感なものばかりなんですから、あなたはこれから、多分また悪魔のやうな役目をしなくちやなりますまい。」

「まア、あたしが悪魔になれたら、そんな嬉しいことはなくつてよ。」

「今からさう云ふお覚悟では、いよいよ悪魔の資格は充分ですよ。」

「でも、あたしは、あなたのお氣に入らうとしたことだつて、もう随分長くなるんだのに、それにまだ今頃あなたにこんなことを云はなくちやならない頃なのよ。」

「いや、僕は奥さんのお力で、どんなに鍛へられたかしれませんよ。」

「あなたは、いつもあそこで、そんなことばかり仰言つてゐらつしやるんでせう。」

「もつとも、あの地下室で云ふことは、何人たりとも本當のことを云つてはならないと云ふ規則があるんです。だが、馬車に乗つても嘘を云はねばならないと云ふ規則はありませんよ。」

「あら、あの地下室で仰言つてゐたことは、嘘ばかりなんですの。」

「さう、本當のことだつて、だから嘘になつて了ふんです。だから、嘘つきは一人もゐないことになるわけです。」

「ぢや、あそこにゐらしつた女の方達も、嘘ばかり仰言つてゐましたの」

「女に嘘を云はさなくつて、誰に嘘を云はすんです。」

「まア、ぢや、あたしを連れていつて下すつたのも、よほどあたしを嘘つきだとお思ひになつたからなのね。」

「譬へば、さう云ふことだつて、あの地下室では、忽ち嘘だと誹謗しなければならない習慣がつくんです。」

「でも、そんな馬鹿馬鹿しいことをやつてゐて、それでみなさん、我慢をしてゐらしやる所がお豪いわ。」

「しかし、さう云ふ所が馬鹿馬鹿しいと思ふやうな人間なら、いづれ此の人生に退屈してゐない者にちがひないのです。もし此の人生に退屈しないものなら一層地下室の外の人生が輕侮しくなるにちがひないのだし、もし此の人生が輕侮しく思はれるものになら、あの地下室は一層不快なものになつて來て生活の價値を愛するやうになるにちがひありません。もしまた此の人生に退屈し切つて了つた者なら、さう云ふ嘘の世界が何か慰めになる所となるに定つてゐる。としてみると、あの地下室は此の生活のために在つて得をするだけだと云ふ點でもあなたの仰言るやうに馬鹿馬鹿しい存在ぢやありますまい。殊に誰も彼もが決して戀愛をしてゐないと云ふことが、全く階級を無視して行

歌出來得ると云ふことを[illegible]させます。」
「でも、全く戀愛が存在しないと、どうしてお分りになりまして！」
「おや、戀愛をしてゐる者が、どうしてそんな瞑想の世界に滿足出來ると仰しやれます！」
「おや、戀愛を捜さうと思つてゐる方はゐますのね。」
「それは仕方がありませんよ。しかし戀愛を捜したものは早速その場から消えて了ふのがお定りです。何ぜかと云ふと、それは、その者が地下室の美しい友誼を全然無視したことになるからです。」
「おや、あの地下室以外で戀愛をしたものは？」
「いや、そんなことは、あの地下室では問題になりません。あの地下室の目的は、階級を無視する精神と友情とを生産すればそれでいゝんです。少くともさう云ふわれ／＼の理想に近い優れた精神を涵養する習慣を、あの地下室から外界へ輸送する運動が徐々に行はれてゐさへすれば。」
「おや、あの地下室で、何か一番權威があつて尊ばれるやうになります。」
「それは先づ何よりも禮讓です。例へそれがいかに形式的であつたとしても、形式そのものさへそこでは嘘に定つてゐるんです。だから初めて形式が形式たるべき特長を發揮して來て美しく、音樂のやうに物柔かな効果を上げて來るんです。」
「でも、嘘ばかりついてゐなければならないなんて、隨分むづかしいことだわね。」
「むづかしければ、嘘をつく必要はありませんよ。それに嘘の常習に關して頭を働かさなければならないやうな本人は、あそこには一人もをりません。」
「でも、本當のことが云へないなんて、それでお窮屈ぢやないのかしら。」
「所が、人間は、嘘をつく動物です。」
「おや、人間の嘘をつくべき器官ばかりで、發達させたクラブなの？」
「まア、一口で云つて了へば、さうなんです。だが、人間の、最も嫌惡ばかりを寄せ集めて造つた世界と云ふものは、かくも靜かで自由であり、退屈であるのみならず勿論多分に曖昧であり、殊々の秘感さが盡く、高上的な精神に向つて發展すると云ふ新鮮な形式をとりつつある所を知るためには、あの地下室でなくては見られませんよ。」
「あなたは勸誘員におなりになると、きつと成功しましてよ。」
「あなたに嘘をつかすためなら、僕は勸誘員にたつたつてかまひませんよ。」
「もうあなたの仰有ることは、何んだつてこれから嘘だと思はなきやならないんだわね。いゝえ、新規會員、福三郎さん。まア、面白いお方と、お交際ひが出來るやうになつたわね。」
「でも、あなたが、僕等の仲間の者と交際をなさらうと云ふのは、あ

なたの御主人にとつたつて、何よりも安全で、まるであなたを郵便貯金にしたやうなものです。お負けに僕があなたの傍についてゐるとして見ると。」
「おや、あなたの奥さまは、あなたを郵便貯金のやうに思つてゐらしつて？」
「勿論僕の家内は、僕が充分戀愛否定論者だと云ふことを知つてゐますよ。」
「まア、あなたは奥様を、そんな慘酷な目におのせになつたことがありますの？」
「いや、家内が僕を、慘酷な目にのせたんです。戀愛とは、まるで一分の休養さへ出來ない最も苛酷な勞働だと云ふことを知らしめたのは、あなたと僕の家内なんですよ。女はとかくけちんぼなものですが、勞働法となると全く無視して勝手を極めます。多分、女の腹の中には、先祖代々から傳はつた資本家の素張らしく大きな齒車が廻つてゐて、男に不斷に勞働することを要求して怨まないものと見えますね。絶えず、愛愛愛愛と叫んでゐる。あれはいつたい、何を牛耳しやうとしてゐるんだか御存知ですか。」
「あなたは、罰のあたることばかり考へてゐらつしやるんだわ。あたしがもしあなたの奥さまだつたら、一日で戀愛否定論者になりさうよ。」
「所が、僕の家内は、一日で僕を戀愛否定論者にしたんです。」
「あなたの奥さまは、そんなにお堅いかたなの。」
「さう、僕をたつた一日で、郵便貯金にするなんて、」
「道理であなたは、あたしにこんなに冷靜でゐらしつたのね。」
「いや、僕はあなたの愛情なんか、戀愛だと思つたことがないだけです。もしもあなたが、御自分で戀愛なぞと仰言るなら、それはあなたがただ御自分のお腹の中で、大きな齒車を捲いてゐらつしただけなんですよ。第一戀愛なんか、二人がかりでせつせと毎日細工したつて、たかだか結果が悲慘にかゝる動物を産むだけぢやありませんか。」
「でも、あたしが、もしあなたのお子さんが欲しかつたら。」
「それは、その子に相談してみなきア分りませんよ。それにあなたの御主人は、きつと僕の子供なんかお好きぢやないにちがひない。」
伯爵夫人はクッションの刺繍の上で眼の指環を搖し出した。眼は銀鱗を散らした川波の上で夫人の耳環の搖れてゐるのを眺めてゐた。馬の蹄の音がタランテラの踊りのやうに幌を包んだ霧の中で廻つてゐた。
「あたしは、あなたのことが、絶えずこんなに氣にかかるのに、それにあなたは、いつまで戀愛のことなんか氣に病んでゐらつしやるおつもりなの？」
「この馬車の中で、嘘をついたつていいんですか。」
「いいえ、此の馬車はクラブとは違ひます。」
「クラブでは、一番うまい嘘つきは、いつも默つて了ふ習慣をつけて

ゐますが、あれは必ず優れた法則を會得してゐる奴にちがひない。」
「あなたの奥さまが、あなたを戀愛不感症者になさつたのなら、あたしはあなたを、もう一度前のやうにしてみたくてたらないの。」
「僕は前には、臨海實驗所の技師だつたんです。所が、あんまり家内を愛しすぎたものですから、何とかうまい出口はないものかと考へてゐる中に、たうたう戀愛不感症者になつて了つて。だが、こいつは結局、一番幸福な思想です。世にいかに讃美すべき戀愛があらうとも、それは決して讃美すべき何物でもなくなつて來るんですからね。」
「あたしがあなたを、こんなに愛してゐても？」
「一寸話が違ひますが、あなたは物質と精神と、どちらが階級を作るか御存知ですか。例へば顏と云ふ物質が、もしそれでいけなければ、あなたのお顏で結構です。あなたのお顏は、顏そのものだけで、すでに階級を作らさねばおけないと云ふ、一つのそれほどまでに美しい物質です。」
「あなたは、あたしが毎夜、どんなことをお祈りしてるかお聞きになつたことがないんだわ。あたしはあなたに、もう幾通お手紙書いたか覺えてゐらしつて。」
「僕はあなたの下すつた手紙を見る度に、不思議に昔の臨海實驗所が浮んで來て困るんです。あの頃は、僕は家内を愛してゐて、片手に牡蠣を持つたまま桃色の封筒を周章てて切つたもんですが。」
「おや、あなたは、あたしがお手紙を出す度に、あなたの奥さまのことをお思ひになつてゐらつしつたのね。」
「いや、そりやさうでもしなければ、あなたの手紙がすつかり無駄になるおそれありませんか。僕はあなたの御心をお受けするために、そんな臨時嚴しい不經濟な倹約までしてたんです。」
「あたしは、あなたに、臨海實驗所の牡蠣なんか思ひ出していただかうと思つて、あんなお手紙書いたんぢやありませんわ。」
「それはあなたが悪いんですよ。僕はあなたから手紙を戴いたたび毎に、一度づつ試驗の度數が減つていつたんです。お蔭でもう此の頃にいたつては。」
「あなたの奥さまは、ほんとに幸福な方だわね。」
「さうです。あのクラブに這入つてゐるものの細君は、みんな幸福なものばかりですよ。ただ少し良人の嘘が雄辯になるだけで。だが、それも暫くの辛抱です。いまに良人は機智より眞實を愛するやうになるに定つてゐます。どうぞあなたの御主人にも、時々お出かけになるやうにおすすめを願ひますよ。」
「まア、あの人が、今より嘘つきになつたら、どんな嘘を云ふやうになるでせう。」
「それは練習次第ですよ。人生の面白味と云ふものは、嘘を見破る力にあるもんです。實際人間と云ふものは、一口何か言葉を云つたとしても、嘘か眞事かのそのどちらかの中の一つにちがひないんですからね。」

「あなたは、あたしの云ふことだつて、嘘だとばかり思つてゐらつしやるんでせう。」
「いや、もし真面目だとした所で、あの向ふに見える橋の傍まで此の馬車が行つたなら、僕はあなたとお別れしなきアならないんぢやありませんか。それから僕は家内が上機嫌であるかどうかをちよつと見て、三分ばかり明日の生活の心配をしてから後、またちよつと真面目な顔をしながら会釈をして、それからあなたのことを考へ考へ、なかなかあの方も御主人思ひの所があると感心して寝るだけですよ。」
「でも、あたしはさうぢやないわ。あたしは玄関の所で、必ず一度立ち停つてあなたのことを考へるの。それからお部屋へ這入つて鏡を見て、あなたがあたしのどこがお気に召さないのかとまた思ふの。それからあたしは、きつと一度は定つて泣いてよ。あたしあなたに、毎日三度づつ接吻してゐるのを御存知ぢやないでせう。」
「そりや知らない筈ですよ。あなたは僕に、まだ一度も接吻なんかして下すつたことがありませんよ。」
「それはあなたが、あたしのことを考へてゐて下さらない証拠だわ。」
「いや、もう僕は、なるだけあなたのことは考へないことにしてるんです。人間には何か一つ、捧げながらその者の犠牲と云ふ奴があるもんですが、譬へばそのものの理想に従つて総てのことがまとめられ行かねばならないやうに。所で僕は、恋愛否定論者と云ふ看板をかけて歩んでゐる機関車ですよ。あなたは機関車に接吻なんかなすつて、どうなさらうと云ふおつもりです。」
「そんな機関車なら、あたし、ひつくり返して了つてよ。」
「そんなら僕は、あなたをひき殺して差し上げます。あなたは僕が、昨夜何をしてゐたのか御存知ですか。あなたは昨夜一度だつて、あなたの寝室の窓をお開けになつてみたことがありますまい。僕はあなたの窓の下で、一晩中何をしてゐたとお思ひです。」
「あら、あなたでも、そんな夢を御覧になつて下すつたことがありますの。」
「いや、僕はあなたの窓の下で、どんなに古風な顔をして立つてゐたかと云ふことをあなたにお報らせすればいいんです。僕はあなたに対しては、これまで出来得る限り言葉の節約を守つて来たもんですが、お影であなたは伯爵夫人になられたでせう。それだけでも、あなたは僕の恋愛否定論に好意をお持ちになつたつて、いいんですよ。」
「まア、ぢや、あなたがあたしに、失恋をして下すつたと云ふものね。」
「さうなんです。だから、あなたは、もう僕に失恋してみたい興味をお捨てになつて然るべきときなんです。だいたい失恋と云ふ奴は、十八九世紀に流行つたもので、今では時々睡眠の代りに二三日飲むものです。」
夫人は桃の唇にその水滴のやうな耳輪を揺りつけながら、摘まんだ彼の指先で自分の唇を叩き出した。街路樹のさゝやかな影がエアキ

ユルパの匂ひの籠つた帳の中を踊りつゝ流れていつた。

「あなたは、あたしが、どんなに何日も惡魔に戀してゐるかつて云ふことを、ちつとも御存知ないんだわ。」

「あなたは伯爵夫人におなりになつて、代りに惡魔におなりになつて、それから失戀に興味をお持ちになつて、今度は他人に失戀さすことで惡魔をお消しにならうと云ふ段取りですが、しかしそれではます／＼惡魔になるだけですよ。あなたはこれから、夕暮の火のつく前に、一度頭から水をおかむりなさるといゝ。さうすると、僕は人に逢ふ毎に、僕の知人の伯爵夫人は惡魔になると、水を頭からひつ冠る習慣をつけてゐらつしやると云つてさし上げます。それでもあなたは惡魔におなりになつたら、今度は幼稚園の本をお讀みになるといゝんです。」

「でも、今夜はあたし、あなたのお傍から放れたいの。あなたがあたしを自轉車で追つ驅けて下すつた時のやうに、あたしはどこまでもあなたを追つ驅けてさし上げるわ。」

「今になつて、あなたは僕に復讐なさるおつもりですか。」

「えゝ、追つ驅けられると云ふことは、どんなに恐ろしいものかと云ふことを、あなたに一度お教へするの。」

「ぢやもう此のあたりで、騒音を停めさせて貰ひませう。では、またいつか。」

「あら、あなたは、お歸りになるおつもりなの。」

「おや、あなたは、また僕に追つ驅けられたいおつもりですか。」

「あなたは、あたしを、よほど嘘つきだと思つてゐらしつたと云ふことが、今になつて分つてよ。」

「いや、また僕はあなたを嘘つきだと思つてゐます。では。」

伯爵夫人は僕の片手を腕の中に抱き込むと踊りでかけた。

「まア、あたしはあなたに、そんなに度々お逢ひ出來る身體ぢやないわ。今夜はあなたに、御迷惑はかけないことよ。今あなたにお別れしては、あたし、歸つてどうすればいいんでせう。」

「あなたは、もう少し、言葉を節制なさらなければいけません。僕だつて、今までちつと守つて來たんぢやありませんか。僕はいいことを教へて上げますが、さう云ふときには、一寸嘘をおつきになるもんですよ。」

「あなたは、あたしを、こんな惡魔な川に落しておいて、まださういふ冗談が仰言れるのね。あたしは、あなたがあのとき、あたしに結婚を申し込んで下すつたら、今頃こんなことをお願ひせずにすんだのよ。」

「僕はあなたが、伯爵夫人になられたのを、一度だつて憾んだことなんかありませんよ。あなたは、もう少し僕に習ふ必要がありますれ。もしあなたが、僕の細君になつてゐらしつたら、今頃は、幼稚園の本ばかり讀んでゐらつしやるにちがひないんです。」

「あたしはあなたに、そんなことを云はれても、また黙つてゐなければ

ばならないんだわ。ね、あなたは今夜、あたしの行く所まで來て頂戴。あたしはあなたから、愛して頂かうなんて考へてはゐないのよ。ただね、ちよつと、あたしがあなたを、あまり愛しすぎてゐるだけなの。だつて、そりや、あなたさへしつかりしてゐて下されば、何んでもないわ。あたしは、もうこれ以上しつかり出來ないんだから。」

「いや、僕だつて、もうこれ以上しつかりしてゐることは出來ませんよ。だから、あなたは、何とかいい工夫をなさらなければいけません。第一、これぢや危くつて仕方がない。」

「いや、いや、あたしはあなたを歸さないの。ね、あたしは長い間、どんなにあなたをお待ちしてゐたかしれないんだわ。それに、あなたは、嘘ばかりおつきになつて。あたしはあなたが憎らしくつてならないの。あたし、あなたに幾回お手紙を出したかしら。」

「ちよつと、この手を弛めて下さい。」

「あなたは今夜、あたしにどんな優しい言葉をかけて下すつたか憶えてゐらしつて。あなたが仰言つた一番優しいことは、あたしに水を注れて仰言つたことだけよ。まア、あなたも随分ね。」

伯爵夫人は笑ひながら、瞼を睨むと、巻かれたカーテンの紐に手を延ばした。と、彼女は思はず兩手を打つた。

「あら、もう橋が過ぎちやつたわ。」

「何に、橋が？」

伯爵は彼の窓から外を振り向いた。馬車は川岸を離れた街角の石の上で揺れてゐた。

「あたし、これで安心よ。さア、あなたは、もう奥さまのことを幾らお思ひになつてもいいことよ。」

夫人の膝から伯爵の片手が投げ出された。伯爵は煙草を吸ひながら夫人の顔を見詰めてゐた。夫人は瞳を彼等の行手の青ざめた明りの中に浮べながら、伯爵の耳元で囁いた。

「あなたには、あたしの顔が、奥さまのお顔に見えるんでせう。」

「僕はあなたの計畫に乗せられた理由を考へてゐるんです。僕にあの橋が見えなかつたと云ふことが、あなたがそれだけ美しかつたと云ふことになるのなら、僕は此のまま行つて了つたつていいんです。」

「あなたは、たまにあたしを喜ばさうとお思ひになつたつて、そんなことより云へない方ね。」

「あなたにはあの橋の大切なことが分りませんよ。あの橋は僕の三途の川で、僕は毎日あそこで迷つてばかりゐたもんです。あの橋は僕の道徳で良心で、日々の生活を整へる秤みたいなもので、僕を安全に家内の所へ歸らせてゐたものです。」

「あなたはそれで、悲しさうなお顔なの。」

「いや、これは殘念な顔ですよ。」

「あなたは、どんなときになつたら、悲しさうなお顔をなさるんでせう。あたしは、あなたの悲しさうなお顔が一度見たくてならないの。」

「僕が悲しさうな顔をするときは、低氣壓が一週間も續いたときか、晴

鳥肉を食はされたときか、下駄の鼻緒の切れたときぐらひなもんですね。それ以外のときに悲しさうな顔をするなんて、だいたい、人間の表情術の進化を無視したものゝやることです。僕は今夜は、お蔭であの顔を忘れて了ふことが出來ましたよ。」

伯爵夫人は窓のカーテンを引つ張りながら極に云つた。

「これからさきは、あなたに見られてはいけないの。ね、あなたは、あたしに音無しく眼隠しをさせて頂戴な。」

「あなたはそれで、僕をどこへ連れて行かうと思つてらつしやるんです。」

「あなたにはあなたのクラブがあるやうに、あたしにだつて、あたしたちのクラブがあることよ。でも、あたしたちのクラブは、あなたのクラブのやうに、嘘なんか仰言る必要はちつともないの。それは眞實で懐かしくて、寫眞のやうに翻譯よ。それに一番いゝことは、誰も彼もがあらゆる戀愛を助けるために活動するの。」

「おや、あなたは、僕をそこの會員にしやうつておつもりですか。」

「まア、そんなことに頭をお使ひにならなくつたつて、いい所よ。それは美しくつて新鮮で、自由で濃やかで、面白くつて、あなたたちのクラブのやうに、そんな不幸な人たちなんか一人だつて見られないわ。もうそこではみんな幸福なものばかりなの。もう此の世の中の嫉妬はしさや苦しさは、あなたたちみあの地下室の中へみんな抛り込んで置きたいやうな臓なの。それに、人間がこれから進歩しなければならないなんて、そんな現在を苦しめるやうな面白くもないことなんかちつとも考へる必要のない所よ。」

「なるほど、おや、そこは、あなたたち上流階級の皮膚ばかりで出來てるやうなものですね。」

「ええ、さう、だつて、人間には心臓なんか見えないわ。眞實なんて、皮膚だけで結構よ。あたしたちの心臓は、喩へあつたとしてもあたしの手ではどうしやうもないものよ。それよりあたしの皮膚は、化粧品會社さへ信用出來れば季節に應じて匂ひを變化さすことだつて出來るでせう。」

「おや、男はみんな、戀人の匂ひを嗅がうと思へば化粧品會社へ行くことですね。」

「ええ、さう、今に、女はみんな、化粧品會社の系統にしたがつて發展するの。個性なんて云ふものは、ただ會社の宣傳用トラックみたいなもので、化粧道具を滿載して飛び上つてゐればいいものなの。」

「おや、あなたは、どんな會社の系統に屬してゐる御婦人です。」

「あたし？　あたしはもう直ぐ、あなたの眼隠しをとつたら見せて上げてよ。だけど、あなたはあたしに、何もお求めになつてはいけないことよ。何故つて、あたしは個性なんて云ふものなんか認めない女なの。だから、あたしは貞操を一番輕蔑してゐる女なの。」

「あなたは、いつの間にか、忽然として無くなつたんですね。」

「だつて、あたしは資本家ですもの。もしあたしの行爲がいけないな

ら、あたしの身體を改造してくれなくちやもう駄目よ。あたしがこんなになつたのは、あたしに戀愛がなかつたからだわ。ああ、さう、あなたは戀愛不定論者でいらしつたのね。だけど、そんなことをなすつてゐると、今にあなたの奥さまは、あたしみたいになつてお了ひなすつてよ。」

「いや、一人の男が、二人の貴婦人を作りつつあると云ふことが僕の倫理なら、僕はますます戀愛不定論者になるだけですよ。」

「ぢや、馬車が停つたら、あなたの奥さまのいらつしやる所がどんな所だか、よく御覧になつてお置きなさいな。」

馬車はペーブメントの明確な線に從つて曲つていつた。梶はスプリングの彈動に揺れながら妻の二つの眼を感じた。近い電車が醉漢を乗せて火の消えた建物の中を辷つて行く。

伯爵夫人は馬車から降りると、婦人參政聯盟と看板のかかつた家の中へ這入つていつた。梶は夫人の後から從いて這入ると奥の廊の片隅が狭い階段になつてゐた。その階段は螺線のやうに紆つてゐるにも拘らず、然もだんだん空に向つて下るやうな錯覺を梶に加へた。その廻り曲した回數が朧ろげになつたとき、突然階段は質素な壁に包まれた長い廻廊に變化した。

「奥さん、ここに何物がゐるんですか。」

「ええ、さう。」

「これは囚人のゐる所ですよ。」

夫人は默つて一室のドアーを引いた。と彼の前へモン・ド・ペーイの縫ひの飾つた紫色の部屋が、眞晝のやうに口を開いて現れた。夫人は梶の後へ廻つてドーアを閉めながら彼に云つた。

「さア、もう、あなたは駄目よ。」

「いや、まだ僕は、これから家内の所へ歸るんです。」

「どうぞ御自由に。でも、奥さまは、そのうちこゝへいらしつてよ。」

梶はソファーへ腰を降ろすと部屋の中を見廻した。

「此の部屋が、あなたの流行を見附けてゐる奴ですな。」

紫色の壁に飾つた花まで赤い。夫人は耳環を脱すと鏡の前でササパリラを飲みながら、

「あなた、よくあたしを見ておいて頂戴な。あなたの奥さまのなさらうと云ふことを、あたしがみんな、これから眞似をしてお見せするのよ。」

「いや、あなたのなすつてゐることは、皮肉の踊りにすぎませんよ。」

「そんなことを仰言る間に、誰でもお隣さになるもんだわ。」

ふとそのとき、梶が天井を仰ぐと、傾斜したまま見降してゐる鏡に女の、、の胴が逆さまに映つてゐた。

「奥さん、あれは何んです、あれは。」

梶は夫人の方を振り返つた。が、夫人はいつの間にか部屋の中から消えてゐて、ただ階段を敷つた絨毯だけが揺れてゐた。梶は煙草の煙を喉の底まで吸ひ込みながら暫く階段の方を眺めてゐた。すると、

腹の裂け目から、不意に一本の足が現れた。梶は立ち上らうとしたり緞帳をひき開けて覗いてみた。と、全面薔薇色の大絨緞が楕圓形に垂れてゐて、その圓筒の裾から十數本の太股が中央の椅子に向つて迫つてゐた。が、伯爵夫人はどこにゐるのか、ただ脱ぎ捨てられた着物の皺だけが、一本の太股にひつかかつたまま裏を返して放埒に延びてゐた。梶は森閑とした圓筒形の部屋の中に立つたまま、伯爵夫人の漂はせていつたエアキュルパの匂ひを嗅いでゐた。彼は自分を取り包んだ太股が悉く義足だと睨みながらも、指先で輕く叩いて廻つてみた。すると、一本の足だけが、彼の指先に觸れたと思ふと同時に、輕く緞帳の裂け目の中へ引つ込んだ。梶はその緞帳へ手をかけた。と、中から、眞赤な部屋が嵌められた濕度を堪へて彼の眼前に現れた。伯爵夫人は片肩から赤いガウンを前方に辷らせて、そのまま彼の傍へ寄つて來た。彼女は微笑しながら膝に會釋を現して彼に云つた。

「まア。よくいらつしやいましたわね。」

「なかなか、骨が折れましたよ。」

「さアどうぞ。」

部屋の隅に假面のかかつた扉から、ベッドが緑色の口を開けて[illegible]けてゐた。梶は夫人に手を取られながらベットに腰を降ろすと更めて部屋の隅々を見廻した。夫人のガウンの揺らめく度に、クープ・ド・オールの匂ひが兩側の間隔を縮めていつた。

「まア、あなたは、まだ靴もお脱ぎにならないの。」

「これは僕の悪戯です。」

「こんな厭な花の中へ這り込んだつて、誰も喜びはしないのよ。」

「いや、靴の皮と云ふものは、何故厚く出來てゐるのかと云ふことが、これではつきりして來ましたよ。」

「あなたは、なんて武骨な方なんでせう。これでも、あたしを自轉車で追つ驅けて下すつた靴かしら。」

「いや、これは新らしく買つたもんですよ。あなたを追つ驅けたときの靴なんか、今頃はどつかで、釘ばつかりになつてひつくり返つてゐるでせう。」

「あたしは、あなたが、憎らしくつて憎らしくつて」

夫人はいきなりガウンの羽根を梶の首に卷きつけた。梶はよろめきながら両手を後につくと、伯爵夫人を吸ひ込んだ鳥のやうに羽根の中で[illegible]した。

「あなたは、僕が悲しさうな顔をしてゐるのを、知らないんですか。」

「だから、あたし、あなたのその顔が好きなのよ。」

「僕の愛してゐた氣高い婦人が、こんな行爲をするなんて。」

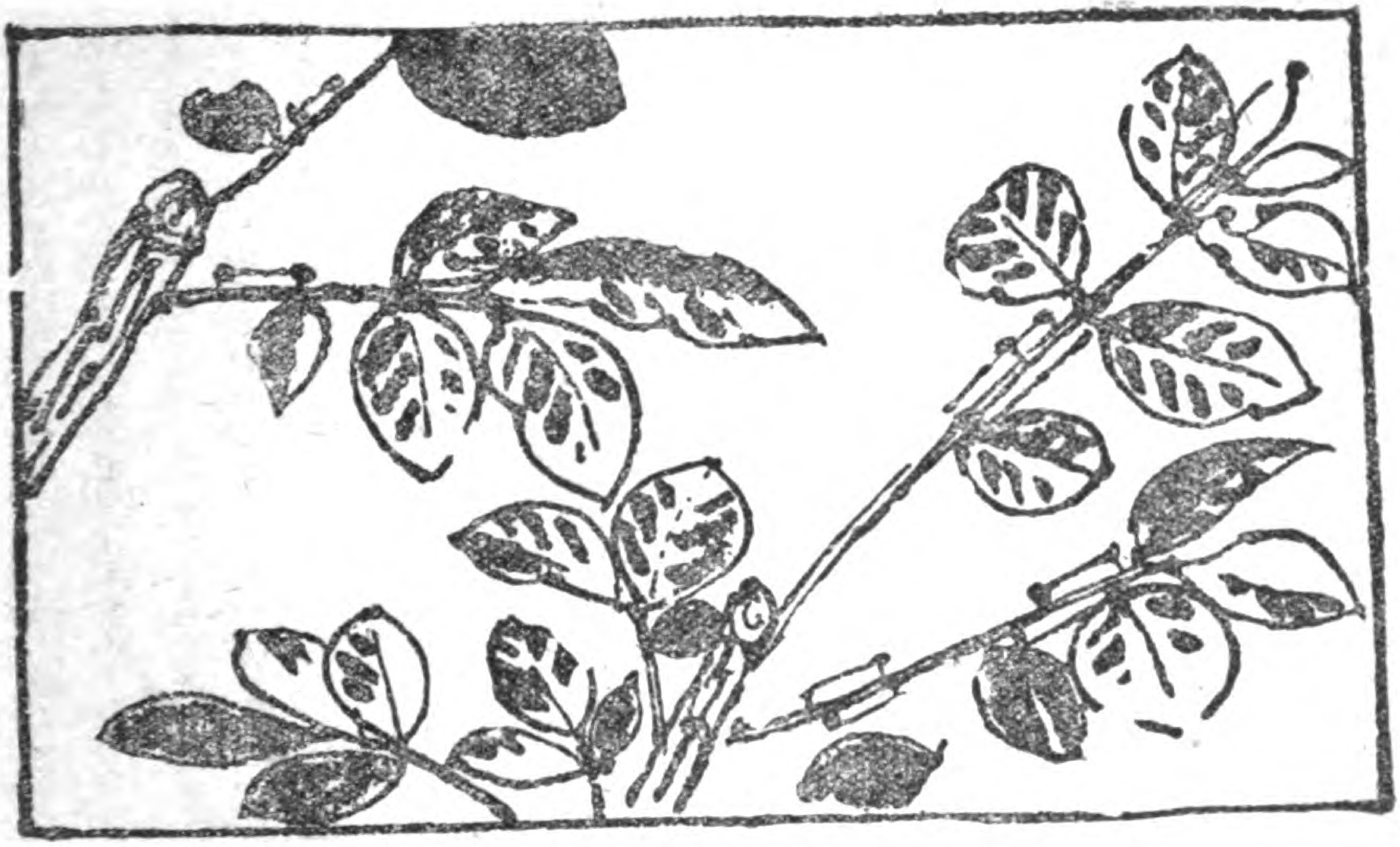
「あたしはあなたに、復讐をしてゐるの。」

梶の靴先が緊張した[illegible]を揺さぶりながら、[illegible]を映したまま絨氈の上から上つていつた。ガウンが夫人の肩から辷り落ちると、空氣が冷んだ穏やかな脹らみをベッドの上で縮めていつた。[illegible]、、、、、羅紗のチョッキが土手のやうに現はれた。部屋は次第に[illegible]を放散させ

つつ聲を潜めて見詰めてゐた。と、そのとき、梶は天井に嵌め込められた鏡の中から、男の顔がにやりにやりと笑ひながら二人を見下ろしてゐるのを見付け出した。

「あれは何だ。」と梶は叫んだ。

「ああ、あれはあたしの良人ですの。」と夫人は云ふと、開いた梶の下顎を柔く掌で押し上げた。梶は瞬間、伯爵の丶丶を興奮させるにすぎなかつた自分自身を發見した。彼は脱げかかつた靴を掴むと、鏡面を狙つて投げつけた。と、彼は跛足をひいたまま、悲しげな表情を緞帳に突き當てて飛ぶやうに部屋の外へ出ていつた。



善魔

里見弴

七の一

新橋に着くと、昌造は、驛の樓上の東洋軒にあがつて行つた。あたりまへでも嫌ひなところへ、自動電話となると、一層苦手だつたので、別にほしくもない紅茶とウヰスキイとを注文して置いて、早速眼目の電話を借りに立つた。——逗子から出て來ると、いつも大抵さうして瑛瓏の都合を訊き合せ、なか〳〵體のあきさうもない時には、まづ用をたして廻つて、それから沖津へ行くことにしてゐた。電話機の横に、使用者は二錢ほうり込んでくれ、と書いて、蓋に細い穴を切つた箱が掛けてあつたが、蟇口をあけてみて、小錢がないと、そつと十錢白銅を落し込む。差引き僅か八錢のことでも、何かそれが、賽錢箱に投げ込む喜捨のやうに、その餘分だけの御利益にありつけさうな氣がして、銅貨が切れてゐる時の方を、却つて幸運の前兆と感じるほどに迷信家ぶかくなつてゐた。

その日は、相憎、澤山銅貨がはいつてゐたが、わざとそれはないつもりにして、十錢ほうり込んでから呼出した。階段をあがつた突き當りの壁に取りつけて、何一つ圍ひのない電話なので、先方の番號を云つて確めた上で、御主人はお宅ですか、と切口上で尋ねると、そのために知れるのか、こつちの名は訊かずに、すぐ變つて、瑛瓏が出て來た。

―もし／＼、あたし……。いついらしつたの？」
「いま。……どうです、すぐ來られる？」
「あのね、これからちよつとわきイ行かなきアならないのよ。でも、……さうね、八時半かそこら……、さうおそくはならないわ」
「さう。ぢア、あたしも、ちよつとわきイよつて、その時分に行きませう」
「さうお、ぢアそのつもりで……」
瑛龍の電話くらゐ素ッ氣ないのもたんとなかつた。まるで機嫌でもわるくしてゐるやうで、始ての時など、昌造はちよつとおどかされたくらゐだつた。
驛前の廣場を見おろす窓際の席に戻つて來ると、仕事の道具をいれた鞄や帽子のそばに、もう注文したものも來てゐた。ウイスキイを割つて、靜に紅茶を啜りながら、昌造は、雜沓時の街の往き來を眺めやつた。人を活氣づける烈しさではなく、陰鬱にする慌たゞしさで、都會の一日がいま暮れやうとしてゐた。さういふ眺めを、昌造は好かなかつた。
（かうつと、ひとつ、樂屋でも覗いて來るかな）
さう心に呟いて、殘つた茶を一息にあほつた。
二三日前に初日を出した樂座の四月興業は、この春箱根で相談會など開いた、あの、劇團を中心にする研究的な劇團の第二回目の公演で、豫定どほり進行すれば、昌造が筆をとつて、特に書き卸したものをやつてゐる筈の場合だつた。だいぶ以前から、ドンキホーテを現代に蘇生らせて、彼一流の大眞面目な失策を、一幕かそこらの喜劇にまとめてみたい、といふ腹案があつたので、――劇團の柄から云へば、サンチョ・パンザにうつてつけだけれど、それならそれで、パンザの役を重くし、ドンキホーテをわきに廻す工夫もあらう、と思ひ、二三冊飜譯本を買ひ込んで來たりして、仕度はして置いたのだが、芝居道の常で、箱根での約束が、どの程度まで本氣だつたのか、ちよつと當にならないところもあり、新聞や月々の雜誌の仕事に追はれるまゝに、おちおち創作を味はつてゐる暇もないうちに期日が迫つて來た。すると、突然先方から使で、お忙しいところを却つて御迷惑だらうから、とあつさり斷つて來たのをいゝ幸に、昌造は、さば／＼と肩の荷をおろした氣になつて了つたのだが、それにしても、こつちの怠慢もあるので、今度の公演の出物については、いくらか責任めいた感じを捨てかねてゐた。
その間、一方には、相變らず、瑛龍といふものを差し挾んで、劇團の生活なり感情なりを、具體的にはたんにも聞かないでも、自然と身に近々と感じるやうな立場に置かれることになつてゐたのだが、彼に對する昌造の好意は、それによつて増しこそすれ、決して減じはしなかつた。約束の脚本だとしても、それと知つてからは猶更、出來るだけいいものを書いて間に合せたいと、斷りの使に接するまでは、頻と思ひを凝らし、焦慮り立つてゐたほどだつた。昌造のあけた穴は、いゝ拔

配に、「桃里の家」といふ久保の劇作で埋められた、と聞いてゐたので、ちよつとそれも見て置きたかつた。

　散歩がてら銀座を廻つて、數寄屋橋を渡つて行く頃には、いかにも春らしい瑠璃色の夕空も、いつか星のまばらな宵闇になつてゐた。芝居はもう始つてゐたが、昌造はまづ事務所の方に、こゝの主作の佐山俊次を尋ねて行つて、結局は先方から斷つて來たやうなものゝ、こつちはこつちだけの怠慢について、一應の挨拶を述べた。

「とんでもない！」

　作家出の佐山も、今ではすつかり世故馴れた、あたりの柔い劇場人の調子だつた。「貴方のお忙しいことはよく解つてるんだし、それに、御承知の通りのやりくり世帶で、とても十分なお禮も出來ないんですからね、無理にも書いてくださいつてほどの、こつちにその、それだけの何がないんでね」

　さう云つて、いかにもわだかまりのない笑ひ聲をあげた。昌造も氣持よく、暫く雜談してから小屋に歸り、一番うしろのあいた席に、一人ぽつんと腰をおろした。

　久保の芝居の幾幕目かゞあいてゐた。讀んだことのないものだつたが、暫く見てゐるうちに、鰕藏のやつてゐる主人公は、どういふ動機からか、都會に於ける志望（それが何にあつたのかは解らなかつたが）を捨てゝ、田園の平和と靜寂に歸り、素朴のあるらしい娘と、樂しく仲よく往き來してゐるやうな人物、——そこへ尋ねて來たのが、美女で、賣り出しの小說家で、輕薄な、色氣じみた人物、——で、忽ちのうちに、文壇的、また都會的な華々しい色彩、美貌、雄辯などによつて、惹きよせられて行く娘心も、まんざら無理とは思へず、兩方を頭から輕蔑して了ふ氣にもなれず、煩悶と不安にゐる主人公と、そんなことには更に頓着しずに、圖々しく娘に近づいて行かうとする小說家と、この二人の組合せで發展しつゝある芝居だといふことが解つた。「へーえ」といふやうな氣持で見てゐるうちに、鰕藏得意の苦悶の描寫が、深刻の度を加へて行くにつれて、昌造は、だんだん不愉快になつて來た。もしこれが芝居でなくて、一つの競技だつたとしたら、いやな奴でもなんでも、小說家の方に、やれやれ、しつかりやれ！と聲援するだらう、と思はれるやうな、ひねくれた氣持にされるのが、我ながら淺猿しかつた。これをそのまゝほつて置けば、今度の出物の一つに、この脚本を撰んだ鰕藏の氣持にまで、感じなくてもいゝ不快を感じるやうになつて行きさうだつた。なほ、もう一つ溯ればそれを提供した久保の氣持にまでも……。

　廊下に出て了はふ、——幾度もさう思ひながら、可怕いもの見たさと同じ可厭なもの見たさの氣持で、矢つ張りそこに腰を据ゑてゐた。さういふ興味で來るんなら、こつちだつて、一步だつてあとへは退かないぞ、——仕舞には、この負ン氣も出て來た。さア、やつてくれ、いくらでも深刻に苦しんで見せてくれ！　一方、氣の拔けた氣もするのだが、もうさうなつては、鰕藏の演技を、たゞ舞臺の上のことと

のみは感じられなくなつてゐた。——薄暗い觀客席の、壁際の椅子に倚つて、ニヤリ〳〵冷たく嘲笑してゐる昌造だつた……。うまくやればうまくやるほど、銀藏の描きだすその主人公が、安價な人間に見えて來るのを、どうするわけにもいかなかつた……。

七の二

人群と煙草の煙とが渦をまいてゐる幕間の廊下で、世界漫遊から歸朝眼鏡をかけて歸つて來て以來はじめての、昌造などよりはずツと先輩にあたる酒井に出逢つて、いろ〳〵と旅行中の見聞を聞かされてゐる時だつた、携帶品預所に續いた電話室の、暗緑色のカアテンがさつと開いて、せか〳〵と跳んで出やうとした二人づれの女があつた。丁度その顔の前に、殊に倚りかゝつてゐた昌造には、先に立つた丈の高い娘はすぐ目にはいつたが、あとに續いた小柄な女は、カアテンのうちの薄暗さにも紛れて、羽織の、華美な色氣くらゐより見えなかつた。——と、娘が、いきなりうしろから袖でも引かれたやうにピタリと立ち止り、いくらか反り加減に耳をよせながら、探し見める眼差を、すばやくあちこちに動かしてゐたが、すぐそれが昌造に來てひツかゝつた。美々しく着飾つたその娘に、昌造の方では更に見覺えがなかつたけれど、彼方には、微ながらはツとした色が動いて、何やらひと言、うしろに囁いて聞かせた容子だつた。

はてな、と思つたので、昌造は、ほんの半歩ほど位置を變へて、うしろに引き添つてゐる女を覗き込むやうにした。——それが瑛龍で、正面に視線がぶつかつて了つた……。

「さうかい、それアよかつたね」

どこそこでどういふ便宜を得た、といふやうな酒井の話には、落ちつき拂つて言葉を返しはしたが、然しこれは、全く思ひもかけない出來事だつた、——電話で、どこへ行くのだとも云つたわけではないけれど、無論約束の座敷を意味するものと思ひ込んでゐたところへ、ここで、銀藏を盟主とする劇團の芝居で、瑛龍に出會さうとは……。

一瞬の後には、手をつなぎ合つた二人の姿は、人ごみを分けて小走りに、東側の方へ、忽ち見えなくなつて了つたのだが、よしんばその時間が、三十秒、一分と永びいたとしても、昌造は、平氣で酒井と話し續けてゐたに違ひない。と云ふのは、その瞬間に、これはとんだとこに來合せた、と、すぐ瑛龍の、具合のわるい立場を思ひやり、ほかに目を逸して、見て見ないふりなどもしない代り、挨拶は無論のこと、一切知つた人としての態度は取るまい、と、すばやい決心をつけて了つたからだ——さうして、それを、昌造は、自分一人の喜びとした。

意識の俎上で、いろ〳〵にこねくり廻しての考には、そんなに重きを置かなかつたが、かういふ瞬間のものゝ感じ方に、善惡が働いてゐるのを知る時ほど、嬉しく有難い氣のすることはなかつた。まるで偶然のやうな氣がするためか、「しめたな! 大出來だぞ!」

と、自分で自分を褒めてやりたいくらゐだつた。

「いつだつたかね、君が出かけたのは」

こんな風に、酒井とも話し續けながら、昌造の心は、その喜びで、一時に高揚してゐた。——今夜、瑛龍が、こゝに來てゐたことは、一體何を意味するのか、そんな考は、まるで念頭になかつた……。

腹もすいて來たし、もう芝居はたくさんだつた。佐山に言傳を賴んでは置いたが、逢へたら鰕藏にもちよつと斷りを云つて歸らう、さう思つて、昌造は樂屋にはいつて行つた。新しい形で俊寛僧都を描いた芝居の、鬼界ケ島の道具立が、およそもう出來あがつてゐる舞臺の横を通りかゝつて、見るとそこに、もしや〱の白髮頭で、ひどい襤褸を着た男が、大勢のなかで、あちこち指圖でもしてゐるらしい容子なので、たぶん俊寛に扮した鰕藏だらうと思つて、はいつて行くと、果してさうだつた。

「いらつしやい」

綺麗な白い齒並を見せて笑はれゝば、いかにも鰕藏に違ひなかつたけれど、彼方で習つて來た得意の扮裝で、而もそれが近くでは、なんのことかわけが解らないやうな荒ツぽい線をいろ〱、複雜な色で塗りたくつた上に引いてあるので、そばへよるのが、ちよいと氣味がわるいくらゐだつた。

「忙しかつたもんだから、ついだん〱延びになつちまつて……」

「どうもいたしまして。お願ひしたり、急にまたお斷りに出たり、勝手なことばかり申しまして……。本來、あたしが、自分でお伺ひしなきやアならないんですが……」

「いゝえ、そんなこと……」

「佐山さんや久保さんともいろ〱相談しまして、結局まアこんなことで……」

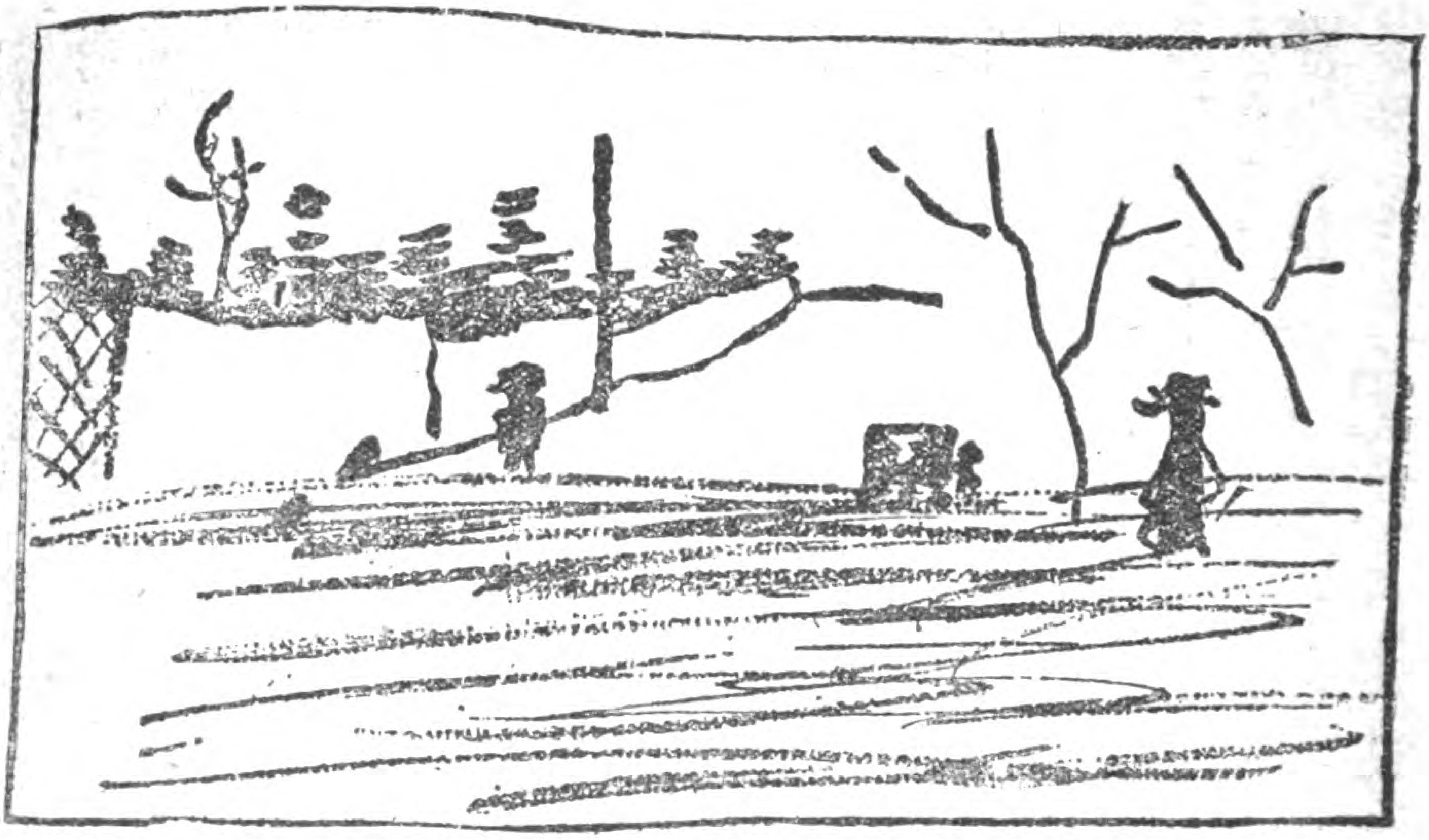
「いゝぢアありませんか。僕のは、ドンキホーテを讀んでないまでも、どんな人かくらゐは知つてゝくれないと困るやうなもんだから、ちよいとどうかと思つてたんだし……」

「是非ひとつ、ゆつくりお書きねがつて……」

顏を扮つてゐるせいか、鰕藏の表情に、なんとなく堅いところがあつた。反感といふほどでなくとも、心を許さないやうなところがあつた。

「ぢア、いづれまた……」

昌造は、もう見物席へは歸らずに、有樂軒の玄關の方から出て、タクシイに乗り、まつすぐ沖津へ向つた。



彼等の希望

(ラヂオドラマ——東京放送局放送用)
——但し舞臺上演を辭せず——

菊池寛

村岡
その妻　ふじ子
鶴田
村岡の姉
刑事

情景。
湘南のある避暑地。九月の中頃。村岡の住宅。海岸に近き、平家建の家。はるかに海が見える八疊の間。庭にはすがれかけた、月見草が雑草にまじつてゐる。ときどき浪の音がきこえる。村岡の妻ふじ子、二十四五の女。美しけれど色青く淋しさうな顔立。縁側近く出て、ほどき物をしてゐる。

鶴田、庭からはいつて來る三十を越した會社員らしい男。かすりの單衣を着てゐる。

鶴田。お早う。
ふじ子。いらつしやい。
鶴田。今日は富士が見えますね。
ふじ子。いゝお天氣ですわ。
鶴田。もうすつかり、もとの靜けさに歸つてしまひましたね。
ふじ子。えゝさうよ。五月頃と同じよ。夏來てゐた人は、一人殘らず歸つてしまひましたわ。
鶴田。後に殘つてゐるのは僕と、二軒屋の二階を借りてゐる娘さんの二人だけですね。
ふじ子。あの娘さんは、日本橋あたりの醫者屋の娘ですつてね。
鶴田。さうだらう、一昨日も醫者らしいイキた女が、二人づれで來てゐた。
ふじ子。あの娘さんも、やはり胸がわるいんでせうか。
鶴田。何だか、そんな容子ですね。……村岡君は、見えませんね。どうしました。………
ふじ子。一寸佐竹さんまで行きましたの。
鶴田。佐竹と云ふのは、あの湯屋の隣りのお醫者ですか。
ふじ子。えゝ。
鶴田。少し、足のわるい人ですね。
ふじ子。えゝ、戰爭で日露戰爭のとき、負傷したのですつて。
鶴田。ふん、戰爭でも負傷することがあるのですか。
ふじ子。さうらしいわね。
鶴田。村岡君はどうです。
ふじ子。このところ一寸熱が、出ませんの。でも、ちつともはかばかしいことはございません。
（ふじ子。立つて臺所へ行き、お茶を淹れて出て來る）
ふじ子。お茶を一つ召し上れ！
鶴田。いやどうも。かう、町全體が、さびしくなつてくると、いよいよ足しげく此方へお伺ひしたくなりますねえ。
ふじ子。えゝどうぞ。村岡も、あなたが來て下さるので、どんなに退屈がまぎれるか分らないと云つてゐますの。
鶴田。東京のお姉さんは、まだいらつしやるのですか。
ふじ子。今日歸る筈だつたのですが、また一二日延びましたの。
鶴田。今は、臺所？
ふじ子。えゝ、臺所で洗濯をしてゐますわ。
鶴田。奥さん。この間、一寸申し上げましたがねえ。僕の女房は、二年前に死んだのですが、女房が殘して行つた頭の物や着物が、まだ少しばかりあるのですがねえ、どうも賣り拂ふのは何だかすまないやうな氣がするし、それかと云つて持つて居るのは、邪魔つ氣だし、もし奥さんが何にもこだはらずに取つて下さると、ほんとうに始末がいゝんですがねえ。廢れ物が生きると云ふわけですがねえ。

ふじ子。まあ。とんでもないことを。

鶴田。いや、さう仰しやられると、それきりですがね。僕の女房も、丁度あなたと、同じ年頃でしたよ。

ふじ子。まあ。さうでしたか。

鶴田。それに、かう云つちや失禮ですがねえ。背格好も同じだし、器量はあなたより、もちろんずつと落ちてゐましたが。

ふじ子。鶴田さんはお世辭が上手だわ。それだけは、御冗談でせう。

鶴田。いや全く、器量は比べものになりませんがねえ、顔の感じだけ、あなたにどこか似て居るのですよ。だから、海岸であなたを初めて、見かけたとき、つひあんなに馴々しくお話ししかけたのですよ。

ふじ子。…………。

鶴田。いや、うそでなく、僕は初からあなたをおなつかしく思つてゐたのです。

ふじ子。まあ、そんな事をおつしやると、わたし何だか恥しいわ。

鶴田。それで、あれの水色の錦紗の羽織やお召のかすりが、失禮ですがあなたに、ぴつたり似合ひはしないかと思ふのです。

ふじ子。まあ！

鶴田。ほんとうに、こんなことを申すのは失禮です。でも、僕が持つてゐると、全く持ちぐされですからね。ヘヤピンなんかもべつこうに翡翠の玉が、はいつてゐて、さう大したものぢやありませんが、奥さまのお氣に入りはしないかと思つてゐるのです。

ふじ子。氣に入るの入らないのぢやございませんわ。お恥しいのですが、着物なんか二三枚持つてゐたものも、大抵質に入つてしまつたものですからね。

鶴田。それならなほけつこうですな。有無相通ずるですよ。貰つていたゞけると、ほんとうにうれしいのですがねえ。

ふじ子。でも村岡が、何と申すか分りませんわ。

鶴田。村岡君には、僕が話をつけませう。それとも、村岡君には内緒にして置いてもいゝぢやありませんか。

ふじ子。あら、それぢや一生着られませんわ。

鶴田。なるほど、はゝゝゝ

（二人しばらく）

ふじ子。妾も、着物の一枚もほしいと思つたこともありましたわ。でも、今はすつかりあきらめてゐますの。

鶴田。いや、お氣の毒です。僕なんか、つひこの間お知り合になつたばかりですが、でもあなたの立場には、心から同情してゐますよ。村岡君は、もう二年以上ブラ〳〵してゐると云ふぢやありませんか。

ふじ子。えゝ、二年と云ふより、まる三年に近い位ですわ。

鶴田。おや、大抵ぢやございませんね。

ふじ子。この土地へ來ましてからも、もう一年以上になりますの。こんな、ジメ〳〵した生活は、つく〴〵いやになることが、ございますわ。

鶴田。全くです〳〵。でも、病氣の良人に、あなたのやうな美しい女房がなりふりもかまはずにまめ〳〵しく仕へてゐると云ふのは、ほんとうにいゝものですな。

ふじ子。でも、みんな運命ですわ。

鶴田。さうばかりとも云へませんね。人間は、自分の考一つで、生活を展開することだつて、出來ないことはありませんね。

ふじ子。さうでせうかしら。

鶴田。まして、奥さんなんか、そんなにお美しいのですからね。

ふじ子。すぐそんなことおつしやるのね。妾鶴田さんきらひだわ。

鶴田。いやあなたが、そんな風に、一寸すねられるときの顏付が、僕の亡くなつた女房にそつくりです。

ふじ子。そんなに顏を御覽になるものぢやありませんわ。

鶴田。ねえ、ふじ子さん、僕が手相を一つ見て上げませう。手をお出しなさい。

ふじ子。右の手？　左の手？

鶴田。女は、右の手です。

ふじ子。汚い手でせう。

鶴田。馴れぬ世帶の水仕事つて、白い美しい手が、あれてゐるのはいいものです。

ふじ子。そんなにお握りになると、いたいわ。

鶴田。いゝぢやありませんか。

ふじ子。早く見て下さい。

鶴田。いや、手相を見ると云ふのは、うそですよ。かうあなたの手を握つて置いて、これを入れてさしあげたかつたのです。

ふじ子。まあ、指輪ですの。いけませんわ。いけませんわ。そんなもの、いたゞくことは出來ませんわ。

鶴田。いゝぢやありませんか。取つてお置きなさい。ダイヤだと云つて、ホンのまじないのやうに小さいのですからね。とつてお置きなさい。

ふじ子。ダイヤの指輪なんて、妾まあ。

鶴田。早く、姉さんが來るやうぢやありませんか。

ふじ子。でも。

鶴田。さあ、早く。入れるのがいやなら、しまつてお置きなさい。

（鶴田、無理にふじ子の手に握らせる。）

ふじ子。まあ。

（奥の襖があく。村岡の姉、三十五の肥つた女。そこから顏を出す。鶴田を見て目禮する。）

鶴田。またお邪魔してゐます。度々お邪魔します。

村岡の姉。いゝえつ（やゝ皮肉に）

鶴田。村岡君は病院ださうですね。

村岡の姉。えゝ、ふじ子さん、晩のおかずは、何か出來てゐるのかしら。

ふじ子。いゝえ。何にも、何か考へますわ。

村岡の姉。もう十一時すぎですよ。

ふじ子。まあ、そんなになりますの。

(遠くの方から地引網を曳くかけ聲が、きこえ始める。)

ふじ子。地引を曳いてゐるのですね。

鶴田。先刻から曳いてゐますよ。もう上る頃かも知れません。

ふじ子。ぢや、行つて地引の魚を買つて來ますわ。お姉さま、一寸ザルを取つて下さらない。

(村岡の姉ザルを取つて渡す。)

ふじ子。鶴田さん。一寸失禮しますわ。

鶴田。僕も、一しよに行つて買つてあげませう。僕は、あの漁師達とは、すつかり懇意になつてゐるのですよ。

ふじ子。さうですか。でも、お氣の毒ですわ。

鶴田。なに僕なんか、ブラ〱遊んでゐるのですもの。

(二人、連れ立つて裏の木戸を出る。村岡玄關の方から歸つて來て、座敷へ出る緣側につるしてゐる、鳥籠をのぞき込む)

村岡。ふじ子、ふじ子。ゐないのか、姉さん。姉さん。

村岡の姉。(奧から出て來る)。お歸りなさい。

村岡。十姉妹の餌がなくなつてゐますよ。

村岡の姉。まあ、今朝いつぱい入れてやつたんだがね。

村岡。ふじ子は、どうしました。

村岡の姉。今地引網の魚を買ふと云つて行きましたよ。

村岡。地引をやつてゐるのですか。なるほど。

(地引網を曳く聲きこえる。)

村岡の姉。ねえ、一寸。

村岡。何です。

村岡の姉。お前はよく夫婦間のことはだまつてゐてくれ、だまつてゐてくれと云ふけれど、今日と云ふ今日は妾はだまつてゐられませんよ。

村岡。何がです。

村岡の姉。あの鶴田と云ふ男のことです、それからふじ子の事です。

村岡。どうかしましたか。

岡村の姉。今も、二人づれで濱へ行つてゐるのですよ。

村岡。だつて、それは地引網の魚を買ふためでせう。

村岡の姉。それは、さうだけど、何も二人づれで行くことはありませんよ。ひる日中。

村岡。ひる日中だから、いゝのですよ。よる夜中行かれると、一寸困りますがね。

村岡の姉。お前、そんなのんきな事を云うてゐるけれど、妾はけふた

いへんなところを見たのですよ。

村岡。(あまり驚かず)たいへんなところつて、どんな所です。

村岡の姉。お前、鶴田と云ふ男が、ふじ子の手を握つて、指輪を入れてやつてゐるぢやありませんか。

村岡。ぢや、つまり指輪を呉れようと云ふんですな。

村岡の姉。あなたは、何にでもそんなに落ちつき拂つてゐるから、いやになつてしまふ。かりそめにも、人の女房にそんな高價なものを、くれるなんて、それをまた女の方で、貰ふなんて、それが正しいことでせうかしら。

村岡。……。

村岡の姉。わたし、あの男のことが氣になるので、安心して東京へも歸られないんですよ。あなたは、ふじ子にさう云つて斷然あの男の出入を、差し止めなければなりませんよ。あなたが、云へないと云ふのなら、妾から斷つてやりませう。

村岡。でも、姉さん。あの男は、この土地でやつと出來たわれ〳〵の唯一人の友達ですからな。

村岡の姉。友達だ、友達だと安心してゐると、大切な女房まで取られてしまふのですよ。妾は、あの男が、はなから嫌ひですよ。あの男は、ふじ子がみぢめな生活をしてゐるのに、つけ込んで、物質で誘惑しようとしてゐるのですよ。

村岡。さうでせうか。そんな男でせうか。

村岡の姉。でなければ、他人に内緒に指輪なんかくれるもんですか。

村岡。でもあの男はいゝ家の息子らしいですよ。

村岡の姉。まあ、あなたはどこまでおめでたく出來てゐるのでせうか。

村岡。はゝゝゝ。

村岡の姉。はゝゝぢやありませんよ。

村岡。でもね、姉さん。ふじ子の身にもなつて考へてやつて下さい。あれは、私のために三年近くひどい苦勞をしてゐますよ。

村岡の姉。そんなことは、女房として當り前ですよ。

村岡。いや、當り前ではありませんよ。二十一の時から、三年近く、よく辛抱してくれたと思ふのですよ。新婚生活の樂しみと云つたら、タツタ三月で、すぐ僕がわづらひ出したのでせう。それ以來は、あれにとつて、苦勞ばかりの生活ですよ。何の慰めがありますか、見る物も聞く物も食べる物もない、こんな土地で、よく飽きずに辛抱してくれたと思ふのですよ。あれが、元カフエなんかにゐただけに、僕は一層あれに感謝してゐるのですよ。

村岡の姉。と云つて、外の男と……

村岡。いや、一寸待つて下さい。私は、そんな意味で、藥代でも何でも倹約してあれに着物の一枚も買つてやりたいんですよ。何うかして、少しのよろこびか慰みかを與へてやりたいんですよ。それが、逆立しても自分には出來ないとすると、あれにそんな物を呉れる

外の男に、僕は感謝したい位ですよ。

村岡の姉。だつて、お前、それはあの人をたらし込まうとする恐しい惡魔の手ですよ……

村岡。いや、僕はさうは考へないんです。ふじ子だつて、自分に親切にしてくれる男があつて、たとひ少しは無理筋でも、品物をくれたりなんかすると、うれしいに違ひないんですよ。この世の中が、少しはあかるくなるに違ひないんですよ。僕は自分で、あれをこんな暗い、生活の中に入れてゐるのですもの。外から、はいつて來る光を妨げる權利はありませんよ。

村岡の姉。ぢやお前は、自分の女房が外の男と親しくなつてもいゝと云ふんですか。

村岡。いや、僕はその點は、ふじ子を信じてゐます。あれは氣の弱い女です。だから、相手が指輪なんかを無理にくれゝば、拒めない女です。だが、氣の弱いだけに、僕をさしをいて、外の男と深入りするやうなことは、絶對に出來ない女です。僕の病氣がわるくなればなるほど、僕を見すてることは出來ない女です。

村岡の姉。でも、鶴田と云ふ男は、何だか油斷の出來ない氣がしてね。

村岡。さうでせうか。僕はあの男が、いゝ男であることを望んでゐるのです。僕が、萬一のことでもあつたら、ふじ子を引き受けてくれるやうな賴もしい男であつてほしいのです。

村岡の姉。(感動して)まあ、お前そんなことを考へおいでかね。

村岡。三年近く、ブラ〳〵してゐると、いろ〳〵なことを考へますよ。殊に、ふじ子は身寄のない女ですからね、僕が萬一のことがあつたとき、またカフエなんかを渡り歩かすことを考へると、たまりませんからね。そんな意味で、あれを愛してくれ、僕の生きてゐる中は、あれのいゝお友達であつてくれ、僕が死んだら、あれを引き受けてくれる男がほしいのです。あれは、鶴田君をさう云ふ男と思つてゐるかも知れません。だから、この頃元氣がいゝのです。僕も、さう思つてもいゝのです。その意味で、鶴田君が、善良な紳士であることを望んでゐるのです。僕はこの冬は、どうもむづかしさうだからな。

(かるく、咳をつゞける)

村岡の姉。佐竹さんが、何かお云ひかね。

村岡。佐竹さんなんかでなく、自分の身體は自分によく分りますよ。

村岡の姉。…………。

村岡。(ふと立ち上りながら)おや、濱邊に何かあつたのかしら。あんなに、人が走しつて行くな。

村岡の姉。地引が上つたのぢやない。

村岡。地引ぢやない。地引なら、あんなに走しらない。

(二人しばらく、無口で見てゐる。ふじ子蒼白になつて、裏木戸から、かけ込んで來て、緣の柱に顏をあてゝ、泣く)

ふじ子。…………。
村岡。どうした！　どうした？
ふじ子。たいへんだわ。たいへんだわ。
村岡。何だ！
ふじ子。わたし、悲しいわ。あゝどうせう。どうせう。
村岡。どうした、どうした、ハツキリわけを云へ！
ふじ子。………。
（そのとき、あけはなした裏木戸から、見知らぬ男がはいつて來る。）
男。失禮します。こちらの奧さんは今濱へ出て居られましたな。
村岡。さうです、あなたはどなたです。
男。僕は、鎌倉警察署の刑事ですがね。今濱でこちらの奧さんと同行してゐた男が、あげられたのですがね。
村岡。あつ！　鶴田君ですか。
刑事。こちらへは、鶴田と云つてゐましたかね。本名は吉村と云ふのですがね。
村岡。あげられたと云つて、何かわるいことでもしたのですか。
刑事。窃盜ですな。
村岡。あゝ、さうですか。そんな風には見えませんでしたが。
刑事。大學の豫科へ行つた男でしてね。なか〳〵の色魔ですよへゝゝゝ。
ふじ子。（泣きじやくる）…………
刑事。奧さんも欺かれたでせう。どう云ふ御關係で、一しよにお歩きになつてゐたのでせう。
村岡。いや、よくこの家へ遊びにやつて來るものですからな。今も、家内が地引網の魚を買ふので、一しよに行つてゐたのでせう。
刑事。ぢや、お宅と別に深い關係はないわけですな。
村岡。ありませんとも。な、ふじ子、別に深い交渉はないね。
ふじ子。（狼狽しながら）あの……あの……ございませんわ。
刑事。さうですか。
村岡。（ふと考へついた如く）おい……お前鶴田君が、お前に指輪を買つてくれと云つて、持つて來て居たぢやないか。あれは、お前預つてはゐなかつたのかい。
ふじ子。あ……えゝ……えありましたわ。
村岡。預つてあるのなら、刑事さんにお返ししたらいゝだらう。後で面倒でなくていゝ。
ふじ子。えゝ　えゝ
（ふじ子、ガマ口を開け、指輪をとり出して返す）
刑事。あゝ、こんなものがあつたのですか。盜品ですな。これでも百圓はするでせう。まだ、お金はやつてないんですな。
村岡。ありませんとも、大體われ〳〵の家へ、そんなものを賣り付けに來るのが無理ですよ。へゝゝゝゝ

刑事。お買ひにならなくて、結構でした。尤も、様子を知らない第三者が、買つた分にはいゝのですが、あとで分ると氣持がわるいですからな。この外に、何も別にありませんか。

村岡。ありません。な、ふじ子、この外になんにもないね。

ふじ子。(泣きながら) ございません。

刑事。あゝ、どうもおさわがせしました。奥さんが、御一しよだつたものですから。どうも失禮しました。

村岡。御苦勞でした。

村岡の姉。まあ、恐ろしい〳〵。多分こんなことだとは思つてゐた。でも、まさか泥棒だとは思はなかつたね

ふじ子。(一しきりはげしく泣く)………。

村岡。仕方がない。災難だ! こちらに、手落のあつたことぢやないんだ。

村岡の姉。いゝえ、さうぢやありません。あんな男を、近づけるからですよ。おゝ氣味がわるい。あゝ、さう〳〵あの男が、東京の土産だと云つてくれた海苔があつたね。あれもどうにかして置かないと、後難が、恐ろしい、どれ!

村岡。よしなさい、姉さん。海苔なんかいゝぢやありませんか。

村岡の姉。いゝえ、よくありませんよ。

(姉臺所へ去る)

ふじ子。(わあーと泣く) あなた、すみませんでした。あんな指輪なんか買つて。

村岡。なに、いゝんだよ。お前にわるいところなんかちつともありやしない。

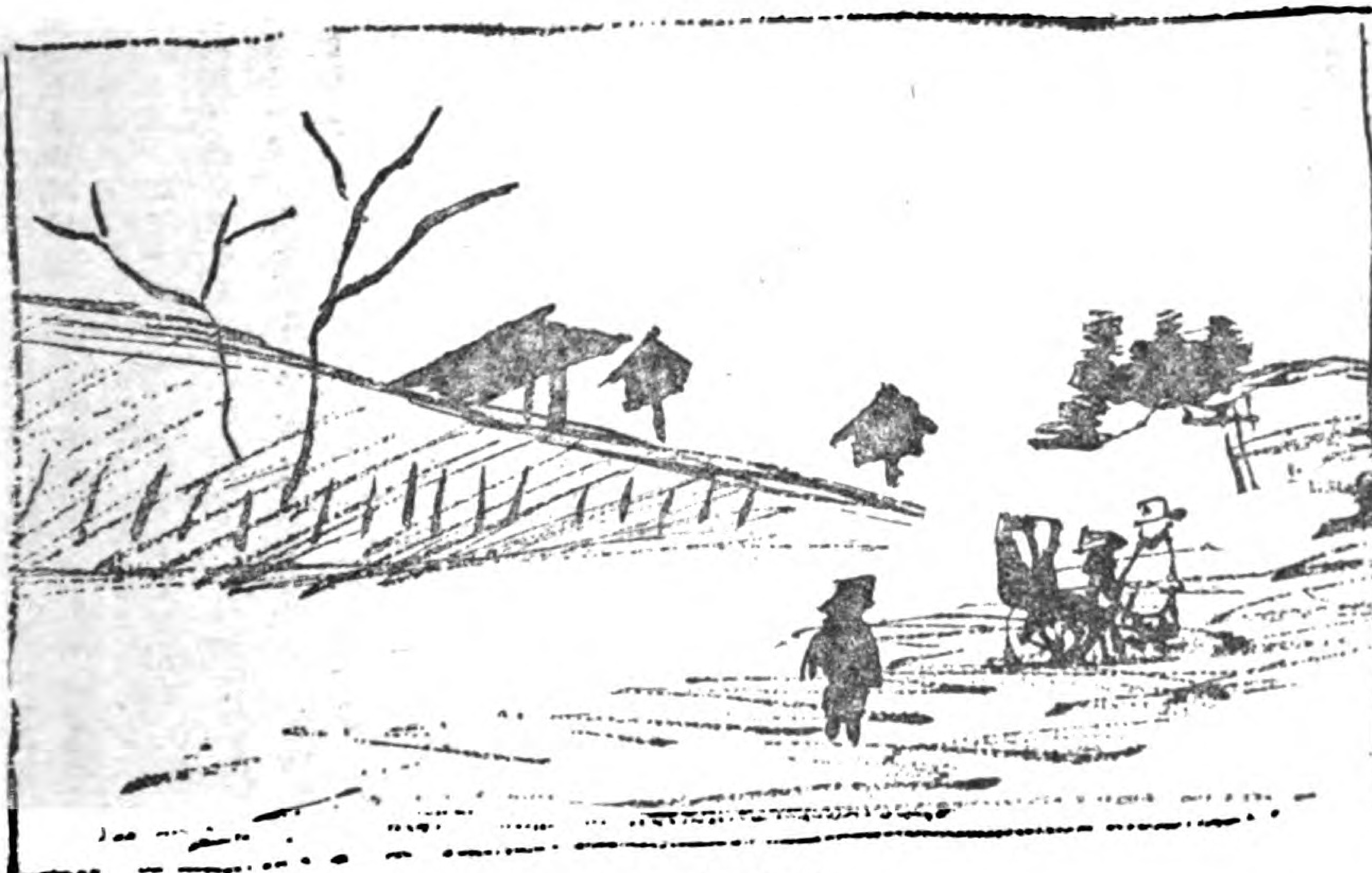
ふじ子。そんなこと、おつしやると、妾死んでしまひたいわ。

村岡。なにいゝんだよ。心配することはないよ。こんなひどい目に合はせて、氣の毒だつたな。

ふじ子。みんな妾がわるいんですわ。御免なさい。御免なさい。

村岡。いや、みんな僕がわるいんだよ。お前に千圓もするダイヤを買つて置いてやれば、あんなことにはならないんだからな。あはゝゝだが、氣を落しちやいけないよ。今に何か、またいゝことがあるだらうからな。

(幕)



償金四拾萬弗

眞山青果

本號までの梗概

第一幕　文久二年八月廿一日、島津藩の行列生麥村通過の際、英人四名を殺傷す。劇は翌日午後、神奈川奉行所役人の現場探査に始まる。役人二名土人に事件の眞相を訊ねゐる時、薩摩藩士高崎・土師通り掛る。人々、英國兵の發砲を愛へて二人の通過を止む。きかずして行かんとす。會々薩藩を逐はれし元足輕岡野新助悄然として入り來り、兩人に話掛くるも輕蔑して相手にせず。彼は一旦去りしが、英兵の來るに會し再び逃げかへり、兩藩士につきて養家再興の爲め、竹馬の友たりし御小納戸頭取大久保市藏（利通）に面談の取持を頼む。高崎怒りて外に突き出す。次いで大久保市藏、奉行所の調役稻丸と共に共同調査に來る。稻丸、英國側の抗議書譯文を讀み、更に薩藩の奉行所宛と老中宛の屆書の相異を指摘す。大久保之に答へ、下手人は自藩の士たるは認めしも、氏名の發表は拒む。稻丸公表を迫る。大久保遂に老中の許まで屆出を約す。

第二幕　第一幕と同じ日の夜。東海道程ケ谷驛島津の本陣、桔梗屋の奧座敷。英國兵襲擊の風聞に殺氣立つ。生麥變事の下手人那珂原嘉左衞門は、幕府に突き出されて死なんことを願ふ。同僚なだむ。甲斐田源次は、事變に立ちおくれしことを殘念に思ふ。時に英人襲來の聲あり、皆立つ。間もなく大久保、那珂原・甲斐田を連れかへりて諭す。下手人としては、落魄の舊友岡野新助が、異人の無禮を見兼ねて斬りつけ、逭ぐるを追ひしまま行方知れず、と屆け出たりと云ふ。甲斐田は大久保の策士振りに憤慨して座を立つ。時に岡

野新助面會に來る。大久保遮ぐ。新助の從兄たる那珂原伴ふ。兩者罵り會ひたる末格鬪し、大久保仲裁す。大久保は新助の酒色を戒む。新助は、後世に芳名を殘し、岡野の名跡を立てん爲め、大久保の意圖通り下手人として突き出されんことを請ふ。大久保、下手人は名のみにて、眞實は引き渡す要なきことを冷然と語る。新助失望す。大久保小判三兩を投げ與へて、時機到來を待てと説きて、去る。新助あとに涙ぐむ。

第三幕　同年閏八月廿日午後、入洛の前。江州大津驛海老屋に於ける島津の本陣。京都にては生麥のこと大評判なれば、藩士達狂喜してゐる。那珂原は異人退治の大立物として媚てらるるも、新助の太太しき下手人振りを思ひて、心中苦々し。甲斐田は功名にあせり、那珂原はじめ同僚と事々に神經を突き合はす。藩侯參内の御供に入らんと願へども、大久保に拘ひては意地となりて頼み得ず。那珂原・甲斐田去りし後、新助來る。美々しき服裝なり。大久保を見て畏縮すれども、時に天下のお尋ね者たることを誇る。彼は三兩貰ひし後酒を飲みて悔恨し、大久保に會ひて懺悔せんとて、東海道を行列のあとを追ふ。大久保會はずして金を與へしかば、その度毎に酒色に沈湎したることを告白し、心底より泣けると云ふ。行列發足の時刻になるも新助動かず、大久保苛立つ。

第四幕

時――前場と同じ日。ほゞ同じ時刻。

處――大津驛の宿はづれ、高觀音寺境内。

東海道を直下に見下ろし、琵琶湖の全景を展望する地勢にある高觀音の境内、繪馬堂附近。

舞臺に顯はるゝところは平舞臺にて、上手に欄干をめぐらしたる繪馬堂の一部を置く。吹拔きにて湖上の風光を望む。下手には茅葺の洒落たる掛茶屋あり、土産ものなど賣る。中央は敷石の參詣道にて、奥の方切穴より石段をのぼり來るこゝろにて、左右には寄進の石燈籠立ち、手水石などあり。正面背景は全部湖水の明媚を眺望す。

幕明く。當時京都に屯集せる諸國勤王の志士等、二十名ほど、薩摩侯の行列歡迎のため、こゝに來り集りて、時刻を待ちゐる體なり。その有志者中には、長州の久坂某、入江某、來島某などの志士あり。土佐藩有志者には吉村某、澤田某、岡田某等あり、肥後人には川上某、轟某、その他江戸の安積某、淡路の藤本某など、いづれも當時勤王家中にても急激論者と目されたる人々加はりゐる。されど一同の間には猶ほ未だ封建の氣習を脱せず、その藩籍によりて牀几を別にし、互に割據の姿をなす。一同は薩摩藩の返事を待ちわび、或は酒肴を誂へて獻酬するあり、或は扇面に詩歌を認むる者あり、或は朋輩の刀劍を目利きして興ずる者あり、腕押しする者あり、總てみな徒然を極めゐる。秋に老いたる蜩の聲、樹間を洩れ來る。

安積（繪馬堂に腰掛け、生欠伸）待たせるなあ。何うしたんだ。

吉村（仲間の者と熱心に將棊をさしつゝ）今、人をやりました。程な

う、沙汰がありませう。

安積　果して來るかなあ。いつもこれが薩摩の癖だ。土壇場へ來ると、必ず初志をはづすのだ。(立つて廻廊を歩む)險惡々々。

川上　(むつとして、刀劍鑑定の目を上げ)然し、攘夷は天下の公論だ。一國一藩の問題ではない。

安積　輿論は巧にこれを利用し、功績はわが一藩を獨占する。薩摩代々の方針なのだ。寺田屋騷動の悪辣を見るがいゝ。眞木和泉、清川八郎、正直者はみんな無慙に犠牲を食つてゐる。

藤本　(扇面に揮毫しつゝ)他藩者の功名を掠むはまだしも、是非ないが、時の權宜のためには老臣朋輩をも見殺しにして悔まないのだ。

安積　結局誠實者は西郷一人かなあ……。(嗟嘆して)然し、その西郷も、今度は徳之島へ流されたさうだ。

藤本　坦路に險阻を視る、彼等の國風なのだらう。

安積　悪辣々々!

安積某、立つて湖水の風光に眸をはなつ時、土佐藩の輕輩岡田伊藏、急がしく戻り來りて、吉村の耳に何か囁く。

岡田伊藏、二十六七歳、太刀をたばさんで卑賤なる服裝。剽悍らしき顔貌のなかに、擧止輕卒なるところあり。

吉村　ほう——。(不審さうに顔を上げ)誰が然う云つた。

岡田　見ました。現にわたくし、見届けて來ました。(低聲)

吉村　然し、そんな馬鹿な……。姓名を問ふたか。

岡田　岡野新助。

吉村　浪人體か。

岡田　この春、仔細あつて島津家を退身したと、自分では云つてゐます。

吉村　(半信半疑に對者の目を見詰めつゝ)醉つてゐるのか。

岡田　茶屋の女子どもなどに戯れかけて、正體もありません。

吉村　何うもおれには、信じられないなあ……。

岡田　(吉村の手をとり)兎に角、ちよつと——

伊藏、慌しく引立てる。吉村、引擦られて片足を穿物におろしつゝ、茶屋の縁臺に酒を酌みゐる長州藩士久坂、入江等に聲を掛ける。

吉村　のう長州さん。そんな話、有りませうか。

久坂　(盃を持ちたるまゝ、振り向き)何んですか。

吉村　生麥事變の發頭人だが、われ等は那珂原君と聞いてゐる。

久坂　それが——?

吉村　みづからその下手人と名乘る人間があるさうだ。やはり島津家の脱藩者らしいのだが……。

この對話の間、一同の注意岡田等に集る。

入江　そんな筈は、あるまい。われ等は現に、御城附役人の公文書によつて承知してゐる。第一の下手人は、那珂原喜左衛門だ。

川上　無論、それに相違ない。誰がそんな噂を立てるのだ。

久坂　何かの間違ひだよ。殊勳者は那珂原だよ。

岡田（人々の信ぜざるを見、少しむつとして）噂を立てるのでも、間違ひでもありません。手前、その當人に遇つて來てゐます。

吉村　岡野新助とか云ふ、薩摩浪人なさうです。現にそこの、追分の茶屋で、酒に醉つてゐると云ふのだ。

安積　そりや斯うだらう。（絵馬堂より口を出す）異人リチャードソンを芋畑に引摺り込んでから、供先の血氣連中が寄つてたかつて、面白半分、異人を滅多切りにしたと云ふから、大方そのなかの一人だらう。一太刀ぐらゐは遣つてるかも知れないよ。

入江　謂ゆる、死人に一庖丁の口かな。はゝはゝゝ。

岡田（胸を反らして）いや、僕は然うは聞きません。自分では慥に、生麥事變の發頭人のやうに主張して居りました。

久坂　第一、それほどの殊勳者が、道中の盛切酒に食ひ醉つて、ベラベラとうぬが手柄話をする筈もない。（笑つて手を振り、相手にせず）土州さん、そりや何かの間違ひですよ。はゝはゝゝ。

吉村　然うでせう、そんな筈はない。（笑つて、將棊盤に向ふ）岡田、またお主何か間違えて來たのだらう。

岡田（むツとして口を尖らせ）いや、然うぢやありません。

吉村　相變らず、輕卒な男だ。

岡田　好しい。連れて來ます。

　岡田、忿々して去る。一同、また雜談になる。

川上　然し、それにしても薩摩は、われ／＼有志を何うする氣だらう。まさかに齊彬公以來の勤王論を、不擁證文にもなるまいが。

安積　遣るよ、それは平氣だ。西郷ひとりを抵當流れに出して、今日までの手形は、總て不渡りにする氣だらう。寺田屋のあの時、既にその鋒芒が見えてゐるのだ。

川上　然しこの時勢に、今更公武合體論など成立するものと思つてゐるのか。大久保市藏もゐて、何んたる醜態だ。

安積　大久保がゐるから危險なのだ。あいつは由來便宜主義だ。

藤本（嘆息）斯うなりや、頼みはたゞ長州さんだけだ。久坂君、入江君、天下志士のために、決然として憤起なさる時だらうと思ひます。

久坂（わざと謙遜の語調にて）然し、いづ方の藩内にも、俗論者流の多いのには閉口します。幣藩なども目下その艱難に際して居ります。

藤本　けれども、長井雅樂の開國航海の姑息論を斥けて、國老を藩地に追ひ込めた俊輔などは——

久坂　高杉はじめわれ／＼青年の無茶が、たま／＼奇功を奏したのです。

安積　いや、その無茶だ。この際拔も必要なのは、計數を忘れて倔從

も無茶を押し通すところにある。われ〳〵が窮境に陥んだのは、それなのだ。西郷は流石に、その機微に觸れてゐた。

川上　薩摩も然し、生麥の事變で最初幕府に對抗した態度などは、無茶と云へば實に無茶だつたかな……。

藤本　腰が挫けるのですよ。土壇場へ來ると、すぐ損得が見えて來る。これまで何日も然うだ。

安積　大久保は……利口過ぎる。

藤本　何うしても長州だ。諸君の忠憤に待つより外はない。

久坂（微笑）駄目ですよ。結局はこれも諸君の失望に終りませう。

　　久坂、入江等の長州人、謙遜のなかに得意の色あり。

吉村（ふと思ひ出し、將棊の手を止め）然し、岡野新助と云ふ名は……有りますよ。然うだ、寺田屋だ。あの時の鎭撫者連名のうちに、岡野新助と云ふ名があつたと思ひます。

藤本（慇懃に落歎しつゝ、好くも聞かず）然うでしたかな。そんな姓名がありましたかなあ……。

吉村　有ります〳〵。確に記憶してゐる。足輕岡野新助――足輕とあるので忘れません。然し、若しそれだとすると、岡野といふ仁は、同家中でも相應の人物と思はれます。輕輩足輕の身をもつて、かの際錚々の人選に加はるほどだから、かなり人間も出來てゐるに相違ありません。

久坂　然し近衛者は那珂源だらう。（不服さうに口を出し）今度の事變に、岡野新助など云ふ名は、誰からも聞いたことがない。

川上　われ〳〵も初耳だ。何かの誤りだらう。

入江（何か考へて）いや、待ちたまへよ。岡野と云ふ名は、僕にも記憶がある。（急がしく懷中の紙入より、小さき控帳を出し、見る）諸君、有る〳〵。岡野新助――なる程足輕だ。島津家より幕府に屆けた最後の屆書には、先供の内足輕岡野新助と申す者、異人兩人へ切り付け候ところとあつて、立派に生麥の下手人として認めてゐます。

　　一同、驚き怪しみて、控帳など覗き見る。

入江　この屆書はまだ世間に流布しないが、大久保が最後に神奈川奉行所に出頭して陳述した答辯書なのだ。二三日前内密われ〳〵へ報告して來ました。その文面に嚴然岡野の記載があるのを見ると……なる程これは、無關係者とも思はれない。何かそこに、秘密があるかも知れない。

　　一同は顏など見合はせて、默然言葉なし。

川上（暫くして嘆嗟）うゝむ。するとこれも、薩摩の權謀に操られてゐたのかなあ……。

藤本　やはり例の、奸詐だつたのかなあ……。

久坂　それだが、然し、世間はなぜ那珂源を下手人にしてゐるのだらう。當の功績者岡野新助の名を掩つて、那珂源を名物男にしてゐる意味が解せない。現に薩州人から京都同志に來てゐる書面

にも、大抵那珂原の名をほのめかしてゐるではないか。のう鐵石子。

藤本　さあ、それだ。(腕を組み) おれには………分らない。

久坂　川上君。君は何う思ふ。

川上　さあ………。やはり大久保の詭謀なのかなあ………。

一同、思案に迷ふなかに、安積一人はクス〱と竊笑しつつ、繪馬堂の廻縁を歩みゐる。

吉村　兎に角これで、今日われ〱の歡迎會に、薩摩人の出席しない理由だけは明かになつた。那珂原いかに鐵面皮でも、白晝恬然として、この招宴に姿を顯はすことはなるまい。道理で、先刻から幾度人をやつても、返事がない譯だ。はゝはゝゝ。何んのことだ。

久坂　然し——

藤本　到頭薩摩も尾を見せた。彼等の眞意も知れます。

久坂　然うかなあ………。然うと極れば、もはやわれ〱も京都へ引上げやうではないか。

川上　實に………、馬鹿な話よ。(苦笑ひしつつ、立ち上がる)

一同、不快さうに呟きて歸り支度するなかに、安積のみひとり、低く笑ひゐる。

藤本　(安積を見て) 何んだ。

安積　諸兄は氣が早過ぎる、僕はその屆書に岡野新助とあるから、却つて那珂原の實績を信じたいのだ。

藤本　何故?

安積　大久保は奇謀を愛する男だ。まさかにかの際實在の人間を擧げて、下手人に差出す筈はないよ。今は無法の勝つ時だ。市藏もそれぐらゐの呼吸は知つてゐるよ。はゝはゝゝ。

川上　然し、現に岡野新助と云ふ人物が、ここに——。

安積　居ると云ふから、僕はなほ信じられないのだ。はゝはゝゝ。僕は薩摩は好まないが、大久保をそれほどの腑拔者とは思はない。必ずそこには、彼の作略が秘んでゐるのだらう。

川上　然し現に、那珂原はわれ〱を避けてゐる。

安積　まあ、見てゐやうよ。見てゐやう。

安積、笑つて歩み出す時、岡野新助、正體なきまでに泥醉して、岡田伊織の肩にぶら下りながら、正面石段を上り來る。衣服もみだれ目据りて、しきりに唾を吐き散らす。

新助　(中途に立止りて、動かず) おれはおれの話をしてゐるんだ。何んで貴公……察當する。

岡田　それがおれの話ではないのだよ。天下の話だ。

新助　(肩口より對者を睨み上げて) 何い——?

岡田　同志の諸兄が、待ちかねてゐる。兎に角、參會してくれたまへ。

新助　(屹として) おれが異人を切つた話、それ聞きたいのか。

岡田　君が今、茶屋の出女どもに話してゐた、あの通りでいゝのだ。

新助　(急に手を振つて)はゝはゝ。ありや然し……多少潤色が加はつてゐるよ。はゝはゝ。

岡田　事實を聞きたいのだ。枝葉などは何うでもいゝ。

新助　事實か——。うゝん。(頷き、また笑つて)はゝはゝ。事實とは大抵……あやふやなものだ。そこは何うなりと……、貴公よろしきに頼む、頼む。はゝはゝ。

新助、酔めいてそこの捨石に腰掛け、俯向きて、小聲にクスくく笑ふ。その間に一同の注意は新助に集り、一人立ち二人立ち、人々次第にその周圍に集り來る。

久坂　(進み出て)君。君は生婆で異人を切つたには相違ないのか。

新助　切つたく。(顔を上げ久坂を見て、昂然と)おれが切つた。

久坂　然し、世間の風聞は、專ら那珂原某といふことになつてゐる。

新助　嘉左衛門か、へん、あれはおれの從弟だ。(愚弄するやうに笑つて)或は世間に……そんな風説があるかも知れない。

入江　那珂原が貴公の從弟？

新助　實に不人情なやつよ。おれを見ると、犬々と云ふ。

入江　犬？

新助　云はれても仕方のないところは、確にこつちにもある。はゝはゝ。(頭を垂れてフラくしつゝ)おれはもと……寄合並六百石の養子の身だ。それが、女でしくじり……酒でしくじり、到頭、足輕とまでぼい落されたんだ。落ちて見ればだらしのないもんで、足輕と見られゝば、足輕でも結構生きられる。はゝはゝ。そこが浮世に死たれぬところだ。はゝはゝ。

吉村　(將棊盤を押し遣りつゝ)ちよッと、君——。

新助　何んです。

吉村　貴公のお名前が、當春寺田屋のあの騒ぎの時分の、討手の人選連名のうちにあつたやうにも記憶しますが……。

新助　記憶にありますか。こりや何うもならんなあ、はゝはゝ。

新助、兩手に後頭部をかゝへて、反り返つて大笑する。

安積、その前より岡野を注視してゐたりしが、その態度の檢束なきに不快を感ずるもの、如く、その時立ちかけたる藤本を手招きして呼び、人々より遠く離れて堂内の掛額などを見廻はりゐる。

——注意。兩人共にこの後に言語なし。たゞ岡野等の對話には始終留意を怠らず、要點に到れば耳を立てゝ聞き、岡野の醉態を見ては憫笑して繪馬を眺むるなど、動作にてその心理を示す。

新助　あれはなあ……、はゝはゝ。(人事のやうに又笑つて)あれは市藏のやつ、持前のお世話ずきから、わしを昔の六百石に取立てゝくれやうとして、折角親切にはからつてくれたのだが、これも見事に、遣り損つてしまひましたよ。はゝはゝ。

川上　すると君は、大久保君とは親しい友人ですか。

新助　同じ加治屋町の生れで、大久保、伊知地、甲斐田、西郷、みな餓鬼の時から、われよ主よの竹友達です。恋義とは隣り合せなり、貧乏づきあひで、兄弟同様にして暮して來ましたよ。はゝはゝ。

久坂　西郷氏とも友人ですか。

新助　いや、わしの云ふ西郷は弟の小兵衞です。吉之助どんはおれより年も五つほど兄貴で、その頃からもう所帶の苦勞をしてゐましたよ。小兵衞と一緒に近思錄の講義など聞いたが、何んとなくおッかなくて、われわれ惰弱者には、近寄りがたい人でしたよ。

吉村　それを何うして、寺田屋の功名に洩れたのですか。

新助　糞土の牆は朽すべからず。やつぱり酒だ。はゝはゝ。（大口あいて、面白さうに笑ふ）大久保の情で人選に入つたと云つても、わしは足輕だ、御物持ち飛脚役に過ぎない。が、それには不足がない。何うで劍道不鍛錬なり、膽力とてもない。後にゐて、場に出合はない方が、わが身には勝手です。それでもまあその時は、大久保から命令をうけて、一端御用にも立ちさうな、殊勝らしい顏をしてゐましたよ。はゝはゝ。そのうち江夏、森岡、奈良原など八人の輩が、順次に御前に呼び出されて、御内命をうけて下つて來た。白書院に御膳部が出て、鯉の味噌汁で御酒下された。岡野新助へも矢張り、敷居をへだてて御膳が出ます。眞四角になつて坐りましたよ。はゝはゝ。八人の討手の衆はと見ると、これが又おかしい。（ぷッと吹出して笑ふ）

久坂　（遲緩しげに、進み出て）兎に角、君等、切つたことは事實だらう。

新助　（話の腰を折られて、見上げる）何を――？

久坂　生麥の事實を聞くのだ。最初馬上の異人に切りつけたのは君等か。

新助　うむ、切つた！（不興氣に久坂を眺めてから、又笑ひ出して吉村の方に話し出す）はゝゝ、で、八人の衆はと見ると、これがおかしい。みな目尻がつるし上つて、こゝのところが……みなヒクヒクと動いてゐる。（口尻を指差し）そして今迄とは急に大聲になつて、笑ふにも馬鹿々々しい大きな聲を出す。ちよッとも落着かずに、壁だの襖だの睨み廻はしてゐる。お汁椀をとつて口にあてると、みな不思議に湯氣に噎せてゐる。わしも椀の蓋をとつたが、それほど噎せるほど熱い濃漿でもないのに、みな遣つてるのだ。はゝはゝ。汁に噎せないのは、頭から死ぬ氣のない岡野新助たゞ一人だ。はゝはゝ。こりや好い、こりや面白い。はゝはゝ。（兩手を打振りて大笑する）

久坂　岡野氏。

新助　何んだ。

久坂　貴所に疑惑をかけるのではないか……、然し、お話のところを島津家より幕府への届書と照合すると、甚だ合得に苦しむ點があるやうに思ふ。第一——

新助　(むッとして) 届書に誰が切つたとある。届書を見さッしやい。

久坂　無論尊公の姓名が明記されてゐるが、然し——。

新助　(關はず吉村に向つて) 皆、酒だけは飮みましたよ。手前——岡野新助は、無論したゝかに醉つた。これも、醉つたのは新助一人、あとは皆飮んでゐて醉ひません。はゝはゝ。それから一同、お長屋へ下つて、用意だ。刀の燒刃を合はせるやら、紙を胴に卷くやら、なか〳〵勇ましい。立つにも、歩くにも、みな切齒扼腕だ、慷慨悲憤だ。はゝはゝ。そのうちに一人、硯箱を持出して來て、肌繻袢の白襟に例の國のため山櫻かなを書き出した者がある。するとおかしい、みな急に歌詠になつて、扇面やら短冊やらに、さかんに山櫻かなを書き散らすのだ。赤心報國、天地正大、みな威勢のいゝことだ。はゝはゝ。相互に顏を見合はせて吹き出しもしないところを見ると、無論みな正氣です。はゝはゝ、芝居の役者が舞臺で踊るのを見てゐるやうで、初めは面白がつてゐたが、段々馬鹿々々しくなつて來た。氣がつくと懷には大久保から渡された肌付金の三兩がある。腹には今の酒が入つてゐる。高が一時、女の顏を見ても刻限には間に合ふだらうと、ちよッとお長屋を脫け出しました。はゝはゝ。

この時、那珂原嘉左衛門、木崎鷹之助と連れ立ち、行列旅裝のまゝにて挨拶に來りしが、新助の姿を見つけて不快さうに遠く木蔭に佇みゐる。一同は心付かず。

薩摩侯行列の下知聲、遠く勇ましく脚下に聞え來る。

川上　然し、浪人ならば貴公行列のなかに居合はす筈はあるまい。

新助　(話の腰を折られて) 何。

川上　不審に思ふのだ。池田屋以來浪人せられた貴公が、何うしてその時、生麥の行列に加はつてゐられた。

新助　何、浪人……。(ハタと行詰りつゝ) その時現場に居合はせた理由か。それは……そこには段々仔細がある。追つて分かる。追つて……分かります。(吉村に向つて) はゝはゝ、獸肴などを調へて來ました。はゝはゝ。やはり手が出て……つてゐれば好かつたのだ。たゞ女を悅ばしたいばかりで、つい寺田屋の一件を女に喋つてしまひました。女も驚き悅んで、酒、刻限を心配しながら……飮みましたよ。はゝはゝ。

川上　大體あの届書には合點のゆかぬところがある。幕府方の調書には、異人は路傍に行列を避けて、靜肅に見送つてゐたやうにあるが、薩摩方の屆にはまるで反對してゐる。岡野氏、果してかの際外國人は、行列に向つて無禮を働きましたか。

新助　そ、それは大久保に……聞かつしやい。大久保が裁いたのだ。

久坂　過ぐる外國人の後を追ふて、行衞不明になつたとある岡野新助が……。

新助　えゝ、大久保に聞け。大久保に聞くがいゝ。

川上　場所はいづく邊でござりました。轟見橋の手前とも聞くし、又その先方のやうにも申してゐる。

久坂　外國人の順序は、その女異人は何番目の馬上と見られました。

新助　婦人は二番目、三番目……いや慥かに二番目と記憶する。

新助、返答に窮してドギマギしながら、初めて那珂原のそこに佇むを見る。同時に態度一變して、極めて傲然たる風體を裝ふ。

新助　（那珂原を尻目にかけつゝ）諸君は大久保市藏の屆書を何んと讀まれた。大久保は御納戸頭並、その事件の當事者なのだ。その責任者が公式の屆書に、岡野新助を下手人と認めた以上、何人がこれに異議を挾まるゝか。大久保を信ずる者は、その屆書を信じなければなるまい。わしは斷じて、下手人は岡野新助と思ふ、信ずる。（指差しつゝ）そこに那珂原もゐる。那珂原に聞かれたら、眞相が分かるだらう。下手人は岡野新助だ、岡野新助に相違ないのだ。

那珂原、屹として進み出で新助を睨む。

新助、腹を抱へて笑ふ。一同、不審さうに顏を見合はす。

新助　詳しい。さつき小女郎に、手札を渡してある。

（幕）

第五幕

時――文久二年閏八月十五日。前幕より數日後。午後。

處――祇園社內、二軒茶屋。

平舞臺。上手寄りに祇園社南面、石の大鳥居を斜めに見せ、瑞籬にてしきる。下手の方樓門に通ふこゝろなり。正面に名所圖會などに見る如き、その頃の二軒茶屋（左側）の店先を飾る。但しこの日は諸國浪士の會合に全家屋を借切りたるため、通路の外一箇所を開きたるのみにて、見世は總て簾を垂れ、茶汲女を休みゐるなり。供待の牀几一脚、瑞籬の邊にあり。

下馬札、石燈籠など立つ。楓樹二本、やゝ色づく。

幕明く、岡野新助、例の浪人姿にて微醺を帶び、腕へ提枝にて白鳥をぶら下げ、高聲に喚き立つ。仲居おみの、下男清藏、當惑さうに拱手して畏まりゐる。

通行人二三人、物珍らしげに立ちて見る。

清藏　へ、それが女子衆の粗相でござりまして……。

新助　貴樣では分らん。會主に談じる、會主を呼べ。

清藏　それがその……何んでござります。今日のお寄合は俄かのお催しでござりまして、別に肝煎といふお方も定つて居りませぬ。

新助　何だ

みの　御銘々思ひ〳〵の御會合でござりまして、どなた樣がお世話役やら……、一向御樣子が知れませぬ。

新助　これは何んだ、何んだ(代切の紙札を指差し)亭主役もない銘々寄合なら、なぜ初めから代切札を張り出しておく。(無闇に睨み廻はして)知つてるぞ。土佐の武市半平太、岡藩の小河彌右衛門、川上彦齋、これ等の輩がもつぱら周旋して、今日この集會をひらいたことは、疾に承知してゐる。呼んで來い!

清藏　へえ……、その武市樣も川上樣も、生憎まだお見えにはなりませぬ。

新助　薩州浪人、岡野新助と取次いで來い。岡野新助だ。

　この對話の間、集會に出席の浪人等、ポツ〳〵來かゝり茶屋のうちに入る。新助に注意して行く者もあり。

みの　(揉手しながら)誠に不都合なことではござりますが、今日は斯樣に混雜いたして居りますので……。

新助　歸れとでも云ふのか。それは何者の指圖だ。

清藏　いゝえ、決してそんな……。

新助　(わざと聲を上げ)諸藩有志のやから發起となつて、幕政改革のために、全國勤王黨の大同團結をはかり、先づもつて薩長融和の會合をひらく。趣意に於ては同感だ。然し、その集會に、この岡野新助を疎外して、果して兩藩圓滿の懇親を結ばれるものか。その邊おれには合點がゆかぬ。待つてゐる、聞いて來い。

　清藏、おみの、顏を見合せて當惑しゐる。

新助　勤王と申しても、要するに各藩の功名爭ひだ。長州は薩摩と手柄を奪ひ合つて、或は將軍家上洛とか、或は假條約の破棄とか、新規思ひつきの議論を持ち出して、堂上方の間など、遊說してゐるやうだが、それはたゞ幕府いぢめの權略に過ぎない。御宸慮不安の第一儀は夷人打拂にある。攘夷だ!―――とおれは考へてゐる。岡野新助だと云つて來い。

　新助、そこの牀几に腰掛け、わざと肩臂を張りて、大聲に喚く。清藏等、外聞を憚りてハラ〳〵する時、土州藩士吉村某、友人某と連れ立つて、今日の會合に來かゝる。

吉村　(新助の肩を叩いて)岡野氏、相變らず御機嫌ですな。(笑ひながら眴せして、清藏等を去らしむ)

新助　おゝ、この間の土州さんか。(と、見上げて)この位に申さぬと、連中相手にしてくれません。已むを得ず時勢論だ。はゝは

ゝ。

吉村　諸方を立廻はられるさうで、隨所に噂を聞きます。

新助　足まめに廻はらないと、酒にはなりません。

　新助、吉村の苦々しげなる語氣に、やゝ羞恥の色あり。酒の醉にまぎらして、譯もなく笑ふ。

吉村　（不快さうに、凝つとその擧動を見詰め）時に、今日は。

新助　今日は――？（反撥的に鋭く見上げしが、意氣地なく目を伏せ）申しても……無駄だらう。御推量に委せます。

吉村　只今聞けば脫藩の武市等に對し、何か不平らしい口氣であるが、われ等に於ては決して貴所を疎外した覺えはない。眞に憂國の御意見あらば、喜んで高說を承はりたく思つてゐる。

新助　いや、分つて居ります。御演說のところは承知してゐる。

吉村　われ人ともに諸藩の有志者が、妻子鄕關をすてゝ、斯く東西に奔走し、つぶさに流離艱難を甞むるは、そも何故と思はるゝ。皆われ等靑年者が、已むに已まれぬ熱情の發露なのだ。今諸國脫藩者のうち、誰一人として一身の名譽、一身の利害のために動いてゐる者はないと思ふ。われ等の主張は、決して勤王倒幕のみに拘はるものではない。われ等は今にして初めて、對外封建の迷夢から覺めて、大日本天皇國の確立を目標としてゐるのだ。

新助　お國風とて……窮屈なことだ

　新助、横を向き呟きつゝ、クスクスと笑ふ時、祇園料亭の小女と思はるゝ十二三の小娘、封じ文を持ちて、人を尋ぬるさまにてその邊に佇みゐる。

吉村　（鋭く新助を睨み）高が出合頭の功名に慢心して、町人婦女子の人氣に醉ひ……、その身を酒色に溺らすのみか、同志同藩の者にまで恥辱を與へるとは何事だ。われ等の生國土佐あたりでは權勢で拔いた刀は刀でないとしてゐるのだ。

新助　分りました、はゝ。分つて居ります。はゝはゝ。

吉村　（少し聲を潛め）生麥事變のために、いま英吉利と幕府の外交談判が、いかに切迫してゐるか、御存知か。英國は上海に聯合艦隊を集めて、專ら開戰の準備をなす上、幕府に向つては威嚇をもつて莫大もない損害償金を迫つてゐるのだ。償金か、合戰か、國家はいま危急に瀕してゐるのだ。（新助の襟の邊を掴み、小衝くやうにして）貴公それ、御存知か、御存知か。

新助　存じて居る。（昂然として顏を上げ、臂を張り）英吉利國の要求は金貨拾萬磅、米利堅銀に替へると四十萬弗と聞いてゐる。

吉村　四十萬弗だぞ。四十萬弗だぞ。

新助　うむ四十萬――、四十萬弗だ。

吉村　敵艦隊ひとたび近海に出沒すれば、その時はもはや幕府もない、藩廳もないのだ。われ等はたゞ皇國の一臣民として、擧國

一致、この國難に趣はなければならないのだ。島津侯もしきりにそれを患へられて、攘地防禦のため幕閣の内議を朝廷に出してゐられると聞いた。本變はたゞ外人殺傷の小事に過ぎないが、その波動はいま全日本國存亡の大問題となつてゐるのだ。

新助　償金は四十萬弗……、四十萬弗なのだ。はゝはゝ。

・新助、腕など振り上げ、突然叫び出すやうに叫ぶ。

吉村　例へ偶然の遭遇にもせよ、この大事變の當事者は誰だ、誰なのだ。(攫みし襟を放しつゝ) 然るに……その爲體は何んだ。何んの醜態だ。朋輩同列から犬とまでさげすまれて、悔むところにないのか。

新助　償金は四拾萬弗……四拾萬弗なのだ。はゝはゝ。

吉村　われ〳〵有志の會合に、貴公の出席を拒むのを無理とのみ云はるゝか。貴公は國事の會合があると聞くと、必ず何處からか立現はれて、醜態の限りをつくした上に、いつも強請がましい醜態を示すと云ふので、洛中志士の間ではみな鼻摘みにされてゐるのだぞ。

新助　はゝはゝ。(目尻の涙を拭つて、兩手に押へつゝ) もう好ろし、分つてゐる。はゝはゝ。御迷惑とあれば、拙者何も強いて參會しやうとは申さない。はゝはゝ。分つた、分つた。大久保市藏をこゝへ呼び出して頂きたい。門前に岡野新助が參つてゐると傳へられて、至急市藏を呼んで貰ひたい。

吉村　大久保氏？

新助　岡野新助、何も聽こなしに勤王先生の集會へ立向はるのではない。大體、鯱子張ることは大嫌ひだ。はゝはゝ。貴方は天下の有志者、志士だ。藪神主が幣束とつてお榊の前に坐つた時のやうに、誰からなりと、日本全國を預けられでもしたやうに、銘々しかつべらしい顏をなさるがいゝのだ。悲憤慷慨には元手がいらない。

吉村　何。

新助　はゝはゝ。手前などとは、元よりうぬの身ばかり考へます。差迫つた急用があると、御面倒ながら市藏へお傳へを願ひます。

吉村　既に御參會ならば、その旨を申次ぎませう。

新助　お願ひ申します。はゝはゝ。(相手を愚弄するやうに笑ふ)

吉村某、むツとして新助を睨み、去る。新助、將几に掛けて、初めは僅の小錢でも讀むやうな恰好して、クス〳〵笑ふうちに次第に大醉となり、面白さうに聲を上げて笑ふ。

新助　はゝはゝ。償金が……四拾萬弗、四拾萬弗。はゝはゝ。岡野新助の腑には、四拾萬弗の折紙がついてゐるのだ。はゝはゝ。(立つて急に裾前を掻合せたり、又牀几に寢倒れて足をバタ〳〵さしたり、小兒のやうに悦び笑ふ) 四拾萬弗、おれは四拾萬弗だ。はゝはゝ。(と笑ひつゝ、そこに立ちゐる

小女を見つけ）小ちよく、何んだ。

小女　今日の御寄合に、薩摩の那珂原様はお見えでございませうか。

新助　那珂原……？（起上つて、小女を見て）おゝわれは、細手の魚品の女郎ではないか。

小女　岡野さまでございますか。

新助　催促はならないぞ。いづれそのうち、譯は立てる。はゝはゝゝ。そして那珂原に、何んの用だ。

小女　那珂原さまを、御存知でございまするか。

新助　彼は親友だ、おれの從弟だ。用は何んだ。

小女　あのう、お手紙を賴まれて參りました。木崎さまと仰しやるお方は、やはり御家中でございますか。

新助　篤之助か、これも親友だ。何んだ、何んだ。

小女　はい、あの……、木崎さまにお目にかゝりたうございます。

新助　女の手紙だな、どれ〳〵おれが渡してやらう。

小女　いえ、あの、木崎さまより外の方には、お渡ししてはならぬと云はれました。叱られます。

新助　好し〳〵、おれが屆けてやる。（無理に手紙を取つて、裏書を見て）桃龍——藝子だな。はゝはゝゝ。（封を切る）

小女　あゝもし……、飛んだことをなされます。

新助　大丈夫だ。おれに委せて置け。親友だ、親友だ、はゝはゝゝ。（と文面を讀みつゝ）こりや面白い、那珂原のやつ、有卦に入つてゐるぞ。はゝはゝゝ。うむ、こりやいゝ、面白い。

小女　どうかその手紙、返して下されませ。叱られます。

新助　歸つて女に然う云へ。後刻集會を濟ましてから行く。坐敷をしつらへつて、待つてゐろと云へ。

小女　それでは那珂原さまも、御一所でございますか。

新助　川魚はどつとしないぞ。うまいものを見て置けよ。

小女、仕方なく歸り行く。新助、手紙を掻きまろめて、その邊に投げ出す。牀几に寢轉んで、また笑ふ。

下寺源三郎（第一幕に出づ）その友人某、今日の集會のために來かゝる。某、牀几に寢たる新助に心づき、源三郎、その醜態を見て咎めんとしたりしが、思ひ返して憫笑を洩らしつゝ茶屋に入らんとす。

新助　（寢ながら聲掛ける）下寺、下寺、源三郎。

下寺　何んだ。

新助　市藏はまだ暇いる模樣か。

下寺　知らん。

新助　ほう、根古屋絹の羽織を着つたな。常の紺布羽織から見ると、一段の男振りだぞ。はゝはゝゝ。

下寺　何。

新助　いや、勤王とても衣裳がらだ。大手を振つて威張つて行け。はゝはゝゝ。

下寺、むつとせしが相手にならず、去る。新助、笑ふ。

高崎三六、木崎篤之助等と連れ立ちて來る。兩人新助を見て、互に警戒するこゝろあり、足早に通り過ぎる。

新助　木崎、木崎。なぜおれを見て、顏色を變す。

木崎　（當惑さうに立止りて）何か……用事なのか。

新助　過日傳言した大久保の返事は何うなのだ。宛行暮しのお主等とちがつて、娑婆の月末は錢が要るものなのだ。

木崎　大久保君は國事奔走で、それどころではない。

新助　大久保にねだれるのではない。おれの相手は七拾七萬石だ。薩摩日隅三國の大守様の御身分で、浪人岡野新助の飲酒に事缺かせるとは何事だ。お納戸役人に屹つと然う云へ。

高崎、唇を噛んでその暴言を憎む。木崎、それを抑止する。

新助　（高崎を尻目にかけつゝ）人間腹がへると、何をするか分からんぞ。おれは堪へ性のない男だ。出歩くうちに、何を喋べるか分らない。殿様の御迷惑に及んでから、後で騒いでも間にはならんぞ。

高崎、その暴言に耐へかねて、突と傍に寄る。

新助　いくら食ふものぞ捨て置けむら儕。はゝはゝ。市藏に然う云へ。そつちで遁をうてば、新助は何處へでも驅はれるぞ。轅門貴方どこへでも蹤いて行く。大道に立つても手を出すぞ。それでは御眼だ。薩摩の勤王に泥がはねるぞ。はゝはゝゝ。

高崎　（屹として刀柄を握み）こいつ、又お名を出すか。

新助　何をする。おれはもはや、薩摩の家來ではない。

高崎　何。

新助　おれはお主等に逐ひ出された犬だ。犬になつて初めて……人間一本立ちの有難さを知つたのだ。こいつ何をする。切るのか────、切るのか。切れ。（敵意ある目に高崎を睨んでから、嘲笑）おれの體には、さる御方の御息がかゝつてゐるのだ。お主等風情、田舍侍のせいたうは受けられないのだ。切れ、切れ。はゝはゝゝ。

高崎、手を下し得ず、無念を堪へる。木崎、強いて高崎を宥めて、共に茶屋の方へ行く。

新助　（踏ん反り返つたまゝ、腰掛け）木崎々々、忘れ物がある。

木崎　（振り返つて）何。

新助　そこに手紙が落ちてる。桃龍と云ふ祇園の舞子から來たのだ。お主の名宛になつてゐる、拾つて行け。

木崎　うむ？

新助　人に拾はれると面倒になるぞ。はゝはゝゝ。勤王の志もさる事ながら……、また京の女子も悪るくはあるまい。なあ木崎、はゝはゝゝ。那珂原の名も出てゐるぞ、拾つて行け。はゝはゝゝ。

木崎、憤懣しつゝも已を得ず手紙を拾ふ。高崎と共に去る。

新助、その後姿を見て、小兒のやうに手を叩いて笑ふ時、同じ集會に來かゝりし甲斐田、龍紋の紋付羽織など着る。

甲斐田（苦々しげに歩み寄り）新助。些と、わやくが過ぎるぞ。

新助（甲斐田を見て）ほう立派々々。宗內武士は違つたものだ。はゝはゝ。まあ掛けろ。

甲斐田（羽織の裾を拂つて、牀几に掛けつゝ）貴樣は、意地か。

新助　何んだ。

甲斐田　大久保を困らせるのも、大抵でいゝだらう。智慧自慢の彼も、貴公の惡足搔には制裁がつかず、殆んど閉口してゐるやうだ。

新助　はゝはゝ。（空を仰いで、愉快さうに笑ふ）

甲斐田　上手の手からも水がこぼれる。かの際生憎で、お主の名を屆書に書いたのは、大久保一生の失錯だ。剛腹な男ゆゑ弱味は見せぬが、貴樣に暴れて諸方から被害損害のさいしが來るたび、見ても氣の毒なほどしよげ返つてゐるぞ。家中朋輩からは責められる、大久保にしても迷惑あるまいと思ふのだ。

新助　御所のお庭の砂を踏むと、然うまで軟化するものか。高野のお土砂は尊い譯よ。はゝはゝ。

甲斐田　然し、大久保等に立てる意地は、もう貫いてゐるではないか。

新助　意地と見るか、飛んでもないことだ。はゝはゝ。これが新助の本性地金だ。なる程、最初京都入りの頃は大久保を困らせやうの氣があつた、そこに立ち、こゝに立ち、やつの當面を見て、悦ぶこゝろはあつた。が、今はそんなことは思はぬ。この方が勝手だ、結句渡世になる。はゝはゝ。あの時朋輩友人にまで見限られたをおれは有難く思つてゐる。犬で結構だ、結構だ。はゝはゝ。

甲斐田　大久保へは僕から話さう。友人一同もまた協力して、君の復歸を御上に願はうではないか。

新助　何——？

甲斐田　貴公があれほど泣き悔んでゐた關野の家名だ。われ等一同無理にも訴訟して、例へ以前の六百石とまではなくとも、足輕役を拔擢して、同じ士席に列するやうに、揃つて復職の運動をしやう。家名再興、實家への申譯が立つのだ。それなら異存はあるまい。

新助　御免々々。御免だ。はゝはゝ。（手を振つて、笑ふ）お主等にはまだ、わが手で食ふ飯の味を知らないのだ。今更ら窮屈な旦那取りして、その掌からのこぼれ米など食ふ氣はない。喉に刺が立つ、胸が燒けるよ。はゝはゝ。貴公等はまだ主持た家來だの夢を見てゐるが、云つて見ればありや食はせる者と食はせら

れるやつとの違ひなのだ。食ひたさゆゑに尻尾を振り、食ひたさゆゑに忠義をするのだ。赤よ、こここゝゝ……、同じことだ。はゝはゝ。怒るな、待て。はゝはゝゝ。おれはな、今度と今度、初めて食はせる者の無情と沒義道とに氣がついたのだ。好いか、こちらが弱く、こちらが下に、泣いて頼んで謝まる時には、決して人間はその弱者のこゝろになるものではない。踏んで、蹴つて、飽迄もその身のあはれさを、弱い者の骨身に滲みさせ、味はせやうとする。

甲斐田　（手にて制し）新助。

新助　聞け。嚇にも、泣いて頼む金は貸されぬものと云ふ。嚇してとる金は結構とれると云ふ意味なのだ。わが恥を投げ出して、泣いて、口說いて、下手に這つては、今時は出る金さへ出なくなるのだ。おれなども……泣き過ぎたよ。うぬが弱さに泣き頼むほど、人には蹴られ侮られて……いゝ嬲り物にされたのだ。（涙含む語調を笑聲に紛らして）はゝはゝゝ。それぢや駄目だ、駄目だ。人はピンと橫に拗ねて、厭がられ憎まれるやうでなければ、うまい酒は飲めないのだ。無法で勝つのは薩摩樣ばかりではない、こちらとても同じことなのよ。はゝはゝゝ。

甲斐田　然し貴樣、こゝろに恥ぢるところはないか。貴樣の功名はただ面目の上にあるのみだ。嘘に生きるが、淋しくはないか。

新助　嘘――？

甲斐田　嘘ではないか。眞實を知る者には、馬鹿〳〵しくて話にもならない。

新助　然う思ふやつの料簡が狹いのだよ。（笑ふ）

甲斐田　何が狹い。家中の者はみな生姿の眞實を見てゐるのだ。

新助　（屹と向いて）嘘とは何か、眞實とは何か、貴公にはその判別がつくか。鰈比目魚の背中のやうに、白と黑とがハッキリ違つてゐるものなら間違はあるまいが、然うではないのだ。嘘でも他人が許認してくれゝば眞實となり、眞實でも他人が認めなければ嘘になるのだ。手近かくおれを例にして話せば、おれは眞實おれのこの薄志弱行を悔んでゐる。おれは始終、女でしくじり、酒でしくじり、失態に失態をかさねてゐるが、おれは一度でもその度每に、自分の腑甲斐なさを悔まぬことはないのだ。こゝろから悔んで、こゝろから悲しむのだ。そしておれは大久保に行く、高崎に行く。こゝろからわが惡を懺悔して、正しい自分になりたいのだ。然し、然し……誰あつておれの信實を認めてくれるものはない。汚ないものにでも觸はるやうに、みな橫を向いて遠ざかるのだ。大久保が認めず、高崎が認めず、諸友人がみな認めてくれぬとなると……おれの悔悛はその場から嘘になる。おれは幾度、その苦さを……經驗したか知れない。大久保が認めると認めないとで、同じ一つが嘘にもなり、眞實にもなるのだ。それもいゝ、それも好いが……

たゞ悲しい事は、自分の眞實が人に認められず、嘘にされ、嘘にされてゆくうちに、いつか自分にも自信が薄れて……自ら眞實の悔悟さへ、何んとなく疑はれて、自分に吐いてゐる嘘ではないか……自分は救ふべからざる無賴漢、破廉恥漢ではないかと……自分の良心さへ疑はれて來る時があるのだ。(突然、急に笑ひ出し)はゝはゝゝ。詰らぬ愚痴だ。はゝはゝゝ。嘘に生きると云へば、おれの生涯は元より嘘、薩長の勤王にも嘘があるだらう。五分と五分、話は引分けだ。はゝはゝゝ。

甲斐田　新助。事にも依るぞ。假りにも御上の——

新助　然う固くなるな、はゝはゝゝ。現に幕府は屆書の表を嘘と知りつゝ、外國官吏の手前を繕ふために、下手人岡野新助の引渡しを、今もつて再々薩摩に迫つてゐるではないか。これを眞實と云ふか。島津家は又その都度幕府に請書を出して、岡野新助儀、弊藩に於ても目下嚴重詮索中に候得共、今以て手懸りこれなく……、飽きもせず答へてゐる。これは嘘ではないのか。その上島津侯は、二度までも駕の窓縁をたゝいて、那珂原に異人殺傷を命じて置きながら、事變は供先の出來事で、自分は一向に知らなかつたと云つてゐるさうだ。

甲斐田　(狼狽して)これ、詰らぬことを口走るな。

新助　おれは現在、その場で見てゐるのだ。(わが目を指差し)この目で確かに眞實と見たのだ。然し貴公等はそれを、嘘とするか、眞實とするか。甲斐田、おれの眸を見詰めて返事をしろ。

甲斐田、無言、新助を睨む。

新助　はゝはゝゝ。又理窟になつた。酒の氣がきれると、兎角捏ねたがつてならぬ。はゝはゝゝ。(白鳥の酒を徳利の口より飲む)

甲斐田　然し、若し御當家が貴樣を召捕つて、これが生麥の下手人なりと幕府に引渡したら何んとする。貴公の生命はないのだぞ。

新助　(酒を飲み)自分のことだ、それは考へてゐる。おれの命は安いのだ。薩摩は七拾七萬石だ。はゝはゝゝ。その時には又その時で、おれにも骰子のころがしやうがあるのだ。殿樣の御運命を、伸ばすやうにも縮めるやうにも、この口一つの利きやうにあるのだ。はゝはゝゝ。(酒を飲んで)甲斐田、斯う惡垂れ口をきくものゝ、根本はこれだ、酒手次第なのだ。大久保に然う云つて、少しはおれにも息を吐かしてくれ。何事も貧の盗みよ。はゝはゝゝ。

甲斐田　(聲を潜め)岡野、貴樣はさる商家に伺候して、お目通りを願つたと云ふが、眞實か。

新助　おれの方から願ひ出たのではない。先方樣から生麥高名の勇士として、召されたのだ。おれは何も云はぬ。たゞ岡野新助でござりますと申上げたゞけよ。はゝはゝゝ。浪人中と聞くゆゑ、島津家に申渡して、其方の身柄は陰ながら薩摩侯に保護させやうとの御諚があつた。甲斐田、何うだ。お屋敷うちにそんな話

を聞かなかつたか。

甲斐田 知らん、おれは聞かない。

新助 偉い方よりのお聲がゝりだ。おれを殺すことはなるまい。

甲斐田 ふむ……。(沈思)

新助 甲斐田、邪魔にするなよ。おれはたゞ酒だ、女だ。日本全國の寢せ起しまで企らむほどの惡徒ぢやないのだ。はゝはゝ。

甲斐田 ……

新助 (又酒を飲み)然し、おれの命も安いが、貴公の憤慨も安賣りだぞ。不平も不滿も、緣内ひとつで誤魔化されたところは、貴公も存外可愛い男よ。緣内と申しても、高がお庭の砂の音を草履に聞かせたまゝではないか。おれはお主の退出ぶりを、その日御門外に見てゐておかしくなつた。那珂原は例の容態振に、殊勝らしく身を竦めて、小さくなつて御門を出たが、お主があの時の、小鼻をひろげて、得意さうな面付は何うだ。はゝはゝ。とんと和蘭渡りの食火鷄のさかりを見るやうであつた。

甲斐田 (首を垂れて)たゞ涙がこぼれた、涙が出た。

新助 はゝはゝ。颯爽々々と云ふが、生變の一件は大體どれだけの働きなのだ。切つた相手は何んだ、高が商人一人、女一人、切られるとも知らず無心でゐる者を、人を切るのを商賣にして二本差してるやつが、切りかけて見て何んの手柄なのだ。はゝはゝ。それを鐚錢何十萬石のお歷々が、國家の大事の大變のと、あの得意顔は何んたることだ。恥入つたと云つてこそ筋が通る。無法な勤王面は見たくないなあ。はゝはゝ。

甲斐田 (突然對者の肩を叩いて)新助、大久保に會つて見ないか。

新助 (白鳥より顔を上げ)何んで。妥協か。

甲斐田 いや、妥協ではない。大久保も君の言葉を正直に聞いたら、必ず考へるだらう。大久保のためにも、君のためにも、好いことだと思ふ。

新助 さあ……。後が強請りにくゝはならないか。

甲斐田 大久保は御前體をすまして、おツつけ歸宅する筈になつてゐる。君も大久保の膝を抱いて、思ふ存分に云ふがいゝ。

新助 さあ……。

甲斐田 木崎、高崎、那珂原、友人一列も集るのだ。

新助 舍さう。あいつ等の面を見ると、揶揄つてやりたくなる。

甲斐田 然し、今日は諸藩の連中が集つてゐるのだ。初對面の者もあると思ふから、酒だけは少し愼んでもらひたいなあ。それに例の生變だ、これも今日だけは封じてもらはにやならん。丁度あの時は、日が西から射しつけて……と來ると、聞いてゐる方が辛らい。冷汗が出てかなはんよ。はゝはゝ。

新助 いや、この頃は餘りそれを用ひないのだ。

甲斐田 然うでもあるまい。到るところでお主の生變を聞くよ。然し、この頃は大分話し巧者になつて、ちよつと人を感動させる

さうだ。空板百遍と云ふが、修業は大切だな。はゝはゝゝ。

新助　はゝはゝゝ。

甲斐田　くれ〴〵も、生變だけは封ずるぞ。いゝか。

新助（面膨らして）何も云はんよ。岡野新助ですと云ふだけだ。

甲斐田　こつちには、それが一番困るのだ。

　甲斐田、笑ひながら新助をつれて、會場に入る。

　知恩院の梵鐘ひゞきて暮色やゝ迫る。會合に出席の浪士、二三人、舞臺を通りて茶店に入る。舞臺、空虛。

　暫くして那珂原嘉左衞門、友人下寺等の引止むるを聞かず、ブリ〳〵して憤激しつゝ、茶店を出で來る。

那珂原　歸るよ、歸る。（小兒などの拗るやうに、體を振り立てゝ）君等までゐておれに、おれに……生恥をかゝせるのか。

下寺　甲斐田は何か考へあつて、連れて來たのだらう。君の知つたことではない。默つて、相手にしなければそれでいゝのだ。

那珂原　あいつ——。おれの顏を見ると、嵩にかゝつて來る。（ワクワク顋を顫はし）滿座のなかで、業曝しはしたくない。歸る。

下寺　それでは角立つて、發起人に濟まないよ。

那珂原　あんなやつ——。（涙聲）連れて來るやつが惡いんだ。

下寺　然し、今日だけは我慢しろ。待て、待てよ。

　下寺等、しきりに那珂原を宥める時、大久保市藏、遲參を恐るゝこゝろにて急ぎ足にて來かゝる。大久保、新調の絹の肩衣、袴。若黨一名を召連れたり。

大久保（眉を顰め、立止つて）何んだ。また何を騷ぐ。

下寺（會場を指差し、低聲）新助でございます。

大久保（ハッとして鋭く）又來たか。

下寺　上坐にぶッ坐つて、のさばり返つてゐます。

大久保　また嗅ぎつけたか。醉つてるか。

下寺　さあ……。今日はさほどとも思ひません。

　大久保、當惑さうに唇を噛んで、何か思案す。

下寺　暫くの間、何處かに避けてゐるが宜しいでせう。われ〳〵が騙して、歸すやうにします。あなたの姿を見ると、彼いよ〳〵増長して、醜態を顯はすに相違ありません。如何？然う致しませう。

大久保　うむ……。

那珂原（決心、進み出て）大久保氏。これはわたくしにお任せ下さい。お上のため、一藩の名譽のため、打捨てゝは置けません。同族親類として……わたくしの責任と思ひます。

大久保（一度那珂原の眸を見てから、獨語のやうに呟く）何しろ、やつに先手を打たれたので、始末が惡いのだ。

下寺　さる權門から、彼の身柄を保護するやうにと、御内命があつたと云ふは事實でございますか。

大久保　堂上がたは、もつぱら彼を生變の勇士と信じてゐられるので、誠に扱ひにくいのだ。諸方からお聲がかゝつてゐるのだ。

（負惜しみらしく苦笑ひして）兎に角、行つて逢はふ。避けたりすると、却つて圖に乗るだらう。（歩み出す）

那珂原（屹としてその前に立ち）大久保氏。お願ひは聞かれませんか。

大久保（冷かに、靜かに）市藏がゐるのだ。任せて置け。

那珂原　然し――。

大久保　失錯とすれば、今度はおれの失錯だ。新助ぐらゐに裏をかゝせて、引込んではゐられまい。何んとかするよ、うむ、何んとかする。（強いて微笑しつゝ、會場の方に歩む）

那珂原（聲を顫はして）市藏どん！

大久保（顏を上げ）那珂原、今夜の歸りは牛州だぞ。われに少し奢らせることがあるのだ。はゝはゝ、下寺、御番がなければ貴公にも相伴させやう。薩摩二歳も京女郎に買はれる時世になつた。

大久保、別人のごとく大笑して、悠然會場に入る。下寺等、續いて入る。

那珂原、足元の土を見詰めて暫く腕組み、やがてホッと嘆息して茶屋に入らんとする時、木崎篤之助出て來り、遠く石燈籠の邊に立ちて、切りに那珂原を手招ぎする。

那珂原、歩み出してそれに心付き、狼狽するやうに赤くなつて、立つ。木崎、それを見て笑ふ。

那河原（度拍子を失つて、うろたへつゝ）馬鹿！（叫ぶ）

木崎　はゝはゝ。

那珂原　馬鹿！　馬鹿！

木崎　はゝはゝ。（笑ひつゝ手に持てる女の手紙を振り廻はす）

那珂原（口惜しさうに足踏みして、逆上氣味）馬鹿馬鹿、馬鹿！

木崎　はゝはゝ。

那珂原、嚇として組み付き、その手紙を奪ひ取らんとする。木崎、大笑ひしながら手紙を振りつゝ、燈籠の周圍を巧に逃げ廻はる。那珂原、眞劍になりてそれを追掛け廻はす。

（幕）

同　その二

時――前場と同じ日の夜。一刻ほど後。

處――高瀬川筋三條、牛州の茶屋。

高瀬川を前にしたる牛州の茶屋。その全景は森潮齊畫くところの都名所圖會の繪に據る。即ち高瀬川を舞台の上下に通じて流し、小橋を渡りて茶屋と往來す。茶屋の座敷の舞台に顯はるゝところは、狭けれど三室ほどあり。そのうち下手の座敷は廻り縁にて最も廣し。その下手は植込ほどの暗き小庭にて、石燈籠など灯とある。それ等

の坐敷の上に二階あり。手摺の邊まで見物に見ゆる。軒には提灯など下げたり。

幕明く、上手の小坐敷は暗くして人けはひなく、中の小坐敷は燭光明かなれども障子を閉めたり。下手の座敷はこゝを通りて回緣づたひに二階坐敷へ通ずるこゝろにて、障子を明けひろげ燭台を置く。

二階坐敷にさゞめく三味線の音のみにて、舞臺、空虚。暫くして突然、中央の障子に人の影うつる。それまで寢轉びゐたる人のむくと起き上りて、欠伸などするなり。やがて肌寒むさうに肩をすくめ、酒盃など取上ぐるさま揭焉と障子に映る。

舞子二三人、下坐敷を通りて、賑かに笑ひ興じながら廻り緣を二階に登りゆく。その後より町人體の甲乙、同じ坐敷を通りて二階に行かんとするを、案内の仲居お初、廊下より聲かけて止める。

お初　あ、もし、そのお二階は塞つて居ります。相濟みませぬが、奥の二階にお願ひいたします。

町人甲　(忌々しげに) 相變らずお國侍か。

お初　今日は例のお屋敷の旦那方でござります。

町人甲　薩摩様か。(苦笑) この頃は浪人ばやりで、われ〱町人などの坐る席はなくなつた。はゝはゝ。

同乙　それにこの邊の茶屋は昔から、藝子を呼んだり鳴物騷ぎは、御法度になつてゐる筈だ。

お初　お客様のお好みで……何んとも致方がございません。

町人甲　京の藝子が九州訛りを眞似る時勢だ。王城の地も、沽劵が下がる譯でござります。はゝはゝ。

同乙　いつの世とて遠國者の勝利でござります。

同甲　小判の御威勢にはかなはない。島津様は京洛中、女子どもまで金縛りぢや。はゝはゝ。

町人甲乙、不快さうに呟き、苦笑して去る。

藝子桃龍、かなり醉つて入る來る。物に蹴躓いて、下坐敷の衝立の前にペタリと坐る。そのまゝ動かず、無性に手を叩いて、金切聲に叫び立てる。

桃龍、二十六七、色白く揉上濃く、浮氣者らしく見ゆる。

桃龍　(手を叩いて) 姉さあん、姉さん。お仲どうん。

仲居お初、二階へ通す酒肴などを廣蓋に運び來る。

桃龍　お仲どん、お仲どん、お仲どうん。姉さあん——

お初　おや桃龍さん。

桃龍　醉つた。(お仲を見上げて、笑ふ) はゝはゝ。醉つた。お仲どんを呼んで、呼んで。(ガックリ俯向いて、手などを振る)

お初　お仲どんは御座敷だらう。見て來ます。(行きかゝる)

桃龍　あ、待つて——。
　桃龍、立つてお初の膝から猪口を取る。立ちながら猪口の口より飲む。

お初　(呆れて)まあ桃龍さん、お前さん、何うなされた。

桃龍　(親指を出して見せ)來てるか、これ。

お初　これ——?

桃龍　あんな目をして、ほゝほゝゝ。あたいの色さんさ。

お初　錦の御連中?

桃龍　年の頃二十——三四。色白、恰幅——(肩臂など張つて見せ)お納戸加賀の紋服に、水淺黄の襟をかされた……。

お初　それは那珂原さまだが——。

桃龍　拜む、會はせて。

お初　阿呆らしい。何うで一座なさるではないか。
　お初、去る。桃龍、また酒など飲み面白さうに笑ふ。隣室の影法師、こなたに耳を澄ますものゝ如し。
　桃龍、縁側に立つて又二階に呼び立てる。

桃龍　お仲どん、お仲どん。はゝはゝゝ。(譯もなく笑ひつゝ、小膝に叩ふ)折助どのはなぜ遲い。草鞋ができぬか、門どめか——おゝ、古い。にゝはゝゝ。(又手を叩き)お仲どん、嬢さあん——。
　仲居お仲、障子戸より姿を顯はし來る。

お仲　まあ騒々しい、桃龍さん何うなされた。

桃龍　もう來てるか。

お仲　早うお上りなされ。

桃龍　厭、恥かしい。

お仲　西日が焦げます。何を云ふてるのだ。(と叱り掛ける)

桃龍　(足踏み、甘ツたれた聲)よう、お仲どうん!

お仲　(仕方なく側に來て)お前さん、役者衆を遊ぶとは違ひますよ。そんな悪洒落して、男さんが迷惑なさりますがな。

桃龍　(悦けたやうに顏を上げ)あの人、そんな小氣か。

お仲　まだあんた、漸く前髮ばなれなされたばかりだ。お前さんなどにかゝつててんがうつくすのが、お可哀さうでならない。

桃龍　まあ厭らしい。はゝはゝゝ。でもあたいは、薩摩さまを買はぬと、朋輩にも肩身が狭い。

お仲　ほんにこの頃は、何處へ行つても小倉物ですな。

桃龍　遊んではサッパリして、藝人なぞとても較べにならんと云ふとこだ。梨乃さん、富菊さん、近所はみんな長州さんだから、あたいは態と天邪鬼に、薩摩さんにしやうと思ふてゐるのさ。

お仲　けれども又、入揚げはじめては贅六衆よりも、後が恐いとみんな云ふておゐでなさる。

桃龍　聞いた、然うなさうだ。(と奧座敷に響き)それだけに猶は遊んで見たい。よ、お仲どん、頼む、頼む。(手など合せる)

お仲　けれどもお前さまは、この春ちゆう薩摩さまが京に御逗留の時分、那珂原さまとは度々一座しておゐなさるではないか。
桃龍　それがな、ちよつと……具合が悪るい。
お仲　なぜ。
桃龍　誰にしたつてこの春までは、こんな時勢になると思ふまい。黄鶏の鍋身をムシ〳〵喰べて、そげんこげんのお國訛りを聞いてゐると、もう頭が痛くなつて、盃を貰ふのさへ厭でならなくなつた。
お仲　ほんになあ、誰も同じことだ。はゝはゝゝ。
桃龍　那珂原さんなぞその時は、阿蘭陀のお芸衆さんが袴をはいてお出たぐらゐに思ふて見てゐた。錢のところ、然うなのさ。はゝはゝゝ。そのお人がこの時評判の一番男にならうとは、夢にしてさへ知るものか。
お仲　ほゝゝほゝゝ。嘘のないところだ。(二階に耳を立てる)
桃龍　なあお仲どん、それだから頼む、頼む。今頃口あいてゐては、人にも醜を見られる。なあ、好いな、お仲どん。
お仲　現金な人。はゝはゝゝ。お手が鳴る、行かう。
桃龍　お前ほんまに引受けないうちは厭だ、厭だ。
お仲　それだとて、あたしに何うなるものか。行きませう。
　お仲、笑ひつゝ二階に去る。
桃龍　お仲どん、姉さん、お仲どうん！(縁側にバタ〳〵と足踏みせしが、自分でもおかしくなりてプッと吹き出し、ケロリとして)折助どのはなぜ遅い。草鞋ができぬか——
　桃龍、小聲に唄ひながら、澄して二階へ登り行く。二階に賑かなる三味線の音聞えて、舞臺空席。
　隣室の影法師、詰らなさうに又寝ころぶ。
　突然バタ〳〵と足音して、那珂原、自慢の兩肌脱の肩を入れつゝ、二階より逃げ來る。木崎、下寺等三四人、面白さうに大笑ひしながら追掛け來る。衝立の周圍を逃げ廻はる那珂原を一同にて追ひ詰める。みな多少の酒氣を帶ぶ。
那珂原　(笑ひながら)逃げはしない。苦しいんだ、苦しいんだ。
木崎　踊れ〳〵。女を見て逃げるやつがあるか。
下寺　さあ來い、來い。
那珂原　苦しいんだよ。ほんとに苦しい、堪辨せい。
木崎　可かん〳〵。中途で合すのは卑怯だ、踊れ。
那珂原　ほんとに苦しいんだ。苦しい——謝まる。
　那珂原、ひよつとこ被りの手拭をとりて、そこにへたばり、苦しさうに息吐きつゝ、疊に手をつく。
　一同、それを見てどつと大笑、拍手して悦ぶものもあり。
木崎　はゝはゝゝ。それでは踊らんでもいゝ、來て飲め。
那珂原　堪辨してくれ。みなが又………からかふんだらう。
下寺　苦虫の市藏どんの許可が出たのだ。來て飲め。

那珂原　女の側は………髪が臭うつて、どもならん。

木崎　こいつ——、はゝはゝ。外の女は何んともなくて、何故桃龍ひとりの髪の油が臭いのだ。

那珂原　嫌ひだ、嫌ひだ。

下寺　こいつは祝酒を買ふこと知らんやつだ。嬉しい時には、嬉しい顔をするものだ。

木崎　ほんに那珂原、おのし今に悪性焼するぞ。

下寺　(笑ひながら、腕を引張り) 來て飲め、來い。

那珂原　御免だ。はゝゝ。御免だ、御免だよ。はゝはゝ。

那珂原、友人等の手を振切つて逃げまはる。木崎等は面白づくに追ひ廻はし、大勢にて無理に酒席へ連れ行かんとする時、桃龍、二階を下りて來る。

那珂原、桃龍に突當り眞赤になりて立ち竦む。一同、手を叩いて笑ふ。

桃龍　木崎さん、あたいこの人、借りました。

木崎　何うする。

桃龍　口説きます。(澄してゐる)

木崎　直に？

桃龍　あんたさん達頼んでゐては、暇が入れてかなはぬ。お頭大久保由良之助さまに頼つて、もう遠うにお許しが出てゐますわ。

木崎　こいつ甚いやつだな——。はゝはゝ

桃龍　さあ那珂原さん、一緒にあちらで飲みませう。

那珂原　(固くなつて、手を引込めつゝ) 厭だよ、厭だ。

桃龍　いンいゝ、厭もないものだ。惚れてゐる癖に。

那珂原　(眞顔になつて) 馬鹿、馬鹿！

桃龍　いンい、惚れてるく。あたい知つてる。(指差して笑ふ)

那珂原　(眞赤になり、狼狽して) 馬鹿！　馬鹿く。

一同、笑ふ。

桃龍　木崎さん、お酬は何うした。聟さんが負けますぢやないか。

木崎　(嘴を尖らして) おれが——？

桃龍　それぐらゐの渡りは、ふだん付けてゐる。早う、爲たされ。

木崎　ひどいやつだな。

木崎、頭をかきつゝ廊下の方へ去る。下寺等も笑つて、二階の席に蹄り行く。

那珂原、ひとり縁側の柱のところに立ちゐる。

桃龍、那珂原を見てクスリと笑ひつゝ、毛氈の上に坐る。

桃龍　(間を置いて、いたづらさうに) あんたさん、まあお坐り。

那珂原　好い。こゝで……好い。

桃龍　河風が冷えます。いらう寒くなりました

那珂原　………

桃龍　おゝ寒ぶ。(わざと肩など竦めつ) あんたさん、立ちませうか。

那珂原　………

那珂原、馬鹿な！と呟き、足音高く二階に戻らんとして考へ、ツカ〳〵と女の傍に戻り來る。

桃龍（澄したる顏、見上げて）何んです。

那珂原（立つたまゝ）お前、誰に聞いてあんなこと云ふ。

桃龍、那珂原の眞劍なるを見て、クス〳〵笑ふ。帶の間より煙管筒など出し、煙草盆を引き寄せる。

那珂原　何んです――？（屹と女の前に膝を組み）何日、何日おれはお前に……何んした。誰が、誰が云つた。（疊などを叩く）

桃龍（煙を輪に吹いて、靜かに）なら、嘘ですか。

那珂原　木崎のやつだらう。あいつだ、あいつに相違ない。

那珂原、苛々して立上がる時、木崎、酒を命じてひよつくり廊下より入り來る。

木崎　何んだ。おれが……何うしたんだ。（二人を見る）

那珂原（睨みて）貴樣、お喋りだからいけないんだ。

木崎（呆氣にとられて）藪から棒に――何あんだ。

那珂原　おれは何日、女などに引かれた。馬鹿なこと……云ふな。男のやうでもない、全體お主、國者には喇りが多過ぎるぞ。

木崎　何んだ、氣違ひ！

那珂原　何？

木崎（ぷんとして）酒は誂へて來た。勝手に飲め。

木崎、不興さうに去る。

那珂原　木崎々々、待て。おれも行く。

那珂原、その後を追はんとする時、桃龍、火入にチンと音たてて、煙管を叩く。那珂原、その音に立止つて、女の方を見返る。

桃龍　あんたその臆病で、よく異人が切れましたたあ。

那珂原　何を――（屹と目を險しく、女を睨みつける）

桃龍　男さんの手柄は、やつぱり機勢ですかな。そこへ行くと、女子の方が強いやうに思ひます。（馬鹿にしたやうに笑つてゐる）

那珂原　――？

隣室の影法師、むくと起き上がる。

那珂原、やがて自嘲的の苦笑を洩しつゝ縁側まで出掛けしが、何か考へて、また未練らしく立戻る。女は始終知らぬ顏にて、そつぽを見てゐる。

那珂原（女を睨み、言葉を句切りつゝ）おれは云はんぞ。おれの口から、それ、云つた覺えはないぞ。明かに、それ、ことはつて置くぞ。

桃龍、又煙草など拈りゐる。

那珂原　國家の大問題なのだ。おれは、決して、その事について、何事も口外したことはないのだ。おれが云つたとは、決して云はさんぞ。好いか、好いか、瞭然にことはつて置くぞ。（足を踏みつゝ、神經的に念を押す）

桃龍（顏を上げて）あんた、そんなに探索が恐ろしいの？

那珂原　探索なんか恐れはしない。たゞ輕々しく云ふことではない。

桃龍　それでも禁裡樣に、御案內なすつたらう。知つてゐますよ。

那珂原　違ふ。あれは……おれの役目だ。御警衛をつとめるのは……おれの役目なのだ。

桃龍（笑ひつゝ）あんな、嘘々。

那珂原（流石に微笑を漂はして、女を見る。）嘘――？

桃龍　誰とて、知つてゐますがな。臆病なお人！

那珂原（慌てゝ）臆病ぢやない、臆病で怒り云ふんぢやない。只……只……おれの口からは云はれないのだ。（笑つて、急に頭を振り）云はんぞ、云はんく。決しておれから云つたのぢやないぞ。はゝはゝゝ。

　那珂原、おのづから込上げ來る嬉しさに、譯もなく聲立てて笑ひ出す。同時に隣室の影法師も又、大聲たてゝ笑ふ。

　那珂原、桃龍、ハツとして顏を見合はせ、その方に耳を立てる時、この家の小女おいく、十三四、還出しの田舍娘らしきさまにて、木崎に誂へられし酒肴を緣側づたひに持ち來る。坐敷を間違つて、隣室の障子をあける。

おいく　あの、お酒は……、こちらでござりますか。

客（振返り見る。聲のみ聞ゆ）うん、何んだ。

おいく　あの、御酒は……。

客　うむ、酒か。好しく、置いて行け。はゝはゝゝ。（横柄に笑つて）隣隣しくてたらない、開き前の障子をあけて行つてくれ。

おいく　はい。

　おいく、そこの障子をあけて、去る。隣室の客と云ふのは岡野新助なり。この時初めて見物にその姿を見するなり。

　那珂原、その話聲にギヨツトとして注意すれども、その位置よりは間の唐紙に隔てられて、新助の姿は見えざるなり。

　新助、酒肴を引寄せ、胡坐にて飲み初む。

桃龍（艶しく擦り寄りつゝ）それで、女異人は何うなつたのでござります。その場で即死とも云ふし、療治がとゞいて別條ないと云ふ人もある。どちらがほんの事なのでござります。

那珂原（隣室のみに氣をとられて、そはくして落付かず）何、もとより傷は淺手なのだ。助かつたのは……事實だらう、事實だ。

桃龍　女子の癖に馬に乘る――ほゝほゝゝ。まあ、何のやうな恰好にして乘るのでござります。

那珂原（耳を立てゝ、上の空に答ふ）横に乘るのだ。横鞍だ。

桃龍　横鞍？　それでは馬の背中に持ちますまい。

那珂原　持つ。それで結構――乘れるのだ、乘れる。

　那珂原、不安さうに腰を浮かして、隣室の動靜に注意す。

桃龍　けれども、臨監樣の異人嫌ひはこれほど知れてゐるのに、その

日は何んで、御行列前に通りかゝつたのでござります。

那珂原（煩さゝうに立ち）川崎大師へ參詣の道とか聞いた。

桃龍　あれ、異人も御大師さまを拜みますか。

那珂原　さ見物だらう、見物だらう。（立つて、耳を澄しゐる）

桃龍、氣がつき急に手を叩く。仲居お初、奧廊下の入口より顔を出す。

お初　お呼びでござりまするか。

桃龍　姉さん、お酒。

お初　あれ、まだ參つては居りませぬか。

お初、不審さうに去る。新助、隣室より大聲に笑ふ。

那珂原、その聲に新助と知りて、屹と屏を睨む。

桃龍（談話に紛らさんとして）そして異人は四人連れだと云ふに、一人も手向ひする者なく、みな逃げたのでござりますか。

那珂原、然うだ、みな逃げた、逃げた。（隣室を睨みゐる。）

桃龍　人の話には、その時、逃げる異人の傷口から、圓い眞赤な心の臓がコロ／＼と轉がり落ちて、それを犬が走つて來て食べたなそと云ひます。そんな事があつたのでござりますか。

那珂原（ワク／＼顫へながら）或は、あつたかも知らん。おれは知らない、知らない。

桃龍　最初異人は、薩摩樣の御行列を突ツ切つたと云ふ人もあれば、また然うでないと云ふ人もござります。

那珂原　うむ………うむ………。

那珂原、固くなつて睨む。新助、突然また笑ふ。

新助　はゝはゝ。女よ、然う問詰めては氣の毒だ。那珂原にその返答はならないのだ。はゝはゝ。

那珂原（思はず突ツ立ち）何？

新助、女よ。聞きたければこゝに、岡野新助がゐる。那珂原はその時、後供のなかにでもゐたか、双傷の場所には見掛けなかつたのだ。なあ那珂原、貴公あの時何處にゐたのだ。

那珂原（喝として聲を搾る）新助！

新助　嘘か。（顔を突出し、嘲笑つて）お主それほど手柄にしたいのか。

那珂原　何——

新助　二階には大久保が來てゐる。誰が異人を切つたのか、行つて市藏に聞いて來い。女小兒を集めての手柄話は、些と穩ないぞ。

桃龍、那珂原の顔をチラと見る。

新助（吸物椀に酒を注ぎつゝ）おれは好い。何うで扶持はなされの素浪人だ。お主等の出世になるなら、薩の人になつてやつてもい い。然し、それでは、た、世に正道が廢れてしまふのだ。

那珂原（耐りかねて、眼瞼をガラリとあけ、立身のまゝ）新助、お主、正道と云つたな。

新助（首を縮め、女に見えぬやうに舌を出し）失つたあ、然うも云

つて見るのだな。はゝはゝ。

桃龍　それでは那珂原様のお手柄ではなかつたのですか。

新助　そこだ。はゝはゝゝ。(盃を下に置き)そこには少々込入つた譯があつて……、まアまる〱この男の嘘と云ふのでもないのだ。はゝはゝと。なあ嘉佐衛門、然うであらう。

那珂原　(乾と坐つて)新助。おれは眞面目に云ふ。貴様、それで、少し恥るところを知らないか。

新助　それや恥ぢでもいゝ。けれども、それではおれが今迄喋つて歩いたのが嘘になる。それぢやおれの活計が立たない。はゝはゝゝ

那珂原　(呆れて)活計?

新助　然うさ、何事も活計づくだ。お主等と違つて、こつちは位牌地行にもはなれてゐるのだ。はゝはゝゝ、何うだ一つ、飲まないか。女よ、酌を頼む。その代り、望みとあれば生麥の實説はいつでも話して聞かせやう。はゝはゝゝ。

桃龍、呆氣にとられて二人の顔を見較べる。

新助　丁度あの時は、入時さかりの西日が、眞赤に射しつけて——これが先づ、話の發端よ。はゝはゝゝ。が、まあ、舍さう。その時の話をすれば、いろ〱人の名が出て、差障りもあれば迷惑する人もあるだらう。はゝはゝゝ。桃龍、一つ頼む。

新助、盃を出す。桃龍、仕方なく酌をする。

新助　(ニヤ〱笑つて那珂原を見つゝ)然し、こいつはおれの從兄だが、實に義理の悪るい男よ。はゝはゝゝ。うぬが身が可愛いのか、うぬが身代が大事なのか、勿落した親類など、側に來られても身が汚れるやうに思ふてゐる。はゝはゝゝ。能く見れば、悪氣ではない、みな根性の狭いところから來てゐるのだ。

那珂原　(涙を拂つて)新助。お主おれを苦しめるのか。

新助　苦しめる?苦しんだのはおれだ、何を云つてる。(飲む)

那珂原　然し……。

新助　嘉左衛門。お主は、訴へて聞かれる人間の本當の悲しみと云ふのを知つてゐるのか。(目に笑つて、鋭く云ふ)

那珂原　何?

新助　この口だ、これだ。(わが唇を指差して見せて)この口なども何年の間、貴公等の前に……云ひたいことを云はなかつたと思ふ。おれはわが身ながら、自分の身が可哀さうになつた。おれはな、お主等諸親類友人どもに侮られ、賤しめられ、嘲られてゐる時、自分で……その時のおれの顔や姿が、あり〱と明かに目に見えてゐたのだ。嘲られるほど下司笑ひして、賤しめられるほど尻ッ尾を振つて……お主等に媚び諂はふとする、見窄らしい意氣地のない自分の姿が、ちやんと目に見えてゐたのだ。見ながら悔みながら、やはり又そこに落ちて行く……自分と云ふものも見えてゐたのだ。はゝはゝゝ(突然、紛らすや

うに笑ふ）

那珂原（聲を顫はしつゝ）お主、今それを云つて何んになる。

新助　だから云はんよ。おりや生麥の方で飲んで廻はるのだ。はゝはゝゝ。女よ、酌を賴む。

桃龍　はい。

新助（馬鹿にするやうに那珂原を見い／＼）然し、大事件になつたなあ、那珂原。おりや異人に切付ける時はこれ程國家の騷動にならうとは思はなかつたよ、なあ那珂原。

那珂原　知らん、おれは……知らんよ。

新助　はゝはゝゝ。外國要求の償金が四拾萬弗、日本の小判三拾萬兩だ。それが隨野新助の、この體にかゝつてゐるのだ。はゝはゝゝ。女、注げ。（盃に酌させつゝ）那珂原、寢られぬ晩にゆつくりと目子勘定をして見ろ。おれの給分は一年つとめて金八兩と六人扶持だ。六人扶持三石の米は、八十目相場にしてざつと三兩だ。お手當金を入れたところで、一年二十兩とは頂かれぬ身上だ。償金の三拾萬兩を稼ぎ出すのは、新助飲まず食はずに、何年の間生きて働らかねばならないと思ふ。一萬五千年だぞ、一萬五千年だ。はゝはゝゝ。一萬五千年とは……何處の話だ。神武天皇様が死なしやつて今日までタツタ二千何百何年にしかならない。三拾萬兩の金を濟すためには、文久二年から神武天皇様の時まで十返りほど中飛躍しなければならない。はゝはゝゝ。考へると馬鹿々々しくなつて、厭になる、厭になる。お主なども二百石もらつて上侍顏してゐるが、三拾萬兩から割出して見ろ、飲まず食はず神武天皇さまゝで、何んべん往復しなければならないのだ。はゝはゝゝ。高が島津の七拾萬石のうちにウヨ／＼使はれてゐて、忠だ、義だ、人だ、犬だ——差別をつけて嚙み合ひ食合ひしてゐるが、三拾萬兩の位取りから見下すと、虫けらとも根振りとも、おりや、おりや……おかしくてならないわい。はゝゝ、はゝはゝゝ。

那珂原、腕組みして、何か思案に沈む。

新助　二階の市藏め、偉らさうな顏をする。全體どれだけの智慧なのだ。高が島津七十萬石の以上には出ない才器だらう。これをもつて三拾萬兩から割出して見ろ。馬鹿々々しくて話にならない。はゝはゝゝ。おれもな、とは云ふが、先には大久保が恐ろしかつた。あいつの前に出ると、聲までも顫へた。處がこの頃償金四十萬弗の附物が乘移つてからは、大久保など屁の河童だ。はゝはゝゝ。いつでも連れて來い、こゝへ出せ。おりや云ひたい放題……そこは四十萬弗の位取りで、頭ごなしにこなしつけて見せろ。はゝはゝゝ。

那珂原（何か決心、不意に立上つて）新助、歸らうか。

新助（醉眼を見上げて）何んだ、何處へ歸るのだ……

那珂原　人に聞かれても好くないことだ。お主の屋敷へ歸つて、ゆるゆるか

に話したい。一緒に歸らう。(新助の手を取る)

新助　(振り拂つて) 厭だ。お主だけ歸れ。おりやまた、用がある。

那珂原　何だ——

新助　お主知つてるではないか。おれは酒を初めると、女房がなくては濟まぬ性分だ。厭だ。

那珂原　それも談合の上では……又出直してもいゝ、兎に角、歸れ。

新助　厭だ。おりやこの女に、生麥の一件を話して聞かせるのだ。はゝはゝゝ。なあ桃龍、世間の取沙汰ほど出鱈目なものはたいぞ。嘘と本當とは、大抵同じ褌の下に、合借屋なものだ。騙まされては可かんぞ、はゝはゝゝ、騙されるな。(指の先にて、桃龍の額の邊をチョイと突く) はゝはゝゝ。注いでくれ、醉はふ。

那珂原　(思はず嚇として) 新助、何をする。

新助　何んだ。女がゆかしがるから生麥の實説を聞かせやうと云ふのだ。桃龍、へゝへゝゝ、今日は醉はしてくれ。(女の手など引張る)

桃龍　あれ、何をなさいます。

新助　何を云ふんだ。はゝはゝゝ。

桃龍　髮が……髮がこはれます。

新助　はゝはゝゝ。

那珂原　(女の手を引分け) 新助、お主、引摺り出されたいのか。

新助　貴公の女と云ふ譯でもあるまい。大體女は、那珂原嘉左衞門に惚れてるのではない。おりや皆、さつきから聞いてゐる。生麥の勇士——名譽に惚れてるのだ。なら、おれが手を出して、何んの惡いところがある。なあ、桃龍、揉皮の新助生麥の一件を話して聞かせやう。桃龍、桃龍、はゝはゝゝ。

桃龍　あれ、あんたさん。

新助、ふらくと起上つて、追掛ける。桃龍、那珂原の背後に避けて縋りつく。新助、側に行く。那珂原、堪りかねて力任せに新助を投付ける。新助、よろくと蹌めきて隣部の上に倒れる。その物音に驚きて、木嶋等三四名、ドヤドヤと二階を駈けおり來る、見る。

新助　何んだ。何をする。

那珂原　(新助の襟頭を掴み、際を顫はし) こいつ、こいつ、何處まで傍若無人なのだ。

新助　はゝはゝゝ。桃龍、聞けよ。丁度あの時は、八時さがりの西日が、眞赤に射しつけて、秋蟬がシーンと並木路に鳴いてゐた。

那珂原　こいつめ——

新助　はゝはゝゝ。鶴見の宿場近くたるので、御行列は笠を取り、足並も揃つて土橋の邊にさしかゝつた。

那珂原　こいつめ——

新助　はゝはゝゝ(わざと大聲に笑つて) おれは久々振りに拜む御行列だ。傍を見ると砂除けの小柴垣がある。その下に小さく坐つて、土下坐した。土に手をついた。と、遠く蹄の音が聞える。

見ると縄見橋の方から異人づれが同行、馬を揃へて……。

那珂原　ちよつ！、こいつ――。

新助　はゝはゝ。

新助、那珂原にこづき廻されながら、止度もなく笑ひ立てる。

（幕）

同　その三

時　――同じ夜、時刻前場につゞく。

處　――河原を見る縄手道

三條通よりやゝ下りし深夜の縄手道。人家跡切れて寂しき片側町をなす。舞臺には夜色深沈たる河原の夜霧をすかして、遙に對岸の灯を隠見せしむ。

青柳二三本立ち、小さき橋などあり。

幕明く。通行の人音絶えて、犬の遠吠幽かに聞ゆる。夜警の拍子木の間に、時々遠く對岸の絃歌を聞く。

舞臺暫く空虚。岡野新助、那珂原、連れ立ちて來かゝる。

新助、泥醉、片手に折包など下げ、那珂原の肩にわが身を摺りつけ、片手に相手の袖口に縋るやうにして歩む。

新助（曖氣を洩しつゝ）こりや……道が違つた。逆戻りだぞ。

那珂原　いや、河原づたひに少し酒の醉を醒まして歸らう。

新助　然うか、それも好いだらう。（チラと那珂原を見て、又グタリと頭を垂れて）が、いやに犬が啼くなあ……。はゝはゝ。

那珂原。うむ……。少し、夜が深けて來たやうだ。

新助（小さな目を狡猾さうに、チラと又相手に働かせて）那珂原、お主、何を考へてるんだ。

那珂原　いや、何んでもない、何んでもない。醉つたのだ、はゝはゝ。

新助　然うか、……醉つたのか。はゝはゝ。

那珂原、やゝ狼狽して附穂もなく大聲に笑ふを見て、新助も油断なく、聲を合はせておかしくもなきに笑ふ。那珂原は何か深き思案あるものゝ如く、先より絶えず周圍に氣をくばる様に見え、新助も又、その醉態のうちに時々那珂原に警戒することあるなり。

那珂原　これ、然う倚つて來ては歩き悩い。足がからまる。

新助　何、好い、大丈夫だ。

那珂原　お主が大丈夫でも……おれが歩き悩うてならん。

新助　何、大丈夫だ、大丈夫だよ　はゝはゝ。

那珂原、肩をはずして離れんとすれば、新助、また〳〵身を擦り寄せて離れず。右に避ければ右に行き、左に躱せば左に行く。一心に相手の袂を掴みゐる。

那珂原　これ、苦しい。少し……休んで行からうか。

新助　いや、歩かう。

那珂原　休まうよ。

新助　歩かう。

那珂原　厄介なやつだな。(苦笑しつゝ歩む)

新助　(何か思案をして、クツ〳〵笑ひ出しつゝ)然し、大久保と云ふやつも負惜みだたなあ。腕では散々おれに降参してゐたがら、まだ敗つたとは吐しくさらぬ。無理で來るなら智慧で勝つ——まだ智慧自慢でおれに勝つ氣だ。なあ那珂原、剛情なやつよ。はゝはゝゝ。

那珂原　おい、然う凭れては苦しい。

新助　やつ、おれに、最う十日待てと云つたな。那珂原、ありや何んの意味だ。十日待ては新助を誤まり入らして見せる。——はゝはゝゝ、利口さうなことを云ふな、何んでおれが誤まるものだ。はゝはゝゝ。市藏今度は智慧で負けたのだから、力や權力で勝ちたくない、智慧で必ず勝つて見せる——笑ひもせずに云つてゐたなあ、那珂原。はゝはゝゝ。市藏あれでまた新助に誤らせる氣だ。はゝはゝゝ。大笑ひ……大笑ひとはこれだ。

はゝはゝゝ。

那珂原　これ、又——

新助　人間、素ツ裸ほど強いことはないぞ。我儘ひとつの裸浪人、岡野新助さまにかゝつては、義理でいけず威しでいけず、力づくでも金づくでも、嫌だと云ひ出せば駄目なのだ。何うだ、なあ、那珂原、足の踵に扶持米飯粒の粘りついてゐない、裸浪人の自由さが羨しいとは思はないか。はゝはゝゝ。島津は七十何萬石でも、新助それを買つたのではない。高が八兩と六人扶持——考へりや賤い人足、賤い忠義の爾買ひをしたものだなあ。はゝはゝゝ。

那珂原　(突然肩をはづし、立止つて)重い、先に歩け！

新助　(びつくりして飛退き、尻込しつゝ)前行け、お前行け。

那珂原　醉つてゐるから、先に行け。

新助　おれは、醉つても、大丈夫だ。お主行けよ、先に行け。(少し聲など顫えて)それに、何んだか今夜は……厭に犬が吠えくさる。

那珂原　(凝つと睨みつけてから)えゝ、臆病者め！
那珂原、憫笑を洩らして歩み出す。新助、相當の間隔を置いて、その後に從ふ。水鳥の鳴音、折々闇を破る。

新助　(又クツ〳〵笑ひ出して)なあ、孫左衛門よ。

那珂原（何か考へ込みつゝ）何んだ。

新助　劍術でも、相撲でも、ありや強い者が勝つのだ。強い者が弱い者に勝つ、當り前のことだらう。決して手柄ではないのだ。

那珂原（立止つて、鋭く見詰め）それが、何んだ。

新助（思はず立止つて、馬鹿笑ひしつゝ）人間はおかしなものだ。強いやつが弱い者の前ほど威張りたがる。はゝはゝゝ、考へて見ろよ。相手が弱いから喧嘩にも劍術にも勝つたのだ。當り前の話だ、少しも威張るところがないのだ。それを手柄さうに威張りたがる。恐らく、こんな解らない話はないだらう。はゝはゝは。

那珂原　何——

新助　犬を見ろよ、犬を。犬の世界は正道だぞ。二匹寄れば、初めは必ず喧嘩する。相互の力定めするのだらう。が、一度勝負がつくと後がさつぱりしてゐる。弱いぶちは強い黒に、二度とかゝらうとはしない。強い黒も又、弱いぶちを二度といぢめやうとはしない。道で逢つても知らん顔して、右と左に別れて行く。

那珂原　何んの話だ。そりや何んの譬なのだ。

新助（後込みして）いや、ひよつと今、思ひ出したから云つたのよ。はゝはゝゝ。人間は犬より穢ないぞ。強くて勝つにきまつてゐるやつが、兎角弱い者の前で威張りたがるのだ。

那珂原　何？

新助　貴公は強い、免許の腕前だ。おれは臆病者、とても貴公に勝てないのだ。貴公は横町の黒なりや。おれは提灯屋の——

那珂原　こいつ、何處まで、人を馬鹿にする！

　那珂原、嚇として、思はず太刀に手をかける。新助、びつくりして飛上り、柳の木を木楯に身を潜ぐ。

新助（思はず大聲に）抜くなよ、那珂原、抜くなよ。切つてしまへばそれ迄だ。譯のないことだ、抜くな、抜くなよ。

那珂原　何——

新助（言葉に躓きながら）おれを、おれを殺しては損だ。貴公等の損だぞ。幕府の掛合が面倒になれば、厭でも肝煎の名義人岡野新助を出して、引渡さなければならない時が來るかも知れない。その時、正味の岡野新助がなければ、島津三郎どのは嘘つき大名、騙り大名になるぞ。抜くな、抜くなよ。切つてしまつてはそれ迄だ。

那珂原　畜生！（齒を噛み）こいつ、何故そのお名を出すか。

新助　お主は強い。おれに勝つのは當り前だ。決してお前の、勇士の手柄になるものぢやない。行けよ、那珂原。先へ……行けよ。

那珂原（睨みつけつゝ）蛆虫め！

新助　表向を云へば殿様だが、那珂原、お主の命のためにも新助は必要な人間なのだ。肝煎の岡野新助を虚空だと云へば、異人を切つた賊の下手人を出さなければならない。

那珂原　この――

新助（慌てゝ遮げつゝ）本當を云ふのだ。本當だ。今に[illegible]の戰爭が初まれば、お主たど生きてゐて、君國のために一働きしなければならない人間だ。島津家の興亡はこれからだ。君國の爲に先途を見屆けるためにも、こゝは是非生きてゐなければならぬ場所だ。生麥の一件は岡野新助に任せて置け。好いか、分つたか。はゝはゝゝ。おれも酒手にありついて、結構生きられると云ふものだ。好いか、分つたか。はゝはゝゝ。

那珂原、呆れ呆れはてゝ鞘口に刀を納める。先に立つて河原を歩み出す。新助、笑ひながら柳蔭を出でゝ、その後につゞく。遠く犬の聲。

新助　然し、さつきはおかしかつた、なあ那珂原。はゝはゝゝ、あの女よ、桃龍よ。はゝはゝゝ。何方が眞實やら宙に迷つてゐたぞ。

那珂原　…………

新助　おれとお主では役者は違ふが、生麥話にかけては、おれは常住のことだから、稽古が積んでゐる。話してゐて自分ながら、はて本當におれが切つたのかな、と思ふ時があるくらゐだ。はゝはゝゝ。そこへ行くと、お主などはまだ素人だ。眞實の話をしやうと思ふから、却つて嘘らしく、第一に面白くない。はゝゝはゝゝ。あれぢや受けないよ、話は嘘に限る。嘘に限る。はゝはゝゝ。

那珂原、答へず、先に立つて行く、新助、馬鹿笑ひしながら、その後に跟いて喋りつゞける。

（幕）

第六幕

時――文久二年九月上旬。前幕より八九日の後。

處――京都錦小路薩摩屋敷、長屋うち。

薩摩屋敷お長屋のうち、大久保市藏が假寓するところ。八疊に六疊ほどの二室、舞台に見ゆ、正面は道路に面する高窓あり、簾など掲げたり、床の間あり。挾箱、旅行李、御用箱などを雜然と積み重ねたり。

幕明く。高崎三六。新助の妻楠緒と共に話しゐる。楠緒、二十八九、色赤黑く、骨太く、恰幅男子のごとき田舍者。紺飛白の着物に形付の襟をかけ、髪も油氣なくグルグルと捲き、長き二尺ばかりの煙管にて、絶えず煙草を吸ふ。言語も粗野にて、禮節に慣はず。一子佐馬太を連れたり。佐馬太、七八歳、飴の袋より飴をとりてはクシ／＼食しながら、二人の對話を怪訝さうに聞いてゐる。

高崎（氣の毒さうに笑ひつゝ）何しろ、そのやうな始末でな楠緒さ

ん、倒離らんくわいの所行といふ外はないのだ。流石の市藏どんも、今度ばかりは手に餘してしまひましたよ。はゝはゝゝ。

楠緒（俯向いて思案しつゝ）宜しうござります、分りました。

高崎　市藏どんもわしも、あんたに早飛脚を出すまでには、いろ〳〵考へても見たのだが、何んとも外にいゝ分別がないのでなあ、はゝはゝゝ。誠に當惑いたしましたよ。

楠緒　何うではや、好い事聞きに上るとは、國を出る時から考へて居りません。後の始末も、さつぱりと片付けて出て來ました。

高崎　後始末と云ふと家財道具の處分でも……？

楠緒　吊佛壇まで見倒し屋へ搬つて來ました。一切がつさいで分金十三片ほどくれましたで、（作を見て）これの腹卷へ縫込んで置きました。

高崎　それぢや二度と國へは歸らぬ氣ですか（少し呆れて）そりや少し……果斷過ぎましたな。

楠緒　諸親類も、親子に面桶もつて門先に立たれては、さぞ難儀にござりませう。何處で乞食するには他國が宜しう思ひます。

高崎　あんたも一徹だなあ。楠緒さん、われ〳〵始め親類中は、新助どんの放埒には飽きはてたが、誰も岡野の家やあんたを疎略にする氣はありません。陰ながら皆心配してゐました。

楠緒（固くなつて）たあに、岡野の家は遠うに潰れて居ります。先祖も位牌もない方が、却つてさつぱりして安心でござります。

高崎　何うもあんたも、頑固だなあ。はゝはゝゝ。

楠緒　宜しうござります。新助どん儀は、わたくし手で埒明けます。どなた樣にも、この期の御勘辨は受けたうありません。

高崎　親類や友人の迷惑などは何んでもないが、何分にもその……お上のお名が出たり、お國方一同の外聞にもかゝはる次第で、それに當惑してゐるのですよ。全く、困りましたよ。はゝはゝは。

楠緒　えゝ、分りました。御心體よく分りました。

高崎　楠緒さん、さう一概に云はれても弱ります。親類も朋輩も居合はせながらと怨みに思はるゝかも知れたいが、目下の京都は諸國藩士の入込みで、一人のふしだらは直ちに一藩の恥辱になるやうな場合ゆゑ、何んとも手がはからひ憎いのですよ。困りました。

楠緒（たゞ固くなつて）えゝ、分りました、分りました。

高崎（坐を進め、低聲）風說にてもうす〳〵聞いてゐられませうが、例の生麥の一條が中々難かしくなりましてな、英國からは今にも鹿兒島へ軍艦を差向けさうな大切の場合で、お上樣にも日夜御心勞なされて居ります。

楠緒（他人事のやうに餘所〳〵しく）然やうでござりますな。

高崎　今日もそのため重役會議を開いて、大久保もそれに出席してゐるのだが、萬一談判破裂となれば、薩隅日三國は草木の根も絶ゃ

して、全面焦土になる覺悟をしなければなりませぬ。

楠緒　聞きました。然やうなさうでござりますな。

楠緒、無感覺無表情のさまにて、平氣に煙草を喫してゐる。

高崎　その場合ゆゑ、猶ほもつて新助どんの所作が目に立ちます。そしてその非難が市藏どんに振りかゝるので、氣の毒なやうでありました。

楠緒　分つて居ります。宜しうござります。

大久保市藏、羽織袴にて楠緒の側を退出し來る。高崎、大久保の姿を見るや、突と立つて次の間に出迎ふ。

高崎（聲を潜めて、不安さうに）何んな御模樣ですか。

大久保（苦味ある微笑）いよ／＼事が切迫して來たやうだ。

高崎　戰爭ですか。

大久保　叱ッ！（目にて叱り）幕府が英國を賺けてゐるらしい。

高崎　それで、國元の防禦準備は？

大久保　兎に角、早急京都をお引拂ひになるかも知れない。貴公内々で、その手配りをして置いて貰ひたい。何人にも秘密だぞ。

高崎（大息しながら）承知しました。

大久保（楠緒を見て、急に機嫌になたり）これは下町の姉さん。好く上つてござつた。何日大阪へ着きました。（坐敷へ來て、隣に坐る）

楠緒　昨日晝過ぎに大阪の藏屋敷へ着きますとな、草鞋も脱がぬうちから皆樣がそれ直ぐにと急き立てるので、昨夜の三十石船へ乘せられました。

大久保　それはお草臥れでしたな。はゝはゝゝ。何、それほどの事もないが、お屋敷にも少し混雜があるので、あんな飛脚など出しました、突然のことゆゑ、さぞ驚かれたでありませう。

高崎　岡野の家を引拂つて、二度と國へは歸らぬ氣で出て來たのださうな。些と果斷過ぎたと、今も笑つたことですよ。

大久保　それも又、好いだらう。（佐馬太を見て）坊主、よく來たの。船には醉はなかつたか。何うだ、上方は賑かであらう。はゝゝ。

佐馬太、飴をしやぶりながら返事もせず、痴々しく大久保を見てゐる。

楠緒、煙草筒など帯に挾みて、歸り支度する。

楠緒　それでは——。（立ちかける）

大久保　何處へお出なさる。いろ／＼御相談もあるのだ。

楠緒　え、分つて居ります。國を出るから、分別して來ました。

大久保　岡野の借宅を御存知か。

楠緒　智恩院前のこつぼりと云ひます。聞いて行つたら知れませう。

大久保　まあお坐り。岡野のためにも、少々お打合せもして置きたい。それに旅疲れもあらうから、今日はゆつくりお長屋に休息

して、諸事は明日としても遅くはありますまい。

楠緒　いえ、いえ。何うでも新助どんに會ひます。

大久保　御夫婦だから止めはしない。はゝはゝゝ。然し、一應はわしがあんたを呼び上せた腹も聞いて頂きたい。

楠緒　いえ、分つて居ります。

大久保　分つてゐる筈はないよ。（苦笑）わしはな、姉さん、あの所行の新助でも、困つてはゐるが憎んではゐませぬ。何うがなして、あの男の道の立つやうにしてやりたいと思つてゐます。

楠緒　（腰を浮かしてモヂ〳〵しつゝ）いゝえ分つて居ります。

大久保　分つてゐない、まあお坐りなさい。（無理に楠緒を坐らせ、立つて手文庫のなかより小判二包を出し、その前に置き）楠緒さん、これはわしがほんの志だ。岡野に渡して下さらないか。

楠緒　これ、何んです。

大久保　金。

楠緒　小判？

大久保　百兩あります。

楠緒　こちらにも、家財を賣つた金が三兩ほどあります。

高崎　楠緒さん、何んと云ふことだ。大久保君の親切ではないか。

楠緒　新助どんは柄のぬけた肥柄杓も同じこと。親切をなさる方の、掬つてお手が穢れます。兎に角、何が何でも、新助どんの埓を明けて、御迷惑のないやうにすれば宜しうございませう。受取りました、大事ございませぬ。さ、佐馬太、歩びやれ。

大久保　下町の姉さん。わしの頼みはな、あんたに新助を何うして下されと云ふのではない。打明けて申せば、お國元警備のためお上には二三日うちに禁裡へお暇を願つて、京都お引拂ひになる御模様なのです。その後に岡野ひとり京都へ殘つて、あの始末を働いては、何んとも本國の恥辱になるばかりだ。それで、こゝ半年一年の後には、大久保が引受けて、岡野家再興の運びは必ず立てますから、それ迄の間はこの金を路用として、湯治場めぐりなり名所見物なりして、人目にかゝらぬやうに世に忍んでゐてもらひたい。萬一われ〳〵引上げの後に、幕府方から召捕りにでもなれば、それこそ由々しき大事が出來いたします。岡野の口上ひとつでお上が迷惑なさるやうな事あつては、代々重恩の君侯に對して、お身達にしろ、誠に恐れ入つたことゝ思ひます。何、世に隠れて、陰の人になつてゐて貰ふのも、半年か一年です。何うかお前さまも、それを好く承知してゐて欲しいと思ふ。

楠緒　いえ、分りました。佐馬太、さ、歩びやれ。

楠緒、倅の手を引いてさつさと出て行く。大久保、高崎、呆れてその後を見送る。

大久保　（苦笑しつゝ）高崎、ありや何うしたと云ふのだ。

高崎　あの一徹が岡野一家の家風でござります。あれで諸事神妙に見

限られて居るのです。

大久保　然し何か、決心はしてゐるやうに見えるな。

高崎　流石に殿様の御迷惑を申開けると、俯向いて溜合んで居りました。正直者ゆゑその段は胸にこたへたと見えます。

大久保　然し、確と修やの返辭があるまでは、関元から女房を呼び寄せたことは、甲斐田那珂原等の同輩にも内分に頼みます。大久保とも云はれて、餘りに醜態を暴するのが口惜しい。や、どうも今度ほど弱らされたことがない。新助のやつ、面憎いがさてうまいところを打ち居つたよ。はゝはゝゝ（と寢轉ぶ）

高崎　ほんになあ、はゝはゝゝ。その代り新助、今度は女房とんに會つて、ギュウ／＼と云ふ目を見るだらう。何しろ新助には、お上様よりも化物よりもわが女房が恐いのだから、はゝはゝゝ。（氣が付いて）時に、最前の話だが、いよ／＼京都お引拂となるとその段取りは、何う致しませう。

大久保　されば、その事であつた。

大久保、なく／＼と起上つて眞面目に高崎と對坐し、密談に入らんとする様子にて——

（幕）

同　その二

時——前場と同じ日。夕刻より夜に掛けて。

處——智恩院門前町に近き或る路次。

俗にこつぼりなど云ふ邊、間野新助の借宅。傾ける低き敷居風に建てたる家なれど、甚しく住み荒して戸障子なども破るゝにまかせ、壁落ち、雨漏りて、疊なども滿足せず。舞台正面やゝ下手寄りに中戸あり。それを入れば下手は臺所の流し場にて、竈あり、戸棚あり、上手は八疊ほどの一間敷にて、二階に通ずる箱梯子あり。その横の障子をあくれば、荒れはてたる小庭あり。室内には道具らしきもの一つなく、破れ蚊帳や蒲團など見え、貧乏徳利、竹皮などその邊に散亂するのみ。たゞ箱梯子の段に枯れかゝりたる草花の鉢植三つ四つあるが異様に見ゆる。

幕明く。舞台は一面の煙にて人顔も明かならぬほどなり。椽端、欄かけにて七厘に生杉の葉を燻べ、押入、戸棚のなかまで濛々と煙を煽きたてゝ、蚊を逐ふ。裸蝋燭二本ほど火鉢の縁、戸棚の上に立ちて、微かに屋内を照らしゐるのみ。近所の酒屋の小僧らしきが、煙に噎んで家に入りかねて、ブツ／＼呟きつゝ門口に立つ。

小僧　それでは、今日も勘定は頂かれませんか。

楠緒　勘定も何も、わたしは今來たばかりだ。この家の人が歸つた頃に、出直してござらしやれ。

小僧　それでも、何時來て見ても、家は明店でござります。

楠緒　知りません〳〵。（バタ〳〵七厘を煽ぎつゝ）貸した人に然う云はしやるがいゝ。こちは何も知らん。

小僧　困るなあ。（舌打）いゝ騙り者にかゝつてしまつた。

酒屋の小僧、呟きながら歸り去る。伜佐馬太、生杉の葉を一肩かついで、跣足にヒタ〳〵と入り來る。

佐馬太　おかゝ。これでそこの庭の杉は、坊主になつた。

楠緒　それだけあれば、澤山だらう。そこへ置け。

佐馬太　おかゝ、腹が減つてならんぞ。（土足のまゝ家に上り來る）

楠緒　もう些つとだ。この蚊を逐出してから、飯にしやう。これ、そこは今拭いたばかりだ。足の裏ばかりも拭けや。

佐馬太　あん。（そこの雜巾にて足を二度ばかりこする）

楠緒　腹が減つたら、そこに蛇黄煎餅がある筈だ。出して食へ。

佐馬太　うむ。

佐馬太、そこに腹這ひになつて紙袋から菓子を食ひつゝ、道中なぐさみの赤本など出して見る。楠緒、その邊の蚊燻しを終りて、流し場の方へと出て來る。釜の下の薪をさしくべ、戸棚の前に腰かけて小蕪の柏漬など捲る。

佐馬太　おかゝ、おとゝは遲いなあ、日が暮れたに。

楠緒　また何處ぞで、喰ひ醉つてゐることだらうよ。

佐馬太　酒は好きだな。

楠緒　うん。

佐馬太　侍やめしやつたと云ふは本當か。何んで止めしやつた。

楠緒　侍ぢや飯が食はれん。あの人も、止め時ぢや。

佐馬太　然うだと、おれも最う侍の子ぢやないな。町人になつたのか。

楠緒　まつと、下ぢや。

佐馬太　町人の下は、何んだ。

楠緒　餘計者といふのぢや。（感激もなく、平氣に云ふ）

佐馬太　うん、然うか。

佐馬太、また赤本を見る。楠緒、葉を捲る。

楠緒（やゝ間を置いて）佐馬太。

佐馬太　あん？

楠緒　われ、とッ樣やおかゝがなかつたら何うする。

佐馬太　とッ樣やおかゝが無いてへば、死なしやつたことか。

楠緒　うん、先づ、然うだ。お主、この公界生きて行かれるか。

佐馬太　然うだなあ。何んとも分らんけど……。

楠緒　生きて行け〳〵。みた人は生きてゐるではないか。

佐馬太　うん、然うだけれど……。

楠緒　拾つても食へ、買つても食へ。それでも苦しい時は……。

佐馬太（耳を立てゝ）おかゝ、誰か歸つて來たぞ。

楠緒　たゞ人に泣き言は云ふな。縋つてまで生きるは男の腑拔けだ。草木でも見ろ。人に邪魔されるやつが、大木になるのだ。

佐馬太　うん。

楠緒　生れたからには食ふのが當り前だ。生きて行け〲。

佐馬太　おかゝ。とつ樣が歸つてござらしやつたのではないか。

楠緒　然うか（振向きもせず、野菜を笊に入れてゐる）

新助、今日は白面にて外より歸り來る。家内に燈火のあるを怪しむこゝろに、そつと小窓の障子を外より明けて覗き見る。

新助（聲を潜めて）誰だ、誰だ。燈をつけてるのは誰だ。

楠緒（その位置のまゝ）わたしだ。

新助　あ――（狼狽して、窓をハタと閉める）

そのまゝ暫く音なし。楠緒、やがて前垂の埃をはたいて立ち上がる。流し場へ行きて野菜を洗はんとすれば、手桶に水なし。手桶を下げて水汲みに出る時、新助、それを押し止めつゝ、中戸の潜りより姿を顯はす。

新助　好し〲、水ならおれが汲んで來る。細釣瓶だから馴れない者には不自由だ。（と手桶を受取り、蠟燭の火を見て）蠟燭を買つて來たのか。その押入に行燈があつたのに。

楠緒　燈盞の掃除はしたが、油の置きどころが知れません。

新助　ついでこの、縁の下にあつたのだ。はゝはゝ。

新助、可笑しくもないのに笑つて出て行く。楠緒、生に戻り來りて、無言に煙草のみ吸ふ。佐馬太、何んとなく不安さうに、母の顏を見上げる。

新助、水を汲みて戻り來る。女房の顏を見ぬやうにして、鯊の笊を持ちて流し場に立つ。コソ〲と野菜を洗ふ。

新助　然し、この小鯊をよく見付けた。京ではこれが食ひ盛りだ。

楠緒　豆腐屋を探したなれど、見當らなんだ。

新助（菜を俎に揃へる）駄目々々。國者に京の豆腐は旨うない。食はゞ生麩の方が、まだ增しだ。そして、この鯊は。

楠緒　そこに醬油があつたから、鱠にでもしやうかと思つた。

新助（庖丁にて巧者に切りつゝ）これもなあ國のやうな炒雜魚があるといゝのだが、潮汁は些と臭うてならんよ。

楠緒（煙草を吸ひつゝ）醬油の色が、水のやうだ。

新助　色無しとか云つてこの邊では悅ぶが、やはり駄目だ。醬油はドロリとして、箸が染まるやうでなければ嘘だ。はゝはゝ。

楠緒　ほんとに然うかも知れぬなあ――。はゝはゝ。

楠緒、何んの表情もなく笑ふ。新助、妻の機嫌よきが嬉しく、小狡しく目を動かしつゝ、その顏色のみを窺ふ。汁鍋を掛け、飯釜の火を消し、獨り臺所に働く。

新助　さてこれで鱠も出來た。行て何か、生姜でも見て來うか。

楠緒　入るまい。久しぶりに三人揃つて、お飯の膳に坐はるのだ。

新助　三人揃つて………？（狡猾さうに妻を覗つて、笑ふ）はゝは

は、ほんに久しぶりだな。はゝはゝ。

楠緒（煙管を叩いて）上らつしやれ。少し代りませう。

新助　いえ、飛んでもない。臺所はおれがするよ。

新助、手拭を片襷にして汚れたる食器など洗ふ。楠緒、また煙草を吸ふ。やゝ長き間、互に無言なり。

新助（恐る〳〵）なあ、おかゝ。

楠緒　あい？（何か考へてゐて、急に鋭くその方を見る）

新助（狼狽して、洗物に力を入れつゝ）いえ、何――。はゝはゝは。外のことでもないさ。

楠緒　何――？

新助　京は水が、水がよいところと聞いたが、見ればやはり………皺くちやあかきれのきれた人も、あると云はうとしたのだ。はゝはゝは。

楠緒　うむ――

新助　何うぞしたのか。氣合が惡いのではないか。

楠緒　何んともない。

新助　然うか――。

新助、不安さうに瞬いて、又洗物する。長き間。

楠緒（突然、ついと立ちて）どれ、お飯にしやう。

新助　いや、おれがする〳〵。（慌てゝ兩手にて抑へ）お前は坐つてゐてくれ、おれがする。

楠緒（靜かに）酒の買つて置いたのが、ありますか。

新助　酒――？誰が、誰が飲む酒だ。

楠緒　買つて來ます。白丁を出して下さい。

新助（うろ〳〵して）お主、おれの酒買つて來るのか。

楠緒（手を出し）白丁。

新助　おいよ。

新助、仕方なしにそこにある徳利を出す。楠緒、それを持つて出て行く。新助、ぼんやりしてその後を見送る。間。やがて氣がつき釜を下し、飯臺に食器など揃へる。

新助　佐馬太。（小聲）おかゝ、何を怒つてゐるのだ。

佐馬太　何んか、知らん。

新助　お主等、全體何んがために、上つて來たぞよ。

佐馬太　赤い紙のついた御状か、京のお屋敷から來たのだ。

新助　京屋敷から、赤紙つきの状が行つたとな。

佐馬太（繪本を眺めつゝ）何んでも、そんな話だつた。

新助　然うかあ……。赤い紙の状が行つたか。

佐馬太　とゝ様、侍やめしやつたと云ふは、定のことか。

新助　止めるものか。現にこの通り、二本差してゐる。

佐馬太　それでもおかゝは、侍やめて餘計者になつたと云つた。

新助　餘計者——？　おかゝ、主にさう云つたか。

佐馬太　あん、然う云つた。

　新助、不安さうに物く唇を噛んでゐる。

新助　こつち來い、こち來い。(作を引寄せ、言葉急しく) そして、そして大阪へ着いて、先づ何處へ行た。船下りは何處であつた。

佐馬太　藏屋敷とか云ふ、河の側の大きな屋敷だ。

新助　京へ來ては何處だ。錦の小路と云ふに行たた。

佐馬太　何處や知らんが、高崎の小父さんに會つた。

新助　大久保に會つたな。

佐馬太　大久保とは誰だ。

新助　それ、猫の糞小路の川岸の小父よ。むつかしい顏してる小父だ。

佐馬太　うん、會つた。

新助　然うか。おかゝ大久保に……會つたのか。

　新助、ガックリしたやうに腕を組む。何か考へる。

新助　(突と立上り) おれ、ちよと、出て來ますぞ。

佐馬太　何處へ行かしやるのだ。

新助　うん、その……、ちよつと出て來る。(と出掛けて立戻り、急がしく巾着から天保錢を出し、數を讀んで小棚の上に置く) こゝに六七百、小錢がある。こゝへ載せて置くぞよう

佐馬太　おれ置いて、何處へ行かしやるのだ。おかゝに叱られる。

新助　うん、その……何んだ。(そは／＼しつゝ) ちよと出て來うと思ふが……(戻つて來て) 佐馬太、おかあ怒つてゐるか何と云つた。何んと……云つた。そこのとこを何んと云つた。

佐馬太　おりや、別に聞かん。常の通りおやげな。

新助　然うぢやない、腹が立つてる。あの物靜かなのが、只事ではないのだぞ。主も覺えて置け、あれが一番おつかないのだ。

佐馬太　とつ樣、おりや腹が減つてならんかなあ。

新助　待て／＼、今食はせる。そして何か、國を出る時、みな親類廻りでもして、皆に見立てられて、そして蒸汽船に乘つたのか。

佐馬太　うゝん、何處へも顏を出さん。默つて來た。

新助　(四圍を見て、聲を潛め) おかあ、身に何か持つて居らんか。双物でも持つてゐないか。

佐馬太　いつもの鎧通し一挺ぢや。帶に挾んでゐる。

新助　うむ……。

佐馬太　とつ樣。腹が減つたな。

新助　(眞劍に齒を剝き出し、心から憎くさうに睨みつけ) があく云ふな！　飯は今、食はせるかな！(腕組みして考へ込む)

　佐馬太、仕方なしに又繪本を見る。新助、立つて膳拵へなど眺めしが、不圖考へて棚の錢を巾着に納めかけ、又思ひ直してそこに置く。當惑さうにホッと嘆息する時、中戸を

あけて楠緒、酒をさげて歸り來る。
新助、ギックリして棒に立ち、隅の方に避ける。

楠緒 (草履を脱ぎながら)さて〳〵、都には住まれん。諸白一升、二百文の上もする。氣疎いことぢや。

新助 (遠くから空笑ひしつゝ)そりや、そりや、まんだ……眩い方だ。灘酒の本鑑變など云ふては、醫者の煎藥を飲むより……まんだ高うつくと云ふてる。國元のこと考へてはのう……、はゝはゝゝ。

楠緒 それに田舍者ぢやと思ふて、言葉を笑ひくさる。

新助 昔から、都は目恥しとか云ふて、田舍者を嘲しめる。誰でも一度はむッとするが、惡い癖だのう。はゝはゝゝ。
新助、無理に高笑ひしつゝ燗徳利などを遠くより出す。楠緒、それを受取りて、火鉢の大土瓶に入れる。

佐馬太 おかゝ、腹が減つた。

楠緒 然うであろ。われの好きな昆布卷買つて來た。先に食へ。(竹の皮づゝみのまゝ出して與へる)
佐馬太、釜の飯を自分に盛りて食し初める。間。

楠緒 (ノッソリ突立ちゐる夫を見上げて)お坐りなされ。

新助 うむ……。

楠緒 何してござる、お坐りなされ。(膝を叩く)

新助 うむ……。(涙含めるやうな目に、足元を見詰めゐる。)

楠緒 酒がつきました。(鋭く)こゝに、お坐りなされ。

新助 おりや酒は……飲むまい、飲むまい。
楠緒、無言見上げる。

新助 (紛らすやうに笑つて)はゝはゝゝ。酒は敵だ。關野の家を潰したも、酒だ。飲むまい。

楠緒 わたしも今日はあいさをしませう。注ぎますぞ。
楠緒、新助の飯茶碗に酒を注ぐ。自分にも注ぐ

新助 (怯えたやうな顏)お主……飲ましやるか。

楠緒 坐んなされ。わたしとて、飲めば飲まれます。
楠緒、茶碗の酒を飲む。

新助 おりや飲まん、飲まん。(後込しつゝ)わしには、惡い癖がある。飲めば必ず、その儘には濟まない。酒はこの頃……愼んで、愼しむやうにしてゐる。惡事、災難、おれには皆酒だ。
楠緒、無言。又自分の茶碗に酒を注ぐ

新助 (急に膝を折つて、女房の前に坐り)大久保等に聞いた通りだ。おれは、事實その通りなのだ。腹を云へば、根がないでもないが、人に見られるところは、兎に角酒だ、酒のためだ。たとひの酒を飲みたさに、國も家も忘れてしまつた。人に犬と云はれても、仕方がないのだ。

楠緒 それ云ふて、もう間に合ひませぬ。今日はお上りなされ。

新助 心には恥ぢてゐるのだ。眞實、恥入つてゐる。(わざとらしく咳

れて見せ）那珂原大久保を賑からせて、投げるやうにして出された二兩三兩の金……有りやうは好いことした氣で受けてるない。爲る事なしの消し紛れと、醉ひたさゆゑの出來心だ。最う懲りた。止める、止める。はゝはゝゝ。（可笑しくもなさに強ひて笑ふ）

楠緒（チロリと新助を見て、鋭く）えゝ、上らしやらぬか。

新助　飲むよ、飲むよ。（狼狽して茶碗をとり、飲み）飲むには飲むが……、一應わが心も明かして聞きたいのだ。（跡つと女房の顏色を窺ひつゝ）家も、女房子も……忘れてしまつたと、云へばそれまでだが……決して怒う云ふものではない。

楠緒　話は後に、上らしやれ。（また茶碗に酒を注ぐ）

新助（仕方なく茶碗を取つて飲みつゝ）おれは言譯はしない。六百石の家が、小姓組に落され、馬廻り、足輕にまで落ちたのだ。何も云はない、何も云はない、みな人が見ての通りだ。云ふだけが愚痴、何も云はないことに、おれは腹を極めてゐる。はゝはゝゝ。

新助、わざと肩など張つて腕組み、意味ありげにグッと一所を睨んだりする。

楠緒、無言、酒を注ぐ。新助、ハッとして妻の視線を見る。オド〳〵し一茶碗をとる。

新助　飲むよ……、飲みます。（一口づゝ酒を飲む）

楠緒　注ぎませう。

新助　うむ……。（女の眼を恐れつゝ、茶碗を出し、又飲む）

佐馬太、その間に食事を終り、そこに寢る。楠緒、それを見て足に何か掛けんとして、立ちかゝる。新助、ドキリとして身を居行り、用心深かく身構える。

楠緒（小袖を小兒の足に掛けて來て、靜かに）お酒は？

新助　醉ひました、醉ひました。

新助、膝下にシカと茶碗の蓋し、身を固くして俯向きつゝ、沈み込みゐる。

楠緒　家も位置も忘れるほどの酒、何んで今日は飲まれませぬ。女だがわたしなら飲む。（わが茶碗に注がふとする）

新助　あ、待て〳〵。おれが飲む……、おれが飲む。

新助、慌てゝ女房の手より銚利を取る。差れながら自分の茶碗に注ぐ。楠緒、煙草を吹かしつゝ、默然として眺める。

外には少し風の音、聞ゆる。

新助、女房の顏色をそつと讀みながら、手酌にて飲む。時々嘆息など洩して、又飲む。次第に醉ふて來る。間。又飲む。

わざとホッと溜息など吐いて、女房の樣子を窺ふ。楠緒、默然として動かず。

新助（獨語のやうに、嘆息して）あゝ、死ぬべき場所は、幾らとなくあつたのだ。それにおれは……死なれなかつた。臆病とも、卑怯とも、人には云はれる筈だ。知つてゐる、それは知つてる。

新助、わざと重々しく云つて、前の茶碗など睨み付ける。女房の注意を引かんとするたり。

間――。

新助　人間、命の惜しさばかりに、死後れるものぢやない。口惜しさ、心外さ、無念さのためにも……、死んで死ねない時があるものだ。

間――。注いで飲む。

新助　あゝあ、貧乏はしたくない！　諸悪のもとは貧乏だ。

間――。

新助　人を賤しめられるのは我慢もする。貧を賤しめられる時……悪い癖だ。おれは腹が立つてならないのだ。あゝ。

間――。飲む。

新助　貧は人に……媚びる。悲しいことだが、おれにはその性根がある。おれはその爲め……自分自身が可哀さうになつた。

女房、チラと新助の方を見る。新助、それに力を得て、急にその語調を強める。

新助　元よりおれは腐れはてた體だ。わが手柄など手柄にしやうとは思つてゐない。與人の一人や二人切つても、何が手柄だ。高が町人與人と女與人、切つたところで何になる。たゞ貧乏ゆゑに侮られる……。はゝはゝ。これを云ふの愚痴か。

女房、少し膝を動かして夫をチラと見る。氣がついて横を向き、また煙草を吸ふ。新助、次第に醉を發すると共に、段段と例のいたづら心になる。

新助　云ふまい、云ふまい。云つて見て誰がおれの話を眞事と聞くものだ。はゝはゝ。（絶えず女房に注意しつゝ）ありや六百石の身代を飲み潰して、足輕にまで落ちた男だ――この一言でおれの估券が定まるのだ。富は惡を隱し、貧は恥を露はすと云ふが……、はゝはゝ。また愚痴になつた。

女房、少しく感動して一箇所を見詰める。新助、それを見てますます調子づく。

新助　何うで、こつちが悪いのだ。他人に侮られるのは是非もないが、現在の從弟親類となつて、おれを汚ないものゝやうに除けられると、これだけは怺へられぬ。おりや、おりや、顫えて來る。あいらはおれを憎んで除けるのではない。うぬが身代の可愛さに、貧乏親類を邪魔にするのだ。笠左衞門の餓鬼、昔こつちが六百石の時分は、何んと云つて阿野の家へ出這入りした。それが今、おれの面見ると、犬、犬と云ふ。（次第に醉興を發して、本當にホロホロ泣きながら）犬――犬、犬。人中でも、道傍でも、見掛けるところで、おれを然う云ふ。最後に生家へ追掛けた時にも……、三六のやつもおれを犬、犬……、笠左衞門のやつもおれを犬、犬……。

女房（釣込まれて、思はず）それではその小姓とかの時、これたちの

現場に、居られるには居られたのか。

新助　おれがゝ。(顔を上げ、女房を見て)あの時、おれが居ないで何うするものだ。大久保は、おれがその時居ないと云つたか。

楠緒　然し――。

新助　その話は舍さう。お主が大久保に聞いた通りにして置く。(又俯向いて)おれは悪い、おれは悪いが……、おれはな、三六にも、嘉左衛門にも犬だ、犬々と呼ばれながら……その時それを怒れないのだ。(女房を見、胸を叩いて)こゝは怒つてるのだよ。こゝはこいつ！　と思ひながら、酒の氣のない時は、腹立てることも出來ないのだ。(涙際を押つて)犬と云はれゝば犬にもなる氣か、新助め、げらげら笑つて……相手の顏色を見い見い追從笑ひしてゐる、新助め、その姿よ。おりや見られない、見るに忍びない。だから飮む、家も女房子も忘れて、魂のすツ飛んでしまふほど、夢中になつて飲むのだ、飲むのだ。あゝ、何んたる新助めの姿だ。(泣きながら、酎らたさうに茶碗を取上げる)

楠緒　(急しく、涙を拂つて)あ、注ぎます、注ぎます。

楠緒、慌しく獨利を取上げる。新助、女房の目を見ながら、メソメソと泣きゐる。楠緒、始めて涙を見せる。

新助　(酒を一口、元氣づいて)おれは云ふまい。死んでも云はぬ氣でゐるが、殿様はあの時、二度まで駕の窓緣を叩いて、異人を切れと仰合されたのだ。それを公儀へのお届には、自分は病に臥つて知らぬ、刃傷は供廻の出來事で知らぬと云ひきつた結果の手前、それ、それ、それ……おれに出られては騒動になるのだ。新助が邪魔になるのは、その爲めなのだ。

楠緒　けれども嘉左衛門どんは――

新助　そりや切つた。那珂原も切つた。が、それは後だ。

楠緒　でも――

新助　何しろ借金は四拾萬弗、米にして本俵百萬石の大騒動だ。その張本の下手人に、足輕風情、新助風情ではならぬと云ふのは、これも大國の見得だ、みた嘘だ。(女房の何か云はんとするを兩手で抑へて)聞け、聞け聞け。兩者には分らん、女には分らん。然し一國の政治と云ふはみた嘘だ、恐しいほどの嘘で固めて平氣でゐるものだ。聞け、聞け聞け。國の政事を行ふやつほど、恐しい酷いこゝろはないのだ。裏もあれば、表もある。お主等などの女の目では、どこが眞事か、どこが嘘か、分かるものぢやない。(周圍を見廻はし、聲を潛め)人には聞かせられないことだが實狀を話せば斯うなのだ。注いでくれ。(茶碗を出す)

楠緒、酌する。耳を傾けて聞く。

新助　(旨さうに酒を飲み、膝を組み直して)丁度あの時は、八時ばかりの西日が、眞赤に射しつけて、秋蟬がシーンと並木路に鳴いて

ゐた。(軍記讀などの如く、勿體らしく節をつけて)おれは久々振りに拜む御行列だ。傍を見ると砂除けの小柴垣がある。その下に小さく坐つて、土下坐した――

この時、天井を暴れる鼠の音聞ゆる。楠緒、ハッとして新助を止め、戸外に目を立つる。

新助　何、鼠だ。聞けよ。傍を見ると、砂除けの小柴垣がある。その下に坐つて、土下坐した。土に手をついた。と、遠くに蹄の音が聞ゆる。見ると、鶴見橋の方から、異人が四名、馬を揃へて…………。聞いてるか。

楠緒　(熱心に)はい。

新助　異人が四名、馬を揃へて…………

(幕)

編輯だより

◇普選の成績が無産黨にあまり芳しくなかつた。二十六名とはあまりにさびしすぎる。次の選擧には斂に於て少くとも既成政黨と太刀討のできるやうな努力が欲しい。そして來るべき衆議院の總選擧には如何なる困難を排しても無産聯合軍で進むべきである。

◇本月號の「改造」は力篇快作が多い。眞山氏、木下氏のものは力作であるし、福田氏、志賀氏、谷崎氏のものは名人の快作であり、大山氏のものは時代的に示唆の多いものであり、德富氏、石川氏のものは蘆花氏研究乃至は追懷として重要な文獻である。

◇本月號から「大衆講座」を開いた。勿論「改造」の一部讀者にはうるさいことかも知れないが、しかし大多數の人々には寄興多いものとして開講したわけである。

◇マルクス「資本論」が高畠譯にて本社より出版される。目下我國では資本論唯一の完譯者で、そして決定版によりての飜譯である。我社は深い自信を以つて江湖に推薦するものである。若しそれ、本書が現代に於てどれだけの大きな役割を遂げつゝあるかを思ふとき何人も一刻も早く本書を机邊に備ふるの必要を感ずるだらう。十年前に六十五圓で買へたものが三圓九拾錢で買へるやうになつた。

◇「不如歸」「自然と人生」「思出の記」を著して有名なる德富蘆花氏九月十八日伊香保にて逝く。清敎徒的に嚴格に身を持し、武藏野とは深い因緣のある詩人であり、小說家であつただけにこの秋がとりわけさびしいやうに感ぜられる。

◇「現代日本文學全集」の「蘆花篇」は丁度ことしの秋に出る約束であつた、そしてそれに序文をかかれたのが九月四日であつたら、勿論それが絕筆となつたのだ。「蘆花集」には前記の三長篇は勿論、「黑潮」も這入つて十月廿二日頃配本の筈である。菊版五百六十頁の尨大さである。

◇投稿原稿は一切書留で送ることとして返送を要するものには書留料を添付して下さい。でないものには本誌は一切責任を負はぬ。

◇懸賞創作應募がだんだん增えて來た。素晴らしい作品がどつさり集まつてくることを我我は期待してやまない。

◇十月號は近來にない賣行きを示した。からして部數の激增して行くのは喜ばしいことだ。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲附大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和二年十月十八日印刷納本
昭和二年十一月一日發行

(價五拾錢)

東京市麴町區內幸町一ノ三幸ビルヂング
編輯兼發行人 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京麴町區內幸町一ノ三幸ビルヂング一階
改造社
振替東京 八四〇二
電話銀座 四五五八
(營業部 一五〇四六
編輯部 一七三三)

自然科學

第二卷第二號

（十月十日發賣）

定價金壹圓 郵税十二錢

發行所 東京市麹町區内幸町 幸ビルデイング二階 振替東京八四〇二一番 改造社

豫約募集

マルクス主義講座

政治批判社編輯

河上肇
大山郁夫
監修

一、一切の似而非マルクス主義を排す
一、論ずる所社會生活の全領域に及ぶ
一、叙述平明全民衆の血となり肉とならむことを欲す

豫約規定

（配本）昭和二年十一月第一冊刊行毎月一冊宛配本
（體裁）四六判假綴各冊約三百二十頁
（申込金）金壹圓（全拂の方は不要）
（會費）毎月拂壹冊金壹圓、全拂拾貳冊金拾壹圓
（送料）一冊ニ付金十二錢、書留は拾錢増
（〆切）十一月十五日

一冊壹圓（十二冊完結）

内容見本（マルクスの肖像、科學としてのマルクス主義等々重要附録滿載の内容見本、進呈）

東京市神田區錦町
一ノ十二福原ビル
上野書店内
振替東京七三五八九番

マルクス主義講座刊行會

池谷信三郎著（最新刊）

橋・おらんだ人形

四六判四一五頁

定價金壹圓八拾錢

送料十八錢

我等の生活に新時代の健康を付與し、來るべき必要を滿たし、新鮮なる感覺を撒布するものこの書の如きはない。「橋」他五篇の小說と「おらんだ人形」他五篇の戲曲とは新時代の新工夫に成り、必然に科學は內潜せしめ而も彩艶優雅。巧緻にして輕快なる筆致は街から街を國から國を晶徹して適切なる神經と豐鋭なる叡智は、是に都會文學を完成し是に國際化情緒を顯現し東西の情智意は曲盡されて各篇皆これ新時代の敍情小曲である。言々皆これ萬人の胸廓に打込む魅惑的なる砲彈である。細讀味讀を乞ふ。

內容

第一部　戲　曲――三月卅二日（一幕）。獨り（二幕）。首（一幕）。歸りを待つ人々（一幕）。歸つて來た噂（一幕）。おらんだ人形（一幕）。

第二部　小　說――街に笑ふ。まいとん。黃昏の幸福。忠僕。この戀人。橋。

發行所　東京麴町區內幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二　改造社　電話銀座　一五四　七〇五　三四五　三六八

大衆に呼びかける

定價二十錢　送料四錢

大山郁夫著

既成政黨は其腐腸を民衆の前に暴露した。今や我が國は今回の府縣會議員選擧を機縁として晴れがましき政治上の一大轉開に遭逢した。此秋新興階級の先鋒たる著者は無産的立場より何を大衆に向つて叫ばんとするか？而して如何に無産階級的利害を抽出し指導し、組織化して既成政黨と對立せんとするか？大衆は本書について政治の轉向を知りそして我々の摯實に、はた、勇敢に歩く道を會得すべきである。

再刷出來！

發行所　改造社

末弘嚴太郎著

—四十六版出來—

嘘の効用

四六判上製　定價二圓六拾錢　送料二十二錢

内容

嘘の効用。改造問題と明治時代の省察。役人の頭。小智惠に捉はれた現代の法律學。民法改造の根本問題。フランス勞働聯盟の動搖。過激社會運動取締法案批評。住宅問題と新借家法。工場法の改正について。世界恒久平和の理想と國際勞働會議。陪審法案を讀みたる後の感想。無産者の立場より見たる陪審制度。婚姻に關する法律と女子職業問題。

發行　東京市麴町區内幸町　[illegible]ビルディング一階　振替東京八四〇二番

改造社

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO KOGIMACHI-KU, TOKIO.

Sao Kaizo

株式會社秀英舎印刷